

大阪大学大学院文学研究科

年報 2010

教育・研究(2008-2009年度)

定

一書生之面々、吾亦、今、行、度、山、費、也、事、

何、初、也、筭、据、偏、卧、而、政、司、事、也、

一、学、徒、雅、法、之、外、各、章、之、雜、法、也、情、境、也、

概、お、お、お、之、彼、法、望、之、事、の、停、止、事、

一、南、島、村、病、也、之、事、也、年、之、事、也、病、方、之、事、

望、之、事、也、

一、本、業、也、精、之、暇、也、之、事、也、善、術、詩、作、

澤、之、事、也、之、事、也、之、事、也、之、事、也、

之、事、也、

一、休、日、之、事、也、閑、暇、之、事、也、和、厚、之、事、也、軍、書、也、

之、事、也、之、事、也、之、事、也、之、事、也、

一、甚、多、也、極、也、世、之、事、也、希、也、学、業、也、之、事、也、

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

大阪大学大学院文学研究科

年報 2010

教育・研究 (2008-2009 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2010

目次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2010』の刊行に寄せて	片山剛	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2010』発刊の趣旨	評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	5
1-2	教育・研究の支援体制	9
	研究推進室	9
	評価・広報室	11
	教育支援室	18
	国際連携室	25
	国際交流センター(留学生相談室)	27
1-3	国際交流活動	30
1-4	外部資金の導入	32
1-5	グローバル COE プログラムについて	35
1-6	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)	37
1-7	多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム	38
1-8	懐徳堂センターの活動	39
1-9	埋蔵文化財調査室の活動	41
1-10	性差別問題委員会の活動	44
1-11	新専攻の設置と開講	45

第2部 各専門分野における教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	49
2-2	現代思想文化学	60
2-3	臨床哲学	72
2-4	中国哲学	83
2-5	インド学・仏教学	91
2-6	日本学	98
2-7	日本史学	111
2-8	東洋史学	133
2-9	西洋史学	147
2-10	考古学	166
2-11	人文地理学	178
2-12	日本文学	190

2-13	比較文学	205
2-14	中国文学	215
2-15	国語学	222
2-16	英米文学	233
2-17	ドイツ文学	247
2-18	フランス文学	255
2-19	英語学	264
2-20	日本語学	275
2-21	美学・文芸学	292
2-22	音楽学・演劇学	308
2-23	美術史学	327
2-24	共生文明論	345
2-25	アート・メディア論	358
2-26	文学環境論	368
2-27	言語生態論	375
2-28	留学生専門教育	385
	編集後記	388

大阪大学大学院文学研究科 『年報2010』の刊行に寄せて

大阪大学文学研究科の教育研究活動の成果を一定期間単位で報告し、評価を加える『年報』は、この2010年版が5冊目で2008～09年度をカバーしている。このうち2009年度は、国立大学が法人化された2004年から始まる第一期中期目標期間の最終年度に当たる。この第一期中期目標に掲げた諸計画を本研究科が無事に達成できたこと、これをまずは報告しておきたい。また2009年は、民主党政権による事業仕分けが注目を集めた年でもある。教育研究関連の事業も組上の魚となることが多く、法人化以降の年々の予算縮減とともに、今後の文学研究科の教育研究活動への影響が懸念される。さて以下に、2008～09年度の文学研究科の教育研究活動で特筆すべきことを列挙しておきたい。

①文法経本館は、2007年度の耐震工事に続いて、2008年8月から2010年3月まで、3期に分けて内装改修工事が行われ、“見違えるほどきれいな”教育研究空間に一新された。法人化の際に本研究科に設置された4室のうち、評価・広報室は本館から離れていたが、改修後に本館に移り、これによって4室の間、さらに4室と事務部の間の連携がより緊密なものとなり、教育研究を支援する体制の整備を進めることができた。また、本研究科の貴重資料を集中的に収蔵し、研究科内外での利用・公開を促進するための貴重資料室も設置された。加えて、雨が降るとぬかるむ本館の中庭や本館西側に隣接する歩道等も整備され、雨の日や夜間でも快適で明るい空間に変貌した。

②2007年10月の大阪外国語大学との統合によって、本研究科に新設された文化動態論専攻（修士課程、学生定員19名）には、2008年4月に第一期生21名が入学し、2010年3月に最初の修了生が巣立っていった。

③本研究科は教育研究の国際化の一環として2008年4月から、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム群のひとつ、「ユーロカルチャー」プログラムに域外協定校として正式に参画し、「ユーロカルチャー」コンソーシアム大学と教員・学生の相互派遣を開始した。このうち学生の受入れでは、2008年から毎年秋に5名を受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとする5科目の英語授業を開講して15ECTS（10単位相当）を認定している。

④2009年5月、部局の将来構想および大型プロジェクトの企画を担当するチームとして、総務委員会内に「教育研究特別プロジェクトチーム」が設置された。そして、2009年度に日本学術振興会が募集した「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に、「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」を事業名として応募し、採択された。本プログラムは3年間にわたって研究科のあらゆる専門分野・コースの若手研究者等が参加できるものであり、これが弾みとなって本研究科の教育研究活動がさらに活発化することを願う次第です。

このほか、⑤人間科学研究科等と協働で実施しているグローバルCOE「コンフリクトの人文科学」（2007～11年度）に、本研究科の教員9名が事業推進担当者として参画中である；⑥教員にとって待望久しかったサバティカル制度を2007年度に制定し（半年間の研究専念期間を毎年最大4名の教員に付与）、2008年度から運用を開始した；⑦教員の教育・研究・管理運営・社会貢献の各方面における業務達成度を評価し、その達成度向上のためのインセンティブを付与することを通じて、部局全体の活動を向上させていくために、教員の個人評価制度を2008年度に制定し、2009年度から運用を開始した；⑧学生の表彰制度として、学部学生を対象とする「文学部賞」に加えて、博士前期課程と修士課程の成績優秀者5名を表彰する「文学研究科賞」を2009年度に新設した；⑨本研究科の独自性を生かした超短期留学生向けプログラム「人文科学のための日本語」を2009年度に策定した（2010年度から実施）；等がある。

上記の事業およびここでは特に言及していない部局の恒常的諸事業は、いずれも研究科教職員の献身的営為によって実施されており、この場をかりて改めて感謝を申し上げたい。また、それら事業の活動を年報にとりまとめる労を取られた評価・広報室の教職員にも御礼を申し上げたい。

2011年1月

文学研究科長・文学部長
片山 剛

大阪大学大学院文学研究科 『年報2010』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

文学研究科では年報を2年毎に発行することとなっている。この『年報2010』はその一環として刊行するものである。第一期の中期計画期間を終え、本格的に国立大学法人化の成果の評価と点検が求められる中で、こうした年報を刊行することには一定の意義があろう。

文学研究科の年報は、ある程度の基礎情報の掲載の点ではこれまで刊行されてきたものを踏襲しながらも、その様式は合理化、進化を経験してきた。

本年報の内容は二部構成となっている。第1部「大阪大学文学研究科および文学部における2008年度～2009年度の教育・研究活動の概要」では、文学研究科・文学部の教育および研究活動全般に関わる事項を報告する。その項目は、前刊の『年報2008』を踏襲しつつ、部分的には簡素化するよう努めた。

第2部「各専門分野における教育・研究活動の概要」では、各専門分野の教育・研究活動について、その特色と、所定の項目ごとのデータを提示した。さらに、期間中の教育・研究活動に関する自己評価も、各専門分野からの報告に基づいているもので、この間の活動を比較・対照できるような構成となっている。

今号の年報では2008年度から受け入れた新専攻「文化動態論専攻」（修士課程）の学生に関する2年分のデータが初めて収録されるに至った。この部分の記載は今後の当該専攻の評価参考資料では嚆矢となる。

データ収集に関しては、3年前から導入していた、個人業績入力用のエクセルシートが今回もまた威力を発揮した。およそ10年前に刊行された自己評価書作成時に比較すると、かなりの省力化が達成できている。このことも含めて、前記のように年報刊行の質は確実に進化していよう。

さらに、本年報では、それまでの年報と同じく、大学院生の業績にも焦点を当てている。大学院生の業績には、研究の成果としての側面と、それを生み出すに至るまでの教育プロセスが反映している側面とがある。その双方の意味から、大学院生の業績を重視するという点で、今回の年報は文学研究科の歴代年報の伝統の上にある。

なお、『年報2010』も、従来通り、文学研究科のホームページ(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通じてWeb上にて公開される予定である。この年報が、文学研究科の教育・研究活動全般を広く知って頂き、忌憚のない評価や建設的な御意見を頂戴し、よりよい教育・研究活動に結びつくような形で活用されることこそ、最も期待されるべき点である。

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要

* コメントは、原則として2008年度および2009年度のデータに関するものであるが、『年報2008』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度4月1日のものである。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

文学研究科では修士課程のみの新専攻「文化動態論専攻」の設置に伴い、大学院学生定員の増加を見た。その結果として2008年度入学者数が前年比で16名増加した。しかしながら、構造的な不況が続く中で、翌2009年度の入学者数は外国人入試による入学者数の合計部分を除けば、いずれも減少し、博士前期課程と新専攻の修士課程との合計総定員94名を確保できていない。定員以上の入学者数の確保が大きな課題である。また、結果的に、この数年は入学者数の変動が大きくなっている。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2004	77	7	15	99
2005	68	4	15	87
2006	61	3	9	73
2007	74	4	11	89
2008	70・18	4・3	10・0	84・21
2009	58・15	3・1	8・2	69・18

1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

緩やかに減少していた学生数であったが、2008年度からは新専攻設置もあって増加した。休学率は下がってきているものの、留年率は低くはなく、とくに新専攻における留年率が顕著である。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2004	230	16	37	85
2005	223	23	39	100
2006	187	15	30	78
2007	193	21	31	59
2008	208・21	22・0	40・―	83・―
2009	188・39	18・0	40・10	77・11

1-3. 大学院博士後期課程入学者

2009年度の入学者は、過去最低の40名となり、募集定員の41名に達することができなかった。とくに外国人入学者数は7人・58.4%もの減少であった。ここでも定員以上の入学者の確保を図ることが課題となっている。全般的な対策が必要と考えられる。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2004	45	5	15	65
2005	34	2	9	45
2006	44	3	9	56
2007	26	3	17	46
2008	30	4	13	47
2009	31	3	6	40

1-4. 大学院博士後期課程学生

2008年から翌2009年までの間で学生数は1割強も減少したが、休学者数と退学者数、とくに後者はより大幅に減った。学位論文提出者数は微減にとどまっているが、提出率は向上したと言える。その背景には学生自身の研究能力の向上や教員の指導、研究環境の整備などの要因があろうが、理系との提出率の差異をどのように考えるべきかなど、継続して検討すべき事項があろう。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数	退学者数
2004	321	76	25	57
2005	294	77	28	36
2006	304	81	24	50
2007	290	93	41	46
2008	276	80	48(25)*	46
2009	248	68	45(18)*	23

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。*()内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

1-5. 大学院研究生

日本人研究生は、2004年度から2005年度にかけてやや増加したが、2007年度までおおむね大きな変動はなかった。留学生に関しては、2006年度から2007年度にかけて増加していた。しかしながら、2008年度から日本人研究生の数は減少し、留学生の研究生も2009年度には減少が顕著である。2009年度には過去6年間で最低の総数となった。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2004	20	2	22
2005	21	2	23
2006	14	7	21
2007	13	8	21
2008	8	9	17
2009	8	6	14

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

一般入試による入学は、過去6年間、定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5~10名程度うまわる数で推移しており、大きな変化はない。外国人入学者は、2004年度から2005年度にかけては0名の状態であったが、2006年度以降、毎年入学者があった。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2004	174	0	174
2005	174	0	174
2006	177	2	179
2007	173	1	174
2008	170	2	172
2009	171	3	174

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数に大きな変化はない。休学者数は2008年度には減ったものの、翌2009年度には倍増している。そのほかに、過去2年間の大きな変化はない。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2004	773	29	64	150
2005	791	35	87	179
2006	785	28	74	163
2007	793	31	84	188
2008	770	16	80	165
2009	779	34	84	166

2-3. 学部研究生

日本人、留学生とも、全体としては、2007年度までは漸減の傾向がうかがわれたが、日本人研究生は過去2年間で激減し、2009年度は2名にとどまった。留学生も2008年度から翌年にかけて大きく減少している。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2004	15	23	38
2005	12	14	26
2006	10	10	20
2007	9	10	19
2008	7	13	20
2009	2	8	10

研究推進室

組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。

研究推進室は文学研究科の教職員によって構成される。室長および副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長より委嘱される。

研究推進室は、科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門の3部門より成り、各部門には室長が委嘱するチーフが置かれる。各部門の主な業務内容は次の通りである（研究推進室内規からの編集引用）。

1. 大科研・共同研究部門

- 1) 「文学研究科共同研究」の募集・選定、運営に関すること
- 2) 「各種共同研究の補助」の募集・選定、運営に関すること
- 3) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること
- 4) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること

2. 図書管理部門

- 1) 「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること
- 2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること
- 3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること

3. 紀要・論叢部門

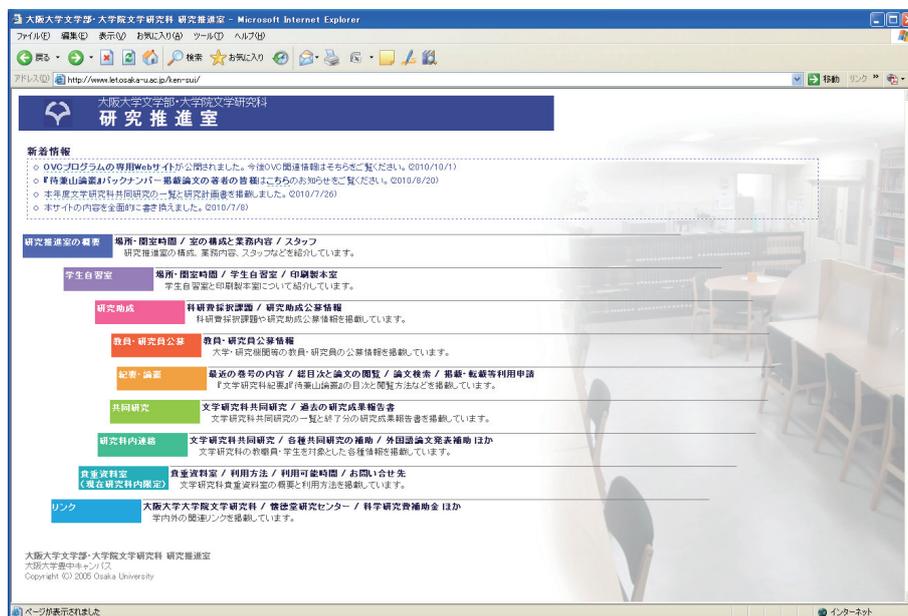
- 1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行および関連の諸問題の処理に関すること
- 2) 若手研究者のための「外国語論文発表補助」の募集・選定に関すること

活動状況

1. 研究推進室ホームページを管理・運営し、研究推進のための情報提供を行った。
2. 文学研究科共同研究の募集・選定および運営に当たった（平成20年度6件、平成21年度5件採択）。また、各種共同研究の補助（文学研究科教員が中心となって開催する各種研究会等の経費補助）を行った（平成20年度7件、平成21年度10件）。
3. 競争的外部資金に関する情報の収集・提供を行ったほか、文部科学省等の募集する各種プログラムへの応募を推進・支援した（組織的な若手研究者等海外派遣プログラム等）。
4. 科学研究費補助金の応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナーの開催（7月、3月）、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。平成20、平成21の各翌年度における採択状況は次表の通りである。

年度	新規課題			新規課題＋継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	採択件数	交付総額(円)
平成21	53	25	47	74	184,112,000
平成22	61	33	54	67	184,058,000

5. 日本学術振興会特別研究員の応募を支援する体制を整え、申請書作成セミナー（3月）を開催するとともに、申請時のアドバイスや申請書類のチェックを行った。
6. 文学研究科共同施設である学生自習室の効果的な運営につとめ、夜間および土曜日開室も実施した。
7. 附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。
8. 建物の改修を機に文学研究科貴重資料室が設けられたのを受け、貴重資料室運用規程や閲覧規則等を制定するなど運用のための準備を進め、平成21年度末に運用を開始した。
9. 『大阪大学大学院文学研究科紀要』第49巻、第50巻および『待兼山論叢』第42号、第43号を刊行した。『待兼山論叢』は従来哲学・史学・文学・美学・日本学の各篇の5分冊であったが、第42号より文化動態論篇を加えて6分冊となった。
10. 若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、外国語論文発表補助（外国語論文や外国語による口頭発表の原稿のネイティブチェック費用の補助）を行った（平成20年度12件、平成21年度9件）。



研究推進室ホームページ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/ken-sui/>)



学生自習室の風景



大学院生・若手研究者向け科研等申請書作成セミナー

(田野村忠温)

評価・広報室

組織・体制

評価・広報室は、2004年度の法人化に伴い、従来の企画・評価委員会と広報委員会を合わせて新たに設置された組織で、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っている。

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門によって構成され、室長・副室長を除く室員全員が、そのいずれかに所属している。ただし、一部の室員は、複数の部門（具体的には広報部門とネットワーク部門）に所属している。研究評価部門は、教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や年報の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施など、広報部門は高校生の大学見学や出張講義への対応、『文学研究科紹介』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの管理など、また、ネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長および副室長は、室全体の活動を統轄するとともに、外部評価のような業務やいずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統轄している。また、教務補佐員1名が配置され、室の事務全般を担当している。

(藤川隆男)

活動状況

1. 評価・広報室全般

1-1. 各部門の活動内容と会議（室会議、総務委員会）

本室は、研究評価部門、教育評価部門、広報部門、ネットワーク部門の4部門から構成されているが、各部門の2年間の主な活動内容は以下の通りである。

まず、研究評価部門は、『大阪大学大学院文学研究科年報 2008 教育・研究（2006-2007年度）』の編集と刊行を行い、教育評価部門はFDや各種アンケートの企画・実施等にあたった。広報部門は、文学部紹介誌である『大阪大学文学部』、文学研究科紹介誌である『大阪大学大学院文学研究科紹介』の編集・刊行をはじめ、文学部説明会や大学見学会の開催、高校への出張講義、HPの維持・管理等を担当した。ネットワーク部門は、文学研究科サーバ、メールアカウント、LAN等の維持・管理にあたった。

本室の会議には、室員全体が出席する全体会議、室長・副室長および各部門チーフによるチーフ会議、各部門がそれぞれ独自に開催する部門会議、必要に応じ、所属部門を超えて選ばれた数名で構成される特別委員会の会議がある。2008・2009年度は、全体会議は、原則として教授会の行われる日に定期的で開催され、他の会議は必要に応じて開催された。

なお、室長は、総務委員会において、本室の活動報告や本室に関わる問題提起を行うとともに、総務委員会から本室への依頼事項を室に持ち帰り、室会議に諮った。

1-2. データ収集（全学基礎データ、教員基礎データ）と『年報』作成

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」の収集については、積極的にこれに関わり、各専門分野や各教員の自己評価への意識を高めた。「全学基礎データ」の資料は、『全学基礎データ 2008』、『全学基礎データ 2009』という小冊子にまとめ、文学研究科内における各種評価に役立てている。なお、「教員基礎データ」の収集は、「教員基礎データ」、『年報』、ReaDの三者に共通して利用できるデータベース作成用ソフトにより行われた。このソフトは2007年度に開発されたもので、これの利用により、文学研究科教員の「教員基礎データ」入力率は全学的にもきわめて高いものとなった。

このほか、文学研究科独自のものとして、2008年度および2009年度において、専門分野別年度目標・達成状況シートを配布し、データ収集を行った。

2008年度には、これらのデータに基づいて自己評価書である『大阪大学大学院文学研究科年報 2008 教育・研究

(2006-2007年度)』を刊行し、本研究科の専門分野別の教育・研究状況とその自己評価を学内外に公開した。

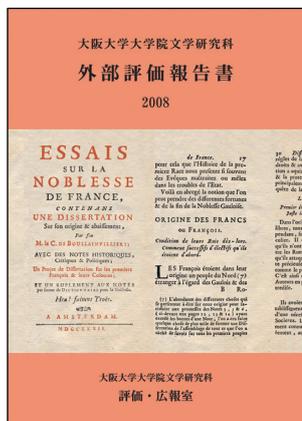
(村田路人)

1-3. 年度計画・達成状況と「外部評価書」の作成等

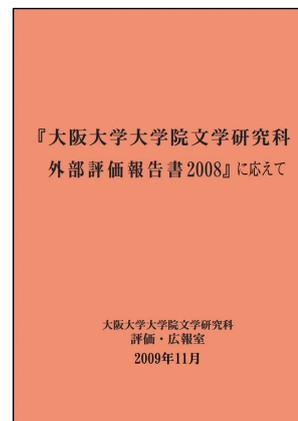
例年通り、年度計画の策定(12月)と達成状況の自己評価(3月)を行った。これは全学規模の評価活動の一環として、中期計画・中期目標の方針にのっとり行ったものである。また、広報活動の活発化を目指して、2009年度には外部のウェブサイトを利用した大学院広報活動を開始し、さらに『文学部紹介』および『文学研究科紹介』の刷新に向けての活動を行い、高校生のための文学部説明会・見学会の拡大も実現した。

2008年度には、外部評価委員会を設け、文学研究科の各専門分野が行った自己評価の点検を外部評価者に依頼し、その結果を『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2008』として刊行した。これは2004年度～2007年度までの教育と研究および社会貢献に関する外部評価である。また、2009年度には、2008年度の外部評価に対する文学研究科各専門分野の対応方針を取りまとめて、『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2008』に添えて』を作成し、これを公開した。

(藤川隆男)



『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2008』



『大阪大学大学院文学研究科外部評価報告書2008』に添えて」
共に文学部・文学研究科公式サイトにてPDFで公開中。

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2008年度、過去2年間(2006～2007)における教育・研究活動の情報を収集整理した『年報2008』(A4判404頁)を刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務部、学内の他部局、学外機関等に、467冊を配布した。基本的な体裁は『年報2006』に従った。第1部には研究科全体としての組織運営・活動に関する記事を、第2部には各専門分野単位の活動をまとめた記事を、さらに付録として2007年度に実施された「大学院生の教育・研究環境等に関するアンケート」および「大学院修了生アンケート」の実施結果報告をそれぞれ掲載した。各専門分野の記事では、前号に引き続き、「過去2年間の自己点検と評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。専門分野の記事には、今号より、文化動態論専攻4コースの記事が加わった。『年報2008』は文学部・文学研究科の公式サイトにおいてPDFファイルとして公開中である。



『年報2008』文学部・文学研究科
公式サイトにてPDFで公開中。

2-2. 専門分野別年度目標

2004年度に文学研究科・文学部の自己点検評価の実施方法について検討した結果、23専門分野が年度当初に「教育」「研究」「社会貢献」について年度目標を設定し、これに対する達成度を年度末に自己点検する方式をとることになった（達成度の報告は、次年度当初に行われる目標設定の報告と同時にされる）。これについても、2008年度から文化動態論専攻4コースが加わった。

2-3. 教員データ収集用エクセルシート

2007年度以降、全学レベルの教員基礎データと文学研究科『年報』の作成用データを一括して収集するためのエクセルシートの運用を始めた。2009年度には、全学の教員基礎データの公表フォーマットの変更に伴い、いくつかの修正をおこなった。このエクセルシートは、エクセル本体の問題により、安定性などに若干の課題があるが、これまでのところ、本研究科の教員情報収集の合理化に大いに役立ってきたと評価している。

(岡田裕成)

3. 教育評価部門

2008（平成20）・2009（平成21）年度に、評価・広報室ないしその教育評価部門が関わって行ったアンケートおよびファカルティ・ディベロップメント（FD）について、報告する。

3-1. アンケート

評価・広報室は、2009年3月に、文化動態論専攻21人の大学院生を対象に、授業改善を目的としたアンケートを実施して、14名からの回答を得た。このアンケート調査は、文学研究科の年度計画を作成する上で文化動態論専攻に関わる資料が必要であること、ならびに、文化動態論専攻開設初年度の資料を残しておく必要があること、という二つの理由から急遽実施されたものである。文学研究科の他専攻については2007年度にアンケートを実施した経緯もあり（2008年度にはアンケートを実施しなかった）、文化動態論専攻のアンケートは、2007年度に他専攻に対して実施したものをほぼそのまま流用することによって、「2007年度の欠を補う」という考え方を採った。集計結果は「年報」と評価・広報室のホームページにおいて公表する予定であったが、回答数が僅少であるため当初の予定は見送られている。自由記述においては、「設備の不備」や「教員の多忙による指導不足」が一部で指摘されたほか、文化動態論専攻の大学院生が、自身の専門分野にとらわれず高度専門職業人養成のための教育に高い関心を寄せていることが窺われた。

また、評価・広報室の教育評価部門は、2009年10～11月に、すべての大学院生を対象に、授業改善を目的としたアンケートを実施して、博士前期課程・修士課程の大学院生については、アンケート対象学生・全203人中の75人（37%）、博士後期課程の院生については全174人中の46人（26%）から回答を得た。このアンケートの集計結果は、自由記述も含め、ほぼすべての回答が文学研究科のホームページにおいて公表されたほか、2009年度中の教授会においても公表・分析されたので、ここでの報告は割愛する。なお、今後の課題として、如何にして回答率を高めるのか、クロス集計等を行っていかなる分析を引き出すのか、ということが挙げられる。

3-2. ファカルティ・ディベロップメント（FD）

2008年11月6日、文学研究科・文学部は研究教育フォーラム（教員研究会）を開催し、その中のFD関係として、第一部では本研究科・井本恭子准教授により「サルデーニャの田園の教会と「境界性」について」という題で、第二部では本研究科・真田信治教授により「越境した日本語」という題で講演を行った。参加者は約50名であった。

また、2008年12月4日、教育支援室と評価・広報室は「2008年度文学研究科FD研修会」を開催し、第一部「講演と意見交換」においては、本学大学教育実践センター・服部憲児准教授により、「成績評価に関する政策動向とその背景」という題で依頼講演を実施し、その後で意見交換を行い（司会：三谷研爾教育支援室副室長）、第二部「講習と意見交換」においては、本研究科・舟場保之准教授による「個人票と成績評価」という題の報告が行われ、その後に討論を行った（司会：三谷研爾教育支援室副室長）。参加者は約35名であった。

次年度の2009年11月19日、文学研究科・文学部は研究教育フォーラム（教員研究会）を開催し、その中のFD関係として、第一部では本研究科・荒川正晴教授により「唐代の新興庶民と仏教信仰 —— トウルファンに生きたある高利貸しの事例から——」という題で、第二部では本研究科・天野文雄教授により「寛正五年糺河原勸進猿楽の舞台の橋掛りは本当に真後ろに付いていたのか —— 能舞台変遷史再考——」という題での講演を実施した。参加者は約60名であった。

また、2009年12月3日、教育支援室と評価・広報室は、「2009年度文学研究科FD研修会」の規模を拡大して、現役大学生についての文学研究科教員による現状報告や分析と、駿台予備学校情報センター長や高校現場の教諭による受験生についての動向分析を交えた、二部構成のFDシンポジウム「入試制度の現状と将来への展望」を開催した。参加者は約45名であった。

（高橋文治）



「文学研究科FDシンポジウム」（2009年度）



「文学研究科FD講演会」（2010年度）

4. 広報部門

広報部門は大学における広報の役割の重要性を認識し、文学研究科・文学部から発信する情報を常に刷新し、また広く高校生や社会人に研究と教育の現況の情報を提供し続けるように努力している。以下では、冊子メディア、電子メディア（HPほか）、オープンキャンパス・各種見学会に分け、それぞれのジャンルの活動について、2008年度から2009年度を概観し、その問題点と今後の展望を述べておきたい。

4-1. 冊子メディア

文学部で広報活動の一環として重要なものが、『文学部紹介』である。この冊子は、毎年刊行されているもので、各高校、各種大学説明会などで配布されている。毎年5000～6000部を刊行し、文学部の研究と教育の現状や理念などを分かりやすく紹介している。

2009-2010年度版は、2008-2009年度版の部分的な改定であったため、それを踏襲した構成として、文学部のアドミ

セッション・ポリシー、文学部長挨拶、入学後の学習課程、各専修紹介、文学部沿革、卒業後の進路、その他に懐徳堂記念会や埋蔵文化財調査室などの紹介、さらには現役教員・在校生・卒業生の声を「Meet 教授陣に聞く、学問の魅力」「Campus Life」「Face 大阪大学の輝く先輩」として特集化するなど、文学部に関わる基本的な事項を盛り込んだ。

2010-2011 年度版では、これまでの教員だけの編集体制を一新し、読書層となる高校生にも年齢的に近い大阪大学内の学生に編集委員として加わってもらう形にした。編集委員の学生は、募集をかけたところ総勢 9 名となり、教員や編集デザイナーなども加わって、新しい文学部紹介の内容に改善すべく努めた。

その結果、内容としては、学生による教員や卒業生・留学生へのインタビュー、文学部生の一日の生活スタイルや文学部生の本棚の紹介、文学部春夏秋冬新聞と題する年間のスケジュールなどの記事、受験の合格体験記、文学部生 Life としてキャンパス内の案内、さらには漫画を交えての文学部裏情報新聞のコーナーなど、これまでにない斬新なものになった。もちろん従来通りの専修紹介や教員紹介も載録し、以前よりも少しでも親しみやすくするために、教員の「趣味」欄も新たに設けるなど、工夫を加えた。また、表紙デザインもこれまでとは変えて、B5 判のノートのような形にした。高校生はもとより、専修を選択する大学の 1 回生などにも、読みやすい内容になったものと思われる。

『大阪大学大学院文学研究科紹介』も毎年刊行しており、全国の大学に配布している。最新版の『文学研究科紹介 2010-2011』では、従来のものから、表紙や

紙質さらには全体のレイアウトにいたるまで大幅に改めることにした。レイアウトの変更により、教員間での内容の精粗がある程度は解消し、デザイン面では色分けなどを行うことにより、かなり見やすい紙面になったものといえる。なお、冊子ではないが、大学院、とくに入試に向けた広報として、ポスターの作成もおこなっている。

4-2. 電子メディア

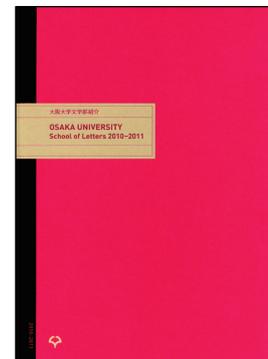
大学と学部選択、及び大学院と研究科選択にあたって学生たちが参照する割合が最も大きいのが、文学部公式サイト(以下 HP と略記)である。ほとんどの新入生は HP を見て、詳しい情報を得ている。HP 充実は、広報活動としては、『文学部紹介』と共にきわめて重要な位置を占めている。

HP の中では、文学部紹介での内容とは基本的に変わらないものの、差異化を計った情報発信を行っている。大学院入試問題の掲載を行なうことで、入学希望者への便宜を図っている一方で、各教員の出版、受賞、研究会などの様々な活動を「トピックス」欄においてタイムリーに掲載することに努力し、冊子媒体にはない迅速な情報提供に資している。また英語版 HP も作成し掲載している。

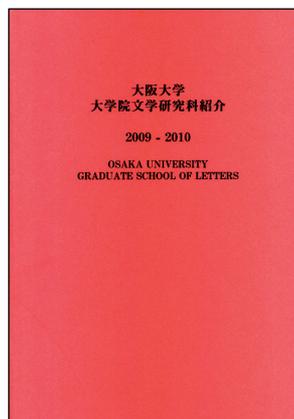
このほかに 2009 年度には新たな試みとして、大学院の広報として、受験関係などの情報サイトに文学研究科の記事を登録することにした。この方法が十分に効果を持つかは、今後の追跡調査などが必要なが、従来にない活動として今後このような方向での活動を模索する必要はあろう。



『大阪大学文学部 2009-2010』



『大阪大学文学部紹介 2010-2011』



『大阪大学大学院
文学研究科紹介 2009-2010』



『大阪大学大学院
文学研究科紹介 2010-2011』

4-3. オープンキャンパス・各種見学会

広報活動の3つ目の柱はオープンキャンパスなどである。これには大阪大学の全学部が8月に行なう大学説明会の一環として文学部で行うものと、文学部独自に行なう文学部見学会あるいは教員が高校に出向く出張講義などがある。

まず、毎年8月に行なわれる大学説明会（文学部）には、多くの高校生や父母が来られ、毎年千人前後の参加者があり、関心の高さが窺われる。学部長の挨拶の後、教員の講演、在校生のスピーチのほか、各ブロックから一人ずつ教員が出て各ブロックの教育と研究を分かりやすく説明している。その後、参加者との質疑応答があり、参加者への理解を高める努力をしている。また、各研究室を開放し、自由に高校生に研究室の雰囲気を味わってもらう貴重な機会なども提供している。2009年度は文学部本館の耐震補強工事などによって、研究室が仮移転していたこともあり、地図などを配布して見学に支障が出ないように工夫した。

文学部独自の見学会は、希望する高等学校から事務局学生部学務課総務係を通じて申し込みをしてもらい、評価・広報室で受け入れの可否を決定している。2007年度に、受け入れのガイドライン策定を行ったが、それでも希望が多かったため、できる限り全学で行う説明会に参加を求め形をとりながら、受け入れの諾否を決めることにした。この見学会では、高校側の希望に合わせて柔軟にプログラムを組んで対応しており、教員がそれぞれの専門を高校生向けにわかりやすく授業するなど、文学部の研究と教育への関心の向上を図っている。また、見学会に参加の高校などに、見学に際してのアンケートを新たにとるようにした。これによって、高校側のニーズや見学会の現状に対する考えなどについての情報を得ることもできた点は、この2008～2009年度の改善点である。

ここ数年、高等学校からの見学の要望が増えており、2008年度には、岡山県立大安寺高校、福井県立大野高校、広島城北高校、鳥取県立倉吉西高校、大阪開明高校、大阪府立池田高校、鹿児島県立鹿児島中央高校、2009年度には、福井県立大野高校、大阪府立天王寺高校、大阪開明高校、群馬県立前橋高校、大阪府立池田高校、鹿児島県立鹿児島中央高校の見学会受け入れを行った。このほか、教員の出張講義としては、2008年度には、広島市立舟入高校、兵庫県立北摂三田高校、大阪府立岸和田高校、大阪府立高津高校、兵庫県立川西緑台高校、2009年度には、大阪府立岸和田高校、大阪府立茨木高校に教員の派遣をした。これらの見学会や講義などでは、上記冊子媒体や入学要項、その他の冊子を提供するなどして広報に努めている。

4-4. 展望

2008年度から2009年度の広報関係の状況は以上の通りであるが、文学部紹介や文学研究科紹介などの編集やデザインの一新や、受験関係情報サイトへの文学研究科の記事の掲載など、いくつかの新たな取り組みをおこなうことができた。いずれも耳にする限りでは好評のようである。ただし、前の年報と引き続きの課題ではあるが、評価・広報室、特に限られた人数の広報部門に所属する教員だけでは対応に限界がある。広報活動が果たす役割は大きいことから、何らかの抜本的対策を講じることが望まれる。

より個別の内容としては、新規の『文学部紹介』はかなり軌道に乗ったものと思われるが、『大阪大学大学院文学研究科紹介』には課題も多い。大学生への大学院を紹介する媒体としては、インターネットなど電子メディアの部分が大きい



「文学部説明会」(2010年度)



「文学部見学会」(2010年度)

ため、冊子による印刷媒体の広報はその存在価値が問われていたが、大学院関連の広報の必要性が高まることもあって、今後はより簡便なリーフレットや電子メディアではふれにくい内容、たとえば大学院生からのメッセージなどを冊子媒体に多く載せるなど、内容の選択をすることも必要であろう。

また、情報サイトへの記事の掲載に関しても、字数などの関係で、紹介できる内容が限られてくることから、学内のHPへのリンクが不可欠であるが、各専門分野やコースのより細かなHPは精粗があるので、各地の大学院受験希望者にもアピールするように専門分野などのHPづくりの改善も求められることになるだろう。大学院入学試験の受験希望者を増加させるための取り組みは、仕事が多い広報部門だけでは手が回らないため、教育支援室の入試部門など、連携を取りながら進めることも必要である。また将来的には、高校生向けの広報と、大学生大学院生向けの広報などは分担を分けるなど、今後の活動方向としては課題が多い。

(高橋照彦)

5. ネットワーク部門

評価・広報室、ネットワーク部門の主な業務は、文学研究科サーバ管理、教職員および学生へのメールアカウント管理、その他、研究科内ネットワーク設備の管理およびネットワーク・セキュリティの維持全般である。以下に、「サーバ管理」「メールアカウント」および「ネットワークの維持」に分けて2年間の総括を行う。

5-1. 文学研究科サーバ管理

Webサーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、COEプログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会におけるITへの依存度が増せば増すほど、サーバの安定運用ということが求められるのであり、Webやメールが止まることで、さまざまな業務がたちまち大きな影響を受けることになるのである。しかも、外部からのアタックやウィルスメールなど、ネットワークに対する脅威への不安も日々高まる一方であり、セキュリティ保持の作業は、大変責任の重い業務である。

ネットワーク部門では、Webサーバ、メールサーバ、ネームサーバを、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスにお願いしており、このことによってサーバの安全性が保たれている。ネットワーク部門では、ホームページ管理用のアカウント管理などを行っている。

5-2. メールアカウント

上に述べたように、文学研究科では、…@let.osaka-u.ac.jpのアカウントを発行している(サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託したが、メールアカウントの管理は引き続き、ネットワーク部門が行っている)。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、このアカウントを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、以前より発行数が減少している。この減少は、全学生について、教育システムによるメールが使えるということが浸透したため、研究科発行のアカウントを必要としなくなったことによるものと考えられる。一方、メーリングリストの設定は増加しており、室・委員会等の運営において、メーリングリストの利用はもはや不可欠のものとなっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のものとなった以上、もとめられるのは、安全・安心な運用である。即ち、サーバダウンの回避、ウィルスメール、スパムメール等の排除など、セキュリティの確保を意味する。サーバの維持については、前節に述べたとおりで、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスによって、より安定した運用がなされることとなった。

ウィルスメール対策についても、ODINSが提供するウィルス監視システムを介することによって、かなり安全性が高まった。しかしながらこれも完全ではないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェックなど、今後も油断なく続行していく必要がある。

5-3. ネットワークの維持

時折、ネットワークの不具合が生じる。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどの現象であるが、原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等さまざまであり、その原因の特定が難しい。不具合が見出された際に、ODINS 機器の不具合であることが考えられれば ODINS による対応があるが、まずはネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、業者と契約し、ネットワーク不具合時には、問題の切り分けを依頼することができるようになっている。

2008 年度から 2009 年度にかけての本館改修工事に伴い、ネットワーク環境も変更されることとなった。それに伴い、廊下等におかれていたスイッチが、すべて室内におかれるなど、セキュリティ的に向上した。また、固定 IP アドレスの振り替えを行うこととなったが、大きな混乱もなく変更が終了した。

5-4. 展望

すでに述べたように、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバはサイバーメディアセンターのホスティングサービスに移行している。とはいえ、なお残る問題もあり、これを今後どのようにしていくかが一つの課題となる。ブロックごとにネットワークの管理責任者を設定して、問題が起きたら、まずはその中で対処していただくという管理方式を徹底していけば、ネットワーク部門の教員の負担もある程度軽減されるであろう。インターネットの維持・管理は、全てのユーザによる不断的努力が不可欠であるということを、文学研究科ユーザが自覚していくためにも、管理責任の分割は必要な方針であると考えられる。

また、各ユーザが、必要な知識がないままネットワークに接続すると、問題が生じることもあり、そのためにも、ネットワークについての情報提供がますます望まれる。研究科内向けのホームページに、ネットワークに関する情報をより多く載せるなどして、情報提供に努めているが、より一層の情報提供活動が必要となるであろう。

(岡島昭浩)

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、文学部学生・文学研究科大学院生に対する教育支援のための組織で、2008 年度、2009 年度は、下記の体制のもとに運営された。

教育支援室長（1 名）・副室長（2 名）

- (1) 教務・学位部門：部門チーフ、学位専門委員および室員
- (2) 入試部門：部門チーフおよび室員
- (3) 学習・生活支援部門：部門チーフおよび室員
- (4) 就職支援部門：部門チーフおよび室員
- (5) 共通教育部門：部門チーフおよび室員

各部門については基本的に 2007 年度の形を踏襲している。部門内において適宜チームを作り諸事に対処するという形をとった。また博物館実習委員会、教務係、庶務係、会計係とも連携しつつ、教育支援室の三役会議、チーフ会議と各部門会議によって運営を進めた。

従来と同様に、学生・院生に対する教育支援を充実させるために、非常勤職員 2 名を配置し、常時学生の相談ができる体制をとり、これも従来通り午後 5 時以後 7 時までは学生アルバイトによって開室した。また文学部本館改修に伴い、若干の会議スペースを教育支援室内に設け、接客など学生の利用するスペースと差別化をはかった。ホームページの充実、第 2 ミーティングルームの管理運営、授業用機器の貸し出しなどを行なった。

活動状況

1. 教育支援室長・副室長

1-1. 会議

総務委員会とも連携しつつ、下記のような会議を開催した。

【2008年度】

- (1)2008年3月に教育支援室全体会議を開催して、2008年度と2009年度の2年間は、基本的に同じ室長、副室長、部門チーフ（教務・学位部門だけは負担が重いために1年任期）、室員という体制で取り組むこと確認し、部門チーフと各部門室員の確定を行なった。
- (2)各部門会議は、教授会開催日（原則隔週）に行ない、正副室長、部門チーフからなるチーフ会議は、教授会のない木曜日の午後、総務委員会（原則隔週）の前に行なった。チーフ会議には、教務係主任、事務スタッフ、また必要に応じて関係教員も、出席した。さらに必要に応じて、教育支援室の三役会議（正副室長会議）を教授会の前に行ない、教育支援室全体に関わる調整などを行なった。
- (3)室長は、常に総務委員会に出席して、教育支援室チーフ会議における重要な案件を説明した。総務委員会における議論や判断を、教育支援室に持ち帰りチーフ会議で決定した。
- (4)室長は、教授会開催前に、「教育支援室活動報告」を教授会メンバーにMLで配布し、必要に応じて教授会において口頭で補足説明を行なった。また教授会では、必要に応じて、副室長や各部門のチーフからも報告を行なった。また、教員全体の意見集約、議論が必要な案件は、教授会懇談会の課題とした。また、室長はチーフ会議の「議事録」を作成し、全室員、事務スタッフにMLで配布した。
- (5)室長は、教育課程委員会に出席し、全学との連携を図った。

【2009年度】

- (1)2009年4月第1回目のチーフ会議で、教務・学位部門と学習・生活支援部門のチーフの交代を確認し、昨年度の反省、年間計画の確認などを行なった。
- (2)2008年度と同様に、チーフ会議と部門会議を隔週に行なった。必要に応じて、正副室長で三役会議を行なった。
- (3)2008年度と同様に、室長は、常時総務委員会に出席し、文学部・文学研究科全体における調整を行なった。
- (4)室長は、教育課程委員会に出席し、全学との連携を図った。

1-2. 教育支援室（玄関横）の運営

文学研究科本館の玄関横に設置した教育支援室は、室長をはじめとする教育支援室の教員と事務スタッフが協力して運営にあたってきた。開室は月曜日から金曜日の午前10時から午後5時までであったのを2007年4月より午前10時から午後7時までとした。その後この体制は維持している。情報機器ではパソコン6台（ウィンドウズ）、プリンター1台、コピー機を配置していたが、学生の便宜を図るために、パソコン（マック）1台を新規購入した。就職関連図書を配架し、室内外に設置した掲示板に求人情報などの各種案内を掲示して学生の利用に供してきた。

事務スタッフは、2005年度から非常勤職員2名が常時在室する体制をとり、来室する学生の相談などに対応している。2007年4月からは、午後5時から午後7時までを非常勤職員（大学院生）が図書の貸出しなどにあたっている。また2008年度には、旧評価・広報室を多目的室として教員や学生に開放し、その管理運営を教育支援室が担当している。



「教育支援室」

また、正副室長、部門チーフ、教務係等との連携のもとに、次のような活動を行なった。教育支援室内の情報機器やホームページの維持管理、各種案内の掲示、プロジェクター・スクリーン・スピーカーなどの備品の貸出しや保管、過去の大学院入試問題の公開と複写サービス、TAの任用やTA研修会に際しての案内、大阪大学が初めての院生のためのガイダンスの案内、奨学金の返還免除申請に必要な書類の配布、第2ミーティングルームの利用受付と鍵の管理、学習相談の窓口を務め、学習報告書を管理、就職関係では求人票の管理・履歴書用紙の配布・就職関係図書の購入及び貸出・就職ガイダンスや就職説明会の事務、博物館実習ノートの管理、教育支援室の予算書・決算書・年度計画書、年報・外部評価報告書などの教育支援室関連部分の作成のための事務補助、教育支援室内の各種会議の会場設定や資料作成などである。

1-3. 教育支援室ホームページ

教育支援室ホームページの開設は2004年度、2005年度に、教育支援室に関連するすべての業務に関する包括的なホームページを構築した。2006年度にはWeb版シラバスを公開し、インターンシップ報告書、留学の案内などを掲載した。引き続き、全教員のオフィスアワー、奨学金返還免除の情報や就職活動を支援する情報の掲載を行なってきた。また、相談フォームからのメールによる学習相談を随時受付している。

1-4. その他の活動と今後の課題

(1)2007年度の2学期からKOANが導入され、文学部でもこれに取り組んだが、文学部のカリキュラム編成は、他部局に比べて非常に複雑であり、多くの困難があった。2007年度までは紙媒体のシラバスとKOANのシラバスの両立で運営したが、2008年度以降は紙媒体を簡略化し、科目一覧を作成するのみにし、基本的にはKOANに一元化した。また2009年度には、学生便覧と科目一覧冊子を合体して一冊にすることにし、旧来の授業科目一覧表を廃止した。

(2)2009年度には卒業論文、修士論文、博士論文の成績評価基準を策定した。

(3)2008年3月には、文学部と文学研究科の学位記授与式を豊中キャンパスの文学部の教室で実施したが、これをその後も継続した。

(4)2009年度には、文学部開講の外国語科目の整備を行なった。基本的な第2外国語を定めて従来隔年開講外国語を毎年開講とし、共通教育で開講されている兼修外国語を文学部の外国語として履修できるよう調整した。

(永田靖)

2. 教務・学位部門

2-1. 教務関係

2008年度と2009年度の2年間は、これまでと同様に教務係と連携しつつ、教務に関する業務を行った。たとえば、学部1年次生のために、年度初頭にオリエンテーションを実施し、1学期には全専修参加の「文学部共通概説」を行い、秋には「専修ガイダンス」を通して専修決定への便宜を提供した。さらに、3年次生の成績を点検し、卒業論文執筆にあたっての履修状況の把握に努めた。また、神戸大学との相互履修制度に基づく教育交流も行った。このような例年通りの業務以外にも、以下の通り、さまざまな内規・申し合わせの見直しや改定等を行った。

2008年度には、文化動態論専攻の教職科目を新たに開設し、それに伴って、文学部の教職科目の整理に着手した。また、大阪外国語大学との統合に伴う転部手続きの見直しを行った。

また2009年度には、これまで長い間懸案になっていた教職課程科目一覧の改定を行った。これによって、毎年の授業科目や担当者の変更に係る書類作成・申請等が簡素化された。また、表彰制度を全般的に見直して、これまで申し合わせとして規定されていた文学部賞や楠本賞に加えて新たに文学研究科賞を設け、これら3つの賞それぞれについて内規と申し合わせを策定した。卒業論文・修士論文の評価については、これまで各専修・各専門分野がそれぞれ独自の評価基準で行ってきたが、全専修・全専門分野に共通した評価基準を設ける必要性が生じたので、アンケートを実施して、その結果に基づき卒業論文・修士論文の評価基準を策定した。加えて、転部に係る内規の改定、科目等履修生の申し合わせの改定、長期履修学生制度に関する内規及び申し合わせの改定などを行った。また、大学院学生が初級外国語の授業を受講できるように大学院授業科目の中に外国語科目を開設した。

(上野修・大庭幸男)

2-2. 学位関係

かつて文学博士の学位を取得するのは極めて困難であったが、今やできるだけ多くの者に博士の学位を授与することが、社会的にも要請されている。引継事項になっていた学位論文の評価に、合否判定のみならず段階的な成績判定を設ける件については、積極的な意見が出なかったため見送ったが、大学院生たちが課程博士号を取得しやすいような環境作りに努めてきた。特に2009年度は文学研究科の6年の中期計画の最終年度に当たり、大学院設置基準第14条に明記されている「学位論文評価基準の策定及び学生への周知」を実行するようとの要請が初めからあったため、他大学・他学部の実態を調査し、アンケートによって研究科内のすべての専門分野から意見を聴取したうえで、学位部門で半年以上の時間をかけて議論を重ね、教授会にも諮った結果、ようやく成案を得た。それが「大阪大学大学院文学研究科における博士学位申請論文の審査基準（内規）」であり、これがこの2年間で最大の成果であった。なお、これに付随して「大阪大学大学院文学研究科における修士論文の評価基準」も作成・公表した。

2008年度は83名の文学修士、48名の課程博士、22名の論文博士が、2009年度は88名の文学修士、45名の課程博士、16名の論文博士が誕生している。なお、博士予備論文の合格者数は、2008年度48名、2009年度37名であった。
(森安孝夫)

3. 入試部門

教務係と連携しつつ、文学研究科・文学部の各種入学試験とそれに関連する業務を行った。

【2008年度】

2009（平成21）年度の文学研究科・文学部入学試験に関する業務を行った。文学部入試に関しては、2009年2月に前期日程の個別学力試験を、同3月に後期日程の個別学力試験を実施した。

文学研究科入試に関しては、秋期（9月）・春期（2月）の2回に分けて実施した。2008年9月には、修士課程（一般）、博士前期課程（一般）、修士課程（社会人）、博士前期課程（社会人）、博士後期課程（社会人）の試験を実施し、2009年2月には、修士課程（一般）、博士前期課程（一般）、博士後期課程（一般）、修士課程（外国人留学生）、博士前期課程（外国人留学生）、博士後期課程（外国人留学生）の試験を実施した。また、文学研究科の入学試験については、教育支援室において一定の期間を設けて過去の入学試験問題の閲覧を行うとともに、文学研究科ホームページ上でも一部公開した。このほか、入学試験に関する各種広報活動を文学研究科ホームページなどを通して行った。

教授会懇談会の場で文学研究科・文学部入試に関する反省会を実施した。2009年6月に2009（平成21）年度文学部入試に関する反省会を実施し、2009年4月に同文学研究科入試に関する反省会を実施した。

適切な入学試験のあり方を検討するため、文学研究科・文学部の入学者の入学試験の成績とその後の成績との関連を調査した。

2009（平成21）年度の文学研究科および文学部研究生の選抜を、2008年9月および2009年3月に行った。

2009（平成21）年度の文学部学士入学試験を2009年2月に行った。

【2009年度】

2010（平成22）年度の文学研究科・文学部入学試験に関する業務を行った。文学部入試に関しては、2010年2月に前期日程の個別学力試験を、同3月に後期日程の個別学力試験を実施した。

文学研究科入試に関しては、前年度同様、秋期・春期の2回に分けて実施した。2009年9月には、修士課程（一般）、博士前期課程（一般）、修士課程（社会人）、博士前期課程（社会人）、博士後期課程（社会人）の試験を実施し、2010年2月には、修士課程（一般）、博士前期課程（一般）、博士後期課程（一般）、修士課程（外国人留学生）、博士前期課程（外国人留学生）、博士後期課程（外国人留学生）の試験を実施した。また、文学研究科の入学試験については、教育支援室において一定の期間を設けて過去の入学試験問題の閲覧を行うとともに、文学研究科ホームページ上でも一部公開した。このほか、入学試験に関する各種広報活動を文学研究科ホームページなどを通して行った。

教授会懇談会の場で文学研究科・文学部入試に関する反省会を実施した。2010年9月に2010（平成22）年度文学部入試に関する反省会を実施し、2010年5月に同文学研究科入試に関する反省会を実施した。

適切な入学試験のあり方を検討するため、文学研究科・文学部の入学者の入学試験の成績とその後の成績との関連を調査した。また、これとは別に、文学研究科については博士前期課程の秋期・春期入試の別が、また、文学部入試について

は前期日程・後期日程の別が、それぞれ、卒業時の成績に関係するか否かの調査を行い、2010年2月の教授会懇談会で報告した。

2010（平成22）年度の文学研究科および文学部研究生の選抜を、2009年9月および2010年3月に行った。

2010（平成22）年度の文学部学士入学試験を2010年3月に行った。

（石井正彦）

4. 学習・生活部門

4-1. 学習・生活支援

【2008年度】

奨学金および奨学金返還免除関連、TA任用関連、インターンシップ関連、学習相談の各セクションについて担当を定め、随時部門会議を開催して具体的な業務にあたった。日本学生支援機構大学院奨学生の推薦、奨学金返還免除推薦、文学研究科TAの募集と決定については、教務係と教育支援室のスタッフ、庶務・会計係と連携しながら例年通りおこなった。また「大阪大学が初めての院生のためのガイダンス」を4月9日に開催したほか、TA研修会を前期（4月16、18日）、後期（10月9日）ともに開催した。奨学金返還免除については、10月30日に説明会を実施した。ただし、文学研究科TAの決定に際しては、優先順位の周知徹底が必要であるため、次年度への引き継ぎ事項とした。また図書館TAの推薦を新規に開始した。

【2009年度】

部門会議を随時開催し、教務係・教育支援室スタッフの協力のもと、奨学金および奨学金返還免除関連、TA任用関連、インターンシップ関連、学習相談、教室整備について、具体的な業務にあたった。まず、中心的業務のひとつであるTA任用については、会計・庶務係とも連携しつつ、円滑な執行を推進した。具体的には、4月16日および10月8日にTA研修会を開催した。また、文学研究科TAの募集・選考および図書館TAの募集・推薦をおこなった。さらにTA募集要項の改訂をおこない基準を明示化するとともに、本部によるTA改革に対応すべく準備をすすめた。

奨学金返還免除については、例年どおり説明会を10月29日に開催した。また配布文書の改訂をおこなって添付書類を明確化し、奨学金返還免除についてのメール相談窓口を設置した。教室整備についても、教務係と連携して随時対応するとともに状況把握に努めた。

また他大学出身院生のためのガイダンスを4月16日に開催するとともに、これらの院生および社会人院生のニーズを把握するために記述式のアンケートをおこない、教授会において報告した。

（栗原麻子）

4-2. インターンシップ

【2008年度】

2008年度には、劇場、撮影所、音楽ホールを受け入れ機関として、計9名（うち文学部・文学研究科の学生7名）のインターンシップを実施した。なお、これに関連して、受け入れ期間における事前事後指導と報告会を実施した。

これらの活動は2008年度インターンシップ報告書としてまとめられ、教育支援室ホームページに掲載されるとともに、冊子として刊行された。ここには当該学生による報告、担当教員によるまとめ、受け入れ機関からのメッセージなどが、掲載されている。また前年度同様、シラバスに「インターンシップを含む科目」という頁を設け、学生への情報提供を行なった。

【2009年度】

2009年度も、シラバスに「インターンシップを含む科目」という頁を設け、学生への情報提供を行なったうえ、美術館、劇場、音楽ホールなどを受け入れ機関として、計7名のインターンシップを実施した。これらの活動については前年度同様の報告書を作成した。また、前年度のインターンシップ報告書（冊子）を教育支援室に配置する以外に、受け入れ先に配布して、広く活動を周知した。

（栗原麻子）

4-3. 学習相談室

学習相談室では、専修決定、履修方法、進路相談など学習上の悩みに対して、メールおよび教育支援室への来室に応じて、随時相談を受け付けている。相談件数は、2008年度は15件、2009年度は26件であり、増加傾向にある。

(栗原麻子)

5. 就職支援部門

5-1. 就職ガイダンス・就活サポート講座

2008年度は、これまでどおり就職ガイダンスと就活サポート講座（名称を従来の「就職対策講座」から変更）を開催した。就職ガイダンスのうち7月開催分は文学部同窓会との共催で、卒業生・修了生3名を講師とした職業生活・就職活動体験の紹介をおこなった。10月開催分は、就職情報会社担当者による就職活動全般の心構え、および内定取得学生による体験談の紹介をおこなった。就活サポート講座は、6月から12月まで合計5回開催し、就職の全般的状況、自己分析、企業研究、エントリーシート作成指導、面接対策指導をおこなった。参加者は各イベントとも20-50名であった。

2009年度は、就職支援活動全体の大幅な見直しをすすめ、これまでの就職ガイダンスを就活サポート講座と一本化し、また回数を削減した。これは、従来の方式には内容的な重複が多くみられるうえ、全学レベルでの就職支援事業が活発化するなかで、参加学生数が減ってきている現状に対応する措置である。その結果、6月から12月まで合計4回の講座を開催し、20-60名の参加者を得た。

なお、両年度を通じて、大学院学生に特化した就職支援について、部門内での議論を進めるとともに、他学部や他大学での取組みについて情報を収集し、また就職情報会社担当者とも検討を重ねた。しかし、大学院学生だけを対象にした就職支援事業の内容を明確化することはむずかしく、また多くの参加者を集められるという展望を得にくいのが現状である。



就活サポート講座ポスター(2008年度)

5-2. 企業セミナー

企業セミナーには、企業からの単体開催の申し入れがある場合、および当部門から参加依頼をおこなった複数の企業による合同開催の場合の2種類がある。前者は2008年度、2009年度とも2社から開催申し入れがあり、それぞれ約20名の参加者があった。両年度とも、セミナー開催企業へ就職した学生があり、実効性は高い。後者は、2008年度は12社の参加にたいして学生70名が集まり、2009年度は13社の参加にたいして40名が集まった。参加企業は以下のとおり。

【2008年度】アサヒビール、池田銀行、岡村製作所、大阪めいらく、阪急電鉄、トッパン・フォームズ、明治安田生命、日鉄日立システムエンジニアリング、読売新聞社、近畿日本ツーリスト、阪急阪神百貨店、新日本製鐵

【2009年度】アサヒビール、レンゴー、岡村製作所、大阪めいらく、阪急電鉄、大日本印刷、明治安田生命、住友倉庫、読売新聞社、ロイヤルホテル、三井住友カード、阪急阪神百貨店、新日本製鐵



合同企業セミナー(2009年度)

合同企業セミナーは兩年度とも 1 月開催であったが、参加学生人数には大きな開きがあった。背景には、内外の経済状況の急速な悪化にともなう学生の就職活動スケジュールの早期化のほか、全学レベルでの合同企業セミナーが頻繁に開催されることによる学生の参加動向の変化があったものと推定される。

5-3. 私立学校教職セミナー

2009 年度、主として大学院学生への就職支援を念頭に置いた事業として、私立学校教職セミナーを開催した。これは私立中高等学校の教員募集においては修士修了が要件とされつつある現実をふまえたもので、国語科・社会科・英語科の現任教諭を講師に招き、校風や採用方法の違いなどについて各校の現状を紹介してもらった。参加者は約 20 名であった。

5-4. 就職情報の提供と管理

2008 年度・2009 年度とも教育支援室において文学研究科・文学部に到着した求人票および求人票データベースを公開した。このデータベースを含め、インターネットを介しての就職情報収集などを支援するため、学生用の端末を 8 台設置し、自由な利用に供している。他方、学生の個別的な就職相談に専門的に応じるスタッフを配置できないという状況は従前どおりであり、そうしたリクエストをもつ学生にたいしては豊中学生センター就職相談室の利用を促している。

5-5. 就職関係図書の購入・管理

これまでどおり、就職活動関連の図書（会社四季報、各種マニュアル本、その他）、教員採用試験・公務員試験関連の雑誌、さらに日本経済新聞を購入し、学生の閲覧・貸出に供した。

5-6. 進路・就職(内定)状況調査

「学部卒業予定者・大学院修了予定者の進路・就職(内定)状況調査」に関しては、文学研究科・文学部では、10 月、12 月、2 月、4 月の 4 回にわたって調査結果を学生部に提出している。これは学生が提出する「進路・就職(内定)届」を集計した結果を報告しているものであるが、2009 年度にはとりわけ 10 月提出分について卒業論文・修士論文題目提出と同時に提出することを求めた結果、きわめて高い捕捉率を達成した。博士後期課程修了生の進路状況については、帰国する留学生なども含め、確認のむずかしいケースが多い。また、特任教員、特任研究員、非常勤講師、研究支援職員など、従来の調査カテゴリーでは十分に捕捉できない臨時的ポストに就くものも多く、データの取り方じたいを現実に即したものに改める必要がある。

なお、得られた就職実績データは、当部門主催の各種行事の告知とあわせ、教育支援室 HP 上に蓄積・公開している。
(三谷研爾)

6. 共通教育部門

本部門は、文学部より選出された大学教育実践センターの兼任教員 3 名で構成されている。そのうち 2 名は全学共通教育の企画運営を行う「共通教育実践部」に、また 1 名が大学教育全体の実践的研究を行う「教育実践研究部」に所属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。したがって教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討・運用することにある。

2008 年度・2009 年度ともに、年度当初に行われる文学部の「新入生ガイダンス」において、共通教育の履修について新入生に説明を行った。ガイダンスでは、例年、前期(1セメ)に履修登録を集中させる傾向にあり、そのため過剰な授業負担を抱え込む新入生が少なくないので、説明ではとくにその点について注意を促した。また文学部を始めとして、全部局を通じて近年深刻化してきているカンニングに対する罪の意識の低下に対処するため、実践センターでは不正行為に対して、理由の如何を問わず同一セメスターの全授業の単位を無効にしていることを説明した。なお「新入生ガイダンス」が短時間で終わることもあり、大学実践センターのガイダンス室などを通じて履修指導を受ける機会を設けた。

また現在、文学部は教養教育科目(基礎教養 1・現代教養・国際教養)だけでなく、専門基礎教育科目・基礎セミナー

に多くの開講科目を全学に提供しているが、2008年度・2009年度ともに、文学部の担当教員の了解のもとに、次年度のカリキュラムの策定をおこなった。具体的には、当初の予定に沿って、教養教育科目として総42セメ分の授業をすべて専任教員によって提供した。とくに昨年度までは教養教育科目には、非常勤講師による授業枠として20セメ分が文学部に配当されていたが、2008年度よりそれが基本的に全面廃止となった。このことによって文学部が全学に提供する教養教育科目および基礎セミナー科目の多様性や質を落とすことにならないように、新たに文学部に配属された旧外大教員が全員教養教育科目を負担する体制を取った。

さらに基礎セミナーとして計6科目を、専任教員が開講した。本セミナーでは、少人数による対話・報告を重視した参加型の演習や講義を実施し、さらにメールやWebCT等の活用によって、少人数教育・対話型教育・課題探究型教育すべてに配慮した、きめの細かい指導を引き続き行った。また専門基礎教育科目として合計25科目を、文学部を構成する20専修がそれぞれ提供するかたちで開講した。

このほか、共通教育の現行カリキュラムと学部のカリキュラムの連携を図るために、大学実践センターの部門長会議のメンバーと文学部を含む各学部の教務委員長との懇談会を8月に開催した。懇談会では、現在の共通教育の運用体制と併せて、来年度のカリキュラム編成の方針や新たに導入を目指している新型授業などについて説明し、それらに関して各学部のカリキュラムの現状を踏まえながら意見交換を行った。その際に、3・4年次における高度教養教育の導入について懇談した。そこで明かとなった各学部における専門教育カリキュラムの実状を踏まえつつ、高学年配当の教養教育科目について検討を進めた結果、来年度から、高学年に配当される教養科目として、ディベート型授業のほか、新たに3科目を開講することを決定した。また高学年次生が履修できる「文化系学生のための体験型自然科学実習」の設置に向け、数学・情報、物理、化学、生物、地学の教員からなるワーキング・グループを立ち上げ、そこでの検討を通じて理科系学生対象の実験とは異なるタイプの体験型学習の内容を具体的にまとめた。

なお2008年度・2009年度末には、同年度1学期の共通教育関係科目の成績分布表を回覧し、今後より良い成績評価を行うための資料提供を行った。

(荒川正晴)

7. 博物館実習

2008年度は大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館に、2009年度はさらに京都服飾文化財団にも実習生を受け入れていただいた。実習生の数は、2008年度が26名、2009年度が34名であった。両年度とも、実習前年の12月に実習履修予定者登録をおこない、実施年の4月、6月の2度のガイダンスで、事前指導ならびに最終的な実習館振分けをおこなった。また実習に前後して、博物館実習委員会メンバーが各館に挨拶ならびに御礼に赴いた。

国際連携室

組織・体制

室長1名、副室長1名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の4部門（各部門にチーフ1名を配置）、専門事務職員1名、および教務系の留学生担当職員により活動を行った。

「連携推進部門」は部局間協定、大学間協定の準備、締結等を行い、海外の大学との交流の活発化をめざす。「留学生受入部門」は留学生の受入れ、学習・生活支援を担当。「留学助成部門」は、グローニンゲン大学、マヒドン大学への夏期学生短期派遣、協定校への留学の助成を担当。2008年度より新たに設置した「エラスムス・ムンドゥス部門」は、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の域外協定校になったことに伴い、同プログラムに基づく、学生・教員の受入れ・派遣、英語授業カリキュラムの運営などを担当する。

室長および副室長は、文学研究科内の国際交流センターのセンター長および副センター長を兼務し、専門事務職員が中心となって留学生相談室としての役割を果たした。ただし、同センターはこれまでのように留学生の受入れ業務、学習・生活の相談のみでなく、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラムをはじめとする新たな協定などにより、海外研究

機関とのいっそう活発な学術交流に向けて、より高度な実務を担当するようになった。このような趨勢を受けて、2010年度より同センターに助教ポストを設置することになった。

活動状況

教授会開催日に定例の室会議を開催し、海外の大学との協定、留学生の受入れ、日本人学生の派遣など多方面にわたる国際連携関連業務を検討・実施した。必要に応じて、部門会議、チーフ会議を行なった。特に2008年度に新たに設置したエラスムス・ムンドゥス部門はほぼ定期的に部門会議を開催し、同プログラムの運営にあたった。

1. 通常業務

大使館推薦による国費外国人留学生の受入れ、国内採用による国費外国人留学生の受入れ、外国の奨学金による外国人留学生の受入れ、部局間協定外国人留学生の受入れ、OUSSEP 留学生の受入れ、部局分散短期留学生の受入れ、私費外国人留学生の入学試験（学部、学部研究生、大学院研究生）に関する業務、外国人招へい研究員の受入れおよび大阪大学招へい教授称号授与に関する業務、などはいずれも教授会審議に向けての提案事項となるため、関係事務担当者との連携のもと、室会議において資料の検討・審議を行なった。在籍している留学生への各種奨学金についても、担当部門において申請者の審査および推薦を行なった。

国際交流センターの機関紙として、Bulletin（室報）第57号、第58号（2008年度）、第59号、第60号（2009年度）、を発行。留学生が中心となって、メールマガジン『大阪大学大学院文学研究科～国際連携室便り～』（SOL Magazine）を編集・発行し、とりわけ留学生間のネットワークの構築に努めた。

2. 2008年度実績

2008年4月より、正式にエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の域外協定校となった。国際連携室に新たにエラスムス・ムンドゥス部門（EM部門）を設置し、学生の受入れ・派遣、教員の受入れ・派遣、「世界の中の現代日本」英語授業開講等のプログラム運営を担当した（本誌37頁、「1-6 エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム」の項を参照のこと）。

マンチェスター大学（イギリス）と部局間学生交換協定を締結するとともに、クィーンズランド大学（オーストラリア）、デュッセルドルフ大学（ドイツ）、シンガポール大学、韓国中央大学校、サンパウロ大学（ブラジル）との大学間協定締結に向けて準備を進めた。

他の文系部局と連携して、グローニンゲン大学（オランダ）およびマヒドン大学（タイ）への夏期学生短期派遣を実施した。

3. 2009年度実績

前年度と同様に、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の域外協定校として、EM部門が中心となって、学生および教員の受入れ・派遣、英語授業開講等のプログラム運営を担当した（本誌37頁、「1-6 エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム」の項を参照のこと）。

本年度において特筆すべきことは、マヒドン大学（タイ）を中心とする海外の日本語学習者を対象とした日本語超短期プログラムの準備を行なったことである。留学生受入部門内に同プログラム準備WGを設け、日本語教育の専門家を中心として「人文学のための日本語」の実施要綱およびカリキュラムを策定し、本学の認定プログラムとして認められた。またHP作成、ポスター・チラシ作成、担当教員の出張等により積極的な広報活動を行った。同プログラムは2010年度より実施。

クィーンズランド大学（オーストラリア）との大学間学術交流協定を本研究科が中心となって締結するとともに、パリ・ラ・ヴィレット建築エコールおよびフランス極東学院との部局間学術交流協定の期間を更新した。

マヒドン大学（タイ）への夏期学生短期派遣はインフルエンザの流行、政情不安などの理由により中止となったが、グローニンゲン大学（オランダ）への派遣は文系部局との連携によって実施した。

（和田章男）

国際交流センター(留学生相談室)

組織・体制

国際連携室併設の国際交流センターでは、センター長（国際連携室長による兼任）・副センター長（同副室長による兼任）以下、留学生専門教育教員 1 名と担当職員 1 名により、留学生および招へい研究員の学習・研究と生活の面をサポートすべく、教員ならびに事務部とともに、国際交流に関する業務を担当している。留学生専門教育教員は、論文作成法と日本語の授業を提供し、必要に応じて個人指導を行っている。また、担当職員は、留学生からの生活、学習・研究について様々な質問や相談の窓口となるほか、各種行事を実施し、教務係等と連携を図りながら、留学生受入れ・派遣に関わる事務業務を補佐し、在学生を対象とした留学制度についても、適宜情報を提供している。

活動状況

1. 留学生相談

留学生専門教育教員と担当職員による主な日常業務は、留学生の学習・研究および生活上の多様な相談への対応である。

学習・研究に関する相談や質問の項目は、大学院入試、学位論文、研究の方法、受講する授業内容や単位の取得、休学・退学・転学など、手続きや制度についての一般的な質問から、研究室の同輩・先輩へと照会すべき個別的な相談まで様々である。一方、生活に関わる相談は主に、奨学金の応募情報や宿舍の確保、在留資格の延長・変更手続きから生活用品の入手方法、医療機関の受診についてなどである。すべての質問・相談について即答・解決できるわけではないが、問題解決へ向けて必要な情報の提供に努めている。また、少数ではあるものの、進路や人間関係などについての相談が寄せられる場合については、状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口との連携を図りながら対応している。

文学部・文学研究科では、新規入学の留学生に同じ研究室の学生をチューターとして配置しており、留学生が日本での学生生活になじめるよう新規のチューターには説明会を実施している。くわえて、学位論文執筆者には、日本語の添削を目的とする論文添削チューターをつけている。また、貸し出し用ノートパソコンを常備しており、その台数を増やすとともに英語対応の機種も整備した。

2. 年間行事

留学生生活の充実を図るべく、1年を通じて以下の行事を催している。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション（4月、10月）
- ・チューター懇談会（5月、11月）
- ・新歓バス旅行（4月末から5月初旬、2008年度は若狭地方、2009年度は比叡山周辺）



2008年 バス旅行 そとも 蘇洞門めぐり



2009年 バス旅行 ガーデンミュージアム比叡



2008年 ことばの教室——中国語——

- ・ことばの教室（2008年度は中国語）
- ・日本の芸能鑑賞
- ・親睦パーティー（12月）



2008年 親睦パーティー



2009年 親睦パーティー

これらの行事には、留学生同士だけでなく、日本人学生や教職員との交流の場となるものもあり、学内での国際交流を深める機会となっている。

3. 教務関連業務

教務関連の業務としては、奨学金・寮・各種招待行事への応募案内、留学生向けの情報の配布・掲示、各種調査の回答、大学で提供される留学情報の周知を図るとともに、留学希望者からの問い合わせへの対応などを行っている。

4. その他の留学生支援

当センターは、留学生と学内の教職員ならびに学外者や留学生支援団体とを橋渡しする役割を果たしている。具体的には、留学生センターや事務局で実施・統括される日本語・英語プログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、海外留学オリエンテーションなどへの参加者を募る一方、留学生に学内外の催し物や課外活動に関する情報を提供し、参加申込みの窓口となっている。また、各種の調査研究や地域団体の企画への参加要請に応じて、留学生、在学生への紹介を行っている。

また、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラムや日本語超短期プログラムといった新たなプログラムについては、

教員・事務部と連携しつつ、その実施と策定について適宜補佐している。

5. 広報

文学研究科・文学部に関する留学交流・学術交流のおもな事項を記録し、広報することを目的として、年2回『室報』を刊行している。2008年度は57・58号、2009年度は59・60号を刊行した。

6. 留学生担当職員

留学交流に携わる学内の教職員で組織された「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」に参加している。よりよいサービス体制の構築を目指し、定例のミーティング（年4回開催）において留学生に関する情報の交換・共有を図り、必要に応じてネットワークを利用し、留学生から寄せられる質問・相談の解決に向けて協力している。

（西田充穂）

客員研究員の受け入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 外国人招へい研究員

2008年度の外国人招へい研究員は12名（新規4名、継続8名）。出身国の内訳は中国（7名）、韓国（4名）、タイ（1名）。受入れ分野は、日本語学（4名）、音楽学（2名）、日本文学（2名）、国語学（2名）、美術史学（2名）。2009年度の受入れは5名（新規3名、継続2名）。出身国は前年度と同様、中国（3名）、韓国（1名）、タイ（1名）の3カ国。受入れ分野についてもほぼ変わりはなく、国語学（2名）、音楽学（1名）、日本文学（1名）、美術史学（1名）。

2. 教員の海外研究活動

2008年度の外国出張は23カ国・地域へ延べ97名。前年度の105名からは微減。訪問国・地域の内訳は、中国22件、韓国18件、台湾15件、アメリカ8件、イギリス6件、オランダ6件、ポーランド6件、イタリア5件、オーストラリア4件、ドイツ4件、ロシア3件、オーストリア2件、スウェーデン2件、チェコ2件、ベトナム2件、フィリピン1件、デンマーク1件、ベルギー1件、アイルランド1件、ギリシア1件、ブルガリア1件、ブラジル1件、トルコ1件。海外研修は10カ国・地域へ24名。台湾8件、中国4件、韓国3件、インドネシア2件、ドイツ2件、イギリス1件、イタリア1件、オランダ1件、トルコ1件、ベトナム1件。

2009年度の外国出張は28カ国・地域へ97名。訪問国・地域の内訳は、韓国21件、中国16件、イギリス12件、アメリカ9件、マレーシア6件、オランダ4件、台湾4件、ドイツ4件、チェコ4件、ベトナム4件、イタリア2件、インド2件、オーストリア2件、フランス2件、アイルランド1件、イスラエル1件、オーストラリア1件、カナダ1件、カンボジア1件、ギリシア1件、スウェーデン1件、デンマーク1件、フィンランド1件、ベルギー1件、ポルトガル1件、スリランカ1件、タイ1件、トルコ1件。海外研修は11カ国・地域へ15名。韓国5件、フランス2件、中国2件、イギリス1件、タイ1件、台湾1件、ドイツ1件、ノルウェイ1件、ベトナム1件、フィンランド1件、ロシア1件。

留学状況および留学生の受け入れ状況

1. 留学状況

2008年度の留学派遣者数は、全30名（休学事由としての「留学」を含む）。交流協定による派遣は4名。14カ国・地域。中国5名（博士後期課程3年3名、博士前期課程2年2名）、イギリス4名（博士後期課程3年2名、博士前期課程2年2名）、アメリカ3名（博士後期課程3年3名）、ドイツ3名（博士後期課程3年2名、博士前期課程2年1名）、フランス3名（博士後期課程3年2名、学部4年1名）、ベルギー3名（博士後期課程3年2名、学部3年1名）、チェコ2名（博士後期課程3年1名、博士後期課程2年1名）、イタリア1名（博士後期課程3年）、オーストラリア1名（学部3年）、オーストリア1名（博士後期課程3年）、オランダ1名（博士前期課程2年）、スイス1名（博士後期課程3年）、タイ1名（博士後期課程3年）、ポーランド1名（博士後期課程3年）。

2009年度派遣者数は、35名（交流協定による派遣は8名）。16カ国・地域。フランス7名（博士後期課程3年4名、博士後期課程2年2名、博士前期課程2年1名）、アメリカ6名（博士後期課程3年2名、博士後期課程1年1名、博士前期課程1年2名、学部3年1名）、中国3名（博士後期課程3年1名、博士後期課程2年1名、博士後期課程1年1名）、イタリア2名（博士後期課程3年2名）、オランダ2名（博士前期課程2年2名）、ドイツ2名（博士後期課程2年1名、博士前期課程1年1名）、ベルギー2名（博士後期課程2年1名、学部4年1名）、イギリス1名（学部3年）、オーストラリア1名（博士前期課程2年）、スペイン1名（博士前期課程2年）、韓国1名（博士後期課程1年）、スウェーデン1名（学部4年）、タイ1名（博士後期課程3年）、台湾1名（博士前期課程2年）、チェコ1名（博士後期課程2

年)、フィリピン1名(博士前期課程1年)、留学機関未提出2名。

2. 留学生の受け入れ状況

韓国・中国・台湾からの留学生が圧倒的多数を占める傾向が続いている。

2008年度の受入れ留学生総数は138名(年間延べ数。男49名、女89名)、29カ国・地域からの留学生を受け入れた。在籍区分別では、博士後期課程54名(3年24名、2年17名、1年13名)、博士前期課程21名(2年11名、1年10名)、学部生5名(3年2名、2年1名、1年2名)、研究生26名(研究科15名、学部11名)、特別聴講学生32名(研究科8名、学部24名;交流協定による受入れは部局分散20名、OUSSEP7名、その他5名)。出身国・地域別の人数では、韓国44名を筆頭に、中国35名、台湾12名、アメリカ7名、タイ6名、イタリア3名、ドイツ3名、イギリス2名、スペイン2名、フランス2名、ラトビア2名、ルーマニア2名、ロシア2名、イスラエル、インド、インドネシア、エジプト、オランダ、グルジア、スウェーデン、スリランカ、スロベニア、チェコ、トルコ、日本、ニュージーランド、バングラデシュ、フィンランド、ポーランドから各1名ずつとなっている。

2009年度の受入れ留学生総数は125名(年間延べ数。男43名、女82名)、27カ国・地域からの留学生を受け入れた。在籍区分別では、博士後期課程は51名(3年32名、2年13名、1年6名)、博士前期課程19名(2年10名、1年9名)、文学部の在籍は8名(4年2名、3年1名、2年2名、1年3名)、研究生17名(研究科8名、学部9名)、特別聴講学生30名(研究科8名、学部22名;うち、交流協定による受入れは部局分散17名、OUSSEP8名、その他5名)。出身国・地域別の人数では、韓国42名、中国29名、台湾10名、タイ6名、アメリカ5名、イタリア、ドイツ、ロシアより各3名、インドネシア、カナダ、スペイン、フランス、ラトビアより各2名、アルゼンチン、イギリス、イスラエル、インド、エジプト、グルジア、スロベニア、トルコ、ニュージーランド、バングラデシュ、ブラジル、ポルトガル、ポーランド、ルーマニアからは各1名となっている。

留学生の博士学位取得

2008年度は、日本語学5名、音楽学1名の計6名が、2009年度は日本語学4名、美学・文芸学1名、国語学1名、中国文学1名、東洋史学1名、比較文学1名、演劇学1名、音楽学2名の計12名が博士(文学)の学位を取得した。

(和田章男)

ここ数年来変わらぬことであるが、文学研究科では、教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

* コメントは、原則として2008年度および2009年度のデータに関するものであるが、『年報2008』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。

1. 科学研究費

科学研究費の取得について件数、金額の増減をまずみておくことにしたい。ここには、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 2-5-1 取得された科学研究費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度
件数	64	64	66	70	89	92
増減	1.03	1.00	1.03	1.06	1.27	1.03
金額(千円)	120,920	152,020	163,860	175,630	182,820	157,090
増減	1.17	1.26	1.08	1.07	1.04	0.85
科研費予算総額(億円)	1,830	1,880	1,895	1,913	1,932	1,970
増減	1.04	1.03	1.01	1.01	1.00	1.01

2004年度、2005年度において横ばいであった科学研究費の取得件数は、2006年度から上昇に転じ、2009年度にかけてずっと増加している。2008年度までは、予算総額の増加率が伸び悩んでいる中で、本研究科において取得された科学研究費総額は増加していたが、2009年度に至って、取得金額は減少に転じた。しかしながら、全体としての文学研究科における件数の増加は、申請者の努力の反映であると考えられる。

表 2-5-2 取得された科研費の内訳

年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度
特定領域研究件数	0	2	2	2	3	3
同金額(千円)	0	9,200	9,100	9,000	18,200	16,900
基盤研究(A)	2	4	4	4	4	5
同金額(千円)	25,220	54,080	44,460	32,210	42,700	38,100
基盤研究(B)	13	15	18	17	18	14
同金額(千円)	47,000	49,000	68,290	80,180	63,500	44,400
基盤研究(C)	26	19	19	25	37	32
同金額(千円)	26,300	16,300	21,700	33,150	28,100	34,700

基盤研究(A)は、2005年度の取得数4件以上を引継ぎ、2009年度には5件に増加しており、高い水準を維持している。特定領域研究も2008年度以降3件へと増加し、同様の傾向にある。基盤研究(B)は、2009年度にかけて件数、金額とも

減少に転じた。しかし、基盤研究 (C) の場合、件数は減少したものの、2009 年度の金額ベースの総計では過去 6 年間で最高額となっている。

2. その他の外部資金

科学研究費以外の外部資金もひきつづき極めて重要である。COE プロジェクトに関しては、2006 年度に終了した「21 世紀 COE」に続き、2007 年度からは、「グローバル COE」(原則 5 年間) がスタートしており 2009 年度に 3 年目となった。その事務局は人間科学研究科に置かれているが、文学研究科から 8 名の教員 (他部局との兼任教員を含む) が「事業推進担当者」として参加している。また、研究拠点形成費等補助金など近年始まった助成金制度や、各種財団などからの奨学寄付金も積極的に申請・受給している。この中には大学院生が取得しているものもあり、その件数は増加傾向にある。さらに、2009 年度から開始された組織的な若手研究員等海外派遣プログラム (OVC) や優秀若手研究者海外派遣事業の二つについては、1 件ずつが採択されている。

種類	件数と金額	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度
21 世紀 COE	件数	1	1	1	—	—	—
	金額(千円)	110, 200	83, 600	76, 670	—	—	—
グローバル COE	件数	—	—	—	1	1	1
	金額(千円)	—	—	—	8, 830 ¹	4, 300 ¹	2, 400 ¹
組織的な若手研究員等海外派遣プログラム(OVC)	件数					—	1
	金額(千円)						877
優秀若手研究者海外派遣事業	件数					—	1
	金額(千円)						4, 722
研究拠点形成費等補助金(若手研究者養成費) ²	件数	—	1	1	0	—	—
	金額(千円)	—	7, 188	18, 792	0	—	—
研究拠点形成費等補助金(海外先進研究実践支援) ³	件数	2	2	2	2	1	—
	金額(千円)	865	7, 135	4, 153	5, 552	2, 620	—
研究拠点形成費等補助金(海外先進教育実践支援) ³	件数	0	0	0	1	—	—
	金額(千円)	0	0	0	10, 000	—	—
科学技術振興調整費	件数	0	0	0	0	—	—
	金額(千円)	0	0	0	0	—	—
各種財団などからの研究助成金	件数	4	8	4	9	7	8
	金額(千円)	3, 150	13, 358	8, 200	10, 270	11, 532	6, 663

¹ 文学研究科教員獲得分

² 「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

³ 大学教育の国際化推進プログラム

種類	件数と金額	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度
大学院生の獲得して いる研究助成金	件数	5	5	13	27	17	27
	金額	5,680 千円 25,000 USドル	3,360 千円 14,085 ユーロ	4,501 千円 49,417 USドル 15,590 ポンド 5,600 ユーロ 45,000 コルナ 45,000 デンマーク クローネ	9,331 千円 40,262 USドル 10,290 ユーロ 21,180 フラン 11,545 ポンド 18,463 ノルウェー クローネ 7,260 ズウォティ 135,000 コルナ	17,297 千円 13,000 USドル 10,920 フラン 5,220 ユーロ	21,145 千円 300,000 台湾ドル 3,900 ユーロ
受託研究	件数	2	2	3	2	2	1
	金額(千円)	9,251	10,701	15,450	10,950	10,976	2,200

概要

本研究科は、2007年8月より、人間科学研究科と共同でグローバル COE プログラムに取り組んでいる。概要は次の通りである。

- **プログラム名** 「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」(英語名: A Research Base for Conflict Studies in the Humanities)
- **担当部局** 人間科学研究科、文学研究科、コミュニケーションデザイン・センター、グローバルコラボレーション・センター
- **拠点リーダー** 小泉 潤二(大阪大学理事・副学長)
- **期間** 2007年8月採択(5カ年計画)
- **交付金額(文学研究科分)** 2008年度 4,300千円
2009年度 2,400千円

事業推進担当者(2008年度～2009年度)

小泉潤二(拠点リーダー、理事・副学長)、栗本英世(拠点サブリーダー兼事務局長、人間科学研究科)、工藤眞由美(文学研究科)、真田信治(文学研究科:2008年度まで)、渋谷勝己(文学研究科)、園府寺司(文学研究科)、伊東信宏(文学研究科)、三谷研爾(文学研究科)、富山一郎(文学研究科)、金水敏(文学研究科)、辻大介(人間科学研究科:2009年度より)、春日直樹(人間科学研究科)、中川敏(人間科学研究科)、池田光穂(コミュニケーションデザイン・センター)、志水宏吉(人間科学研究科)、厚東洋輔(人間科学研究科:2008年度まで)、ヴォルフガング・シュヴェントカー(人間科学研究科)、染田秀藤(人間科学研究科)、友枝敏雄(人間科学研究科)、牟田和恵(人間科学研究科:2009年度より)、中村安秀(人間科学研究科)、平沢安政(人間科学研究科)、峯陽一(人間科学研究科/グローバルコラボレーション・センター)、草郷孝好(人間科学研究科/グローバルコラボレーション・センター)、渥美公秀(人間科学研究科/コミュニケーションデザイン・センター)、鷺田清一(総長)、小林傳司(コミュニケーションデザイン・センター)、中岡成文(文学研究科)

プログラムの目標・活動方針

本拠点は、「グローバルな次元におけるコンフリクト」という問題について実践的研究を推進し優秀な人材を育成する。このため、人文科学の諸分野ばかりでなく、社会科学の一部分野を連結し協働することが必要である。中心となるのは人類学の諸分野(文化人類学、政治人類学、社会人類学、経済人類学、医療人類学)である。これに、言語学(社会言語学、言語接触論、言語類型論、歴史言語学)、哲学(とくに臨床哲学)、芸術学(とくに越境美術論)が中心的な役割を果たす。

グローバルな問題についてさらに広い基礎的展望を得るために、歴史学(植民地史)、社会思想史、社会学(グローバル研究)、科学技術社会論、現代文明学、文学(越境文学)が加わる。このほか、グローバルな取り組みにおける実践的分野として、国際協力学、多文化教育学、臨床教育学、人間開発学、地域共生論、人間の安全保障論を加えている。グローバルなコンフリクトという問題は、単に研究されるべき対象ではなく、研究と実践的取組みとの間に常に相互のフィードバックが形成されるべきである。

以上にあげた分野は多彩である一方、「グローバルな次元におけるコンフリクト」というテーマのもとに緊密に収斂している。

本プログラムは、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の成果に基づいて、大阪大学に「コンフリクトの人文学」の国際的な研究教育拠点を形成することを目的とする。この目的のために、前項で述べた人類学、

言語学、哲学などを中心とし、歴史学や社会学ほかの基礎的分野に加えて国際協力学、人間開発学、教育学、人間の安全保障論等の実践的分野が協働して、研究教育を推進する体制を構築する。

社会的・文化的・民族的な対立と対抗関係の問題を分析し、その問題になんらかのかたちで対処することは、現代のグローバル世界における最も緊要な課題の一つである。東西の冷戦構造が崩壊した 1990 年代以降、この課題は先鋭化すると同時に質的にも変化した。国家間、ブロック間、あるいは大イデオロギー間の比較的わかりやすい政治対立の図式から、きわめて多数の社会的・文化的・民族的集団が互いに複雑に絡まりあい、そこでは集団自身が急速に変化していくような流動的状况が生まれる中で、文化的、宗教的、社会的、経済的なレベルを含む様々な対立が様々に生起している。このように複雑化し流動化する対立の状況を理解するためには、現地調査に基づく綿密な、あるいは「厚い」(thick) 現実理解が必須であり、そのような対立を減じる方策があるとすれば、それはそのような理解を前提としなければならない。これが、クリフォード・ギアツの解釈人類学が教えるところである。

国家や社会や文化など、グローバル社会を構成する部分要素が相互の関係を緊密化したことにより、そうした関係の実態を研究者が分析することさえ困難であるような状況がもたらされている。そこに生起するコンフリクトの質も変化した。従来よく知られてきた政治的軍事的コンフリクトや経済利害をめぐるコンフリクトばかりでなく、それらに加えて、民族あるいはエスニックなコンフリクト、言語を基盤とするコンフリクト、芸術の所有や越境やアイデンティティに関するコンフリクト、各種イデオロギーのコンフリクト、宗教的信仰や実践に由来するコンフリクト、歴史あるいは歴史理解をめぐるコンフリクトなどが、現代世界の最前面でますます目立つようになっている。つまり「価値」をめぐるコンフリクトである。

この種のコンフリクトを理解し、それに対処する現実的方策を考えるためには、社会科学的あるいは政治経済的なアプローチに加えて、人文科学的なアプローチによる研究が必要であることが明らかになりつつある。そうした研究を展開できる拠点を、国際的な協力体制のもとに構築することが、本グローバル COE プログラムの目的である。

本拠点の研究上のアプローチは以下のような特徴を持つ。

1. 対立とコンフリクトの状況について個々の事例ごとに現実を経験的かつダイナミックに把握する。
2. 個別に生きる人びとの視点と実践を現在進行形の中で臨床的に捉える。そのためにフィールドワークに基づいて資料収集をはかる。
3. そうした資料に基づいて、分析のための概念装置の洗練と理論構築を進める。その際個別の学問分野に閉じることなく、関係しうる学問分野を広くリベラルに展望する。
4. 概念化と理論化は、欧米中心主義的な「歴史の終焉」や「文明の衝突」などに還元するのではなく、新しい枠組みによる。そうした枠組みを求めて、欧米や欧米外の研究者を含む国際的な協働を実現する。
5. そのような協働に基づいて、問題への実践的取り組み（対立やコンフリクトの解消ではなく軽減に向かうような現実的な取り組み）を、理解と対話の中に目指す。(プログラム HP : <http://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/about.html> より)

エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)

2008年4月より、正式にエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)の域外協定校となった。同プログラムは、欧州における高等教育機関の共同と流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパ域外の大学が参加することによって、より世界的な規模で展開する最先端教育プログラムである。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム域外協定校となった。国際連携室に新たにエラスムス・ムンドゥス部門(EM部門)を設置し、RA2名を受け入れ、プログラム運営を担当した(宿舍の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入等)。10月～12月の3ヶ月間同コンソーシアムの学生5名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業5科目(「現代日本文化論」「現代日本思想論」「現代日本文学論」「比較芸術論」「日本現代史」)を10回にわたって開講し、15ECTS(10単位相当)を認定した。同プログラム英語授業には他の留学生や日本人学生も参加させ、双方向的な授業を行うとともに、各授業においてフィールドワークを実施した。同時期にユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員1名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めた。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供したことにより、短期間にもかかわらず密度の高い教育効果があった。同プログラムの4校の域外協定校の中で最も高い評価を得た。また同プログラムに基づき、本学学生2名を奨学生としてユーロカルチャー・コンソーシアム大学に派遣するとともに、本学教員2名がそれぞれ2ヶ月の期間、同コンソーシアム大学で教育・研究に携わった。

2009年度もエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)の域外協定校として、ユーロカルチャー・コンソーシアム大学から5名の学生、および4名の教員の受入れ、本学学生2名および教員1名の派遣を実施した。本研究科で開講するエラスムス・ムンドゥス英語授業に関して、前年度と同様に「世界の中の現代日本」という総タイトルのもと、「比較芸術論」「比較社会環境論」「日本現代史」「現代日本思想論」「現代日本文学論」を開講。プログラム主催者および受講生の要望を踏まえ、ヨーロッパと日本の関係に力点を置くよう努めた。またユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科教員2名が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行うとともに、特に2011年度より実施予定のフェーズ2に向けての検討を行なった。

(和田章男)

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム

2009年度に本研究科が申請した「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」An overseas visiting program complex for multilingual and multicultural studies（略称：OVCプログラム）は、日本学術振興会の「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に採択され、平成22年2月11日から平成25年2月10日にかけての3年間で、総数約150名の若手研究者等（講師、助教、ポスドク、大学院生、学部学生）を、渡航費・滞在費を給付の上、調査・研究のため海外に派遣することとなった。

本プログラムは、異文化が混在し多文化化する現代世界において、真に国際的視野を有する若手研究者の育成を目的とし、世界の様々な国、地域で文献調査、フィールドワーク等を実施するとともに、国際的な学会・研究会等で成果を公表することをめざしている。

本プログラムは以下の3つの派遣タイプより構成されている。

- A. 横断的研究視察
- B. 共同プロジェクト
- C. 個人リサーチ

「横断的研究視察」は、海外での調査経験のない学部学生・博士前期課程（修士課程）在籍者を主な対象とし、各視察5名程度を募集する。平成22年度は、アメリカ議会図書館等視察、イギリス大英図書館・国立公文書館視察、平成23年度はフランス国立図書館、平成24年度は台北の中央研究院等の視察を予定している。1週間にわたって、教員の引率・指導のもとに、各図書館・資料館の概要・利用方法を学ぶとともに、参加者の研究テーマに基づき、資料調査を実践する。

「共同プロジェクト」は、引率教員の指導、および助教、ポスドクの補佐を受けつつ、海外の大学等と共同でワークショップ、インターンシップ、フィールドワーク等をおよそ1週間にわたって実施する。3年間で6つのプロジェクトを予定しており、成果を報告書として公開する。

「個人リサーチ」は、博士後期課程在籍学生、ポスドク、助教、講師を対象とし、海外研究機関等で研究・資料調査・フィールドワーク等を実施する。大学院生は15日間、ポスドク、助教、講師は60日間以上という日程で、毎年合計30名程度を派遣する予定である。国際学会等での成果発表をめざしている。

2009年度については、「個人リサーチ」派遣者第1号として、2月12日～4月14日の日程で、招へい研究員1名をアメリカ・カリフォルニア大学バークレー校に派遣した。

（和田章男）

1. 懐徳堂センターから懐徳堂研究センターへ

平成 11 年(1999)、大阪大学文学部は、附属施設として「懐徳堂センター」を開設した。文学部内に散在する貴重資料を集約し展示しようというのが主な目的であった。

しかし、展示のための適切なスペースが部内に得られなかったことから、このセンターは事実上、懐徳堂のデジタルコンテンツを展示解説し、懐徳堂研究の拠点として活動するという性格を色濃くしていくことになる。また、大阪大学の創立七十周年記念事業(2001 年)で制作された懐徳堂学舎の CG や貴重資料のデータベースが注目を集め、学内外からの取材を受ける機会が多くなった。また、大阪大学附属図書館からも、資料の調査・出納に関して協力を要請されることしばしばであった。そうした取材や調査に対応してきたのが、このセンターである。

こうしたセンターの実態を踏まえ、平成 21 年(2009)5 月、「懐徳堂センター」が改組され、新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

2. 懐徳堂研究センターの目的と業務

その目的を、センター規定はこう明記する。「懐徳堂研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懐徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。

その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懐徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成(デジタルコンテンツを含む)
- (2) 『懐徳堂研究』(年一回定期)、パンフレット、ニューズレター(不定期)等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懐徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懐徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懐徳堂関係資料の調査等の協力

このうち、(2)の『懐徳堂研究』は、旧来のセンターが刊行してきた『懐徳堂センター報』を継承しつつ、装いを新たに創刊することになったものである。『懐徳堂センター報』は、センターの活動報告と論考で構成されており、論考はいずれも学術的に高い価値を持つものであったが、「センター報」という名称が、広報誌や内部雑誌ではないのかという印象をも与えてきた。そこで、『懐徳堂研究』は「研究」を全面に押しだし、全国で唯一、懐徳堂の研究を専門に取り扱う学術雑誌として創刊されたのである。

また、懐徳堂研究センターの活動を紹介するための「ニューズレター」を編集し、第一号を平成 22 年(2010)2 月に刊行した。

3. デジタルコンテンツの制作

センターの活動を特徴づけるものの一つにデジタルコンテンツの制作がある。平成 20 年度(2008)~21 年度(2009)にかけては、次のようなコンテンツを制作し、懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)」に公開した。

- ・2009 年 4 月:「懐徳堂四書——『中庸』編——」……代表的な儒教經典「四書」に対する中井履軒の注釈書の内、『中庸逢原』を取り上げるもの。履軒の『中庸』研究の姿勢が分かるように、履軒が提唱した章立てと、『中庸章句』や『中庸懐徳堂定本』との異同が一目で分かるよう、章立てを一覧にした「対照表」を付している。
- ・2009 年 12 月:「天図シミュレーション」……中井履軒が作成した木製回転式の天体模型をデジタルコンテンツとしたもの。この資料は実際に動かしてみればじめてその価値が分かるが、今から二百年以上のものであるため、劣化が懸念される。そこでこのシミュレーションを作成した。インターネット上で、自動・手動で動かすことができる。これにより、この天図が、見かけ上は太陽中心でありながら、実際には地球を軸に全体が回転することが分かる。

- ・2010年3月：「懐徳堂四書——『孟子』編——」……中井履軒の著『孟子逢原』は、朱子の『孟子章句』をもとにした『孟子』の注釈書である。これをデジタルブックとして公開した。この『孟子逢原』は、Web上で、実際にページをめくるようにして全ページを閲覧できる。もちろん、デジタルコンテンツの特性を活かし、目次から該当章へのジャンプ、画面の拡大なども可能である。

4. 運営上の問題

懐徳堂センターは、当初、文学研究科全体の広報活動の拠点として設立された。しかし、2000年度までは、資料展示のスペースがまったく得られず、また、2001年度にセンター室が確保された後も、そうした目的を達成するためのスペースとしては狭隘であり、防音や遮光の問題、温度・湿度管理の問題なども残った。そのため、常設展示としては、懐徳堂関係資料を中心とし、かつデジタルコンテンツやパネル、レプリカなどを展示するに止まっている。

さらに、2004年度、大阪大学の法人化にともない、文学研究科内の業務組織が改編され、新たに、評価・広報室および研究推進室などが開設された。これにより、当初、懐徳堂センターに求められていた機能を、この内の評価・広報室が担うこととなり、懐徳堂センターはむしろ、懐徳堂の資料調査、電子情報化などを推進する拠点、というのがその実態となった。2005年度には、他の室とともに、委員会組織として再編され、委員長1名、委員2名、非常勤職員1名の体制となった。

そして、2009年5月に懐徳堂研究センターとして改組され、センター実務は、センター長、研究員、職員が担当し、中期計画・年度計画、予算・決算など基本的な運営に関わることは、運営委員会（運営委員長（研究推進室長兼務）、懐徳堂研究センター長、（財）懐徳堂記念会部内運営委員幹事1名）で検討することとなった。

こうして一応の態勢は整ったが、センター長・研究員は、いずれも文学研究科教員が兼務し、職員も非常勤であることから、上記のような膨大な業務を専任で担当する人員がいないという大きな問題を抱えている。

5. 附属図書館との関係

懐徳堂文庫資料は、現在、大阪大学図書館に収蔵されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしてきている。ただ本来、図書館が担うべき懐徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、ほとんど懐徳堂研究センターに委託されている。これは、図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがいないことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であると言える。

(湯浅邦弘)

活動の概要とその特色

2008年度・2009年度の専任スタッフは寺前直人助教の1名である。兼任として文学研究科の福永伸哉教授、高橋照彦准教授の2名が業務を担っている。

豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として遺跡台帳に登録されている。また、医学部や附属病院がかつて所在し、現在は大阪大学中之島センターがある大阪市北区中之島は、江戸時代の蔵屋敷が建ち並んだ場所として知られている。さらに2009年度には吹田キャンパスにおいて、遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることとなった。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が校地内遺跡の調査にあっている。

2008年度、2009年度においても吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修や新設が引き続き進行しており、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理事業をすすめ、その作業工程の一部を大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している。

現在の組織

教授 0(1) 准教授 0(1) 助教 1 (括弧内は兼任教員数)

教授：福永 伸哉(兼任)

准教授：高橋 照彦(兼任)

助教：寺前 直人

組織の活動

1. 発掘調査

2008・2009年度は、以下の埋蔵文化財発掘調査を実施した。

【2008年度】

- ・吹田地区
- 5月12日 文理融合型生命科学棟建設にともなう立会調査
- 1月23日 留学生会館埋設ガス管改修にともなう立会調査
- ・豊中地区
- 5月21日・22日 待兼山駐輪場外灯工事に伴う発掘調査
- 6月11日 ガス管改修に伴う立会調査(地点1)
- 8月27日 文法経棟本館改修に伴う立会調査
- 11月19日 基礎工学部カーポート建設に伴う立会調査
- 12月8日・2月2日 図書館本館改修工事に伴う立会調査
- 12月10日 ガス管改修に伴う立会調査(地点2)
- 12月11日 ガス管改修に伴う立会調査(地点3)
- 1月21日 東口整備にともなう発掘調査
- 2月5日 理学部中庭改修工事にともなう立会調査
- 2月12日 基礎工学部中庭改修工事にともなう立会調査

- 3月19日・31日 理学部本館渡廊下新営工事にともなう立会調査
・その他
1月14日 桜の町宿舍埋設ガス管改修にともなう立会調査

【2009年度】

- ・吹田地区
7月13日 ナノテク・イノベーション棟新営にともなう立会調査
7月23～29日 テクノアライアンス新棟にともなう試掘調査
9月8日 研究者宿泊施設新営にともなう立会調査
9月29日～10月30日 テクノアライアンス新棟にともなう発掘調査
・豊中地区
6月25日 学生会館改修にともなう立会調査
7月29日 中山池堤体等改修にともなう立会調査(1)
8月3日 文法経本館等改修にともなう立会調査
8月3日 共通教育自然科学棟改修にともなう立会調査
8月15日 文法経本館等改修にともなう立会調査
8月17日 中山池堤体等改修にともなう立会調査(2)
9月8日 中山池堤体等改修にともなう立会調査(3)
9月10日 保険センター増築その他にともなう立会調査
9月14日 理学部改修にともなう立会調査
9月16日 大高の森モニュメント新営にともなう立会調査
9月24日 国際交流会館改修にともなう立会調査(1)
10月5日 国際交流会館改修にともなう立会調査(2)
10月19日 国際交流会館改修にともなう立会調査(3)
12月7日 実践センターポール新営にともなう立会調査
1月21日 ガス改修(浪校庭園横)にともなう立会調査
2月14日 基礎工前水道管改修にともなう立会調査
2月16日 ガス管改修(共通教育)にともなう立会調査
2月19日 ガス管改修(中山池北)にともなう立会調査
3月16日 ガス管改修(Dondon 横)にともなう立会調査

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2009年度】

- 国立民俗博物館平成21年度博物館学習中コース研修の案内(寺前)
大阪大学総合学術博物館サイエンス・カフェ講師担当(寺前)

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。また、調査成果を積極的に公開し、地域社会への還元をめざす。

大阪大学豊中地区に所在する待兼山遺跡は、弥生時代から歴史時代までの遺構や遺物が確認されており、これまでに多数の埋蔵文化財が出土している。すでに、これらの発掘成果については、現地説明会の実施と発見された遺構の説明板と地表表示を現地に設置し、2007年度からは総合学術博物館の常設展示において出土品を常時公開することにより、大阪大学関係者のみならず、地域住民に広く公開している。しかし、発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多い。今後の調査や整理作業では、これらを学術的に解明したうえで、その成果に基づき、地域の歴史を復

元することに努めたい。また、吹田地区に所在する山田丘遺跡の全貌を把握していくことも今後の課題である。2009年度の山田丘遺跡の発見により、埋蔵文化財調査室は豊中地区、吹田地区という二つのキャンパスにおける開発にともなう立会、試掘等に対応する必要が生じている。このような調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務となっている。

大阪大学総合学術博物館や地域の文化財関係者と密接に連携した普及、啓蒙活動をさらに進めていく予定である。

(寺前直人)

組織・体制

研究科長直属の委員会として設置。委員は、委員長 1 名を除く全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント問題にかかわる相談に当たる。必要に応じ、全学セクシュアル・ハラスメント相談室と連携をとる場合もある。

2008 年度：委員会メンバー11名(女性6名、男性5名)。

2009 年度：委員会メンバー11名(女性6名、男性5名)。退職にともない、一部委員が交代。

活動状況**2008 年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」とストップ・セクシュアル・ハラスメントシールを新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのセクシュアル・ハラスメント防止対策説明会を開催。講師：中嶋雅美さん(大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室専門相談員) 演題：「あなたがセクシュアル・ハラスメントに接したとき」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットおよびシールを学生に配布。(4月)
4. セクシュアル・ハラスメント相談員研修会(全学)へ参加。(7月)
5. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第14回全国集会(関西大学で開催)に、研修のため委員10名が参加。(9月)
6. 教職員向け研修会を開催。講師：横山美栄子さん(広島大学ハラスメント相談室教授) 演題：「キャンパス・ハラスメント 対策の現状と課題 ——広島大学ハラスメント相談室の取り組み——」(1月)
7. 参考用図書を選定・購入し、学習支援室に配備。(2009年3月)
8. 新しいパンフレット「セクハラはやめよう!! やめよう・とめよう セクシュアル・ハラスメント」(いわゆる性的マイノリティへの言及を加えるなど、大幅に改訂)を作成。(3月)。
9. 年間相談・対処件数は2件。

2009 年度実績

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。新しいパンフレット「セクハラはやめよう!! やめよう・とめよう セクシュアル・ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのセクシュアル・ハラスメント防止対策説明会を開催。講師：中嶋雅美さん(大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室専門相談員) 演題：「知っているようで知らないセクシュアル・ハラスメント」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、セクシュアル・ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットおよびマグネットを学生に配布。(4月)
4. ストップ・セクハラ・マグネットを作成、配布。(5月)
5. セクシュアル・ハラスメント相談員研修会(全学)へ参加。(7月)
6. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第15回全国集会(慶應大学で開催)に、研修のため委員2名が参加。(9月)
7. 教職員向け研修会を開催。講師：中野冬美さん(大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室・専門相談員) 演題：「セクシュアル・ハラスメントを防止するために——大阪大学の現状と対策——」(11月)
8. パンフレット「セクハラはやめよう!! やめよう・とめようセクシュアル・ハラスメント」改訂版を作成。(3月)
9. 年間相談・対処件数は3件。(舟場保之)

人文科学の新しい動向を取り入れた研究教育の推進によって既存専攻のそれを補完すること、人文科学の高度な知見を有し、外国語の運用能力に優れた高度専門職業人を養成することを設立目的として、2007年10月に文化動態論専攻（修士課程、学生定員19名）が、大阪外国語大学からの12名と既存専攻からの7名、合わせて19名の教員で共生文明論、アート・メディア論、文学環境論、言語生態論の4講座＝コースによってスタートした。その後の教員の異動を示すと、共生文明論では、2007年10月より副学長となった武田佐知子教授の業務を補完するため、2008年4月に任期制教員として着任した山内晋次准教授が2009年4月に神戸女子大学に転出し、替わって同年8月に伊川健二准教授が着任した。10月には任期を終えた武田教授が復帰した。アート・メディア論では、2010年3月に藤村昌昭教授が逝去し、後任教員が選考中である。文学環境論では、2008年10月に米井力也教授が逝去し、2009年10月に清水康次教授が着任した。2010年3月末に玉井暲教授が定年で退職した。スタートからあまり間もない時期に2名の教員が逝去したのは大変な痛手であったが、新たなスタッフを迎えて設立目的を遂行しつつあるところである。なお教員の大部分が既存専攻の兼務教員として、その諸分野の強化に携わり、また大阪外国語大学からの移籍教員は箕面キャンパスで外国語学部の授業をも担当している。その貢献と労は多とされるべきであろう。

すでに2008年度、2009年度と2回にわたり新入の大学院学生を迎え入れてきた。コース毎の各年度新入学生数を順に示すと、共生文明論（7名（うち社会人1名）、2名）、アート・メディア論（5名（うち社会人1名）、10名（うち社会人1名））、文学環境論（4名（うち社会人1名）、別に留学生研究生1名）、4名（うち留学生2名）、言語生態論（5名、2名）であった。初年度は合計21名、その後は18名と推移しており、定員を満たして専攻設置の意義を示すためにも、さらに専攻の魅力を広くアピールすることが求められよう。

一方、2010年3月には専攻で初めての修士課程修了者を送り出した。コース毎の人数は次の通りである。共生文明論1名、アート・メディア論3名、文学環境論2名、言語生態論5名。進路は、中学校・高等学校教員、海外日本語教師、ゲームソフト制作会社、国立大学法人職員、地方公務員、地方自治体嘱託職員、博士後期課程進学2名、家業継承などである。高度専門職業人の養成を掲げる本専攻の特色が出ていると言えよう。2年間のストレートで修了した者の数は全体としてはあまり多くない。その原因・背景として、例えば仕事をもちつつ勉学する学生にとって、単位修得と修士論文・研究の完成を2年間でやりおえるのは時間的に難しいことも考えられる。こうしたケースを想定して長期履修制度が設けられており、制度を利用している学生が複数いることは注意すべきである。現状をふまえて、修了にむけてのサポートのあり方を専攻としても考える必要が出てきていると思われる。

在籍学生の雰囲気はきわめて活発である。改装工事を経て、より快適なスペースとなった文法経本館の各コースの研究室は、学生の学習・研究の場として有効に機能していると考えられる。2010年3月には、学生が企画して初の修了生の予饗会を行うなど、専攻全体としてのまとまりも見られる。各コースのホームページも学生の参画を得て整備されつつある。学生たちは各々の勉学・研究のために、既設専攻の授業も受講するとともに、その所属の大学院学生との交流を行っている。こうした積極性は歓迎される場所である。なお各コース研究室に隣接して設けられている文化動態論資料室／共同研究室も事務補佐員による業務補助を受けて、教員の教育・研究活動、学生の研究活動に大いに役立っている。なお2010年3月に大阪外国語大学からの異動教員の個人研究室が箕面キャンパスから、豊中キャンパスの文系総合研究棟に移転した。

新専攻の課題であった中学・高校専修免許（英語）、中学・高校専修免許（国語）、中学専修免許（社会）、高校専修免許（地理歴史）についての教職課程申請が認められた。高度専門職業人の一つである教員を志望する学生に、この利便を大いに利用してほしいと願っている。専攻の研究成果を発表する媒体として分冊が与えられた『待兼山論叢』文化動態論篇もすでに2008年度、2009年度の2冊が刊行され、2010年度刊行に向けての準備も行われている。最初は教員による執筆のみであったが、2009年度は在籍学生による2本が発表された。修士課程在籍学生の論考の発表は、担当教員の積極的な指導が必要となるだろうが、こうした動きが今後も続けられることが望まれるだろう。

（堤一昭）

第 2 部

各専門分野における

教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I. 現在の組織については、2010年4月1日を基準とし、この時点での教員および在学生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2008年度(2009年3月修了・卒業)および2009年度(2010年3月修了・卒業)について記す。
- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2008年度～2009年度に在籍した者が、2008年度～2009年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2008年度～2009年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。
- III. 教員の研究活動については、原則として2010年4月1日現在各専門分野に属している現員のもの示す。研究業績については2008年度～2009年度に発表されたものを記載する。2008年度～2009年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2008年度～2009年度にかぎらず記載する。
- IV. 教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2010年4月1日現在各専門分野に属している現員が代表者になっているもので、2008年度～2009年度の間に配分を受けたものを記す。
- V. 教員による学会役員等の引きうけ状況については、2010年4月1日現在各専門分野に属している現員が、2008年度～2009年度の間に引きうけ、あるいは遂行した任務に関して記す。

2-1 哲学 哲学史

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：上野 修、入江 幸男

准教授：舟場 保之

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24 (哲学・思想 文化学)	6	7	0	0	0	2	1	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	10 (哲学・思想文化学)	2	0	2	1
'09	2 (哲学・思想文化学)	3	0	0	0
小計	12 (哲学・思想文化学)	5	0	2	1

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎ゼミを行う。/専修決定の期間に、専修独自のガイダンスを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録を HP

にアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフュシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/大学院留学生在が TA として、英語によるディスカッション能力向上に向けて、有志の院生および学部生に対して指導を行う。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 4 号、第 5 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフュシカ』第 39 号、第 40 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会をそれぞれの年度内に 2 回程度、計 4 回程度行う。/現代思想文化学専門分野との共同で、外国人哲学研究者を招聘し、講演会を開催するとともに、スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、開局された HP 上の<ラジオ・メタフュシカ>から、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に市民向けの記念講演会を実施する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎ゼミを開講し、専修独自のガイダンスを行うことにより、専修生の数を増やすことに成功した。/英語による授業を複数開講するとともに、大学院留学生在を TA として学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/当専修に新しく加わった学部生と院生を歓迎して、哲学のお題セミナー(2008 年 4 月 18 日、大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 17 名)、*Philosophical Fishbowl* セミナー(2009 年 4 月 16 日、大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 14 名)を行った。目標は達成されたと考える。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 4 号、第 5 号を刊行し、海外主要大学(16ヶ国、217 校。個人宛を含む)および国内主要大学(164 校)に送付した。また、現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフュシカ』第 39 号、第 40 号を発刊し、国内主要大学(164 校)に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。この 2 年間に外国人研究者を招いた *handai metaphysica* 特別講演会を 6 回、また *handai metaphysica* 定例会を 5 回開催した。また学内共同研究(スピノザ研究企画)として、学外の研究者も交えたワークショップを 6 回開催した。また 3 人のスタッフが延べ 5 回国際学会で発表し、また院生の 1 人が国際学会で発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された<ラジオ・メタフュシカ>から、各スタッフの授業紹介等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、哲学市民講座開催の準備を兼ね、11 月の世界哲学の日記念企画として市民向けの講演会を 2 回開催した。また、現代思想文化学専門分野との共同で、公開シンポジウムを 1 回開催し大変好評であった。目標は、ほぼ達成されたと考える。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また積極的な研究会の開催でも目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	2	0	2
'09	0	0	0
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

平光哲朗 「持続としてのイマージュ——ベルクソンの哲学における持続の現実的多様性について——」 2009/3

主査：上野修 副査：望月太郎、須藤訓任、檜垣立哉

前田直哉 「フッサール最晩年の思想——世代発生的問題と現象学の自己批判——」 2009/3

主査：入江幸男 副査：浜渦辰二、舟場保之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	2(2)	1(1)	0(0)	3(3)
'09	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	2(2)	1(1)	0(0)	3(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	1	0	0	0	0	1
'09	0	0	1	0	0	1
計	1	0	1	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

津崎良典「デカルト『方法序説』第二部における 方法と徳について」『哲學』第 59 号, 日本哲学会, pp. 211-226, 2008/5
富岡基子「魂の立ち位置——デカルトにおける内的情動の只中で——」『待兼山論叢』第 42 号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-31, 2008/12

Luke Malik, 'Two Ways To Reject Kripke's Modal Argument: Absurdity, and The primitiveness of the Person' 『メタフュシカ』第 39 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.59-57, 2008/12

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

Luke Malik, "Kripke's Modal Argument and Practical Relevance" 第二十二回世界哲学会 The XXII World Congress of Philosophy, ソウル国立大学, 2008/8/3

【2009年度】

〔博士後期〕

野々村梓「デカルト『省察』における心身合一の証明について」京都哲学史研究会, 京大会館/京都, 2009/11/28

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士後期〕

津崎良典(翻訳)「フランス大学評価 国家委員会(CNE)の活動——事務官ピエール・クロー氏に聞く」『現代社会と大学評価』第 4 号, 大学評価学会, pp. 206-246, 2008/5

【2009年度】

〔博士後期〕

多田雅彦(文献紹介)「ジェイムズ・ウィリアムズ著『ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』』(未邦訳) James Williams, *Gilles Deleuze's Logic of Sense: A Critical Introduction and Guide*, Edinburgh University Press, 2008」『メタフュシカ』第 40 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 125-130, 2009/12

野々村梓(文献紹介)「デカルトと人間本性の形而上学 Justin Skirry: *Descartes and the Metaphysics of Human Nature, continuum*, 2005」『メタフュシカ』第 40 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.117-123, 2009/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:3名 (計3名)

2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2008年度:4名 2009年度:0名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 2名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2008年度:0名 2009年度:1名

9. 刊行物

2008年度 『メタフュシカ』第39号、*Philosophia OSAKA*, No. 4

2009年度 『メタフュシカ』第40号、*Philosophia OSAKA*, No. 5

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

スピノザ協会事務局 2007年4月～現在に至る

関西哲学会事務局 2008年1月～現在に至る

公開シンポジウム「〈私〉とは何か——永井均に聞く」(現代思想文化学専門分野と共催) 2009年3月7日
於:大阪大学21世紀懐徳堂、出席者約100名

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第8回 handai metaphysica 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2008年8月4日

「トマスアキナスの存在の思想について」発表者:上枝美典(福岡大学・教授)

於:大阪大学・待兼山会館2F会議室、参加者23名。

第9回 handai metaphysica 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2009年3月23日

「製作と実践の共働と分離——ハイデガーの前期著作におけるアリストテレスの影響——」発表者:安里淳(現代思想文化学・博士後期課程)

「哲学は俗言を斥けなければならない」発表者:舟場保之(哲学哲学史・准教授)

於:大阪大学総合学術博物館3F待兼山修学館セミナー室、参加者23名。

第10回 handai metaphysica 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2009年7月31日

- 「いわゆる『ソクラテス問題』とプラトン」 発表者：山口義久(大阪府立大学・教授)
 於：大阪大学文学部本館 2F 大会議室、参加者 20 名。
- 第 11 回 handai metaphysica 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2009 年 12 月 11 日
 「言語が変化するという事はどうして可能なのだろうか」 発表者：飯田隆(慶應義塾大学・教授)
 於：大阪大学豊中キャンパス 教育研究棟 I(旧自然科学棟)、ステューデント・コモンズ 2F セミナー室、参加者 34 名。
- 第 12 回 handai metaphysica 研究例会(現代思想文化学専門分野と共催) 2010 年 3 月 15 日
 「アポロンとソクラテス——『悲劇の誕生』の歴史哲学再考——」 発表者：竹内綱史(龍谷大学・専任講師)
 「知識の懐疑論——ウィトゲンシュタインとデカルトの対立——」 発表者：重田謙(哲学哲学史・助教)
 於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 21 名。
- 第 6 回 handai metaphysica 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2008 年 7 月 11 日
 „Weltweiter Frieden durch eine Weltrepublik? Probleme internationaler Friedenssicherung“
 発表者：Matthias Lutz-Bachmann (Johann Wolfgang Goethe Universität, Germany)
 於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 26 名。
- 第 7 回 handai metaphysica 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2008 年 12 月 12 日
 「自己知をめぐる最近の議論から」 発表者：大庭健(専修大学・教授)
 於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 29 名。
- 第 8 回 handai metaphysica 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2009 年 5 月 26 日
 “Wittgenstein: The Rule – Following Argument”, “Thinking Critically as an Examination of Thoughts”
 発表者：Kanit (Mitinungwong) Sirichan (Chulalongkorn University, Thailand)
 於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 21 名。
- 第 9 回 handai metaphysica 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2009 年 7 月 7 日
 “J.S. Mill's Radical Feminism in The Subjection of Women”.
 発表者：Prof. Dr. Supakwadee Amatayakul (Chulalongkorn University, Thailand)
 “Philosophical Practice: Theory and Practice of an Emerging Paradigm”.
 発表者：Prof. Dr. Peter Harteloh (Holland)
 於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 13 名。
- 第 10 回 handai metaphysica 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2009 年 12 月 5 日
 “From the Continent of Outflow to the Continent of Inflow” . 「流出の大陸から流入の大陸へ」
 発表者:Marcin Galent(マルチン・ガレント), Ph.D.(Institute of European Studies, Jagiellonian University, Krakow)
 (ヤゲロニア大学 ヨーロッパ学研究所、クラクフ)
 “Religion, History, and Culture in the Czeck Rep.” 「チェコ共和国における宗教・歴史・文化」
 発表者：Martin Elbel(マルチン・エルベル), Ph.D.(Palacy University, Olmouc)(オルモウツ大学)
 於：大阪大学文学部本館 2F 大会議室、参加者 12 名。
- 第 11 回 handai metaphysica 特別講演会(現代思想文化学専門分野と共催) 2010 年 3 月 2 日
 “Ein Plädoyer für die Transzendentalpragmatik. Was ist Transzendentalpragmatik?” 「超越論的語用論の擁護——超越論的語用論とは何か——」
 発表者:Wolfgang Kuhlmann(ヴォルフガング・クールマン)、Ph.D.(Rheinisch-Westfaelische Technische Hochschule Aachen)(アーヘン工科大学、アーヘン)
 於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 16 名。
- 哲学のお題セミナー(現代思想文化学専門分野と共催) 2008 年 4 月 18 日
 於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 17 名。
- フィロソフィカル・トーキング・セミナー(現代思想文化学専門分野と共催) 2008 年 11 月 20 日
 於：川西市生涯学習センター、参加者 35 名。
- Philosophical Fishbowl セミナー(現代思想文化学専門分野と共催) 2009 年 4 月 16 日

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 14 名。

2009 年世界哲学の日記念講演会(現代思想文化学専門分野と共催)

2009 年 11 月 19 日

「魔術と近世ヨーロッパにおける科学の誕生」

提題者：Martin Elbel(マルチン・エルベル), Ph.D.(Palacy University, Olmouc)(オルモウツ大学)

ファシリテーター：中村征樹(大阪大学大学教育実践センター准教授)

於：大阪大学豊中キャンパス 教育研究棟 I(旧自然科学棟)、ステューデント・コモンズ 1F セミナー室、参加者 33 名。

映画「哲学への権利——国際哲学コレージュの軌跡」上映・討論会

2010 年 2 月 7 日

於：教育研究棟 I・開放型セミナー室、参加者約 60 名。

平成 20-21 年度大阪大学文学研究科共同研究「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」の企画として以下のワークショップと研究会を行った。

1. ワークショップ(共同研究に向けての共同討議)

2008年10月11日

スタッフの一人が発表

場所：大阪大学待兼山会館1F 特別室にて

2. スピノザ協会との共催講演会

2009年1月24日

提題者：須藤訓任「必然性の憑依——スピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ」

場所：待兼山修学館セミナー室にて

3. ワークショップ(提題発表と集中討議)

2008年11月29日

提題者：栗原隆「受容と変容——実体が主語だと見做される理路を経てこそ、実体が主体になる現場」

場所：大阪大学待兼山会館1F 特別室にて

4. ワークショップ

2009 年 11 月 28 日

提題発表：上野修「スピノザとライブニッツにおける現実概念」

場所：大阪大学文学部本館 2 階会議室

5. 研究会 1 ドイツ観念論とスピノザ(日本フィヒテ協会との共催)

2010 年 1 月 30 日

発表：入江幸男「フィヒテのスピノザ批判」

提題発表：加藤泰史「カントと超越論的観念論の問題——カントとスピノザへの予備的考察——」

場所：大阪大学待兼山会館 2 階会議室

6. 研究会 2 汎神論論争のスピノザ(スピノザ協会との共催)

2010 年 2 月 27 日

提題発表：後藤正英「スピノザ『神学政治論』からメンデルスゾーン『エルサレム』へ」

提題発表：平尾昌宏「メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈」

場所：大阪大学待兼山待兼山修学館(大阪大学総合学術博物館 3 階)

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 上野 修 教授

1951年生。1982年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004年4月から現職。専攻：哲学哲学史。

1-1. 論文

Ueno, Osamu, "Spinoza on Miracles and Superstition", *Philosophia OSAKA*, 5, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture//Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 67-78, 2010/3

上野修「スピノザの群集概念にみる転覆性について」『思想』1024, pp. 102-116, 2009/8

上野修「ネグリのスピノザ解釈」『情況』3-86, 情況出版, pp. 164-170, 2009/7

上野修「ライブニッツとスピノザ——現実性をめぐって——」『哲学の探究』(哲学若手研究者フォーラム), 36, 哲学若手研究者フォーラム, pp. 5-21, 2009/5

Ueno, Osamu, "The Social Contract in Spinoza's *Tractatus Theologico-Politicus*", *Philosophia OSAKA*, 4, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture//Graduate School of Letters, Osaka University, pp.55-67, 2009/3
上野修 「ホイエルをめぐる三人の人物とスピノザ」『スピノザーナ』9, pp.76-82, 2008/9

1-2. 著書

上野修他(共著)『哲学の歴史 別巻 哲学と哲学史』中央公論新社, p. 469, 2008/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修(書評)「(書評)福岡安都子『国家・教会・自由——スピノザとホッブズの旧約テキスト解釈をめぐる対抗』」『法制史研究』59, 法制史学会, pp. 384-388, 2010/3

上野修(書評)「(書評)アントニオ・ネグリ著、杉村昌昭・信友建志訳『野生のアノマリー——スピノザにおける力能と権力』」『図書新聞』2904, 図書新聞, 2009/2

Ueno, Osamu(書評), "Osamu Ueno on Balibar: *Spinoza: From Individuality to Transindividuality*"(eds.), *Studia Spinozana*, 16, pp. 278-280, 2008/12

1-4. 口頭発表

上野修 「現実指標としての〈私〉——永井均『私・今・そして神』講談社現代新書、2004 を中心に——」科研シンポジウム 〈私〉とは何か——永井均に聞く、〈私〉の言語論的存立構造の哲学的研究(平成19～20年度科研基盤研究(C)), 大阪大学21世紀懐徳堂, 2009/3

上野修 「ライブニッツとスピノザ——現実性をめぐって——」2008 年度哲学若手研究者フォーラム・テーマレクチャー:スピノザとライブニッツ, 哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2008/7(『哲学の探究』35, pp. 139-141, 2008/5)

上野修 「スピノザと心理学——彼らは身体に何ができるか知らない」, 日本認知科学会分科会「教育環境のデザイン」, 慶応義塾大学三田キャンパス, 2008/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

ICU 哲学研究会・運営委員	2010 年 4 月～現在に至る
日本哲学会・編集委員	2009 年 7 月～現在に至る
関西哲学会・委員	2007 年 10 月～現在に至る
スピノザ協会・運営委員	2006 年 3 月～現在に至る

2. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻:哲学哲学史。

2-1. 論文

Irie, Yukio, “Question-Answer Contradiction” *Philosophia Osaka*, 5, Philosophy and History of Philosophy/ Studies on Modern Thought and Culture, Graduate School of Letters Osaka University, pp. 79-87, 2010/3

Irie, Yukio, “A Proof of Collingwood’s Thesis” *Philosophia Osaka*, 4, Philosophy and History of Philosophy/ Studies on Modern Thought and Culture, Graduate School of Letters Osaka University, pp. 69-83, 2009/3

入江幸男 『意識の事実』(1810)における諸自我と普遍的思考』『フイヒテ研究』(日本フイヒテ協会), 16, pp. 2-19, 2008/11

2-2. 著書

入江幸男, 寄川条路他(共著) 『グローバルエシックス』ミネルヴァ書房, pp. 151-176, 2009/9

入江幸男(単著) 科研報告書『分析哲学とフイヒテ哲学』(課題研究番号 19520021), 92p., 2010/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入江幸男(書評) 「Tom Rockmore; *Hegel, Idealism, Analytic Philosophy*」『フイヒテ研究』(日本フイヒテ協会), 16, 日本フイヒテ協会, pp. 123-132, 2008/11

2-4. 口頭発表

入江幸男 「フイヒテのスピノザ批判」「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」研究会:ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ, 「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」研究会, 大阪大学, 2010/1

Irie, Yukio, “Die Moeglichkeit des kollektiven Wissens bei Fichte” The VII International Fichte Kongress: Schelling und Fichte, International Fichte Association, The Royal Academie of Bergium, 2009/10

入江幸男 「内在的基礎付け主義とドイツ観念論」日本ヘーゲル学会大会シンポジウム:ドイツ観念論とポスト分析哲学, 日本ヘーゲル学会大会, 東北大学, 2009/6

Irie, Yukio, “‘Our’ Practical Knowledge” The XXII World Congress of Philosophy: Rethinking Philosophy Today, International Federation of Philosophical Societies, Seoul National University, 2008/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第一回フイヒテ協会研究奨励賞(日本フイヒテ協会)受賞, 1995/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号: 19520021

研究題目: 分析哲学とフイヒテ哲学

研究経費: 2008年度 直接経費 300,000円 間接経費 90,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究の目的は、現代英米の分析哲学の知見を組み入れることによって、ドイツ観念論とりわけフイヒテ哲学の再解釈を行い、現代的な意義を解明することである。本年度は、具体的には、次ぎの3つの課題に取り組んだ。①アメリカにおける近年のドイツ観念論研究の状況を知るために、Rockmore教授の“Hegel, Idealism, Analytic Philosophy”を精読し、成果を書評にまとめて公表した。②フイヒテの「普遍的思考」ないし「我々」の議論を、現代哲学における共有知と結びつけて考察した。③フイヒテの観念論の基礎にあるのは、「知的直観」である。この概念と分析哲学の関連を調べる中で、現代アメリカの哲学者Bonjourの内在的基礎付け主義とフイヒテの関連を検討した。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員	2004年11月～現在に至る
日本フヒテ協会・会長	2004年3月～2010年2月
日本哲学会・委員	2003年5月～現在に至る

3. 舟場 保之 准教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師を経て、2004年4月から現職。専攻:哲学哲学史。

3-1. 論文

Funaba, Yasuyuki, “Was bedeutet die Aussage >Die Maxime verträgt sich nicht mit der Publizität<?” *Philosophia OSAKA*, 5, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 97-106, 2010/3

Funaba, Yasuyuki, “Der Gemeinspruch muss von der Philosophie zurückgewiesen werden.” *Philosophia OSAKA*, 4, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 85-97, 2009/3

舟場保之「哲学は俗言を斥けなければならない」『メタフュシカ』39, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-12, 2008/12

3-2. 著書

寺田俊郎, 舟場保之(共編著)『グローバル・エシックスを考える 「九・一一」後の世界と倫理』梓出版社, 338p., 2008/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之(書評)「牧野英二『崇高の哲学 情感豊かな理性の構築に向けて』(編)『日本カント研究 9 カントと悪の問題』日本カント協会, pp. 197-200, 2008/9

3-4. 口頭発表

Funaba, Yasuyuki, “Was bedeutet die Aussage >Die Maxime verträgt sich nicht mit der Publizität<?”3. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium:Der ethische Universalismus im Zeitalter der Globalisierung, Europazentrum der Waseda Universität, Bonn, GERMANY, 2009/8

舟場保之「哲学は俗言を斥けなければならない」第9回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学大学院文学研究科哲学哲学史/現代思想文化学, 2009/3

Funaba, Yasuyuki, “Der Gemeinspruch muss von der Philosophie zurückgewiesen werden.” 2. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium:Weltbürgerbegriff im Zeitalter der Globalisierung, Europazentrum der Waseda Universität, Bonn, GERMANY, 2008/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・編集委員	2009年7月～現在に至る
日本カント協会・委員	2007年4月～現在に至る
日本フイテテ協会・会計監査	2007年4月～現在に至る

2-2 現代思想文化学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2(兼任1) 准教授 兼任1 講師 0 助教 1

教授：須藤 訓任、望月 太郎(大学教育実践センター所属・兼任)

准教授：中村 征樹(大学教育実践センター所属・兼任)

助教：入谷 秀一

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24 (哲学・思想 文化学)	4	3	0	0	0	1	1	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	10 (哲学・思想文化学)	0	0	0	2
'09	2 (哲学・思想文化学)	3	1	0	0
小計	12 (哲学・思想文化学)	3	1	0	2

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎ゼミを行う。/専修決定の期間に、専修独自のガイダンスを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録を HP に

アップする。/博士後期課程の学生には、『メタフシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/大学院留学生が TA として、英語によるディスカッション能力向上に向けて、有志の院生および学部生に対して指導を行う。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 4 号、第 5 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 39 号、第 40 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会をそれぞれの年度内に 2 回程度、計 4 回程度行う。/哲学哲学史専門分野との共同で、外国人哲学研究者を招聘し、講演会を開催するとともに、スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、開局された HP 上の<ラジオ・メタフシカ>から、さまざまな情報を発信する。/哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に市民向けの記念講演会を実施する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎ゼミを開講し、専修独自のガイダンスを行うことにより、専修生の数を増やすことに成功した。/英語による授業を複数開講するとともに、大学院留学生を TA として学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/当専修に新しく加わった学部生と院生を歓迎して、哲学のお題セミナー(2008 年 4 月 18 日、大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 17 名)、*Philosophical Fishbowl* セミナー(2009 年 4 月 16 日、大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 14 名)を行った。目標は達成されたと考える。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 4 号、第 5 号を刊行し、海外主要大学(16 ヶ国、217 校。個人宛を含む)および国内主要大学(164 校)に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 39 号、第 40 号を発刊し、国内主要大学(164 校)に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。この 2 年間に外国人研究者を招いた *handai metaphysica* 特別講演会を 6 回、また *handai metaphysica* 定例会を 5 回開催した。また学内共同研究(スピノザ研究企画)として、学外の研究者も交えたワークショップを 6 回開催した。またスタッフの 1 人が国際会議の開催に携わり、研究発表および討議を行った。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された<ラジオ・メタフシカ>から、各スタッフの授業紹介等を発信した。哲学哲学史専門分野との共同で、哲学市民講座開催の準備を兼ね、11 月の世界哲学の日記念企画として市民向けの講演会を 2 回開催した。また、哲学哲学史専門分野との共同で、公開シンポジウムを 1 回開催し大変好評であった。目標は、ほぼ達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また積極的な研究会の開催でも目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	0	0
'09	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	2(2)
'09	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	2(2)
計	0(0)	0(0)	4(4)	0(0)	0(0)	4(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	1	0	0	0	1
'09	0	1	1	0	0	2
計	0	2	1	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

安里淳「製作と実践の共働と分離——ハイデガーの前期著作におけるアリストテレスの影響——」『メタフェシカ』第39号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 47-57, 2008/12

田中潤一「後期西田哲学における事実と知識の問題」『待兼山論叢』第42号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-32, 2008/12

【2009年度】

〔博士後期〕

安里淳「ウーシアをめぐる二種類のロゴス——ハイデガー哲学におけるアリストテレス解釈から——」『待兼山論叢』第43号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 19-32, 2009/12

生島弘子「真理という女——後期ニーチェ思想における真理像——」『待兼山論叢』第43号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 33-46, 2009/12

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

山口裕人「'tag'としての実体的紐帯——ライブニッツの個体論との関連から」日本哲学会, 広島大学東広島キャンパス, 2008/5/18

【2009年度】

〔博士後期〕

山口裕人「可能世界と個体の同一性——ライブニッツの場合」哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2009/7/19

山口裕人「仮定的必然、そして世界について」シンポジウム〈ライブニッツと現代——『弁神論』300年〉, 日仏哲学会・日本ライブニッツ協会, 京都大学, 2010/3/27

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2009年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2009年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2006年度～2007年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

中橋誠 博士後期課程単位修得退学, ノースアジア大学, 専任講師, 2008/4

田中潤一 博士後期課程単位修得退学, 札幌大谷大学, 専任講師, 2008/9

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008 年度～2009 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5 名

2008 年度：2 名 2009 年度：3 名

<内訳> 技術職 1 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 2 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2008 年度：0 名 2009 年度：1 名

9. 刊行物

2008 年度 『メタフュシカ』第 39 号、*Philosophia OSAKA*, No. 4

2009 年度 『メタフュシカ』第 40 号、*Philosophia OSAKA*, No. 5

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

関西哲学会事務局 2008 年 1 月～現在に至る

2008 年度 第 7 回ニーチェ研究者の集い 2008 年 8 月 30 日

2009 年度 第 8 回ニーチェ研究者の集い 2009 年 9 月 6 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 8 回 handai metaphysica 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2008 年 8 月 4 日

「トマスアキナスの存在の思想について」発表者：上枝美典(福岡大学・教授)

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 23 名。

第 9 回 handai metaphysica 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009 年 3 月 23 日

「製作と実践の共働と分離——ハイデガーの前期著作におけるアリストテレスの影響——」発表者：安里淳(現代思想文化学・博士後期課程)

「哲学は俗言を斥けなければならない」発表者：舟場保之(哲学哲学史・准教授)

於：大阪大学総合学術博物館 3F 待兼山修学館セミナー室、参加者 23 名。

第 10 回 handai metaphysica 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009 年 7 月 31 日

「いわゆる『ソクラテス問題』とプラトン」発表者：山口義久(大阪府立大学・教授)

於：大阪大学文学部本館 2F 大会議室、参加者 20 名。

第 11 回 handai metaphysica 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009 年 12 月 11 日

「言語が変化するという事はどのようにして可能なのだろうか」発表者：飯田隆(慶應義塾大学・教授)

於：大阪大学豊中キャンパス 教育研究棟 I(旧自然科学棟)、ステューデント・コモンズ 2F セミナー室、参加者 34 名。

第 12 回 handai metaphysica 研究例会(哲学哲学史専門分野と共催) 2010 年 3 月 15 日

「アポロンとソクラテス——『悲劇の誕生』の歴史哲学再考——」発表者：竹内綱史(龍谷大学・専任講師)

「知識の懐疑論——ウィトゲンシュタインとデカルトの対立——」発表者：重田謙(哲学哲学史・助教)

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 21 名。

第 6 回 handai metaphysica 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2008 年 7 月 11 日

„Weltweiter Frieden durch eine Weltrepublik? Probleme internationaler Friedenssicherung“

発表者：Matthias Lutz-Bachmann (Johann Wolfgang Goethe Universität, Germany)

於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 26 名。

- 第7回 handai metaphysica 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2008年12月12日
「自己知をめぐる最近の議論から」発表者：大庭健(専修大学・教授)
於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 29 名。
- 第8回 handai metaphysica 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009年5月26日
“Wittgenstein: The Rule – Following Argument”, “Thinking Critically as an Examination of Thoughts”
発表者：Kanit (Mitinungwong) Sirichan (Chulalongkorn University, Thailand)
於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 21 名。
- 第9回 handai metaphysica 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009年7月7日
“J.S. Mill's Radical Feminism in The Subjection of Women”.
発表者： Prof. Dr. Supakwadee Amatayakul (Chulalongkorn University, Thailand)
“Philosophical Practice: Theory and Practice of an Emerging Paradigm”.
発表者： Prof. Dr. Peter Harteloh (Holland)
於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 13 名。
- 第10回 handai metaphysica 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009年12月5日
“From the Continent of Outflow to the Continent of Inflow”. 「流出の大陸から流入の大陸へ」
発表者：Marcin Galent(マルチン・ガレント), Ph.D.(Institute of European Studies, Jagiellonian University, Krakow)
(ヤゲロニア大学 ヨーロッパ学研究科、クラクフ)
“Religion, History, and Culture in the Czeck Rep.” 「チェコ共和国における宗教・歴史・文化」
発表者：Martin Elbel(マルチン・エルベル), Ph.D.(Palacy University, Olmouc)(オルモウツ大学)
於：大阪大学文学部本館 2F 大会議室、参加者 12 名。
- 第11回 handai metaphysica 特別講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2010年3月2日
“Ein Plädoyer für die Transzendentalpragmatik. Was ist Transzendentalpragmatik?” 「超越論的語用論の擁護——超越論的語用論とは何か——」
発表者：Wolfgang Kuhlmann(ヴォルフガング・クールマン), Ph.D.(Rheinisch-Westfaelische Technische Hochschule Aachen)(アーヘン工科大学、アーヘン)
於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室、参加者 16 名。
- 哲学のお題セミナー(哲学哲学史専門分野と共催) 2008年4月18日
於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 17 名。
- フィロソフィカル・トーキング・セミナー(哲学哲学史専門分野と共催) 2008年11月20日
於：川西市生涯学習センター、参加者 35 名。
- Philosophical Fishbowl セミナー(哲学哲学史専門分野と共催) 2009年4月16日
於：大阪大学・待兼山会館 2F 会議室、参加者 14 名。
- 2009年世界哲学の日記念講演会(哲学哲学史専門分野と共催) 2009年11月19日
「魔術と近世ヨーロッパにおける科学の誕生」
提題者：Martin Elbel(マルチン・エルベル), Ph.D.(Palacy University, Olmouc)(オルモウツ大学)
ファシリテーター：中村征樹(大阪大学大学教育実践センター准教授)
於：大阪大学豊中キャンパス 教育研究棟 I(旧自然科学棟)、ステューデント・コモنز 1F セミナー室、参加者 33 名。
- 平成 20-21 年度大阪大学文学研究科共同研究「ドイツ思想史における虚軸としてのスピノザ」の企画として以下のワークショップと研究会を行った。
1. ワークショップ(共同研究に向けての共同討議) 2008年10月11日
場所：大阪大学待兼山会館 1F 特別室にて
 2. スピノザ協会との共催講演会 2009年1月24日
提題者：須藤訓任「必然性の憑依——スピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ」
場所：待兼山修学館セミナー室にて

3. ワークショップ(提題発表と集中討議) 2008年11月29日
 提題者: 栗原隆「受容と変容——実体が主語だと見做される理路を経てこそ、実体が主体になる現場」
 場所: 大阪大学待兼山会館 1F 特別室にて
4. ワークショップ 2009年11月28日
 提題者: 上野修「スピノザとライブニッツにおける現実概念」
 場所: 大阪大学文学部本館 2階会議室
5. 研究会1 ドイツ観念論とスピノザ(日本フィヒテ協会との共催) 2010年1月30日
 提題発表: 加藤泰史「カントと超越論的観念論の問題——カントとスピノザへの予備的考察——」
 場所: 大阪大学待兼山会館 2階会議室
6. 研究会2 汎神論論争のスピノザ(スピノザ協会との共催) 2010年2月27日
 提題発表: 後藤正英「スピノザ『神学政治論』からメンデルスゾーン『エルサレム』へ」
 提題発表: 平尾昌宏「メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈」
 場所: 大阪大学待兼山待兼山修学館(大阪大学総合学術博物館 3階)

チュラロンコン大学文学部哲学科と共同でクリティカル・シンキング等についての国際フォーラムを2009年12月21日・22日の両日にわたって、同大学文学部(タイ、バンコク)で開催、研究発表、討議を行った。また同じフォーラムにおいて、エラスムス哲学実践研究所から講師を招いてワークショップを実施した。(科研費補助金による。基盤(C)「批判的思考教育のアジア型適応」研究代表者: 望月太郎)

映画「哲学への権利——国際哲学コレージュの軌跡」上映・討論会(2010年2月7日、教育研究棟 I・開放型セミナー室、参加者約60名)を開催した。

ラジオ・メタフュシカをビデオ・メタフュシカに発展させるための準備を行なった。

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 須藤 訓任 教授

1955年生。1983年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。文学修士(京都大学)。大谷大学助教授、同教授を経て、2004年10月より現職。専攻: 西洋近現代哲学。

1-1. 論文

Suto, Norihide, “Die Bedeutung der Denkökonomie beim späten Nietzsche” *Philosophy and History of Philosophy/ Studies on Modern Thought and Culture*, Graduate School of Letters, Osaka University *Philosophia Osaka*, 5, pp. 89-98, 2010/3

須藤訓任 「ニーチェの「正義」論再考——「力への意志」の尺度をめぐる『理想』684, 理想社, pp. 2-15, 2010/2

須藤訓任 「ダイモニオンの警告——ニーチェとその父」大阪大学大学院文学研究科『待兼山論叢 哲学篇』43, pp. 1-17, 2009/12

1-2. 著書

須藤訓任, 伊藤邦武他(共著)『岩波講座 哲学9 科学/技術の哲学』岩波書店, 273p., pp. 107-131(「真理への欲望——真理は規範たりうるか」担当), 2008/9

篠原資明, 須藤訓任他(共著)『哲学の歴史12 実存・構造・他者』中央公論新社, 830p., pp. 581-612(「フーコー」担当), 2008/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任(書評)「恒吉良隆『ニーチェの妹エリーザベト——その実像』」『図書新聞』2952号, 図書新聞, p. 2, 2010/2

須藤訓任(共訳)(責任編集 および 翻訳・解題)『フロイト全集第12巻』岩波書店, pp. 207-306, pp.331-373, 2009/6

須藤訓任(書評)「J・ケーラー『ニーチェ伝』」『図書新聞』2916号, 図書新聞, p. 3, 2009/5

1-4. 口頭発表

須藤訓任 「苦悶の恍惚——アデーレ・ショーペンハウアー「アリッチャの麗人」をめぐって」日本ショーペンハウアー協会第22回全国大会, 日本ショーペンハウアー協会, 関西学院大学梅田キャンパス, 2009/11

須藤訓任 「必然性の憑依——スピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ」スピノザ協会第50回研究会, スピノザ協会, 大阪大学, 2009/1

岡田温司, 須藤訓任他 「哲学の「気分」としてのメランコリー」春季大会ワークショップ:メランコリーの地平, 日本フランス語フランス文学 2008 年春季大会, 青山学院大学, 2008/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:須藤訓任

課題番号: 20520016

研究題目: 哲学と家族

研究経費: 2008 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2009 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究は、哲学を家族関係という観点から再考察する試みである。取り上げるのは、アルトゥール・ショーペンハウアーの思想であるが、その父・母・妹との関係を、思想の家族間「対話」として規定し、そのことによって、思想形成に果たす家族の役割を明らかにするとともに、哲学者の思想が具体的な家族関係にどのように波及するかを論及し、従来伝記的事実としてしか問題にされてこなかった領域を、哲学研究の新たな課題として発掘し深化させてゆきたいと考える。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員 2007 年 11 月～現在に至る

日本哲学会・編集委員 2005 年 6 月～2009 年 5 月

2. 望月 太郎 教授

1962年生。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。文学博士(大阪大学、1997年)。徳島大学、東海大学を経て、1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。2006年11月、大阪大学大学教育実践センター教授。専攻: 西洋近世哲学、現代思想。

2-1. 論文

望月太郎 「第三世代の人権運動としての世界社会フォーラム——知の解放をめざす科学とデモクラシー——」『人権 21・調査と研究』(岡山人権問題研究所), 201, 岡山人権問題研究所, pp. 31-37, 2009/8

Mochizuki, Taro, "The Dialectic between the Private and the Public: the philosophy of Descartes' Discourse on the Method" *Prajna Vihara-Journal of Philosophy and Religion*, (Assumption University Press), Vol.9-No.2, Graduate School of Philosophy and Religion, Assumption University, Bangkok, Thailand, pp. 31-43, 2009/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Mochizuki, Taro, “Logic vs. Rhetoric? – Topoi of Questioning”, An International Forum on Critical Thinking, Reasoning and Philosophical Practice, 21-22 December 2009, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 2009/12

望月太郎「第三世代の人権運動としての世界社会フォーラム——知の解放をめざす科学とデモクラシー——」日本科学者会議大阪支部大会記念シンポジウム, 日本科学者会議大阪支部, 大阪市立大学, 2009/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:望月太郎

課題番号: 21520014

研究題目: 批判的思考教育のアジア型適応

研究経費: 2009年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

批判的思考(Critical Thinking)とその教育のアジア型適応について、日本と日本以外のアジア諸国(主としてタイ)での調査研究と教育実践の経験に基づき、理論と実践の両面から、もっともパフォーマンスが高いと考えられるモデルを提示することを目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本科学者会議・国際部 INES 代表委員	2008年5月～現在に至る
日本哲学会・編集委員	2007年6月～現在に至る
大学評価学会・理事	2006年3月～現在に至る
日仏哲学会・理事	2001年9月～現在に至る

3. 中村 征樹 准教授

1974年生。2005年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(学術))。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官を経て、2007年10月より大阪大学大学教育実践センター准教授。同年11月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術倫理、科学技術史。

3-1. 論文

Nakamura, Masaki, “STS in Japan in light of the science café movement”, *East Asian Science, Technology and Society: an International Journal*, 4-1, pp. 145-151, 2010/3

Nakamura, Masaki, Taro Mochizuki, “Undergraduate education for the 21st century: What can we learn from graduates?”『大阪大学大学教育実践センター紀要』6, 大阪大学大学教育実践センター, pp. 27-33, 2010/3

中村征樹 「科学技術と市民参加——参加の実質化とその課題」『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学大学院文学研究科), 42, pp. 1-15, 2008/12

中村征樹 「サイエンスカフェ——現状と課題」『科学技術社会論研究』(科学技術社会論学会), 5, 玉川大学出版部, pp. 31-43, 2008/6

3-2. 著書

服部憲児, 中村征樹 『魅力ある授業のために2——双方向型授業の取り組みを中心に』大阪大学出版会, pp. 42-49, 2010/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村征樹 「民主主義を作る」(連載「科学技術と民主主義」第11回), 『Actio』2010年5月号, p. 22, 2010/4

中村征樹 「問い直される科学～科学教育の変容」(連載「科学技術と民主主義」第10回), 『Actio』2010年4月号, p. 22, 2010/3

早田幸政, 望月太郎, 中村征樹 「履修登録期間」の設定及び単位の実質化に関する先進的取組事例に係る調査報告」『大阪大学大学教育実践センター紀要』6, 大阪大学大学教育実践センター, pp. 43-53, 2010/3

中村征樹 「科学館の新しい取り組み」(連載「科学技術と民主主義」第9回), 『Actio』2010年3月号, p. 22, 2010/2

中村征樹 「世界市民会議という実験(3)〈民意とは何か〉」(連載「科学技術と民主主義」第8回), 『Actio』2010年2月号, p. 22, 2010/1

中村征樹 「世界市民会議という実験(2)」(連載「科学技術と民主主義」第7回), 『Actio』2010年1月号, p. 22, 2009/12

中村征樹 「世界市民会議という実験(1)」(連載「科学技術と民主主義」第6回), 『Actio』2009年12月号, p. 22, 2009/11

中村征樹 「カフェという場所(2)」(連載「科学技術と民主主義」第5回), 『Actio』2009年11月号, p. 22, 2009/10

中村征樹 「カフェという場所(1)」(連載「科学技術と民主主義」第4回), 『Actio』2009年10月号, p. 22, 2009/9

中村征樹 「サイエンスカフェの風景～リヨンから(2)」(連載「科学技術と民主主義」第3回), 『Actio』2009年9月号, p. 22, 2009/8

中村征樹 「サイエンスカフェの風景～リヨンから(1)」(連載「科学技術と民主主義」第2回), 『Actio』2009年8月号, p. 22, 2009/7

中村征樹 「サイエンスカフェ国際会議」(連載「科学技術と民主主義」第1回), 『Actio』2009年7月号, p. 22, 2009/6

望月太郎, 中村征樹 「第11回 UNESCO-APEID 国際会議に参加して——「もう一つの世界」の実現へ向けてアジア-太平洋地域の高等教育がめざすべき道」『国際社会文化研究所紀要(龍谷大学)』pp. 16-28, 2009/6

中村征樹, 望月太郎(訳) 「ピーター・ハーテロー「大学教育のクオリティ・マネジメントを革新する」」大学評価学会年報『現代社会と大学評価』5, pp. 18-36, 2009/4

中村征樹 「技術と障害者から始まるコミュニティ・デザインによせて」『国際研究フォーラム報告書『ライフデザインと福祉(WELL-BEING)の人類学——開かれたケア・交流空間の創出——』国立民族学博物館, pp. 83-86, 2009/3

中村征樹 「総合的な学習経験と創造的思考力」『創造と実践』8, 大阪大学大学教育実践センター, pp. 30-31, 2009/2

中村征樹 「市民と科学者が対話するサイエンスカフェ」『Actio』1276, アクティオ・ネットワーク, pp. 6-7, 2008/9

3-4. 口頭発表

Nakamura, Masaki, “Adaptation of science communication to Asian culture?: Development of science café movement in Japan” The 1st Korean-Japanese Workshop for Young STS Scholars, Seoul University, 2010/3

Nakamura, Masaki, “Comparative approach to scientific misconduct: Scientific community, governmental body and the public” The 1st Korean-Japanese Workshop for Young STS Scholars, Seoul University, 2010/3

中村征樹 「ヨーロッパのサイエンスカフェ」サイエンスカフェに関する交流・学習会, 神戸大学, 2010/3

Nakamura, Masaki, “Critical Thinkig Practices in Science Communication” An International Forum on Critical Thinking, Reasoning and Philosophical Practice, Chulalongkorn University, 2009/12

中村征樹 「科学技術コミュニケーションの基本概念を検証する」STS Network Japan 夏の学校 2009, 石川県青少年総合研修センター, 2009/9

Nakamura, Masaki, Hironori, Ayabe, “Science Cafés: New Challenges to Bridge Science and the Public” 6th Japanese-German Frontiers of Science Symposium, Harumi Grand Hotel, 2009/7

Nakamura, Masaki, "STS in Japan in the light of the Science Café Movement" The Third EASTS International Journal Conference, Yangming University, 2009/6

中村征樹「サイエンスカフェの挑戦」近代を問う研究会, 大阪府立大学総合教育研究機構プロジェクト「教員の連携に基づく「教養教育」の新たなモデルの試み」研究グループ, 2009/3

中村征樹「工業化する都市と技術者——19世紀フランス工芸院の公開講座」近代を問う研究会, 大阪府立大学総合教育研究機構プロジェクト「教員の連携に基づく「教養教育」の新たなモデルの試み」研究グループ, 2009/3

中村征樹「技術者倫理教育の動向——「倫理」から「責任ある行動」へ」関西工学教育協会機械分科会研究会, 関西工学教育協会機械分科会, 2008/9

中武貞文, 廣川聡子, 中村征樹他「産学連携・地域連携を指向したアウトリーチ活動「糸島サイエンスキャラバン」の事例発表」産学連携学会第6回大会, 産学連携学会, 2008/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2009年度～2011年度、若手研究(B)、代表者:中村征樹

課題番号: 21700842

研究題目: 米国における研究者倫理の生成過程に関する研究

研究経費: 2009年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

研究不正行為が、研究者コミュニティの枠を超えて、社会的・政治的争点として位置づけられ、行政や規制機関などによる介入・関与を背景として、研究者倫理が制度化されてきたプロセス(「研究者倫理」の明示化、防止措置・対策の制定、教育プログラムの確立など)について、とりわけ1980年代以降の米国での展開に注目して明らかにする。その際、研究者倫理の生成が、科学者コミュニティと社会との関係や、科学研究活動の社会的位置づけが大きく変容していくプロセスと互いに密接に関係しあっている点に注目し、研究者倫理の生成過程の解明をとおして、生命倫理の制度化とは違ったかたちでの、研究活動と社会との関係の変容を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・若手アカデミー委員会委員	2010年1月～現在に至る
The 4th East Asian STS Young Scholar's Workshop・Local Organizing Committee	2009年12月～2009年12月
化学史学会・2009年度化学史研究発表会(年会)年会準備委員	2009年7月～2009年7月
大学評価学会・編集委員	2009年4月～現在に至る
化学史学会・理事	2009年1月～現在に至る
科学技術社会論学会・第7回年次研究大会・総会実行委員	2008年11月～2008年11月
STS Network Japan・会計	2008年4月～現在に至る
化学史学会・評議員	2007年1月～2008年12月
科学技術社会論学会・編集委員	2006年4月～2009年11月
科学技術社会論学会・理事	2005年4月～現在に至る
科学技術社会論学会・事務局幹事	2005年4月～2009年3月
大学評価学会・理事	2004年4月～現在に至る
日仏教育学会・編集委員	2003年9月～現在に至る

4. 入谷 秀一 助教

1975年生。2002年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2004年)。大阪大学非常勤講師を経て、2010年4月より現職。専攻:哲学、ドイツ思想史。

4-1. 論文

入谷秀一「非同一的な時間の承認——環境倫理学の枠組みの再編・拡張・統合のためのスケッチ——」大阪大学大学院文学研究科哲学講座(編)『メタフィシカ』(大阪大学大学院文学研究科哲学講座), 40, pp. 27-39, 2009/12

入谷秀一「生命倫理の時間論——ハーバーマスとヨナスの議論を手がかりに——」大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室(編)『医療・生命と倫理・社会』(大阪大学大学院医学系研究科・医の倫理学教室), 8, pp. 112-125, 2009/3

4-2. 著書

寄川条路, 入江幸男, 入谷秀一他(共著)『グローバル・エシックス——寛容・連帯・世界市民——』ミネルヴァ書房, pp. 119-150, 2009/10

入谷秀一『ハイデガー——ポスト形而上学の時代の時間論』大阪大学出版会, 258p., 2008/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

入谷秀一「生命倫理の時間論——ハーバーマスとヨナスの議論を手がかりに」批判的社会理論研究会 第15回研究例会, 批判的社会理論研究会, 2008/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入谷秀一 第一回関西倫理学会優秀論文賞, 関西倫理学会, 2006/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-3 臨床哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：中岡 成文、浜渦 辰二

准教授：本間 直樹

助教：大北 全俊

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
29	7	9	0	0	0	4	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 9 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	9	2	1	0	1
'09	8	7	0	1	0
小計	17	9	1	1	1

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

当分野は、現代社会において大小さまざまな問題(例えば、科学技術、医療／看護／介護、教育、環境、アート／メディア／パフォーマンス、ジェンダー／セクシュアリティなど)について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、教育に関しては、臨床哲学という新しい理念を学生に理解させ、参与させることを目標とし

た。「臨床哲学概論」等の授業を通して、過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とともに明確にすることを目指した。また分科会形式をとる授業を設定することで、学生に部分的にイニシアティブを任せるなど、学生の自主性を促進することを目標とした。また、外国語(主として英語)の発信能力を組織的に養成することを目標とした。さらに、生命・医療の倫理学および人間学については、先端的テーマに関する教育を提供することを目標とした。

2. 研究

教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、研究に関しては、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。また、そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。さらに、任意団体「café philo」と連携して、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させることを目標とした。共同研究については、大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」と連携して、移民の政治哲学についての調査研究の実施、および、引き続き CSCD と連携してサイエンスショップなど各種の調査研究の実施を目標とした。さらに、学内に結成された医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進することを目標とした。

3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実化させることを目標とした。すでに言及しているが、大学外のような職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させることでその教育的な意義も視野に入れた。また、そういった研究活動の成果を報告書や研究室紀要、HP など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。さらに、京阪電鉄なにお橋駅にある「アートエリア B1」など大学外の場所で、任意団体「café philo」と連携しながら、研究活動に関係する事柄について各種のイベントを実施することでじかに市民との交流を図ることを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

「臨床哲学概論」等の授業を通して、過去の哲学思想の振り返りに基づく臨床哲学の理念の明確化を実施した。分科会形式をとる授業では、学生が積極的にイニシアティブをとり、学生の自主性を促進することに成功している。それらの成果として、学生がグループを形成して学外におけるワークショップに積極的に取り組んだり、哲学カフェを企画運営したり、身近なところで「臨床哲学」的なテーマを開拓してそれを研究的なものに結びつけたりしている。外国語の発信能力の養成についても、英語のみで行う授業を開講し、他の教員も任意の参加者として効率的な学習をサポートしたり、授業外で希望の学生を募り英会話のトレーニングを行ったりして対応した。生命・医療倫理学については、学内講師を委嘱して先端的テーマについて教育を行った。

2. 研究

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行った。これらは企業・自治体・NPO などからも注目を集めた。また、これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して、オン・ザ・ジョブ・トレーニング的な、またインターンシップにもつながる経験を積んだ。さらに、任意団体「café philo」と連携して、定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用いつつ、京都の洛星高校で 5 年間にわたり、学生を巻き込んで、あるいは学生の企画運営を監督しつつ、哲学の授業を行った。共同研究については、大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」と連携して、移民の政治哲学についての調査研究を行ったほか、

引き続き CSCD と連携してサイエンスショップなど各種の調査研究につながる活動を行った。さらに、学内に結成された医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進した。

3. 社会連携

社会連携については、これもすでに上記の教育・研究活動のおおよそが学外諸団体や市民との連携によって成立していることから明らかであるだろう。研究活動として移民の政治哲学に関する研究、CSCD と連携したサイエンスショップの実施、洛星高校など学外での哲学の授業の実施、「アートエリア B1」等での研究会の開催など大学の内外を越境する研究に従事し、かつそのような研究に学生もイニシアティブをとって従事するよう促し、かつそれに成功した。

IV. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

臨床哲学の理念の理解と同時にその明確化の過程に積極的に関与することを教育の目標としたのであるが、それについては大学内での授業および大学外と連携した活動への従事という点で、両者ともその目標は達成できたものと考えている。

2. 研究

学内外と連携した諸々の研究、およびその研究成果を広く社会に発信するという点など、いずれの目標も達成されたものと考えている。

3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものとする。また、社会からの認知および反響もえられた。

V. 基本情報(2008 年度～2009 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	1	1
'09	1	0	1
計	1	1	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

榎本直樹 「自己陶冶と公的討論——J.S.ミルの市民社会論の射程——」 2009/12
主査：中岡成文 副査：浜渦辰二、本間直樹

【論文博士】

森田(池田)美芽 「キルケゴールの女性論」 2008/4
主査：中岡成文 副査：須藤訓任、本間直樹、花岡永子

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	1(1)	3(3)	0(0)	0(0)	4(4)
'09	0(0)	0(0)	4(4)	0(0)	0(0)	4(4)
計	0(0)	1(1)	7(7)	0(0)	0(0)	8(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	2	2	0	0	4
'09	2	2	1	0	0	5
計	2	4	3	0	0	9

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

堀寛史「うちとそとにひらかれた「自分(たち)の場所」——ボクの家プロジェクト展開部」『臨床哲学』10, pp.35-80, 2009/3

樫本直樹「J.S.ミルにおける市民の陶冶と公的参加」『待兼山論叢』42, pp.33-48, 2008/12

小菅雅行「オークショットの共同体概念を用いた、サイエンスコミュニケーションの分析試案」『メタフュシカ』39, pp.73-85, 2008/12

森本誠一「ロールズのシジウィック批判——ロールズの正義論は三方法に集約されるのか」『メタフュシカ』39, pp.87-96, 2008/12

【2009年度】

〔博士後期〕

樫本直樹「持続可能な社会についての一考察——J.S.ミル『経済学原理』における「停止状態」の議論を手がかりに」『メタフュシカ』40, pp.79-89, 2009/12

高山佳子「身体の知覚から肉の情感へ——M.アンリ現象学における内在の感覚論——」『メタフュシカ』40, pp.91-103, 2009/12

松川絵里「言語における空白——フーコーの方法論——」『メタフュシカ』40, pp.105-116, 2009/12

松川絵里「権力・場・主体——フーコーとブルデューの社会分析——」『待兼山論叢』43, pp.47-61, 2009/12

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

森本誠一「日本における代理懐胎の法制化に関する議論の倫理的諸問題」日本医学哲学・倫理学会第27回大会, 於: 北海道大学, 2008/10/25

榎本直樹「ミルの政治思想における「市民」と「参加」をめぐる問題」関西倫理学会 2008 年大会, 於: 京都大学, 2008/11/2
森本誠一「調査捕鯨をめぐる日豪間のコンフリクトに関するオーストラリア人の意識調査」大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成(平成 20 年度)成果報告会, 於: 大阪大学人間科学研究科, 2009/2/12

榎本直樹『『観光 vs. 自然保護』の二項対立を超えて——エコツーリズムにおけるコンフリクトから』大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」大学院生調査研究助成(平成 20 年度)成果報告会, 於: 大阪大学人間科学研究科, 2009/2/12

【2009 年度】

〔博士後期〕

Seiichi MORIMOTO(森本誠一), "Medical Welfare Situation in Japan and Its Ethical Issues", at the Fourth International Conference on Applied Ethics on 13-15 November 2009, Hokkaido University, Sapporo, Japan, 2009/11/14

森本誠一「現場から考える医療福祉の倫理」京都生命倫理研究会, 於・京都女子大学, 2009/6/27

森本誠一「臨床哲学の観点から応用哲学について」応用哲学会, 於・京都大学, 2009/4/25

Masayuki KOSUGA(小菅雅行), "Building the First Science Shop in Japanese University: Its Objective and 2-Years Experience" 4th Living Knowledge Conference, Queen's University Belfast, UK, 2009/8/28

小菅雅行「大阪大学サイエンスショップの取り組み——市民・学生・大学教員の協働による参加型研究」科学技術社会論学会第 8 回年次研究大会, 於: 早稲田大学, 2009/11/15

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008 年度】

〔博士前期〕

井尻貴子「『現場』について——障害とアート研究会とのかかわりから」『臨床哲学』10, pp.113-123, 2009/3

〔博士後期〕

森本誠一「『書評』『ケースで学ぶ医療福祉の倫理』(菊井和子・大林雅之・山口三重子・斎藤信也編)」『臨床哲学』10, pp.141-146, 2009/3

高山佳子「『書評』『G Supple 事例で学ぶケアの倫理』(G Supple 編集委員会編)」『臨床哲学』10, pp.147-152, 2009/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2009 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

2009 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008 年度～2009 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2008年度：0名 2009年度：2名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2008年度：0名 2009年度：0名

9. 刊行物

2008年度 『臨床哲学』、『臨床哲学のメチエ』

2009年度 『臨床哲学』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2009年度 関西倫理学会事務局

GCOE 国際シンポジウム「コンフリクトを軽減する対話と実践——人文治療学の挑戦」Global COE Program

International Symposium: “Dialogue and Practice Reducing Conflicts: Challenge of Humanities Therapy”(主催：大阪大学グローバルCOE プログラム「コンフリクトの人文学」，共催：大阪大学大学院文学研究科・臨床哲学研究室，韓国・江原大学から李光來教授、金善姫教授、李基原講師の3名を招へい)，2010/2/17

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」、あるいは大阪大学医療人文学研究会との共催で研究会を年にそれぞれ1-3回開いている。

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 中岡 成文 教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学修士。福岡女子大学専任講師などを経て1996年9月、大阪大学教授。医学系研究科「医の倫理学」教授を兼任。2005年から2年間、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター長。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

1-1. 論文

Nakaoka, Narifumi(共著)，“What Does Clinical Philosophy Practice?” 輔仁大学(共著)『哲学與文化』428，哲学與文化月刊雑誌社，pp. 49-61，2010/1

中岡成文他(共著)「弱さの構築——死生の臨床哲学へ」(共著)『死生学研究』(日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」)，東京大学大学院人文社会系研究科グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」，pp. 178-192，2009/3

中岡成文，大北全俊(共著)「いま、看護倫理教育に求められる視点」『看護展望』33-10，メジカルフレンド社，pp. 12-18，2008/9

1-2. 著書

中岡成文他(共著)『中日国際学術研討会論文集——東亜生死学』三元社，pp. 104-113，2009/3

中岡成文他(編)『知識／情報』岩波書店，pp. 1-13，2008/10

中岡成文他(共著)『いま(哲学する)ことへ』岩波書店, pp. 233-251, 2008/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Nakaoka, Narifumi, "On Philosophical Therapy and Clinical Philosophy" Clinical Philosophy International Workshop : Philosophical Therapy and Clinical Philosophy, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, 大阪大学大学院文学研究科, 2010/2

中岡成文 「先人に死生を問う」日本倫理学会第 60 回大会共通課題:死生観, 日本倫理学会, 南山大学, 2009/10

中岡成文 「ケアの倫理/理論について」愛知医科大学看護学部看護教育セミナー, 愛知医科大学看護学部, 愛知医科大学, 2009/9

中岡成文 「元気の出る倫理に向けて」大阪南学術センター, 大阪南医療センター, 大阪南医療センター, 2009/9

Nakaoka, Narifumi, "Listen, Wait, and Move in Therapeutic Activities" The 1st International Conference on Humanities Therapy, 江原大学(韓国), 江原大学(韓国), 2009/9

中岡成文 「双方向的な倫理と倫理教育を求めて」日本医学教育学会第 41 回大会シンポジウム:臨床倫理教育, 日本医学教育学会, 大阪国際交流センター, 2009/7

中岡成文 「臨床における医療倫理を考える」西宮市立中央病院倫理委員会研修会, 西宮市立中央病院倫理委員会, 西宮市立中央病院, 2009/5

中岡成文 「コミュニケーションデザインとは」NPO 法人関西ウェルビーイングクラブ(KWC)研修会:予防歯科のためのコミュニケーションデザインをつくる, NPO 法人関西ウェルビーイングクラブ(KWC), 大阪府産業創造館, 2009/3(『Well-Being NEWS』294, pp. 4-5, 2009/6)

中岡成文 「対話の時代と哲学の課題」大阪大学中之島講座, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2008/10

中岡成文 「看護倫理と看護師の社会的責任」関西労災病院看護部全体研修, 関西労災病院, 関西労災病院, 2008/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西倫理学会・委員	2002年4月～現在に至る
日本倫理学会・評議員	1998年4月～現在に至る

2. 浜渦 辰二 教授

1952年生。1984年、九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位修得退学。文学博士(九州大学)。1989年、九州大学文学部助手。1991年、静岡大学人文学部助教授。1996年、同教授。2008年4月より現職。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学。

2-1. 論文

-
- 浜渦辰二 「ビジネス・倫理・ケア」『西日本哲学年報』(西日本哲学会), 17, 西日本哲学会, pp. 93-110, 2009/10
- Hamauzu, Shinji, "Caring from the Phenomenological Point of View - Decision-making in terminal care in Japan -"『いのち・からだ・こころ』をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み』科研費共同研究報告書, pp. 122-133, 2009/3
- 浜渦辰二 「私の考える臨床哲学——私はどこから来て、どこへ行くのか——」『臨床哲学』10, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 3-20, 2009/3
- 浜渦辰二 「ケース 9 終末期の心理臨床」松田純・江口昌克・正木祐史『ケースブック 心理臨床の倫理と法』知泉書館, pp. 153-160, 2009/3
- 浜渦辰二 「スピリチュアルケアと臨床哲学」『緩和ケア』19-1, 青海社, pp. 31-33, 2009/1
- 浜渦辰二 「ナラティブとパースペクティブ——「(かたり)の虚と実」をめぐる——」木村敏・坂部恵(監修)『(かたり)と(作り) 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所, pp. 95-119, 2009/1
- 浜渦辰二 「フッサールとシュツ——対話としての臨床哲学のために——」大阪大学大学院文学研究科哲学講座(編)『メタフィジカ』39, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 13-23, 2008/12
- Hamauzu, Shinji, "Schutz and Edmund Husserl: For Phenomenology of Intersubjectivity" Hisashi Nasu, Lester Embree et al.(eds.) *Alfred Schutz and his intellectual partners*, UVK Verlagsgesellschaft mbH, pp. 49-67, 2008/4

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

-
- 浜渦辰二 「ケアの現象学のために——英国ホスピスケアから北欧ケアへ——」介護福祉研究会, 聖隷クリストファー大学, 2010/3
- 浜渦辰二 「ビジネスとケアをつなぐ倫理」国際シンポジウム「ビジネス・エシックスを多角的に考える」, 神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所, 神田外語大学, 2010/2
- 浜渦辰二 「ケアの現象学のために——北欧ケア研究への序——」科研費プロジェクト「現象学的看護研究の方法論の確立のために」研究会, 大阪大学 OSIPP 千里エクステンション, 2010/1
- 浜渦辰二 「ケアの現象学のために——ナラティブとパースペクティブ——」第 26 回大会, 日本現象学・社会科学会, 神田外語大学, 2009/12
- 浜渦辰二 「日本における高齢者ケアを考える」介護およびケア概念の日独比較, 南山大学地域研究センター, 南山大学, 2009/9
- Hamauzu, Shinji, "Narrative and Perspective" The 3rd East Asia Conference for Phenomenology, PEACE, Seoul National University (Korea), 2009/9
- 浜渦辰二 「北欧研修旅行報告(第二弾)」科研費プロジェクト「ケアの現象学」第一回研究会, 東京大学, 2009/6
- 浜渦辰二 「「ケア」の根底にある哲学」第 46 回(ケア)を考える会, 京都市中央区GLマンション, 2009/6
- Hamauzu, Shinji, "Narrative and Perspective" VII Symposium Husserl 150, Nordic Society for Phenomenology, Tampere University (Finland), 2009/4
- 浜渦辰二 「ケアするということ」: 卒業記念講演, 静岡県中部看護専門学校, 静岡県中部看護専門学校, 2009/3
- 浜渦辰二 「リビング・ウィルを考え直す」患者のリビング・ウィルを考える会, 神戸市・あすてっぷ KOBE, 2009/1
- 浜渦辰二 「ビジネス・倫理・ケア」第 59 回西日本哲学会大会, 西日本哲学会, 琉球大学, 2008/12
- 浜渦辰二 「ケアすること——ケアされること」天竜厚生会看護職員向け研修会, 天竜厚生会, 天竜厚生会研修センター, 2008/12
- 浜渦辰二 「緩和ケアと尊厳」がんコンソーシアム in 徳島, 徳島県立中央病院, 2008/10
- 浜渦辰二 「ケアしケアされる存在としての人間」東葛・生と死を考える会, 麗澤大学, 2008/7

浜渦辰二「終末期と高齢者のケア——ケアの現象学的人間学から臨床哲学へ——」第3回医療人文学研究会, 医療人文学研究会, 大阪大学, 2008/4

浜渦辰二「ケアの人間学——在宅ケアのゆくえ——」静岡県地域包括・在宅支援センター協議会, 静岡市産学交流センター, 2008/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

西日本哲学会・委員	2008年12月～現在に至る
静岡大学哲学会・委員	2008年11月～現在に至る
九州大学哲学会・委員	2008年9月～現在に至る
日本現象学会・国際交流委員・編集委員	2007年11月～現在に至る

3. 本間 直樹 准教授

1970年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005年4月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター専任講師に着任し、文学研究科を兼任。2006年4月より現職。専攻: 哲学/倫理学/臨床哲学。

3-1. 論文

本間直樹, 松川絵里(共著)「哲学という名のプラットフォーム——ラボカフェ/中之島哲学コレージュ」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』3, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp. 122-137, 2010/3

本間直樹, 久保田テツ, 清水良介他(共著)「A Designwork Orange——デザイン仕掛けのオレンジ」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』3, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp. 290-303, 2010/3

本間直樹, 高橋綾(共著)「小学校で哲学する——オスカル・ブルニフィエの相互質問法を用いた授業」大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室(編)『臨床哲学』11, 大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室, pp. 58-74, 2010/3

本間直樹「何が思考を呼び求めるのか——こどもと哲学のあいだ」大阪大学大学院文学研究科哲学講座(編)『メタフシカ』40, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-12, 2009/12

本間直樹, 久保田テツ「記録するとは別の仕方」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』2, 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp. 133-150, 2009/3

3-2. 著書

本間直樹(共著)『岩波講座哲学 行為/モラルの哲学』6, 岩波書店, pp. 99-118, 2008/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

本間直樹(監訳)(翻訳)『フロイト全集』第16巻, 岩波書店, 2010/2

3-4. 口頭発表

Homma, Naoki, “The Right to Philosophy: The philosophical Inquiry with Children” Clinical Philosophy International Workshop: Philosophical Therapy and Clinical Philosophy, The “A Research Base for Conflict Studies in the Humanities” research program, Osaka University, 2010/2

Homma, Naoki, Takahashi, Aya, “Thinking beyond Evaluation” 14th The International Council of Philosophical Inquiry with Children (ICPIC) Conference: Educating for complex Thinking Through Philosophical Inquiry, The International Council of Philosophical Inquiry with Children, Padua University, Italy, 2009/7(*Educating for complex Thinking Through Philosophical Inquiry*, pp. 28-29, 2009/7)

Homma, Naoki, Takahashi, Aya, “Thinking Skills and Thinking Subject” 12th International Conference of Philosophy for Children and Adolescents: The Child as Social Critique, Centro Latinoamericano de Filosofía para Niños, San Cristobal de las Casas, Chiapas, Mexico, 2009/1

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008年度～2010年度、若手研究(A)、代表者:本間直樹

課題番号: 20682001

研究題目: 哲学対話における反省的・協働的思考: 学年と専門を横断する対話学習プログラム研究

研究経費: 2008年度 直接経費 1,900,000円 間接経費 570,000円

2009年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

研究の目的:

本研究は、哲学対話を通して反省的・協働的思考を学習するプログラムである「子どもの哲学」の重要性を確かなものとしつつ、さらに年齢・学年・専門を横断して学習される哲学対話プログラム実施の仕組みを考案し、試行を重ねながらその意義と実効性を理論・経験研究の双方から検証することを課題とする。こうした横断的な学習プログラム作成と試行にむけて、具体的に以下の5つの研究に取り組む。

1. 協働的学習過程における反省的・批判的思考の働きを考察する基礎研究、2. 各種専門教育に並行して行われる対話教育に関する研究、3. 哲学学習者・研究者に求められる対話進行役能力に関わる実践的研究、4. 学習-教育プログラムのデザインに関する研究、5. 学習のためのカリキュラムとプログラムに関する海外調査、とりわけアジア地域における哲学対話教育の状況調査。

さらに、これら研究プログラムを実際に動かしながら、下記の5つの点についてどのように具体的な解答を与えることができるのかを考察し、これらプログラムの分析・評価を試みる。

1. 初等・中等教育従事者を巻き込んだ哲学対話の学習プログラム作成のために、どのような仕組みが必要か。2. 学部・大学院において対話学習を新しい教養教育の在り方として位置づけることができるか、その意義は何か。3. 大学院における哲学・倫理学教育に対話進行役の学習プログラムをどのように導入するか。4. 教育全体の課題の探究のなかで、反省的・協働的思考の学習がどのような役割をもつのか。5. 高等教育における哲学教育にどのような可能性があるのか。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アートミーツケア学会・理事

2007年3月～現在に至る

4. 大北 全俊 助教

1974 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学大学院医学系研究科「医の倫理学」教務補佐員等を経て、2009 年 4 月に財団法人エイズ予防財団リサーチ・レジデント(国立大阪医療センターに配属)に着任。2010 年 4 月より現職。専攻:哲学/倫理学/哲学

4-1. 論文

大北全俊 「HIV 感染症対策をめぐる倫理的な問題について」日本生命倫理学会編集委員『生命倫理』(日本生命倫理学会), 20, pp. 79-86, 2009/9

大北全俊 「医師としての職務に親和的なもの/親和的ではないもの——「告知」「インフォームド・コンセント」をめぐる医師の語りよ
り」輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会『医師と患者のライフストーリー』1, ネットワーク医療と人権, pp. 293-324,
2009/3

大北全俊 「F.ナイチンゲールの『看護覚え書』における「病者」へのまなざしについて」日本医学哲学・倫理学会編集委員『医学哲
学 医学倫理』(日本医学哲学・倫理学会), 26, pp. 63-72, 2008/10

大北全俊 「HIV 予防啓発のメッセージに応答するということ」日本生命倫理学会編集委員『生命倫理』(日本生命倫理学会), 19,
pp. 58-65, 2008/9

中岡成文, 大北全俊(共著) 「いま、看護倫理教育に求められる視点」『看護展望』33-10, メヂカルフレンド社, pp. 940-946,
2008/9

4-2. 著書

大北全俊(共編著) 『看護共通技法 事例で学ぶケアの倫理 改訂 2 版』メディカ出版, pp. 14-17, 22-25, 86-91, 2010/2

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

大北全俊 「感染症対策をめぐる倫理的な問題について」日本生命倫理学会第 21 回年次大会, 日本生命倫理学会, 2009/11

大北全俊, 白阪琢磨, 渡邊大 「急性感染者の早期発見の促進に関する倫理的な課題について」第 23 回日本エイズ学会学術集
会・総会, 日本エイズ学会, 2009/11

大北全俊 「HIV 感染症予防活動とその倫理的な問題」日本生命倫理学会第 20 回年次大会, 日本生命倫理学会, 2008/11

大北全俊 「インフォームドコンセントについて——HIV 陽性者を中心としたある団体の機関誌から」関西社会学会第 59 回大会,
関西社会学会, 2008/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-4 中国哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
3	1	1	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	3	0	1	1	0
'09	0	1	0	0	0
小計	3	1	1	1	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むための必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表(口頭発表・論文の投稿)を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了(卒業)後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室 HP の更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の研究は、

本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①新出土資料の研究を推進し、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を刊行する。③懷徳堂研究会の事務局として、懷徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する。などを目標として掲げた。

3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、財団法人懷徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懷徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進めて公開する。②台湾の大学と共催して国際学会を開催する。③懷徳堂アーカイブ講座(懷徳堂記念会)の開催準備を進め、運営に協力する。などである。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解読に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。また、修了を控えている学生に対し、論文作成の指導を行った。その結果、期間中、4 回生 3 名が卒業、博士前期課程 1 名、博士後期課程 1 名が修了してそれぞれ学位を取得した。また、大学院生 1 名については、日本学術振興会特別研究員に採用された。進路についても、随時相談に乗り、その結果、それぞれの希望する道に進むことができた。なお、懷徳堂事業や中国出土資料に関する研究情報について、研究室 HP に公開し、随時更新を行った。

2. 研究

新出土資料研究については、研究室に事務局を置く戦国楚簡研究会が中国山東省および北京清華大学、上海復旦大学の学術調査を行った。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に 5 冊(第 46 号～第 50 号)を刊行した。懷徳堂文庫の調査研究については、その成果の一部を『懷徳堂センター報 2009』や『懷徳堂研究』創刊号に掲載した(湯浅)。また、教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。特に、湯浅教授・池田助教は、台湾で開催された国際学会において 2 年連続で研究発表を行った。大学院生も、懷徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

3. 社会連携

具体的な成果として、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懷徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進め、北京大学(儒蔵編纂委員会)に提供した。②台湾での国際学会「国際学術研討会——東アジア文化の発生・変遷・交流——」を挙行し、全 20 名による研究発表が行われるという盛会であった。③懷徳堂事業については、懷徳堂アーカイブ講座の準備・運営に協力し、湯浅教授・池田助教が当日の講演を務めた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、などである。また、名古屋大学大学院の中国学関係研究室との定期的な研究交流についても、学生の学力向上に資するものとして評価できる。

2. 研究

設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていると自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。

3. 社会連携

国際学術交流は、儒蔵の編纂協力や国際学会の共催という形で十分に達成できたと自己評価できる。また、当研究室の伝統として、懐徳堂事業への積極的な関わりがあるが、この点も、教員・学生とも全面的な協力を努めており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	1	2
'09	0	1	1
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

草野友子 「中国新出土文献の思想史的研究」 2009/3
主査：湯浅邦弘 副査：高橋文治、荒川正晴

【論文博士】

陳望衡 「中国古典美学史」 2008/4
主査：湯浅邦弘 副査：上倉庸敬、高橋文治、横山弘

河田悌一 「近代中国思想史の研究——伝統思想から近代思想への展開」 2009/10
主査：湯浅邦弘 副査：片山剛、高橋文治、竹内弘行

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)
'09	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	1	0	0	0	0	1
'09	0	1	0	0	0	1
計	1	1	0	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

草野友子「上博楚簡《競建内之》、《鮑叔牙与隰朋之諫》の關係和其思想」『国際学術研討会——東アジア文化の發生・変遷・交流——予稿集』pp.1-13, 2008/10

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

草野友子「上博楚簡《競建内之》、《鮑叔牙与隰朋之諫》の關係和其思想」致遠管理学院応用日本語学科・大阪大学中国学会、於致遠管理学院, 2008/10/25

【2009年度】

〔博士前期〕

金城未来「上博楚簡『鄭子家喪』の研究——楚王故事としての特質について——」第九回 大阪大学・名古屋大学中国学研究室交流、大阪大学豊中キャンパス待兼山会館 2 階会議室, 2009/11/21

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士前期〕

金城未来「懷徳堂關係研究文献提要(二十六)」『懷徳』(懷徳堂記念会), 77, pp.67-71, 2009/1

金城未来「『張家山漢墓竹簡〔二四七号墓〕』解説(第一部 張家山漢簡解題)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 47, pp.81-87, 2008/12

〔博士後期〕

草野友子「懷徳堂關係研究文献提要(二十六)」『懷徳』(懷徳堂記念会), 77, pp. 71-75, 2009/1

草野友子「『張家山漢墓竹簡〔二四七号墓〕』解説(第二部 張家山漢簡関連文献提要)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 47, pp. 88-98, 2008/12

草野友子「新出土資料關係文献提要(九)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 46, pp. 91-101, 2008/6

【2009年度】

〔博士前期〕

竹村涉「懷徳堂關係研究文献提要(二十七)」『懷徳』(懷徳堂記念会), 78, pp.40-43, 2010/1

竹村涉「『上海博物館藏戦国楚竹書(七)』所収文献概要(一)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 48, pp. 152-158, 2009/6

金城未来「懷徳堂關係研究文献提要(二十七)」『懷徳』(懷徳堂記念会), 78, pp. 43-48, 2010/1

金城未来「『上海博物館藏戦国楚竹書(七)』所収文献概要(一)」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 48, pp. 149-151, pp.158-161, 2009/6

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

2009年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2008年度:3名 2009年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 3名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2008年度:0名 2009年度:0名

9. 刊行物

2008年度 『中国研究集刊』・半年刊(年2回)

2009年度 『中国研究集刊』(年3冊刊行)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受)	2000年～現在に至る
戦国楚簡研究会(研究会、研究会開催・事務局引受)	1998年～現在に至る
大阪大学中国学会(学会、事務局引受)	1984年～現在に至る
国際学術研討会——東アジア文化の発生・変遷・交流——(学会、大会共催)	2008年10月25日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第39回戦国楚簡研究会(大阪大学中国哲学資料室)	2009年12月19日
戦国楚簡研究会(第38回)特別公開講演(於待兼山会館2F会議室)	2009年12月18日
国際学術研討会——漢字文化圏の伝統と現代——(於明道大学)	2009年11月28日
第9回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会	2009年11月21日
第37回戦国楚簡研究会(於東京八重洲ビジネスセンター)	2009年10月11日
第36回戦国楚簡研究会(於東京(茅場町)ビジネスセンター)	2009年7月18-20日

第 11 回懷徳堂研究会(於待兼山会館特別室)
第 8 回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会
第 35 回戦国楚簡研究会(於ホテルアイボリー)

2009 年 1 月 31 日
2008 年 11 月 15 日
2008 年 10 月 10-11 日

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。専攻:中国哲学／中国古代思想史／懷徳堂研究。

1-1. 論文

湯浅邦弘 「戒書としての『君人者何必安哉』『竹簡が語る古代中国思想(三)——上博楚簡研究——』汲古書院, pp. 185-202, 2010/3

湯浅邦弘 「懷徳堂研究の可能性——韓国の書院と祖先祭祀儀礼から考える——」『懷徳堂研究』1, 大阪大学懷徳堂研究センター, pp. 3-13, 2010/2

湯浅邦弘 「清華大学竹簡と先秦思想史研究」『中国研究集刊』50, 大阪大学中国学会, pp. 280-288, 2010/1

湯浅邦弘 「中井履軒『大学雜議』の思想史的位置」『大阪大学大学院文学研究科紀要』46, 大阪大学文学研究科, pp. 1-38, 2009/3

湯浅邦弘 「蘇る懷徳堂四書——「儒蔵」編纂事業について——」『懷徳堂センター報 2009』大阪大学懷徳堂センター, pp. 3-7, 2009/2

湯浅邦弘 「上博楚簡『莊王既成』の「予言」」『竹簡が語る古代中国思想(二)——上博楚簡研究——』汲古書院, pp. 111-129, 2008/9

湯浅邦弘 「太子の「知」——上博楚簡『平王與王子木』——」『竹簡が語る古代中国思想(二)——上博楚簡研究——』汲古書院, pp. 131-143, 2008/9

湯浅邦弘 「上博楚簡『平王問鄭壽』における諫言と予言」『竹簡が語る古代中国思想(二)——上博楚簡研究——』汲古書院, pp. 145-166, 2008/9

湯浅邦弘 「戦国楚簡と儒家思想——「君子」の意味——」『竹簡が語る古代中国思想(二)——上博楚簡研究——』汲古書院, pp. 167-192, 2008/9

1-2. 著書

湯浅邦弘 『孫子の兵法入門』角川学芸出版, 230p., 2010/2

湯浅邦弘 『菜根譚』中央公論新社, 320p., 2010/2

湯浅邦弘 『諸子百家』中央公論新社, 312p., 2009/3

湯浅邦弘(編) 『江戸時代の親孝行』大阪大学出版会, 225p., 2009/2

湯浅邦弘 『墨の道 印の宇宙——懷徳堂の美と学問——』大阪大学出版会, 168p., 2008/12

湯浅邦弘 『孫子・三十六計』角川学芸出版, 271p., 2008/12

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

湯浅邦弘 「よみがえる中国の兵法」香港・中国ビジネスセミナー, 香港貿易発展局大阪, 2009/12

湯浅邦弘 「朱子『家禮』と懷徳堂『喪祭私説』」韓国国際学術大会「朱子家礼と東アジアの文化交渉」, 韓国国学振興院, 2009/11

湯浅邦弘 「懷徳堂研究の展開」国際学術研討会「漢字文化圏の伝統と現代」, 台湾明道大学, 2009/11

湯浅邦弘「再発見(大阪)——学問と道德の街——」国際ロータリー第 2660 地区 RYLA(ロータリー指導者育成プログラム)基調講演, 国際ロータリークラブ, 2009/5

湯浅邦弘「大阪の知——懐徳堂の精神と伝統——」第 47 回日本小児歯科学会大会, 日本小児歯科学会, 2009/5

湯浅邦弘「近世大阪の知——懐徳堂——」東北学院大学東北文化研究所公開講演会, 東北学院大学東北文化研究所, 2008/12

湯浅邦弘「懐徳堂研究の現在」国際学術研討会——東アジア文化の発生・変遷・交流——, 致遠管理学院応用日本語学科・大阪大学中国学会, 2008/10

湯浅邦弘「中国の思想——『三十六計』と『菜根譚』——」中国現地法人経営研究会, ジェトロ大阪本部, 2008/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号: 17320012

研究題目: 戦国楚簡の総合的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 3,400,000 円 間接経費 1,020,000 円

研究の目的:

本研究は、平成 12～15 年度の科学研究費補助金・基盤研究(B)の交付を受けて推進した「戦国楚系文字資料の研究」(研究代表者:竹田健二)の成果を踏まえ、更にそれを格段に発展させることを目的とした共同研究である。前研究では、1998 年に公開された郭店一号楚墓出土竹簡を対象とし、その全容をほぼ解明することに成功したが、本研究では更に 2001 年から公開が始まっている上海博物館蔵戦国楚竹書をも対象に加え、その全容の解明と中国古代思想史の再構築を図る。

1-6-2. 2009 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号: 21320012

研究題目: 戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究

研究経費: 2009 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 780,000 円

研究の目的:

本研究は、現在、中国古代思想史研究の分野で世界的に注目を集めている戦国楚簡の解読を進め、中国古代思想史、特に先秦思想史の形成と展開を明らかにすることを目的とする。具体的には、現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』(馬承源主編、上海古籍出版社)に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、また、中国・台湾などで活発な活動を続けている出土文献関係の学会・研究会と学術交流を進める。従来通説に大幅な修正を加えた、新しい中国古代思想史の記述を行いたい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2009 年度～2010 年度、研究助成、助成金獲得者:湯浅邦弘

助成金名: 三菱財団人文科学研究助成

研究題目: 中国新出楚系文献の思想史的研究

助成団体名: 三菱財団

助成金額: 2009 年度 直接経費 1,100,000 円

研究の目的:

1993 年に発見された郭店楚墓竹簡(郭店楚簡)、およびその翌年に上海博物館が入手した戦国楚簡(上博楚簡)は、中国思想史の研究に劇的な事態をもたらしている。これらの竹簡群は、大量の古逸文献および伝世諸資料と密接な関係を持つ文献であり、その総数は 100 種を超えるとされる。これらは、ただちに世界的な注目を集め、諸外国で次々に国際会議が開催されている。中国

古代思想史研究に全く新たな局面が訪れたと言ってもよい。こうした状況を受けて、本研究は、郭店楚簡・上博楚簡の内、特に楚の現地性文献と推測される資料を取り上げ、精密な積読作業を踏まえながら、その地域的特性や思想史的意義を解明する。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・評議員	2008年2月～現在に至る
全国漢文教育学会・評議員	2005年4月～現在に至る
日本道教学会・理事	2004年4月～現在に至る
懐徳堂研究会・代表	2000年4月～現在に至る
中国出土資料学会・理事	1999年4月～現在に至る

2. 辛賢講師

1967年、ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻：中国哲学、漢代易学。

2-1. 論文

辛賢 「王弼忘象論再考」渡邊義浩(編)『両漢儒教の新研究』汲古書院, pp. 457-482, 2008/12

辛賢 「揺れ動く「象」——その重層性をめぐっての試論——」三国志学会(編)『狩野直禎先生傘寿記念 三国志論集』汲古書院, pp. 69-98, 2008/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

辛賢 「鄭玄と王弼」三国志学会大会(第4回), 龍谷大学, 2009/9

辛賢 「易緯中的世軌与『京氏易伝』」中国古代科学技術文化及其現代啓示学術研討会(中国社会科学院・中国科学院共催)中国社会科学院王府井訪問学者公寓, 2008/11

辛賢 「王弼の「象」とその背景」六朝学術学会(第12回), 斯文会館, 2008/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞(哲学・思想部門), 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・評議員	2008年1月～現在に至る
日本中国学会・HP委員会委員	2007年4月～現在に至る
三国志学会・評議員	2006年7月～現在に至る

2-5 インド学・仏教学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：榎本 文雄

講師：堂山英次郎

助教：生野 昌範

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	6	1	0	0	0	1	0	1

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	2	1	0	0	0
'09	0	1	1	0	0
小計	2	2	1	0	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力を置き、以下の更なる目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤を支援することも目標として掲げた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・協力を教員が主導して促進することを目標とした。各教員には平均で2本以上、博士後期課程の大学院生には1本以上の学術論文や口頭発表を数値目標として設定した。また教員については、科研ほかの外部資金によるプロジェクトを主宰するか、もしくは共同研究者として中心的役割を果たすことを目標とした。

3. 社会連携

年度目標は設けなかった。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、既に2007年度から始めていた書評発表などの新たな形を定着させ、また臨時で教員が発表したり、学外からゲストスピーカーを迎えるなどして、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。2009年度には、京都大学で開催された国際サンスクリット学会に学生がアルバイトとして参加する機会を設け、国際的知見を高めた。

2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流を活発に行なった。論文等に関する目標については、教員1名が完全な達成に至らなかったが、学生に関してはほぼ目標を達成した。教員のプロジェクト等への参与については、教員1名が他研究者による2種類の科学研究費の研究分担者となり、重要な役割を担った。そのうちの一つでは、本専門分野の招へい研究員や、本専門分野出身の他大学非常勤講師、さらに本専門分野の教室助手を研究協力者として、インド仏教の基本的術語の基準訳語集を構築するために、それら術語の定義的用例を収集する作業を実施した。

3. 社会連携

教員1名が2009年度の夏休みに「古代インドの思想」と題して大阪の京橋で3回の連続講演を実施した。また、教授会メンバーの教員はいずれも「日本印度学仏教学会」等で理事・評議員等の職務を遂行している。さらに、教員1名は2009年度に京都大学で開催された国際サンスクリット学会の準備委員や実行委員、当日の司会等を務めた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力が上がった。また上記のような、多彩かつ風通しのよい演習授業を行なった結果、卒業論文・修士論文が、程度の差こそあれ幅広い視点や掘り下げた議論で構成されるようになった。つまり、研究室内の切磋琢磨が促進され、学部生・院生ともに論理的思考や知識・議論のレベルが全体的に上がったと言え、設定目標は達成できたと考えられる。古典文献の読解が中心の分野だけに、レベルアップやその速度には個人差があるが、学生1人1人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、全体のレベルアップにつながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

2. 研究

教員1名の目標未達成以外は、ほぼ目標を達成したと言える。長期に亘る研究や執筆など、年度内に必ずしも成果が

数値に出ないケースもあることを考慮すれば、今後の目標設定のあり方を練り直すべきかもしれない。ただし、そうした数値化されない一部分以外は、教員・学生の論文執筆や学会参加などの研究活動がほぼ目標通りになされたこと、また教員1名がプロジェクトでの重要な役割を担ったことから、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

社会連携について目標は設定しなかったが、前記の活動の概要を踏まえて自己評価すれば、一定の成果は達成されたと考えられよう。したがって、次年度に目標を設定し得る状況にあると評価される。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	0	0
'09	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
'09	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	0	1	0	0	1
'09	0	1	0	0	0	1
計	0	1	1	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

富田真理子『『スッタニパータ』『ヴァンギーサ経』における涅槃について』『待兼山論叢(哲学篇)』(大阪大学文学会)、第42号、(pp.49-65)、(2008/12)

【2009年度】

〔博士後期〕

池田宣幸「utsannayajñā- について」『印度學佛教學研究』(日本印度学仏教学会)第五十八卷第二号、(pp.869-866)、(2010/3)

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

池田宣幸「諸方位のアヴァ・イシュティ、アディティとマルト達に捧げる犠牲祭」(Vādhūla-Śrautasūtra 10.11.1-13 と関連資料)、京都大学人文科学研究所共同研究「王権と儀礼」、第43回研究会、2009/1/23

【2009年度】

〔博士後期〕

池田宣幸「utsannayajñā- について」、日本印度学仏教学会、第六十回学術大会、於大谷大学、2009/9/9

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2008年度:0名 2009年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008 年度：0 名 2009 年度：0 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998 年度より 4 ヶ月に 1 回「中央アジア学フォーラム」（東洋史学専門分野と共同で主催）

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 榎本文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月現職。専攻：インド仏教学。

1-1. 論文

榎本文雄 「「四聖諦」の原意とインド仏教における「聖」」『印度哲学仏教学』(北海道印度哲学仏教学会), 24, pp. 354-336, 2009/10

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

榎本文雄 「インド仏教における葬儀と墳墓に関する研究動向」第 39 回東南アジア彫刻史研究会, 大阪人間科学大学, 2009/6
榎本文雄 「四聖諦とその周辺」北海道印度哲学仏教学会第 79 回研究例会, 北海道印度哲学仏教学会, 北海道大学, 2008/10
榎本文雄 「初期仏教の基本的術語とその翻訳上の諸問題」第 53 回国際東方学会議, 東方学会, 日本教育会館, 2008/5
(*Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*, 53, pp. 98-99, 2009/1)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・監事	2009年9月～現在に至る
日本西蔵学会・委員	2005年10月～現在に至る
仏教史学会・評議員	2003年11月～現在に至る
東方学会・評議員	2003年9月～2009年8月
インド思想史学会・理事	2003年4月～現在に至る
パーリ学仏教文化学会・理事	1999年4月～現在に至る
日本印度学仏教学会・理事	1996年4月～現在に至る
日本仏教学会・理事	1996年4月～現在に至る

2. 堂山 英次郎 講師

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(東北大学)、博士(文学、東北大学)。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月現職。専攻：インド・イラン文献学、比較言語学。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堂山英次郎 「「賽賭博」及び「縁起の良い名前」(Vādhūla-Śrautasūtra 10.8.14-28 と関連資料)」京都大学人文科学研究所共同研究「王権と儀礼」第35回研究会，京都大学人文科学研究所「王権と儀礼」共同研究班，2008/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 平成20年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞，大阪大学，2009/2

堂山英次郎 第50回日本印度学仏教学会賞，日本印度学仏教学会，2008/9

堂山英次郎 日本南アジア学会第1回学会賞，日本南アジア学会，2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第3回学会賞，印度学宗教学会，2006/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本印度学仏教学会・評議員

2004年7月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員

2004年6月～現在に至る

3. 生野 昌範 助教

1975年生。大阪大学文学部卒、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)、博士(文学、大阪大学)。2010年4月から現職。専攻:インド仏教学。

3-1. 論文

SHŌNO, Masanori, A Re-edited Text of the *Varṣāvastu* in the *Vinayavastu* and a Tentative Re-edited Text of the *Vārṣikavastu* in the *Vinayasūtra*, *Acta Tibetica et Buddhica*, 3, pp. 1-128, 2010/3

生野昌範「仏教の出家者が遵守すべき *kriyākāra*」斎藤明(編)『印度學佛教學研究』(日本印度学仏教学会), 58-1, pp. 354-351, 2009/12

生野昌範「律における罪の分類方法——身体／言葉／心」木村宣彰(編)『日本佛教學會年報』(日本佛教學會), 74, pp. 217-229, 2009/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

生野昌範「仏教の出家者が遵守すべき規定について」日本印度学仏教学会第60回学術大会, 日本印度学仏教学会, 大谷大学, 2009/9

生野昌範「律における罪と倫理」日本佛教学会2008年度学術大会:戒律と倫理, 日本佛教学会, 叡山学院, 2008/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：川村 邦光、杉原 達、富山 一郎、平田 由美

准教授：北原 恵

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
67	11	40	0	0	0	1	3	0

※うち留学生 15 名、社会人学生 5 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	17	10	3	5	1
'09	18	4	3	2	0
小計	35	14	6	7	1

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の4点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員による個人指導を一層充実させる(個人指導の徹底)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、非専門家とのコミュニケーション能力の向上を図る(非専門家との連携)。④自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑤自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じてコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

2. 研究

研究については掲げた目標は、以下の 3 点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果を『日本学報』において発信する（『日本学報』の活用とその内容の充実）。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける（研究に関わる討議空間の創出）。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する（研究ネットワークの強化）。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指した。いいかえれば、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備がポイントになった。かかる課題牽引型の研究形態は、現在、総合的な地域研究ならびに米国におけるアメリカ研究といった、自己言及的な人文学において国際的に追究されている。

3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の 2 点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携について、とりわけ重視したのは、オーディエンスとして市民を呼び込むことのみならず、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程自体に市民の参加を求めた点にある。またその際、NPO、NGO をはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導において、より充実した開かれた環境が達成されつつある。具体的には複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が強化された。また学外者とのコミュニケーションも深まった。特に注目すべき点は、領域横断的なカリキュラムである「日本学方法論の会」において院生主導のシンポジウムが複数実現したことである。またさらに学部生も自発的な議論の場を持つようになった。具体的には「学部生研究会」（2009 年 4 月）がおこなわれ、2008 年度の研究成果が発表された。他にもマンガやアニメといったポピュラーカルチャーにかかわる学生や院生による研究の自主的な情報発信も、随時おこなわれている。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

2. 研究

上記の「日本学方法論の会」の成果を、『日本学報』において特集として発信した。また京都大学や立命館大学、神戸大学といった関西圏の大学との連携も一層深まりつつある。また、京都国際マンガミュージアム、兵庫県立歴史博物館などに就職している修了生たちとの情報交換も拡大し、見学会なども随時おこなっている。また演習以外の研究会も多く開催され、他大学、他研究機関のハブとして日本学の間が機能しつつある。こうした動きを受けて、2008 年には日本学を中心として国際現代文化研究ハブが設立された。以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。また大阪大学グローバル COE「コンフリクトの人文学」プロジェクトの研究フォーカスである「横断するポピュラーカルチャー」においても、日本学が中心的な役割を果たしている。

3. 社会連携

研究会やシンポジウムには、他大学の研究者以外にも非専門家や市民が多く参加している。また大阪で活動する NPO や NGO のグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行なわれている。さらに恒例となりつつある原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深化がすすんだ。また、学部生も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれ、文字通り議論の場としての日本学が構築されてきている。個々の研究もこうした複数の研究組織により生み出され維持されている。こうしたなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず出版やマスコミをはじめ多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

研究に関わる上記の活動により、博士論文の執筆ならびにその出版物としての刊行がすすんだ。また他の個人研究においても多くの研究成果が公表され高い評価を受けている。研究環境については、議論のハブとしての役割は定着し、学外、非専門家との恒常的なネットワークも拡大した。こうした研究環境が個々の研究に反映されていったものと考えられる。以上より、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、市民の研究会やシンポジウムへの参加はもとより、大阪で活動する NPO や NGO ならびに在野の研究グループとの恒常的な連携がすすんだ。またこうした社会連携が、上記の教育活動や研究活動とも有機的に関連しはじめている。以上より、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	5	0	5
'09	2	0	2
計	7	0	7

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 伊賀みどり 「開業助産婦を通してみる出産文化の変容——「自然」と「医療」の間で——」 2008/9
主査：荻野美穂 副査：川村邦光・北原恵
- 花森重行 「複数形の歴史に向けて——戦後日本の思想空間における歴史記述と実践をめぐる葛藤——」 2008/9
主査：富山一郎 副査：杉原達・川村邦光
- 崔博憲 「マイノリティを生きるということ、あるいは蝙蝠であるということ」 2009/3
主査：富山一郎 副査：荻野美穂・杉原達
- 畑中小百合 「素人演劇の研究——学校と農村から——」 2009/3
主査：川村邦光 副査：杉原達・北原恵
- 小山有子 「近現代日本女性服装論 ——性差の規範性を彩る「女らしさ」と「女性美」——」 2009/3
主査：荻野美穂 副査：川村邦光・北原恵
- 川越道子 「悶え神の政治学——大震災以降の神戸が語る戦争と越境——」 2010/3

主査：富山一郎 副査：川村邦光・北原恵・杉原達
 中本剛二 「現代医療のエスノグラフィ」 2010/3
 主査：川村邦光 副査：杉原達・富山一郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	6(6)	9(9)	2(2)	6(1)	23(18)
'09	2(2)	7(7)	1(0)	5(0)	0(0)	15(9)
計	2(2)	13(13)	10(9)	7(2)	6(1)	38(27)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	2	1	0	1	4
'09	0	3	3	1	0	7
計	0	5	4	1	1	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文・単行本

【2008年度】

〔博士前期〕

川口葉子「戦時下のキリスト教会をめぐる——『福音新報』と「戦争責任告白」から『Cultures/Critiques』pp.118-150, 2009/3

川口葉子「日本におけるキリスト教家族像——家族写真を手がかりに——」『家族写真の歴史民俗学的研究 研究成果報告書』 pp. 46-57, 2009/3

成恵珍「祭りを支える女性たち」『Cultures/Critiques』 pp. 55-68, 2009/3

成恵珍「母と兄と弟、そして父の写真から家族の「きずな」を語る——映画『わが兄』の家族写真を中心に——」『家族写真の歴史民俗学的研究 研究成果報告書』 pp.33-45, 2009/3

高橋佳子「祭りの継承とヤナギの位相——鳥取県智頭町芦津にて——」『家族写真の歴史民俗学的研究 研究成果報告書』 pp.58-115, 2009/3

竹原明理「生人形という言葉をめぐる」『Cultures/Critiques』 pp.69-89, 2009/3

林曉淳「台湾における結婚写真の変遷と位相——20世紀初頭から現在まで——」『家族写真の歴史民俗学的研究 研究成果報告書』 pp. 7-32, 2009/3

エベンシュヴァンガ・ヨーク「鳥山石燕の妖怪変化図録『画図百鬼夜行』——その背景と内容——」『Cultures/Critiques』 pp. 90-100, 2009/3

〔博士後期〕

石山祥子「民俗芸能は「旅」する——黒川能下座・パリ公演をめぐる諸相」『Cultures/Critiques』 pp. 245-260, 2009/3

- 宇都宮めぐみ「「当事者性」とポジショナリティ——私が「日本」を問うこと、留学生を研究対象とすること——」『日本学報』28, pp. 141-150, 2009/3
- 沈正明「「民族」の境界を越える愛の行方——ドラマ『東京湾景』から考える——」『日本学報』28, pp. 151-164, 2009/3
- 染川清美「日本語残留孤児の居場所——日本統治後の台湾日本語俳句の空間から——」『日本学報』28, pp. 89-114, 2009/3
- 崔恩珠「「民族」のなかの女性、その限界と可能性——民族教会の“愛”と“奉仕”をめぐる——」『日本学報』28, pp. 45-66, 2009/3
- 崔恩珠「「民族」の中の女性、その限界、あるいは可能性」『Cultures/Critiques』 pp. 151-166, 2009/3
- 鄭柚鎮「軍隊のある社会で凝視すべき身体という言葉——軍事化という過程に関する小考」『インパクション』163, pp. 77-86, 2008/5
- 鄭柚鎮「군대가 있는사회에서 군대없는 세상을 상상한다는것」『아메리카군대를기소한다주한미군범죄근절운동본부 15주년』인 출판(「軍隊のある社会で軍隊のない世界を想像するということ」『アメリカ軍隊を起訴する——駐韓米軍犯罪根絶運動本部 15年記念』駐韓米軍犯罪根絶運動本部, イン出版(図書), pp.128-139, 2008/10
- 鄭柚鎮「「慰安婦」問題へのもう一つの視座を探る——山下英愛『ナショナリズムの狭間から』をめぐる省察」『インパクション』167, pp. 123-134, 2009/2
- 鄭柚鎮「軍隊のある社会で凝視すべき身体という言葉——志願制への主張(韓国)と基地撤去論(沖縄/日本)をめぐる小考——」『日本学報』28, pp. 31-44, 2009/3
- 戸田弘子「「加持祈祷」という心身(治療)の近代——中村古峯の「精神療法」再考——」『Cultures/Critiques』pp. 185-210, 2009/3
- 増子美緒「オシラサマ信仰における地域的展開の諸相——近代北海道を事例として——」『Cultures/Critiques』 pp.211-228, 2009/3
- ムズラックル・ハリト「桂枝雀の英語落語——Rakugoの発見をめぐる——」『Cultures/Critiques』1, pp. 32-54, 2009/3
- ムズラックル・ハリト「“ガイジン”と高座——Rakugoの(不)可能性をめぐる——」『家族写真の歴史民俗学的研究 研究成果報告書』 pp. 116-131, 2009/3
- 林白玖「日本植民地時代における台湾女性史——余暇について——」『日本学報』28, pp. 67-88, 2009/3
- 【2009年度】**
- 〔博士後期〕
- 柿田肇「言葉の意味と存在が生み出す舞台」『宝塚イズム 8』青弓社, pp. 72-77, 2009/6
- 柿田肇「きょうも、ビルの一言をみんなが待っている」『宝塚イズム 9』青弓社, pp. 70-75, 2009/9
- 柿田肇「魔女という幻想装置と、現実装置としての魔女」『宝塚イズム 10』青弓社, pp. 45-50, 2009/12
- 柿田肇「底知れない悪に遭遇するとき」『宝塚イズム 11』青弓社, pp. 48-52, 2010/3
- 成恵珍「今宮戎神社「十日戎」における宝恵駕行列と福笹をめぐる」『日本学報』29, pp. 133-149, 2010/3
- 沈恬恬「ベンヤミンのモノ——ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』再考」『独文学報』第25号, 大阪大学ドイツ文学会編, pp. 91-104, 2009/11
- 沈恬恬「ナショナリズムの形——『想像の共同体』から——」『日本学報』29, pp. 117-132, 2010/3
- 染川清美「日台俳句会の国際俳句的視座による一考察——「なると俳句会」と「台北俳句会」の例をもとにして——」俳句誌『なると』8月号, pp. 69-92, 2009/8
- 竹原明里「展示装置としての生人形——衛生博覧会での展示をめぐる——」『日本学報』29, pp.17-39, 2010/3
- 戸田弘子「治療の場の「真(マコト)」について—— 適応指導教室で出会ったAの事例——」『心の諸問題論叢』J-Stage 電子ジャーナル, pp. 66-77, 2009/7/14
- 土井智義「「指紋押捺」と戦後沖縄社会——「非琉球人」の歴史にふれつつ——」『日本学報』29, pp. 71-74, 2010/3
- 土井智義「構造的な共同性——岡本恵徳「水平軸の発想」を中心に——」『待兼山論叢』43, pp. 19-38, 大阪大学文学会, 2009/12
- 鄭祐宗「外国人登録法制における登録制と身分証性の性格に関する基礎的考察」『日本学報』29, pp. 45-66, 2010/3
- 鄭柚鎮「軍「慰安婦」のことを記憶するという——「女性のためのアジア平和国民基金」をめぐる議論を中心に——」

『日本学報』29, pp. 105-116, 2010/3

ムズラックル・ハリト「枝雀落語の劇的空間——虚構と現実のあいだをめぐる——」『日本学報』29, pp. 1-16, 2010/3

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

石山祥子「ふたつの「農民芸術」——黒川能と真壁仁——」日本民俗学会第60回年会,熊本大学(熊本市),2008/10/5

鄭柚鎮「「慰安婦」問題へのもう一つの視座を探る」山下英愛『ナショナリズムの狭間から』(明石書店、2008年)をめぐるジェンダー研究会,立命館大学 主催:立命館大学国際言語文化研究所プロジェクトA1 共催:「女性・戦争・人権」学会(京都市),2008/9/28

染川清美「ポストコロニアル台湾日本語俳句の自他の空間」日本社会学会,東北大学(仙台市),2008/11/23

沈恬恬「移動するモノ——お土産をめぐる思考」国際シンポジウム「移動とアイデンティティ」大阪大学中之島センター(大阪市),2008/8/24

【2009年度】

〔博士前期〕

鎌倉祥太郎「津村喬における「日常性」批判の射程」第3回横断するポピュラーカルチャー研究交流ワークショップ,大阪大学(豊中市),2010/3/20

〔博士後期〕

柿田肇「宝塚とは誰のものか?——ファン像を踏まえて、「宝塚」の1930年代後半を展望する」日本伝統音楽研究センター,プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」京都市立芸術大学(京都市),2009/1/24

柿田肇「宝塚とは誰のものか?——ファン、当局者、そして今、記述する私について 1930年代後半の動向を起点に」第3回「横断するポピュラーカルチャー」研究交流ワークショップ,大阪大学(豊中市),2009/3/20

沈恬恬「ベンヤミンの物——W・ベンヤミン『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』を巡って——」社会思想史学会第34回大会,神戸大学(神戸市),2009/10/31

戸田弘子「Buddhist Healer in Modern Japan」東 ASIA 宗教文化学会第1回国際学術大会,北海道大学(札幌市),2009/8/16

戸田弘子「「心理臨床科学」の宗教」日本宗教学会学術大会,京都大学(京都市),2009/9/11

パイエ由美子「合気道とは:フランスと合気道」京都日仏文化交流協会(京都市),2009/3/28

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士前期〕

竹原明理「香西豊子『流通する人体』: 献体・献血・臓器提供の歴史」(勁草書房、2007年)『Cultures/Critiques』pp. 291-298, 2009/3

〔博士後期〕

鄭柚鎮「歴史の向こうに待っていたもの——ある商業映画の語る「光州」」『インパクション』164, pp. 149-160, 2008/7

日高由貴「紡ぎだされることばによせて——マイク・モラスキー『戦後日本のジャズ文化: 映画・文学・アングラ』(青土社、2005年)『Cultures/Critiques』 pp.282-290, 2009/3

廣岡浄進「「日常」をゆさぶる——大学における教職課程科目としての「人権教育」」『グローブ』54, 世界人権問題研究センター, pp. 12-13, 2008/7

廣岡浄進「(書評)趙寛子『植民地朝鮮/帝国日本の文化連環——ナショナリズムと反復する植民地主義』」『歴史学研究』850, 歴史学研究会, pp. 53-55, 2009/2

廣岡浄進「結婚と部落差別」『京都市民しんぶん』803, p.5, 2009/3/1

【2009年度】

〔博士後期〕

澤田正太郎「書評：樋口浩造『「江戸」の批判的系譜学——ナショナリズムの思想史——』』『日本学報』29, pp. 205-207, 2010/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD: 0名 DC2: 3名 DC1: 1名 (計4名)

2009年度 PD: 0名 DC2: 2名 DC1: 2名 (計4名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2009年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

廣岡浄進 博士後期課程単位修得退学、大阪観光大学、講師、2009/4

本多彩 博士後期課程単位修得退学、兵庫大学、講師、2010/3

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2008年度: 1名 2009年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2008年度: 0名 2009年度: 0名

9. 刊行物

2008年度 『日本学報』28、『Cultures/Critiques』

2009年度 『日本学報』29

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2008年度第1回日本学方法論の会(担当 荻野美穂)

日付・場所 2008年8月6日 大阪大学文41教室

テーマ 姓名・身体と先端科学技術

報告者 島菌進(東京大学)・荻野美穂

コメンテータ 永岡崇(大阪大学大学院生)

共催 国際現代文化研究ハブ

2008年度 講演会(担当 北原恵)

日付・場所 2008年12月17日 大阪大学 21世紀懐徳堂多目的スタジオ

テーマ 日本を語る位相——アメリカ研究とアジア研究のポストナショナル

講演者 米山リサ(カリフォルニア大学サンディエゴ校)

共催 国際現代文化研究ハブ

2009年度第1回国際日本学研究会(担当 川村邦光)

日付・場所 2009年4月17日 大阪大学日本学B教室

テーマ 日本軍特殊潜航艇によるシドニー湾攻撃のその後：遺体と遺物をめぐって

講演者 田村恵子(豪国立大学太平洋アジア研究所)

共催 国際現代文化研究ハブ

2009年度日本学方法論の会(担当 杉原達)

日付・場所 2009年7月15日 大阪大学 21世紀懐徳堂多目的スタジオ

テーマ いま、指紋押捺を再考する

報告者 李東石(在日高麗労働者連盟)・板垣竜太(同志社大学)・鄭祐宗(大阪大学大学院生)・アンジェロ・イシ(武蔵大学)

共催 大阪大学大学院文学研究科・国際現代文化研究ハブ

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 川村 邦光 教授

1950年生。1984年東北大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(東北大学)。天理大学文学部助教授、同教授を経て、1997年10月現職。専攻：民俗学／宗教学／民衆思想史。

1-1. 論文

川村邦光 「亡霊と弔い」『文化／批評』(国際日本学研究会), 1, 国際日本学研究会, pp. 261-281, 2009/3

川村邦光 「洋食とは何か?」『Vesta』72, 味の素食の文化センター, pp. 2-5, 2008/11

川村邦光 「地獄絵と地獄巡り」『アート・トップ』221, 芸術新聞社, pp. 10-15, 2008/5

1-2. 著書

川村邦光(編)『セクシュアリティの表象と身体』臨川書店, 252p., 2010/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:川村邦光

課題番号: 18320141

研究題目: 家族写真の歴史民俗学的研究

研究経費: 2008年度 直接経費 3,200,000円 間接経費 960,000円

研究の目的:

幕末維新期から現在にかけて、欧米から導入された写真技術によって、写真が撮影され続けるなかで、家族写真の撮影が人生の節目を刻んでゆく一種の民俗的慣行となっていたことを明らかにし、家族写真の構図や被写体の配置・ポーズなどを分析して、家族観や家族制度の変遷を考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本宗教学会・常任理事

2007年10月～現在に至る

2. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業。1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977-91年、関西大学経済学部助手、専任講師、助教授、教授を経て、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院教授。専攻: 日本学／文化交流史。

2-1. 論文

杉原達 「いま、指紋押捺を問い直す」 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』29, pp. 1-5, 2010/3

杉原達 「発信する「猪飼野」——2009年8月・大阪府立桃谷高校の試みから——」 神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター『海港都市研究』5, pp. 57-63, 2010/3

杉原達 「中国人強制連行に関与した土木建築企業に対する国家補償金供与について」 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室『日本学報』28, pp. 1-29, 2009/3

杉原達 「見つめる人びと——強制連行された中国人家族の写真から——」 川村邦光(編)『家族写真の歴史民俗学的研究』大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp. 1-6, 2009/3

杉原達 「中国人強制連行」 金富子・中野敏男(共編)『歴史と責任』青弓社, pp. 253-255, 2008/6

2-2. 著書

杉原達他(共著) 『歴博フォーラム 戦争と平和』東京堂出版, pp. 103-125, 2010/3

杉原達他(共著) 『移民・難民・外国人労働者と多文化共生』有志舎, pp. 41-61, 2009/5

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

杉原達 「戦争と植民地」第70回歴博フォーラム:戦争と平和, 国立歴史民俗博物館, 東商ホール, 2009/8(『歴博フォーラム 戦争と平和』pp. 103-125, 2010/3)

杉原達 「基調提起「いま、指紋制度を問い直す」」大阪大学日本学研究室 2009年度日本学方法論の会:いま、指紋制度を問い直す, 大阪大学日本学研究室, 大阪大学, 2009/7(『日本学報』29, pp. 1-5, 2010/3)

Sugihara, Toru, "Empire, people crossing the borders, and their lives : a history of Koreans in Osaka through newspapers and pictures" International workshop at National Library of Australia: Discovering histories of Foreign Communities in Japan, National Library of Australia & The Australian National University, National Library of Australia, 2008/12(*Discovering Histories of Foreign Communities in Japan*, pp. 16-17, 2008/12)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 富山 一郎 教授

1957年生。1989年京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。1989年－1997年まで神戸市外国語大学助教授、その後大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009年4月より現職。専攻：歴史学・文化理論。

3-1. 論文

富山一郎 「大学の危機」『インパクション』173, インパクト出版会, pp. 10-17, 2010/3

富山一郎 「土着與流亡的邂逅」『台湾社会研究』(台湾社会研究会), 72, 台湾社会研究会, pp. 191-203, 2008/12

富山一郎 「基地と振興の中で抵抗運動を再考するために」『インパクション』163, インパクト出版会, pp. 20-29, 2008/5

3-2. 著書

富山一郎 (単著) 『暴力の予感』グリーンビー出版, 378p., 2009/3

富山一郎 (共著) 『性の分割線』青弓社, pp. 275-306, 2009/3

富山一郎 (共著) 『歩きながら問う』インパクト出版会, pp. 266-278, 2008/7

富山一郎 (共著) 『歴史学のフロンティア』大阪大学出版会, pp. 166-190, 2008/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

富山一郎 (翻訳) 「カリフォルニア大学バークレ校における運動組織の植民地性」(訳)『インパクション』173, インパクト出版会, pp. 88-94, 2010/3

3-4. 口頭発表

富山一郎 「記憶という問題、あるいは社会の未決性(openness)について」ローカリティーの人文学, 釜山大学(韓国), 釜山大学, 2009/10

Tomiyama, Ichiro, "The Issue of Emotional Memories in Historical Narrative" Okinawa Conference, 英国国立日本研究所, シェフィールド大学, 2009/3

富山一郎 「日本研究の現在と課題」ハノイ国家大学, ハノイ国家大学(ベトナム), 2008/12

富山一郎 「土着と流亡の邂逅」東アジアにおける批判的雑誌会議: 和解的路障, International Center for Taiwan Social Studies,

世新大学(台湾), 2008/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

富山一郎 地域農林経済学会賞(奨励賞), 地域農林経済学会, 1991/11

富山一郎 農業史研究会賞, 農業史研究会, 1988/3

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

4. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究。

4-1. 論文

Hirata, Yumi, “여성의 改鑄——근대 일본의 ‘女伝’이라는 인설”『大東文化研究』(成均館大学東アジア学術院), 65, 成均館大学東アジア学術院, pp. 111-150, 2009/3

4-2. 著書

Hirata, Yumi, *여성 표현의 일본 근대사: 여류 작가의 탄생 전야*, Somyong Publishing, 280p., 2008/6

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

玉井暉, 米井力也, 平田由美 他「横断する文学としての文学環境論」『待兼山論叢』42, pp. 72-115, 2008/12

平田由美 「移動、女性、かたり」『ジェンダーのグローバリゼーション分析(平成16年度～19年度科学研究費補助金研究成果報告書)』pp. 12-40, 2008/5

4-4. 口頭発表

平田由美 「「引揚げ」物語をめぐるジェンダーと言語」国際シンポジウム:越境と言語, 韓国東国大学校日本研究所, 2010/1

平田由美 「グローバリゼーション研究としての人文学:19世紀北東アジアにおけるジェンダー言説の移動」講演会:社会科学と人文学の対話, 中国社会科学院日本研究所, 2009/11

Hirata, Yumi, “Repatriation / Repatriarchalization: Literary discourse in postwar Japan”, International Convention of Asian Scholars: Think Asia!, 2009/8

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号: 19520154

研究題目: 近代日本における「移動文学」のジェンダー分析

研究経費: 2008年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2009年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

20世紀の日本文学を「移動の文学」という視点から再考することを目的に、記号や消費行動など現代社会の表層的事象の底流にある、個別的でありながら普遍的な営みとしての人の「移動」と、国境や言語を越える行為から生み出される「文学」の可能性をグローバルな文脈において探究する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・大学教育推進事業委員会大学部会専門委員

2009年5月～2009年12月

同上

2008年6月～2008年12月

5. 北原 恵 准教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美學及び芸術學)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年より現職。専攻: 表象文化論/ジェンダー研究。

5-1. 論文

北原恵 「お姉ちゃんが帰ってきた(展覧会批評)」『イメージ&ジェンダー』(イメージ&ジェンダー研究会), 10, 彩樹社, pp. 112-113, 2010/3

北原恵 「巻頭言:新しい編集体制で、あらたな出発を！」『イメージ&ジェンダー』(イメージ&ジェンダー研究会), 10, 彩樹社, pp. 4-5, 2010/3

北原恵 「欠損・切断された男性身体——古沢岩美の敗戦体験とく主体>」『アジア現代女性史』(アジア現代女性史研究会), 5, アジア現代女性史研究会, pp. 88-95, 2009/12

北原恵 「変貌する中国現代美術——女性アーティストの現場を訪ねて」『インパクション』171, インパクト出版会, pp. 124-133, 2009/10

北原恵 「<<遠近を抱えて>>の遠景と近景——戦後美術における天皇表象」『インパクション』170, インパクト出版会, pp. 114-127, 2009/8

北原恵 「古沢岩美の描いたく慰安婦>——戦争・敗戦体験と主体の再構築」『インパクション』169, インパクト出版会, pp. 122-133, 2009/6

北原恵 「私たちはなぜ家族写真を撮り続けるのか——天皇一家のイメージをめぐる戦後の議論」『インパクション』168, インパクト出版会, pp. 114-121, 2009/4

北原恵 「現代アートとジェンダー」牟田和恵(編)『ジェンダー・スタディーズ』大阪大学出版会, pp. 44-63, 2009/3

北原恵 「『マッカーサー元帥レポート』と戦争画、その後——アラキミツコの戦史編纂への関与」『インパクション』167, インパクト出版会, pp. 108-111, 2009/2

北原恵 「元旦新聞にみる天皇一家像の形成」荻野美穂(編)『性の分割線』青弓社, pp. 19-56, 2009/1

5-2. 著書

北原恵(共著)『ジェンダー・スタディーズ』大阪大学出版会, pp. 44-63, 2009/3

北原恵(共著)『性の分割線』青弓社, pp. 19-56, 2009/1

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

北原恵 「「人間天皇」の表象——天皇制の危機と揺らぐジェンダー」プロジェクト 1.加害—被害関係の多角的研究, 甲南大学人間科学研究所, 甲南大学, 2009/12

北原恵 「女性と表現」連続レクチャー, 東京都写真美術館, 2008/12

北原恵 「ジェンダー研究とアートの現状シンポジウム、開催趣旨」国際シンポジウム「ジェンダー研究とアートの現状」, 主催「20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究——アジアにおける戦争とディアスポラの記憶」(科研 B,代表・北原恵), 武蔵大学, 2008/12(『イメージ&ジェンダー』10, 2010/3)

北原恵 「イメージを読む作法:映像の恐さを魅力を読み解く」ジュニアアカデミー講義, 京都大学人文科学研究所, 2008/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:北原恵

課題番号: 20310156

研究題目: 20世紀の女性美術家と視覚表象の調査研究——アジアにおける戦争とディアスポラの記憶

研究経費: 2008年度 直接経費 4,600,000円 間接経費 1,380,000円

2009年度 直接経費 4,800,000円 間接経費 1,440,000円

研究の目的:

本プロジェクトは、海外・日本におけるジェンダーの視点からの美術史研究、および表象文化理論とアートの実践を広く調査・研究すること、特に戦争や暴力、ディアスポラに関わる表象・アートを焦点化することにある。以下の3点を柱とする。(1)海外における視覚表象/ジェンダー研究の現状とアートの包括的調査 (2)戦前/戦後期、日本の女性アーティストの基礎的研究の発展 (3)美術における戦争とディアスポラの記憶。研究分担者・連携者・協力者以外にも、多くの海外協力者の援助が得られた本プロジェクトでは、表象文化理論、美学、美術史、歴史学、メディア論、図像学、現代哲学、ジェンダー論などの様々な方法論を用いた領域横断的で国際的な研究を進展させることを目的としている。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

表象文化論学会・理事 2006年4月～現在に至る

女性人権活動奨励事業(やよりジャーナリスト賞)・選考委員 2006年4月～現在に至る

イメージ&ジェンダー研究会・世話人(編集委員・運営委員など) 1995年4月～現在に至る

2-7 日本史学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 2(兼任1)

教授：平 雅行、村田 路人、飯塚 一幸、武田佐知子

准教授：市 大樹

助教：北泊謙太郎、廣川 和花(兼任)

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
46	12	16	0	1	1	4	0	0

※うち留学生 7 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	13	9	4	2	0
'09	8	7	2	1	3
小計	21	16	6	3	3

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

2. 研究

- ①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

3. 社会連携

- ①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題(文化遺産保存問題、教科書・教育問題など)に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

- (1) 各時代(古代・中世・近世・近代)で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒業論文・大学院演習・修士論文作成指導演習・博士論文作成指導演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。7月に院生報告会、10月に卒業論文・修論発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。さらに、水本邦彦氏、佐々木克氏といった学界の第一人者に、その研究成果を学生・院生に講演していただく場を設けた。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行、近世古文書演習における古文書調査合宿を通じて、フィールドワークの方法や、実践的な古文書の整理作業能力を取得させた。また自治体史編纂事業への協力を通じて、現地調査・史料整理の実践的能力を養成した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『史跡で読む日本の歴史』(吉川弘文館)をはじめとする講座・通史の編集・執筆、『大系真宗史料』(法蔵館)や『吉田清成関係文書』(思文閣出版)・『杉田定一関係文書史料集』(大阪経済大学日本経済史研究所)などの史料集の編纂など、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が保管している旧撰津国住吉郡平野郷町含翠堂(土橋家)文書、旧撰津国嶋下郡沢良宜浜村高島家文書、旧撰津国住吉郡北田辺村三杉家文書の整理・研究をおこなった。具体的には、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めるとともに、毎年その成果の一端を、大学行事である「いちよう祭」において披露した。
- (2) 学会活動については、日本史研究会・歴史科学協議会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会・史学研究会・史学会・仏教史学会・続日本紀研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史科学協議会については、事務局(2006年6月～2008年6月)・編集事務局(2008年6月～現在)を本専門分野で引き受けた。
- (3) 国際的な共同研究としては、武田佐知子教授が、大阪大学フォーラム 2009(in マレーシア)で「Shaping Attrie, Shaping Love in the Era of Genjimonogatari(the Tale of Genji)」を、国際シンポジウム「着衣する身体と異性装／日・タイの比較」(タイ・チュラロンコン大学)で「前近代日本における貴族の衣服形態と、愛のかたちの相関について——源氏物語を素材として——」を、平城遷都 1300 年記念国際シンポジウム「玄宗皇帝と聖武天皇の時代」(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)で「遣唐使粟田真人の冠から見た日本古代の礼服冠について」を、それぞれ報

告した。また平雅行教授が、ハノイ国家大学附属人文社会科学大学東洋学部日本学科との共同研究として「日本の中世仏教と日本優越論」と題する論考を『日本研究論文集 社会文化史』（日本語版、ベトナム語版）に発表したほか、ハーバード大学ライシャワー研究所での口頭報告を「日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究」（科研、大手前大学、代表岡佳子）として活字化した。つぎに国内での学際的な共同研究として、平雅行教授が「中・近世における生業と技術・呪術信仰」（国立歴史民俗博物館、代表井原今朝男）、「親鸞像の再検討」（大谷大学真宗総合研究所、代表安富信哉）、「歴史における周縁と共生」（科研、奈良女子大学、代表鈴木則子）、「出雲鱒淵寺の歴史的・総合的研究」（科研、島根大学、代表井上寛司）に参加した。また飯塚一幸教授が、大阪大学歴史教育研究会（代表堤一昭）、軍港都市史研究会（代表上山和雄）、吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）、市大樹准教授が「古代における文字文化の形成過程の基礎的研究」（国立歴史民俗博物館、代表平川南）および「東アジア木簡学の確立」（科研、奈良大学、代表谷角常子）に参加した。このほか、学内における共同研究として、村田路人教授・飯塚一幸准教授（当時）・廣川和花総合学術博物館助教（文学研究科助教兼任）が、「デジタルアーカイブ化による大阪大学文学部視覚史料の基礎研究」（文学研究科、代表飯塚一幸）に参加した。

3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動を通じて、研究成果を社会に還元するとともに、町おこしグループと連携して、堺市中区兒山家文書などの歴史資料の調査・整理をおこなった。
- (2) 『愛知県史』『三重県史』『荒尾市史』『宇土市史』『新修熊本市史』『大阪狭山市史』『新修豊中市史』『三田市史』『夜久野町史』『福岡市史』『伊万里市史』『鳥栖市史』『彦根市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。その半面、非常勤講師の割り当てが1 Semester 分であるため、講座運営費でもう1 Semester 分を確保することによって、従来通り2 Semester 分を維持した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、院生報告会、卒論・修論報告会を実施したほか、第一線の研究者をお招きして最新の研究成果に触れる機会を設けた。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的水準の高い成果をあげることができ、また課程博士取得者を3人送り出すことができた。このほか、現地調査や古文書の整理・調査などにも力を入れ、実践的な能力を育成することができた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は達成できたと考える。

2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかわら、学会共有財産の蓄積に関わる仕事や、国内外の学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。また本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本における学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうに当たり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	2	1	3
'09	1	0	1
計	3	1	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

田村正孝 「中世の神社体制と宗廟宇佐宮」 2008/9

主査：平 雅行 副査：梅村 喬、村田路人

松永和浩 「南北朝・室町期公武関係の基本構造」 2009/3

主査：平 雅行 副査：梅村 喬、村田路人

飯沼雅行 「淀川筋綱引役の研究——近世畿内近国支配における幕府・個別領主・村の位相をめぐって——」 2010/3

主査：村田路人 副査：平 雅行、飯塚一幸

【論文博士】

松本政春 「奈良時代軍事制度の研究」 2008/11

主査：梅村 喬 副査：平 雅行、高橋照彦(考古学専門分野)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(3)	4(2)	0(0)	0(0)	2(1)	9(6)
'09	9(4)	2(1)	0(0)	1(1)	0(0)	12(6)
計	12(7)	6(3)	0(0)	1(1)	2(1)	21(12)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	22	28	0	0	50
'09	0	19	9	2	0	30
計	0	41	37	2	0	80

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

岩川拓夫「中近世移行期における島津氏の京都外交——道正庵と南九州——」『鹿児島地域史研究』※ 5, 鹿児島地域史研究会, pp. 19-30, 2009/2

〔博士後期〕

太田光俊「本願寺御家中衆次第について(2)」『本願寺史料研究所報』35, 本願寺史料研究所, pp.3-12, 2008/9

太田光俊「本願寺御家中衆次第について(3・完)」『本願寺史料研究所報』36, 本願寺史料研究所, pp.1-8, 2009/3

田村正孝「中世における和泉五社の展開」『史敏』※ 2008 春号(通巻 5 号), 史敏刊行会, pp.23-48, 2008/4

中尾浩康『尾張国富田荘絵図』を読み解く——2007 年歴教協全国大会(第 59 回兵庫大会・前近代分科会)大会報告記録——』『あいち歴史教育』※ 12, 愛知県歴史教育者協議会, pp.18-27, 2008/7

森脇崇文「宇喜多氏家臣団の構造と展開(歴史シンポジウム 岡山県古代・中世史研究の最前線)」『吉備地方文化研究』

※ 19, 就実女子大学吉備地方文化研究所, pp. 231-249, 2009/3

森脇崇文「豊臣期宇喜多氏における文禄四年寺社領寄進の基礎的考察」『年報赤松氏研究』※ 2, 赤松氏研究会, pp.42-62, 2009/3

芳澤元「鎌倉後期の禅宗と文芸活動の展開」上横手雅敬編『鎌倉時代の権力と制度』※ 思文閣出版, pp.261-286, 2008/9

吉永壮志「平安時代から鎌倉時代初期における国務運営——文書形態分析を中心として——」研究代表者梅村喬『平安時代における土地公証文書と所領安堵の前提的研究(2007～2008 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)』梅村喬, 146-156, 2009/3

【2009年度】

〔学部生〕

花尻千秋「修験道本山派成立の背景——室町期奥州の熊野先達と熊野三山検校をめぐって——」『史敏』※2009 春(通巻 6), 史敏刊行会, pp.32-50, 2009/4

檜垣和志「中世興福寺の大衆統制」『歴史と神戸』48-5, 神戸史学会, pp.24-37, 2009/10

〔博士前期〕

阿部慎「中世僧綱所と寺院社会」『日本史研究』※ 563, 日本史研究会, pp. 1-26, 2009/7

〔博士後期〕

後藤敦史「海防掛の制度に関する基礎的考察——「乙骨耐軒文書」の紹介を兼ねて——」『日本歴史』※ 732, 日本歴史学会, pp.49-66, 2009/5

後藤敦史「世界史教育と日本史教育——大阪大学歴史教育研究会での経験をもとに——」『歴史科学』197, 大阪歴史科学協議会, pp.19-24, 2009/5

後藤敦史「弘化・嘉永期における海防掛の対外政策構想——異国船取扱方を中心に——」『ヒストリア』※ 216, 大阪歴史学会, pp.82-108, 2009/8

後藤敦史「楠葉台場以前の大坂湾防備——安政期を中心に——」『ヒストリア』217, 大阪歴史学会, pp.19-36, 2009/10

中尾浩康「高校の授業 日本史 「渡し」の謎を考える」『歴史地理教育』748, 歴史教育者協議会, pp.54-57, 2009/8

- 中尾浩康「江戸時代の交通～海を渡る・川を渡る～ ——2008年歴教協全国大会(第60回東京大会・前近代分科会)大会報告記録——」『あいち歴史教育』13, 愛知県歴史教育者協議会, pp.30-41(+資料頁), 2009/7
- 中尾浩康「健児制に関する再検討」『ヒストリア』※ 219, 大阪歴史学会, pp.1-27, 2010/3
- 芳澤元「渡唐天神画像賛を読む——東福寺・与可心交賛の再検討——」『アジア遊学』※ 122, 勉誠出版編集部, 勉誠出版 pp.152-162, 2009/5
- 李宣珩「明治初期の京都府の小学校の設立と運営」『梨花史学研究』39, 梨花女子大学梨花史学研究所, pp.257-285, 2009/12

(2)口頭発表

【2008年度】

[学部生]

- 檜垣和志「中世興福寺の大衆統制」第4回地域史卒論報告会, 歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 西宮市大学交流センター／兵庫県西宮市, 2009/3/8
- [博士前期]
- 岩川拓夫「中近世移行期における南九州の京都外交」隼人文化研究会, 隼人文化研究会, 鹿児島県歴史資料センター黎明館／鹿児島県鹿児島市, 2008/9/6
- 岩川拓夫「中近世移行期南九州における意思伝達」九州史学研究会中世史部会, 九州史学研究会, 九州大学文学部日本史学演習室／福岡県福岡市, 2008/9/13
- 岩川拓夫「中近世移行期島津氏家臣団組織の構造と意思伝達」戦国南九州若手研究者の会「戦国南九州の政治と交流——若手研究者合同報告会——」戦国南九州若手研究者の会, 鹿児島県歴史資料センター黎明館／鹿児島県鹿児島市, 2009/3/8 (※鹿児島地域史研究会・隼人文化研究会と共催)
- 岩川拓夫「中近世移行期島津氏家臣団組織の構造と変容」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2009/3/14
- 加藤伸行「明治中後期における同業組合と府県勸業行政」関西農業史研究会, 関西農業史研究会, 同志社大学／京都府京都市, 2009/1/10
- 久保田裕次「明治後期における実業界と大陸進出——山本条太郎を中心として——」日本史研究会近現代史部会卒業論文報告会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2008/7/6
- 佐藤靖子「論評:「吉江崇「平安時代の儀礼運営と装束使」」日本史研究会古代史部会大会報告業績検討会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2008/4/26
- 佐藤靖子「律令制下の伴部と氏の関係について——「負名氏」成立過程の分析から——」日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2009/2/2
- 田中修平「藩大身給人地方知行の性格——福井藩府中本多家を素材に——」大阪歴史学会近世史部会卒論報告会, 大阪歴史学会, 城東会館／大阪府大阪市, 2008/4/19
- 田中修平「藩大身家臣の軍事的性格」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2008/9/13
- 中村翼「鎌倉中期における日宋貿易の展開と幕府」大阪歴史学会中世史部会卒業論文報告会, 大阪歴史学会, 大阪市立弁天町市民学習センター／大阪府大阪市, 2008/7/27
- 中村翼「樵谷惟僊と塩田北条氏——信濃国塩田からみる日宋貿易——」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2008/9/13
- 中村翼「日宋貿易の展開と鎌倉幕府法」海域アジア史研究会11月例会, 海域アジア史研究会, 大阪大学文大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2008/11/29
- 中村翼「鎌倉幕府の「唐船」関係法令の検討」鎌倉時代研究会, 鎌倉時代研究会, 京都大学吉田キャンパス／京都府京都市, 2009/1/26

- 橋村淳一「近世後期における村運営の特質——和泉国日根郡自然田村を中心に——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2008/9/26
- 橋村淳一「書評：速水融『近世日本の経済社会』」大阪大学歴史教育研究会読書会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学文学部東洋史学演習室／大阪府豊中市, 2009/2/21
- 前田英之「権門平家の経済基盤の展開と公家社会」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2008/9/26
- 正岡義朗「太田光俊氏の業績検討」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立大学文化交流センター／大阪府大阪市, 2009/2/18
- 柳澤菜々「食膳奉仕と伴造氏族——日本古代内廷構造の一考察——」日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同 2008 年度卒業論文大報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, 京都市男女共同参画センター ウィングス京都／京都府京都市, 2008/6/8
- 柳澤菜々「2008 年度大阪歴史科学協議会大会「前近代地域社会論の再構築」の検討——古代史の視点から——」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2008/7/28
- 柳澤菜々「日本古代の園」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2008/9/13
- 柳澤菜々「歴史教育研究会模擬授業：ロシア帝国前夜」大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2008/11/15
- 山田蒔「関東祇候の廷臣と鎌倉幕府——公家の関東下向をめぐる——」日本史研究会・大阪歴史学会中世史部会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2008/6/14
- 山田蒔「鎌倉期における蹴鞠界の動向と鎌倉幕府——公武関係論の一視角として——」大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立中央青年センター／大阪府大阪市, 2008/9/13
- 山田蒔「玉葉研究会史料報告(『玉葉』の史料報告)」玉葉研究会, 玉葉研究会, 京都大学大学院人間・環境学研究科元木泰雄研究室／京都府京都市, 2008/9/29
- 山田蒔「玉葉研究会史料報告(『玉葉』の史料報告)」玉葉研究会, 玉葉研究会, 京都大学大学院人間・環境学研究科元木泰雄研究室／京都府京都市, 2008/10/27
- 山田蒔「玉葉研究会史料報告(『玉葉』の史料報告)」玉葉研究会, 玉葉研究会, 京都大学大学院人間・環境学研究科元木泰雄研究室／京都府京都市, 2008/12/22
- 〔博士後期〕
- 太田光俊「織豊期本願寺教団の構造——「石山退城」を中心に——」大阪歴史学会中世史部会第 1 回大会準備報告, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2009/3/2
- 尾島志保「論評：進藤兵「地方分権「改革」と自治体運動」」大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 大阪歴史科学協議会, 城北市民学習センター／大阪府大阪市, 2008/10/29
- 尾島志保「1920 年代における全国町村長会と行政町村」関西郡部研究会, 関西郡部研究会, 福島区民センター／大阪府大阪市, 2009/3/7
- 片山早紀「近世大坂における都市支配と寺院」上町台地マイルド HOPE ゾーン協議会研究成果報告会, 上町台地マイルド HOPE ゾーン協議会, 大阪国際交流センター／大阪府大阪市, 2008/5/12
- 片山早紀「近世大坂における住民把握の特質」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2008/6/13
- 片山早紀「近世大坂における都市支配と寺院」四天王寺と都市大坂研究会, 四天王寺と都市大坂研究会, 天王寺区民センター／大阪府大阪市, 2009/1/23
- 後藤敦史「和親条約は 200 年以上続いた鎖国体制を崩したか——黒船来港前夜の徳川幕府の外交について——」大阪大学歴史教育研究会第 26 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2008/7/19
- 後藤敦史「日中双方から見た政治・外交史」神奈川県社会科部会歴史分科会, 神奈川県社会科部会, 私立栄光学園中学校・高等学校／神奈川県鎌倉市, 2008/8/4 ※大坪慶之氏との共同報告

- 後藤敦史「海防掛目付方の開国論——「乙骨耐軒文書」を用いて——」2008年度明治維新史学会秋季大会, 明治維新史学会, 萩博物館／山口県萩市, 2008/11/9
- 後藤敦史「海防掛の基礎的研究——「乙骨耐軒文書」を用いて——」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2008/12/12
- 中尾浩康「江戸時代の交通～海を渡る、川を渡る～」歴史教育者協議会第60回全国大会(東京大会・日本前近代分科会)大会報告, 歴史教育者協議会, 明治大学／東京都千代田区, 2008/8/4
- 中野賢治「朝倉義景の元亀元年京都侵攻計画」大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2009/1/30
- 長谷川裕峰「修法供料と山門所領の形成——青蓮院門跡領を中心に——」天台宗教学振興事業団第1回文研例会, 天台宗教学振興事業団, 叡山学院／滋賀県大津市, 2008/5/14
- 長谷川裕峰「延暦寺山徒の活動と本末関係——鰐淵寺文書に見る二人の山徒——」天台宗教学振興事業団第2回文研例会, 天台宗教学振興事業団, 叡山学院／滋賀県大津市, 2008/10/16
- 森脇崇文「豊臣期宇喜多氏における寺社統制の再編過程——文禄年間の寺社領一斉寄進をめぐる——」第5回赤松氏研究会, 赤松氏研究会, 大手前大学／兵庫県西宮市, 2008/8/31
- 森脇崇文「宇喜多氏家臣団の構造と展開」シンポジウム「岡山県古代・中世史研究の最前線」中世史研究報告, シンポジウム「岡山県古代・中世史研究の最前線」就実大学／岡山県岡山市, 2008/11/8
- 森脇崇文「豊臣期大名権力の寺社統制——宇喜多氏分国における文禄期の転換——」日本史研究会中世史部会・近世史部会合同部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2009/2/24
- 芳澤元「『荷雨漢詩』講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学／京都府京都市, 2008/6/4
- 芳澤元「与可心交賛「渡唐天神像」講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学／京都府京都市, 2008/10/1
- 芳澤元「与可心交賛「渡唐天神像」講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学／京都府京都市, 2008/10/8
- 芳澤元「与可心交賛「渡唐天神像」講読」『翰林五鳳集』勉強会, 『翰林五鳳集』勉強会, 花園大学／京都府京都市, 2008/10/15
- 芳澤元「渡唐天神図像賛を読む」墨蹟研究会, 墨蹟研究会, 東京国立博物館／東京都台東区, 2009/2/1
- 【2009年度】**
- [学部生]
- 時広雅紀「文久期彦根藩の政治的動向」幕末維新史研究会, 幕末維新史研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2009/6/6
- 時広雅紀「桜田門外の変後の彦根藩政と幕末政治」19世紀史研究会, 19世紀史研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2010/1/31
- [博士前期]
- 浅田祐治「幕末期における公家家臣の動向——一条家家臣下橋家を事例として——」大阪歴史学会近世史部会2009年度卒論報告会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム／大阪府大阪市, 2009/5/2
- 浅田祐治「書評: 松田敬之著『次男坊たちの江戸時代——公家社会の<厄介者>——』」大阪歴史学会近世史部会読書会, 大阪歴史学会, 大阪市西区民センター／大阪府大阪市, 2009/9/11
- 大浦和也「近世後期藩財政補填策としての領主貸付政策」大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市西区民センター／大阪府大阪市, 2009/12/20
- 久保田裕次「明治四十年代における対中借款政策の展開——漢冶萍煤鉄公司を中心に——」日本近代史研究会, 日本近代史研究会, 筑波大学春日キャンパス／茨城県つくば市, 2009/10/10
- 高山啓「鎌倉幕府の刑罰体系について」日本史研究会・大阪歴史学会中世史部会合同卒業論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 城北市民学習センター／大阪府大阪市, 2009/6/7
- 中村翼「榎本涉氏の研究をめぐる」大阪歴史科学協議会前近代史部会, 大阪歴史科学協議会, 阿倍野市民学習センター／大阪府大阪市, 2009/4/2
- 中村翼「日宋貿易の展開と鎌倉幕府」九州史学研究会中世史部会, 九州史学研究会, 九州大学箱崎キャンパス／福岡県福岡市, 2009/4/25

- 中村翼「日宋交流の展開と鎌倉幕府」 対外関係史研究会, 対外関係史研究会, 東京大学本郷キャンパス/東京都文京区, 2009/9/17
- 中村翼「日宋交流の展開と鎌倉幕府」 大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 梅田東学習ルーム/大阪府大阪市, 2009/10/9
- 中村翼「鎌倉中期における日宋貿易の展開と幕府」 倭寇の会, 倭寇の会, 篠島民宿潮幸/愛知県知多郡南知多町, 2010/3/21
- 長谷川裕美「畿内周辺国における古代銭貨の流通——近江国を中心にして——」 日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会 合同 2009 年度卒業論文大報告会, 日本史研究会・続日本紀研究会, 大阪市立難波市民学習センター/大阪府大阪市, 2009/6/7
- 伏水美穂「近世中期における公武婚の特質——堂上公家と大名家の婚姻の検討から——」 大阪歴史学会近世史部会 2009 年度卒論報告会, 大阪歴史学会, 梅田東生涯学習ルーム/大阪府大阪市, 2009/5/2
- 柳澤菜々「日本古代の園と供御供給」 大阪歴史学会古代史部会, 大阪歴史学会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2009/9/4
- 柳澤菜々「日本古代の園と供御供給」 日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2010/3/15
- 山田蒔「鎌倉期公武政権の変質と依存～関東祗候廷臣の考察を中心に～」 鎌倉時代研究会, 鎌倉時代研究会, 京都大学文学部古文書室/京都府京都市, 2009/9/7
〔博士後期〕
- 大井喜代「日本古代の刑事政策と犯罪意識」 大阪歴史学会古代史部会, 大阪歴史学会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2010/2/26
- 後藤敦史「開国前後の幕府外交——海防掛勘定方の政策論を中心に——」 大阪歴史学会近代史部会第 1 回大会準備報告会, 大阪歴史学会, キャンパスポート大阪/大阪府大阪市, 2010/3/5
- 中尾浩康「八世紀の『賊』と有事編成」 名古屋古代史研究会例会, 名古屋古代史研究会, 名古屋大学大学院文学研究科 1 階大会議室/愛知県名古屋市, 2009/8/23
- 中野賢治「パネルトーク：十五世紀の兵庫津——「兵庫北関入船納帳」の背景——」 兵庫津歴史講演会, 歴史資料ネットワーク, 兵庫公会堂大集会室/兵庫県神戸市, 2010/2/27
- 長谷川裕峰「青蓮院門跡領における修法供料の実態——『葛川明王院史料』を中心に——」 第 1 回文研例会, 文研例会, 叡山学院講堂/滋賀県大津市, 2009/5/12
- 長谷川裕峰「中世山門系寺院における本末関係——出雲国鱒淵寺を中心に——」 日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2009/5/26
- 長谷川裕峰「青蓮院門跡領における修法供料の一考察——『葛川明王院史料』を読み直す——」 第 51 回天台宗教学大会, 天台宗教学大会, 大正大学/東京都豊島区, 2009/11/06
- 長谷川裕峰「慈円——政界と仏教界を揺れ動く歌人——『愚管抄』を読むために」 第 6 回哲学セミナー, 第 6 回哲学セミナー, あんじんビル 2F/大阪府大阪市, 2010/1/18
- 本井優太郎「戦後における地域変革と教育実践——島根県大原郡日登村「日登教育」を素材として——」 日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会合同第 2 回修士論文報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2009/7/5
- 本井優太郎「書評：大門正克『戦争と戦後を生きる』」 日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会合同書評会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 日本史研究会事務所会議室/京都府京都市, 2009/10/12
- 森脇崇文「戦国期における九条家家司研究の現状と課題」 政基公旅引付合同研究会例会報告, 政基公旅引付合同研究会, 大阪大学日本史第二研究室/大阪府豊中市, 2010/2/20
- 森脇崇文「宇喜多氏分限帳の一考察——豊臣期宇喜多氏における構造分析の前提——」 岡山地方史研究会例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学総合研究棟 2F/岡山県岡山市, 2010/3/13
- 芳澤元「室町・戦国期の禅林文芸と地域社会——法楽連歌興行と渡唐天神説話——」 大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター/兵庫県西宮市, 2009/12/18

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔学部生〕

中村昌民「卒業論文報告会を終えて」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』53, 歴史資料ネットワーク, p. 7, 2008/5

花尻千秋「卒論報告会に参加して」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』53, 歴史資料ネットワーク, p. 4, 2008/5

〔博士前期〕

加藤伸行「2007年9月例会「大学博物館・文書館の現状を考える」彙報」『歴史科学』195, 大阪歴史科学協議会, pp. 53-54, 2008/12

佐藤靖子「部会ニュース(古代史部会): 2007年6月古代史部会報告要旨」『日本史研究』558, 日本史研究会, pp. 172-173, 2009/2

中村翼「質疑・討論(2008年度大阪歴史学会大会中世史部会亀田俊和報告)」『ヒストリア』214, 大阪歴史学会, pp. 129-130, 2009/3

橋村淳一「質疑・討論(2008年度大阪歴史学会大会近世史部会岡島永昌報告)」『ヒストリア』213, 大阪歴史学会, pp.184-185, 2009/1

古井浩幸「歴史学入門講座参加記(2007年度歴史学入門講座)」『歴史科学』194, 大阪歴史科学協議会, pp. 36-38, 2008/10

前田英之「部会ニュース(中世史部会): 2008年4月佐藤泰弘報告討論要旨」『日本史研究』553, 日本史研究会, pp. 77-78, 2008/9

山田蒔「書評: 『地域社会からみた「源平合戦」』」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』56, 歴史資料ネットワーク, pp. 11-12, 2009/1

山田蒔「部会ニュース(中世史部会): 2008年6月部会報告要旨」『日本史研究』557, 日本史研究会, p. 85, 2009/1

〔博士後期〕

大井喜代「部会ニュース(古代史部会): 2006年2月吉永壮志報告討論要旨」『日本史研究』549, 日本史研究会, pp.84-85, 2008/5

太田光俊「コラム: 天文一揆後の本願寺と和泉国守護勢力との交渉——『政基公旅引付』のあのひとはどこへ——」『史敏』2008春号(通巻5号), 史敏刊行会, pp. 73-81, 2008/4

太田光俊「戦場をあるく——戦場調査ガイド 伊勢国一志郡戸木城と周辺を巡る——」『織豊期研究』10, 織豊期研究会, pp. 79-88, 2008/10

金正文『花園天皇日記(花園院宸記)』正和二年正月記——訓読と注釈——『花園大学国際禅学研究所論叢』4, 花園大学国際禅学研究所, pp. 231-270, 2009/3 ※「花園天皇日記研究会」名で公表

田村正孝「討論: 大阪府の博物館を支援する会主催シンポジウム「博物館と文化遺産——地域文化力をはぐくむために——」」『ヒストリア』211, 大阪歴史学会, pp. 54-61, 2008/9

中野賢治「「学びの場」としての史料ネット」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』55, 歴史資料ネットワーク, p.2, 2008/10

長谷川裕峰「コラム: 政基流用語術からみる「クミノ郷」の解釈」『史敏』2008春号(通巻5号), 史敏刊行会, pp. 62-72, 2008/4

長谷川裕峰「部会ニュース(中世史部会): 2008年2月坂口太郎報告討論要旨」『日本史研究』552, 日本史研究会, pp. 81-82, 2008/8

森脇崇文「趣旨と概要: 第三回地域史卒論報告会」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』53, 歴史資料ネットワーク, p. 3, 2008/5

森脇崇文「新刊紹介: 『久世町史』資料編第一巻編年資料」『史敏』2008春号, 史敏刊行会, p. 72, 2008/4

森脇崇文「田尻早苗家文書仮整理合宿に参加して」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』55, 歴史資料ネットワーク, p. 12, 2008/10

- 森脇崇文「質疑・討論(2008年度大阪歴史学会大会中世史部会石本倫子報告)」「『ヒストリア』213, 大阪歴史学会, pp. 156-158, 2009/1
- 芳澤元「書評: 森茂暁著『中世日本の政治と文化』」「『佛教史学研究』50-2, 佛教史学会, pp. 79-87, 2008/4
- 芳澤元「新刊紹介: 竹貫元勝著『宗峰妙超 大燈を挑げ起して』」「『史学雑誌』117-11, 史学会, pp. 132-133, 2008/11
- 芳澤元「『花園天皇日記(花園院宸記)』正和二年正月記——訓読と注釈——」「『花園大学国際禅学研究所論叢』4, 花園大学国際禅学研究所, pp. 231-270, 2009/3 ※「花園天皇日記研究会」名で公表
- 吉永壮志「部会ニュース(古代史部会): 2006年2月部会報告要旨」「『日本史研究』549, 日本史研究会, p. 84, 2008/5
- 【2009年度】**
- [学部生]
- 奥田麻希「パネルディスカッションに参加して」「『大塩研究』62, 大塩事件研究会, pp. 32-33, 2010/3
- 檜垣和志「地域史卒論報告を終えて」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』57, 歴史資料ネットワーク, pp. 5-6, 2009/5
- 久野洋「吉川真司氏と全体史——歴史学入門講座参加記として(第25回歴史学入門講座)——」「『歴史科学』198, 大阪歴史科学協議会, pp. 51-53, 2009/9
- [博士前期]
- 久保田裕次「部会ニュース(近現代史部会): 2008年7月近現代史部会報告要旨」「『日本史研究』560, 日本史研究会, pp. 62-63, 2009/4
- 久保田裕次「部会ニュース(近現代史部会): 2008年7月近現代史部会平下義記報告討論要旨」「『日本史研究』560, 日本史研究会, p. 66, 2009/4
- 高山啓「部会ニュース(中世史部会): 2009年7月中世史部会報告要旨」「『日本史研究』566, 日本史研究会, pp. 92-93, 2009/10
- 中村翼「2008年9月例会「地域がつくる歴史——『本庄村史 歴史編——神戸市東灘区深江・青木・東青木のあゆみ——』をめぐって」彙報」「『歴史科学』198, 大阪歴史科学協議会, p. 59, 2009/9
- 中村翼「2008年12月例会「川岡勉氏「戦国期権力論の再検討——政治史の復権と室町幕府一守護体制——」彙報」「『歴史科学』199, 大阪歴史科学協議会, p. 65, 2009/11
- 橋村淳一「二〇〇九年度「第二五回歴史学入門講座」の記録」「『ヒストリア』217, 大阪歴史学会, pp. 238-240, 2009/10
- [博士後期]
- 中野賢治「兵庫津歴史講演会開催される!!」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』57, 歴史資料ネットワーク, pp. 9-10, 2009/5
- 中野賢治「シンポジウム「災害の記憶と伝承」」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』58, 歴史資料ネットワーク, pp. 4-5, 2009/6
- 中野賢治「日高町・田尻早苗家文書の整理作業」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』60, 歴史資料ネットワーク, pp. 10-12, 2009/11
- 長谷川裕峰「部会ニュース(中世史部会): 2009年5月中世史部会報告要旨」「『日本史研究』566, 日本史研究会, pp. 91-92, 2009/10
- 本井優太郎「北原泰作文書(その1)昭和十三年「記録」」「『部落問題研究』190, 部落問題研究所, pp. 26-62, 2009/9
- 本井優太郎「北原泰作文書(その2)昭和十七年「日記」」「『部落問題研究』191, 部落問題研究所, pp. 59-122, 2009/12※西尾泰広氏との共著
- 本井優太郎「大阪湾岸の台場跡」「『ヒストリア』217, 大阪歴史学会, pp. 105-128, 2009/10(※大阪歴史学会企画委員による共同執筆)
- 本井優太郎「シンポジウム「地域資料の保存と活用を考える」(第三回)参加記」「『ヒストリア』217, 大阪歴史学会, pp. 241-243, 2009/10
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会): 2009年7月近現代史部会報告要旨」「『日本史研究』569, 日本史研究会, pp. 69-70, 2010/1

本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会):2009年7月近現代史部会辻岡健志報告討論要旨」『日本史研究』569, 日本史研究会, p. 70, 2010/1

森脇崇文「歴史資料ネットワーク・神戸史学会主催 第4回地域史卒論報告会」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』57, 歴史資料ネットワーク, pp. 4-5, 2009/5

森脇崇文「部会ニュース(中世史・近世史合同部会):2009年2月部会報告要旨」『日本史研究』563, 日本史研究会, pp. 57-58, 2009/7

森脇崇文「新刊紹介:小林清治著『伊達政宗の研究』」『日本史研究』566, 日本史研究会, p. 89, 2009/10

森脇崇文「第11回「火垂るの墓を歩く会」に参加して」歴史資料ネットワーク編『史料ネット NEWS LETTER』61, 歴史資料ネットワーク, pp. 6-7, 2010/1

森脇崇文「書評:濱田浩一郎『播磨 赤松氏一族』」『年報赤松史研究』3, 赤松氏研究会, pp. 134-142, 2010/3

芳澤元「新刊紹介:広瀬良弘編『禅と地域社会』」『日本史研究』566, 日本史研究会, pp. 90-91, 2009/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名) ※芳澤 元

2009年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名) ※芳澤 元

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名) ※巻渕かおり(短期留学)

2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度~2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

市 大樹、博士後期課程修了、大阪大学大学院文学研究科、准教授、2009/4

木下光生、博士後期課程修了、奈良教育大学社会科教育講座、特任准教授、2009/4

尹 蕾、博士前期課程修了、中南財經政法大学、日本語教師、2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度~2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 9 名

2008年度:8名 2009年度:1名

<内訳> 2008年度 博物館学芸員 2名(福井県立若狭歴史民俗資料館、島津興業(株)尚古集成館)

中・高等学校教員 3名(私立東邦高等学校、同志社国際中学高等学校、愛知県公立学校教員(1名))

システムエンジニア 2名(株式会社NTTデータ、富士通FIP)

プログラマー 1名(日本ソフトウェアデザイン株式会社)

2009年度 高等学校教員 1名(兵庫県立明石北高等学校)

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008年度:0名 2009年度:0名

9. 刊行物

- 2008年度 『史友会会報』第23号(待兼山史友会編、同、2008年12月)
2009年度 『史友会会報』第24号(待兼山史友会編、同、2009年12月)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 「大阪歴史科学協議会」(学会、事務局引き受け) 2006年6月～2008年6月
「大阪歴史科学協議会」(学会、編集事務局引き受け) 2008年6月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会(1998年度～2009年度)

- ・「徳川日本社会を考える」 2009年1月16日
発表者：水本邦彦氏(京都府立大学教授)
- ・「『坂本龍馬とその時代』をめぐって」 2010年1月13日
発表者：佐々木克氏(奈良大学教授)

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 平 雅 行 教 授

1951年生。1981年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士(大阪大学)。京都橘女子大学、関西大学、大阪大学助教授を経て1996年1月より現職。専攻：日本中世史／古代中世仏教史。

1-1. 論文

- 平雅行 「中世仏教における呪術性と合理性」『国立歴史民俗博物館研究報告』157, 国立歴史民俗博物館, pp. 159-173, 2010/3
平雅行 「日本の中世仏教と日本優越論」ハノイ国家大学附属人文社会科学大学東洋学部日本学科編『日本研究論文集 社会文化史』世界出版社, pp. 69-80, 2010/3
平雅行 「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶」『待兼山論叢』43, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-27, 2009/12
平雅行 「親鸞の歩み」『信道』2008年度, 真宗大谷派名古屋別院維持財団, pp. 153-171, 2009/8
平雅行 「親鸞誕生の時代」『別冊太陽』親鸞聖人 750 年大遠忌記念, 平凡社, pp. 38-43, 2009/5
平雅行 「鎌倉寺門派の成立と展開」『大阪大学大学院文学研究科紀要』49, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 111-206, 2009/3
平雅行 「出家と女性」岡佳子(編)『日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究』pp. 48-52, 2009/3
平雅行 「善鸞義絶状の伝来とその偽作説」『親鸞像の再構築』1, 大谷大学真宗総合研究所, pp. 57-76, 2008/10
平雅行 「神国日本と仏国日本」懐徳堂記念会(編)『世界史を書き直す 日本史を書き直す』和泉書院, pp. 111-146, 2008/6
平雅行 「親鸞の配流と奏状」早島有毅(編)『親鸞門流の世界』法蔵館, pp. 175-208, 2008/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 平雅行(新聞での解説原稿)「興福寺奏状の歴史的背景」『南御堂』559, 真宗大谷派難波別院, p. 6, 2009/3

1-4. 口頭発表

- 平雅行 「コメンテーター」仏教史学会 60 回大会記念シンポジウム:戦後仏教史学の回顧, 仏教史学会, 龍谷大学, 2009/10
平雅行 「建永の法難と『教行信証』後序」第 16 回真宗大谷派教学大会記念講演, 真宗大谷派・真宗教学学会, 大谷大学, 2009/7

平雅行 「古代中世仏教における女人救済と女性差別」石川の歴史遺産セミナー：女性をとりまく宗教世界，石川県立歴史博物館，2009/7

平雅行 「教科書はどのようにして書かれるのか——「鎌倉新仏教論」の見直しを中心に——」第7回京都府私立中学高等学校教育研究大会，大谷中・高等学校，2008/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平雅行 大阪大学共通教育賞(2006年度前期)，大阪大学共通教育機構，2006/11

平雅行 大阪大学共通教育賞(2003年度前期)，大阪大学共通教育機構，2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者：平雅行

課題番号：18520494

研究題目：鎌倉幕府の権門寺院政策について

研究経費：2008年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2009年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的：

鎌倉幕府による僧侶の人的編成や、朝廷補任権への介入を具体的に明らかにすることによって、鎌倉幕府の権門寺院政策の基本的性格と、その時期的偏差を解明することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・代表委員	2008年6月～現在に至る
史学会・評議員	1999年11月～現在に至る
仏教史学会・評議員	1999年10月～現在に至る
日本宗教史懇話会・呼びかけ人代表	1999年8月～2009年8月
史学研究会・評議員	1990年5月～現在に至る

2. 村田 路人 教授

1955年生。1977年大阪大学文学部史学科卒業。1981年大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士(大阪大学、1994年)。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2002年4月より現職。専攻：日本近世史。

2-1. 論文

村田路人 「堤外地政策からみた元禄・宝永期における摂河治水政策の転換」『大阪大学大学院文学研究科紀要』50，大阪大学大学院文学研究科，pp. 1-28，2010/3

村田路人 「種痘事業の展開と大坂町奉行所」『適塾』42，適塾記念会，pp. 79-84，2009/12

村田路人 「日本近世の地域支配——大坂町奉行による摂津・河内支配を手がかりに——」秋田茂、桃木至朗(共編)『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観——』大阪大学出版会，pp. 139-165，2008/10

村田路人 「近世畿内近国支配論を振り返って——広域支配研究の軌跡——」大阪歴史科学協議会『歴史科学』192，大阪歴史科学協議会，pp. 1-14，2008/5

村田路人 「一七世紀摂津・河内における治水政策と堤外地土地利用規制」『枚方市史年報』11，枚方市，pp. 1-14，2008/4

2-2. 著書

村田路人, 藪田貫(共編著)『大阪狭山市史第三巻 史料編近世』大阪狭山市役所, pp. 336-451, 2010/3

村田路人『日本史リブレット 93 近世の淀川治水』山川出版社, 106p., 2009/4

村田路人(編著)『新修豊中市史第一巻通史 1』豊中市, pp. 461-656, pp. 926-927, 2009/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

村田路人「第11章 文学部」高杉英一・阿部武司・菅真城編著『大阪大学の歴史』大阪大学出版会, pp. 128-139, 2009/3

2-4. 口頭発表

村田路人「堤外地土地利用規制からみた摂河治水政策の転換——元禄・宝永期を中心に——」大阪歴史学会近世史部会 9 月例会, 梅田東学習ルーム, 2009/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007 年度～2009 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:村田路人

課題番号: 19520570

研究題目: 近世における開発と災害防止・復旧システムについての研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

2009 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

近世は、災害防止・復旧システムが、それ以前の時代に比べ、格段に整備された時代である。災害防止・復旧システムの中心は治水システムであるが、近世的な治水システムの構築の背景となったものは、近世に入ってさかんになった新田開発をはじめとする、自然に対する人間の大小の働きかけであった。また、これらを背景に構築された治水システムが、新たな自然に対する働きかけとなり、災害を引き起こす原因となることもあった。

本研究は、開発、災害、災害防止・復旧システムの三者の関係を究明しようとするものである。本研究では対象を畿内近国地域に絞り、(イ)開発と災害発生メカニズムおよびその近世的特徴の解明、(ロ)災害発生と、災害防止・復旧システムとの関係の解明、(ハ)災害防止・復旧システムと、元禄～享保期幕政改革との関連の解明、を試みる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・編集委員

2008 年 6 月～現在に至る

3. 飯塚 一幸 教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学修士(京都大学、1985年)。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010年1月より現職。専攻: 日本近代史。

3-1. 論文

飯塚一幸「広川禎秀編『近代大阪の地域と社会変動』』『部落問題研究』(部落問題研究所), 191, pp. 43-58, 2009/12

飯塚一幸「『本庄村史歴史編——神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ——』をめぐって」『歴史科学』(大阪歴史科学協議

会), 199, pp. 12-18, 2009/11

飯塚一幸「京都府における国会開設運動の展開——私擬憲法案「大日本国憲法」の成立と沢辺正修——」『史林』(史学研究会), 92-2, pp. 75-103, 2009/3

飯塚一幸「自由党成立後の杉田定一」『経済史研究』(大阪経済大学日本経済史研究所), 12, pp. 110-136, 2009/2

3-2. 著書

飯塚一幸(共編著)『杉田定一関係文書史料集』1, 大阪経済大学日本経済史研究所, 309p., 2010/3

飯塚一幸他(共著)『軍港都市史研究 I 舞鶴編』清文堂, pp. 93-127, 2010/1

飯塚一幸他(共著)『基山町史』下巻, 基山町, pp. 199-235, 2009/9

飯塚一幸他(共編)『丹後国加佐郡上安久村安久家文書目録』2, 千葉大学文学部菅原研究室, 135p., 2009/3

飯塚一幸他(共著)『鳥栖市誌』4, 鳥栖市, pp.13-25, pp. 87-103, pp. 193-209, pp. 277-298, 2009/3

飯塚一幸他(共著)『新修彦根市史』3, 彦根市, pp. 259-261, pp. 331-363, p. 369, pp. 401-404, pp. 522-526, pp. 538-558, 2009/1

飯塚一幸他(共編著)『吉田清成関係文書』4, 思文閣出版, 458p., 2008/8

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

飯塚一幸「日露戦後の舞鶴鎮守府と舞鶴港」近代古都研究会 2010 年 3 月例会, 近代古都研究会, 呉市海事歴史科学館, 2010/3

飯塚一幸「自由民権運動研究の現状と課題」大阪大学歴史教育研究会 2008 年 12 月例会, 大阪大学, 2008/12

飯塚一幸「地域がつくる歴史——『本庄村史歴史編——神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ——』をめぐって」大阪歴史科学協議会 2008 年 9 月例会, 大阪市立中央青年センター, 2008/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号: 20520579

研究題目: 地方名望家の親族ネットワークと地方政治に関する研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,500,000 円 間接経費 450,000 円

2009 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

地方名望家の親族ネットワークの解明を通して、①家族の教育や就職・婚姻・離婚、②会社設立や株式投資、経営危機への対処、③地域内の政治対立、政党加入、選挙など地方政治上における諸問題への、親族ネットワークの影響力について明らかにすることを課題とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本史研究会・編集委員

2008 年 10 月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・委員

2007 年 6 月～現在に至る

4. 武田 佐知子 教授

1948年東京生。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了、東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士(東京都立大学、1985)。大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門(1985)、濱田青陵賞(1995)、紫綬褒章(2003)。専攻:日本古代史・服装史。

4-1. 論文

武田佐知子「前書き」武田佐知子(編)『着衣する身体／身体と衣服をめぐる表象のジェンダー・ポリティックス』(科学研究費補助金報告書基盤研究(A)東京分科会報告書), 科学研究費補助金報告書基盤研究(A)東京分科会報告書, pp. 1-2, 2010/3

武田佐知子「前近代日本における貴族の衣服形態と、愛のかたちの相関について——源氏物語を素材として」武田佐知子, 三橋順子, 平松秀樹(共編著)『着衣する身体と異性装／日・タイの比較』(国際シンポジウム 2010 報告・論文集 科学研究費補助金報告書基盤研究(A)), 科学研究費補助金報告書基盤研究(A), pp. 1-8, 2010/3

武田佐知子「民族衣装——そのうつろうもの「着衣する身体」の政治学——肌に触れる知の発見」によせて武田佐知子, 宮原暁, 石高真吾他(共編著)『着衣する身体』の政治学／周縁化される『伝統』の共鳴』(科学研究費補助金報告書基盤研究(A)), 科学研究費補助金報告書基盤研究(A), pp. 1-4, 2009/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

武田佐知子, 菅谷文則, 千田稔他「卑弥呼はどこに? 邪馬台国と纏向遺跡」シンポジウム「卑弥呼はどこに? 邪馬台国と纏向遺跡」, 朝日新聞社, エル・シアター, 2010/3

武田佐知子, 三橋順子, 平松秀樹他「前近代日本における貴族の衣服形態と、愛のかたちの相関について——源氏物語を素材として——」国際シンポジウム「着衣する身体と異性装／日・タイの比較」, 科学研究費補助金基盤研究(A), チュラーロンコーン大学文学部, 2010/1『着衣する身体と異性装／日・タイの比較』pp. 1-8, 2010/3

武田佐知子, 橋本輝彦「邪馬台国の色彩——卑弥呼は何を着ていたのか」歴史文化講演会, 桜井宇陀広域連合, 2009/12

武田佐知子, 菅谷文則, 神埼宣武他「都への道と衣服」関西講演会「歴史街道」: 歴史街道 奈良三都物語——飛鳥京・藤原京・平城京——, 歴史街道推進協議会, 2009/11

武田佐知子「Shaping Attrie, Shaping Love in the Era of Genjimonogatari(the Tale of Genji) 「源氏物語の時代に見る衣服のかたち・愛のかたち」」大阪大学フォーラム, マレーシア クアラルンプール大学, 2009/11

武田佐知子, 上田正昭, 千田稔他「聖徳太子像」斑鳩文化協議会創立 15 周年記念シンポジウム: 聖徳太子に、なぜ、魅かれるのか! , 斑鳩文化協議会, 2009/10

武田佐知子「花をまとう、花を贈る」園芸大学・花と緑の学び舎平成 21 年度講義, 社団法人フラワーソサイエティ園芸大学, 2009/10

武田佐知子「聖徳太子と法隆寺」斑鳩の里大学 21: 聖徳太子の文化と法隆寺, (財)斑鳩町文化振興財団, 2009/10

武田佐知子, 宮原暁, 石高真吾他「民族衣装——そのうつろうもの「着衣する身体」の政治学——肌に触れる知の発見」『着衣する身体と女性の周縁化』シンポジウム: 着衣する身体』の政治学／周縁化される『伝統』の共鳴, 科学研究費補助金基盤研究(A), 2009/2『着衣する身体』の政治学』pp. 1-4, 2009/3

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2006年度～2009年度、基盤研究(A) 一般、代表者:武田佐知子

課題番号: 18201051

研究題目: 着衣する身体と女性の周縁化

研究経費: 2008年度 直接経費 15,300,000円 間接経費 4,590,000円

2009年度 直接経費 4,100,000円 間接経費 1,230,000円

研究の目的:

着衣という共通の素材を通して、特定の社会におけるジェンダーのあり方を研究し、さらに、地域間の比較を行うことによって、最終的に、グローバルな視点から、世界における女性の周縁化を理解しようとするものである。本研究課題では、個人、ローカル、ネイション、リージョナル、グローバルなアイデンティティの重層性の中で立ち現れている着衣という現象を、二つの研究段階において、それぞれ別の視点から研究することを構想している。一つは、個別地域におけるローカルな視点からの着衣の研究であり、もう一つは、共通の枠組みに基づいたグローバルな視点からの研究である。以上のような研究動向を踏まえた上で、さらに、着衣とジェンダーの関係を世界の多様性の中で理解し、再びグローバルな枠組みの中で総合する形で、従来の研究を発展させようとするものとして位置づけることができる。そこでとられる複数の研究者による共同調査・研究というスタイルは、川田順三が提起した「文化の三角測量」という方法を継承するものであるとも言え、この点でも、文化研究における学術的な発展性を持っていると考える。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 市 大 樹 准 教 授

1971年生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2001年)。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員を経て、2009年4月より現職。専攻: 日本古代史。

5-1. 論文

市大樹 「藤原京」森公章(共著)『史跡で読む日本の歴史3 古代国家の形成』吉川弘文館, pp. 66-94, 2010/1

市大樹 「荷札木簡からみた「国一評一五十戸」制」奈良文化財研究所(共著)『古代地方行政単位の成立と在地社会』奈良文化財研究所, pp. 135-170, 2009/1

市大樹 「西河原木簡群の再検討」滋賀県文化財保護協会(共著)『古代地方木簡の世紀——西河原木簡から見えてくるもの——』pp. 79-115, 2008/12

市大樹 「西河原木簡群の世界」安土城考古博物館(共著)『古代地方木簡の世紀——文字資料からみた古代の近江——』サンライズ出版, pp. 74-82, 2008/7

市大樹 「藤原地域出土の荷札木簡補遺」『奈良文化財研究所紀要』2008, 奈良文化財研究所, pp. 38-41, 2008/6

市大樹 「軍国化と支配地域」吉村武彦(共著)『大化改新と古代国家誕生』新人物往来社, pp. 124-129, 2008/5

市大樹 「平城宮・京跡出土の召喚木簡」藤田勝久・松原弘宣(編)『古代東アジアの情報伝達』汲古書院, pp. 181-207, 2008/4

5-2. 著書

市大樹 『飛鳥藤原木簡の研究』塙書房, 664p., 2010/2

市大樹(編) 『飛鳥藤原木簡2』奈良文化財研究所, 644p., 2009/3

市大樹(編) 『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報22』奈良文化財研究所, 28p., 2008/11

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市大樹(木簡事例報告)「藤原不比等の付札か」『木簡研究』31, 木簡学会, p. 52, 2009/12

市大樹(書評)「中村順昭著『律令官人制と地域社会』」『日本史研究』566, 日本史研究会, pp. 73-80, 2009/10

市大樹他(共著)(発掘調査報告)「朝堂院の調査」『奈良文化財研究所紀要』2009, 奈良文化財研究所, pp. 50-61, 2009/7

市大樹(木簡整理報告)「奈良文化財研究所都城発掘調査部(飛鳥藤原地区)における木簡整理」早稲田大学朝鮮文化研究所・大韓民国国立加耶文化財研究所『日韓共同研究資料集 咸安城山山城木簡』雄山閣, pp. 128-138, 2009/6

市大樹(木簡事例報告)「奈良・石神遺跡」『木簡研究』30, 木簡学会, pp. 11-16, 2008/12

市大樹(共著)(発掘調査報告)「石神遺跡(第19・20次)の調査」『奈良文化財研究所紀要』2008, 奈良文化財研究所, pp. 90-107, 2008/6

5-4. 口頭発表

市大樹「荷札木簡からみた「国一評一五十戸」制」古代官衙・集落研究会:古代地方行政単位の成立と在地社会, 奈良文化財研究所, 2008/12

市大樹「国分寺と木簡」シンポジウム「国分寺の創建を読むⅡ——組織・技術論——」, 国士館大学, 2008/10(『国分寺の創建を読むⅡ——組織・技術論——』pp. 25-40,)

市大樹「西河原木簡群の再検討」シンポジウム「古代地方木簡の世紀」, 滋賀県文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館, 2008/8(『古代地方木簡の世紀——文字資料から見た古代の近江——』pp. 21-28, 2008/8)

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2006年度～2008年度、若手研究(B)、代表者:市大樹

課題番号: 18720183

研究題目: 飛鳥藤原出土木簡の資料的検討と官司運営の復元

研究経費: 2008年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、飛鳥・藤原地域から近年多数出土した木簡の資料的検討をおこない、木簡を群として捉えることで、木簡を廃棄した官司の日常業務のあり方を復元し、ひいては、形成期における日本律令国家の特質を探ることを目指す。

5-6-2. 2009年度～2009年度、研究成果公開促進費、代表者:市大樹

課題番号: 215081

研究題目: 飛鳥藤原木簡の研究

研究経費: 2009年度 直接経費 2,000,000円 間接経費 0円

研究の目的:

専門著書『飛鳥藤原木簡の研究』の刊行。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・編集委員会

2009年6月～現在に至る

続日本紀研究・編集委員

2007年6月～現在に至る

6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻:日本史学/日本近現代史。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史学会・編集委員

2006年6月～現在に至る

7. 廣川 和花 助教

1977年生。2007年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、専門分野:日本史学)単位修得退学。博士(文学、大阪大学、2008年)。大阪大学総合学術博物館研究支援推進員(2007年)を経て2008年より現職。専攻:日本近現代史。

7-1. 論文

廣川和花「旧ハンセン病図書館の資料的意義——国立ハンセン病資料館移管後の活用に期待して——」国立ハンセン病資料館(編)『ハンセン病図書館旧蔵書目録』国立ハンセン病資料館, pp. 15-20, 2010/3

廣川和花, 鳴海邦匡(共著)「名所「待兼山」の成立——和歌と伝承の近世的受容をめぐる——」『上方文藝研究』(上方文藝の会), 6, pp. 44-57, 2009/6

廣川和花「汚い大大阪——水面にうつるモダン都市大阪の衛生環境」橋爪節也(編)『映画「大大阪観光」の世界 昭和12年のモダン都市』大阪大学出版会, pp. 78-82, 2009/5

遠藤隆久, 廣川和花他(共著)「共生の場としての療養所の“社会化”を実現するために」『ハンセン病市民学会年報』(ハンセン病市民学会), 2008, ハンセン病市民学会, pp. 40-77, 2009/4

廣川和花 「戦前・戦時期大阪におけるハンセン病者の処遇——大阪皮膚病研究所と大阪のハンセン病問題——」大阪市史編纂所『大阪の歴史』(大阪市史編纂所), 72, 大阪市史編纂所, pp. 83-109, 2009/1

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

廣川和花 「ハンセン病という宿命——地域との共存と共生——」第 377 回みんぱくゼミナール: 極限の文化——人はどこで生きていくか 生きられるか, 国立民族学博物館, 2009/10

廣川和花 「ハンセン病流行の国際的インパクトと日本——19 世紀後半～20 世紀初頭 The International Impact of the Prevalence of Leprosy on Colonialism and Japan in the Late 19th / Early 20th Century」近世日本における「死」と「終焉」ワークショップ Death and Dying Workshop in Early Modern Japan, シンガポール国立大学日本研究学科, シンガポール国立大学, 2009/9

廣川和花 「戦前のハンセン病医学概観 1890—1930 年代」医療・社会・環境研究会, 医療・社会・環境研究会, 大阪大学, 2009/7

廣川和花 「書評: 川越修・友部謙一編著『生命というリスク 20 世紀社会の再生産戦略』」書評会『『生命というリスク』/『分別される生命』を読む』, 医療・社会・環境研究会/科研費共同研究「日本の近代化と健康転換」(代表者: 鈴木晃仁), 同志社大学, 2009/3

廣川和花 「書評 海原亮『近世医療の社会史』」大阪歴史科学協議会合同部会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立大学, 2008/12

廣川和花他 「「共生」の事例としての草津・湯之沢部落」ハンセン病市民学会第 4 回交流集会シンポジウム: 共生の場としての療養所の“社会化”を実現するために, ハンセン病市民学会, 日本教育会館一橋ホール, 2008/5(『ハンセン病市民学会年報』2008, pp. 40-77, 2009/4)

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

廣川和花 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2009/2

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2008 年度～2009 年度、若手研究(スタートアップ)、代表者: 廣川和花

課題番号: 20800028

研究題目: 近代日本の医学・医療の国際的位置と地域におけるその政策的展開

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

2009 年度 直接経費 1,160,000 円 間接経費 348,000 円

研究の目的:

1. ハンセン病医学の史的展開の検証: 疫学調査・病理学・治療法・遺伝学などが相互に作用しながら細分化し、政策決定過程に関わってゆく経緯を明らかにする。
2. 海外のハンセン病医学研究: 19 世紀末～20 世紀初頭における諸外国のハンセン病医学の展開と、日本の疾病環境がどのように把握されていたかを位置づける。
3. 国内関連法制の調査: 1907 年・1931 年の二度の画期における国内のハンセン病法制について、運用のあり方を調査する。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

7-7-1. 2009 年度～2010 年度、研究助成、助成金獲得者: 廣川和花

助成金名: 三菱財団人文科学研究助成

研究題目: 近代大阪の都市衛生環境に関する総合的研究

助成団体名: 三菱財団

助成金額: 2009 年度 直接経費 1,100,000 円

研究の目的:

いわゆる「大大阪」期を中心に、近代都市大阪の負の側面に焦点を当て、医療・衛生・上下水道整備・尿尿処理・廃棄物処理などの都市環境整備について明らかにする。

7-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・編集委員長

2008 年 6 月～現在に至る

歴史科学協議会・全国委員

2008 年 6 月～現在に至る

2-8 東洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 4 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：森安 孝夫、片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

助教：坂尻 彰宏

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
28	12	8	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	8	3	2	0	0
'09	3	3	0	1	2
小計	11	6	2	1	2

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

大学院の教育においては、以下の 6 項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生同士からの批評を糧にして水準向上をめざす。2008年度は修士論文 2 本、2009年度は博士論文 1 本、修士論文 2 本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年 1 回は発表するようにする。⑥専門

教育と連動するかたちで、阪大が進めている新しい世界史教育の試みに参加させ、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにする。

また学部教育においては、以下の4項目を目標とする。①2年次生向けの漢文演習を2種類開講し、卒業論文執筆のための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3年次生、4年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。②中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

2. 研究

教員では毎年1人平均で単著論文ないしそれに匹敵する内容のもの1本を発表することを目標とする。ただし東洋史学分野では印刷・編集などの関係で毎年確実に1本という目標はそもそも無理なので、実際には3年に3本を目標とする。本分野の単著論文とは、理科系の共同論文の少なくとも5本程度、一般的には10本程度、さらに場合によっては20本以上に相当する時間と労力を要するものである。博士後期課程の院生では2年に1本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

合同演習および中央アジア史・中国史・東南アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。こうした学内での順調な教育を反映して、2008年度では、卒業論文8本、修士論文3本、博士予備論文3本を提出させることができた。また院生の論文発表は全6件(レフェリー付き雑誌を含む)にのぼり、さらに学会・研究会(史学会・明清史夏合宿・野尻湖クリルタイ・日本西蔵学会大会・九州史学会など)における発表も8回におよんでいる。また中国・山西省および内モンゴルにおける遺跡・景観調査および北部ベトナムの都城立地の調査に多数の院生を連れて行き、現地学習の機会を与えた。このほか博士後期課程の院生2人が、博士論文として結実する自らの研究を進めるため海外留学した。一方は中国の浙江大学へ1年間の予定で国費留学し、他方はタイのチュラロンコン大学に2年間、松下スカラシップにより留学した。また専門教育と並んで桃木を中心とした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。さらにこの取り組みは、概説の出版(森安の『シルクロードと唐帝国』; 桃木の『海域アジア史研究入門』『歴史学のフロンティア』)と合わせて社会的に注目されたほか、『史学雑誌』(回顧と展望の総説・歴史理論の項)や『歴史学研究』『日本歴史』などの日本を代表する歴史関係の学術雑誌において、先端研究と教育・社会連携を結びつけている例として連続的に取り上げられ、高く評価された。

また2009年度では、卒業論文3本、修士論文3本、博士論文1本を提出させることができた。加えて、院生の論文発表は全3件(レフェリー付き雑誌を含む)にのぼり、学会・研究会(野尻湖クリルタイ・中央アジア学フォーラム・大阪歴史教育研究会など)における発表も14回におよんでいる。また片山は上海での資料調査および上海交通大学との研

究交流セミナーに、博士後期課程の大学院生を参加させ、学生の研究の視野を広げるとともに研究の観点を豊富にした。さらに桃木は北部ベトナムの都城立地の調査に多数の院生を連れて行き、現地学習の機会を与えた。このほか青木は、院生・学部生を「宋代史研究会夏合宿」に幹事校として参加させ、さらに8月25日東京・国士舘大学で科研研究会「《伝統中国の法と秩序》学術討論会」において院生3名に研究発表・討論の機会を与えた。留学状況としては、2008年9月からの浙江大学への留学継続（2010年3月まで）が1名、新たに台湾の教育部華語文奨学金により国立台湾師範大学へ1名が1年間留学した。また専門教育と並んで桃木を中心にした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。また森安は院生と共に数年間続けてきた古代トルコ語ゼミの成果を、森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／田村健／白玉冬「シネウス碑文訳注」（『内陸アジア言語の研究』24, 2009/6, pp. 1-92, + 12 pls.）として出版した。これは研究成果であると同時に教育の成果でもある。このほか2009年度第2学期に英語によるOUSSEP授業 "Creating New World History from Asian and Japanese Perspectives" を開講し、森安と桃木が授業分担者として参加した。さらに片山は、上海交通大学で開催された阪大留学フェアにおいて中国語で模擬授業を実施するとともに、主担当教員となって文学研究科が応募した「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」が、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」において採択され、2010年2月から3年間の派遣プログラムが始動した。

2. 研究

2008年度では、森安、片山、荒川、桃木はそれぞれ、科研研究プロジェクトの代表者として、学内外の分担者・協力を率いて各自の研究計画を遂行するなど、着実に研究成果を挙げている。とくに森安は科研研究プロジェクトの成果をまとめあげ、それを著書として刊行すべく準備している。また片山は科研プロジェクトの第3回ワークショップを国内外の研究者を招いて開催し、その成果を含む年度報告書として『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』第4号（184p.）を刊行したほか、学振外国人招へい研究者（長期）フェローシップに採択された中国中山大学副学長の陳春声教授を、大阪大学外国人招へい研究員・招へい教授として受け入れ、共同研究「近世広東における広東人・客家人・潮州人社会の形成と展開」を進めた。青木も科研プロジェクトの一員として韓国惜字亭予備調査を行い、研究を進展させている。このほか荒川・青木は、博士の学位を取得し、併せて提出した論文を著書として公刊する予定にしている。桃木も日越合同専門家委員会委員として保存に努めているタンロン皇城に関する研究成果を含め、ベトナム語で2本の国際会議報告と1本の論文を公表した。

また2009年度では、森安は5月に開催されたAAWH（アジア世界史学者会議）において中央ユーラシア史関係のセッションのコーディネーターとなるとともに研究報告を行い、片山は第3回「現代“中国”の社会変容と東アジアの新環境」国際シンポジウム（8月25・26日、於大阪、大阪大学中国文化フォーラム主催、中国の南開大学・台湾の東華大学共催）における「共通論題2：近代の変革と伝統の継続」を企画するとともに、報告を行った。また中央研究院近代史研究所における招待講演、阪大と上海交通大学の研究交流セミナーにおける研究発表も行った。また桃木は前掲AAWHで大会組織委員兼歴史教育セッションのコーディネーターを務めるほか、8月に韓国に招かれ韓越和解に関するセミナーで報告し、2月には中国・清華大学での東南アジアと東北アジアの比較に関するシンポジウムでも報告を行った。荒川も前掲AAWHにおいて報告するとともに、6月初旬に韓国において、ソウル大学に招かれて講演を行った。このほか青木は、8月ユトレヒトで開催される国際経済史学会において会議論文を発表するとともに、宋代史研究会を率いて夏合宿を行い、科研研究会を国士舘大学で開催した。1月10日には慶應義塾大学において研究発表を、同16日には早稲田大学で学術講演会を行った。なお桃木は、博士の学位を取得し、既に提出して学位を取得している荒川とともに、博士論文を著書として刊行すべく準備に着手している。

このほか両年度を通じて、中央アジア学フォーラム、海域アジア史研究会なども予定通り開かれるとともに、その運営を主導することによって、自己の研究のみならず、我が国の学界全体の研究水準向上にも貢献した。

3. 社会連携

桃木は全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、森安・荒川がこれを補佐した。具体的には、教育研究会の例会のほかに中央ユーラシア史、グローバルヒストリーなどの重要分野で作業

部会を立ち上げ、当該分野の歴史を教えるうえで最低限必要となる用語集の作成作業を行った。

このほか 2008 年度では、森安は秋に福岡で九州・シルクロード協会交流会の講演を実施して好評を博した。さらに 12 月には、守備範囲を中華世界からアジア全体に拡大しようと努力している台湾の故宮博物院の招きで台北に出張し、「日本におけるマニ絵画の発見とその歴史的背景」というテーマで英語の講演を行い、先方の期待に応えた。それと同時にこの台湾出張の機会を利用し、台中の暨南国際大学でも教員・院生達と交流を行った。また片山は大阪大学文学部説明会で、大学における人文学の学習・研究について高校生向けに「人文学の名探偵になるには：高校の勉強、大学の研究」と題する講演を行い、桃木は 11 月に大阪府立天王寺高校での出前講義をしたほか、タンロン皇城遺跡保存に関する日越合同専門家委員会委員として引き続き同遺跡の調査研究に当たった。さらに青木は、懷徳堂関係の事業として市民を天王寺に遠足に連れて行ったほか、中之島センターにおいて講演するとともに、メディア関係（毎日新聞など）と歴史家の立場から東アジア関係の諸事情について意見交換した。

また 2009 年度では、森安は、北海道高等学校教育研究会、地歴・公民部会（札幌東高等学校、2010 年 1 月 7 日）にて講演を行なった。また荒川は、12 月に 2 回にわたって、朝日カルチャーセンターと共同でやっている、Handai-Asahi 中之島塾という社会人講座で講義を担当し、桃木は秋に適塾記念会、科学カフェ京都などで歴史学と歴史教育に関する社会人向け講演を行った。さらに青木は実教出版において、新たな観点から高校の世界史 A の教科書執筆に加わった。

IV. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

教育目標として掲げた諸項目は、何れについても順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の 3 分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られた。こうした学内での順調な教育を反映して、卒業論文 11 本、修士論文 6 本、博士予備論文 3 本、博士論文 1 本を提出させることができた。何れの論文も高いレベルで作成されており、さらに修士論文については目標としていた数を大きく上回っている。また院生の論文発表および学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに順調に行われた。これらの点から判断して、所期の目標は達成できたと評価したい。

2. 研究

教員・大学院生の研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008 年度～2009 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	2	2
'09	1	0	1
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

白 玉冬 「8～10世紀における三十姓タタル=室韋史研究——モンゴル民族勃興前史として——」2010/3
主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、桃木至朗

【論文博士】

松田孝一 「大モンゴル国の漢地統治制度」2008/9
主査：森安孝夫 副査：荒川正晴、桃木至朗

荒川正晴 「中央アジアの交通・交易と唐帝国」2008/9
主査：森安孝夫 副査：桃木至朗、青木敦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	6(2)
'09	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
計	4(4)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	8(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	5	3	0	0	8
'09	0	2	3	0	0	5
計	0	7	6	0	0	13

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2009年度】

〔博士後期〕

齊藤茂雄「唐代単于都護府考——その所在地と成立背景について——」『東方学』118, 2009, pp. 22-39.

森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／田村健／白玉冬「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』24, 2009, pp. 1-92.

【2008年度】

〔博士後期〕

山本明志「『元史』世祖本紀至元二十二年十二月の干支をめぐって」『13, 14世紀東アジア史料通信』8, 2008, pp. 1-6.

山本明志「モンゴル時代におけるチベット・漢地間の交通と站赤」『東洋史研究』67-2, 2008, pp. 95-120.

白玉冬「回鶻碑文所見八世紀中期的九姓達靼(Toquz Tatar)」『元史及民族與邊疆研究輯刊』21, 2008.

森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／白玉冬／田村健「シネウス碑文テキスト再改訂版」松田孝一(研究代表)『内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究(平成17年～19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)』, 2008, pp. 75-115.

(2)口頭発表

【2009年度】

〔博士前期〕

田由甲「忘れられた男——王積翁をめぐる歴史的評価と後世の名宦卿賢祠廟信仰 ——」《伝統中国の法と秩序》学術討論会, 国士舘大学, 2009/8/25

横山博俊「南宋期の官僚再任人事について——降格処分における法規との関わりを中心に——」《伝統中国の法と秩序》学術討論会, 国士舘大学, 2009/8/25

新見まどか(M1)「唐代の藩鎮間交渉とその背景——成徳節度使を中心として——」第10回遼金西夏史研究会大会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究, 2010/3/21

〔博士後期〕

伊藤一馬「北宋後期の陝西地域における統治体制の構造——黒水城漢文文書の検討を通じて——」《伝統中国の法と秩序》学術討論会, 国士舘大学, 2009/8/25

伊藤一馬「北宋滅亡前後の陝西地域 ——対金、対西夏情勢をめぐって——」第46回日本アルタイ学会大会(野尻湖クリルタイ)長野県信濃町, 2009/7/19

【2008年度】

〔博士前期〕

(共同発表)伊藤一馬・田由甲・横山博俊「近年における宋代史の回顧と展望」科研費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」法文化班2008年度研究報告会, 東洋文庫(東京都文京区), 2008/8/21

沼田英年「明代地方軍事体制の構造について——都司と総兵官の関係をを中心に——」第106回史学会大会・東洋史部会, 東京大学本郷キャンパス, 2008/11/9

〔博士後期〕

齋藤茂雄「6世紀末～7世紀初頭の突厥第一可汗国——啓民可汗と漠北諸可汗との対立——」第45回野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会), 長野県信濃町藤屋旅館, 2008/7/20

山本一「清末の幕府・幕僚よりみる地方政治——張之洞の幕府・幕僚を中心に——」第22回明清史夏合宿, 島根県出雲市, 2005/8/7

山本明志「13世紀チベットにおけるジャムチの設置と戸口調査」第56回日本西藏学会大会, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2008/11/1

富田暁「東南アジアのイスラームにおける知と権力——近世西ボルネオにおけるアラブ人の事例を中心に——」平成20年度九州史学会・イスラム文明学部会, 九州大学箱崎キャンパス, 2008/12/14

(3)その他(書評・翻訳など)

【2009年度】

〔博士前期〕

神野麻衣/田由甲/張育慧/趙冉/荒武達朗[監訳]「翻訳と紹介:單維廉(シュラーマイエル)著『ドイツ領膠州湾(青島)の地政資料』(三)」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』17, 2009, pp. 17-63.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2009年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部：1名 大学院：3名（計4名）

2009年度 学部：1名 大学院：1名（計2名）

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

白玉冬 博士後期課程、内蒙古大学・蒙古学学院・蒙古史研究所、2010/9

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 6名

2008年度：4名 2009年度：2名

2008年度

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 3名

2009年度

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 2名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2008年度：1名 2009年度：0名

9. 刊行物

2008年度

『内陸アジア言語の研究』第23号(中央ユーラシア学研究会)

片山剛編著『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』第4号、大阪：大阪大学文学研究科、

2009年3月、184p.

2009年度

『内陸アジア言語の研究』第24号(中央ユーラシア学研究会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

・中央ユーラシア学研究会(森安研究室に事務局)

1)『内陸アジア言語の研究』の編集・出版

2)中央アジア学フォーラムの開催；会場は大阪大学文学部で年3回

参加人数は毎回35名～45名，参加者の所属機関は延べ約30

2008年度 2008年4月5日(第33回)、2008年9月20日(第34回)、2008年12月20日(第35回)

2009年度 2009年5月2日(第36回)、2009年10月3日(第37回)、2010年3月27日(第38回)

・海域アジア史研究会(桃木研究室に事務局；会場は大阪大学文学研究科)

参加人数は毎回10名～30名，参加者の所属機関は延べ約26

2008年度 2008年4月26日、2008年5月24日、2008年6月28日、2008年10月25日、2008年11月22日、

2009年1月24日

2009年度 2009年4月18日、2009年5月9日、2009年6月28日、2009年10月24日、2009年11月28日、
2010年2月20日

・大阪大学歴史教育研究会(会の運営に参加；会場は大阪大学文学部)

参加人数は毎回30名～40名，参加者の所属機関は延べ約120

2009年度 2009年4月18日、2009年5月16日、2009年6月20日、2009年7月18日、2009年10月17日、
2009年11月21日、2009年12月19日、2009年1月16日、2009年3月13日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 森安孝夫教授

1948年生。1972年、東京大学文学部東洋史学科卒。1981年、東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻博士課程単位修得退学。博士(大阪大学)。1982年、金沢大学文学部助教授。1984年、大阪大学文学部助教授。1994年、大阪大学文学部教授。1998年、大阪大学大学院文学研究科教授。財団法人東方学会評議員。専攻：東洋史学／中央ユーラシア史／敦煌学／トルファン学。

1-1. 論文

森安孝夫「日本に現存するマニ教絵画の発見とその歴史的背景」『内陸アジア史研究』(内陸アジア史学会), 25, pp. 1-29, 2010/3

森安孝夫, 鈴木宏節, 齊藤茂雄, 田村健, 白玉冬(共著)「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』(中央ユーラシア学研究会), 24, pp. 1-92, 2009/6

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

森安孝夫「日本へのマニ教絵画の伝来とその世界史的背景」北海道高等学校教育研究会, 地歴・公民部会, 北海道高等学校教育研究会, 札幌東高等学校, 2010/1

森安孝夫「中央アジア出土古ウイグル手紙文書の書式研究・序説」平成21年度東洋史研究会, 京都大学・東洋史研究会, 京都大学・文学部, 2009/11

Moriyasu, Takao, “The Discovery of Manichaean Paintings in Japan and Their Historical Background.” The First Congress of the Asian Association of World Historians, Asian Association of World Historians, 大阪大学中之島センター, 2009/5

Moriyasu, Takao, “The Discovery of Manichaean Paintings in Japan and Their Historical Background.” 故宮博物院(台北)招待講演, 故宮博物院(台北), 2008/12

森安孝夫「唐・チベット・ウイグル三大勢力の角逐からトルキスタンの成立へ」平成20年度兵庫県高等学校教育研究会社会部会春期総会, 兵庫県高等学校教育研究会社会部会, 2008/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

森安孝夫 コレージュド=フランス招待教授記念メダル, コレージュド=フランス, 2003/5
森安孝夫 大阪大学共通教育賞(第2回), 大阪大学共通教育機構, 2003/5
森安孝夫 東方学会賞(第7回), (財)東方学会, 1988/11
森安孝夫 流沙海西奨学会賞(第8回), 江上波夫記念流沙海西奨学会, 1975/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(A) 一般、代表者:森安孝夫

課題番号: 17202018

研究題目: シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相

研究経費: 2008年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

シルクロード東部地域から出土した碑銘・文書や遺品の原物調査に加え、史跡・遺跡の現地調査によって、シルクロードによる人・物・情報の移動の実態と、それによって活性化された文化交流や社会変動の諸相を解明することを目的とする。従来の漢籍やイスラム文献のような「外縁」の編纂史料から引き出された概括的見方を越えて、現地出土の多言語の文書を精密に解読・分析することによって、前近代のシルクロード東部地域における多民族・多言語・多宗教の人々の営みが、文字通りシルクロードと密接に結びついていたことを示したい。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・評議員	2009年9月～現在に至る
東方学会・理事	2003年9月～2009年9月
東洋史研究会・評議員	2001年11月～現在に至る
内陸アジア史学会・常任理事	1994年11月～現在に至る
日本モンゴル学会・理事	1987年5月～現在に至る

2. 片山 剛 教授

1952年生。1981年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士(東京大学)。1981年高知大学人文学部講師、1984年同助教授、1989年大阪大学文学部助教授、1996年同教授を経て、1998年4月より大学院文学研究科教授。専攻: 中国近世／近代史。

2-1. 論文

片山剛 「擁有土地自然的重層結構: 単位村域的領域及単位農田的領域」大阪大学中国文化フォーラム・南開大学歴史学院・東華大学歴史学系(編)『「第三屆現代中国社会變動與東亜新格局」国際學術討論会 會議手冊&論文集』大阪大学中国文化フォーラム, pp. 119-127, 2009/8

片山剛 「自然の領有における階層構造——字(あざ)の世界と一筆耕地の世界——」森時彦(編)『20世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所現代中国研究センター, pp. 315-341, 2009/6

片山剛 「近世・近代 広東珠江デルタの由緒言説」歴史学研究会(編)『歴史学研究』(歴史学研究会), 847, 青木書店, pp. 23-31, 2008/11

片山剛 「二十世紀中国大陸における土地調査事業と農村社会」東華大学歴史学系・日本大阪大学中国文化論壇・南開大学歴史学院(編)『「第二屆現代中国社会變動與東亜新格局」国際學術討論会 會議手冊&論文集』台湾東華大学, pp. 411-422, 2008/8

2-2. 著書

片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』4, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, 184p., 2009/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

片山剛「擁有土地自然的重層結構:単位村域的領域及單位農田の領域」第14回大阪大学-上海交通大学学術交流セミナー, 上海交通大学, 2009/10

片山剛「擁有土地自然的重層構造:20世紀前半広東農村の単位地名の領域及単宗農田の領域」中央研究院近代史研究所セミナー, 中央研究院近代史研究所, 2009/9

片山剛「擁有土地自然的重層結構:単位村域的領域及單位農田の領域」『第三屆現代中国社会變動与東亜新格局』国際学術討論会, 大阪大学中国文化論壇・南開大学歴史学院・東華大学歴史学系, 大阪大学, 2009/8(『第三屆現代中国社会變動与東亜新格局』国際学術討論会 會議手冊&論文集』pp. 119-127, 2009/8)

片山剛「20世紀前半、南京江心洲開発史と土地調査事業」第三回ワークショップ:近代東アジア土地調査事業研究, 大阪大学, 2008/11(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』4, pp. 76-92, 2009/3)

片山剛「二十世紀中国大陸の土地調査事業及農村社会」『第二屆現代中国社会變動与東亜新格局』国際学術討論会, 東華大学歴史学系・日本大阪大学中国文化論壇・南開大学歴史学院, 東華大学, 2008/8(『第二屆現代中国社会變動与東亜新格局』国際学術討論会 會議手冊&論文集』pp. 99-101, 2008/8)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(A) 海外、代表者:片山剛

課題番号: 17251006

研究題目: 1930年代広東省土地調査冊の整理・分析と活用

研究経費: 2008年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

研究の目的:

東アジアにおける近代的土地調査事業は、日本内地を嚆矢として、沖縄、台湾、朝鮮半島と続き、1930年代に大きな波が中国大陸に押し寄せる。中国でも近代的な測量・製図技術の浸透に伴い、地籍図や土地台帳が作製されていった。だが、調査事業で作製された地図や台帳のうち、大量の現存を確認できるのは1930年代広東省の土地台帳のみである。本研究は、この土地台帳を主要資料としつつ、他省における同様の資料の探索・収集も進め、第一に、中国における近代的土地調査事業の特徴を考察し、第二に、収集資料の中からデータが比較的豊富かつ完備している郷を選定して、農村の空間的構成を復原し、第三に、中国での実地調査による知見も加えて、20世紀前半の中国農村の“細密画”を描き出すことを最終的目標とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2009年度～2012年度、その他補助金、助成金獲得者:片山剛

助成金名: 研究者海外派遣基金助成金(組織的な若手研究者等海外派遣プログラム)

研究題目: 多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2009年度 直接経費 936,000円

研究の目的:

異文化が混在し多元化する現代世界において、真に国際的視野を有する若手研究者の育成を目的として、平成22年2月から

25年2月までの3年間に、総数約150名の文学部・文学研究科の若手研究者等を海外に派遣し、世界の様々な国・地域で文献調査、フィールドワーク等の調査研究に従事させるとともに、国際的な学会・研究会等での研究成果の公表をめざしている。3年間の総額は8530万円、そのうち21年度分は93万6000円。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

史学会・評議員	2001年10月～現在に至る
中国史学会・評議員	2001年4月～現在に至る

3. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。(財)東洋文庫研究員。専攻:中央アジア古代史。

3-1. 論文

荒川正晴 「麹氏高昌国の灌漑水利と税役」『西北出土古文献研究』(西北出土文献研究会), 7, 西北出土文献研究会, pp. 19-41, 2009/3

荒川正晴 「遊牧国家とオアシス国家の共生関係——西突厥と麹氏高昌国のケースから——」『東洋史研究』(東洋史研究会), 67-2, 東洋史研究会, pp. 194-228, 2008/9

3-2. 著書

荒川正晴, 土肥義和, 池田温他(共著) 『敦煌吐魯番出土漢文文書の新研究』東洋文庫, 489p., pp. 271-291, 2009/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

荒川正晴, 岡野誠, 土肥義和他(共著)(書評) 『『唐研究』第14巻(天聖令特集号)』『法史学研究会会報』14, 法史学研究会, pp. 104-130, 2010/3

3-4. 口頭発表

荒川正晴 「唐代の新興庶民と仏教信仰」研究教育フォーラム, 大阪大学文学研究科, 2009/11

Arakawa, Masaharu, "The aspects of Sogdians' trading activities under the Western Turkic state and the Tang Empire." The 2nd International Symposium :Trade and Merchants along the Silk Road, Institute of Central Eurasian Studies, Seoul National University, 2009/6(*The proceedings of the 2nd international symposium*, pp. 33-56, 2009/6)

Arakawa, Masaharu, "The aspects of Sogdians' trading activities under Western Turkic state and the Tang Empire." The First Congress of the Asian Association of World Historians, The Asian Association of World Historians, 2009/5(*The proceedings of the first congress of the AAWH*, pp. 35-48, 2009/8)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 流沙海西奨学会賞, 江上波夫記念流沙海西奨学会, 1986/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(B) 海外、代表者:荒川正晴
課題番号: 18401022

研究題目: コータン出土文書の総合的研究

研究経費: 2008年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

近年、中国新疆ウイグル自治区のコータン地域より数多く出土している古文書史料を実見調査し、出土した遺跡を含めて、史料としての全容を把握することを第1の目的としている。併せて、新疆や甘粛の多くの地域より出土した文書との比較研究を通じて、コータン出土文書の史料としての性格を明確にすることも重要な研究目的としている。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・評議員	2009年4月～現在に至る
内陸アジア史学会・監事	1996年4月～現在に至る

4. 桃木 至朗 教授

1955年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科修了。博士(文学、広島大学)。大阪外国語大学専任講師(ベトナム語)、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授(いずれも東洋史学)などをへて現職。現在、タンロン遺跡調査保存のための日越合同専門委員会委員。専攻:東南アジア史/アジア海域史/歴史教育。

4-1. 論文

桃木至朗 「現代日本における歴史学の危機と新しい挑戦」大阪歴史科学協議会『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 197, 大阪歴史科学協議会, pp. 1-12, 2009/5

秋田茂, 桃木至朗(共著) 「序章・歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観」秋田茂・桃木至朗(共編著)『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, pp. 9-32, 2008/10

桃木至朗 「複数形のベトナム史、閉じないベトナム史」秋田茂・桃木至朗(共編著)『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, pp. 191-212, 2008/10

Momoki, Shiro, “May luan diem moi ve lich su khai pha vung ha luu chau tho song Hong trong giai doan Ly-Tran(I): he thong hanh cung thoi Ly ” Vien Viet Nam hoc va Khoa hoc Phat trien, Dai hoc Quoc gia Ha Noi, *20 nam Viet Nam hoc theo dinh huong lien nganh*, Nha Xuat ban The gioi, pp. 330-341, 2008/10

4-2. 著書

桃木至朗 『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史——歴史学と歴史教育の再生を旨として——』大阪大学出版会, 270p., 2009/4

秋田茂, 桃木至朗(共編著) 『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観——』大阪大学出版会, 265p.(本人執筆分 pp. 9-32, pp. 191-212), 2008/10

桃木至朗, 小川英文, クリスチャン・ダニエルス他(共編著) 『新版東南アジアを知る事典』平凡社, 729p.(本人執筆分 14 項目), 2008/6

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

桃木至朗 「中世～近世の東南アジア史と東北アジア史をつなぐ／くらべる——歴史学と歴史教育を刷新する試みの一例として——」: 東南アジアと東北アジア; 複線の歴史と多元的文化の再検討, 清華大学人文社会科学学院, 北京市九華山荘, 2010/2

Momoki, Shiro, “How Can Research and Educaiton of Vietnam and Southeast Asia Develop in Northeast Asian Countries, A Case

Study in Japan”, Third Internaitonal Forum on Historical Reconciliation in East Asia:Promoting Interest in and Understanding of Southeast Asia including Vietnam, Unesco National Committee of South Korea, Sejong Hotel, Seoul, 2009/8

Momoki, Shiro, “Revitalizing Historical Research and Education: A Challenge from Osaka”, The First Congress Osaka 2009, Asian Association of World Historians, Osaka University Nakanoshima Center, 2009/5

Momoki, Shiro, “Mot so cau hoi moi ve kinh do Thang Long thoi Ly-Tran: Khai thac lai thu tich co”, Hoi thao quoc te lan thu III ve Viet Nam hoc:Viet Nam tren duong phat trien va hoi nhap, Vien Viet Nam hoc va Khoa hoc Phat trien (Dai hoc Quoc gia Ha Noi), Vien Khoa hoc Xa hoi, Dai hoc Quoc gia Ha Noi, 2008/12

Momoki, Shiro, “Hay hoc Viet Nam vi Nhat Ban hoc o Viet Nam”, Hoi thao Quoc te “Thuc day Nghien cuu Nhat Ban tai Viet Nam”, ハノイ国家大学(Vietnam Naitonal University, Hanoi), 2008/9

桃木至朗 「現代日本における歴史学の危機と新しい挑戦」大阪歴史科学協議会例会，大阪歴史科学協議会，大阪大学，2008/4

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桃木至朗

課題番号: 20320111

研究題目: 中・近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成

研究経費: 2008年度 直接経費 5,000,000円 間接経費 1,500,000円

2009年度 直接経費 4,400,000円 間接経費 1,320,000円

研究の目的:

10～18世紀ベトナム王朝における権力構造の歴史の変遷を研究する取り組みの一環として、狭義の都市域以外も含む支配拠点の立地や空間配置という未開拓の領域に着目し、文献・地図研究と実地調査を通じた事例研究を試みる。北部のタンロン＝ハノイと中部のフエのほか、各時期の副都クラスの拠点を主に調査する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

タンロン遺跡調査保存のための日越合同専門家委員会委員	2007年3月～現在に至る
東南アジア学会・理事(教育・社会連携担当)	2007年1月～現在に至る
文化遺産国際協力コンソーシアム・タンロン遺跡保存に係る専門委員会委員	2006年12月～現在に至る
大阪大学歴史教育研究会・代表	2005年11月～2010年3月
史学研究会・評議員	2000年6月～現在に至る

5. 坂尻 彰宏 助教

1970年生。1994年大阪大学文学部史学科東洋史学専攻卒業。2003年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学、大阪大学、2003年)。専攻:内陸アジア史、敦煌学、敦煌オアシス地域社会の研究。

5-1. 論文

坂尻彰宏 「大英図書館蔵五代敦煌帰義軍酒破歴——S 八四二六——」大阪大学文学研究科(編『大阪大学文学研究科紀要』50, 大阪大学文学研究科, pp. 29-59, 2010/3

坂尻彰宏「帰ってきた男——草原とオアシスのあいだ——」(財)懐徳堂記念会(編)『世界史を書き直す 日本史を書き直す——
阪大史学の挑戦——』和泉書院, pp. 35-75, 2008/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

坂尻彰宏「シルクロードと日本」第40回 サイエンスカフェ, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2010/1
Sakajiri, Akihiro, “The Relationship between Upland Nomads and Oasis Sedentary People as seen from Dunhuang Manuscripts” 第
1回国際敦煌学研討会, 国際敦煌学研討会, ロシア科学アカデミー東方文献研究所, 2009/4
坂尻彰宏「朝貢、貿易、あるいは投資——9・10世紀敦煌の使節派遣——」第9回遼金西夏史研究会大会, 遼金西夏史研究会,
2009/3
坂尻彰宏「オアシス——水系——山地:敦煌文献からみた草原とオアシス」第45回日本アルタイ学会大会, 日本アルタイ学会,
2008/7
坂尻彰宏「帰ってきた男 ——敦煌文書からみた草原とオアシスのあいだ——」大阪大学歴史教育研究会 第24回例会, 大阪
大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2008/5
坂尻彰宏「官布論争 ——麻布か, 棉布か, あるいは毛織物か——」中央アジア学フォーラム 第33回会合, 中央ユーラシア学
研究会, 大阪大学, 2008/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-9 西洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 4 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：江川 温、竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男

准教授：中野耕太郎、栗原 麻子

助教：中村 武司

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
48	8	8	0	0	0	7	0	2

※うち留学生 0 名、社会人学生 3 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	5	6	2	1	0
'09	13	5	0	3	0
小計	18	11	2	4	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習をいっそう定着させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを実践させること、③IT教育を充実させ、教材のデータベースを構築することを目標とした。大学院においては、①論文

作成に向けてのモデル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学研究科内外の他専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

2. 研究

西洋史研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をとおした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

3. 社会連携

西洋史研究室は、研究成果を社会一般、特に高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校へ出張授業、③「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業による研究会の開催、④放送大学へ出講、を目標とした。また、個人および研究室のホームページを充実させることで、研究・教育活動の広報と研究成果の公開に努めた。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

演習をディベート、リサーチに分化することによって、大学院、学部における論文作成指導のシステムを効率的に整備した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に導入することができた。IT教育の分野では、100万字を越えるデータを西洋史ホームページ上で検索可能とし、英文のデータベースの作成も行った。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を定着させ、さらに加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めることができた。

2. 研究

西洋史研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、イギリス帝国史研究会、関西アメリカ史研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。教員は、計14篇の学術論文を刊行するとともに、『歴史学のフロンティア』(共編)、『アメリカ史研究入門』(共著)などの概説、入門書を出版し、また日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする数多くの競争的外部資金の代表者となっている。大学院生は計10篇の学術論文、26本の学会報告を公表し、2名が日本学術振興会研究員に採択された。さらに、研究室として計8回のグローバルヒストリー・セミナー、ワークショップを開催するなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化に尽力した。

3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史A・B教科書(第一学習社)の執筆に関わるとともに、高等学校へ出張講義を積極的に実施した。また、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業を引き継いで、高校の世界史教員をまじえた研究会、授業を月1回行った。さらに、教員の一部が放送大学に出講し、社会一般への貢献を推進することができた。加えて、ホームページの内容を随時拡充することで、研究・教育活動の概要を広く社会に周知できた。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制が大きく改善された。卒業論文、修士論文ともに質の高いものが多く出ており、またこの間、課程博士を4名出す事が出来た。さらに、教職をはじめとして、計4名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標は概ね達成されたものと評価する。卒業生、修了生以外の学生についても、論理力・分析力および外国語運用能力において顕著な向上のあとが見られ、十分な成果があったと考える。

2. 研究

研究の項に掲げられた目標はおおむね達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも質量ともに、十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学術会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものとする。

3. 社会連携

上記の活動をとおして、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。特に高校世界史教育との連携には充実した成果が得られたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	3	4
'09	3	0	3
計	4	3	7

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 田中晶子 「戦後西ドイツの「対抗的公共圏」——ハンブルク SDS の広報活動を中心に——」 2009/3
主査：竹中 亨 副査：藤川隆男、中野耕太郎
- 津田博司 「イギリス帝国における世界大戦の記憶とナショナリズムの比較研究」 2010/3
主査：藤川隆男 副査：秋田 茂、中野耕太郎
- 水田大紀 「近代イギリスにおける官僚制度改革とメリトクラシーの浸透」 2010/3
主査：秋田 茂 副査：藤川隆男、竹中 亨
- 頼 順子 「中世後期の狩猟と狩猟術の書」 2010/3
主査：江川 温 副査：藤川隆男、栗原麻子

【論文博士】

- 佐喜真望 「イギリス労働運動と議会主義——リブ＝ラブ主義からプログレッシヴィズムへ——」 2008/9
主査：秋田 茂 副査：藤川隆男、中野耕太郎
- 指 昭博 「近世イングランドにおける教会と社会——メアリとエリザベスの時代——」 2008/9
主査：江川 温 副査：秋田 茂、藤川隆男

玉木俊明 「北方ヨーロッパの商業と経済 1550年—1815年」 2009/3
 主査：秋田 茂 副査：江川 温、佐村明知、川北 稔

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	4(4)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(4)
'09	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0)	6(3)
計	7(7)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0)	10(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	6	4	5	0	0	15
'09	1	6	4	0	0	11
計	7	10	9	0	0	26

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

小畑理香「ヨーロッパ統合と視聴覚メディア——EC文化政策とフランスの関係 1980-1993年」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 6, pp.96-111, 2009/3.

〔博士後期〕

Atsushi YAMANASHI, «Georges Bigot et les caricatures anticléricales contre la Société de Marie», *Ridiculosa*, n° 15 2008, p.373-383.

〔その他〕

北原靖明「ブラックパワーとトリニダード」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 6, pp.80-95, 2009/3.

【2009年度】

〔博士前期〕

小川公子・工藤駿・橋村淳一・矢景裕子「模擬授業報告(1) 大航海時代について」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発成果報告書シリーズ1』(平成20-22年度科学研究費補助金、基盤研究(B)・課題番号20320094、研究代表者堤一昭), pp.1-22, 2009/4

南理恵、小林和夫、阪本陽子、柳沢菜々「模擬授業報告(2) ロシア前史——ユーラシア帝国ロシアの成立——」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発成果報告書シリーズ1』(平成20-22年度科学研究費補助金、基盤研究(B)・課題番号20320094、研究代表者堤一昭), pp.23-40, 2009/4

印牧定彦・奥村茂輝・中村翼・武韻恩・宮川耕平「模擬授業報告(3) 海域アジアにおける日本人」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発成果報告書シリーズ1』(平成20-22年度科学研究費補助金、基盤研究(B)・

課題番号 20320094、研究代表者堤一昭), pp.41-58, 2009/4

[博士後期]

森新太「ヴェネツィア商人たちの『商売の手引き』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 7, pp.76-85, 2010/2

安井倫子「アフーマティブ・アクション史ノート——歴史に現れた三つのアフーマティブ・アクション——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 7, pp.64-75, 2010/2

[その他]

田中晶子「24 年組と『内なるドイツ』——1970 年代の少女漫画と教養主義の交差点」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 25, pp.71-90, 2009/11

(2)口頭発表

【2008 年度】

[博士前期]

小川公子・工藤駿・橋村淳一・矢景裕子「大航海時代について」大阪大学歴史教育研究会第 27 回例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2008/10/18

小林和夫・阪本陽子・柳沢菜々・南理恵「ロシア前史」大阪大学歴史教育研究会第 28 回例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2008/11/15

宮川耕平「戦間期の上海国際共同租界におけるセキュリティ」中国文化コロキウム, 大阪大学/豊中市, 2008/7/19

奥村茂輝・印牧定彦・中村翼・武韻恩・宮川耕平「海域アジアにおける日本人」大阪大学歴史教育研究会第 29 回例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2008/12/20

[博士後期]

田中晶子「APO 期のハンブルク SDS (Der Deutsche Sozialistische Studentenbund) による「公共圏」の展開——反シュプリングァー・キャンペーンから『アポプレス』へ——」ドイツ現代史研究会 2008 年 4 月例会, 同志社大学/京都府京都市, 2008/4/27

Akiko TANAKA, Das Deutschlandsbild als Treffpunkt der japanischen Bildungskultur und der Mädchencomics in den 1970er Jahren, in 2. Ostasiatische Deutschlandhistorikerkonferenz(第 2 回東アジアドイツ史会議), 大阪国際会議場, 2008/11/ 21-22

中尾恭三「ヘレニズム前期のアテナイと私的儀礼結社——政治的観点からみた結社の意義——」九州西洋史学会 2009 年度春季大会, 九州大学, 2009/3/21

Atsushi YAMANASHI, «Georges Bigot et l'Eglise Catholique au Japon à la fin du 19ième siècle - Les caricatures anticléricales sur la Société de Marie - » Colloque international de l'Equipe Interdisciplinaire de Recherche sur l'Image satirique, Caricature et Religion(s), Université de Bretagne occidentale (Brest, France), 24.05.2008

Atsushi YAMANASHI, «Les caricatures anticléricales de Georges Bigot à la fin du 19e s. au Japon. Les caricatures contre le P. Evrard, MEP », Colloque du Centre de Recherche Européen sur la Diffusion et l'Inculturation du Christianisme, Images et diffusion du christianisme : Images et expressions graphiques en contexte missionnaire, Centre Jean Bosco (Lyon, France), 30.08.2008

Atsushi YAMANASHI, «La Société des Missions Etrangères de Paris (MEP) au Japon à l'ère Meiji : - Face à la modernité - », Colloque international de la Société Française des Etudes Japonaises, Modernité japonaise en perspective : 150ème anniversaire des relations franco-japonaises, Université Lille 3 (Lille, France), 20.12.2008

Atsushi YAMANASHI, «Les écoles féminines des congrégations religieuses françaises et les écrivains japonais», Colloque international de l'Institut de Sciences et Théologie des Religions et le Groupe de Recherche Interdisciplinaire sur les Écrits missionnaires, Visages de femmes missionnaires en terre de mission, Institut Catholique de Paris (Paris, France), 28.03.2009

頼順子「中世後期フランスにおける狩猟と狩猟術の書——14 世紀後半におけるフランス語の狩猟術の書成立に関する一考察——」日本西洋史学会第 58 回大会, 島根大学/島根県松江市, 2008/5/11

頼順子「シャルル8世と狩猟術の書——G. タルディフ『鷹狩り術と猟犬の書』の初版と写本(MS Hunter 269)の成立をめぐって」2008年度広島史学研究大会西洋史部会, 広島大学/広島県東広島市, 2008/10/25

〔その他〕

Takeshi NAKAMURA, 'Admirals in the first city of the empire: navy, culture and politics in pre-radical Westminster', The Third Japanese-Korean Conference of British History, 全南大学校/韓国・光州市, 2008/11/13

中村武司「名声への渴望——ナポレオン戦争時代のイギリスとセント・ポール大聖堂——」大阪大学歴史教育研究会第30回例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2009/1/17

【2009年度】

〔博士前期〕

小林和夫「大西洋奴隷貿易とインド産綿製品——イギリス国際商業と商人の視点——」第6回アフリカ史研究会, 関西大学/大阪府吹田市, 2010/3/28

〔博士後期〕

石田真衣「前2世紀エジプトにおける地域社会の再編——テーベのヘルミアス訴訟を中心に——」第14回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学/大阪府豊中市, 2009/6/27

伊永雅昭「経済開発とナイジェリア統合」歴史家協会大会, 関西大学/大阪府吹田市, 2009/6

紫垣聡「中世末期ミュンヘンの都市社会と秩序」西洋中世学会・若手交流セミナー:ポスターセッション, 京都女子大学/京都府京都市, 2009/10

紫垣聡「15・16世紀ミュンヘンにおけるポリツァイの射程——下級役人の活動と社会的背景を通じて——」広島史学研究大会西洋史部会, 広島大学/広島県東広島市, 2009/10

森本慶太「1930年代スイスにおける観光業の危機と革新——G.ドゥットヴァイラーとホテルプラン協同組合」近代社会史研究会第226回例会, 京大会館/京都府京都市, 2009/10/24

森本慶太「両大戦間期スイスにおける観光業の危機とホテルプラン協同組合」2009年度九州史学会大会西洋史部会, 九州大学/福岡市, 2009/12/13

安井倫子「『フィラデルフィア・プラン』の歴史的意味——AFL-CIO 文書を中心に——」関西アメリカ史研究会第237回例会, キャンパスプラザ京都, 2010/1/24

〔その他〕

田中晶子「ドイツ戦後史研究の展開と戦後社会の比較歴史学——『二つの戦後・二つの近代——日本とドイツ』をてがかりに」ドイツ現代史研究会2009年10月例会, キャンパスプラザ京都/京都府京都市, 2009/10/25

Takeshi NAKAMURA, 'Belisarius the counterfeit? Lord Cochrane, war and British radicalism, 1807-1818', Sixth Anglo-Japanese Conference of Historians, 東京大学/東京都文京区, 2009/9/19

中村武司「ナポレオン戦争とイギリス急進主義——コクリン卿の事例を中心に——」2009年度史学会大会・西洋史部会, 東京大学/東京都文京区, 2009/11/8

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士前期〕

工藤 駿・小林和夫・宮川耕平(書評論文)「ユーラシアからグローバル・ヒストリーへ——John Darwin, *After Tamerlane: The Rise & Fall of Global Empires, 1400-2000* をめぐって——」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 6, pp.137-149, 2009/3

小林和夫(研究動向)「ウィリアムズ・テーゼと奴隷貿易研究」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 6, pp.112-125, 2009/3

〔博士後期〕

田中晶子(書評)「斎藤哲著『消費生活と女性——ドイツ社会史(1920-70)の一側面——』日本経済評論社, 2007年11月刊行」『西洋史学』(日本西洋史学会), 232, pp.82-84, 2009/3

中尾恭三(書評)「C. =サッルススティウス=クリスプス著、合阪學・鷺田睦朗翻訳・註解『カティリーナの陰謀』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 6, pp.150-153, 2009/3

森本慶太(共訳)ジョン・C・トーピー著、藤川隆男監訳『パスポートの発明 監視・シティズンシップ・国家』法政大学出版社, 2008/12

[その他]

中村武司(書評)「長井伸仁著『歴史がつくった偉人たち——近代フランスとパンテオン』『西洋史学』(日本西洋史学会), 232, pp.75-76, 2009/3

【2009年度】

[博士前期]

石川華子(書評)「パトリック・J・ギアリ著(鈴木道也・小川知幸・長谷川宜之訳)『ネイションという神話ヨーロッパ諸国家の中世的起源』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 7, pp.120-124

坂井祐太(書評)「ジョン・トーピー著(藤川隆男監訳)『パスポートの発明 監視・シティズンシップ・国家』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 7, pp.116-120

吉田雪恵(書評)「木村雅昭『帝国・国家・ナショナリズム世界史を衝き動かすもの』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 7, pp.124-129

[博士後期]

伊永雅昭(書評)「Gerold Krozewski, *Money and the End of Empire: British International Economic Policy and the Colonies, 1947-58*』『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 7, pp.129-132, 2010/2

頼順子(書評)「イヴ=マリー・ベルセ著、阿河雄二郎・嶋中博章・滝沢聡子訳『真実のルイ14世——神話から歴史へ——』『西洋史学』(日本西洋史学会), 234, pp.76-77, 2009/9

[その他]

中村武司(書評)「水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』『歴史科学』(歴史科学協議会), 197, pp.13-18, 2009/5

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2009年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部: 1名 大学院: 4名 (計5名)

2009年度 学部: 1名 大学院: 2名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2008年度: 3名 2009年度: 1名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2008 年度 : 1 名 2009 年度 : 0 名

9. 刊行物

2008 年度 『西洋史学』 229 号～232 号 学術雑誌 (日本西洋史学会)
『パブリック・ヒストリー』 第 6 号 学術雑誌(大阪大学西洋史学会)
2009 年度 『西洋史学』 233 号～236 号 学術雑誌 (日本西洋史学会)
『パブリック・ヒストリー』 第 7 号 学術雑誌(大阪大学西洋史学会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー(経済学研究科と共催)	2008 年度～現在に至る
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2008 年度～現在に至る
大阪大学西洋史学会	2008 年度～現在に至る
関西アメリカ史研究会	2008 年度～現在に至る
Demosthenes, Politics, Macedonia: Discussion with Professor Ian Worthington (セミナー)	2008 年 11 月 24 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

2008 年度

グローバルヒストリー・セミナー

- 第 27 回 2008 年 4 月 26 日(世界史講座と共催) 於 : 大阪大学中之島センター
- 第 28 回 2008 年 6 月 28/29 日(世界史講座と共催) 於 : 大阪大学中之島センター
- 第 29 回 2008 年 10 月 4 日(世界史講座と共催) 於 : 学内
- 第 30 回 2008 年 11 月 5 日(世界史講座と共催) 於 : 学内
- 第 31 回 2009 年 3 月 1-3 日(世界史講座と共催) 於 : 淡路・夢舞台

2009 年度

グローバルヒストリー・セミナー

- 第 32 回 2009 年 11 月 11 日(世界史講座と共催) 於 : 豊中キャンパス待兼山会館
- 第 33 回 2009 年 12 月 10 日(世界史講座と共催) 於 : 大阪大学中之島センター

グローバルヒストリー・ワークショップ

- 第 10 回 2009 年 9 月 14 日(世界史講座と共催) 於 : 大阪大学中之島センター

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 江川 温 教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より2009年9月まで放送大学客員教授。2008年4月より2010年3月まで文学研究科長。専攻: 西欧中世史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

江川温 『フランス封建社会と神の平和運動』科学研究費補助金研究成果報告書, 53p., 2010/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:江川温

課題番号: 19520628

研究題目: フランス封建社会と神の平和運動

研究経費: 2008年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2009年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

フランス 11, 12 世紀における神の平和・休戦の運動の起源と各地方における展開を分析することを通じて、この時期のフランスにおける公的秩序観念の展開を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏歴史学会・副会長	2008年4月～現在に至る
史学会・評議員	2005年4月～現在に至る
日本西洋史学会・代表	2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2004年4月～現在に至る

2. 竹中 亨 教授

1955年生。1983年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。文学博士(京都大学、1994年)。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995年より現職。専攻: 西洋史学。

2-1. 論文

Takenaka, Toru, "Business Activities of Siemens in Japan: A Case Study of German-Japanese Economic Relationships before the First World War," Akira Kudo, Nobuo Tajima, and Erich Pauer (eds.) *Japan and Germany: Two Latecomers to the World Stage, 1890-1945*, Global Oriental, v. 1, pp. 114-149, 2009/9

竹中亨 「東アジアにおけるドイツのソフトパワー——日本を例に」『かけ橋 Die Brücke』(日独協会), 630, 日独協会, pp. 1-2, 2009/3

竹中亨, 森田邦久, 酒井一臣(共著) 「教育改革のなかでのヨーロッパの歴史教育実践——学生本位主義への転換」『西洋史学』229, 日本西洋史学会, pp. 58-70, 2008/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

竹中亨「明治のワーグナー・ブーム」現代史研究会 2009 年大会, 京都大学現代史研究会, 2009/7

竹中亨「明治期の絶対音楽論——洋楽受容の論理」国際ワークショップ: 日本とドイツの文化交流と相互イメージ, 上智大学, 2009/6

Takenaka, Toru, “University Incorporation Reform in Japan,” ソウル大学文学部教授会懇談会, ソウル大学文学部, ソウル大学, 2009/3

Takenaka, Toru, “Western Music in 19th Century Japan as Cultural Transfer,” 韓国外語大学, 韓国外語大学, 2009/3

Takenaka, Toru, “Deutsche Softpower in Ostasien. Eine Skizze am Beispiel Japans,” 第 2 回東アジアドイツ史会議: Deutsche Softpower in Ostasien in Vergangenheit und Gegenwart, 2008/11

Takenaka, Toru, “Non-Western World and Western Values – Reaction of the Japanese to Cultural Westernization,” Intensive Program of the M.A. Programme Euroculture: European Heritage and Collective Memories, M.A. Programme Euroculture, University of Cracow, 2008/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007 年度～2010 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 竹中亨

課題番号: 19320118

研究題目: 近代化過程における宗教の再活性化の比較的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,900,000 円 間接経費 570,000 円

2009 年度 直接経費 1,900,000 円 間接経費 570,000 円

研究の目的:

近代化過程において、宗教的エネルギーは、種々の変貌を遂げながら、維持され、あるいは再活性化した。それを、欧米、日本の事例に則して比較的に研究することを旨としている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2009 年度、研究助成、助成金獲得者: 竹中亨

助成金名: サントリー文化財団助成金

研究題目: ドイツ・ソフトパワーと東アジア統合の文化的基盤形成に関する研究

助成団体名: サントリー文化財団

助成金額: 2009 年度 直接経費 1,000,000 円

研究の目的:

ドイツは 19 世紀には、日本のみならず、東アジア全体において大きな文化的影響力をもった。本研究は、それを日韓で比較的に研究することを目的としている。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 秋田 茂 教授

1958年生。1985年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(大阪大学、2003年)。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003年10月より現職。専攻:イギリス帝国史・グローバルヒストリー。

3-1. 論文

Akita, Shigeru, “The International Order of Asia in the 1930s and 1950s”, Shigeru Akita (ed.), *Working and Discussion Paper Series*, (Global History and Maritime History), No.15, Osaka University, pp. 1-10, 2009/12

秋田茂 「1930-1950年代アジア国際経済秩序とイギリス帝国・スターリング圏」大阪大学中国文化フォーラム『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第三回国際シンポジウム論文集』大阪大学中国文化フォーラム・大阪大学グローバルコラボレーションセンター, pp. 137-142, 2009/8

Akita, Shigeru, “Transformation of the Colombo Plan and the Sterling Area in the late 1950s and the early 1960s”, Shoichi Watanabe(共著), *The Formation of the New International Order in Asia and the International-Aid Plan: The Interim Report by Grant-in-Aid for Scientific Research (A) (No. 19202018)*, Tohoku Gakuin University, pp. 125-149, 2009/3

秋田茂他(共著)「東アジア地域統合の歴史的考察」『2008年度大学研究助成 アジア歴史研究報告書』(財団法人JFE21世紀財団), 2008年度, pp. 1-10, 2009/3

Akita, Shigeru, “Die internationale Wirtschaftsordnung in Asien und Hongkong während der 1930er und 1950er Jahre aus komparativer Perspektive”, Frank Hatje und Klaus Weber (eds.) *Hamburger Wirtschafts-Chronik*, (Wirtschaftsgeschichtlichen Forschungsstelle Hamburg e.V.), Neue Folge Band 7, Verlag Hanseatischer Merkur, pp. 189-211, 2008/12

Akita, Shigeru, “Creation of a New Global History and British Imperial History: Japanese Perspectives”, *Yōngkuk Yōnku (The Korean Journal of British Studies)*, (Yongkuksa Hakhoe (The Korean Society of British History)), Vol. 20, pp. 325-348, 2008/12

秋田茂 「コロンボプランからアジア太平洋協力へ——地域統合と日本の「開かれた地域主義」構想」東華大學歴史学系(編)『国際学術討論会 会議手冊&論文集』(第二回現代中国社会変動與東亞新格局), 2008年, pp. 133-140, 2008/8

3-2. 著書

秋田茂, 樺山紘一他(共著)『新・現代歴史学の名著——普遍から多様へ』中央公論新社, pp. 200-214 (オブライエン『帝国主義と工業化 1415-1974』), 2010/3

Akita, Shigeru, Antony Best et al. (共著), *The International History of East Asia, 1900-1968: Trade, ideology and the quest for order*, Routledge-Curzon, pp. 153-167 (Chap.10: Shigeru Akita, “The East Asian international economic order in the 1950s”), 2010/2

Akita, Shigeru, Nicholas J. White et al. (共編著), *The International Order of Asia in the 1930s and 1950s*, Ashgate Publishing Limited, pp. 1-13 (“Introduction: The International Order of Asia in the 1930s and 1950s: Context, Hypotheses and Scope”, with Nicholas White), pp. 17-48 (Chap.1: Shigeru Akita, “British Economic Interests and the International Order of Asia in the 1930s”), 2010/1

秋田茂, 桃木至朗他(共編著)『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, pp. 9-32 (序章:桃木と共同執筆); pp. 112-135 (第四章: イギリス帝国とヘゲモニー), 2008/10

秋田茂, 水島司他(共著)『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社, pp. 102-113 (第七章: アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー), 2008/8

秋田茂他(共著), 懐徳堂記念会(編)『世界史を書き直す 日本史を書き直す——阪大史学の挑戦』和泉書院, pp. 191-232 (第六章: イギリス帝国と近代アジア・日本), 2008/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂 「書評『植民地責任』論』(永原陽子編、青木書店、2009年)をめぐって(II) グローバルヒストリー研究から見た「植民地責任」論の問題点」歴史学研究会(編)『歴史学研究』 865, pp. 20-22, 2010/3

- 秋田茂 「アメリカのヘゲモニーと東アジア世界:関係史の視点から近現代史をとらえなおす——アジアを事例に 3」帝国書院『世界史のしおり』42, pp. 1-3, 2010/1
- 秋田茂 「戦間期のナショナリズムと脱植民地化:関係史の視点から近現代史をとらえなおす——アジアを事例に 2」帝国書院『世界史のしおり』41, pp. 1-3, 2009/10
- 秋田茂 「イギリスのヘゲモニーとアジア世界:関係史の視点から近現代史をとらえなおす——アジアを事例に 1」帝国書院『世界史のしおり』38, pp. 1-3, 2009/4
- Akita, Shigeru, “What to expect from a Dictionary of Transnational History, from a Global Economic History perspective ?”(WEBでの書評) <http://www.transnationalhistory.com/discussion.aspx?id=1742>, *The Palgrave Dictionary of Transnational History*, Palgrave-Macmillan, p. 3, 2009/1

3-4. 口頭発表

- Akita, Shigeru, “Formation of New International Order of Asia in the 1950s and 1960s: Decolonization, Cold War and Asian initiatives”, *New International Order of Asia and Regional Powers in the 1950s and 1960s: Major Regional Powers in Eurasia*, The Slavic Research Center, Hokkaido University and University of Tokyo, 2010/3
- 秋田茂 「1930-50年代アジア国際経済秩序とイギリス帝国・スターリング圏」 「東南亜と東北亜:歴史と多元文化的再省思」 学術研究会:東北アジア地域研究, 中国・清華大学・歴史系, 北京・九貨山荘, 2010/2
- Akita, Shigeru, “The Transformation of the Colombo Plan and the Sterling Area in the late 1950s and the early 1960s”, *International Workshop on Cold War, Decolonization and the Colombo Plan: The Transformation of the International Order of Asia in the 1950s and 1960s*, Nehru Institute for Advanced Studies, Jawaharlal Nehru University, India and Tohoku Gakuin University, Japan, India, 2009/12
- 秋田茂 「南アジアにおける脱植民地化と歴史認識——インドのコモンウェルス残留」 菅科研・ソウル国際ワークショップ:パワーと歴史認識の交錯, 西南女学院大学・韓国梨花女子大学地球史研究所, 2009/9
- Akita, Shigeru, “The Transformation of the Colombo Plan and the Sterling Area in the late 1950s and the early 1960s”, *The 15th World Economic History Congress*, International Economic History Association, University of Utrecht, 2009/8
- 秋田茂 「1930-1950年代アジア国際経済秩序とイギリス帝国・スターリング圏」 現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境・第三回国際シンポジウム:東アジア地域研究, 大阪大学中国文化4フォーラム、南開大学歴史学院、東華大学歴史学系, 大阪大学, 2009/8
- Akita, Shigeru, “The International Order of Asia in the 1930s and 1950s”, *The First Congress of The Asian Association of World Historians: World History Studies and World History Education*, Big Session: Colonialism and Decolonization in Asia Reconsidered, Asian Association of World Historians (AAWH), Osaka University, 2009/5 (*The Proceedings of The First Congress of The Asian Association of World Historians*, CD-ROM, 2010/3)
- 秋田茂 「東アジアの「奇跡」から東アジアのルネサンスへ:世界銀行のアジア世界認識とグローバルヒストリー」 科研「グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考」2008年第三回研究会(国際ワークショップ), 大阪大学グローバルヒストリー研究会, 淡路夢舞台国際会議場, 2009/3
- Akita, Shigeru, “The Transformation of Colombo Plan and the Sterling Area in the late 1950s and Early 1960s”, *1950-60年代亞洲國際秩序:International Order of Asia in the 1950s and 1960s*, Tohoku Gakuin University and Academia Historica, R.O.C., 2008/12 (*The Academia Historica Newsletter*, No.2, pp. 194-207, 2009/6)
- Akita, Shigeru, “Comments from the points of view of relational history”, *The Symposium in Commemoration of the Executive Committee Meeting of the IEHA: Multiple Paths of Economic Development in Global History*, Kyoto University Global COE Program on Sustainable Humanosphere and Osaka University Grant-in-Aid for Scientific Research Project on Global History, Research Institute for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2008/11 (*Multiple Paths of Economic Development in Global History: Proceedings of the Symposium in Commemoration of the Executive Committee Meeting of the IEHA*, pp. 309-310, 2009/1)
- Akita, Shigeru, “Creation of a New Global History and British Imperial History——Japanese Perspectives”, *The Third*

Korea-Japan Forum for British History: Region, Interchange and Culture in History, The Korean Society of British History, Chonnam National University, Korea, 2008/11 (*Yōngkuk Yōnku (The Korean Journal of British Studies)*, Vol.20, pp. 325-348, 2008/12)

Akita, Shigeru, “Transformation of the Colombo Plan and the Sterling Area in the late 1950s and the early 1960s”, International Workshop on the Formation of the New International Order in Asia and the International-Aid Plan, Tohoku Gakuin University, 2008/9 (*The Formation of the New International Order in Asia and the International-Aid Plan: The Interim Report by Grant-in-Aid for Scientific Research (A) (No.19202018) in 2007-2008*, pp. 125-150, 2009/3)

秋田茂 「コラボレーターの帝国・コモンウェルス認識と戦後国際秩序」科研「冷戦後東アジア国際関係の構造変動と秩序形成の総合的研究」2008年度第二回研究会:歴史認識と国際秩序(西南女学院大学), 中国・社会科学院近代史研究所, 2008/9

桃木至朗, 秋田茂 「グローバル経済の中の東アジア」神奈川県高等学校教科研究会・社会科部会歴史分科会 2008年研修会:近代アジア世界をどう教えるか, 栄光学園, 2008/8

秋田茂 「コロンボプランからアジア太平洋協力へ——地域統合と日本の「開かれた地域主義」構想」「第二回現代中国社会変動與東亞新格局」国際学術討論會:現代中国社会変動與東亞新格局, 東華大學歴史学系・大阪大学中国文化論壇・南開大學歴史学院, 東華大學歴史学系, 2008/8 (『「第二回現代中国社会変動與東亞新格局」国際学術討論會 會議手冊&論文集』2008年, pp. 133-140, 2008/8)

Akita, Shigeru, “The British Empire and Industrialization-based International Order of Asia in the First Half of the Twentieth Century”, Second European Congress of World and Global History: World and Global History, European Network in Universal and Global History (ENIUGH), Dresden, Germany, 2008/6

Akita, Shigeru, “Creating Global History from Asian perspectives”, Preparatory meeting for the Establishment of the Asian Association of World Historians (AAWH): Global History & World History, Nankai University (南開大學), 2008/5

秋田茂 「コメント:グローバルヒストリー研究の観点から」アメリカ学会第 42 回年次大会シンポジウム:21 世紀のアメリカと“ボーダー”, アメリカ学会, 同志社大学, 2008/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 第 20 回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2011 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:秋田茂

課題番号: 20242013

研究題目: グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考

研究経費: 2008 年度 直接経費 12,200,000 円 間接経費 3,660,000 円

2009 年度 直接経費 9,200,000 円 間接経費 2,760,000 円

研究の目的:

近世の「長期の 18 世紀」から 21 世紀現代にいたる世界システムにおけるアジア世界の位置を再考し、新たな近現代世界史像を提示する。具体的な検討課題として、以下の三点を議論し、アジア発のグローバルヒストリー研究の構築をめざす。(1)近世(長期の 18 世紀)における世界主要地域の経済発展を、「大分岐」(Great Divergence)論争と関連づけて再考する;(2)19-20 世紀の二つのヘゲモニー国家(19 世紀パクス・ブリタニカと 20 世紀パクス・アメリカナ)が果たした役割を、アジア世界との相互依存の観点から再考する;(3)1980 年代以降の東アジア地域のめざましい経済発展＝「東アジアの奇跡」の歴史的意義を、世界システムの変容の観点から考察する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人 日本学術振興会・平成 21 年度グローバルCOEプログラム委員会専門委員 2009 年 4 月～2009 年 11 月

独立行政法人 日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員 基盤研究等第一段審査委員

2008 年 12 月～2009 年 3 月

社会経済史学会・理事

2008 年 4 月～現在に至る

独立行政法人 日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員、科研第一段審査員(史学一般)

2007 年 8 月～2008 年 7 月

日本南アジア学会・理事

2006 年 10 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員(史学)

2006 年 10 月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・研究委員

2006 年 6 月～現在に至る

The Royal Historical Society (UK)・Fellow

2002 年 10 月～現在に至る

西洋史研究会(東北大学)・評議員

1998 年 11 月～2008 年 11 月

4. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

4-1. 論文

藤川隆男他(共著)「「アボリジナルの近代スポーツ史——19～20世紀のオーストラリア」をめぐって(スポーツ史学会第22回大会シンポジウム再録)」船井廣則ほか(編)『スポーツ史研究』23, スポーツ史学会, pp. 55-82, 2010/3

Fujikawa, Takao, “From Henry Parkes to Geoffrey Blainey: A Stronger or Persistent Strain of White Australia” 『パブリック・ヒストリー』6, 大阪大学西洋史学会, pp. 48-62, 2009/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男(書評)「書評 浜忠雄著『ハイチの栄光と苦難——世界初の黒人共和国の行方』」『西洋史学』232, 日本西洋史学会, pp. 73-75, 2009/3

藤川隆男他(監訳) ジョン・トーピー著『パスポートの発明』法政大学出版局, 324p., 2008/12

藤川隆男(書評)「書評 細川道久『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』」『歴史学研究』847, 歴史学研究会, pp. 73-76, 2008/11

藤川隆男「オーストラリア史研究事始」『世界史の研究』(山川出版社), 216, pp. 58-61, 2008/8

4-4. 口頭発表

藤川隆男「オーストラリアにおける白人性の歴史的形成と世界構造より」オーストラリア多文化主義の過去・現在・未来——共生から競生へ, 国立民族学博物館, 国立民族学博物館, 2010/2

藤川隆男「アボリジナルの近代スポーツ史」スポーツ史学会第22回大会シンポジウム, スポーツ史学会, 福島大学, 2008/11(『スポーツ史学会第22回大会発表抄録集』pp. 33-35, 2008/11)

藤川隆男他「オーストラリアにおける白人性の相克」オーストラリア学会第19回全国大会シンポジウム, オーストラリア学会, 追手門大学, 2008/6(『西洋史学』231, pp. 65-81, 2008/12)

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号: 19510249

研究題目: オーストラリアにおける白人性の歴史的形成と世界構造

研究経費: 2008年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2009年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

この研究の主な目的は、危機的な白人性とドミナントな白人性という、二つの白人性の定義に基づいて作成した4つの類型、すなわち共和国型、帝国型、人種主義型、多文化主義型が、現実の歴史的プロセスを説明するのに、どの程度まで有効かを歴史的に検証することであった。しかし、初年度の検討の過程で、白人性と交錯する国民、市民、ジェンダー、階級などの諸要素との関連を、理論的に検討するという課題が明らかになり、ジェンダーの問題と国民国家、スポーツと人種・市民・階級の問題を昨年度は検討した。今年度はアイデンティティと白人性の問題に本格的に取り組み、その理論的枠組みを提示したいと考えている。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会『西洋史学』運営評議員、編集幹事	2008年3月～現在に至る
オーストラリア学会・理事	2006年12月～現在に至る
日本歴史学協会・学会推薦委員	2006年6月～2008年5月
大阪大学西洋史学会・理事	2003年6月～現在に至る

5. 中野 耕太郎 准教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程(西洋史学専攻現代史学)中退。文学修士(京都大学、1993年)。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授を経て、2007年10月より現職。専攻:アメリカ現代史。

5-1. 論文

中野耕太郎 「「アメリカ史」叙述のグローバル化」『パブリック・ヒストリー』6, pp. 16-29, 2009/3

5-2. 著書

中野耕太郎, 紀平英作, 油井大三郎他(共著) 『アメリカ史研究入門』山川出版社, pp. 88-112, 2009/12

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中野耕太郎(書評) 「松本悠子『創られるアメリカ国民と「他者」——「アメリカ化」時代のシティズンシップ』」『史林』92-2, 史学会, pp. 156-162, 2009/3

Nakano, Kotaro (Conference Report), "NASSS 2008 Professional Conference Sunday, July 27 at Nanzan University, Nagoya Campus Social Science Sectional Conference II Report", *Nanzan Review of American Studies*, 30, Center for American Studies, Nanzan University, pp. 117-119, 2008/12

中野耕太郎(書評) 「小林清一『アメリカン・ナショナリズムの系譜——統合の見果てぬ夢』」『アメリカ史評論』26, 関西アメリカ史研究会, pp. 50-55, 2008/11

5-4. 口頭発表

-
- 中野耕太郎 「浄化される民主主義」第12回社会的なものの思想史研究会, 同志社大学, 2010/3
- 中野耕太郎 「近代主義と原理主義——20世紀初頭のアメリカ」2009年度信心会報告会, 九州大学, 2010/2
- 中野耕太郎 「人種暴動とその後——シカゴ人種関係委員会(1919-21年)の秩序形成」第59回日本西洋史学会、小シンポジウム III「20世紀世界にみる人の移動と暴力」, 専修大学, 2009/6
- 中野耕太郎 「アメリカ史における「人種」問題——移民、貧困、肌の色」平成20年度芦屋川カレッジ, 芦屋市公民館, 2009/3
- 中野耕太郎 「20世紀アメリカ国民秩序の形成と人種の暴力——シカゴ人種関係委員会(1919-21)を中心に」大阪歴史科学者協議会例会, 2009/3
- 中野耕太郎 「20世紀アメリカと Social Christianity」2008年度信心会報告会, 京都大学, 2008/12
- 中野耕太郎 「革新主義と投票権——20世紀政治文化における市民ナショナリズムの再編」関西アメリカ史研究会第46回年次大会, 2008/11
- 中野耕太郎 「コメント「南北アメリカにおける移民コミュニティ生成」」日本アメリカ史学会第5回年次大会、シンポジウム「南北アメリカにおける移民コミュニティ」, 東洋学園大学, 2008/9
- 中野耕太郎 「歴史の中のシティズンシップ、コミュニティ、そして「私たち」」西洋史読書会例会: 松本悠子著『創られるアメリカ国民と「他者」』書評会, 西洋史読書会, 京都大学, 2008/6
- 中野耕太郎 「「被治者」の合意と集産主義——アメリカの「偉大な戦争」」共同研究「第一次世界大戦の総合的研究に向けて」, 京都大学人文科学研究所, 京都大学, 2008/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 中野耕太郎

課題番号: 21520746

研究題目: 20世紀におけるアメリカの多元的国民統合と人種境界の形成

研究経費: 2009年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

本研究は、第一次大戦期から1920年代半ばにかけて進行するアメリカ北部での人種隔離の定着過程を綿密に検証することで、社会的な人種境界の形成が同時期の南・東欧系移民の多元的統合といかなる相互関係にあったかを解明し、以後数十年間のアメリカ国民国家のあり方を規定した「秩序」の歴史的な性格を考察する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

アメリカ学会・評議員	2009年4月～現在に至る
日本西洋史学会・編集委員	2003年4月～現在に至る
関西アメリカ史研究会・編集委員	1994年11月～現在に至る

6. 栗原 麻子 准教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学)(京都大学、1998年)。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師を経て、2004年10月より現職。専攻: 古代ギリシア史。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

栗原麻子(共編著)『東地中海周辺域における儀礼と都市共同体』平成 18 年度科学研究費基盤研究(B)報告書, pp. 1-6, 2009/7

高田京比子, 三成美保, 栗原麻子他(共著)『国家・共同体・家における〈母〉機能の意義と変遷——男を育てる〈女〉の比較文化史』平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書, pp. 43-55, 2009/3

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

栗原麻子(書評)「澤田典子『アテネ最期の輝き』」『西洋史学』234, 日本西洋史学会, pp. 74-75, 2009/9

栗原麻子(学界展望)「回顧と展望 古代ギリシア」『史学雑誌』118-5, 史学会, pp. 304-308, 2009/7

栗原麻子(書評)「佐藤昇『紀元前四世紀アテナイの対外交渉と贈収賄』」『法制史研究』58, 日本法制史学会, pp. 402-403, 2009/3

6-4. 口頭発表

栗原麻子「『記憶せざること ou mnesikakein』をめぐって——三十人政権後アテナイにおける和解儀礼——」第 8 回古代史研究会例会:特集:東地中海周辺域における都市共同体と儀礼, 古代史研究会例会, 京都大学, 2009/4

Kurihara, Asako, “*graphai idiai*: A Sense of Community in Athenian Public Prosecution”, The Second Euro-Japanese Colloquium of the Ancient Mediterranean World: “SOCIAL NORMS and PUBLIC SPHERE”, Tokyo University, 2009/3

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2006 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:栗原麻子

課題番号: 183320123

研究題目: 東地中海周辺域における都市共同体と儀礼

研究経費: 2008 年度 直接経費 5,850,000 円 間接経費 1,350,000 円

研究の目的:

古典期ギリシア本土からビザンツ帝政期にいたる東地中海周辺域をフィールドとする共同研究によって、都市共同体の変質を儀礼をとおして明らかにするとともに、歴史研究における儀礼研究の可能性を追求する。

6-6-2. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:栗原麻子

課題番号: 21520745

研究題目: リュクルゴス時代の公私関係 アッティカ法廷弁論の通時的考察をめざして

研究経費: 2009 年度 直接経費 1,600,000 円 間接経費 480,000 円

研究の目的:

いわゆる「法廷弁論家の時代」をめぐる静態的なアテナイ社会史・心性史研究を、動態的なものとして読み直す。市民意識にかかわる研究は、主史料である法廷弁論家の個性を捨象して進められてきた。本研究では、法廷弁論の利用法についての資料論的考察をふまえ、法廷弁論家ごとの差異に着目することによって、ヘレニズムの萌芽期と目されるリュクルゴス時代における市民性の変遷を、同時代の中に位置づけていきたい。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・編集委員

2004年10月～現在に至る

7. 中村 武司 助教

1975年生まれ。2008年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(2008年、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科特任研究員を経て、2010年4月より現職。専攻:近代イギリス史

7-1. 論文

Nakamura, Takeshi, “Admirals in the first city of the empire: navy, culture and politics in pre-radical Westminster”, *Yōngkuk Yōnku [Korean Journal of British Studies]*, 20-2, the Korean Society of British History, pp. 395-422, 2008/12

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村武司(書評)「水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』』『歴史科学』197, 大阪歴史科学協議会, pp. 13-18, 2009/5

中村武司(書評)「長井伸仁著『歴史がつくった偉人たち——近代フランスとパンテオン』』『西洋史学』232, 日本西洋史学会, pp. 75-76, 2009/3

7-4. 口頭発表

中村武司「ナポレオン戦争とイギリス急進主義——コクリン卿の事例を中心に」第107回史学会大会・西洋史部会, 史学会, 東京大学, 2009/10

Nakamura, Takeshi, “Commemorating the hero and nation in modern Britain”, 立命館アジア太平洋大学・特殊講義(言語・文化), ゲスト・レクチャー, 立命館アジア太平洋大学, 2009/10

Nakamura, Takeshi, “Belisarius the counterfeit? Lord Cochrane, war and British radicalism, 1807-1818”, Sixth Anglo-Japanese Conference of Historians: British history 1600-2000 — expansion in perspective, the 6th AJC Committee and the Institute of Historical Research, University of London, University of Tokyo, 2009/9

中村武司「名声への渴望——ナポレオン戦争時代のイギリスとセント・ポール大聖堂」大阪大学歴史教育研究会・第30回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2009/1

Nakamura, Takeshi, “Admirals in the first city of the empire: navy, culture and politics in pre-radical Westminster”, The Third Japanese-Korean Conference of British History, the Korean-Japanese Forum for British History and the Korean Society of British History, 全南大学校/韓国, 2008/11

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2009年度～2011年度、若手研究(B)、代表者:中村武司

課題番号: 21720271

研究題目: 近代イギリスにおける選挙と政治参加の文化史研究: ロンドンを中心に

研究経費: 2009年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究は、イギリスの首都ロンドンを構成する2つの都市共同体＝選挙区、ウェストミンスターとロンドン・シティを対象として、その

選挙と構成員の政治参加にかんする問題を政治文化史的アプローチにより検討することで、18世紀・19世紀イギリス史におけるロンドンの重要性を明らかにすると同時に、政治的リーダーシップ、政治参加の意味、世論形成にかんして、歴史学の立場から、新たな理論的枠組みを構築することをめざしたものである。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

近世イギリス史研究会・幹事

2007年10月～2009年10月

2-10 考古学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1(兼任)

教授：福永 伸哉

准教授：高橋 照彦

助教：寺前 直人(兼任)

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
16	5	2	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	3	3	1	0	4
'09	6	0	0	1	2
小計	9	3	1	1	6

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査、出土資料分析などの方法論や技術面に関する確実な基礎力の習得を重視している。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みを継続することを第一の目標としている。そして、そのようなフィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を行い、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習にくわえ、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向

けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意欲を向上させること、などを目標とした。

2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が2本、博士後期課程在籍生が1本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①昨年度に調査を行った遺跡の発掘調査概報を編集して、それを発刊すること、②昨年度から継続のフィールド活動として、宝塚市長尾山古墳の発掘調査を行うこと、③考古学研究室の企画・編集による論文集の発刊を目指すこと、④科学研究費補助金などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、現地説明会の開催やHPでの情報発信を通じて社会への還元を行うこと、②近年連携事業をしている宝塚市教育委員会の発掘調査において調査指導ならびに協力を行うこと、③阪大埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、④考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、⑤地方自治体の発掘調査や出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

まず、フィールド調査やその際に出土した資料の整理作業をカリキュラムに取り入れた演習などを継続的に実施した。また、学内での授業を補うために、兵庫県、京都府、あるいは鳥取県・島根県や長野県などへの臨地研修も実施した。大学院生については個別の論文指導やプロジェクトにかかわる共同研究なども行うことができた。また、就職支援については、着実に正規職員などとして就職する者がおり、嘱託職員などであった前年度以前の修了生についても、大学との連絡を取りつつ考古学関係の職員などとして就職している。学部生向けにも基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会などの情報提供も行った。

2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。とくに院生の投稿論文については、博士後期課程の在学院生を中心に増加しており、成果を挙げた。また、前年度に引き続き宝塚市長尾山古墳の発掘調査を行うとともに、前年度の長尾山古墳発掘調査概報を編集、発行することもできた。さらに、研究室の企画、編集による論文集も800頁近い充実した内容のものを発刊することができた。このほか、教員は科学研究費補助金の助成を受けて、研究を推進することができた。

3. 社会連携

兵庫県宝塚市の長尾山古墳の調査において、例年通り発掘地点の現地説明会を開催し、HPでも速やかに発掘成果の情報を発信した。また、宝塚市教育委員会が行う発掘調査において調査指導・協力を行うこともでき、概報の作成などでも全面的に援助した。さらに、阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。その一方で、所蔵保管資料については、堺市博物館や大阪府立近つ飛鳥博物館などへの展示に出品するための協力など、各地からの関

覧や写真提供にも積極的に応じており、京丹後市をはじめとして地方自治体に対する学術協力も行っており、京丹後市史の考古資料編の刊行をすることができた。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果を果たしている。また、大学院修了生や学部卒業生の中では、専門機関での採用が限られている厳しい状況のなかで、正規職員を含む就職の実績を挙げている。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を果たすことができた。このように、所期の目標は十分に達成することができた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆において数値目標を達成できた。また、報告書や論文集の刊行、フィールド調査の実施なども、予定通りに行うことができた。当該年度の目標はほぼ達成できたものと評価できる。

3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	0	0
'09	1	2	3
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

田中由理 「古墳時代の馬具生産」 2009/9
主査：高橋照彦 副査：福永伸哉、荒川正晴

【論文博士】

河村好光 「倭国成立展開過程における玉つくりの研究」 2010/1
主査：福永伸哉 副査：武田佐知子、高橋照彦

王 妙癸 「中国先史集落の研究——考古地理学の角度から」 2010/3
主査：福永伸哉 副査：小林 茂、荒川正晴、高橋照彦

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	2(1)
'09	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	6(2)
計	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	5(0)	8(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	4	1	1	0	6
'09	0	1	2	1	1	5
計	0	5	3	2	1	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

奥村茂輝「北河内における初期寺院と馬飼集落」『吾々の考古学』pp.417-436, 2008/5

奥村茂輝「平城京造営時における瓦生産」『考古学雑誌』第92巻第4号, pp.1-41, 2009/3

【2009年度】

〔博士前期〕

金澤雄太「古墳時代前期における円筒埴輪の編年研究史」『前期古墳の変化と画期』考古学研究会関西例会, pp.141-152, 2009/10

〔博士後期〕

印牧定彦・奥村茂輝・中村翼・武韻恩・宮川耕平「海域アジアにおける日本人」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発』平成20-22年度科学研究費補助金成果報告書, 大阪大学歴史教育研究会, pp.41-57, 2009/4

奥村茂輝「奈良時代における京内離宮の造営」『待兼山考古学論集』II, 大阪大学考古学研究室, pp.707-730, 2010/3

中久保辰夫「古墳時代中期における韓式系軟質土器の受容過程」『考古学研究』第56巻第2号, 考古学研究会, pp.62-82, 2009/9

中久保辰夫「5世紀における供膳器の変化と地域性」『待兼山論叢』43巻, 大阪大学文学部, pp.1-26, 2009/12

中久保辰夫「土器からみた渡来系集団の動向と地域首長」『待兼山考古学論叢』II, 大阪大学考古学研究室, pp.393-411, 2010/3

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

前田俊雄「近畿地方の土師質陶棺」大阪歴史学会考古部会11月例会, 阿倍野市民学習センター, 2008/11/28

〔博士後期〕

奥村茂輝「生駒山地西麓の古代寺院と火葬墓」東大阪市歴史講演会，東大阪市埋蔵文化財センター講堂，2008/3/8

奥村茂輝・印牧定彦・中村翼・武韻恩・宮川耕平「海域アジアにおける日本人」大阪大学歴史教育研究会第 29 会例会，大阪大学豊中キャンパス待兼山会館 2 階会議室，2008/12/20

田中由理「馬匹生産地とその性格——馬具からみた検討——」考古学研究会関西例会，大阪市弁天町市民学習センター，2009/1/31

中久保辰夫「土製支脚の使用とその背景」考古学研究会岡山 9 月例会，岡山大学，2008/9/13

中久保辰夫「古墳時代中期における韓式系土器の受容とその背景」大阪歴史学会考古部会，大阪市阿倍野市民学習センター，2009/1/30

【2009 年度】

〔学部〕

山中良平「弥生時代後期における器台形土器の変遷——吉備地域を中心に——」京都弥生文化談話会，長岡京市中央生涯学習センター，2009/12/5

〔博士後期〕

奥村茂輝「讃良郡条里遺跡の調査」近つ飛鳥博物館土曜講座，近つ飛鳥博物館，2009/8/22

奥村茂輝・南理恵・横田季世子・吉田雪恵「イスラーム原理主義とパレスチナ問題」大阪大学歴史教育研究会，大阪大学豊中キャンパス文法経本館 2 階大会議室，2009/11/21

奥村茂輝「第二京阪道路予定地の発掘調査 古代の建物など」枚方歴史を楽しむ会，枚方市市民会館，2010/2/27

中久保辰夫「初期須恵器と土師器——供膳器の変遷と地域性——」考古学研究会関西例会，奈良市男女共同参画センターあすなら，2010/1/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008 年度】

〔博士前期〕

金澤雄太「出土遺物」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，pp.15-16，2009/3

金澤雄太「馬具の概要」『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会，pp.89-90，2009/3

酒井将史「前方部第 1 トレンチ」『長尾山古墳第 1 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，p.14，2008/9

酒井将史「土器」『長尾山古墳第 1 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，p.20，2008/9

酒井将史「前方部 2008-1 トレンチ」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，p.8，2009/3

野島智実「墳丘の現状と測量調査」『長尾山古墳第 1 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，pp.7-8，2008/9

野島智実「墳丘の現状と既往の調査成果」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，p.6，2009/3

前田俊雄「西クビレ部第 2 トレンチ」『長尾山古墳第 1 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，pp.12-14，2008/9

前田俊雄「西クビレ部 2008 調査区」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，p.9，2009/3

森暢郎「前方部 2008-2 トレンチ」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室，pp.9-10，2009/3

森暢郎「黒谷 13 号墳出土の須恵器装飾椀について」『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会，pp.36-39，2009/3

〔博士後期〕

- 奥村茂輝編『讚良郡糸里遺跡Ⅶ』大阪府文化財センター調査報告書 182 集,大阪府文化財センター, 2008/3
- 田中由理「埴輪」『長尾山古墳第 1 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp.18-20, 2008/9
- 中久保辰夫「周辺の古墳」『長尾山古墳発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp.1-3, 2008/9
- 中久保辰夫「周辺の古墳」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, pp.1-3, 2009/3
- 中久保辰夫「後円部 2008-1 トレンチ」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p.10, 2009/3
- 中久保辰夫「墳頂部調査区」『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p.10, 2009/3

【2009 年度】

〔博士前期〕

- 金澤雄太「前方部 2008-2 トレンチ、2009-1・2 トレンチ」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.18-20, 2010/3
- 金澤雄太「前方部 2009-3 トレンチ」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.20-22, 2010/3
- 金澤雄太「埴輪」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.25-33, 2010/3
- 森暢郎「後円部 2008 トレンチ・2009 調査区」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.10-13, 2010/3

〔博士後期〕

- 奥村茂輝『上の山遺跡』Ⅳ(財)大阪府文化財センター調査報告書 第 197 集,大阪府文化財センター, 2010/3
- 中久保辰夫「周辺の古墳」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.1-3, 2010/3
- 中久保辰夫「墳頂部の調査」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.22-23, 2010/3
- 中久保辰夫「土師器」『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.33-34, 2010/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)
2009 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)
2009 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008 年度～2009 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

- 酒井将史 博士課程前期, 奈良県立橿原考古学研究所, 嘱託職員, 2009/4
- 前田俊雄 博士課程前期, 大阪府埋蔵文化財センター, 嘱託職員, 2009/4
- 野島智実 博士課程前期, 鳥取県埋蔵文化財センター, 専門職員, 2009/4
- 大川沙織 学部, 徳島市教育委員会, 専門職員, 2009/4
- 酒井将史 博士課程前期, 名古屋市教育委員会, 専門職員, 2010/4
- 野島智実 博士課程前期, 大田市教育委員会, 専門職員, 2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008 年度～2009 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2008 年度：4 名 2009 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 4 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008 年度：0 名 2009 年度：0 名

9. 刊行物

- 2008 年度 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『長尾山古墳第 1 次発掘調査概報』 2008/9
大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『長尾山古墳第 2 次・第 3 次発掘調査概報』 2009/3
2009 年度 大阪大学文学研究科考古学研究室『長尾山古墳発掘調査報告書』 2010/3
大阪大学考古学研究室『待兼山考古学論叢』Ⅱ 2010/3

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 考古学研究会関西例会事務局, 2008～2009
第 16 回出土銭貨研究会大会事務局, 2009

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

- 「古墳時代政権交替論の考古学的再検討」研究集会, 2009/8/26
「古墳時代政権交替論の考古学的再検討」研究集会, 2009/12/19
「古墳時代政権交替論の考古学的再検討」研究集会, 2010/2/6

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士(大阪大学、2005年)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005年より現職。専攻：日本考古学。

1-1. 論文

- 福永伸哉「青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート」清家章(編)『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会学系, pp. 55-70, 2010/3
福永伸哉「同範鏡論と伝世鏡論の今日的意義について」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室, pp. 327-340, 2010/3
福永伸哉「大阪平野における 3 世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』42, 大阪大学文学研究科, pp. 1-26, 2008/12
福永伸哉「3 世紀摂河泉の首長墓の動態」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会, pp. 67-74, 2008/7
福永伸哉「青銅鏡の政治性萌芽」設楽博己(編)『弥生時代の考古学』7, 同成社, pp. 112-126, 2008/5

1-2. 著書

- Kazuo Asano, Tomoyuki Masuda, Fukunaga, Shinya et al. (共著), *The Island of St. Nicholas*, Osaka University Press, pp. 17-26, pp. 75-82, 2010/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉(編)「長尾山古墳発掘調査報告書」大阪大学文学研究科, pp. 35-37, 2010/3

福永伸哉「佐世保市門前遺跡の弥生時代木組み遺構」『郷土の遺跡展——発掘が明らかにした知られざる歴史——』長崎県教育委員会, pp. 1-22, 2010/3

福永伸哉「6世紀の東アジア情勢と継体政権の政治戦略」『高島古代史フォーラム記録集』高島市教育委員会, pp. 1-12, 2010/3

福永伸哉「考古学の新しい成果と邪馬台国論争」『大美和』117, 大神神社, pp. 8-13, 2009/7

福永伸哉「古代国家形成期における日韓交流史の考古学的再構築——相互交流の視点を重視して——」『2008年度大学研究助成アジア歴史研究報告書』(財)JFE21世紀財団, pp. 59-68, 2009/3

福永伸哉(編)「長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報」大阪大学文学研究科, pp. 17-18, 2009/3

福永伸哉「6世紀の東アジア情勢と継体政権の政治戦略」『高島市古代史フォーラム、継体天皇と田中古墳群』高島市教育委員会, pp. 3-12, 2008/11

福永伸哉「考古学から見た古墳時代河内政権論」『適塾』41, 適塾記念会, pp. 21-25, 2008/11

福永伸哉「大きな役割を担ってほしい大阪府の博物館」『ヒストリア』211, 大阪歴史学会, pp. 68-71, 2008/9

福永伸哉(編)「長尾山古墳第1次発掘調査概報」大阪大学文学研究科, pp. 24-26, 2008/9

1-4. 口頭発表

福永伸哉「交易と技術の国、古代京丹後」京丹后市史資料編刊行記念シンポジウム, 京丹后市教育委員会, 2010/3

Fukunaga, Shinya, “Significance of ‘Triangular-Rimmed Mirrors’ in State Formation in Japan” Harvard East Asian Archaeology Seminar, Harvard University, 2009/11

福永伸哉「5世紀のヤマト政権と北摂」豊中歴史同好会20周年記念シンポジウム:5世紀のヤマト政権を探る, 豊中歴史同好会・豊中市教育委員会, 2009/1

福永伸哉「日本における弥生時代・古墳時代の国家形成論」全北大学校 BK21 事業団海外碩学招請講義, 全北大学校, 2008/11

福永伸哉「文様および鈕孔形態からみた三角縁神獸鏡」保存修復科学センター研究会:三角縁神獸鏡の謎に迫る——材料・技法・製作地——, 東京文化財研究所, 2008/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 第19回濱田青陵賞, 朝日新聞社・岸和田市, 2006/9

福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2002/12

福永伸哉, 杉井健, 都出比呂志 第6回雄山閣考古学特別賞, 雄山閣出版, 1997/9

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号: 20320122

研究題目: 古墳時代政権交替論の考古学的再検討

研究経費: 2008年度 直接経費 4,000,000円 間接経費 1,200,000円

2009年度 直接経費 4,400,000円 間接経費 1,320,000円

研究の目的:

古墳時代研究における重要な論点の一つとなってきた「政権交替論」について、おもに1990年代以降の新出資料の分析と効果的なフィールドワークを結合させることによって全面的な再検討を行い、政治変動期に焦点をあてた最新の古墳時代政治史を提示する。さらに、そうした特徴が認められる古墳時代を国家形成論上からいかにとらえるかという理論研究や、東アジアや欧米の国家形成期との比較研究についても展望を示す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2008年度、研究助成、助成金獲得者：福永伸哉

助成金名：アジア歴史研究助成

研究題目：古代国家形成期における日韓交流史の考古学的再構築

助成団体名：JFE21世紀財団

助成金額：2008年度 直接経費 1,500,000円

研究の目的：

日本列島の古墳時代と朝鮮半島の三国時代の社会が、それぞれ明確な主体性を持ちながらモノ・人・思想の相互交流を行うことによって急速な国家形成を成し遂げた過程を、日韓両国で増加が著しい新出考古資料を駆使しながら実証的に解明・提示する。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

考古学研究会・常任委員	2009年4月～現在に至る
鹿児島県唐仁古墳群発掘調査指導委員会・委員	2009年1月～現在に至る
鳴門市鳴門板野古墳群調査検討委員会・委員	2009年1月～現在に至る
芦屋市会下山遺跡・城山遺跡調査委員会・委員	2008年11月～現在に至る
科学研究費委員会・専門委員	2008年10月～2009年3月
日本考古学協会・理事	2008年5月～現在に至る
日本考古学協会・原稿査読委員	2008年5月～現在に至る
文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員	2008年5月～現在に至る
杵築市市内遺跡にかかる調査指導委員会・委員	2008年5月～現在に至る
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員	2007年12月～現在に至る
高槻市安満遺跡調査指導検討会・委員	2007年10月～現在に至る
京丹後市網野銚子山古墳発掘調査委員会・委員	2007年10月～現在に至る
福山市二子塚古墳保存整備指導委員会・委員	2006年12月～2010年3月
川西市文化財審議委員会・委員	2006年6月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員	2006年6月～現在に至る
鹿児島県塚崎古墳群発掘調査指導委員会・委員	2006年1月～現在に至る
(財)大阪市文化財協会・評議員	2005年6月～現在に至る
京丹後市史編纂委員会・委員	2005年6月～現在に至る
大垣市昼飯大塚古墳調査整備委員会・委員	1994年12月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人	1980年4月～現在に至る

2. 高橋 照彦 准教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(京都大学、1991年)。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年大阪大学大学院助教授、2007年より現職。専攻：日本考古学。

2-1. 論文

高橋照彦「東大寺の成立過程と法華堂」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室, pp. 745-764, 2010/3

高橋照彦, 長尾正義(共著)「三沢市平畑(1)遺跡から出土した緑釉陶器について」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』15, 青森県埋蔵文化財調査センター, pp. 35-47, 2010/3

高橋照彦「平安時代の銭貨——銭貨の粗悪化をめぐる——」次山淳・松村恵司(編)『出土銭貨研究の課題と展望』, pp. 1241-1249, 2009/12

- 高橋照彦「考古学からみた法華堂の創建と東大寺前身寺院」『論集 東大寺法華堂の創建と教学(ザ・グレートブッダ・シンポジウム論集 7)』, ザ・グレートブッダ・シンポジウム実行委員会, 法蔵館, pp. 48-67, 2009/12
- 高橋照彦「当麻寺の堂塔はいつ建立されたのか」『週刊朝日百科 国宝の美』19, 朝日新聞出版, pp. 22-23, 2009/12
- 高橋照彦「法華堂の成り立ちを探る」『週刊朝日百科 国宝の美』1, 朝日新聞出版, pp. 28-29, 2009/5
- 高橋照彦「律令期葬制の成立過程——「大化薄葬令」の再検討を中心に——」『日本史研究』559, pp. 1-23, 2009/3
- 高橋照彦「器からみた宴——古代から中世へ——」小野正敏ほか(編)『宴の中世——場・かわらけ・権力——』, 高志書院, pp. 35-68, 2008/7
- 高橋照彦「終末期古墳と薄葬令」吉村武彦(編)『大化改新と古代国家誕生』, 新人物往来社, pp. 170-175, 2008/6

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

- 高橋照彦「遼寧省出土の釉陶をめぐって——三彩陶枕と黄釉俑を中心に——」遼寧省文物考古学研究所共同研究成果発表会, 遼寧省文物考古学研究所・奈良文化財研究所, 中国・遼寧省文物考古学研究所, 2010/3
- 高橋照彦「大王陵最後の前方後円墳をめぐって」「ふたつの飛鳥の終末期古墳」講演会, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 2010/2
- 高橋照彦「猪名川流域の古墳の被葬者像」池田郷土史学会例会, 池田市中央公民館, 2010/1
- 高橋照彦「欽明陵と敏達陵を考える」『天皇陵古墳を考える——その1——』, トンボの眼, 品川区立中小企業センター, 2010/1
- 高橋照彦「政権交替論の歴史考古学的検討——研究史を中心に——」「古墳時代政権交替論の考古学的再検討」研究会, 大阪大学文学研究科, 2009/12
- 高橋照彦「丹波・長門周防の緑釉陶器」陶磁器調査過程(古代), 奈良文化財研究所, 2009/9
- 高橋照彦「銭貨と土器からみた仁明朝」仁明朝史研究会, 京都大学文学部, 2009/8
- 高橋照彦「平安時代の銭貨生産——銭貨の粗悪化をめぐって——」研究集会「出土銭貨研究の課題と展望」, 奈良文化財研究所, 2009/3
- 高橋照彦「大化薄葬令の考古学的検討」土曜考古学研究会例会, 土曜考古学研究会, さいたま文学館, 2009/3
- 高橋照彦「瓦からみた黎明期の東大寺」日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究, 明治大学古代学研究所, 明治大学, 2009/2
- 高橋照彦「考古学からみた法華堂の創建と東大寺前身寺院」ザ・グレートブッダ・シンポジウム, ザ・グレートブッダ・シンポジウム実行委員会, 奈良教育大学, 2008/12
- 高橋照彦「考古資料からみた律令社会の成立過程とその変容——「大化薄葬令」の再検討を中心に——」日本史研究会大会, 花園大学, 2008/10
- 高橋照彦「銭貨と土器からみた仁明朝」仁明朝史研究会, 同志社女子大学, 2008/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

- 2-6-1. 2008年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋照彦
課題番号: 20520659
研究題目: 日本古代施釉陶器生産における畿内と東海の比較研究
研究経費: 2008年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

日本古代の施釉陶器生産地のうち窯数や製品の流通量において抜きん出た畿内と東海の両地域に焦点を据え、これまで不十分であった双方の比較研究を行う。それにより、生産地の地域的特質と相互関係を解明し、古代から中世への手工業生産の推移に関して歴史的意味付けをより明確化したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

東洋陶磁学会・常任委員	2009年5月～現在に至る
史学研究会・評議員	2005年11月～現在に至る

3. 寺前 直人 助教

1973年生。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学、大阪大学)。大阪大学教務補佐員をへて、2003年現職。2003年より神戸女学院非常勤講師。専攻:日本考古学。

3-1. 論文

寺前直人「石器からみた弥生時代開始期の交流——西日本太平洋沿岸地域を中心として——」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学, pp. 39-53, 2010/3

寺前直人「もう一つの石戈」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学文学研究科考古学研究室, pp. 231-246, 2010/3

寺前直人「銅鐸と武器形青銅器——畿内弥生社会の変質過程——」『考古学ジャーナル』(ニュー・サイエンス社), 590, ニュー・サイエンス社, pp. 26-29, 2009/7

寺前直人「武威と社会形成」松木武彦・藤尾慎一郎・設楽博己『弥生時代の考古学』(同成社), 6, 同成社, pp. 237-252, 2009/4

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

寺前直人「石器からみた弥生時代開始期の交流」科学研究費成果公開シンポジウム:「弥生・古墳期における太平洋沿岸交流——南四国を中心として——」, 高知大学, 2009/11

寺前直人「農耕を営むための道木器・石器・金属器」弥生時代入門講座:第2回弥生時代入門講座, 大阪府立弥生文化博物館・近畿弥生の会, 2009/8

寺前直人「長尾山丘陵の古墳と大和川王権」:宝塚市文化財講演会, 宝塚市教育委員会, 2009/3

庄田慎矢, O.Yanshina, 寺前直人他「沿海州の武器形石器再考」:第10回北アジア調査研究報告会, 北アジア調査研究報告会実行委員会, 東京大学, 2009/2

寺前直人「摂津から見た古墳時代王権の変遷」文部科学省学術フロンティア推進事業日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究:第6回公開研究会, 明治大学古代学研究所・日本古代学教育研究センター, 明治大学, 2009/2

寺前直人「宝塚市長尾山古墳の調査成果」:科研「古墳時代政権交替論の考古学的再検討」研究会, 大阪大学考古学研究室, 2009/2

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007年度～2009年度、若手研究(B)、代表者:寺前直人

課題番号:19720204

研究題目:武器・農工具の着装方法に基づく日本列島における金属製利器普及過程の研究

研究経費:2008年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2009年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究では、これまで個別に研究されてきた弥生時代の斧や武器である石器、金属器そして木器を、着柄方法とそれに関する技術を中心に分析し、様式的に分類することにより、①着装方法を軸とする新しい様式、②異なった素材の生産体制が相互に関連した変遷過程を提示し、石製利器が鉄製利器に置換していく過程を実証的かつ連続的に論じることをめざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

古代学協会・編集参与	2007年4月～現在に至る
近畿弥生の会・幹事	2006年4月～現在に至る
考古学研究会・常任委員	1999年4月～現在に至る

2-11 人文地理学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：小林 茂、堤 研二

助教：波江 彰彦

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
13	0	1	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	1	5	1	1	0
'09	1	2	0	0	0
小計	2	7	1	1	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時までには実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目標とした。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GIS などデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RAなどの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の学会発表をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌への投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこなうだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員 1 名が編著である外邦図に関する研究書が刊行され、その書籍および研究グループが各々学会賞を授与された。他の教員 1 名は、科学研究費での助成研究を続けつつ、財団からの出版助成の内定を受けた。また院生は 7 本の査読付き学会誌ないし研究書への掲載を実現した。教室構成員による研究書への寄稿も複数達成した。教員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も毎年おこなっている。研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスをおこなうとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

外邦図を中心とする研究成果について、新聞社やテレビ番組制作会社の取材に協力してきた。また教室ならびに個人の HP でその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員・協議員など学外の職務にも積極的に応じた。大阪大学サステイナビリティ研究機構について、本教室教員 2 名が兼任教員となって環境史関係の研究・教育をすすめた。教員 1 名は出版助成によって研究書(編著)を刊行した。また、教員 1 名は複数の国際研究ワークショップの実行委員として準備・開催等に從事した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践が可能であった。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成された。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	0	1
'09	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

波江彰彦 「近・現代の大阪市におけるごみ排出・管理の時空間変動」2009/3

主査：小林 茂 副査：橋爪節也、堤 研二

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	6(6)
'09	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	7(7)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	7(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	5	3	0	0	8
'09	0	2	1	0	0	3
計	0	7	4	0	0	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

池中香絵「市民団体による里山周辺環境での活動実態と地域性 ——奈良県大和平易地域を対象として——」『人文地理』60-2, pp.129-143, 2008/4(査読付き学会誌)

長澤良太・今里悟之・渡辺理絵・岡本有希子「旧日本軍撮影の中国における空中写真の特徴と利用可能性」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp.70-79, 2009/2(査読付き研究書所収)

金美英「日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について」『外邦図研究ニューズレター』6, pp.9-46, 2009/3(査読付論文)

〔博士後期〕

渡江彰彦「大都市における家庭系ごみ排出の空間構造とその時間変動 ——1980～2000年度の大阪市を事例に——」『経済地理学年報』54-3, pp.161-187, 2008/9(査読付き学会誌)

渡邊英明「江戸時代の上州・武州における市場争論と絵図作成」『歴史地理学』50-4, pp.48-67, 2008/9(査読付き学会誌)

渡邊英明「江戸時代の関東における定期市の新設・再興とその実現過程——幕府政策の分析を中心に——」『地理学評論』82-1, pp.46-58, 2009/1(査読付き学会誌)

【2009年度】

〔博士後期〕

渡邊英明「近世在方町における絵図作成の特色——武州小川を事例として——」『地図』47-2, pp.1-16, 2009/6(査読付き学会誌)

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

岡本有希子「鳥取県における集落営農の展開」2008年度第1回過疎地域研究会(MARG)研究集会, 鳥取県日野郡日南町役場防災会議, 2008/4/20

三木和美「都市と地方をつなぐITの可能性について——都市の同郷団体と地域SNS——」2008年度第1回過疎地域研究会(MARG)研究集会, 鳥取県日野郡日南町役場防災会議, 2008/4/20

鳴海邦匡・岡本有希子・長澤良太・小林茂「グーグルアースと外邦図」日本国際地図学会定期大会シンポジウム, 国土地理院(つくば市), 2008/8/9

亀山玲子「通所介護施設のサービスエリアの変化——石川県小松市を事例として——」人文地理学会大会, 筑波大学第一エリア(つくば市), 2008/11/9

〔博士後期〕

渡邊英明「近世関東における定期市の出店形態とその差配」歴史地理学会大会, 宮城大学大和キャンパス(宮城県黒川郡大和町), 2008/5/18

渡邊英明「近世在方町における絵図作成とその特徴」日本国際地図学会定期大会, 国土地理院(つくば市), 2008/8/8

渡邊英明「近世関東における市場争論の展開と争論絵図」近世史フォーラム例会, 大阪市北区民センター, 2008/12/20

渡邊英明「江戸時代の武州所沢六斎市と武蔵野台地の村々」日本地理学会春季学術大会, 帝京大学八王子キャンパス(八王子市), 2009/3/29

【2009年度】

〔博士後期〕

渡邊英明「江戸時代中後期の武州西部における定期市の展開と変遷——村明細帳の分析を中心に——」歴史地理学会大会, 神戸大学六甲台キャンパス(神戸市灘区), 2009/9/19

渡邊英明「越後平野における定期市の雁木下利用——近代期加茂4・9市を中心に——」雁木通り学術研究交流会, 高田

小町多目的ホール(新潟県上越市), 2009/9/20

渡邊英明「江戸時代の武州二郷半領における村々と定期市利用——平沼1・6市を中心に——」人文地理学会大会(名古屋大学東山キャンパス(名古屋千種区), 2009/11/8

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士前期〕

金美英「孤楡樹附近目算並記憶測圖」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, p.209, 2009/2

小林茂・金美英・波江彰彦・鳴海邦匡(2009.3)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(上)」『外邦図研究ニューズレター』6, pp.63-73, 2009/3

〔博士後期〕

渡邊英明「近世在方市における高見世の存在形態——一九世紀初頭の武州小川を中心に——」『史敏』5, pp.95-112, 2008/4

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

渡邊英明, 日本国際地図学会論文奨励賞, 日本国際地図学会, 2009年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度~2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度~2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2008年度:3名 2009年度:1名

<内訳> 技術職 2名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2008年度:0名 2009年度:0名

9. 刊行物

【2008年度】

『外邦図研究ニューズレター』6号(2008年度, 国土地理協会研究助成, 科学研究費補助金[基盤研究(A)]中間報告書, 研

究代表者：小林茂, 2009/3)

【2009年度】

『外邦図研究ニューズレター』7号(2009年度, 国土地理協会研究助成, 科学研究費補助金[基盤研究(A)]中間報告書, 研究代表者：小林茂, 2010/3)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2008年度】

日本国際地理学会 2008年定期大会シンポジウム「外邦図の集成と多面的活用」オーガナイザー 2008年8月9日

【2009年度】

The 6th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside. (Ohama Nobumoto Memorial Hall, Ishigaki, Japan), オーガナイザー 2009年7月1日～2日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 小林茂教授

1948年生。京都大学文学研究科博士課程1974年中退。博士(文学)(京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授をつとめている。2004年、人文地理学会賞、2010年、日本国際地図学会特別賞(ただし受賞団体の代表として)、日本地理学会賞(優秀賞)を受賞。専攻:文化地理学/文化生態学。

1-1. 論文

- 小林茂, 渡辺理絵, 山近久美子(共著)「1880年代の日本人将校による朝鮮半島の地図作製——アメリカ議会図書館所蔵図の検討——」『地図』(日本国際地図学会), 47-4, pp. 1-16, 2009/12
- 南榮佑, 渡辺理絵, 山近久美子, 李虎相, 小林茂(共著)「朝鮮末における日本参謀本部の将校の韓半島の偵察と地図製作」『大韓地理学会誌』(大韓地理学会), 49-6, pp. 761-778, 2009/12 (韓文)
- 小林茂, 宗建郎(共著)「環境史からみた日本の森林——森林言説を検証する——」池谷和信(編)『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か——』岩波書店, pp. 154-173, 2009/10
- 小林茂「近代日本の地図作製とアジア太平洋地域」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 2-26, 2009/2
- 小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡(共著)「アジア太平洋地域における旧日本軍および関係機関の空中写真による地図作製」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 228-245, 2009/2
- 小林茂, 渡辺理絵(共著)「近代東アジアの土地調査事業と地図作製——地籍図作製と地形図作製の統合を中心に——」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 246-255, 2009/2
- 宮澤仁, 村山良之, 小林茂(共著)「外邦図デジタルアーカイブの公開に関する課題」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 436-444, 2009/2
- 小林茂, 岡田郷子(共著)「十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄」『待兼山論叢 日本学篇』(大阪大学文学会), 42, pp. 1-26, 2008/12
- 宮澤仁, 照内弘通, 山本健太, 関根良平, 小林茂, 村山良之(共著)「外邦図デジタルアーカイブの構築と公開・運用上の諸問題」『地図』(日本国際地図学会), 46-3, pp. 1-12, 2008/11
- 小林茂, 鳴海邦匡(共著)「総合地理研究会と皇戦会——柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割」の批判的検討——」『歴史地理学』(歴史地理学会), 50-4, pp. 30-47, 2008/9
- Kobayashi, Shigeru, "Race and malaria in the geographies and ethnographies of the Himalayas: A new perspective from recent

epidemiological studies” *International Journal of South Asian Studies*, (Japanese Association for South Asian Studies), 1, Manohar, pp. 135-159, 2008/9

1-2. 著書

小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ——』大阪大学出版会, 512p., 2009/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

小林茂, 長谷川敏文, 波江彰彦(共著)(資料の目録と解説)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(下)」『外邦図研究ニューズレター』7, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 53-61, 2010/3

小林茂「はしがき」海野一隆『地図文化史上の広輿図』財団法人東洋文庫, pp. 1-2, 2010/3

小林茂『外邦測量沿革史 草稿』解説』『外邦測量沿革史 草稿』解説・総目次』不二出版, pp. 3-27, 2009/3

小林茂, 金美英, 波江彰彦, 鳴海邦匡(共編)(資料の目録と解説)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(上)」『外邦図研究ニューズレター』6, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 63-73, 2009/3

小林茂(コメント)「地図のデジタルアーカイブ構築と地図史・地図作製史研究——廖汝銘氏の発表によせて——」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』4, 大阪大学文学研究科片山研究室, pp. 111-115, 2009/3

小林茂(コラム欄)「乍浦鎮(二万五千分一空中写真測量上海近傍南部二十七号、部分)」『アメリカ議会図書館の地理・地図部の書庫』「漢口附近揚子江氾濫区域要図」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, p. 1, p. 31, p. 445, 2009/2

小林茂「日本の旧植民地における土地調査事業と地図作製②」『第39回三菱財団事業報告書(平成20年度)』財団法人三菱財団, pp. 372-373, 2009

小林茂(辞典項目)「麻」「粟」「稻」「猪垣」「猪」「ウム」「季節認識」「サーターヤヤー」「サトウキビ」「製糖」「ターウム」「天然痘」「仲松弥秀」「原山勝負」「フィラリア」「風土病」「麦」渡邊欣雄・岡野宜勝・佐藤壮弘・塩月亮子・宮下克也『沖繩民俗辞典』吉川弘文館, p. 4, p. 16, pp. 28-29, p. 30, p. 31, pp. 67-68, pp. 163-164, pp. 220-221, pp. 226-227, p. 287, p. 314, pp. 352-353, p. 374, pp. 429-430, p. 446, pp. 449-450, pp. 502-503, 2008/7

1-4. 口頭発表

山近久美子, 渡辺理絵, 小林茂他「中国大陸における初期外邦図の作製——1880年代の日本軍将校による手書き原図の調査分析から——」2010年日本地理学会春季学術大会, 日本地理学会, 法政大学, 2010/3(『日本地理学会発表要旨集』77, p. 215, 2010/3)

小林茂, 山本健太「アジア太平洋地域の環境資料としての外邦図——外邦図デジタルアーカイブの構築とその利用——」情報資源共有化研究会: 地図情報共有化のために, 地域研究コンソーシアム・地域情報学研究会, 京都大学稲森記念館, 2009/11

小林茂「秘蔵されてきた軍用地図の再生をめざして——外邦図研究の現場から——」公開講座フェスタ2009, 阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット, 大阪府新別館北館、さいかくホール, 2009/11

小林茂「近世東アジアの疾病空間——天然痘・麻疹の流行をめぐる中心と周辺——」2009年史学研究会大会公開講演, 史学研究会, 京都大学文学部新館, 2009/11(『史林』93-1, pp. 233-235, 2010/1)

Kobayashi, Shigeru, Watanabe, R., Narumi, K., “Japanese colonial cartography in Taiwan, Korea and Kwantung Province” 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto University, 2009/8 (*14th International Conference of Historical Geographers, Abstracts*, p. 53, 2009/8)

Yamachika, K., Watanabe, R., Kobayashi, Shigeru, “The route maps of the Korean Peninsula drawn by Japanese Army officers during the 1880s” 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto University, 2009/8 (*14th International Conference of Historical Geographers, Abstracts*, p. 114, 2009/8)

小林茂, 山本健太「外邦図研究と外邦図デジタルアーカイブの構築」第1回人間文化研究情報資源研究会: 諸機関・諸プロジェクトにおける研究資源情報化と相互連携の可能性, 大学共同利用機関法人、人間文化研究機構、研究資源共有化事業委員会, 国文学研究資料館, 2009/5(『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集1』pp. 79-90, 2010/3)

小林茂, 山近久美子, 渡辺理絵「初期外邦図の作製過程と特色」2008年大会, 人文地理学会, 筑波大学, 2008/11(『2008年人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 42-43, 2008/11)

小林茂「外邦図の集成と多面的活用——アジア太平洋地域の地理情報の応用をめざして——」平成20年度定期大会シンポジウム, 日本国際地図学会, 国土地理院, 2008/8(『平成20年度定期大会発表論文・資料集』pp. 8-9, 2008/8)

鳴海邦匡, 岡本有希子, 長澤良太, 小林茂「グーグルアースと外邦図」平成20年度定期大会シンポジウム, 日本国際地図学会, 国土地理院, 2008/8(『平成20年度定期大会発表論文・資料集』pp. 22-23, 2008/8)

鳴海邦匡, 大澤研一, 小林茂「近世大阪の武士と絵図——「城下町大坂」展の経験を通じて——」第50回大会, 歴史地理学会, 宮城大学大和キャンパス, 2008/5(『歴史地理学』50-4, pp. 75-76, 2008/9)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林茂 日本地理学会賞(優秀賞), 日本地理学会, 2010/3

小林茂 (授賞団体(外邦図研究グループ)の代表として) 日本国際地図学会特別賞, 日本国際地図学会, 2010/2

小林茂 第4回人文地理学会賞, 人文地理学会, 2004/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(A) 一般、代表者:小林茂

課題番号: 19200059

研究題目: アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成

研究経費: 2008年度 直接経費 8,100,000円 間接経費 2,430,000円

2009年度 直接経費 8,100,000円 間接経費 2,430,000円

研究の目的:

経済発展にともなう環境変化の激しいアジア太平洋地域の環境変化を長期的にモニターするために、旧日本軍ならびに植民地政府が作製・撮影した地図、空中写真、さらにそれらによる気象観測資料を集成することを目的とする。これらの資料は、第2次世界大戦終結時に焼却されたものが少なくないが、なお内外の諸機関に利用の便のないまま、凍結状態で保管されているものがみられる。これらを発掘し、目録を作成して利用を促進する。

1-6-2. 2008年度、研究成果公開促進費、代表者:小林茂

課題番号: 205084

研究題目: 近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ——

研究経費: 2008年度 直接経費 1,900,000円 間接経費 0円

研究の目的:

外邦図は1945年8月まで日本がアジア太平洋地域で作製した地図で、内外の大学や図書館が保存している。帝国としての近代日本が形成されていく過程のなかで、対外交渉や戦争、植民地統治のために不可欠な道具として作製されたこれらの地図は、歴史資料として独自の価値をもっている。申請者らは、こうした外邦図について、科学研究費などによりその目録を編集刊行するとともに、外邦図の所在、構成、作製過程、第二次世界大戦終結前後の経過などについて研究をおこなってきた。本書はそうした成果を集成し、到達点を示そうとするものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2005年度～2009年度、研究助成、助成金獲得者:小林茂

助成金名: 社会教育機関等への助成

研究題目: 外邦図の研究

助成団体名: 財団法人国土地理協会

助成金額: 2008年度 直接経費 2,000,000円

2009年度 直接経費 2,000,000円

研究の目的:

旧日本軍および植民地政府がアジア太平洋地域で作製した地図を「外邦図」と呼んでいる。日本国内の各機関に保管されている外邦図の目録を作成するとともに、その作製過程にアプローチし、歴史研究や環境変化の研究に利用できるようにすることを目的とする。本研究助成は2005年度から継続しているもので、助成期間は5年間。

1-7-2. 2008年度、受託研究、助成金獲得者:小林茂

助成金名: 日本学術振興会学術システム研究センター実施委託研究

研究題目: 人文地理学分野に関する学術動向の調査研究

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2008年度 直接経費 2,500,000円

研究の目的:

前年度までは、人文地理学分野と深い関係にある環境史分野を中心に学術動向を検討したが、本年度は人文地理学分野を中心に学術動向をモニターする。人文地理学分野では、近年地理情報システム(GIS)の導入がトピックになっており、研究レベルから教育レベルに焦点が移りつつある。またGISは他の人文社会科学や自然科学にも利用がひろがっており、これにも関心をひろげたい。以上にくわえて、海外の動向を敏感に意識して展開している社会地理学、新文化地理学にも配慮するとともに、大学院生や若手研究者の研究環境も視野に入れたい。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・評議員	2008年11月～現在に至る
財団法人 地図情報センター・評議員	2008年6月～現在に至る
歴史地理学会・評議員	2008年5月～現在に至る
日本学術振興会、学術システム研究センター・専門研究員	2006年4月～2009年3月
福岡市史考古専門部会・専門委員	2006年1月～現在に至る
柳川市史・専門研究員	2005年5月～現在に至る
人文地理学会・協議員	2004年11月～2008年10月
史学研究会・評議員	2004年10月～現在に至る
日本地理学会・代議員	2004年4月～現在に至る
日本国際地図学会・評議員	2003年2月～現在に至る

2. 堤研二教授

1960年生。1986年3月、九州大学大学院文学研究科修士課程修了(史学・地理学専攻)。博士(文学)(九州大学)。国立佐世保工業高等専門学校助手、同講師、島根大学法文学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て2009年11月より現職。1997年、地域地理学会賞、2005年、昭和シェル石油環境研究助成財団研究課題賞を受賞。専攻:人文地理学。

2-1. 論文

- Tsutsumi, Kenji, “Social Ties and “Social Capital” in Areas under Shrinking and Marginalization process in Japan” Kobayashi, K., Tamura, T., Westlund, L. and Jeong Hayeong(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan)), 4, MARG(Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp. 19-29, 2009/3
- Tsutsumi, Kenji, “Drastic Depopulation, Town Renovation and Social Capital on a Coal Mining Island” Kobayashi, K., Westin, L. and Westlund, L.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (CERUM(Center for Regional Science, Umeo University, Umeo, Sweden)), 3, CERUM(Center for Regional Science, Umeo University, Umeo, Sweden), pp. 47-59, 2008/9
- Tsutsumi, Kenji, “Senri New Town” Philipp Oswalt(編) *Shrinking Cities : Complete Works 3 Japan*, (Shrinking Cities Project), 3,

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, “Social Capital in Rural Studies in Japan: An Examination of Actual Forms of Social Capital” The 6th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Ohama Nobumoto Memorial Hall, Ishigaki, Okinawa, Japan, 2009/7

Tsutsumi, Kenji, “Over Neoliberal Social Capitalism: Social Capital and Revitalization of Depopulated Mountainous Areas in Japan” The 5th East Asia Regional Conference in Alternative Geographies (EARCAG), Exec. Committee of the 5th East Asia Regional Conference in Alternative Geographies (EARCAG), Seoul National University & Seoul University, Seoul, S-Korea, 2008/12

Tsutsumi, Kenji, “Some Materials for Discussion: at panel Discussion” The 5th East Asia Regional Conference in Alternative Geographies (EARCAG), Exec. Committee of the 5th East Asia Regional Conference in Alternative Geographies (EARCAG), Seoul National University & Seoul University, Seoul, S-Korea, 2008/12

Tsutsumi, Kenji, “Sustainable Policy for Settlement Life and Socio-economic Trends of Depopulation in Rural Japan” The 5th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Exec. Committee of the Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Sodra Vatterbygdens Folkogskola, Jonkoping, Sweden, 2008/8

堤研二 「ふるさとの力を引き出す」徳島県人会近畿連合会・NPO法人ふるさと力協賛勉強会、徳島県人会近畿連合会・NPO法人ふるさと力、徳島県三次市三野活性化センター「紅葉の郷」、徳島県三好市, 2008/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堤研二

課題番号: 20520684

研究題目: 地域統計データにみる人口減少期の社会経済変動のトレンドと市町村合併のインパクト

研究経費: 2008年度 直接経費 1,900,000円 間接経費 570,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究の目的は、人口減少地域を対象として、当該地域における社会経済的な中・長期変動のトレンドを把握した上で、当該地域の抱える問題点や課題を明らかにすることである。具体的には、複数時点での地域統計データを収集してデータベースを構築し、多変量解析による地域類型化とその変化の分析を行い、その背景の分析や、当該地域の問題に関係する対策・政策の再検討をすることを主眼点とする。

本研究の目的は4つの柱から構成される。すなわち、(1)過疎地域をはじめとする人口減少地域の30年以上にわたる地域統計データを分析して、データベースを構築し、当該地域の特性(類型)とその変動パターンを析出し、(2)その変動の背景をグローバル、

ナショナル、リージョナル、ローカルといった異なるスケール・レベルで検討し、(3)これまでの人口減少地域・過疎地域に関する対策・政策の効果・アウトカムや現在進行中の市町村合併の影響を分析し、(4)市町村合併と小地域統計の問題について考察を加えること、である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本地理学会・E-Journal Geo 編集委員

2008年4月～現在に至る

3. 波江 彰彦 助教

1979年生。2009年3月、大阪大学大学院文学研究科博士課程(文化形態論専攻)修了。博士(文学)(大阪大学)。日本学術振興会特別研究員(DC1)(2005年4月～2008年3月)、大阪大学大学院文学研究科特任研究員(2008年4月～2010年3月)を経て、2010年4月より現職。専攻:人文地理学。

3-1. 論文

波江彰彦「昭和30～40年代にみられた大阪市におけるごみ処理の変動——埋立処分地に着目して——」『待兼山論叢 日本学篇』(大阪大学文学会), 43, pp. 1-18, 2009/12

波江彰彦「近現代のごみ処理——大阪市の事例を中心に——」『地理』54-8, 古今書院, pp. 34-42, 2009/8

波江彰彦「大都市における家庭系ごみ排出の空間構造とその時間変動——1980～2000年度の大阪市を事例に——」『経済地理学年報』(経済地理学会), 54-3, pp. 161-187, 2008/9

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

小林茂, 長谷川敏文, 波江彰彦(共著)(資料の目録と解説)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(下)」『外邦図研究ニューズレター』7, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 52-61, 2010/3

小林茂, 金美英, 波江彰彦, 鳴海邦匡(共著)(資料の目録と解説)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(上)」『外邦図研究ニューズレター』6, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 63-73, 2009/3

波江彰彦(コラム欄)「硫黄島の空中写真(部分)」兵要地理上必要ナル米軍主要戦車諸元表」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, p. 305, p. 387, 2009/2

3-4. 口頭発表

山近久美子, 渡辺理絵, 波江彰彦他「中国大陸における初期外邦図作製——1880年代の日本軍将校による手書き原図の調査分析から——」日本地理学会春季学術大会, 日本地理学会, 法政大学, 2010/3(『日本地理学会発表要旨集』77, p. 215, 2010/3)

波江彰彦「資源ごみの集団回収にみられる全国的特徴」人文地理学会大会, 人文地理学会, 名古屋大学, 2009/11(『2009年人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 62-63, 2009/11)

Namie, Akihiko, “The Relationship between Public and Private Recycling of Solid Waste in Fukui Prefecture” The 6th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, MARG(Marginal Areas Research Group), Ohama Nobumoto Memorial Hall (Ishigaki, Japan), 2009/7

波江彰彦「1960年以降の7大都市におけるごみ排出・管理の比較」日本地理学会春季学術大会, 日本地理学会, 帝京大学,

2009/3『日本地理学会発表要旨集』75, p. 75, 2009/3)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2009 年度、奨励研究、代表者:波江彰彦

課題番号: 21911010

研究題目: 日本-東・東南アジア間の再生資源流動の解明に向けたデータベースの構築

研究経費: 2009 年度 直接経費 590,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

1990 年代後半以降の日本におけるリサイクルの進展とそれに伴う再生資源のストック量増大や、中国等における資源需要の急増などを背景として、日本と東・東南アジアとのあいだのグローバルな再生資源流動が活発化しており、その解明のために必要となるデータベースを構築する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・企画委員

2009 年 11 月～現在に至る

2-12 日本文学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 1 講師 1 助教 1

教授：出原 隆俊、飯倉 洋一

准教授：加藤 洋介

講師：合山林太郎

助教：勢田 道生

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
62	12	25	0	0	1	1	0	5

※うち留学生 22 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	*学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	17	4	1	1	1
'09	13	10	1	2	2
小計	30	14	2	3	3

*国語学と合わせて

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員

(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本の会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年 1 回解題を付して展示公開し、また Web 上で画像データベースとして公開することを目標とした。そのほかにも、懐徳堂記念会による「懐徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼のあった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7月、11月に院生発表会を、10月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

大学院では、大学教員 1 名、高専教員 1 名、本学助教に 1 名、それぞれ就職が決定した。また学振特別研究員 DC2 に 1 名採用が決定、博士前期課程や学部卒業生も含めて中高教員に 8 名、新聞社に 1 名が就職している。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 38 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 52 本を数えるという状況にある。

2. 研究

科研費による研究プロジェクトとしては「上田秋成の和文作品本文の生成と変容についての研究」「日本文学の国際的共同研究基盤の構築に関する調査研究」「定家本源氏物語・伊勢物語の本文成立史に関する横断的研究」「中世前期貴族社会における漢詩文の基礎的研究」等を行った。

2009 年 1 月および 2010 年 1 月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』90(08 年 6 月)、91(08 年 12 月)、92・93(09 年 12 月)輯を刊行した。また詳細は 10 の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、それぞれの研究誌である『詞林』43 号(08 年 4 月)・44 号(08 年 10 月)・45 号(09 年 4 月)・46 号(09 年 10 月)、『阪大近代文学研究』第 7 号・8 号(09 年 3 月・10 年 3 月)を刊行した。

3. 社会連携

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。「懷徳堂古典講座」にそれぞれ教員が(08年4月～12月加藤、8月飯倉、09年4月～12月加藤、8月荒木)講師として出講した。他にも大阪府立茨木高校の学問発見講座(09年10月加藤)、長崎純心女子大学国語科教育研修会(09年7月飯倉)、「立命館大阪プロムナードセミナー京都文化講座」(09年11月飯倉)、放送大学大阪学習センター(09年12月飯倉)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても充分に達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	1	2
'09	2	0	2
計	3	1	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 岡崎昌宏 「辻邦生初期歴史小説の研究」2009/3
主査：出原隆俊 副査：飯倉洋一、荒木浩
- 浜田泰彦 「西鶴浮世草子における教訓性の考察」2010/3
主査：飯倉洋一 副査：荒木浩、合山林太郎
- 水野亜紀子 「樋口一葉後期作品の研究——既婚女性を主人公とした作品を中心に——」2010/3
主査：出原隆俊 副査：清水康次、加藤洋介

【論文博士】

- 細江光 「谷崎潤一郎 深層のレトリック」2008/10
主査：出原隆俊 副査：荒木浩、加藤洋介

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	1(1)	3(0)	11(0)	0(0)	4(0)	19(1)
'09	2(2)	1(0)	9(0)	0(0)	8(0)	20(2)
計	3(3)	4(0)	20(0)	0(0)	12(0)	39(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	3	18	0	0	21
'09	2	5	23	0	0	30
計	2	8	41	0	0	51

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

野上潤一『『あいのう抄』年中行事記事の基礎的検討——中世後期『年中行事歌合』／『公事根源』享受史のために——』『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 43, pp.62-88, 2008/4

鳩野恵介・古田雄佑・岩城佐和・川那邊惟奈「近代における会話文特立符号種の消長」『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, pp.69-77, 2008/12

〔博士後期〕

木下美佳「刈谷市中央図書館蔵『伊勢物語愚見抄』の位置付け」『中古文学』(中古文学会),82,pp.72-82,2008/12

木下美佳「紀有常の史実と『伊勢物語』」山本登朗編『伊勢物語 虚構の成立』(伊勢物語 成立と享受①),pp.150-168, 2008/12

勢田道生『『南方紀伝』・『桜雲記』の成立時期の再検討』『語文』(大阪大学国語国文学会),91, pp.24-34, 2008/12

張麗静「谷崎潤一郎『不幸な母の話』論——「私」が捉える母子の関係——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 7, pp.27-40, 2009/3

鄭新喜『『門』のなかの「自然」』『上越教育大学国語研究』(上越教育大学国語教育学会), 23, pp.30-41, 2009/2

浜田泰彦「会話文におけるト書きとその文体に関する調査報告」『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, pp.50-59, 2008/12

浜田泰彦『『日本永代蔵』冒頭文考——古典駆使と銀徳への〈ひそかな思い〉をめぐって——』『待兼山論叢』文学篇(大阪大学文学会), 42, pp.23-41, 2008/12

浜田泰彦編「忍頂寺文庫所蔵薄物唄本「尽くし物」紹介——兵庫口説を中心に——」『2008年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館編), 3, pp.7-30, 2009/3

浜田泰彦「忍頂寺務による都踊口説および兵庫口説作者の伝記に関する考察」『2008年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究』(「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館編), 3, pp.31-36, 2009/3

- 古田雄祐「内田百閒「花火」の土手——断絶した〈過去〉へ遡及する道」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 7, pp.13-26, 2009/3
- 古田雄祐「内田百閒「東京日記」の東京——「その十七」を中心に——」『「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』(独立行政法人日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業), pp.208-213, 2009/3
- 古田雄祐「中島敦「狐憑」論——「食はれ」た「詩人」の死」『国語と教育』(大阪教育大学国語教育学会), 34, pp.1-9, 2009/3
- 鳩野恵介・古田雄祐・岩城佐和・川那邊惟奈「近代における会話文特立符号種の消長」『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, pp.69-77, 2008/12
- 水野亜紀子「樋口一葉『この子』——ありふれたことを話題とする「私」——」『語文』(大阪大学国語国文学会), 90, pp.31-39, 2008/6
- 水野亜紀子「樋口一葉『軒もる月』論——凝視の先にあるもの——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 7, pp.1-12, 2009/3
- 村山識「御製のそばに」——鎌倉期勅撰集における「身分序列的配列」——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 43, pp.28-61, 2008/4
- 村山識「願得寺蔵『疑開和歌抄』解題と翻刻」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 44, pp.1-40, 2008/10
- 【2009年度】
- 〔博士前期〕
- 岩城佐和「太宰治『女の決闘』考——語り手「私(DAZAI)」をめぐって——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 8, pp.58-77, 2010/3
- 前田泰良「『山家集』「心におもひけることを」歌群の再検討——仏典から捉える二つの心」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 46, pp.1-21, 2009/10
- 〔博士後期〕
- 石原のり子「『大鏡』における皇統——冷泉系と円融系を中心に——」大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』 pp.95-108, 2009/7
- 木下美佳「『伊勢物語』における清和天皇」大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』 pp.59-74, 2009/7
- 木下美佳「『伊勢物語愚見抄』における人物比定の方法」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 46, pp.70-86, 2009/10
- 坂井二三絵「『彼岸過迄』をめぐって——同時代作品との比較を中心に——」『待兼山論叢 文学編』(大阪大学文学会), 43, pp.1-15, 2009/12
- 神明あさ子「『御伽厚化粧』と『世説故事苑』」『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 6, pp.13-20, 2009/6
- 勢田道生「『新葉和歌集』における後醍醐天皇の待遇と南朝の来歴」大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』 pp.281-303, 2009/7
- 勢田道生「『南方紀伝』・『桜雲記』の成立環境——『桜雲記』浅羽成儀作者説をめぐって——」『国語国文』(京都大学文学部国語学国文学研究室), 78-11, pp.41-58, 2009/11
- 高嶋藍「『とはずがたり』における両統迭立——禁色の唐衣を視座として——」大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』 pp.241-259, 2009/7
- 丹下暖子「『讃岐典侍日記』上巻の一側面——天皇の代替わりという過渡期をめぐって——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 45, pp.29-39, 2009/4
- 丹下暖子「天皇の代替わりと『讃岐典侍日記』——鳥羽天皇から見る下巻の位置づけ——」大阪大学古代中世文学研究会編『皇統迭立と文学形成』 pp.149-166, 2009/7
- 野上潤一「『年中行事歌合』広本の基礎的検討——『太平記鈔』巻二十四との同文関係をめぐって——」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会), 45, pp.40-75, 2009/4
- 浜田泰彦編「忍頂寺文庫蔵一荷堂半水唄本資料紹介」「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館編『2009年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究』4, pp.11-38, 2010/3
- 浜田泰彦「『梅のたもと』翻刻」「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館編『2009年度大

- 阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究』4, pp.39-43, 2010/3
- 浜田泰彦「忍頂寺務による「よしこの節」考証紹介」「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館編『2009年度大阪大学大学院文学研究科共同研究(国文学研究資料館研究連携事業)研究成果報告書 忍頂寺文庫・小野文庫の研究』4, p.44, 2010/3
- 古田雄佑「内田百閒「映像」論——物言わぬ「顔」が語るもの——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 8, pp.29-44, 2010/3
- 水野亜紀子「樋口一葉『裏紫』論——逡巡する姿の形象化をめぐる——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 8, pp.1-12, 2010/3
- 美濃部重克・横井忍・水野亜紀子「泉鏡花の跳躍——『妙の宮』の鏡花作品上での意味」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 86-10, pp.59-72, 2009/10
- モハマッド・モインウッディン「志賀直哉『和解』における〈自己〉——父子関係を中心に——」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 8, pp.13-28, 2010/3

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

- 青山絵美「『源氏物語』濡標巻における法華八講の役割」大阪大学古代中世文学研究会第199回例会, 2008/5/31
- 太田嵩子「『法華経鷲林捨葉抄』のなかの『長谷雄草紙』類話についての考察」大阪大学古代中世文学研究会第198回例会, 2008/4/26
- 岡室敦子「夢枕に立つ藤壺」大阪大学古代中世文学研究会第204回例会, 2008/11/29
- 野上潤一「『年中行事歌合』広本の位置づけ」大阪大学古代中世文学研究会第199回例会, 2008/5/31
- 藤原香織「『狭衣物語』飛鳥井姫君の存在」大阪大学古代中世文学研究会第202回例会, 2008/8/30
- 前田泰良「「心におもひけることを」歌群の再検討——配列意識に留意して——」大阪大学古代中世文学研究会第207回例会, 2009/2/21
- 宮本正章「与謝野晶子『新訳源氏物語』の性格と構成(内容)・表現について」大阪大学古代中世文学研究会第206回例会, 2009/1/31
- 渡部真由「『源氏物語』における呼称表現」大阪大学古代中世文学研究会第202回例会, 2008/8/30

〔博士後期〕

- 木下美佳「刈谷市立図書館蔵『伊勢物語愚見抄』について——初稿本から再稿本へ——」中古文学会2008年度春季大会, 2008/5/11
- 木下美佳「紀有常の史実と『伊勢物語』」大阪大学古代中世文学研究会第201回例会, 2008/7/19
- 勢田道生「神戸良政の歴史研究と『南方紀伝』」大阪大学古代中世文学研究会第196回例会, 2008/11/29
- 勢田道生「『桜雲記』浅羽成儀作者説をめぐる——古文書の利用の観点から——」平成21年度大阪大学国語国文学会, 2009/1/10
- 高嶋藍「繰り返される『とはずがたり』の歌語」大阪大学古代中世文学研究会第206回例会, 2009/1/31
- 丹下暖子「『建礼門院右京大夫集』七夕歌群をめぐる」大阪大学古代中世文学研究会第205回例会, 2008/12/13
- 丹下暖子「天皇の代替わりと『讃岐典侍日記』——鳥羽天皇に注目して——」平成21年度大阪大学国語国文学会, 2009/1/10
- 白雨田「薫における「仏」の位相——その主題論との関わり——」大阪大学古代中世文学研究会第203回例会, 2008/11/8
- 古田雄佑「逸れる道、断絶する〈過去〉——内田百閒「花火」の位相」第44回大阪教育大学国語教育学会, 2008/8/9
- 古田雄佑「内田百閒「映像」——物言わぬ顔が語るもの」第13回大阪教育大学日本・アジア言語文化学会, 2008/11/23
- 水野亜紀子「『十三夜』の構成——《つとめ》を視座として——」2008年度日本近代文学会関西支部秋季大会, 2008/11/8
- 村山識「願得寺蔵『疑開和歌抄』をめぐる——散佚歌学書『疑開抄』の全体像から『和歌童蒙抄』との関係性に及ぶ——」和歌文学会第54回大会, 2008/10/19

村山識「大覚寺統における勅撰集下命をめぐって——鎌倉中・後期勅撰和歌集制度史試論——」第 200 回大阪大学古代中世文学研究会第 200 回例会, 2008/6/28

【2009 年度】

〔博士前期〕

青山絵美「一条兼良の『物語』注釈」第 212 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/7/26

鹿末陽子「西行仮託の意義に関する一考察——隠徳の書としての『撰集抄』——」第 209 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/4/19

瓦井裕子「六条御息所考——死霊出現をめぐって——」第 211 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/6/13

瓦井裕子「六条御息所考——死霊出現をめぐって——」第 53 回立命館大学日本文学会大会, 2009/6/14

高野はるか『『枕草子』における色彩表現と平安中期の紅の意義について』第 210 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/5/16

前田泰良「仏典から探る西行の恋歌」第 213 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/8/23

宮川真弥『『枕草子』における「歌ことば・歌枕」の定量化——『枕草子』類聚的章段解釈の手掛かりとして——』第 210 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/5/16

宮川真弥『『枕草子春曙抄』における『清少納言枕草紙抄』の影響について——『徒然草文段抄』所引『枕草子』を手掛りとして——』国語・国文研究と教育の会 平成 21 年度大会, 2010/3/6

宮川真弥『『枕草子春曙抄』『清少納言枕草紙抄』の「原拠本」について——『徒然草文段抄』所引『枕草子』を手掛りに——』大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会——交叉する時空——, 2010/3/11

宮本正章『『源氏物語』と与謝野晶子の短歌について——「薪こり菜摘み水汲み・・・」の短歌を例として』第 219 回大阪大学古代中世文学研究会, 2010/3/13

渡部真由『『伊勢物語肖聞抄』における「作物語」について』第 209 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/4/19

〔博士後期〕

ホルカ・イリナ「The Rhetoric of Love, Lust and War in Shimazaki Tōson's "Shinsei"」The Thirteenth Asian Studies Conference Japan(ACSJ)Session 46 The War of Another: Natsume Sōseki, Shiga Naoya, Shimazaki Tōson, 2009/6/21

木下美佳『『伊勢物語愚見抄』における人物比定の態度』第 213 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/8/23

木下美佳『『伊勢物語愚見抄』が捉える〈昔物語の本意〉』第 217 回大阪大学古代中世文学研究会, 2010/1/30

木下美佳「武井蔵『伊勢物語愚見抄』について」日本学術振興会・科学研究費補助金「古典籍と書寫と書寫環境の創相関性に關する総合的研究」第 2 回研究会〈古典籍をめぐる諸問題〉, 2010/3/12

高嶋藍『『とはずがたり』の後深草院——巻四「人目にも、「こはいかに」などおぼゆる御もてなしもなく」の解釈をめぐって——』第 216 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/12/12

丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』七夕歌群の再検討』第 212 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/7/26

丹下暖子『『建礼門院右京大夫集』七夕歌群の再検討』和歌文学会第 55 回大会, 2009/10/25

丹下暖子『『讃岐典侍日記』下巻考——香隆寺参詣記事を手がかりとして——』第 217 回大阪大学古代中世文学研究会, 2010/1/30

モハammad・モインウッディン「Scattered Soldiers, Smoke and Gunpowder in Shiga Naoya's Novellas」The Thirteenth Asian Studies Conference Japan(ACSJ)Session 46 The War of Another: Natsume Sōseki, Shiga Naoya, Shimazaki Tōson, 2009/6/21

モハammad・モインウッディン「志賀直哉『十一月三日午後の事』をめぐって——他者へのまなざし——」大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会——交叉する時空——, 2010/3/11

勢田道生『『南朝公卿補任』の史料性』第 219 回大阪大学古代中世文学研究会, 2010/3/13

西尾元伸「泉鏡花『壺象』論——〈救出劇〉の裏側——」平成 22 年度大阪大学国語国文学会, 2010/1/9

野上潤一『『太平記鈔』『徒然草寿命院抄』と『謡抄』——謡曲注釈の利用と中世最末期の学問の一隅をめぐって——』第 215 回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/11/7

- 野上潤一「内部徴証による『太平記鈔』日性編者説の再検討——『太平記鈔』生成の一端と法華宗僧の学問の一隅をめぐって——」第218回大阪大学古代中世文学研究会, 2010/2/20
- 白雨田「『源氏物語』における「岩根の松」について——「柏木」巻光源氏の歌を中心として——」第215回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/11/7
- 浜田泰彦「西鶴輪講における忍頂寺務——『懷硯』輪講を中心に——」「近世風俗文化学の形成」・「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」合同研究会, 2010/3/13
- 水野亜紀子「『われから』論——美尾・お町像をめぐって」樋口一葉研究会, 2009/11/23
- 村山識「『和歌童蒙抄』異本をめぐって——『疑開抄』との関係を中心に——」第211回大阪大学古代中世文学研究会, 2009/6/13
- 村山識「『和歌童蒙抄』成立論再考——「疑開抄」を通して——」和歌文学会平成21年度12月関東例会, 2009/12/19

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士後期〕

- 木下美佳「紹介 堤和博著『歌語り・歌物語隆盛の頃——伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学——』『語文』(大阪大学国語国文学会), 90, pp.57-58, 2008/6
- 坂井二三絵「紹介 伊井春樹著『ゴードン・スミスの見た明治の日本 日露戦争と大和魂』『語文』(大阪大学国語国文学会), 90, pp.55-56, 2008/6
- 神明あさ子「紹介 美浜町誌編纂委員会編『わかさ美浜町誌〈美浜の文化〉』『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, p.100, 2008/12
- 勢田道生「紹介 後藤昭雄監修・大阪大学三宝感応要略録研究会編『金剛寺本『三宝感応要略録』の研究』『語文』(大阪大学国語国文学会), 90, pp.59-60, 2008/6
- 西尾元伸「紹介 徳永光展著『夏目漱石「心」論』『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, p.99, 2008/12
- 村山識「紹介 谷知子著『天皇たちの和歌』『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, p.101, 2008/12

【2009年度】

〔博士後期〕

- 浜田泰彦「紹介 鈴木亨著『近世前期文学の主題と方法』『語文』(大阪大学国語国文学会), 92・93, pp.126-127, 2010/2
- 張麗静訳「賀学君「中国民間歌謡史概説——秦以前から清代まで——」(原著:賀学君「中国民間歌謡史概説(先秦至清代)」科学研究費(基盤研究 B)「東アジア(中国・日本・韓国)における歌謡の比較研究」国際シンポジウム「東アジアにおける農耕文化とウタ」), pp.25-34, 2009/8

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)
2009年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)
2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

Wael・Mohamed・Orabi・Abdelmaksoud、博士後期課程、カイロ大学、講師、2008/4
 勢田道生、博士後期課程、大阪大学、助教、2010/4
 中井賢一、研究生、宇部高専、准教授、2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 10 名

2008年度：5名 2009年度：5名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 8名
 その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2008年度：1名 2009年度：1名

9. 刊行物

2008年度 『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第7号
 『語文』(大阪大学国語国文学会)第90輯・第91輯
 『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第43号・第44号
 『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第5号

2009年度 『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第8号
 『語文』(大阪大学国語国文学会)第92・93輯
 『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第45号・第46号
 『上方文藝研究』(上方文藝研究会)第6号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

[国内学会の開催]

2009年度

大阪大学国語国文学会総会	2009年1月10日
和歌文学会関西例会第99回例会	2009年4月18日

2010年度

大阪大学国語国文学会総会	2010年1月9日
--------------	-----------

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2008年度：第198回4月26日	第199回5月31日	第200回記念例会6月28日
第201回7月19日	第202回8月30日	第203回11月8日
第204回11月29日	第205回12月13日	第206回1月31日
第207回2月21日	第208回3月28日	
2009年度：第209回4月19日	第210回5月16日	第211回6月13日
第212回7月26日	第213回8月23日	第214回10月31日
第215回11月7日	第216回12月12日	第217回1月30日
第218回2月20日	第219回3月13日	

上方読本を読む会 2008年度 2008年5月17日、7月5日、9月13日、11月8日、2009年1月14日、3月21日
2009年度 2009年4月25日、6月13日、9月12日、11月28日、2010年2月20日

「近世風俗文化学の形成」・「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」合同研究会 2010年3月13日
大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流会——交叉する時空—— 2010年3月11日

[事務局]
2009年度～2010年度 中古文学会関西支部事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 出原 隆俊 教授

1951年生。京都大学大学院博士後期課程中退。文学修士。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

1-1. 論文

出原隆俊 「欧州へ——「舞姫」から「新生」まで」懐徳堂記念会『旅立ちのかたち』懐徳堂記念会, pp. 175-194, 2009/11

出原隆俊 「芸術は社会を動かせるのか？」吉岡洋・岡田暁生(共著)『文学・芸術は何のためにあるのか？』pp. 45-56, 2009/3

出原隆俊 「郊外と貧民窟」藤田治彦(共著)『「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』pp. 76-81, 2009/3

出原隆俊 「「金閣寺」の構成意識」松本徹・佐藤秀明・井上隆史(共著)『三島由紀夫研究』7, pp. 54-66, 2009/2

1-2. 著書

出原隆俊 『異説・日本近代文学』大阪大学出版会, 313p., 2010/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員

1988年4月～現在に至る

2. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学。

2-1. 論文

飯倉洋一 「秋成における「いつはり」の問題——『春雨物語』を中心に』『日本研究』13, 高麗大学日本研究センター, pp. 153-165, 2010/2

飯倉洋一 「尼子経久物語としての「菊花の約」』『日本のことばと文化——日本と中国の日本文化研究の接点——』溪水社, pp. 58-69, 2009/10

飯倉洋一 「濫觴期絵本読本における公家・地下官人の序文」大高洋司『江戸文学』40, ペリかん社, pp. 51-60, 2009/8

飯倉洋一 「未紹介〔秋成消息文集〕について』『文学 隔月刊』10-1, 岩波書店, pp. 77-88, 2009/1

飯倉洋一 「上田秋成と兼葭堂』『木村兼葭堂顕彰会会報』8, 木村兼葭堂顕彰会, pp. 1-2, 2008/11

飯倉洋一 「『春雨物語』論の前提』『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 85-5, 東京大学国語国文学会, pp. 1-11, 2008/5

飯倉洋一 「『文反古』の版下筆者』『上方文藝研究』5, 上方文藝研究会, pp. 54-60, 2008/5

2-2. 著書

大谷俊太, 神作研一, 飯倉洋一他(共編)『蘆庵文庫目録と資料』青裳堂, 800p., 2009/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯倉洋一 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究——二〇〇九年度」忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』4, 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ, pp. 7-10, 2010/3

飯倉洋一 「モノとしての古書こそ』『日本古書通信』961, 日本古書通信社, pp. 13-14, 2009/8

飯倉洋一 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究——二〇〇七年度・二〇〇八年度——」忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館『忍頂寺文庫・小野文庫の研究』3, 「忍頂寺文庫・小野文庫の研究」共同研究グループ・国文学研究資料館, pp. 3-6, 2009/3

長島弘明, 木越治, 飯倉洋一他 「《座談会》上田秋成』『文学(隔月刊)』10-1, 岩波書店, pp. 2-30, 2009/1

飯倉洋一(傍聴記)「公開ワークショップ傍聴記』『語文』91, 大阪大学国語国文学会, pp. 94-95, 2008/12

飯倉洋一(書評)「談義本に見る宝暦期江戸庶民教化の一端」について・論評』『日本教育史研究』27, 日本教育史研究会, pp. 27-30, 2008/8

2-4. 口頭発表

飯倉洋一 「秋成における「いつはり」の問題」2009年度国際シンポジウム：日本近世文学・文芸の中心と周縁, 高麗大学校日本研究センター, 高麗大学校, 2009/9

飯倉洋一 「秋成における虚構と倫理——『春雨物語』『樊噲』末尾部試解」, 京都近世小説研究会, 同志社女子大学, 2009/8

飯倉洋一 「忍頂寺務『近代歌謡考説』とその周辺」国文学研究資料館公募型共同研究「近世風俗文化学の形成——忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺」, 国文学研究資料館, 2008/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/5

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者：飯倉洋一

課題番号：19520152

研究題目：上田秋成の和文作品本文の生成と変容についての研究

研究経費：2008年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

2009年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究において中心的に扱おうとする和文作品は『藤篋冊子』・『文反古』・『背振翁伝』・『鴛央行』・『春雨梅花歌文卷(仮題)』・『麻知文草稿類(仮題)』所収の文章である。秋成の和文作品は、それぞれが自在に影響しあい、引用されるといって共振するテキスト群という側面を見せている。これを実証的に示すには、Ⅰ和文作品の本文生成の研究(異文との関わり)、Ⅱ和文作品の注釈的研究、Ⅲ秋成の事蹟と和文創作との関わりをめぐる研究が必要である。本研究の特色のひとつは、秋成の和文作品群を〈表現のコーパス〉として捉えることから、その流動性に迫ろうとするものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2008年度～2010年度、その他共同研究、助成金獲得者:飯倉洋一

助成金名: 人間研究機構国文学研究資料館公募研究

研究題目: 近世風俗文化の形成——忍頂寺務草稿および旧蔵書とその周辺——

助成団体名: 人間研究機構国文学研究資料館

助成金額: 2008年度 直接経費 1,258,000円

2009年度 直接経費 1,326,000円

研究の目的:

本研究は、音曲をはじめとする近世風俗文化研究に多大な業績を残した故忍頂寺務の研究を再確認・再評価し、とくに近世風俗文化研究のあらたな展開のための基礎的研究を行うことを目的とする。具体的な目的として以下の4点をあげたい。

- 1 忍頂寺務旧蔵書の近世風俗文化史研究上の意義解明
- 2 忍頂寺務草稿の翻字と刊行
- 3 忍頂寺務の近世風俗文化の再評価
- 4 昭和前期までの近世風俗文化形成のネットワーク的復元

2-7-2. 2008年度、その他共同研究、助成金獲得者:飯倉洋一

助成金名: 大阪大学文学研究科共同研究

研究題目: 忍頂寺文庫・小野文庫の研究

助成団体名: 大阪大学

助成金額: 2008年度 直接経費 300,000円

研究の目的:

忍頂寺文庫・小野文庫は近世歌謡関係(および近世風俗関係)コレクションとして有数のものである(1954年・2000年受入)。これらを調査研究し、その目録解題を刊行し、文献を用いた研究成果を明らかにすることが目的である。本年度は「忍頂寺文庫目録」の完成が主たる目的である。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

総合研究大学院大学・総合研究大学院大学博士論文審査委員	2009年12月～2010年1月
園田女子学園大学近松研究所・評議員	2009年4月～現在に至る
(財)柿衛文庫・柿衛賞選考委員	2007年6月～現在に至る
上方文化芸能協会・運営委員	2005年7月～現在に至る
人間文化研究機構国文学研究資料館・共同研究員	2004年4月～現在に至る
懐徳堂記念会・運営委員幹事	2003年4月～現在に至る
日本近世文学会・常任委員	2002年6月～現在に至る
日本近世文学会・委員	2000年6月～現在に至る
柳川市・柳川市史専門研究員	1995年4月～現在に至る
人間文化研究機構国文学研究資料館・文献資料調査員	1993年4月～現在に至る

3. 加藤 洋介 准教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授を経て、2006年4月より現職。専攻：日本平安文学。

3-1. 論文

加藤洋介 「大島本源氏物語の本文成立事情——若菜下巻の場合——」中古文学会関西部会(共著)『大島本源氏物語の再検討』, 和泉書院, pp. 167-208, 2009/10

加藤洋介 「仙源抄の定家本源氏物語」大阪大学古代中世文学研究会(共著)『皇統迭立と文学形成』和泉書院, pp. 305-320, 2009/7

加藤洋介 「角屋保存会蔵 源氏物語末摘花巻——解題と影印・翻刻——」『角屋研究』18, pp. 15-60, 2009/2

加藤洋介 「池田利夫著「三条西家青表紙証本の問題点」」社団法人紫式部顕彰会(共著)『源氏物語と紫式部 研究の軌跡』角川学芸出版, pp. 390-397, 2008/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

加藤洋介 「藤原定家の土左日記書写——尊経閣文庫蔵本をめぐって——」2009 年度 中古文学会秋季大会, 中古文学会, 関西大学, 2009/10(『中古文学』85, 2010/5)

加藤洋介 「大島本源氏物語の本文成立事情——若菜下巻の場合——」源氏物語千年紀記念シンポジウム, 中古文学会関西部会, 京都文化博物館, 2008/6(『中古文学会関西部会会報』7, p. 5, 2009/3)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:加藤洋介
課題番号: 20520162

研究題目: 定家本源氏物語・伊勢物語の本文成立史に関する横断的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2009 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

藤原定家が晩年古典文学の本文校勘に力を注いでいたことはよく知られているが、源氏物語と伊勢物語に相関するところを明らかにし、両作品の定家本について横断的に検証する視点は、これまでなかったと言ってよい。特に定家本伊勢物語においては、底本の変化・不変化や異文発生状況を時系列上で把握することが可能である。そしてこの伊勢物語の側の成果をもって、源氏物語において定家本が展開してゆく具体的様相を明らかにすることを目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会関西部会・事務局代表	2009年4月～現在に至る
中古文学会・委員	2007年4月～現在に至る
和歌文学会・委員	2007年4月～現在に至る

4. 合山 林太郎 講師

1977年生。2009年、東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位修得退学。文学修士(東京大学、2003年)。国立国会図書館勤務を経て、2009年4月より現職。専攻: 日本漢文学(近世・近代)。

4-1. 論文

-
- 合山林太郎 「阪谷朗廬「旧雨社記」——明治期漢詩文壇についての一考察——」『日本文学』(日本文学協会), 58-12, pp. 68-71, 2009/12
- 合山林太郎, 出口智之(共著) 「未翻刻森鷗外書翰紹介——東京大学総合図書館鷗外文庫蔵『宗旨雑記』より『鷗外』(森鷗外記念会), 85, pp. 1-18, 2009/7
- 合山林太郎 「幕末明治期における神仙詩の系譜」『文学』10-3, 岩波書店, pp. 169-179, 2009/5
- 合山林太郎 「明治期の時事批評漢詩——国分青厓「評林」と野口寧斎「韻語陽秋」——」『国文学 解釈と鑑賞』73-10, 至文堂, pp. 178-186, 2008/10
- 合山林太郎 「漢詩における明治調——森槐南と国分青厓——」『文学』9-3, 岩波書店, pp. 83-94, 2008/5

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

-
- 合山林太郎(書評) 「書評 揖斐高著『近世文学の境界——個我と表現の変容——』」『日本文学』(日本文学協会), 58-9, pp. 76-77, 2009/9
- 合山林太郎(解説) 「野口寧斎と諫早」『諫早文化』4, 諫早市芸術文化連盟, pp. 28-31, 2009/1
- 合山林太郎(辞典項目執筆) 「山口明穂・鈴木日出男(共編)『王朝文化辞典』朝倉書店, 2008/11

4-4. 口頭発表

-
- 合山林太郎 「幕末・明治初期漢詩壇再考——京坂の漢詩人を中心に——」日本近世文学会平成20年度秋季大会, 日本近世文学会, 北海道大学, 2008/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2009年度、若手研究(スタートアップ)、代表者: 合山林太郎

課題番号: 21820020

研究題目: 野口寧斎についての基礎的研究、及び漢詩を中心とする明治文学についての考察

研究経費: 2009年度 直接経費 960,000円 間接経費 288,000円

研究の目的:

明治中期の漢詩人野口寧斎は、漢詩壇の中心的存在として活躍したほか、小説批評や狂詩、和歌の制作にも携わり、また、巖谷小波をはじめとする多くの文壇人とも交流した。本研究は、関西大学図書館に所蔵される野口家関係資料などを用いつつ、寧

齋の伝記及び文学活動の全体像を明らかにし、さらに寧齋や漢詩文壇を中心とする文化ネットワークに着目して、明治期の文学研究に新たな視座をもたらそうとするものである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

無窮会・図書委員	2006年4月～2009年3月
和漢比較文学会・情報化委員	2006年1月～現在に至る

5. 勢田 道生 助教

1980年生。2010年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。修士(文学)(2006年)。2010年4月より現職。専攻:日本中・近世文学。

5-1. 論文

勢田道生 『『南方紀伝』・『桜雲記』の成立環境——『桜雲記』浅羽成儀作者説をめぐって——』『国語国文』78-11, 中央図書出版社, pp. 41-58, 2009/11

勢田道生 『『新葉和歌集』における後醍醐天皇の待遇と南朝の来歴』大阪大学古代中世文学研究会(編)『皇統迭立と文学形成』(大阪大学古代中世文学研究会), 和泉書院, pp. 281-303, 2009/7

勢田道生 『『南方紀伝』・『桜雲記』の成立時期の再検討』『語文』(大阪大学国語国文学会), 91, 大阪大学国語国文学会, pp. 24-34, 2008/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

勢田道生 『『桜雲記』浅羽成儀作者説をめぐって——古文書の利用の観点から——』平成21年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2009/1

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-13 比較文学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次

准教授：橋本 順光

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	1	12	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 6名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	2	2	0	5	0
'09	4	3	0	2	0
小計	6	5	0	7	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

2. 研究

教員は毎年最低 1 本の論文を執筆、大学院生は毎年最低 1 回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することを目標とする。大学院生には、日本学術振興会研究員のほか、機会に応じて学内・学外の研究資金や渡航奨励プログラムへの応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することを目標とする。

3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することを目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と明治大正期の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書講読の演習を必ず受講するよう奨励し、学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部では一コマ多く延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

2. 研究

研究生は、ほぼ全員が 1 本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この 2 年で教員は、多数の論文を執筆・翻訳した。科学研究費助成を継続して、研究分担者として 2 つの共同研究に参加し、代表者としては最終年度の報告書をまとめた。『阪大比較文学』6 号を刊行し、今後は、その水準を向上させるため、隔年刊行も視野に入れつつ、他大学・他専修の複数の専門家に査読を依頼し、依頼原稿と投稿とを厳密に区別することにした。教員による科学研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会の研究員、学内外の助成やプログラムにも毎年申請した。研究室の設備備品は定期的に点検し、可動式書棚一式を購入し、メーリングリストを整備した。それによって、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

3. 社会連携

日本比較文学学会全国大会および例会を 2009 年に大阪大学で開催し、院生と教員が積極的に協力するとともに、発表も行った。この 2 年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で 5 回発表し、4 冊の一般書へ論考を寄稿し、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学学会関西支部、ジャポニスム学会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会の幹事・編集委員など学外の職務に従事し、運営と社会還元にも努力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文、修士論文、博士論文のいずれにおいても、一定水準以上の内容となっており、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

前述の活動の結果、目標は十分に達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前述の活動の結果、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	5	0	5
'09	2	0	2
計	7	0	7

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 梅津彰人 「安部公房の比較文学的研究——ロブ＝グリエ、カフカ、リルケ、オースターとの関係から——」 2008/6
主査：出原隆俊 副査：中直一、片渕悦久
- 莊中孝之 「Kazuo Ishiguro 研究——創作の原理としての〈日本〉と〈イギリス〉——」 2008/12
主査：出原隆俊 副査：北村卓、服部典之
- 出口馨 「メーテルリンクと日本近代詩人の比較文学的研究——北原白秋と同時代を中心として——」 2008/12
主査：出原隆俊 副査：北村卓、加藤洋介
- 大廣典子 「俳句革新運動と造形美術の関連——写生論再考を軸として——」 2008/12
主査：出原隆俊 副査：中直一、飯倉洋一、坪内稔典
- 中野久美子 「文学の視座からの青木繁における美的仮象の創造——明治期のロマン主義受容の射程——」 2008/12
主査：出原隆俊 副査：中直一、橋爪節也
- 鈴木暁世 「日本近代文学におけるアイルランド文学受容——芥川龍之介・菊池寛・西條八十・伊藤整——」 2009/12
主査：橋本順光 副査：出原隆俊、中直一
- 姜素英 「交差するソウルと東京——1920・30年代における横光利一と朴泰遠の比較——」 2009/12
主査：出原隆俊 副査：北村卓、橋本順光

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(3)	1(0)	7(0)	0(0)	2(1)	13(4)
'09	2(2)	1(1)	0(0)	0(0)	2(0)	5(3)
計	5(5)	2(1)	7(0)	0(0)	4(1)	18(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	5	10	2	0	0	17
'09	4	14	1	0	0	19
計	9	24	3	0	0	36

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

李丞鎮「金鶴泳における「父親」——二世・三世作家との比較を中心に——」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.81-97, 2009/3

小橋玲治「河竹黙阿弥『女書生』に見る「三重の変身」の意味——シェイクスピアの異性装との比較を通して」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.127-141, 2009/3

鈴木暁世「芥川龍之介とジェイムズ・ジョイス——『若い芸術家の肖像』と『歯車』のあいだ」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第49号, pp.21-42, 2009/3, 査読なし

鈴木暁世「記述された上海・音の風景——芥川龍之介の紀行文をめぐって——」『ART AND COMMUNICATION』日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 研究領域V-3 文学・芸術の社会的媒介機能「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書, pp.142-147, 2009/3, 査読なし

鈴木暁世「芥川龍之介「シング紹介」論——「愛蘭土文学研究会」との関わりについて」『日本近代文学』第78号, 日本近代文学会, pp.150-164, 2008/5, 査読あり

曾嶸「戦時下の堀田善衛について——『批評』を中心に——」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.99-112, 2009/3

張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と銭鍾書『困城』におけるユーモアの深層」『日本学研究——2008年上海外国語大学日本学国際論壇論文集』上海外語教育出版社, pp.302-306, 2008/12

津田雅之「ミルトン・シャトーブリアン・プルースト——“失われた時”“見出された時”の『失樂園』『復樂園』への対応関係」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.143-158, 2009/3

中野久美子「青木繁の〈仮象〉創造と鴉外・樗牛——ハルトマン美学の受容」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.63-79, 2009/3

朴利鎮「安部公房の境界者的位置感覚——短編小説の主人公たちの特徴をめぐって」『日本語文学』38, 韓国日本語文学会, 2008/9

- 朴利鎮「箱男の空間性——蘇生の空間について」『日本語文学』44, 日本語文学会, 2009/3
- 橋本真佐子「田中恭吉作品をめぐる——表象／「ほほゑみ」の表象」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.113-126, 2009/3
- 藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品における〈白〉と〈光〉」『阪大比較文学』6, 大阪大学比較文学会, pp.43-64, 2009/3
- 【2009年度】
- 〔博士後期〕
- 張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』におけるユーモアのレトリック」『東亜地区日語教育日本学研究 前沿文存』華東理工大学出版社, pp.79-88, 2009/11
- 張杭萍「「中国美人像」から眺めた谷崎潤一郎と芥川龍之介の美意識」『日本学研究——二零零九年上海外国語大学日本学 国際論壇記念論文集』華東理工大学出版社, pp.253-257, 2009/11
- 藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品におけるテキストの役割について——〈アルバム〉と絵本挿画の関わりを手がかりとして」『待兼山論叢』文学篇第43号, 大阪大学文学会, pp.127-142, 2009/12
- 小橋玲治「「三重の変身」という異性装——河竹黙阿弥『女書生』」国際シンポジウム2010「着衣する身体と異性装——日・タイの比較——」報告書(2006-2009年度科学研究費基礎研究(A)共同研究プロジェクト「着衣する身体と女性の周縁化」代表 武田佐知子), 大阪大学大学院文学研究科, pp.36-41, 2010
- 李丞鎮「在日朝鮮人文学における「女性」——二世作家金鶴泳を中心に」『韓国日本語文学会学術発表大会論文集』pp195-7, 2009/7

(2)口頭発表

- 【2008年度】
- 〔博士後期〕
- 李丞鎮「金鶴泳における「父親」——在日二世作家李恢成・高史明との比較を中心に——」日本比較文学会第44回関西大会, 富山大学, 2008/11/8
- ガルワーネ・リンダ, “Masochism as a Stereotype of the Nation: Is Murakami Ryu Perpetuating or Deconstructing the Japanese Cultural Myth?”, Stereotypes in Culture and Literature, Azerbaijan Comparative Literature Association, Baku Slavic University, 2008/11/21
- 小橋玲治「河竹黙阿弥『女書生』に見る「三重の変身」の意味——シェイクスピアの異性装との比較を通して——」日本比較文学会第44回関西大会, 富山大学, 2008/11/8
- 小橋玲治「シェイクスピアと黙阿弥における〈三重の変身〉——黙阿弥『女書生』とシェイクスピアの『十二夜』『お気に召すまま』めぐって」第22回異文化談話会, 大阪産業大学, 2009/2/21
- 鈴木暁世「伊藤整におけるアイルランド文学——北海道・アイヌとの関わり——」第9回モダニズム研究会(第三期), 立命館大学, 2008/9/14
- 鈴木暁世「芥川龍之介とジェイムズ・ジョイス——『若い芸術家の肖像』翻訳と「歯車」のあいだ」日本比較文学会関西支部例会, 神戸大学, 2008/7/26
- 鈴木暁世「伊藤整『若い詩人の肖像』におけるアイルランド文学——北海道・アイルランド・内地——」日本比較文学会第70回全国大会, 大妻女子大学, 2008/6/22
- 曾嶸「堀田善衛における「上海体験」——『西行』から『広場の孤独』へ」日本比較文学会第44回関西大会, 富山大学, 2008/11/8
- 張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』におけるユーモアの深層」2008年上海日本学研究国際フォーラム, 上海外国語大学, 2008/6/7
- 張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』におけるユーモアの深層」日本比較文学会第70回全国大会, 大妻大学, 2008/6/22
- 張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』における知識人像」日本比較文学会第44回関西大会, 富山大学, 2008/11/8

- 張杭萍「夏目漱石『吾輩は猫である』と錢鍾書『圍城』におけるユーモアのレトリック」中国日本語教学研究会 2008 年度年会並びに日本語教育・日本学研究国際シンポジウム, 広東外語外貿大学, 2008/12/13
- 津田雅之「ミルトン・シャトープリアン・プルス——“le temps perdu”“le temps retrouvé”の“Paradise Lost”“Paradise Regained”への対応関係——」日本比較文学会第 44 回関西大会, 富山大学, 2008/11/8
- 朴利鎮「安部公房の境界者的位置感覚——短編小説の主人公たちの特徴をめぐって」韓国日本語学会第 26 回学術大会, 2008/4
- 朴利鎮「安部公房の『満洲』——引揚者的な立場」第 6 回韓国日本学聯合会学術大会, 2008/7
- 橋本真佐子「田中恭吉作品における顔の表象／ほほゑみの表象」日本比較文学会第 44 回関西大会, 富山大学, 2008/11/8
- 藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品における〈白〉と〈光〉」表象文化論学会第 3 回研究発表集会, 東京大学, 2008/11/15
- 【2009 年度】
- 〔博士後期〕
- 曾嶸「堀田善衛文学における「解放後」の中国——その視点の形成について」日本比較文学会第 45 回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31
- 朴利鎮「安部公房と「内的亡命者の文学」——G・ガルシア=マルケス『百年の孤独』読解を手がかりに」日本比較文学会第 71 回全国大会, 大阪大学, 2009/6/21
- 朴利鎮「安部公房の「内的亡命の文学」論」韓国日本語教育学会第 52 回学術大会, 韓国全南大学, 2010/3
- 李丞鎮「^{キムヘギョン}金鶴泳作品における「吃音」——「凍える口」と「まなざしの壁」の考察を中心に」日本比較文学会第 45 回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31
- 李丞鎮「金鶴泳における「女性像」——二・三世作家との比較を中心に」第 7 回韓国日本連合学会大会, 群山大学(韓国), 2009/7/3
- 荊紅艶「郁達夫における谷崎潤一郎受容——『痴人の愛』と『迷羊』を中心として——」日本比較文学会第 71 回全国大会, 大阪大学, 2009/6/21
- 荊紅艶「郁達夫における谷崎潤一郎受容——性欲表現を中心として——」, 日本比較文学会第 45 回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31
- 鈴木暁世「J. M. シングを読む菊池寛／Kwan Kikuchi を読む W. B. イェイツ——日本におけるアイルランド文学の受容と相互交渉——」日本比較文学会東京支部例会, 日本女子大学, 2009/12/19
- 鈴木暁世「W. B. Yeats における菊池寛のイメージ——ダブリン・ドラマ・リーグにおける上演をめぐって——」シンポジウム「他者としての異文化との出会いと共生——比較文化論的視点から——」パネラー, 演劇言語文化研究会, 大阪産業大学, 2009/12/20
- 津田雅之「ストラスブルとトリエステ——国境の町に生まれた文人たち——」日本比較文学会第 45 回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31
- 藤田瑞穂「イリヤ・カバコフ作品におけるテキストの役割について——〈アルバム〉と絵本挿画の関わりを手がかりとして」表象文化論学会第 4 回研究発表集会, 東京大学, 2009/11/14
- 張杭萍「「中国美人像」から眺めた谷崎潤一郎と芥川龍之介の美意識」2009 年上海日本学研究国際フォーラム, 上海外国語大学, 2009/6/13
- 張杭萍「「中国美人像」から眺めた谷崎潤一郎と芥川龍之介の美意識」日本比較文学会第 71 回全国大会, 大阪大学, 2009/6/20
- 張杭萍「魯迅『阿 Q 正伝』と夏目漱石『吾輩は猫である』」日本比較文学会第 45 回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31
- ガルワーネ・リンダ「現代ロシア文学におけるニュー・オリエンタリズム——オルガ・ラズレワの『ロシア人の芸者の伝記』をめぐって」2009 年度ロシア・東欧学会, JSSEES 合同大会, 秋田大学, 2009/10/18
- ガルワーネ・リンダ「オリエンタリズム、日本、セクシュアリティ——O・ラズレワの『ロシア人芸者の伝記』を読む」日本比較文学会第 45 回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31
- 小橋玲治「小栗風葉『青春』に見られる女学生の二重の疎外——「植民地」に赴任する「女教師」の意味——」日本比較文学会第 71 回全国大会, 大阪大学, 2009/6/20

李丞鎮「金鶴泳作品における「女性像」——李恢成と高史明との比較を中心に」韓国日本学連合会第7回学術大会・シンポジウム, 群山大学, 2009/7/3

李丞鎮「金鶴泳作品における「吃音」——「凍える口」と「まなざしの壁」の考察を中心に」日本比較文学会第45回関西大会, 立命館大学, 2009/10/31

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

[博士後期]

鈴木暁世(書評)「大橋毅彦ら編『上海1944-1945:武田泰淳『上海の螢』注釈』」『語文』第91輯, 大阪大学国語国文学会, p.102, 2008/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2009年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2008年度:0名 2009年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2008年度:0名 2009年度:0名

9. 刊行物

2008年度 『阪大比較文学』6号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2009年4月11日 日本比較文学会関西支部例会

2009年6月20-21日 日本比較文学会全国大会

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究。

1-1. 論文

清水康次 「「ころ」における「不可思議な私」——くいちがう〈心〉と〈私〉——」京都光華女子大学日本語日本文学会『光華日本文学』17, 京都光華女子大学日本語日本文学会, pp. 17-46, 2009/10

清水康次 「谷崎潤一郎における自己解放の過程」京都光華女子大学大学院文学研究科(編)『京都光華女子大学大学院文学研究科 共同研究・研究報告書』京都光華女子大学日本語日本文学科, pp. 9-58, 2009/3

清水康次, 高森松子(共編著) 「[参考資料]志賀直哉・谷崎潤一郎・吉井勇「鼎談 京の春を語る」」京都光華女子大学大学院文学研究科(編)『京都光華女子大学文学研究科 共同研究・研究報告書』京都光華女子大学日本語日本文学科, pp. 100-135, 2009/3

清水康次, 齊藤美紗, 武田美穂(共著) 「日新電機「石村亭」(旧「後の潺湲亭」)訪問記」京都光華女子大学文学研究科(編)『京都光華女子大学文学研究科 共同研究・研究報告書』京都光華女子大学日本語日本文学科, pp. 136-151, 2009/3

清水康次 「昭和前期の文学界における〈通俗性〉の問題——「宝塚文芸図書館」から見た〈読者〉——」京都光華女子大学紀要編集委員会『京都光華女子大学研究紀要』46, 京都光華女子大学, pp. 1-38, 2008/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 橋本 順光 准教授

1970年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業(1994)、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了(1997)、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了(2008)。2001年4月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009年4月より現職。
専攻:比較文学・英国地域研究。

2-1. 論文

橋本順光「日露戦争後の英国における武士道と柔術の流行」加藤千香子(共編著)『近代世界における国民・ジェンダー規範の形成』(科学研究費補助金基盤研究(C)共同研究報告書), pp. 3-19, 2010/3

橋本順光「ラフカディオ・ハーンの時事批評と黄禍論」河島弘美(共編著)『異文化理解と偏見——キプリング、ハーン、ロティ、クローデル、ウェーリーの場合——』(科学研究費補助金基盤研究(C)共同研究報告書), pp. 47-53, 2009/3

橋本順光「国際理解教育とは何か——イギリスを事例に——」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学』11, pp. 45-50, 2009/2

2-2. 著書

橋本順光「ラフカディオ・ハーンの時事批評と黄禍論」『講座 小泉八雲 II ハーンの文学空間』新曜社, pp. 543-559, 2009/11

橋本順光「黄禍論とジェンダー——柔弱から柔術へ——」『ジェンダー史叢書 5 暴力と戦争』明石書店, pp. 201-203, 2009/10

橋本順光「ヴィクトリア朝の化石動物幻想——H・G・ウェルズの「エピオルニス島」について——」『英文学にみる動物の象徴』彩流社, pp. 267-296, 2009/3

橋本順光「「チン・チン・チャイナマン」の歌と近代日本——夏目漱石から箕作秋吉まで——」『国際日本学入門』成文社, pp. 56-73, 2009/3

橋本順光「義経＝ジンギスカン説と黄禍論」『女は変身する』青弓社, pp. 178-184, 2009/2

橋本順光「デニケン・ブームと遮光器土偶＝宇宙人説」『オカルトの惑星——1980年代、もう一つの世界地図——』青弓社, pp. 85-110, 2009/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋本順光(翻訳)「君塚直隆(監訳), コリン・マシュー『19世紀 1815年～1901年』(オックスフォード ブリテン諸島の歴史 第9巻) 第六章「文学、音楽、劇場」慶應義塾大学出版会, pp. 304-336, 2009/6

橋本順光(特別研究発表要旨)「"Imperial Gothic"としての黄禍論——H.G.Wells, "The Lord of the Dynamos"(1894)を中心に——」*The Victorian Studies Society of Japan Newsletter*(日本ヴィクトリア朝文化研究学会), 7, p. 8, 2008/5

橋本順光(新刊紹介)「荒このみ・生井英考 編著『シリーズ・アメリカ研究の越境 第6巻 文化の変容と変貌』」『アメリカ学会会報』(アメリカ学会), 166, p. 3, 2008/4

2-4. 口頭発表

橋本順光「オカルトとマンガ」アートエリア B1 ラボカフェ「オカルトとマンガ」, アートエリア B1, 2010/2/28

橋本順光「黄禍論の歴史学——英国における東西人種闘争史観とその系譜——」メロポリタン史学会第5回秋季シンポジウム「ダーウィン・進化論と歴史学」, メロポリタン史学会, 首都大学東京, 2009/11/28

橋本順光「天竺への道——暁鳥敏を中心とする仏跡巡礼とアジア主義の相互関係——」日本比較文学会関西大会シンポジウム「戦間期における南方航路の比較文学——南洋、シンガポール、ペナン、インド——」, 日本比較文学会関西支部, 立命館大学, 2009/10/31

橋本順光「臨界期のジャポニズム——日露戦争後の英国における武士道と柔道の受容——」国際シンポジウム「知られざる英語圏のジャポニズム」, ジャポニズム学会・ロンドン大学・文化女子大学, 文化女子大学, 2009/7/11(『ジャポニズム研究』30, 2010/1)

橋本順光「戦間期旅行記にみるコロomboとロンドン——桜井忠温と和辻哲郎を中心に——」日本比較文学会関西支部例会, 日本比較文学会関西支部, 近畿大学, 2009/7/18

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:橋本順光

課題番号: 19320049

研究題目: 欧州・朝鮮・南洋航路を中心とする戦間期日本における旅行記の比較文化的研究

研究経費: 2008年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

2009年度 直接経費 2,100,000円 間接経費 630,000円

研究の目的:

航路に注目することで、戦間期に盛んになった旅行記を比較文学の立場から分析する。漫遊記を多く生み出した欧州航路、旅行者と移民を運んだ南洋航路、主に労働者を「内地」へ供給した朝鮮航路と、それらの航路は当時の心象地図とどのように関わり合ったのか。共通テキストとして、1927年に日本郵船の白山丸で横浜からマルセイユまで旅し、帰国後に『風土』(1935)を発表した和辻哲郎をとりあげ、同時代の旅行記の特徴を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

ジャポニズム学会・監事	2009年4月～現在に至る
日本比較文学会関西支部・幹事	2009年4月～現在に至る
日本ヴィクトリア朝文化研究学会・編集委員	2009年4月～現在に至る
ジャポニズム学会・理事	2005年4月～2009年3月

2-14 中国文学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：高橋 文治、浅見 洋二

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
6	2	3	1	0	0	1	0	0

※うち留学生 0名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	2	2	2	2	0
'09	1	1	0	1	0
小計	3	3	2	3	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになってきている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関しては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、大学院生の留学、教員の海外出張も行われている。2008年度および2009年度の大学院生の海外留学は、それぞれ1件。中国政府給費留学生として、博士前期課程在籍中の学生が、2008年度は浙江大学、2009年度は復旦大学へそれぞれ留学している。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは2008年度、2009年度を通じて「基盤研究(C)」「特定領域研究」等を取得している。

研究活動という面において、総じて本教室は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力したい。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

中国文学研究室編著の学術的一般書『中国文学のチチェローネ』を刊行した。また、教員1名は、科学研究費「特定領域研究」において国際的に重要な活動を展開し、もう1名の教員も、東方学会議において主導的活動を行った。また院生は、『中国文学のチチェローネ』の刊行に数本の寄稿を行ったほか、学会誌や研究書への論文の掲載を実現した。

3. 社会連携

中国文学研究室編著の学術的一般書『中国文学のチチェローネ』を刊行したほか、教員が年間で10回程度の公開講座・講演会を実現した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	2	0	2
'09	1	0	1
計	3	0	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

谷口高志 「唐代音楽詩の研究——詩は音楽を表現しうるか——」 2009/3

主査：浅見洋二 副査：高橋文治、湯浅邦弘

藤原祐子 「宋词研究——柳永と『草堂詩餘』——」 2009/3

主査：高橋文治 副査：湯浅邦弘、浅見洋二

陳文輝 「元雑劇研究」 2010/3

主査：高橋文治 副査：湯浅邦弘、浅見洋二

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	3(1)
'09	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	4(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	0	0	0	0	0
'09	0	1	0	0	0	0
計	0	1	0	0	0	0

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

陳文輝 「『揚州夢』をめぐって」『待兼山論叢』42, pp.1-16, 2008/12

陳文輝 「歌と物語の世界——無名氏【商調蝶恋花】」『中国文学のチチェローネ』汲古書院, pp.59-85, 2009/3

陳文輝、藤原祐子 「女流の文学——朱淑真【大石生查子】」『中国文学のチチェローネ』汲古書院, pp.214-237, 2009/3

【2009年度】

〔博士後期〕

堀史人 「『死』にいたる道すじ——韓愈『唐河中府法曹張君墓碣銘』をめぐって——」『待兼山論叢』43, pp.17-31, 2009/12

(2)口頭発表

【2009年度】

〔博士後期〕

西川幸宏 「『父母恩重経講経文』にみる「孝」と「地獄」」第9回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会, 大阪大学待兼山会館, 2009/11/21

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2009年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2008年度:0名 2009年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008 年度 : 0 名 2009 年度 : 0 名

9. 刊行物

『中国文学のチチェローネ』汲古書院, 2009/3, 294p.

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

詞曲研究会

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月現職。専攻: 白話文学史。

1-1. 論文

高橋文治「馬潜龍太子の物語——「説唱詞話」は何を語ったか——」田仲一成 小南一郎 斯波義信(共編)『中国近世文芸論——農村祭祀から都市芸能へ——』(東方学会), 東洋文庫, pp. 159-189, 2009/12

1-2. 著書

高橋文治, 浅見洋二, 加藤聰他(共著)『中国文学のチチェローネ』汲古書院, 302p., 2009/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 東方学会賞, 東方学会, 1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007 年度～2009 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 高橋文治

課題番号: 19520301

研究題目: 明代詩賛系文学の基礎的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2009 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

中国国家図書館が所蔵する明代の小説『馬潜龍七姑伝』と貴州省に残存する「儺戯」『鸚哥記』『太子売身』の関係を考察することにより、明代詩賛系文学の特徴を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 浅見 洋二 教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士(京都大学、2009年)。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009年4月、現職。専攻：中国古典詩学。

2-1. 論文

浅見洋二 「校勘から生成論へ——宋代の詩文集注釈、特に蘇黄詩注における真蹟・石刻の活用をめぐる——」東洋史研究会(編)『東洋史研究』(東洋史研究会), 68-1, 東洋史研究会, pp. 34-69, 2009/6

浅見洋二 「由校勘到生成論——有関宋代詩文集的注釈特別是蘇黄詩注中真蹟及石刻的利用——」東華大学中国語文学系(編)『東華漢学』8, 東華大学中国語文学系, pp. 1-35, 2008/12

浅見洋二 「黄庭堅詩注の形成と黄氏『山谷年譜』——真蹟・石刻の活用を中心に——」中国文史哲研究会(編)『集刊東洋学』(中国文史哲研究会), 100, 中国文史哲研究会, pp. 182-205, 2008/11

浅見洋二 「宋代の宮廷文学」仁平道明(編)『王朝文学と東アジアの宮廷文学』竹林舎, pp. 229-255, 2008/5

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二(書評)「横山伊勢雄著『宋代文人の詩と詩論』」中国文学会『中国文学報』78, 中国文学会, pp. 181-196, 2009/9

浅見洋二(訳)「朱剛「北宋の賢良進巻について」」中国社会文化学会『中国——社会と文化』(中国社会文化学会), 24, 中国社会文化学会, pp. 252-269, 2009/7

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者：浅見洋二

課題番号：17520230

研究題目：中国宋代における別集の編纂に関する文学論的・社会文化論的研究

研究経費：2008年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的：

中国宋代における別集(個人別詩文集)の編纂の諸相を明らかにするとともに、そこに現れた文学論、およびそれを取りまく社会文化論的背景について考察を加える。

2-6-2. 2005 年度～2009 年度、特定領域研究、代表者：浅見洋二

課題番号：17083014

研究題目：五山文学における宋代詩文の受容と展開——詩文集の注釈と詩話を中心に——

研究経費：2008 年度 直接経費 6,300,000 円 間接経費 0 円

2009 年度 直接経費 6,300,000 円 間接経費 0 円

研究の目的：

日本漢文学の一大潮流である五山文学と中国宋代の文学との関係を考察することにより、東アジア海域文化交流の一端を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

中国社会文化学会・評議員

2006 年 4 月～現在に至る

2-15 国語学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：金水 敏、岡島 昭浩

助教：衣畑 智秀

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
62*	6	6	0	0	0	0	0	0

*(日本文学と合わせて)

※うち留学生 2 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	17	3	1	1	1
'09	13	1	4	5	0
小計	30	4	5	6	1

*(日本文学と合わせて)

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌「語文」を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「語彙史研究会」「文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」その他の社会連携講座に講師として参加する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

■学部：卒業論文発表会を 2008 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 17 名(うち国語学 3 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2008 年 8 月および 11 月に実施した。修了生 1 名が大学に就職した。学部・大学院合同の講義を半期 3 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等にのべ 10 本掲載されるという状況である。(以上、2008 年度)

■学部：卒業論文発表会を 2009 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 13 名(うち国語学 3 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2009 年 8 月および 11 月に実施した。1 名が修了、5 名が学位申請論文を提出し、その 5 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 3 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等にのべ 8 本掲載され、研究発表が 15 本行われた、という状況である。(以上、2009 年度)

2. 研究

科学研究費に関わる研究では、引き続き「文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合性について」「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」を行い、うち一つは報告書を刊行した。また、「大阪大学国語国文学会」を 2009 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 90(6 月)・91 号(12 月)を刊行した。「語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。(以上、2008 年度)

科学研究費に関わる研究では、引き続き「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」を行った。また、「大阪大学国語国文学会」を 2010 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 92・93 合併号(3 月)を刊行した。「語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。(以上、2009 年度)

3. 社会連携

蜂矢教授が「Handai-Asahi 中之島塾」に 3 回、金水教授が「平成 20 年度 群馬県立女子大学公開授業」に 1 回、「第 5 回大阪再発見のつどい」に 1 回、「平成 20 年度 就実大学 公開学術講演会」に 1 回、「NHK 放送文化研究所 2009 年春のシンポジウム」に 1 回、出講した。(以上、2008 年度)

蜂矢教授が「Handai-Asahi 中之島塾」に、金水教授が、大阪大学 21 世紀懐徳堂講座、広島女学院大学日本文学会秋季公開講演会、第 2 回大阪大学 21 世紀懐徳堂シンポジウム等に、出講した。(以上、2009 年度)

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、多くの論文を学術誌に載せ、目標通りの達成と言える。

2. 研究

科学研究費などによる新しい研究資金の獲得はならなかったが、その他の面では目標通りの達成と言える。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	1	2
'09	5	3	8
計	6	4	10

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 黒木邦彦 「中古日本語の文法的な時間表現」 2009/3
主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、岡島昭浩
- 蜂矢真弓 「名詞・動詞の被覆形・露出形の研究」 2009/9
主査：岡島昭浩 副査：金水敏、荒木浩
- 藤本真理子 「日本語指示詞の歴史的变化について」 2010/3
主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、岡島昭浩
- 岩田美穂 「並列表現形式の史的展開——その体系的把握を目指して——」 2010/3
主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、岡島昭浩
- 金紋敬 「日本書紀古訓の研究」 2010/3
主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩
- 鳩野恵介 「日本漢字音における例外的字音の処理の問題」 2010/3
主査：岡島昭浩 副査：金水敏、蜂矢真郷

【論文博士】

- 伊藤雅光 「構造字彙論」 2008/12
主査：金水敏 副査：蜂矢真郷、岡島昭浩
- 浅野敏彦 「平安時代識字層の漢字・漢語の受容についての研究」 2009/05
主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩
- 玉村禎郎 「対義並列構成漢語についての研究——本邦における副詞化を中心に——」 2010/3
主査：蜂矢真郷 副査：金水敏、岡島昭浩
- 橋本行洋 「新語の史的研究」 2010/3
主査：蜂矢真郷 副査：石井正彦、岡島昭浩

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	1(1)	1(0)	5(0)	0(0)	1(0)	8(1)
'09	4(4)	1(0)	2(0)	0(0)	3(0)	10(4)
計	5(5)	2(0)	7(0)	0(0)	4(0)	18(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	5	5	0	1	11
'09	1	12	2	0	1	16
計	1	17	7	0	2	27

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太「中古王朝物語の会話文——地の文との境界をめぐって——」『詞林』大阪大学古代中世文学研究会, 43, pp.1-7, 2008/4, 査読なし

黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太「中古和文における会話文と地の文の境界」『語文』大阪大学国語国文学会, 91, pp.60-68, 2008/12, 査読なし

〔博士後期〕

金紋敬「日本書紀古訓「イロ」に関して」『待兼山論叢』42, 大阪大学文学会, pp.43-58, 2008/12

金紋敬「日本書紀古訓における母親を表す語彙に関して」『古事記年報』51, 古事記学会, pp. 106-123, 2009/1, 査読あり

蜂矢真弓・藤本真理子・竹村明日香・清田朗裕「抄注・北原白秋第二詩集『思ひ出』語彙 蜂矢真郷(代表)『文献に現れた語彙・語法と国語史の不整合について』2006~2008年度科学研究費補助金 基盤研究(c), 2009/3, 査読なし

黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太「中古王朝物語の会話文——地の文との境界をめぐって——」『詞林』大阪大学古代中世文学研究会, 43, pp.1-7, 2008/4, 査読なし

黒木邦彦・藤本真理子・清田朗裕・森勇太「中古和文における会話文と地の文の境界」『語文』大阪大学国語国文学会, 91, pp.60-68, 2008/12, 査読なし

鳩野恵介「漢和辞典における慣用音の規範」『語文』大阪大学国語国文学会, 91, pp.35-46, 2008/12, 査読なし

鳩野恵介・古田雄佑・岩城佐和・川那邊惟奈「近代における会話文特立符号種の消長」『語文』大阪大学国語国文学会, 91, pp.69-77, 2008/12, 査読なし

藤本真理子「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』大阪大学国語国文学会, 90, pp.40-53, 2008/6, 査読なし

【2009年度】

〔博士後期〕

- 竹村明日香「ハル敬語の形態変化の通時的考察——大阪・京都の比較を通して——」『待兼山論叢文学篇』大阪大学文学会, 43, pp.21-36(左開き), 2009/12
- 清田朗裕「現代語における「かれこれ」の様相——歴史の変遷を捉える前段階としてのノート——」『国語国文研究と教育』熊本大学教育学部国文学会, 48, pp. 40-51, 2010/2
- 清田朗裕「中古語の地の文にみえるカ系列指示詞について——『源氏物語』を対象に——」『古代・現代語の指示詞における総合的研究』平成 21 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(研究代表者:岡崎友子、課題番号 19520406), pp.24-34, 2010/3
- 藤本真理子「ナタ形指示詞の空間・時間における方向性——平安時代を中心に——」『詞林』大阪大学古代中世文学研究会, 第 45 号, pp. 1-14, 2009/4
- 藤本真理子「『古代語のカ(ア)系列指示詞』再考」『日本語文法』9 卷 2 号, pp. 122-138, 2009/10
- 藤本真理子「中古和文における指示詞の分析——会話文と地の文の境界をめぐって——」平成 19~21 年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書『古代・現代語の指示詞における総合的研究』pp. 90-105, 2010/3
- 大田垣仁「名詞の関数的な側面からみた指示的換喩の 2 つのタイプ——名前転送と役割転移」『KLS』関西言語学会, 29, pp. 23-33, 2009/6
- 大田垣仁「指示的換喩と意味変化——名前転送における語彙化のパターン——」『日本語の研究』日本語学会, 5(4), pp. 31-46, 2009/10
- 金囁泳「「一的」の語基制約」『日本語學研究』韓国日語日文学会, 第 27 輯, pp.1-13, 2010/03/20
- 岡崎友子・藤本真理子・清田朗裕「指示詞用例集 2 古代語編」平成 19~21 年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)研究成果報告書『古代・現代語の指示詞における総合的研究』 2010/3

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

- 金水敏・黒木邦彦・大田垣仁・藤本真理子・清田朗裕・森勇太「ダイクシス、現実、仮想現実」第 3 回指示詞研究会・研究発表会, 岡山大学, 2008/8/6
- 〔博士後期〕
- 大田垣仁「名詞の関数的な側面からみた指示的換喩の 2 つのタイプ——名前転送と役割転移——」関西言語学会第 33 回大会, 大阪樟蔭女子大学, 2008/6/7
- 金水敏・黒木邦彦・大田垣仁・藤本真理子・清田朗裕・森勇太「ダイクシス、現実、仮想現実」第 3 回指示詞研究会・研究発表会, 岡山大学, 2008/8/6
- 大田垣仁「換喩と意味変化——名前転送における語彙化のパターン——」日本語学会 2008 年度秋季大会, 岩手大学, 2008/11/3
- 黒木邦彦・清田朗裕「日本語におけるアスペクト表現の統語構造について」第 224 回筑紫日本語研究会, 2008/12/26
- 黒木邦彦「中古日本語のアスペクト——完了の助動詞の文法的制約に基づく考察——」土曜ことばの会, 大阪大学, 2008/4/19
- 黒木邦彦「日本語の過去時制をめぐって——過去の助動詞「-き」「-けり」の使い分けに基づく考察——」日本語学会 2008 年度春季大会, 日本大学, 2008/5/18
- 竹村明日香「ハル敬語における上接動詞の拡張と活用変化の様相」第 2 回蛍池言語研究所研究発表会, 蛍池言語研究所, 2008/08/11
- 鳩野恵介「『慣用音』の定義とその問題」日本語教育研究所((財)日本漢字能力検定協会)第 22 回研究院のための研修会, コミュニティ嵯峨野, 2008/12/14

鳩野恵介「濁声母と日本漢字音——特に全清・次清字が濁音となる場合について」大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学, 2009/1/10

藤本真理子「中古語のカ(ア)系列とソ系列——観念指示用法の推移——」日本語学会 2008 年度春季大会, 日本大学, 2008/5/18

藤本真理子「中古語のソ系列——観念指示用法の検討を中心に——」第 3 回蛭池言語研究所研究発表会, 蛭池言語研究所, 2009/2

【2009 年度】

〔博士後期〕

森勇太「行為指示表現の歴史的変遷——受益表現と尊敬語の相互関係の観点から——」日本語学会 2009 年度春季大会, 武庫川女子大学, 2009/5/31, 口頭発表, 査読あり

竹村明日香「ハル敬語の形態変化の通時的考察——大阪・京都の比較を通して——」第 264 回近代語研究会例会, 東京学芸大学, 2009/6/27

竹村明日香「人形浄瑠璃のことば——大阪弁の今むかし——」文楽応援団 8 月研修会, 国立文楽劇場, 2009/8/29

岩田美穂・衣畑智秀「ヤラにおける例示用法の成立」第 10 回日本語文法学会, 学習院女子大学, 2009/10/25

清田朗裕『九州方言の基礎的研究』未公開データの整理についての一提案」九州方言研究会第 28 回研究会, 佐賀大学, 2009/7/4

清田朗裕「[N1+その+N2]の語史——「そのもの」を例に——」日本語学会 2009 年度秋季大会, 島根大学, 2009/11/1

清田朗裕「日本語における指示詞の諸問題」平成 21 年度熊本大学教育学部国文学会, 熊本大学, 2010/3/6

大田垣仁・清田朗裕「複合的換喩表現を用いた指示的換喩の下位区分の曖昧性排除について——役割転移型の指示的換喩を中心に——」日本語文法学会第 10 回大会, 学習院女子大学, 2009/10/25

藤本真理子「レ形指示詞の歴史的考察——源氏物語を中心に——」関西言語学会, 神戸松蔭女子学院大学, 2009/6/6

大田垣仁「複合的換喩表現をもちいた、名前転送・役割転移の区別の曖昧性排除について」土曜ことばの会, 大阪府: 大阪大学, 2009/7/18

大田垣仁「換喩における指示と非指示——役割転移型の指示的換喩と非指示的換喩の境界からみた——」日本語学会 2009 年度秋季大会, 島根県: 島根大学, 2009/10/31

大田垣仁「換喩と述定 ——内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた——」平成 22 年度大阪大学国語国文学会, 大阪府: 大阪大学, 2010/1/9

鳩野恵介「似字辨別の形式——字引の一側面としての「點畫少異字」「辨似」——」第 267 回近代語研究会, くにびきメッセ(島根県), 2009/10/30

金囁泳「「一的」の日本語化」日本語学会・2009 年度春季大会, 日本・武庫川女子大学, 2009/5/31

金囁泳「「一的」の語基制約」韓国日本語学会・第 20 回国際学術発表会, 韓国・建国大学, 2009/09/19

金囁泳「「一的」の連体修飾用法に関する一考察——「A 的ノ B」「A 的 B」「A 的ナ B」形式を中心に——」韓国日本語日文学会・2009 年度冬季国際学術大会, 韓国・仁川大学, 2009/12/19

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

竹村明日香 大阪国際人形劇フェスティバル協賛「文楽との出会い」一〇〇〇字エッセイコンテスト一般の部佳作, 主催: 独立行政法人日本芸術文化振興会・国立文楽劇場, 2008/10

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008 年度 PD: 1 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 1 名)

2009 年度 PD: 1 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

2009年度 学部：0名 大学院：0名（計0名）

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 7名

2008年度：4名 2009年度：3名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 7名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2008年度：1名 2009年度：1名

9. 刊行物

*(日本文学専門分野とともに)

2008年度 「語文」90, 91輯 大阪大学国語国文学会の機関誌 年2回

2009年度 「語文」92.93輯合併号 大阪大学国語国文学会の機関誌 年1回

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

開催 第87回国語語彙史研究会 2009/12/1

事務局 国語語彙史研究会 2002年度以前から現在に至る

国語文字史研究会 2002年度以前から現在に至る

土曜ことばの会 2002年度以前から現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1月 1日間)

研究誌「語文」を年2回編集・発行

*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月 3日間)

大学院研究発表会 (7月・11月 各2日間)

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 金水 敏 教授

1956年生。1982年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻：国語学／言語学。

1-1. 論文

金水敏 「敬語優位から人称性優位へ」再考」大阪大学国語国文学会(編)『語文』(大阪大学国語国文学会), 第 92・93 輯, 大阪大学国語国文学会, pp. 74-80, 2010/2

金水敏 「意志性・主観性と文脈」由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の意味と文法』(くろしお出版), くろしお出版, pp. 273-284, 2009/2

金水敏, 廣坂直子, 岡崎友子(共編著)「金剛寺蔵長寛三年写『観無量寿経』影印・訓読・解題」国際仏教大学院大学学術フロンティア実行委員会(編)『金剛寺蔵観無量寿経・無量寿経優婆提舎願生偈註』(国際仏教大学院大学学術フロンティア実行委員会), 国際仏教大学院大学学術フロンティア実行委員会, pp. 3-104, 2008/12

1-2. 著書

金水敏, 安部清哉, 齋藤倫明他(共編)『語彙史』岩波書店, 252p., 2009/11

伊藤公雄, 金水敏, 吉村和真他(共編著)『マンガの中の他者』臨川書店, pp. 14-60, pp. 223-227, 2008/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

平田オリザ, 石黒浩, 金水敏(対談)「(対談)ロボットが演劇? ロボットと演劇?」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『ロボット演劇』大阪大学出版会, pp. 14-32, 2010/2

金水敏(エッセー)「「ええ、まあ」の言語学」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(編)『ロボット演劇』大阪大学出版会, pp. 66-71, 2010/2

金水敏, 滝浦真人(共著)(対談)「(対談)日本語の「今」を捉え損ねないために——ポライトネス研究と歴史語用論から見えてくるもの——」『言語』38-12, 大修館書店, pp. 8-18, 2009/12

金水敏(エッセー)「日本語は変わり続ける(特集 子どものための言語学)」『日本語学』28-15, 明治書院, pp. 60-67, 2009/12

金水敏(エッセー)「市民目線で大学が変わる」『阪大 NEWS LETTER』44, 大阪大学, pp. 7-8, 2009/6

金水敏(エッセー)「「社会学連携」は大学の使命」『サステナ』11, サステナビリティ学連携研究機構, pp. 68-71, 2009/4

1-4. 口頭発表

金水敏 「大阪弁と大阪人のイメージの変遷」探求特別講座, 大阪府立千里高等学校, 大阪府立千里高等学校, 2010/3

金水敏 「役割語研究の現状」役割語研究会シンポジウム, 科学研究費補助金 基盤研究 (B)「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」, 江原大学校 人文大学 201 号室(マルチメディア講義室), 2010/2

金水敏 「“大阪弁”と“かんきょう——たいそうなことをやわらかく話し合おう——」第2回大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム:“大阪弁”で語り合う“かんきょう”!? 地域と大学が一緒に考える“まち育て”part II, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター, 2010/1

金水敏 「役割語とキャラクターをめぐって——ことばが示す人物像——」2009 年度広島女学院大学日本文学会秋季公開講演会, 広島女学院大学日本文学会, 広島女学院大学, 2009/12

金水敏 「現代日本語の「役割語」:ステレオタイプの話体の研究法の模索」大阪大学フォーラム 2009:「東アジアにおける日本語・日本文化教育の 21 世紀的展望——東南アジア諸国と日本との新たな教育研究ネットワークの構築を目指して——」, 大阪大学/Ministry of Education Malaysia, Institute of Teacher Education Malaysia, International Languages Campus, 2009/11(*The 21st Century Approach to Japanese Studies Programmes in Southeast Asia: Towards the Creation of a New Academic Network Between Japan and Southeast Asia*, pp. 14-17, 2009/11)

金水敏 「現代日本語の「役割語」——ステレオタイプの話体の研究——」日本女子大学学術交流研究シンポジウム:ことばと文化:役割語と人称詞をめぐって, 日本女子大学, 日本女子大学 80 年館 851 教室, 2009/11

金水敏 「歴史語用論の可能性」人間文化研究機構 国立国語研究所 国際学術フォーラム, 人間文化研究機構 国立国語研究所, 人間文化研究機構 国立国語研究所, 2009/10

金水敏 「日本語存在表現の分類と歴史」日本中国語学会第 59 回全国大会:存在表現の類型と歴史, 日本中国語学会, 北海道大学高等教育機能開発総合センター, 2009/10

- 金水敏 「大阪弁と大阪人のイメージの変遷」大阪大学 21 世紀懷徳堂講座, 大阪大学 21 世紀懷徳堂・大阪市, i-spot, 2009/7
- Kinsui, Satoshi, “Morphosyntactic Functions of Noun Phrases in Japanese and Their Historical Change” International Symposium Methodologies in Determining Morphosyntactic Change: Case Studies and Cross-linguistic Applications, Ritsuko Kikusawa/Museum of Ethnography, 国立民族学博物館, 2009/3
- 金水敏 「役割・キャラクター・言語をめぐって」役割・キャラクター・言語, 金水敏/定延利之(科学研究費補助金), 神戸大学百年記念館, 2009/3
- 金水敏, 池田貴子 「ビジン日本語と中国人像の変遷」役割・キャラクター・言語, 金水敏/定延利之(科学研究費補助金), 神戸大学百年記念館, 2009/3
- 金水敏 「知ってるようで知らない日本語:役割語」就実大学 公開学術講演会, 就実大学表現文化学会, 就実大学 R601 講義室, 2008/11
- 金水敏 「役割語研究の新展開」ドイツ文法理論研究会発表会, ドイツ文法理論研究会, 岡山大学法文経講義棟 24 番講義室, 2008/10
- 金水敏 「ダイクシス、現実、仮想現実」第 3 回指示詞研究会・研究発表会, 指示詞研究会, 岡山大学大学院社会文化科学研究科, 2008/8
- 金水敏 「ヴァーチャル日本語・役割語について」平成 20 年度 群馬県立女子大学公開授業:美しい日本語, 群馬県立女子大学, 群馬県立女子大学 講堂, 2008/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007 年度～2010 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:金水敏

課題番号: 19320060

研究題目: 役割語の理論的基盤に関する総合的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 3,500,000 円 間接経費 1,050,000 円

2009 年度 直接経費 3,500,000 円 間接経費 1,050,000 円

研究の目的:

「役割語」とは、ステレオタイプ的な人物像と、心理的連合によって結びつけられたスピーチスタイルのヴァリエーションのことを指す。本研究では、(1)「役割語の認知とその発達」(2)「役割語の対照言語学的研究」(3)「役割語を巡る作品と享受者のインタラクション」(4)「日常談話における役割語の運用」の諸点を明らかにするために、(a)「幼児・児童の役割語的知識に関する心理シミュレーション」(b)「対照研究の理論的基盤の整備」(c)「ポピュラーカルチャー作品における役割語表現の機能に関する基礎研究」(d)「日常談話におけるキャラ語尾と発話キャラクターの関連に関する研究」(e)「国際的研究ネットワークの構築」の 5 つの課題を進めていく。併せて、本研究の遂行を通して、日本語教育を初めとする言語教育、国語教育、翻訳論、文学研究等の隣接領域へも応用的貢献への方策も探求していく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・理事	2009 年 6 月～現在に至る
日本言語学会・委員	2009 年 4 月～現在に至る
訓点語学会・委員	2009 年 4 月～現在に至る
日本語学会・評議員	2009 年 4 月～現在に至る
日本学術会議・連携会員	2008 年 10 月～現在に至る

日本語文法学会・副会長	2007年4月～現在に至る
関西言語学会・運営委員	2000年4月～現在に至る
語用論学会・運営委員	1998年4月～現在に至る

2. 岡島 昭浩 教授

1961年生。1987年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授、本研究科助教授・准教授を経て2010年現職。専攻:国語学。

2-1. 論文

岡島昭浩 「寺尾東海の韻学と荻生徂徠」『語文』(大阪大学国語国文学会), 92・93, 大阪大学国語国文学会, pp. 90-99, 2010/3

岡島昭浩 「出典未詳の四字熟語「屍山血河」」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 29, 和泉書院, pp. 219-229, 2010/3

2-2. 著書

岡島昭浩, 安部清哉, 伊藤雅光他(共著)『シリーズ日本語史2 語彙史』岩波書店, pp. 105-126, 2009/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩 「「積ん読」の語誌」南陀楼綾纂『山からお宝 本を積まずにはいられない人のために』けものみち計画, pp. 56-57, 2008/12

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員	2009年5月～現在に至る
国語文字史研究会・委員	2008年4月～現在に至る
日本語学会・常任査読委員	2007年5月～現在に至る
国語語彙史研究会・委員	2003年4月～現在に至る

3. 衣畑 智秀 助教

1976年生。2005年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。京都大学COE研究員(フェローA)、日本学術振興会特別研究員を経て、2009年4月から現職。専門:言語学、日本語文法史。

3-1. 論文

衣畑智秀「上代語の名詞抱合について」『語文』(大阪大学国語国文学会), 92・93, pp. 34-44, 2010/2

Kinuhata, Tomohide 他(共著), “Genesis of ‘Exemplification’ in Japanese” Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Kayo Nagai and Szymon. Grzelak(共編) *Japanese/Korean Linguistics*, 16, CSLI Publications, pp. 87-101, 2009/6

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Kinuhata, Tomohide, “A Short Lecture on Shōmono” The First workshop of VSARPJ, Oxford University, 2010/1

岩田美穂, 衣畑智秀「ヤラにおける例示用法の成立」日本語文法学会, 学習院女子大学, 2009/10

Kinuhata, Tomohide, “Scope of Pronounced and Unpronounced Negation: A Case of Japanese *Sika-nai* and its Correlates” The 5th Workshop on Inferential Mechanisms and their Linguistics Manifestation, Kyoto University, 2009/7

Kinuhata, Tomohide, “Historical Development from Subjective to Objective Meaning: A Case of Japanese Question Particle.” The 15th Workshop on East Asian Linguistics., UCLA, 2009/2

Kinuhata, Tomohide, John Whitman, “Genesis of Indefinite pronouns in Japanese and Korean” The 18th Japanese/Korean Linguistics Conference, City University of New York, 2008/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2009年度、若手研究(スタートアップ)、代表者:衣畑智秀

課題番号: 2180023

研究題目: 日本語の疑問文とそれに関連する構文の歴史的対照言語学的研究

研究経費: 2009年度 直接経費 970,000円 間接経費 290,000円

研究の目的:

日本語の疑問文とそれに関連する構文について、主に中世以降に焦点を当ててその歴史を記述するとともに、日本語の歴史と、琉球語・韓国語を対照することで、諸構文の関連性、及びそれぞれの歴史変化について、一般言語学に貢献しうるプロセスの解明を目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-16 英米文学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 2 准教授 2 外国人教師 1 助教 1

教授：森岡 裕一、服部 典之

准教授：片渕 悦久、石割 隆喜

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
35	7	11	0	0	0	2	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	10	2	5	3	2
'09	12	2	0	6	5
小計	22	4	5	9	7

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時までには社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆力をつけさせる。②文学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧める、ことを目標とした。学部生については、①英米文学全般についての幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表現技術を身につけさせる、ことを目標とした。また、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあう態勢

をつくることも大学院・学部双方にわたって目標としている。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回研究成果を各種学会で口頭および論文の形で発表する努力を積極的に行う。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は院生、学部生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会叢書のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、アメリカのペンシルヴァニア大学大学院に、毎年院生を原則として 2 名程度派遣して、国際的感覚を付けさせるプロジェクトを継続して実施する、ことなどを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力はかなりついてきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを物語っている。研究室の物理的整備などを工夫したこともあって、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好と言える。

2. 研究

当該年度中ほぼ全員の教員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍をしている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに 5 巻まで出版されているが今後の出版計画は第 8 巻まで進んでいる。この時期の課程博士号提出者は 9 名、論文博士号提出者は 6 名に上っている。院生の研究発表については 1. でもふれたように口頭・論文ともに著しく、目標は十分達成されたとと言える。

3. 社会連携

2009 年度は卒業生を 1 名非常勤講師として招き大きな成果を挙げた。院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ている。ペンシルヴァニア大学への派遣計画は連続して毎年 2 名を派遣し、計 8 名を送り出している。この海外派遣計画は今後長期的に展開すべく努力しており、2010 年度は 3 人派遣が決定している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、このところ内部から大学院進学者が連続して出ているのは教育面での成果の表れと自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	3	2	5
'09	6	7	13
計	9	9	18

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 市橋孝道 “The German Code in Thackeray’s Major Works.” 2008/9
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久
- 足達賀代子 “The Poetics of Retelling: A Study of *The Faerie Queene*.” 2008/9
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久、石割隆喜
- 垣口由香 “The Eloquent Body in Beckett’s Plays: The Physicality, the Body Sensation, and the Medium.” 2008/9
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久
- 森本道孝 “Invisible Threat: Male-Male Conflicts, Blood Relations, and Family against Nation in Sam Shepard’s Plays.” 2009/9
主査：森岡裕一 副査：玉井暲、服部典之、片渕悦久
- 麻島徳子 “In Pursuit of the Author’s Voice in Narrative Space: A Study of Hardy’s Major Novels.” 2010/3
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久
- 池田景子 “The Quest for the Abyssinian Source: The Romantic Myth of Hieroglyphic Representation in William Wordsworth and P.B. Shelly.” 2010/3
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久
- 乙黒麻記子 “Crossing the Border between Romance and Realism: A Study of Maugham, Stevenson and Charlotte Bronte.” 2010/3
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久
- 中村仁紀 “Pragmatism and Language in S. T. Coleridge.” 2010/3
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久
- 馬渕恵里 “Breaking the ‘Bourne’: Literary Development and Achievement of Jane Austen, Charlotte Bronte, and George Eliot.” 2010/3
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、服部典之、片渕悦久

【論文博士】

- 仙葉豊 「デフォー小説の多様性——近代的小説の誕生」 2008/8
主査：玉井暲 副査：服部典之、森岡裕一
- 鈴木俊次 「D・H・ロレンスのキーイメージとテキスト——『関係性』の視点で」 2008/8
主査：玉井暲 副査：服部典之、片渕悦久

- 伊勢芳夫 「19・20世紀の英国小説におけるアジア表象の変遷——「東洋」の知識化の歴史的・理論的考察」2010/3
主査：玉井暲 副査：服部典之、森岡裕一、片渕悦久
- 太田素子 「ヴァージニア・ウルフの小説における「瞬間」と「パーティ空間」」2010/3
主査：玉井暲 副査：服部典之、森岡裕一、片渕悦久
- 白川計子 「詩人たちの二十世紀——モダニズムからポストモダニズムへ」2010/3
主査：玉井暲 副査：服部典之、森岡裕一、石割隆喜
- 村井和彦 「意味することのもどかしさ——シェイクスピアにおける言語と人間的行為の研究——」2010/3
主査：玉井暲 副査：服部典之、森岡裕一、石割隆喜
- 村里好俊 「シドニーと同時代の詩人たち——サー・フィリップ・シドニー研究」2010/3
主査：玉井暲 副査：服部典之、森岡裕一、石割隆喜
- 鴨川啓信 「グレーム・グリーン小説の研究——物語の継承と変容——」2010/3
主査：玉井暲 副査：森岡裕一、片渕悦久、石割隆喜
- 藤江啓子 「メルヴィルのアメリカと惑星——空間と時間の広がりの中で」2010/3
主査：森岡裕一 副査：玉井暲、片渕悦久、石割隆喜

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(2)	2(0)	7(0)	0(0)	5(0)	17(2)
'09	3(3)	0(0)	3(0)	0(0)	6(0)	12(3)
計	6(5)	2(0)	10(0)	0(0)	11(0)	29(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	1	9	1	0	0	11
'09	0	5	0	0	0	5
計	1	14	1	0	0	16

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

麻島徳子 “The Rhetoric of Defense: The Function of the Narrator Who Veils Tess’s ‘Bygones’” *Osaka Literary Review*, 47, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 47-68, 2008/12.

池田景子 “Shelley’s ‘Mont Blanc’: The Secret Strength’s Image Written on Water.” *Osaka Literary Review*, 47, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 19-32, 2008/12.

岩橋浩幸「クララと指輪——ソール・ペローの『盗み』における依存」森岡裕一・堀恵子共編『「依存」する英米文学』（阪

- 大英文学会叢書 5), 英宝社, pp. 98-116, 2008/8.
- 金崎八重「ミルトン『デイモン墓碑銘』における自然の変容」17世紀英文学会編『17世紀英文学とミルトン』金星堂, pp. 1-18, 2008/3.
- Sanyat Satar (サニヤット・サター) “Gosh’s *The Shadow Lines*: The Essential Notion of Nationalism.” *Osaka Literary Review*, 47, 大阪大学大学院英文学談話会, pp.105-17, 2008/12.
- 関良子「*The Earthly Paradise* における『ロマンス』あるいは過去への感覚」『日本英文学会第80回大会 Proceedings』日本英文学会, pp. 89-91, 2008/9.
- 関良子 “William Morris as a Storyteller: His Position in the Aesthetic Movement” 『待兼山論叢』(文学篇), 42, pp. 35-49, 2008/12.
- 関良子「ウィリアム・モリスのアイスランド巡礼——その詩作への影響の考察——」『「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告集』 pp. 240-44, 2009/3.
- 高島裕以 “Resurrection in *A Tale of Two Cities*.” *Osaka Literary Review*, 47, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 33-46, 2008/12.
- 田中和也 “*Lord Jim* as a Parodied Narrative of Heroism.” *Osaka Literary Review*, 47, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 69-86, 2008/12.
- 田中沙織 “‘Fled is that music’: ——Listening to ‘music in the mind’ in *Tender Is the Night*.” 『関西アメリカ文学』 45, 日本アメリカ文学会関西支部, pp. 37-52, 2008/11.
- 仲渡一美 “From Mythic Space to Welsh Community: A New Light on Dylan Thomas’s *Portrait of the Artist as a Young Dog*.” *Osaka Literary Review*, 47, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 87-103, 2008/12.
- 中村仁紀 “Coleridge and Problems of Lexicography” 『待兼山論叢』(文学篇), 42, pp. 17-33, 2008/12.
- 馬淵恵里「『依存』を越えて——自立する『家庭の天使』ルーシー・スノウ」, 森岡裕一・堀恵子共編『「依存」する英米文学』(阪大英文学会叢書 5), 英宝社, pp. 177-94, 2008/8.
- 馬淵恵里「Jane と St. John の〈黙示録〉——*Jane Eyre* のエンディングを読む——」『ブロンテ・スタディーズ』4-6, pp. 47-59, 2008/10.
- 森本道孝「対立を生む『依存』——サム・シェパード劇における闘う男たち」森岡裕一・堀恵子共編『「依存」する英米文学』(阪大英文学会叢書 5), 英宝社, pp. 79-97, 2008/8.
- 森本道孝 “The Crisis of the Man with Blue Eyes in Sam Shepard’s *Eyes for Consuela* and *The Late Henry Moss*.” *Osaka Literary Review*, 47, pp. 119-37, 2008/12.
- 【2009年度】
- 〔博士後期〕
- 池田景子「ワーズワスの「序曲」におけるスノードン山でのヴィジョン——聴覚的イメージと視覚的イメージの転換」服部典之他編『英米文学の可能性——玉井暲教授退職記念論文集』英宝社, pp. 197-304, 2010/3.
- 金崎八重「なぜコウマスは逃げたのか——『コウマス』における自然」服部典之他編『英米文学の可能性——玉井暲教授退職記念論文集』英宝社, pp. 225-236, 2010/3.
- 麻島徳子「『遙か狂乱を離れて』における雑誌連載の戦略」服部典之他編『英米文学の可能性——玉井暲教授退職記念論文集』英宝社, pp.471-484, 2010/3.
- 麻島徳子 “Inventing the Author’s Voice: The Rhetoric of an Autobiographical Novel in *Jude the Obscure*.” *Osaka Literary Review*, 48, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 1-24, 2010/3.
- 中村仁紀「コールリッジの歴史感覚と発見的思考——ヴィーコを介して」服部典之他編『英米文学の可能性——玉井暲教授退職記念論文集』英宝社, pp. 305-316, 2010/3.
- 田中和也「懐疑・行動・観念——Dr. Monygham を通じて読む *Nostramo*」『日本英文学会第81回大会プロシーディングス』 pp.104-6, 2009.
- 岩橋浩幸「*The Adventure of Augie March* における饒舌の二つの型と回顧録形式」『関西アメリカ文学』第46号, pp.5-20, 2009/10.

岩橋浩幸「ザッカーマンの物語技法：『ゴースト・ライター』における対置と脱線」服部典之他編『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集』英宝社, pp. 771-782, 2010/3.

隠岐尚子「法のこちら側」——『ラヴ』にみるプライベート・コードと「知ること」服部典之他編『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集』英宝社, pp. 831-41, 2010/3.

吉井麻里子「緋色の中に見えるもの——「税関」についての考察——」『フォーラム』（日本ナサニエル・ホーソーン協会）,15, pp.19-36, 2010.

Sanyat Sattr “Looking Back to the Past: Morrison & Ghosh’s Positive Intent to Apprehend the Future.” *Osaka Literary Review*, 48, 大阪大学大学院英文学談話会, pp. 39-53, 2010/3.

Sanyat Sattr “Ethnic Roots and Historical Halls: Morris and Ghosh Rescuing the Cachet.” 『待兼山論叢』（文学篇）,43, pp.59-77, 2009/12.

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士後期〕

池田景子 “Bruce and Wordsworth” Wordsworth Summer Conference, 英国・グラスミア, 2008/8/3.

市橋孝道「*The Virginians* にみる Englishness——“Germanism”との対照において」日本英文学会第 80 回大会, 広島大学, 2008/5/25.

隠岐尚子「『歴史』の断絶と再生——*Paradise* の仮題 *War* について」日本英文学会関西支部第 3 回大会, 関西学院大学, 2008/12/20.

金崎八重「*L’Allegro* と *Il Penseroso* ——閉じられた世界」日本ミルトン協会第 1 回研究会, 青山学院大学, 2008/12/13.

関良子「*The Earthly Paradise* における『ロマンス』あるいは過去感覚」日本英文学会第 80 回大会, 広島大学, 2008/5/25.

関良子 “William Morris’s Pilgrimage to Iceland” 2008 年度環境と文学・国際フォーラム, 大阪大学, 2008/11/3.

仲渡一美「誘惑のアフォリズム——Dylan Tomas の詩 ‘Do not go gentle into that good night’を読み直す」日本英文学会第 80 回大会, 広島大学, 2008/5/25.

中村仁紀「コールリッジにおける批評用語のプラグマティズム——*Aids to Reflection* (1825)を中心に」日本英文学会第 80 回大会, 広島大学, 2008/5/25.

馬淵恵里「Jane と Lucy がえらぶ男たち——Austen のヒロインとの比較において」日本ブロンテ協会関西支部 2008 年夏季大会, 関西大学, 2008/7/26.

村田幸範「ブルームズベリー・グループの批評理論と初期ニュー・クリティ」日本英文学会第 80 回大会, 広島大学, 2008/5/25.

森本道孝「警鐘を鳴らす——Sam Shepard の *The God of Hell* におけるアメリカの危機」日本アメリカ文学会第 47 回全国大会, 西南学院大学, 2008/10/11.

【2009年度】

〔博士後期〕

池田景子「*The Prelude* 第 8 巻における羊飼いの像——glory と Wordsworth の詩的精神」イギリス・ロマン派学会全国大会第 35 回大会, 明星大学, 2009/10/4.

麻島徳子「『実録・ハーディ伝』という名の虚構——*Life* における記録と想起の弁証法」日本ハーディ協会第 52 回大会シンポジウム「ハーディの『自伝』をどう読むか」立教大学, 2009/10/31.

中村仁紀「コールリッジにおける仮説思考の射程」関西コールリッジ研究会第 142 回 6 月例会, 同志社大学, 2009/6/27.

田中和也「懐疑・行動・観念——Dr. Monygham を通じて読む *Nostromo*」日本英文学会第 81 回全国大会, 東京大学, 2009/5/31.

田中和也「才能は衰退したのか：Joseph Conrad の *Chance* におけるマスキュリニティ維持の戦略」日本英文学会関西支部第 4 回大会, 同志社大学, 2009/12/20.

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士後期〕

金崎八重『評伝 J・G・フレイザー——その生涯と業績』ロバート・アッカーマン著, 玉井暲監訳, 小松和彦監修, 法蔵館, pp. 1-631, 2009/2.

中村仁紀『評伝 J・G・フレイザー——その生涯と業績』ロバート・アッカーマン著, 玉井暲監訳, 小松和彦監修, 法蔵館, pp. 1-631, 2009/2.

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:2名 大学院:4名 (計6名)

2009年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度~2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

垣口 由香 博士後期課程、静岡県立大学短期大学部、専任講師、2009/4

乙黒麻記子 博士後期課程、茨城工業高等専門学校、専任講師、2009/4

関 良子 博士後期課程、高知大学人文学部、専任講師、2009/10

片山 美穂 博士後期課程、高知学園短期大学幼児保育学科、専任講師、2010/4

橘 幸子 博士後期課程、群馬県立女子大学文学部英米文化学科、専任講師、2010/4

森本 道孝 博士後期課程、近畿大学経済学部、専任講師、2010/4

中村 仁紀 博士後期課程、大阪医科大学、助教、2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度~2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2008年度:1名 2009年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2008年度:0名 2009年度:1名

9. 刊行物

2008年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 47, 2008/12

阪大英文学会叢書 5 森岡裕一・堀恵子共編『〈依存〉する英米文学』(英宝社, 2008/8)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト領域 V

「文学・芸術の社会的媒介機能」——「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」

「環境と文学——第 1 回国際フォーラム」

2008/11/3

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第 42 回大会 2009/11/7

阪大英文学会第 41 回大会 2008/11/8

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 森岡 裕一 教授

1950年生。1979年、大阪大学大学院修士課程修了。文学修士(大阪大学、1979年)文学博士(大阪大学、2006年)。大阪大学助手、講師、奈良女子大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2000年4月現職。専攻:アメリカ文学。

1-1. 論文

森岡裕一 「リグリーの怯え——『アンクル・トムの小屋』における男女の力学」『英米文学の可能性』英宝社, pp. 641-651, 2010/3

森岡裕一 「ボトルと奴隷——『アンクル・トムの小屋』における支配と依存」『メディアと文学が表象するアメリカ』英宝社, pp. 56-77, 2009/10

森岡裕一 「少女の涙——酒小説における「共依存」とセクシュアリティ」『「依存」する英米文学』英宝社, pp. 137-155, 2008/8

1-2. 著書

森岡裕一他(共著) 『メディアと文学が表象するアメリカ』英宝社, pp. 56-77, 2009/10

森岡裕一他(共編著) 『「依存」する英米文学』英宝社, pp. 1-238, 2008/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006 年度～2008 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:森岡裕一

課題番号: 18520197

研究題目: 19 世紀アメリカ小説における感傷主義の研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

19 世紀アメリカの禁酒小説と家庭小説に見られる感傷主義の本質とその構造を分析する。T・S・アーサーの『酒場での十夜』を代表とする禁酒小説と同時代に流行した家庭小説を、「涙する少女のモチーフ」を通してその共通点と相違点を抽出し、19 世紀感

傷主義の特質を浮かび上がらせる。

1-6-2. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:森岡裕一

課題番号: 21520249

研究題目: 19世紀アメリカ禁酒小説研究

研究経費: 2009年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

研究の目的:

T・S・アーサーに代表される19世紀アメリカ禁酒小説の構造とレトリックを考察し、家庭小説ら近接ジャンルを視野に入れながら、19世紀感傷主義の特質を探る。また、禁酒をめぐる道徳的説論と強制の主題の変遷をたどる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員	2009年4月～現在に至る
日本アメリカ文学会・代議員	2002年4月～2009年3月
日本ヘミングウェイ協会・運営委員	2001年4月～現在に至る
日本アメリカ文学会関西支部・評議員	1997年4月～現在に至る

2. 服部典之教授

1958年生。1981年、大阪大学文学部(英文学専攻)卒業。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学博士(大阪大学、2003年)。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月文学研究科助教授、2008年4月現職。専攻:英文学。

2-1. 論文

服部典之 「レミュエル・ガリヴァーの悲慘と希望」『IVY』(名古屋大学英文学会), 42, 名古屋大学英文学会, pp. 67-90, 2010/3

服部典之 「介護されるヒーロー——憂い顔の「スロー・マン」」『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集』(玉井暉教授退職記念論文集刊行会), 英宝社, pp. 603-614, 2010/3

服部典之 「「南太平洋周航物語」——スティーヴンソンの回遊するボトル——」塩谷清人、富山太佳夫『イギリス小説の愉しみ』音羽書房鶴見書店, pp. 221-239, 2009/6

服部典之 「性と交易の物語学——世界周航記と「不名誉な交渉」(Infamous Commerce)」『英国小説研究第23冊』英潮社フェニックス, pp. 34-52, 2008/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

服部典之(書評) 「樋口欣三著『ウォルター・スコットの歴史小説——スコットランドの歴史・伝承・物語』(2006)、松井優子著『世界の作家 人と文学 スコット』(2007)、米本弘一著『フィクションとしての歴史——ウォルター・スコットの語りの技法』(2007)」『ジェイン・オースティン研究』2, 日本オースティン協会, pp. 211-218, 2008/6

2-4. 口頭発表

服部典之 「A Voyage Round the South Pacific——R. L. スティーヴンソンの回遊するボトル——」テキスト研究学会第8回全国大

会シンポジウム「南太平洋という物語空間——〈英・米・日〉トランス・パシフィック文学論」, テキスト研究学会, 大阪大学文学研究科, 2008/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号: 18520199

研究題目: 初期英国小説における「孤児」小説と、18世紀英国社会における「孤児問題」の研究

研究経費: 2008年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究の最も大きな目的は、18世紀英国において重大な社会問題であった「孤児問題」と、初期英国小説の中に多く描かれた「孤児」主人公を取り上げ、社会と文学の相互浸透の有様を研究し、それらを代表する「孤児性」(bastardy)こそが、18世紀英国文化の根幹を成していた意識を代表する概念であることを実証することである。二つめの目的は、「近代小説」がいかんしてイギリスに発祥したかという問題を研究する「小説起源論」に、「孤児問題」という観点から新たな地平を切り開くことである。科学研究費の交付を希望する3年間の初年には、従来着目されなかった「孤児」小説をスタンダードなもののみならず、文学史からは忘却された、復刊されていない小説も含め、可能な限り収集しその全容を把握する。そして同時に1745年に創設された「捨て子養育院」(Foundling Hospital)のアーカイブを海外出張により入手する。これらの社会福祉施設の歴史的成り立ちと実態を調査し、「孤児問題」の社会的実態の把握を行う。2年目には、資料収集を継続すると共に、その研究を学会における口頭発表等で公開し、この問題の重要性を世に知らしめる啓蒙活動を行う。また関係諸分野の研究者とワークショップ等で議論を深める。3年目には研究の集大成として学術論文を執筆し、初期英国小説における「孤児」主人公の意味と、18世紀英国社会の「孤児問題」の重大性、及びそれら社会現象が文化に及ぼした影響を明確にする。

2-6-2. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号: 21520250

研究題目: 南太平洋という物語言説の変奏と変容

研究経費: 2009年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

本研究は、南太平洋を舞台とした英文学作品を、18世紀から現在に至るまで通時的に検証することによって、南太平洋という「場所」が英文学において持つ独特な意義を解明するものである。ユートピア幻想にいざなう憧憬の場である南太平洋(または19世紀までの用語では「南海」)は、イギリスという国家にとって植民の対象でもあった。さらに太平洋戦争(1941-45)が顕著に示すように、数多くの島々が点在する太平洋は、常に国家間の抗争を惹起する地であった。本研究は、英文学における「南太平洋」の意味の変容と変奏を明らかにすると共に、豊かな物語を生む幻想の地が、なぜ諸国家の抗争の誘因になったかという文化的理由を探る野心的な研究である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本18世紀学会・常任幹事	2009年6月～現在に至る
日本英文学会大会準備委員会・委員長	2009年5月～2010年5月
日本英文学会大会準備委員会・副委員長	2008年5月～2009年5月
日本英文学会関西支部・事務局長	2006年12月～2008年12月

日本オーステイン協会・幹事
日本ジョンソン協会・総務
関西 18 世紀英文学研究会・世話人

2006 年 6 月～現在に至る
2006 年 5 月～2009 年 5 月
2005 年 4 月～現在に至る

3. 片渕 悦久 准教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1991年)。博士(文学)(大阪大学、2007年)。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月現職。専攻:アメリカ文学。

3-1. 論文

- 片渕悦久「ヘンリー・ロス『それを眠りと呼べ』における内言と物語意識」玉井暉教授退職記念論文集刊行会(編)『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集——』英宝社, pp. 733-745, 2010/3
- 片渕悦久「ウェブサイトは作者をどう投影するか——ジョナサン・サフラン・フォア『エブリシング・イズ・イルミネイティッド』と映画版アダプテーションをめぐって——」山下昇(編)『メディアと文学が表象するアメリカ』英宝社, pp. 276-302, 2009/10
- 片渕悦久「脱出術師あるいは／そして土塊人形——マイケル・シェイボン『カヴァリエ&クレイの驚くべき冒険』における共同制作と男同士の幻想——」広瀬佳司, 佐川和茂, 坂野明子(共編)『ユダヤ系文学の歴史と現在——女性作家、男性作家の視点から』(日本ユダヤ系作家研究会), 大阪教育図書, pp. 259-278, 2009/3
- 片渕悦久「友情、嫉妬、自己嫌悪——「うちにユダヤ人がいます」における屈折した共依存関係」森岡裕一, 堀恵子(共編)『「依存」する英米文学』(阪大英文学会叢書 5), 英宝社, pp. 156-174, 2008/8

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 片渕悦久(翻訳) ラーラ・ヴァブニャール, 『うちにユダヤ人がいます』朝日出版社, 170p., 2008/7

3-4. 口頭発表

- 片渕悦久 他「脱線と反復の一人称の語り」日本ソール・ベロー協会第 21 回大会『フォーラム・ディスカッション: More Die of Heartbreak を読む』, 日本ソール・ベロー協会, 高槻市生涯学習センター, 2009/9
- 片渕悦久「キャラカストーリーか——アダプテーション研究と物語更新論」愛知淑徳大学英文学会講演会, 愛知淑徳大学, 2009/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2008 年度～2010 年度、萌芽研究、代表者:片渕悦久

課題番号: 20652021

研究題目: アダプテーション理論にもとづいた〈物語〉のメディア横断性の研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 0 円

2009 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

広範なメディア(言語、映像、パフォーマンス等)やジャンル(文学、映画、まんが等)を横断するかたちで物語が更新されつつ作り直される現代の文化的状況を分析および考察するための足がかりとして、「アダプテーション理論」を軸にすえ、主流文化のみなら

ずサブカルチャーまでを射程に収めた動態的分析方法論を開発、提示する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員

2009年4月～現在に至る

日本ソール・バロー協会・代表理事

2009年4月～現在に至る

4. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、同講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:アメリカ文学。

4-1. 論文

石割隆喜「ポスト・ノヴェルと「人間」——ピンチョンの諸問題」玉井暉教授退職記念論文集刊行会(編)『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集』pp. 759-770, 2010/3

石割隆喜「シュールリアリスティックな資本主義——Gravity's Rainbow、あるいは Pynchon の「ポスト・ノヴェル」」『英文学研究』(日本英文学会), 85, pp. 89-102, 2008/11

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会・会計幹事

2006年4月～2009年3月

5. ハーヴィ ポール 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University卒業退学(MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員(1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化学部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化学部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学。

5-1. 論文

HARVEY, Paul A. S., "Literary Aspects of the Translation of 1 Corinthians 13," *Possibilities of English Literature: Essays for Professor Akira Tamai*, 英宝社, pp. 119-126, 2010/3

5-2. 著書

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Saint Paul 200 (日本語訳付)*, Yamaguchi Shoten, 138p., 2010/3

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Songs 365*, Yamaguchi Shoten, 157p., 2010/1

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Selections from Shakespeare 4*, Yamaguchi Shoten, 100p., 2009/10

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Selections from Shakespeare 3*, Yamaguchi Shoten, 108p., 2009/6

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Selections from Shakespeare 2*, Yamaguchi Shoten, 101p., 2009/2

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Selections from Shakespeare 1*, Yamaguchi Shoten, 93p., 2009/1

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *One Hundred Poems*, Yamaguchi Shoten, 110p., 2008/7

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Inorijuzu*, Yamaguchi Shoten, 130p., 2008

ANTHONY, Stean (= HARVEY, Paul A. S.), *Messages to My Mother 1 - 7, (series)* Yamaguchi Shoten, 800p., 2008

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

HARVEY, Paul A. S. 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻:アメリカ文学。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

好井千代 「Daisy Miller の Un-American Flirting」アメリカ学会第 42 回年次大会, アメリカ学会, 同志社大学, 2008/5『アメリカ学会第 42 回年次大会要領・報告要旨』pp. 7-8, 2008/5)

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:好井千代

課題番号: 17520166

研究題目: 19 世紀末のアメリカ小説とナショナリズムの諸相——グローバル化の中の国家と文学

研究経費: 2008 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究は、19 世紀末に台頭したグローバリゼーションとナショナリズムの 2 大潮流が対立しつつ協働する複雑な絡み合いの様々な様相を、同時代のアメリカ文学を通して浮き彫りにし、かつそのような 19 世紀末が現代世界といかに似ているかをあわせて考察することで、19 世紀末の現代的意義を明らかにする。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 外国人教師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

外国人教師：イヨルク・ノヴァコヴィッチ

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
10	7	7	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	5	4	0	0	0
'09	3	0	0	0	0
小計	8	4	0	0	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした地域文化論的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 *Forschungskolloquium* を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実際の運用能力の涵養にあたっては、外国人教師による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、言語文化研究科所属の併任教員および学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努める。

2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、プロジェクト研究や共同研究への積極的な参画をとおして、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこなう。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。大学院では、より高度な内容の文献演習を開設するとともに、個別的な論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。言語文化研究科の金子元臣教授により、モダニズムの文学・芸術についての演習が開講され、また中川一成、葉柳和則の両非常勤講師によりユダヤ研究、スイス現代文学研究について最新の研究動向が講じられた。さらにノヴァコヴィッチ教師による講義・演習を開講して、実際の運用能力の向上を図った。

2. 研究

2008 年度は空席だった准教授が 2009 年度から補充され、18 世紀啓蒙と 20 世紀モダニズム芸術・文化を中心に、近現代のドイツ語圏文学・文化を広くカバーして研究する体制が整った。三谷教授と吉田准教授はそれぞれ科研費基盤研究(C)、同研究活動スタート支援の交付を受けて研究活動を展開し、その成果を著書ならびに論文として発表した。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。海外での研究活動も活発で、三谷教授と吉田准教授がコンスタントに資料調査に出かけているほか、複数の大学院学生がロータリー財団国際奨学生派遣制度や大阪大学交換留学制度により、長期の留学を果たした。

また特記すべきは、2009 年度の文学部本館改修事業にともなう研究室仕様の全面更新で、これにより情報機器を活用した、新たな研究・教育活動をおこなうスペースが創出された。

3. 社会連携

三谷教授と吉田准教授は、阪神ドイツ文学会、日本 18 世紀学会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、また関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の運営に役員として積極的に参画し、研究成果や専門知識の提供に努めた。また、日本学術振興会の研究成果公開促進費を交付されての著書刊行や『フロイト全集』翻訳への参加をとおして、さらにはフェニックス・ホールでのレクチャーコンサートなどによって、研究成果の社会への発信・還元を図った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

授業をとおしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。*Forschungskolloquium* の

開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げている。今後は、論文作成にかかわるアカデミック・ライティングについて、個別指導のいっそうの強化が必要である。また、外国人教師担当の授業は、本研究分野にかかわる国際的な研究活動や教育の実態にあわせて、教材およびテーマの面でさらなる工夫が望まれる。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、それに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考える。

2. 研究

三谷教授と吉田准教授は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。ノヴァコヴィッチ教師には、海外の諸研究機関との交流をふくむ恒常的で水準の高い研究活動を求める。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公刊を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究(短期調査を含む)を展開、また日本学術振興会特別研究員への応募もおこなった。今後は、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野が期待されている学会運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをおとして、目標を越えるレベルが達成されたといえる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	1	1
'09	0	0	0
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

三谷研爾 「世紀転換期のプラハ モダン都市の空間とその文学的表象」 2008/4

主査：林正則 副査：市川明、柏木隆雄

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
'09	2(2)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)	4(4)
計	2(2)	2(2)	0(0)	0(0)	1(1)	5(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	1	1	0	0	2
'09	0	2	0	0	0	2
計	0	3	1	0	0	4

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

土谷真理子「Die Suche nach einer Selbstcharakterisierung des Mephistopheles in Goethes *Faust II*」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 42, pp. 67-81, 2008/12

【2009年度】

〔博士後期〕

飯田皆実「田園都市の学び舎 メンデルスゾーン『苦悩のアルカディア』をめぐる」『待兼山論叢(文学篇)』(大阪大学文学会), 43, pp. 95-110, 2009/12

飯田皆実「再定義される文化的アイデンティティ ドレスデン・ノイマルクト広場再建をめぐる」『交錯するアート・メディア』(大阪大学グローバル COE『コンフリクトの人文科学』2007-2009 報告書), pp.26-35, 2010/3

友田次郎「「なんという変容!そして未来も、喜々として、遠くから、輝き、語りかけてくる」『ゲルマーニエン』とその(未来性)」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 25, pp.5-23, 2009/11

別府陽子「「理解」の可能性 ディルタイ解釈学の視点から——トーマス・マン『ファウスト博士』試論」『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会), 51, pp.47-67, 2009/12

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

飯田皆実「宮廷都市ドレスデンのモダニズム」大阪大学グローバル COE「コンフリクトの人文科学」若手ワークショップ「中欧モダニズム/ローカリズム」, 2009/3

〔博士後期〕

友田次郎「ヘルダーリンの詩作とその未来性」大阪大学ドイツ文学会第15回研究発表会, 2008/11

別府陽子「初期トーマス・マンとニーチェ」 阪神ドイツ文学会第 198 回研究発表会, 2008/12

【2009 年度】

〔博士後期〕

小松紀子「言葉と身振り——カフカの『あるアカデミーの報告』におけるコミュニケーションの表象」 大阪大学ドイツ文学会第16回研究発表会, 2009/11

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2009 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

2009 年度 学部 : 0 名 大学院 : 2 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008 年度～2009 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008 年度～2009 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2008 年度 : 1 名 2009 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 1 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008 年度 : 0 名 2009 年度 : 0 名

9. 刊行物

2008 年度 『独文学報』 24 号

2009 年度 『独文学報』 25 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本ゲーテ協会「ゲーテ生誕の夕べ」(第 258 回目の誕生日記念)

2008 年 8 月

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会

2008 年 11 月

大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会

2009 年 11 月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会

2008年7月、10月、11月

院生研究発表会

2009年7月、10月、11月

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

1-1. 論文

三谷研爾 「展示された文学史〈プラハのドイツ語文学〉とそのベルリン展(1995)の射程」『待兼山論叢』43, 大阪大学文学会, pp. 1-20, 2009/12

三谷研爾 「不適應のトポグラフィー——カフカ『失踪者』における都市空間と物語」藤田治彦『「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト, pp. 214-219, 2009/3

1-2. 著書

三谷研爾 『世紀転換期のプラハ——モダン都市の空間と文学的表象』三元社, 330p., 2010/2

三谷研爾(共著) 『プラハとダブリン——20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス』日本独文学会, pp. 33-45, 2009/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三谷研爾(訳) 「精神分析で現れる若干の性格類型」「子供がぶたれる」本間直樹(責任編集), 三谷研爾・吉田耕太郎・家高洋(共訳)『フロイト全集』16, 岩波書店, pp. 3-37, pp. 121-150, 2010/2

1-4. 口頭発表

三谷研爾 「ニコラス通り 36 番地の家——カフカの生きた街プラハ」チェコ/スロバキアを知らうセミナー, 関西チェコ/スロバキア協会, 2009/3

三谷研爾 「モラヴィアから世界へ——土俗のひびき、越境のしらべ」レクチャーコンサート:20世紀音楽シリーズ, ザ・フェニックスホール, 2009/1

三谷研爾 「カフカにおける〈交通〉とアイデンティティ」日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム:プラハとダブリン——20世紀ヨーロッパ文学における2つのトポス, 日本独文学会, 岡山大学, 2008/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号: 19520220

研究題目: 多言語地域における文化資源蓄積の比較研究

研究経費: 2008年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2009年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、ボヘミアとシレジアというふたつの多言語地域の文化環境に関する学知の集積状況そのものに注目し、その歴史的展開を冷戦期、さらには1990年代以降の中欧地域における政治的・社会的なコンテクストに照らしながら、比較検討をおこなう。事

例分析を通じて、多言語地域研究に関する学術情報が文化資源へと転換・活用されている実態をとらえ、文学研究がはたしうる社会的役割の可能性をも検討する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西チェコ／スロバキア協会・会長	2009年3月～現在に至る
阪神ドイツ文学会・幹事	2008年4月～2010年3月
大阪大学ドイツ文学会・会長	2007年11月～現在に至る

2. 吉田 耕太郎 准教授

1970年生まれ。東京外国語大学外国語学部(ドイツ語学科)卒。2007年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位取得退学。学術修士(東京外国語大学)。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009年4月より現職。専攻:ドイツ文化史・思想史。

2-1. 論文

吉田耕太郎「踊る身体——身体と動作のひとつの概念史として」*Der Keim*, (東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会), 33, 東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会, pp. 69-82, 2010/2

吉田耕太郎「思想史——啓蒙の光と闇」壺内慎二, 石黒義昭ほか『学びのシラバス』pp. 97-111, 2009/4

吉田耕太郎「不安としての少女——少女像の誕生とその歴史的意味についての考察」北原博, 吉田耕太郎『少女のイメージ——18世紀の場合』(日本独文学会研究叢書), 55, 日本独文学会, pp. 1-12, 2008/10

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

吉田耕太郎(訳)「ある可塑的な強迫表象の神話的並行現象」『詩と真実』の中の幼年期の思い出」本間直樹(責任編集), 三谷研爾・吉田耕太郎・家高洋(共訳)『フロイト全集』16, 岩波書店, pp. 37-39, pp. 57-70, 2010/2

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2009年度～2010年度、研究活動スタート支援、代表者:吉田耕太郎

課題番号: 21820022

研究題目: 雑誌メディアによる18世紀的情報空間の変容

研究経費: 2009年度 直接経費 1,070,000円 間接経費 321,000円

研究の目的:

18世紀の思想や文化の研究において、印刷メディアの役割は無視できないものとなっている。当時のドイツは政治的な割拠状

態にあり、それを架橋するように印刷物による情報ネットワークが緊密に形成されていた。18 世紀の啓蒙思想もまた、この情報ネットワークを礎に成立したものである。しかし 19 世紀になると、真理を伝播するという啓蒙思想の理念は後景に退くことになる。その一つの証左が、通俗的な内容の印刷物の増加である。通俗的な印刷物の代表として、18 世紀末にとつじょ出現したモード雑誌のその成立過程をたどることで、18 世紀の情報空間の変容を実証的に跡づけることが、本研究の目的である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本 18 世紀学会・常任理事

2009 年 6 月～現在に至る

3. ノヴァコヴィッチ イョルク 外国人教師

1952年生。1989年Ludwig Maximilians Universität München (大学)(哲学群、古代研究—文化研究部)日本文学博士課程中途退学。1987年同大学にてMagister Artium(日本学、中国学、社会学)取得。1980—82年熊本大学外国人教師、1989年より現職。専攻:ドイツ文学/比較文化学。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 1 准教授 1 外国人教師 1 助教 0

教授：和田 章男

准教授：山上 浩嗣

外国人教師：アニエス・ディソン

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	5	7	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	5	0	3	0	1
'09	4	3	0	0	0
小計	9	3	3	0	1

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身に付ける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・フランス文学の概説の講義などを通じて基礎知識を吸収するとともに、講読、作文、会話など応用力を養う。
- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。

- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を推進する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせるよう努力する。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。

3. 社会連携

- ・朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「フランス・歴史の中の美」を担当し、一般市民を対象としてフランスの文学、芸術、文化を紹介する。
- ・フランス文学研究室のホームページを充実し、研究内容をわかりやすく紹介することに努める。
- ・「ウェブ・ガリア」により、研究室発行機関誌『ガリア』の掲載論文を広く公開する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

- ・講義・演習では、中世から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2008 年度は 5 本、2009 年度は 4 本の卒業論文が提出されたが、いずれも優れた内容の論文となり、特に 2009 年度卒業生の 1 名は楠本賞を受賞した。
- ・大学院生の研究指導においては、各 Semester に 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2009 年度は修士論文 3 本が提出され、そのうち 2 名が博士後期課程に進学した。
- ・2009 年度には学部生 1 名が大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズの暗唱大会に参加。フランス語実践能力研鑽の良い機会となった。
- ・2008 年度には、ゴンクール賞作家ジャン・エシュノーズ、リュック・ラングという 2 名の小説家を招き、アニエス・ディソン教師によるインタビュー形式の講演会を開催した。2009 年度には、パリ第三大学教授ピエール＝エドモン・ロベール氏、詩人・翻訳家の関口涼子氏、および現代詩の専門家ベネディクト・ゴリヨ氏の講演会を開催した。

2. 研究

- ・教員 1 名が科学研究費補助金による 3 年間の成果として、ブルースト草稿帳 75 冊の総合索引を完成した。
- ・日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌に 1 本の論考が掲載された。また、博士後期課程学生の 1 名がフランスの学術雑誌に論文・翻訳の掲載を認められた。
- ・日本フランス語フランス文学会の全国大会で 3 名、関西支部大会で 1 名が口頭発表を行った。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会として 9 月と 3 月に研究会を開催した。また、会誌『ガリア』は掲載論文 5 本、うち 2 本がフランス語で執筆された。所収論文は発刊の 1 年後に「ウェブ・ガリア」に掲載されるが、サイトへのアク

セス数も順調に伸びている。

- ・日仏共同博士課程 日本コンソーシアムの制度を利用して1名がパリに留学中である。
- ・他に文科省長期海外留学制度を利用して1名がパリに留学中である。

3. 社会連携

- ・教員1名が朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「フランス・歴史の中の美」を担当し、2週間に1回約20名の市民受講生を対象にして、フランス文学、芸術、文化を紹介した。
- ・教員1名が、市民向けの講座において、フランスのシャンソン、詩の紹介を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。特に2009年度の卒業生の1名が楠本賞を受賞したことは特筆に値する。この2年間に5人の学者、詩人、小説家の講演会を行い、日仏交流を推進するとともに、学生たちから活発な質問が出されたことは、フランス語による発言能力の向上として高く評価できる。実作者との交流は文学研究を行う者にとって大きな刺激となっている。

2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。2009年度の学生の発表論文が少なかったが、これは2008年度末に数名の学生が博士後期課程を単位修得退学したことが理由である。

3. 社会連携

朝日カルチャーセンターおよびその他の市民向けの講座で、フランス文学、芸術、文化を紹介することにより、社会連携の目標も達成している。また研究室のホームページおよび「ウェブ・ガリア」のアクセス数は着実に伸びており、研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	0	0	0
'09	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集 その他	計
'08	7(6)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	9(6)
'09	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	8(7)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	10(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	4	4	0	0	8
'09	0	5	4	0	0	9
計	0	9	8	0	0	17

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

足立和彦 “Maupassant au Japon” *L'Angélu*, bulletin de l'Association des amis de Guy de Maupassant, 17 (décembre 2007- janvier 2008, Marseille), pp. 4-19, 2008/7

安部朋子 「ディドロの美術批評『サロン』における「ジャンル画」への視線——グルーズ、ヴェルネ、ユベール・ロベールの絵画について——」 『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 42, pp. 83-98, 2008/12

岩村和泉 “Balzac et la question du chef” *GALLIA*(大阪大学フランス語フランス文学会), 48, pp. 21-30, 2009/3

岩村和泉 「バルザック『ラ・ラブイユーズ』における結社「無為の騎士団」について——1842年のノディエとバルザック——」 『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部会), 15, pp.3-13, 2009/3

廣田大地 “Les deux *Horloges* en prose et en vers —— pour une étude génétique de la poésie de Baudelaire entre 1857 et 1862 ——” *GALLIA*(大阪大学フランス語フランス文学会), 48, pp. 41-50, 2009/3

間野照世 「ゾラの諸作品における出産描写の変遷 II——『生きる喜び』の出産描写に隠された意図——」 *GALLIA*(大阪大学フランス語フランス文学会), 48, pp. 61-70, 2009/3

村上彩子 「ユゴー『東方詩集』における詩的空間——詩篇の配置をめぐる——」 『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 15, pp. 14-24, 2009/3

村上彩子 「ユゴー『東方詩集』におけるオリент」 『アート・アンド・コミュニケーション, 「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』(独立行政法人日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業), pp. 228-234, 2009/3

脇聡 「パリの遊歩者、ヴァロワの散策者——ネルヴァル後期作品における散策の諸相」 『アート・アンド・コミュニケーション, 「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』(独立行政法人日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業), pp. 182-185, 2009/3

【2009 年度】

〔博士後期〕

安部朋子「ディドロの絵画批評『サロン』における「illusion」の語の使用についての一考察」『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 16, pp. 3-14, 2010/3

(2)口頭発表

【2008 年度】

〔博士後期〕

安部朋子「18 世紀フランスの絵画批評における「ジャンル画」への視点——ディドロの美術批評『サロン』を中心に——」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2008/10/4

岩村和泉「バルザック『ラブイユーズ』における結社 les Chevaliers de la Désœuvrance について」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 近畿大学, 2008/11/29

岩村和泉「バルザックと chef の問題」関西バルザック研究会, 近畿大学, 2008/12/21

林千宏「Michel Quillien, *La Dernière Semaine*(1597)について: 三日目「飢餓について」を中心に」日本ロンサール学会, 神奈川県あしがら荘, 2008/8/26

林千宏「16 世紀末期におけるアレゴリー詩法の変容——ミシェル・キリアン『黙示週』(1597)三日目「飢餓について」を中心に」日本フランス語フランス文学会全国秋季大会, 岩手大学, 2008/11/8

林千宏「ミシェル・キリアン『黙示週』(1597)における「疫病」の表象——四日目を中心に——」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2009/3/7

村上彩子「『ノートル=ダム・ド・パリ』における消えたルイ 11 世」大阪大学フランス語フランス文学会研究会, 大阪大学, 2008/10/4

村上彩子「ユゴー『東方詩集』における詩的空間——詩篇の配置を通して——」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 近畿大学, 2008/11/29

【2009 年度】

〔博士前期〕

山本健二「ランボー、書き換えの技法——韻文詩から「言葉の錬金術」へ——」関西マラルメ研究会 第 12 回研究発表会, 大阪大学 21 世紀懐徳堂多目的スタジオ(イ号館内), 2010/3/26

〔博士後期〕

安部朋子「ディドロの『サロン』における批評の場所——1767 年に出品されたヴェルネの風景画の記述について——」「文学と場所」研究会, 大阪大学, 2009/7/24

安部朋子「ディドロの絵画批評『サロン』における「ジャンル画」への視線——「illusion」「錯覚/幻想」の語の使用についての一考察——」日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 聖トマス大学, 2009/11/28

廣田大地「ボードレールによるエドガー・ポー受容の金銭的側面」ポー生誕 200 周年記念日本ポー学会第 2 回大会, 慶應義塾大学, 2009/9/20

廣田大地「『悪の花』のレイアウト——空行と余白の間で」日本フランス語フランス文学会研究発表, 熊本大学, 2009/11/7

間野照世「ゾラの諸作品における出産描写の変遷」大阪大学フランス語フランス文学会第 65 回研究会, 大阪大学待兼山会館 2 階会議室, 2009/10/3

間野照代「ゾラの諸作品における出産描写に込められた意図」日本フランス語フランス文学会全国秋季大会研究発表, 熊本大学, 2009/11/7

村上彩子「ユゴー『ノートル=ダム・ド・パリ』におけるフランス王国——消えたルイ 11 世をめぐる——」日本フランス語フランス文学会全国春季大会研究発表, 中央大学, 2009/5/23

脇聡「ネルヴァルと「アルチスト」誌——1844 年から 1848 年を中心に——」大阪大学フランス語フランス文学会第 66 回研究会, 大阪大学待兼山会館 2 階会議室, 2010/3/6

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

[博士後期]

足立和彦<翻訳(仏訳)> “« Prière devant la statue de Maupassant » in *Récits de France* (1909) par Nagai Kafū”
L'Angélu, bulletin de l'Association des amis de Guy de Maupassant, 17(décembre 2007- janvier 2008, Marseille),
pp. 20-24, 2008/7

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:1名 大学院:2名 (計3名)

2009年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度~2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

林千宏 博士後期課程、大谷大学文学部国際文化学科、任期制助教、2009/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度~2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2008年度:0名 2009年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008年度:0名 2009年度:0名

9. 刊行物

2009年度 *GALLIA*(機関誌:大阪大学フランス語フランス文学会) n°49

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会(第66回)(国内学会) 2010年3月6日

Bénédicte Gorrillot 講演会 « La poésie contemporaine est-elle illisible ? » (講演会) 2009年10月26日

大阪大学フランス語フランス文学会(第65回)(国内学会) 2009年10月3日

関口涼子講演会「フランス語/日本語:二つの言語の間で書く」(講演会) 2009年7月13日

Pierre-Edmond Robert 講演会 « La littérature en français, langue étrangère : histoire et périodisation, genres et textes »(講演会) 2009年5月7日

大阪大学フランス語フランス文学会(第 64 回)(国内学会)	2009 年 3 月 7 日
Luc Lang 講演会 « Autobiographie et autofiction. Autour de <i>Les Indiens et 11 septembre mon amour</i> » (講演会)	2008 年 10 月 27 日
大阪大学フランス語フランス文学会(第 63 回)(国内学会)	2008 年 10 月 4 日
Jean Echenoz 講演会 « Autour de <i>Ravel</i> » (講演会)	2008 年 4 月 21 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 和田 章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より現職。専攻:フランス文学。

1-1. 論文

和田章男 「ジャン・ジオノと環境文学——『世界の歌』を中心に——」『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究』(人文・社会科学振興プロジェクト研究事業), 日本学術振興会, pp. 82-87, 2009/3

1-2. 著書

Wada, Akio, *Index général des Cahiers de brouillon de Marcel Proust*, 大阪大学文学研究科, 134p., 2009/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男 「バルザック、フローベール——作品の生成と解釈の問題(書評)」『Cahier』(日本フランス語フランス文学会), 3, pp. 17-19, 2009/3

1-4. 口頭発表

和田章男 「プルースト草稿帳の作家たち——統計的分析の試み」関西プルースト研究会, 京都大学, 2009/12

和田章男 「エラスムス・ムンドゥスに見る知の拠点形成と国際交流」ITP コロキウム: アジアプログラムの意義と方法をめぐって, 神戸大学人文学研究科, 2009/7(『東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム』pp. 60-63, 2010/1)

Wada, Akio, “L’apparition des noms réels dans les Cahiers de Proust” プルースト国際シンポジウム:Proust en son temps : Contextes culturels d’une genèse romanesque, 東京日仏会館, 2009/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006 年度～2008 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 和田章男

課題番号: 18520202

研究題目: プルースト草稿資料における固有名の調査および索引作成

研究経費: 2008 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

大阪大学文学研究科がマイクロフィルムの形で所蔵しているプルースト草稿資料のうち、75 冊の草稿帳(カイエ)に現れるすべての固有名詞(人名、地名、作品名)を調査し、総合索引を作成することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ブルースト研究会・世話人	2006年4月～現在に至る
関西ブルースト研究会・世話人	2005年9月～現在に至る

2. 山上 浩嗣 准教授

1966年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位修得退学。パリ第4=ソルボンヌ大学博士(2010年2月)。東京大学助手、関西学院大学専任講師、同准教授、同教授を経て、2010年より現職。専攻:フランス文学・思想。

2-1. 論文

山上浩嗣「＜相反するもの同士の不可能な結婚＞——ミシェル・トゥルニエ『ガスパール、メルキオール、バルタザール』における＜聖体＞のパラドクス」『関西学院大学社会学部紀要』107, 関西学院大学社会学部, pp. 125-141, 2009/3

2-2. 著書

Yamajo, Hirotsugu, *Pascal et la vie terrestre. Epistémologie, ontologie et axiologie du “corps” dans son apologétique*, Thèse de doctorat présentée et soutenue à l'Université Paris-Sorbonne, 418p., 2010/2

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山上浩嗣(翻訳), ブリュノ・パンシャール「メモリアル、神秘をめぐるブレイズ・パスカルとの対話」『形而上学的探究——現代フランス哲学(パンシャール教授来日講演録)』日本大学哲学研究室, pp. 51-65, 2009/11

2-4. 口頭発表

山上浩嗣「英語の普遍語化がもたらすもの」関西学院大学言語コミュニケーション文化学会シンポジウム:コクゴ・エイゴ・言語共同体の未来——水村美苗『日本語が亡びるとき』をめぐって, 関西学院大学言語コミュニケーション文化学会, 2009/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会関西支部会・実行委員	2010年7月～現在に至る
日本フランス語フランス文学会関西支部会・学会誌編集委員	2007年7月～2009年6月
日本フランス語フランス文学会・学会誌編集委員	2007年5月～2011年4月

3. ディソン アニエス 外国人教師

ブザンソン大学、パリ第四大学にて言語学、文学を学ぶ。近代文学の教員免許、記号学・言語学博士。パリの言語学研究所(BELC)に勤めた後、イタリア、モロッコ、日本で教鞭をとる。1982年より現職。専攻:フランス文学・語学。

3-1. 論文

DISSON, Agnes, “Caramboles : Alexander Dickow” *Cahier Critique de Poésie*, 18, CIPM Marseille, p. 148, 2009/10

DISSON, Agnes, “Nouvelle Histoire, autre roman : le détail, le corps, la langue” *Ecritures Contemporaines*, (Collection La Revue des Lettres Modernes), 10, Minard, pp. 73-92, 2009/10

DISSON, Agnes, “Blancheur de Nathalie Quintane” Dominique Viart *Les Ecritures Blanches*, Presses Universitaires de Saint-Etienne, pp. 279-284, 2009/6

DISSON, Agnes, “L'estomac des poulpes est étonnant : Pierre Alferi” *CCP (Cahier Critique de Poésie)*, (CipM (Centre international de poésie Marseille)), 17, Farrago, p. 259, 2009/2

3-2. 著書

DISSON, Agnes(共著), *Les Écritures Blanches*, Presses Universitaires de Saint-Etienne, pp. 279-284, 2009/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

DISSON, Agnes, “Jacques Roubaud : Kamo no Chômei, Saigyô, Shinkei et quelques autres” Colloque international “D’après le Japon”, パリ第8大学、ENS, Ecole Normale Supérieure, Paris, 2010/2

DISSON, Agnes, “Objets minimaux, les cinépoèmes de Pierre Alferi” Colloque international “Les liens du peu”, 筑波大学比較市民社会・国家・文化特別プロジェクト, 筑波大学, 2008/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会関西支部・特別編集委員

2007年6月～現在に至る

2-19 英語学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 4 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：大庭 幸男、岡田 禎之、加藤 正治、神山 孝夫

助教：吉本(樺沢)真由美

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
58	2	12	0	0	0	1	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	10	3	1	1	1
'09	13	2	1	0	1
小計	23	5	2	1	2

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

大学院に関する目標は、(1)生成文法や意味論、機能文法、語用論、言語変化論、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2)修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3)国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1)統語論、意味論、機能文法、語用論、音声学、言語変化論、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2)卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書けるように教育・指導すること、(3)中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導することである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究室や授業形態等に工夫を行うことや、研究室の活動報告書を兼ねている HLC News を刊行し、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状

況等の情報を学部卒業生、大学院修了生に送付することも目標としている。

2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を刊行し、国内外の関係者・大学等に合わせて約 450 部を送付する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。また、2009 年度秋には日本英語学会の第 27 回大会も開催する。

3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

学部では、学校文法、生成文法理論、機能文法理論、意味論、語用論関係の講義と演習のほか卒業論文演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を刊行し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告をした。

2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 17 本、口頭発表が 24 本と活発に行われた。OUPEL についても予定通り刊行し、国内外の研究者、大学図書館などに送付した。また、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」も当初の予定通りに開催し、2009 年秋には日本英語学会第 27 回大会を開催し、550 名を超える参加者を迎え、盛会であった。

3. 社会連携

教室の HP は逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会、関西言語学会などの各種学会の理事、編集委員、運営委員等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

教員・大学院生の研究活動は活発に行われ、研究会や学会の開催も予定通り行われた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会、関西言語学会などの各種学会の理事、編集委員、運営委員等の職

務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	0	1
'09	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

南佑亮 “A Cognitive Exploration of English *Tough* Construction and Related Phenomena” 2009/3

主査：大庭幸男 副査：加藤正治、神山孝夫、岡田禎之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(0)	2(1)	3(0)	0(0)	0(0)	8(1)
'09	6(1)	1(1)	2(0)	0(0)	0(0)	9(2)
計	9(1)	3(2)	5(0)	0(0)	0(0)	17(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	9	6	1	0	0	16
'09	1	5	2	0	0	8
計	10	11	3	0	0	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

Imanishi, Yusuke “An Ergative Approach to Dative Subject Constructions in Japanese and Its Consequences,” *OUPEL* 13 (大阪大学英語学研究室), 2009/3.

Honda, Takahiro “The Transitive Light Verb in Passive Constructions: A Minimalist Perspective,” *OUPEL* 13 (大阪大学英語学研究室), 2009/3.

〔博士後期〕

Ito, Chizuru and Rui Pedro Chaves, “Apparent Non-Constituent Coordination in Japanese,” *Proceedings of the 15th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar*, pp.95–115, 2008/7/29.

岩橋一樹「形容詞の多義性とメタファー表現に関する一考察」*KLS* 28 (関西言語学会), pp.283–292, 2008/6/7.

篠原弘樹「*it*-Cleft 構文[it be X that Y]: *it* が X に生起不可の理由」*KLS* 28 (関西言語学会), pp. 207–216. 2008/6/7.

南佑亮「Easy 型形容詞を述語とする Tough 構文の逸脱事例について」『人文研究』第 39 号 (大阪医科大学), pp. 29–43, 2008/3/31.

吉本真由美「比較構文における等位構造について」『待兼山論叢』第 42 号(大阪大学文学会), pp. 52–65, 2008/12/25.

Yoshimoto, Mayumi “On Clausal Comparatives: A Solution to Problems of a Movement Analysis.” *OUPEL* 13, 2009/3.

【2009年度】

〔博士前期〕

Shimamura, Koji “EPP as Selectional T-feature Satisfaction and Dative Subject Construction in Japanese,” *JELS* 27(日本英語学会), pp. 237-246, 2010/3/10.

Shimamura, Koji “Movement to SpecT and Its Consequences on the Interfaces,” *OUPEL* 14 (大阪大学英語学研究室), pp.41-85, 2010/3.

Yamaguchi, Maiko “On the Interpretation of Contextually Ameliorated Floating Quantifiers,” *OUPEL* 14 (大阪大学英語学研究室), pp.87-127, 2010/3.

〔博士後期〕

Honda, Takahiro “Accusative Case in the Passive,” *English Linguistics* 26, pp. 33-66, 2009/6

本田隆裕「受動文の統語構造と他動的軽動詞 *v** について」*KLS* 29 (関西言語学会), pp.259-269, 2009/6/6.

本田隆裕「前置詞句の構造と擬似受動文について」『日本英文学会 第 81 回大会 Proceedings』, pp. 140-142, 2009/9/20.

Honda, Takahiro “SPEC-T in Passive Constructions,” *JELS* 27(日本英語学会), pp.51-60, 2010/3/10.

村田和久「完了表現の BE/HAVE の生起条件と AGREE 理論」『待兼山論叢』43 (大阪大学文学会), pp. 79–93, 2009/12/25.

村田和久「助動詞選択と非対格性」*JELS* 27(日本英語学会), pp.149-156, 2010/3/10.

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

今西祐介 “Feature Inheritance Far Downwards? – When is it possible?” Generative Lyceum, 関西学院大学(大阪梅田キャンパス), 2008/8/25.

今西祐介 “Two Types of Dative Subject Constructions in Japanese and MULTIPLE AGREE,” 日本英語学会第 26 回大会, 筑波大学, 2008/11/16.

Honda, Takahiro “On Passive of the Double Object Construction,” ELSJ International Spring Forum 2008(第 1 回日本英語学会国際春季フォーラム), Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2008/4/27.

本田隆裕「受動文の統語構造と他動的軽動詞 *v** について」『関西言語学会第 33 回大会』大阪樟蔭女子大学, 2008/6/8.

Honda, Takahiro 「フェイズ理論における前置詞残留の分析」 The Tenth Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences(言語科学会第 10 回年次国際大会)University of Shizuoka, Japan, 2008/7/13.

[博士後期]

Ito, Chizuru “Argument Unification in the Quasi-Existential Construction,” The 18th International Congress of Linguist, Soul, Korea, 2008/7/24.

Ito, Chizuru and Rui Pedro Chaves “Apparent Non-Constituent Coordination in Japanese,” The 15th International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar, Keihanna, Japan, 2008/7/28.

岩橋一樹「感覚形容詞の語彙的意味と語用論的意味の境界をめぐって——義化と演繹的推論の観点からなし——」関西言語学会第 33 回大会, 大阪樟蔭女子大学, 2008/6/8.

岩橋一樹「メタファー表現の創造性は何に起因するのか——関連性理論と認知意味論の関わりを通して——」日本語用論学会第 11 回大会, 松山大学, 2008/12/21.

黒川尚彦 「vice versa のコード化された意味とは何か？」日本英語学会第 26 回大会, 筑波大学, 2008/11/15.

篠原弘樹「*it*-Cleft 構文[it be X that Y] ——修辭的用法と拡張——」第 33 回関西言語学会, 大阪樟蔭女子大学, 2008/6/8.

Tanaka, Eri and Yusuke Minami “A New Perspective on Transitive-Unergative Alternation in English,” ELSJ International Spring Forum 2008, Tokyo University of Foreign Studies, Japan, 2008/4/27.

Minami, Yusuke “A Grammar of ‘Success’ and ‘Failure’: Their Linguistic Manifestations,” Language, Communication and Cognition, University of Brighton, 2008/8/5.

Yoshimoto, Keisuke “Irrealis Mood and the Distribution of Embedded Null Subjects,” 13th Essex Graduate Conference in Linguistics, University of Essex, UK, 2008/5/20.

Chatsiou, Aikaterini and Keisuke Yoshimoto “Computational Tools for Natural Language Parsing and Generation,” 13th Essex Graduate Conference in Linguistics, University of Essex, UK, 2008/5/20.

Yoshimoto, Keisuke “Arguing against Backward Control Analyses of Japanese *Tokoro*-clauses,” poster presented at the 35th Incontro di Grammatica Generativa, University of Siena, Italy, 2009/2/26-28.

【2009 年度】

[博士前期]

嶋村貢司 “On Elimination of EPP: EPP as Tense Feature, and Movement for Semantic Considerations,” 関西言語学会第 34 回大会, 神戸松蔭女子学院大学, 2009/6/6.

嶋村貢司 “EPP as Selectional T-Feature Satisfaction and Dative Subject Construction in Japanese,” 日本英語学会第 27 回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2009/11/14.

嶋村貢司 “EPP as Concatenate under T-Feature and Dative Subject Construction in Japanese,” Generative Lyceum 例会, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス, 2010/1/23.

[博士後期]

Komoto, Naoko “Counterfactual Reading of “Epistemic” Modals in Japanese,” The 25th Northwest Linguistics Conference, University of British Columbia, 2009/4/26.

本田隆裕 「前置詞句の構造と擬似受動文について」第 81 回日本英文学会全国大会, 東京大学駒場キャンパス, 2009/5/31.

本田隆裕 “SPEC-T in Passive Constructions” 日本英語学会第 27 回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2009/11/15.

村田和久「助動詞選択と非対格性」日本英語学会第 27 回大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2009/11/14.

吉本真由美 “Japanese Comparatives Revisited,” Generative Lyceum 例会, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス, 2009/4/25.

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:4名 大学院:3名 (計7名)

2009年度 学部:3名 大学院:3名 (計6名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

森 英樹 博士後期課程 岐阜聖徳学園大学 講師 2008/4

南 佑亮 博士後期課程 九州産業大学 講師 2009/4

吉本真由美 博士後期課程 大阪大学 助教 2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5名

2008年度:4名 2009年度:1名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 4名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2008年度:0名 2009年度:0名

9. 刊行物

2008年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 13

OLR (Osaka Literary Review) No. 47

2009年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 14

OLR (Osaka Literary Review) No. 48

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本英語学会全国大会第27回大会

2009年11月14, 15日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会41回大会

2008年11月8日

阪大英文学会42回大会

2009年11月7日

大阪言語研究会第159回例会(第78回待兼山ことばの会)

2008年5月17日

第79回待兼山ことばの会(大阪言語研究会第160回例会)

2008年7月27日

第80回待兼山ことばの会(大阪言語研究会第161回例会)

2008年8月1日

大阪言語研究会第 162 回例会 (第 81 回待兼山ことばの会)	2008 年 9 月 20 日
大阪言語研究会第 163 回例会 (第 82 回待兼山ことばの会)	2008 年 12 月 27 日
第 83 回待兼山ことばの会 (大阪言語研究会第 164 回例会)	2009 年 8 月 8 日
大阪言語研究会第 165 回例会 (第 84 回待兼山ことばの会)	2009 年 9 月 19 日
大阪言語研究会第 166 回例会 (第 85 回待兼山ことばの会)	2009 年 12 月 19 日

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 大庭 幸男 教授

1949年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999年4月より現職。専攻:英語学。

1-1. 論文

大庭幸男「結果構文の動詞と結果述語の意味特性について」『玉井暉教授退職記念論文集』英宝社, pp. 127-138, 2010/3

1-2. 著書

Oba, Yukio, Okada, Sadayuki(共編著), *Osaka University Papers of English Linguistics*, Vol.14, 150p., 2010/3

大庭幸男『多重 WH 疑問文の意味と構造について』(平成 21 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書, 大阪大学大学院文学研究科), 35p., 2010/3

Oba, Yukio, Okada, Sadayuki(共編著), *Osaka University Papers of English Linguistics*, Vol.13, 147p., 2009/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 大阪大学共通教育賞(2006 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

大庭幸男 市河賞, 語学教育研究所, 1997/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006 年度～2008 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男

課題番号: 18530381

研究題目: インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

英語の結果構文については、これまでさまざまな理論的な枠組みで研究されてきた。しかし、そこで議論されている例を見てみると、ごく少数のタイプの動詞や結果述語の例に限られており、結果構文の全体像が把握しにくい。そこで、本研究では、実際の言語使用状況をインターネットによって調査し、次の 2 点を明らかにすることを目的とする。

(1)結果構文に生起する動詞の種類と意味的特徴を明らかにする。

(2)結果構文に生起する動詞と結果句の選択制限を明らかにする。

特に、他動詞と同様に非対格動詞と非能格動詞の結果構文の使用状況についてはこれまであまり研究されていないので、具体的にどのような動詞が結果構文に用いられているかを実際の言語使用データにあたって調査を行う。

1-6-2. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男

課題番号: 21520507

研究題目: 言語の多様性に対する普遍文法理論の妥当性の検証

研究経費: 2009年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究の目的は次の通りである。

(1) 普遍文法の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」などの理論を正確に理解・把握した上で、これらの理論がどのような概念的な問題点を有しているかについて検討する。

(2) 「純粹のWH疑問文」について、言語の多様性に関わる言語事実を通言語的に調査し、類型化を行う。具体的には、「純粹のWH疑問文」の類型化において、WH句の移動が存在するかしないか、複数のWH句が移動できるかできないか、文末の疑問終助詞が存在するかしないか、などについて言語タイプごとに調査・整理する。

(3) WH疑問文に関連する構文、例えば、「問い返しの疑問文」や「多重WH疑問文」に関して、さまざまな言語を調査・研究し、類型化を行う。具体的には、WH句の移動が随意的になる英語タイプの言語、WH句が移動しない日本語タイプの言語、WH句が義務的に移動するスラブ語タイプの言語、その他の構文をとる中国語タイプの言語に類型化し、その特性を明らかにする。

(4) 最後に、普遍文法の「原理とパラメーターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」がこれらの通言語的多様性をどのように、そして、どの程度まで説明するかを検討して、その問題点を提示する。その後、先行研究で提案された理論や分析が普遍文法理論に如何に組み込まれるかについて考察し、より妥当性の高い理論の構築を試みる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学英文学会・会長	2009年11月～現在に至る
日本英文学会 関西支部・編集委員会委員	2009年4月～現在に至る
日本英語学会・広報委員会委員長	2009年4月～現在に至る
日本英文学会・理事	2008年6月～2009年3月
関西言語学会・大会実行委員・運営委員	2008年4月～現在に至る
日本英文学会・監事	2007年4月～2008年6月
財団法人 語学教育研究所・「市河賞」審査員	2007年4月～現在に至る
日本英語学会・理事	2005年12月～2009年11月
日本英語学会・評議員	2004年4月～現在に至る

2. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻:英語学。

2-1. 論文

岡田禎之 「概念拡張とテキストの結束関係」『玉井暉教授退職記念論文集』英宝社, pp. 139-149, 2010/3

岡田禎之 「参加者の概念拡張と比較文形成」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明『内』と「外」の言語学』開拓社, pp. 23-53, 2009/10

Okada, Sadayuki, "Comparative Standards and the Feasibility of Conceptual Expansion" *Cognitive Linguistics*, (International Cognitive Linguistics Association), 20-2, Mouton de Gruyter, pp. 395-423, 2009/5

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 第37回市河賞, 財団法人 語学教育研究所, 2003/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号: 19520420

研究題目: 文内参加者の概念拡張可能性

研究経費: 2008年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

文内参加者が、字句通りの意味解釈の範囲を超えて、概念拡張を起こす場合を観察し、どのような条件が整った場合に概念拡張行為が遂行されやすくなるのか、という問題を比較文の通言語的な調査を端緒として、様々な言語環境に関して調査を行っている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

阪大英文学会・幹事	2009年11月～現在に至る
阪大英文学会・監査	2007年11月～2009年11月
日本英文学会・編集委員会委員	2007年4月～2010年3月
日本英文学会関西支部・編集委員会委員	2007年4月～2010年3月

3. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979年)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

3-1. 論文

加藤正治 『欽定訳聖書』にみられる動詞第二位現象について』『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学文学会), 43, pp. 69-90, 2009/12

加藤正治 「場所句倒置に関する短評」『英米研究』(大阪大学 英米学会), 33, pp. 1-10, 2009/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・評議員

2006年4月～現在に至る

4. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:印欧諸語の歴史と印欧語比較言語学、音声学。

4-1. 論文

神山孝夫 「Laryngales et schwa indogermanicum」大阪大学文学会(編)『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学文学会), 43, pp. 91-125, 2009/12

4-2. 著書

神山孝夫 『脱・日本語なまり:英語(+α)実践音声学』大阪大学出版会, 221p., 2008/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

神山孝夫 「ラリンガルと印欧語のシュワー」The 18th Indo-European Colloquium of Japan, 大阪言語研究会, 大阪大学, 2009/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪言語研究会・世話人

2008年1月～現在に至る

5. 吉本 真由美 助教

1979年生。2008年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(英語学専攻)単位修得退学。文学修士(大阪大学、2005年)。2010年4月より現職。専攻:英語学。

5-1. 論文

Yoshimoto, Mayumi, “On Clausal Comparatives: A Solution to Some Problems of Movement Analysis,” in Yukio Oba and Sadayuki Okada (eds.), *Osaka University Papers in English Linguistics* 13, English Linguistics, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 119–141, 2009/3

吉本真由美 「比較構文における等位構造について」『待兼山論叢』(大阪大学文学会) 42, 大阪大学文学研究科, pp. 51–65, 2008/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Yoshimoto, Mayumi, “Japanese Comparatives Revisited”, Generative Lyceum, 2009/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-20 日本語学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 5 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：工藤真由美、青木 直子、石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己

助教：齊藤 美穂

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
35	12	15	0	1	11	6	4	1

※うち留学生 26 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	7	4	4	16	5
'09	6	6	2	6	3
小計	13	10	6	22	8

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の中間発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 研究科内に新専攻(とくに言語生態論コース)が設置されたことにあわせて、これまでの授業内容を見直すと同時に、開講科目をより有機的に組織する。
3. 大学院については、各種学会で口頭発表を行い、また査読雑誌に論文を投稿するための個別指導を充実させる。
4. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。
5. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、調音・音声表現のトレーニング、

教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。

6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、日本語研究界に専門分野の研究成果を発信する。

3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に対応することなどをおして、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語習得支援活動、初等・中等教育における外国人児童・生徒への日本語教育、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

設定した目標を達成すべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をとおして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 開講科目について、配当年次を明示する等により、より有機的に組織した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学や日本語教育学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行う機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、フィールド調査(2008年度、大学院のみ)やコーパスの作成、言語データの分析、調音・音声表現のトレーニング(2008年度のみ)、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を2年とも刊行し、研究成果を学界に発信した。

3. 社会連携

1. 高校生への授業等を行い、研究成果を社会に広めることにつとめた。
2. 地域の外国人の日本語習得支援活動、初等・中等教育における外国人児童・生徒への日本語教育、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力した。

3. その他、学会の事務局や委員を積極的に引き受けた。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。とくに今期は、多数の課程博士号と論文博士号が授与された。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができている。

以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

3. 社会連携

研究成果の社会への発信にやや不十分な点があるものの、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと思われる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	16	8	24
'09	6	0	6
計	22	8	30

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

佐竹久仁子	「日本語のジェンダー規範形成の道筋」 2008/9 主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
範玉梅	「新世代中国人の日本留学——なぜ彼らは神様の子になったのか」 2008/9 主査：青木直子 副査：真田信治、石井正彦
方允炯	「空間を表す形式名詞の意味と機能」 2008/9 主査：工藤真由美 副査：田野村忠温、渋谷勝己
黄永熙	「韓国高年層日本語の実態からみる第二言語の保持」 2008/9 主査：渋谷勝己 副査：真田信治、土岐哲
前田達朗	「「喪失」と「獲得」をめぐる言語意識 「在日」を事例に」 2008/9 主査：真田信治 副査：青木直子、杉原達
八木真奈美	「定住外国人とその社会的文脈の関係から導きだす『見えない生活者』の再構築——リフレクシブ・エスノグラフィーという手法を用いて——」 2008/9 主査：青木直子 副査：真田信治、渋谷勝己
尹英和	「日本語のリズム及びリズム単位に関する基礎的考察とその応用——無意味語による調査と「日本語話し言葉コーパス」を利用して——」 2008/9

- 主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦
 岡田祥平 「日本語音声言語の記述的研究——『日本語話し言葉コーパス』による再検討——」 2009/3
 主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦
 蔡珮菁 「漢語形容動詞を前要素とする臨時的な複合語に関する研究」 2009/3
 主査：石井正彦 副査：土岐哲、真田信治
 武田佳子 「大阪市南部における方言アクセントの変遷」 2009/3
 主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
 中山亜紀子 「『日本語を話す私』と自分らしさ——韓国人留学生のライフストーリー」 2009/3
 主査：青木直子 副査：真田信治、杉原達
 濱中誠 「肥筑方言における「サ詠嘆法」の記述的研究」 2009/3
 主査：真田信治 副査：工藤真由美、渋谷勝己
 牧野由紀子 「対称的な社会関係における行為指示——ニュータウン自治会での作業場面から見る——」 2009/3
 主査：真田信治 副査：青木直子、渋谷勝己
 蓑川恵理子 「商品名の命名メカニズムの研究」 2009/3
 主査：石井正彦 副査：真田信治、土岐哲
 山岸智子 「日本語母語話者の撥音に関する知覚の研究——首都圏方言話者と近畿方言話者——」 2009/3
 主査：土岐哲 副査：真田信治、石井正彦

LOKUGAMAGE SAMANTHIKA

- 「日本語を第2言語とする日本語教師——スリランカの3人の教師のケース・スタディー」 2009/3
 主査：青木直子 副査：工藤真由美、石井正彦
 姜炅完 「新聞コーパスを用いた「単語の社会的コノテーション」についての研究」 2009/9
 主査：石井正彦 副査：青木直子、田野村忠温
 金愛蘭 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」 2009/9
 主査：石井正彦 副査：田野村忠温、蜂矢真郷
 齊藤美穂 「現代日本語における接続助辞ガ・ケレドモの意味・機能と使用実態」 2009/9
 主査：工藤真由美 副査：渋谷勝己、田野村忠温
 周萍 「日本に定住する中国人はなぜ地域の日本語教室をやめるのか」 2010/3
 主査：青木直子 副査：石井正彦、渋谷勝己
 孫榮爽 「マルチメディア・コーパスを用いた表現行動の計量的研究」 2010/3
 主査：石井正彦 副査：青木直子、渋谷勝己
 中井好男 「中国人就学生の学習動機の変遷に関する理論と日本語学習の実態」 2010/3
 主査：青木直子 副査：渋谷勝己、石井正彦

【論文博士】

- 許晃会 「日本における命名の記述的研究」 2008/5
 主査：真田信治 副査：石井正彦、土岐哲
 山下明昭 「第二言語習得支援の立場——社会言語学と認知言語学からのアプローチ——」 2008/5
 主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
 松田陽子 「オーストラリア多言語教育政策の社会言語学的研究」 2008/7
 主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己
 吉岡泰夫 「対人コミュニケーションの社会言語学的研究」 2008/11
 主査：真田信治 副査：土岐哲、石井正彦
 札幌和男 「法廷における方言——「臨床ことば学」の立場から——」 2008/12
 主査：真田信治 副査：青木直子、渋谷勝己

- 朱廣興 「文法認知と語境認知——印欧語的な文法観からの脱却をめざして——」 2009/3
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己、水野義道(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科)
- 土岐哲 「日本語教育からの音声研究」 2009/3
主査：真田信治 副査：工藤真由美、青木直子
- 中井精一 「都市言語の形成と地域特性——近畿中央部における待遇表現法に焦点をあてて——」 2009/3
主査：真田信治 副査：土岐哲、渋谷勝己

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	4(4)	0(0)	8(6)	0(0)	5(4)	17(14)
'09	6(6)	0(0)	7(5)	0(0)	1(0)	14(11)
計	10(10)	0(0)	15(11)	0(0)	6(4)	31(25)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	5	7	2	0	0	14
'09	2	7	0	0	0	9
計	7	14	2	0	0	23

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士前期〕

平塚雄亮「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ(カ)」『日本語文法』9-1、pp.71-87、2009/3

〔博士後期〕

蔡珮菁「臨時的な複合名詞を作る2字漢語形容動詞について」『阪大日本語研究』21、pp.43-60、2009/2

齊藤美穂「副詞に接続するガ・ケレドモの用法」『阪大日本語研究』21、pp.129-150、2009/2

周萍「地域の日本語教室をやめた中国人学習者のケース・スタディ」『阪大日本語研究』21、pp.61-78、2009/2

白岩広行「福島県郡山市方言の推量・意志表現バイ——若年層における確認要求表現への変化——」『待兼山論叢(日本学篇)』42、pp.37-55、2008/12

白岩広行「福島方言の上昇下降調——文末イントネーションの意味記述——」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会)、pp.157-173、2008/12

田川恭識「熊本方言談話データベースの構築」『国文研究』53(熊本県立大学日本語日本文学会)、pp.110(11)-101(20)、2008/5

田川恭識「熊本一型アクセント方言におけるパラ言語情報の表現と知覚」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会)、pp.175-192、2008/12

武田佳子「大阪方言アクセントの変遷に関する一考察——高起無核化現象を中心に——」真田信治編『山口幸洋博士

- 古希記念論文集 方言研究の前衛』(桂書房)、pp.391-411、2008/9
- 武田佳子「大阪方言における格助詞「から」の音調変化についての一考察」『音声言語VI』(近畿音声言語研究会)、pp.139-156、2008/12
- 武田佳子「大阪方言アクセントにおける二拍5類語の現在」『阪大日本語研究』21、pp.109-127、2009/2
- 中井好男「中国人就学生の学習動機の変化のプロセスとそれに関わる要因」『阪大日本語研究』21、pp.151-181、2009/2
- 河在必「類義形式「トキ」「コロ」の分析——時間性と空間性の観点から——」『日本文化学報』39(韓国日本文化学会)、pp.21-40、2008/11
- 朴秀娟「テキストタイプと文法的意味・機能——「あまり」「あんまり」を中心に——」『日本語文化研究』8(学苑出版社)、pp.394-403、2008/5
- 牧野由紀子「行為指示談話における直接形式の使用——自治会活動での一事例——」『日本語科学』24、pp.5-29、2008/10
- 牧野由紀子「「大阪方言の命令形」に後接する終助詞ヤ・ナ」『阪大日本語研究』21、pp.79-108、2009/2
- 養川恵理子「商品名の命名メカニズムと再命名——家電製品名の場合——」『計量国語学』26-7、pp.215-240、2008/12
- 【2009年度】
- 〔博士後期〕
- 姜昊完「単語の社会的コノテーション——新聞コーパスを用いた「現代人」の計量的分析——」『日本語文学』69(韓国日語日文学会)、2009/5
- 姜昊完「社会的コノテーションの多義性「普通の人」を例に」『計量国語学』27-2、pp.35-59、2009/9
- 石井正彦・姜昊完「単語の社会的コノテーションとコーパス——「現代人」を例に——」『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発IV』(特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班)、pp.83-92、2010/3
- 金昴京「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅——語彙の変化に注目して——」『日語日文学研究』71(韓国日語日文学会)pp.13-28、2009/11
- 金昴京「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅——流暢さの変化に注目して——」『阪大日本語研究』22、pp.91-111、2010/2
- 周萍「日本に定住する中国人はなぜ地域の日本語教室をやめるのか——学習者の背後にある社会的環境からその原因を見る——」『阪大日本語研究』22、pp.143-171、2010/2
- 白岩広行・森田耕平・王子田笑子・工藤真由美「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触」『阪大日本語研究』22、pp.11-41、2010/2
- 孫栄爽「マルチメディア・コーパスの構築と活用——表現行動の計量的研究のために——」『阪大日本語研究』22、pp.65-90、2010/2
- 孫栄爽「擬音語・擬態語と身振り——テレビ放送のマルチメディア・コーパスによる計量的分析——」『計量国語学』27-41、pp.31-153、2010/3
- 寺尾綾「文末形式の運用とスタイル切り換え——日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから——」『阪大日本語研究』22、pp.113-142、2010/2
- 河在必「動詞の条件形の一用法——典型的な条件を表さない条件句「今思えば」について——」『日語日文学研究』69-1(韓国日語日文学会)、pp.469-485、2009/5
- 河在必「思考動詞の条件形「思うと」に関する一考察」『待兼山論叢 日本学篇』43、pp.39-54、2009/12
- 朴秀娟「否定とも肯定とも共起する副詞「とても」について——否定用法に見られる「条件づけ」を中心に——」『阪大日本語研究』22、pp.43-63、2010/2
- 平塚雄亮「福岡市若年層方言のデハナイ(カ)相当形式に見られる方言接触」『待兼山論叢 日本学篇』43、pp.53-70、2009/12

(2)口頭発表

【2008年度】

〔博士前期〕

平塚雄亮・原田走一郎「鹿児島県薩摩川内市方言における文末詞センについて」日本語学会 2008年度秋季大会、岩手大

学(岩手県盛岡市)、2008/11/3

[博士後期]

金愛蘭・桐生りか・近藤明日子・田中牧郎「「一般向け専門用語」抽出の試み——医療用語を例に——」日本語学会 2008 年度春季大会、日本大学(東京都世田谷区)、2008/5/18

周萍「地域の日本語教室をやめた中国人の学習者のケース・スタディー」第 7 回日本語教育国際研究大会、釜山外国語大学(大韓民国)、2008/7/11

白岩広行「南米沖縄系移民の言語生活 日本語・沖縄方言・現地語：3 言語接触下での暮らし」国際シンポジウム「移動とアイデンティティ——コンフリクトと新たな地平」(大阪大学・サンパウロ大学共催)、大阪大学中之島センター(大阪府北区)、2008/8/24

白岩広行「文末イントネーションの意味記述——福島方言からの試み——」土曜ことばの会例会、大阪大学(大阪府豊中市)、2008/10/11

末吉朋美「Narrative Inquiry による二人の教師の自己理解」第 7 回日本語教育国際研究大会、釜山外国語大学(大韓民国)、2008/7/11

末吉朋美「日本語学校の日本語教師の葛藤——Narrative Inquiry による教師の自己理解を通して」第 8 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、香港大学(中華人民共和国)、2008/11/8

寺尾(樋下)綾「縦断的にみた日本語学習者の文末形式の使用実態とその発達——『スタイル切り換え』という視点からの一考察——」社会言語科学会第 22 回大会、愛知大学(愛知県豊橋市)、2008/9/13

寺尾綾「中国語を母語とする日本語学習者のスタイル切り換え——デスマス/非デスマス形の使用実態とその問題点——」日本語教育学会 2008 年度秋季大会、山形大学(山形県山形市)、2008/10/12

中井好男「中国人就学生の学習動機の変化とその要因」2008 年度日本語教育学会研究集会——第 7 回——、甲南大学(兵庫県神戸市)、2008/9/20

中井好男「「作文」への学習者の気づき——教師主導型ピア・レスポンスの実践に関する一考察」2008 年度日本語教育学会 研究集会——第 11 回——、同志社女子大学(京都市上京区)、2009/3/7

河在必「動詞の条件形の一用法——典型的な条件を表さない条件句「今思えば」について——」韓国日語日文学会 2008 年度冬季国際学術大会、明知大学校人文 campus 人文大(大韓民国)、2008/12/20

朴秀娟「否定とも肯定とも共起する副詞「とても」について——「条件づけ」の観点から見た連続性——」日本語学会 2008 年度秋季大会、岩手大学(岩手県盛岡市)、2008/11/3

朴秀娟「類義形式「それほど」「そんなに」の一分析」学会創立 30 周年記念韓国日語日文学会 2008 年度冬季国際学術大会、明知大学校(大韓民国)、2008/12/20

【2009 年度】

[博士前期]

原田走一郎「九州方言の繫辞動詞」日本語文法学会第 10 回大会、学習院女子大学(東京都新宿区)、2009/10/25

脇坂真彩子「Tandem Learning という新たな学習機会の提案：概要と事例研究から」多言語化現象研究会 10 周年記念大会(第 1 回研究大会)、国立民族学博物館(大阪府吹田市)、2009/6/20

[博士後期]

金昂京「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅——語彙の変化に注目して——」韓国日語日文学会 2009 年度夏季国際学術大会、釜山大学校(韓国釜山)、2009/6/20

金昂京「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅——使用助詞の変化に注目して——」社会言語科学会第 25 回大会、慶応大学日吉キャンパス(神奈川県横浜市)、2010/3/14

周萍「日本に永住する中国人の日本語学習動機に影響を与える要因の研究——地域の日本語教室をやめた学習者を通して」多言語化現象研究会 10 周年記念研究大会(国立民族学博物館)、2009/6/20

白岩広行「福島方言の文末イントネーション——意味的な記述への視点——」第 88 回日本方言研究会研究発表会、武庫川女子大学(兵庫県西宮市)、2009/5/29

白岩広行・平塚雄亮「名詞述語に繫辞動詞は必要か——繫辞動詞の使用頻度に認められる方言差——」日本語文法学会第

10 回大会、学習院女子大学(東京都新宿区)、2009/10/25

河在必「思考活動を表す動詞「思う」の条件形に関する一考察」韓国日語日文学会 2009 年度冬季国際学術大会、仁川大学(韓国仁川)、2009/12/19

孫栄爽「終助詞ネの用法と視線行動——テレビ放送のマルチメディア・コーパスによる計量的分析——」日本語学会 2009 年度春季大会、武庫川女子大学(兵庫県西宮市)、2009/5/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008 年度】

[博士前期]

脇坂真彩子「新たな学習機会の探求—— 一二三朋子著『接触場面における共生的学習の可能性——意識面と発話内容面からの考察——』『言語文化と日本語教育』36、pp31-35、2008/11

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

2009 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2009 年度 学部 : 1 名 大学院 : 1 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008 年度～2009 年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

北澤美樹 博士前期課程、韓国国際大学、専任講師、2009/3

蔡 珮菁 博士後期課程、明道大学、助理教授、2009/8

齊藤美穂 博士後期課程、大阪大学、助教、2010/4

周 萍 博士後期課程、上海大学、専任講師、2010/11

中山亜紀子 博士後期課程、佐賀大学留学生センター、准教授、2009/4

方 允炯 博士後期課程、水原大学校、専任講師、2010/3

黄 永熙 博士後期課程、高麗大学校 BK21 中日言語文化教育研究団、POST-DOC、2009/3

前田達郎 博士後期課程、東京外国語大学、専任講師、2009/4

養川恵理子 博士後期課程、三重大学、特任講師、2009/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008 年度～2009 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2008 年度 : 1 名 2009 年度 : 2 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 2 名
その他 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3 名

2008 年度 : 2 名 2009 年度 : 1 名

9. 刊行物

『阪大日本語研究』(機関誌・年 1 回)定期刊行物

1989 年度～現在に至る

『阪大社会言語学研究ノート』(論文集・年 1 回)逐次刊行物

1999 年度～現在に至る

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

変異理論研究会(研究会)事務局

1989 年～現在に至る

土曜ことばの会(研究会)事務局

1980 年～現在に至る

日本方言研究会(研究会)事務局

2008 年～2009 年

第二言語習得研究会(研究会)事務局

2008 年～2009 年

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 工藤 眞由美 教授

1949年生。東京大学大学院人文科学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、1999年)。横浜国立大学教育学部講師、同助教授を経て、1998年4月より現職。専攻：現代日本語文法論、言語接触論。

1-1. 論文

白岩広行, 森田耕平, 工藤眞由美他「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語講座), 22, 大阪大学大学院文学研究科日本語講座, pp. 11-42, 2010/2

工藤眞由美「奥田靖雄先生の言語学——80歳の誕生日によせて——」言語学研究会(編)『ことばの科学』12, むぎ書房, pp. 9-16, 2009/3

工藤眞由美「方言の多様性から見た日本語」『人間文化』(人間文化研究機構第11回公開講演会・シンポジウム), 11, 人間文化研究機構, pp. 5-18, 2009/3

工藤眞由美「言語接触と文法的変容——日本語の多様性をめぐって——」東アジア日本学会(編)『日本文化研究』28, 東アジア日本学会, pp. 5-20, 2008/10

工藤眞由美「認識的モダリティと情報構造」北京大学日本文化研究所(編)『日本語言文化研究』8, 学苑出版社, pp. 13-20, 2008/5

1-2. 著書

工藤眞由美, 森幸一, 山東功他(共著)『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房, pp. 3-29, 2009/6

工藤眞由美, 八亀裕美(共著)『複数の日本語——方言からはじめる言語学』講談社, 205p., 2008/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

工藤眞由美「方言の多様性から見た日本語」人間文化研究機構第11回公開講演会・シンポジウム:ウチから見た日本語, ソカから見た日本語, 人間文化研究機構、国立国語研究所、有楽町朝日ホール, 2009/12

工藤眞由美 「Diversity of the Japanese Language 日本語の多様性」Osaka University Forum 2009 (Kuala Lumpur): 東南アジアにおける日本語・日本文化教育の 21 世紀的展望, 大阪大学、Ministry of Education Malaysia, Institute of Teacher Education Malaysia, 2009/11

工藤眞由美 「知覚・比喩・推定をめぐって」, アモイ大学, 2008/11

工藤眞由美 「談話の情報構造」, アモイ大学, 2008/11

工藤眞由美 「ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触とコンフリクト」国際シンポジウム: 移動とアイデンティティ——コンフリクトと新たな地平, 大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文学」, 大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文学」, 2008/8

工藤眞由美 「愛媛県宇和島方言の可能形式——努力による実現を明示する形式を中心に——」, 国語語彙史研究会, 花園大学, 2008/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 工藤眞由美

課題番号: 19320065

研究題目: 言語接触から見た日本語の多様性に関する総合的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 4,800,000 円 間接経費 1,440,000 円

研究の目的:

本研究は、日系移民社会・在外駐在日本人社会における日本語と、日本国内における諸方言を言語接触論的観点から注目するものである。海外における沖縄系移民言語調査と国内における諸方言調査について綿密な調査設計をもって臨む。また、南米の沖縄系移民社会においては急速に同化が進んでおり、とりわけ日系一世の人口は激減の一途であり、国内における諸方言消滅の危機については贅言を繰り返すまでもない喫緊的課題である。本研究はかかる危機意識をもとに、先の共同研究の創造的発展を期すべく編成されたものと位置付けられる。

1-6-2. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 工藤眞由美

課題番号: 21520470

研究題目: ボリビア日系・沖縄系移民社会における言語接触

研究経費: 2009 年度 直接経費 1,600,000 円 間接経費 480,000 円

研究の目的:

本研究は、ボリビア日系移民社会言語の実態を把握すべく、先に実施された、言語生活項目を主とした言語接触調査の分析を行うことで、単一的な日本語観に対峙する言語事実の実証を試みるものである。さらに、当該言語に関連する言語接触に関する文献調査を並行することにより、国内における言語接触研究の陥穽を補完することを目的としている。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人間文化研究機構 国立国語研究所・運営委員	2009 年 10 月～現在に至る
近畿地区大学教育研究会・運営委員(常任委員)	2008 年 4 月～現在に至る
日本学術会議・連携会員	2006 年 8 月～2008 年 7 月
人間文化研究機構国文学研究資料館・運営会議委員	2006 年 4 月～2010 年 3 月
日本言語学会・委員	2005 年 5 月～現在に至る

独立行政法人国立国語研究所・監事
日本語文法学会・評議員
日本語学会・評議員

2005年4月～2009年10月
2000年12月～現在に至る
1997年6月～現在に至る

2. 青木 直子 教授

1954年生。1983年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。PhD (Trinity College Dublin, 2003)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻:第二言語教育学。

2-1. 論文

青木直子 「学習者オートノミー、自己主導型学習、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、セルフ・アクセス」『日本語教育通信』38, 国際交流基金, 2010/3 (WEB サイト <http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/research/201003.html> で公開中)

Aoki, Naoko, & Osaka University Students (共著), “A community of practice as a space for collaborative student teacher autonomy” O’Rourke, B. & Carson, L. (eds.) *Language learner autonomy: Policy, curriculum, classroom*, Peter Lang, pp. 63-78, 2010/3

Aoki, Naoko, “Teacher anxiety revisited: A permeating sacred story” 『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 22, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1-10, 2010/2

Aoki, Naoko, “Where learner autonomy could fail a second language user: Three-level analysis of social context” Kjisik, F., Voller, P., Aoki, N. & Nakata, Y. (eds.) *Mapping the terrain of learner autonomy: Learning environments, learning communities and identities*, Tampere University Press, pp. 236-261, 2009/12

Aoki, Naoko, “A small-scale Narrative Inquiry for teacher development” Yoshida, T. et al. (eds.) *Researching language teaching and learning: An integration of practice and theory*, Peter Lang, pp. 201-213, 2009/8

Aoki, Naoko, “Defending stories and sharing one: Towards a narrative understanding of teacher autonomy” Pemberton, R., Toogood, S. & Barfield, A. (eds.) *Maintaining control: Autonomy in language learning*, Hong Kong University Press, pp. 199-216, 2009/5

青木直子 「学習者オートノミーを育てるアドバイジング」『ヨーロッパ日本語教育』(ヨーロッパ日本語教師会), 13, pp. 28-35, 2009/3

青木直子 「日本語を学ぶ人たちのオートノミーを守るために」『日本語教育』(日本語教育学会), 138, pp. 33-42, 2008/7

2-2. 著書

Kjisik, F., Voller, P., Aoki, Naoko et al. (eds.), *Mapping the terrain of learner autonomy: Learning environments, learning communities and identities*, Tampere University Press, 261p., 2009/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Aoki, Naoko, “Volunteer teachers learn to advise” The 10th Nordic Conference on Learner Autonomy in the Foreign Language Classroom, University of Bergen, University of Bergen, 2009/8

Aoki, Naoko, “Teacher anxiety revisited: A permeating sacred story” International Symposium on Culture, Discourse and Language Teaching, Institute of Foreign Languages and Applied Linguistics Studies, Zhejiang Normal University, Zhejiang Normal University, 2009/4 (発表要旨 <http://flc.zjnu.net.cn/tdc/det view.asp?lm=6&id=303>)

青木直子 『日本語ポートフォリオ』とアドバイジング」2008年度日本語教育学会研究集会第7回, 日本語教育学会, 甲南大学, 2008/9 (『日本語教育』140, p. 120, 2009/1)

青木直子「学習者オートノミーを育てるアドバイジング」第13回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, ヨーロッパ日本語教師会, チヤナツカレ・オンセキズ・マルト大学, 2008/8 (『ヨーロッパ日本語教育』13, pp. 28-35, 2009/3)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:青木直子

課題番号: 20520466

研究題目: 在日外国人の日本語学習支援ツール『日本語ポートフォリオ』を媒介とした支援者の学び

研究経費: 2008年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2009年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

在日外国人の日本語習得を支援するボランティアが、学習ツール『日本語ポートフォリオ』を使いこなせるようになるまでにはどのような過程を経るのか、その過程で必要なサポートはどのようなものかを明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

“Innovation in Language Learning and Teaching” Routledge・編集委員

2006年1月～現在に至る

3. 石井 正彦 教授

1958年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009年4月より現職。専攻:現代日本語学。

3-1. 論文

石井正彦「借用の『位相』——JST・科学技術文献情報の「ユビキタス」を例に——」『待兼山論叢 日本学篇』43, 大阪大学文学会, pp. 73-90, 2009/12

石井正彦「テレビ放送のマルチメディア・コーパス——映像・音声を利用した計量的言語使用研究の可能性——」『阪大日本語研究』21, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 1-20, 2009/2

石井正彦「(小特集「国立国語研究所の60年」)語彙・計量研究」『日本語科学』24, 国立国語研究所, pp. 117-124, 2008/10

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

石井正彦「日本語コーパス言語学の新展開」韓国日本言語文化学会 2009年度秋季国際学術シンポジウム, 韓国日本言語文化学会, 韓国・明知大学校, 2009/11

石井正彦「借りる／借りない」の最前線——JST・科学技術文献情報の「ユビキタス」を例に——(シンポジウム)日本語の外来語と

外行語, 語彙辞書研究会, エステック情報ビル, 2008/11

石井正彦 「テレビ放送のマルチメディア・コーパス」計量国語学会第52回大会, 計量国語学会, 武庫川女子大学, 2008/9(『計量国語学』26-8, p. 300, 2009/3)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石井正彦

課題番号: 18520355

研究題目: 計量的言語使用研究のためのマルチメディア・コーパスの開発に関する基礎的研究

研究経費: 2008年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

実際の言語使用場面を録画・記録した「映像・音声データ」と、そこで発話された音声言語や表示された文字言語を記録した「言語データ」とを関係づける(リンクすることによって、相互に双方向から検索することのできる「マルチメディア・コーパス」を試作し、そうしたマルチメディア・コーパスを利用すれば、言語使用の研究においても、大量データを使用した計量的・実証的な研究が可能になることを明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員 2009年7月～現在に至る

日本語学会・大会企画運営委員 2005年7月～2008年6月

4. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学。

4-1. 論文

田野村忠温 「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」『人工知能学会誌』24-5, 人工知能学会, pp. 647-655, 2009/9

田野村忠温 「サ変動詞の活用のゆれについて・続——大規模な電子資料の利用による分析の精密化——」『日本語科学』25, 国立国語研究所, pp. 91-103, 2009/4

田野村忠温 「日本語研究の観点からのサーチエンジンの評価・続——検索ヒット件数の時間変動のその後と Web 文書量の推計の修正——」『計量国語学』26-8, 計量国語学会, pp. 290-294, 2009/3

田野村忠温 「文法の中核と周辺——コーパスが観察可能にする文法的一面——」田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦(共著)『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅲ』, 特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, pp. 154-165, 2009/3

田野村忠温 「「代わり」の分析試論——巨大な Web コーパスに基づく考察——」田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦(共著)『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅲ』, 特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, pp. 137-153, 2009/3

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出——分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作——」『阪大日本語研究』21, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 21-41, 2009/2

田野村忠温 「コーパスと文法研究」『国文学 解釈と鑑賞』74-1, 至文堂, pp. 79-87, 2009/1

田野村忠温 「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」『待兼山論叢』42(文化動態論篇), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 55-76, 2008/12

田野村忠温 「複合辞の本性について——その構成と単位性——」児玉一宏・小山哲春(共編)『言葉と認知のメカニズム 山梨正明教授還暦記念論文集』, ひつじ書房, pp. 489-497, 2008/9

田野村忠温 「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価——Yahoo!と Google の比較を中心に——」『計量国語学』26-5, 計量国語学会, pp. 147-157, 2008/6

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

田野村忠温 「日本語コーパスとコロケーション——辞書記述への応用の可能性——」北京日本学研究中心講演会, 北京日本学研究中心(中国・北京市), 2010/3

田野村忠温 「コーパスを用いた異表記使い分け実態の分析の可能性」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2010/2

田野村忠温 「コロケーションから見た複合辞——用法上の傾向を手がかりとした類義的慣用句型の分析——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語教育班拡大大会議(複合辞研究会), 筑波大学, 2010/2

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報の抽出・続——辞書記述への応用の可能性を前提とした考察——」国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会, 国立国語研究所, 2010/2

田野村忠温 「用言と助動詞類の共起の偏り——日本語の colligation の分析の試み——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2009/11

田野村忠温 「コロケーションの複合的性格——‘circumcollocate’の概念と実例——」特定領域研究「日本語コーパス」辞書編集班拡大大会議, ホテルスワ(つくば市), 2009/11

Tanomura, Tadaharu, “A corpus-based analysis of some time-related aspects of contemporary Japanese,” *CLAVIER 09*, University of Modena and Reggio Emilia (Modena, Italy), 2009/11

田野村忠温 「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」2009年阪大日本語学同窓会総会・阪大日本語学研究会, 大阪大学, 2009/9

Tanomura, Tadaharu “Retrieving collocational information from Japanese corpora: An attempt towards the creation of a dictionary of collocations,” *QUALICO 2009*, International Quantitative Linguistics Association, Graz University (Graz, Austria), 2009/9

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 21 年度研究進捗状況報告: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度全体会議, 国立国語研究所, 2009/9

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出・続——‘circumcollocate’の概念と実例——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2009/8

田野村忠温 「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」東京外国語大学グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」講演会, 東京外国語大学, 2009/8

田野村忠温 「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」京都大学言語学懇話会第 80 回例会, 京大会館, 2009/7

田野村忠温 「中国語コーパスからのコロケーション情報抽出の試み——日中同形表現および中国語類義表現の意味・用法の比較対照——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2009/5

田野村忠温 「コーパスと日本語研究——最近(過去 3 年)の動向——」日本学総合講座, 北京日本学研究中心(中国・北京市), 2009/4

田野村忠温 「文法の中核と周辺——コーパスが観察可能にする文法の一面——」特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度公開ワークショップ, 東京工業大学, 2009/3

田野村忠温 「「代わりに」小考」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2009/3

田野村忠温 「「代わりに」再考」特定領域研究「日本語コーパス」日本語教育班拡大班会議(複合辞研究会), 筑波大学, 2009/2

田野村忠温 「文法規則と表現慣習」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2008/12

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出の試み」特定領域研究「日本語コーパス」辞書編集班拡大班会議, ホテルスワ(つくば市), 2008/11

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 20 年度研究進捗状況報告: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度全体会議, 奈良県新公会堂, 2008/9

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出の試みなど」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2008/8

田野村忠温 「大規模コーパスの区分対照用法の可能性・続——句型使い分けの通時変化と語彙との関わり——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2008/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2006 年度～2010 年度、特定領域研究、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費: 2008 年度 直接経費 9,200,000 円 間接経費 0 円

2009 年度 直接経費 7,100,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、今後の日本語研究にとって不可欠の存在となることが確実なコーパス(電子媒体の言語資料)について、具体的な事例研究を通してその利用の価値を明らかにし、従来の日本語研究を精密化するとともに日本語の新しい研究領域・手法を開発することを主たる目的とする。

また、コーパスを用いた日本語研究の啓蒙・普及を図ること、および、本特定領域研究において計画され、将来日本語研究の標準的資料として広範に利用されるはずの大規模な日本語書き言葉コーパスの構築の進行に伴い、それを日本語研究に適用し、その過程で得られた知見をコーパスの構築にフィードバックすることをも目的とする。

4-6-2. 2007 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 19520342

研究題目: 大規模な電子資料の利用による日本語文法の未開拓の基礎的諸問題の原理・実証的考察

研究経費: 2008 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2009 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究は、日本語の大規模な電子資料(コーパス)を用いて日本語文法の未開拓の基礎的な諸問題を考察することにより、①電子資料に基づく日本語研究の基盤の形成と発展に寄与するとともに、②電子資料利用の目的である日本語研究そのものに対して実質的な貢献をもたらすことを目的とする。

①については、研究代表者のこの分野における過去 10 年余りの経験を踏まえ、それを継続・発展させる形で、電子資料の特性を生かした日本語研究の可能性を具体的な事例研究を通じて追求し、電子資料利用の価値と方法を明らかにする。

②については、日本語研究の隆盛とそこでの特定のテーマへの研究の集中のおかげで、日本語にとって非常に基礎的でありながら表面的な言語事実の観察さえ手付かずの状態にとどまっている文法の問題について、抜本的な再考と電子資料に基づく精密な分析・記述を行う。また、大規模な電子資料の利用によって初めて可能になる文法研究の新領域の開拓を目指す。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

文部科学省・科学技術・学術審議会専門委員	2008年12月～2010年1月
日本言語学会・評議員および常任委員	2008年4月～現在に至る

5. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻：日本語学、言語計画論。

5-1. 論文

渋谷勝己「日本語のバリエーション」『日本語学』28-15, 明治書院, pp. 50-58, 2009/12

Shibuya, Katsumi, “Aspect of Style-shifting in Japanese.” M. Minegishi, Y. Kawaguchi and J. Durant(共編) *Studies in Linguistics Vol. 1. Corpus Analysis and Variation in Linguistics.*, John Benjamins, pp. 339-360, 2009/4

5-2. 著書

金水敏, 乾善彦, 渋谷勝己 (共著)『シリーズ日本語学 4 日本語史のインタフェース』岩波書店, pp. 101-203, 2008/7

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者：渋谷勝己

課題番号：19520395

研究題目：山形市方言における動詞述語文の記述的研究

研究経費：2008年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2009年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的：

山形市方言の動詞述語文のもつ文法カテゴリーのなかから、とくにモダリティを取り上げて、詳細かつ網羅的な記述を試みる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・連携会員	2008年10月～現在に至る
日本方言研究会・世話人	2008年4月～現在に至る
第二言語習得研究会・事務局	2008年1月～2009年12月
社会言語科学会・理事	2006年8月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2006年7月～現在に至る

6. 齊藤 美穂 助教

1973年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学、2009年)。香港中文大学日本語学科専任講師を経て、2010年4月より現職。専攻:現代日本語文法論、日本語教育。

6-1. 論文

齊藤美穂 「副詞に接続するガ・ケレドモの用法」『阪大日本語研究』(大阪大学大学院文学研究科日本語学講座), 21, pp. 61-78, 2009/2

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-21 美学・文芸学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 2

教授：上倉 庸敬、藤田 治彦、内田 次信

准教授：加藤 浩、三宅 祥雄

助教：渡辺 浩司、春木 有亮

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
36	8	18	0	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	14	3	0	3	0
'09	9	8	0	2	0
小計	23	11	0	5	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

1行をしっかりと読み、1ページをしっかりと読んで初めて1冊を理解することができる、そうした本の読みかたを学生に身につけてもらう。

自分がなにに興味をもって、なにを問題だとみているかを他人に共有してもらうべくプレゼンテーションするテクニックを学生に身につけてもらう。

他人がなにに興味をもって、なにを問題だとみているかを理解すべく他人の話をきき、問答するテクニックを学生に身につけてもらう。

2. 研究

教員それぞれが各専門領域で、最低 1 冊の本を出す。

大学院生が 1 年に最低 1 回学会で発表し、最低一つの論文を学会誌に載せる。

また、研究室全体で、1 年で最低 100 本の書評、展覧会評、解説などを新聞、雑誌などに載せる。

3. 社会連携

映画祭や展覧会を開いて、大学外のひとたちと交流する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

美学研究室における教育活動の中心は、非常勤を除く教員全員が参加して進める発表演習の授業である。毎週 1 度、学部生は 2 名がそれぞれ 30 分前後、院生は 1 名が 1 時間前後、自分の研究を発表したのち、その内容について研究室に所属する全員で質疑討論を交わす。3 時から始まり、7 時 8 時におよぶこともある。この演習授業をとおして、学生は研究テーマの見つけ方、研究の進め方、発表の工夫を身につけ、卒業論文、修士論文、博士論文の執筆手順と方法を学ぶ。あわせて、美学芸術学に関し自分のテーマだけに閉じこもらない広い視野を手に入れる。この授業は年間を通じ、休暇期間以外、休みなく行われた。

上倉教授は年間をとおして、古典古代からの美学史を毎年異なった視点から講じる美学序説、トマス・アクィナスと美学の関連を探る数年来の美学講義、劇映画を論じて毎年異なる個別作品を研究する芸術学講義、主としてフランス語による美学文献講読を担当した。

藤田教授は、環境美学関連の英語文献の講読、建築史、工芸史、デザイン史関連の講義、くわえて、エラスムス・ムントゥス企画の英語での授業を提供した。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。

また、渡辺、春木両助教は、それぞれ、ドイツ語、フランス語文献講読を担当した。

2. 研究

美学研究室編集の『美学研究』を刊行し、また各種国際学会や国内学会における発表、美学研究室大学院生が交代で執筆する大阪日日新聞のシリーズ記事「関西美術探訪」の連載を続けた。

なお、大橋元教授のイニシアチブにより、2004 年 10 月、パリ・ラヴィレット建築エコールと文学研究科および工学研究科建築工学専攻とのあいだの「部局交流協定」が成立した。これによる 2005 年度からの両大学の学生交流を続けた。

文芸学研究室はギリシアとローマの喜劇・悲劇を中心とする研究を行った。内田次信教授は、古代ギリシアの喜劇と悲劇、ギリシア神話を研究し、加藤准教授はプラトンの文芸論やスカリゲルの詩学などを、また渡辺助教がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究した。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が発刊され、現在は 14 号を数えるに至っている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を年 3 回開催すると共に、機関誌を年 1 冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を続けた。

藤田教授は、2007 年度からの科学研究費研究計画(基盤(B))「比較デザイン論研究——意匠・構想・計画・創造論の射程」を続けた。

3. 社会連携

上倉教授は、第 6 回を迎えた京都映画祭の企画委員として、その実行に取り組み、研究室学生の有志とともに映画祭の成功に力を尽くした。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

充実した教育活動を実践し、目標をほぼ達成できた。

2. 研究

充実した研究活動を実践し、目標をほぼ達成できた。

3. 社会連携

充実した社会連携を実践し、目標を達成できた。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	3	0	3
'09	2	1	3
計	5	1	6

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 猪谷聡 「「工芸」的思考——日本のものづくりと近代」 2008/9
主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬、内田次信
- 竹内有子 「クリストファー・ドレッサーにおけるデザイン原理の生成と展開」 2009/3
主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬、内田次信
- 平光睦子 「「工芸」と「美術」のあいだ 明治中期の京都の産業美術」 2009/3
主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬、内田次信
- 金相美 「視覚コミュニケーション論研究 モホリ=ナギ/ケペッシュの視覚言語論を中心に」 2009/9
主査：藤田治彦 副査：上倉庸敬、三宅祥雄
- 吉田馨 「映画監督・三隅研二が描く女たち」 2010/3
主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、永田靖

【論文博士】

- 谷川渥 「シュルレアリスムのアメリカ」 2009/12
主査：上倉庸敬 副査：藤田治彦、三宅祥雄、伊東信宏、望月太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(3)	0(0)	2(2)	0(0)	7(7)	12(12)
'09	3(3)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)	5(5)
計	6(6)	1(1)	2(2)	0(0)	8(8)	17(17)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	5	17	0	0	0	22
'09	1	14	0	0	0	15
計	6	31	0	0	0	37

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 著書

【2008年度】

〔博士後期〕

吉田馨『らくたび文庫 NO.036 映画の町 京都太秦さんぽ～大映通り界限～』発行所：株式会社コトコト 2009/1

吉田馨『インター・カルチャー』発行所：晃洋書房 2009/2

(2) 論文

【2008年度】

〔博士後期〕

Itsuo NAKANO 'The Biedermeier Culture in Adalbert Stifter's Indian Summer' 独立行政法人日本学術振興会 人文・

社会科学振興プロジェクト研究事業『「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』pp 68-70, 2009/3

土田耕督「和歌における〈ことば〉と〈心〉の諸様相——二条・京極両派の和歌観を中心にして——」『芸術とコミュニケーション：文学・芸術の社会的媒介機能の研究』（人文・社会科学振興プロジェクト），pp. 64-67, 2009/3/27

水田百合子「マルグリット・デュラスの作品におけるポリフォニー——映画『インディア・ソング』を中心に——」『études françaises』（大阪外国語大学フランス語研究室），第40号，pp. 209-248, 2009/3/31

櫻間裕子「Museum Design in Gae Aulenti: For collection room of modern art museum」『ICDHS 2008 OSAKA PROCEEDINGS 国際会議論文集』pp130-133, 2008/10/24

櫻間裕子「第1回デザインミュージアム・カフェ「ジェフリー・ミュージアム柏木博」講演録及び報告書」『独立行政法人日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 研究領域 V-3 文学・芸術の社会的媒介機能「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書』pp24-25, 2009/3/27

久保美枝「エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画空間における平面性」『待兼山論叢』（大阪大学文学会），第42号，pp. 1-24, 2008/12

久保美枝「エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画における装飾性」『ゼミナール「美学と文化多様性」報告書』北海道

大学芸術学講座, pp.81-88, 2008/12/25

竹内有子「クリストファー・ドレッサーとアート・ボタニー」『デザイン理論』(意匠学会), 第 52 号, pp.79-92, 2008/5/31

竹内有子「Ornament and Design: Some Interrelated Ideas of Christopher Dresser」『Proceedings of the 6th International Conference of Design History and Design Studies, ANOTHER NAME FOR DESIGN: Words for Creation』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, pp.40-43, 2008/10/24

竹内有子「Christopher Dresser as a Mediator between Art and Design」『比較デザイン論研究』平成 19-21 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「比較デザイン論研究 意匠・構想・設計・創造論の歴史的展望」平成 20 年度研究年報(研究代表者: 藤田治彦), pp. 46-52, 2009/3/10

土田耕督「和歌における<ことば>と<心>の諸様相——二条・京極両派の和歌観を中心にして——」研究領域 V-3 文学・芸術の社会的媒介機能「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」報告書 独立行政法人日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業, pp. 64-67, 2009/3

Yuriko Inoue «Terminological history of Industrial Design in French, —— ‘Dessin industriel’, ‘Esthétique industrielle’, ‘Design’ —— », Words for Design II, 平成 19-21 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)「比較デザイン論研究 意匠・構想・設計・創造論の歴史的展望」平成 20 年度研究年報, pp.32-38, 2009/3

AMANAI, Daiki. «A Dispute over Ornament in Architecture: Japanese Perception of Modernism in 1920s», Proceedings of the 6th International Conference of Design History and Design Studies, pp.144-7, 2008/10.

【2009 年度】

〔博士後期〕

AMANAI, Daiki. «The Founding of Bunriha Kenchiku Kai: “Art” and “Expression” in Early Japanese Architectural Circle, 1888-1920», The Japanese Society for Aesthetics: AESTHETICS, No.13, pp.235-248, 2009

天内大樹「バラック装飾社と分離派建築会——一九二〇年代日本におけるモダニズム受容例」『大正イマジユリィ』(大正イマジユリィ学会), 4 号, pp.90-111, 2009/9

Kousuke TSUCHIDA ‘Inherited Words and Renewed Kokoro —— The Variety of Honka-dori in Japanese Medieval Waka——’ 大阪大学美学研究室編『美学研究』第 7 号, pp.1-11, 2009/8

井上由里子「ヴァレール・ノヴァリナの演劇における救済——『激昂空間』の「ジャン」をめぐる——」『待兼山論叢』第 43 号, 大阪大学文学会, pp.25-49, 2009/12

(3)口頭発表

【2008 年度】

〔博士前期〕

森本浩司「昭和初期の日本の近代建築における「合理主義」——東京帝室博物館設計競技を手がかりに」第 198 回意匠学会研究例会, 京都工芸繊維大学, 2009/2/7

AMANAI, Daiki. A Dispute over Ornament in Architecture: Japanese Perception of Modernism in 1920s. The 6th International Conference on Design History and Design Studies, Osaka University Nakanoshima Center, 2008/10/25

野村亮太「ミケル・デュフレンヌにおける「遂行 *exécution*」概念」第 59 回美学会全国大会, 若手フォーラム, 同志社大学, 2008/10/13

裴東仁「谷川俊太郎『定義』研究——パロディとしての詩集——」第 59 回美学会全国大会, 若手研究者フォーラム, 同志社大学, 2008/10/13

〔博士後期〕

竹内有子「Ornament and Design: Some Interrelated Ideas of Christopher Dresser」第 6 回デザイン史デザイン学国際会議, 大阪大学中之島センター, 2008/10/25

久保美枝「エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画空間における平面性——《黄金の階段》における身体表現と平面装飾——」第 59 回美学会全国大会研究発表, 同志社大学, 2008/10/12

- 櫻間裕子 「Gae Aulenti における「建築内建築」—— Italy the New Domestic Landscape 展を中心に」第 195 回意匠学会研究例会, 京都女子大学, 2008/5/17
- 櫻間裕子 “Museum Design in Gae Aulenti: For collection room of modern art museum” 第 6 回デザイン史デザイン学国際会議 2008 OSAKA, Theme “Design Museum and Museum Design” 大阪大学中之島センター, 2008/10/25
- 水田百合子「映画『インディア・ソング』におけるポリフォニック構造——エイゼンシュテイン理論の見直し——」美のゆくえ研究会, 2008/6/21
- 水田百合子「映画『インディア・ソング』におけるポリフォニック構造——エイゼンシュテイン理論の見直し——」第 59 回美学会全国大会, 若手研究者フォーラム, 同志社大学, 2008/10/13
- 横道仁志「ジャン・ボレラの象徴理論——キリスト教哲学の現在——」文芸学会, 同志社大学, 今出川キャンパス, クラーク記念館, 2008/12/20
- 秋岡啓子「岡本綺堂の新歌舞伎戯曲における台詞」文芸学研究発表会, 同志社大学, 2008/12/20
- 土田耕督「京極派歌人における西行受容とその限界——二条・京極両派の歌論比較をとおして——」第 59 回美学会全国大会, 若手フォーラム, 同志社大学, 2008/10/13
- Yuriko Inoue « ‘Dessin’ vs Design », Words for Design : A Comparative Study of Design Terminology, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, University of East Anglia, July 8th- 9 th 2008
- 井上由里子「ノヴァリナの言葉の力——主体の問いをめぐって」第 59 回美学会全国大会, 同志社大学, 2008/10/12
- 町田理樹「美学としての武士道」第 19 回待兼山芸術学会, 大阪大学, 2009/3/14
- 【2009 年度】
- 〔博士前期〕
- 上月翔太「ルカヌスにおける fama と人間」ギリシア・ローマ神話学研究会第 3 回講演・研究会, 大阪大学, 2010/3/13
- 里中俊介「プラトンにおけるポイエーシス論」待兼山芸術学会第 20 回研究発表会, 2010/3/27
- 〔博士後期〕
- Yuriko Inoue, « Autour de ‘je’ dans le théâtre de Valère Novarina : lecture de monologues autobiographiques de L’Espace furieux »Études française au Japon, Université catholique de Louvain & Université de Fukuoka, Louvain-la-Neuve, le 5 mai 2009 (「ヴァレール・ノヴァリナの演劇における「私」をめぐって: 『激昂空間』の自伝的モノローグ読解」日本におけるフランス研究, ルーヴァン・カトリック大学(ベルギー), 2009/5/5)
- 井上由里子「ノヴァリナ作品にみる演劇の儀式性」筑波大学 IFERI 合同研究発表会, 筑波大学, 2009/6/27
- 井上由里子「ノヴァリナの演劇における供儀と祝祭——『舞台』をめぐって」美学会西部会第 275 回研究発表会, 大阪大学, 2009/9/26
- Yuriko Inoue, « Valère Novarina, le théâtre du carnaval - le monde à l’ envers dans "La Scène" », Conflits et interprétations, Séminaire doctoral Besançon-Tsukuba, Université Tsukuba, le 28 janvier 2010
- 町田理樹「三島由紀夫の行動論・武士道論にみる身体的表出の可能性について」第 60 回美学会全国大会, 東京大学, 2009/10/11(同・発表要旨『美学』第 235 号, 美学会編, p.159, 2009/12/31)
- 町田理樹「芸術と政治——三島由紀夫に関する一考察」第 40 回文芸学研究会, 神戸大学, 2009/11/21
- 福永礼恩「小磯良平画『母子群像』(1956 年)についての一考察」第 60 回美学会全国大会, 若手フォーラム, 東京大学, 2009/10/11
- 福元崇志「ヨーゼフ・ボイスの芸術における理念と作品の関係——インスタレーション《ブロック・ボイス》を中心に——」第 51 回意匠学会大会, 大阪大学, 2009/7/11
- 土田耕督「更新される和歌の<心>——『愚問賢注』の本歌取り論を中心に——」文芸学研究会第 38 回研究発表会, 大阪大学, 2009/7/18
- 土田耕督「継承される<ことば>と更新される<心>——中世和歌における「本歌取り」の諸様相——」第 60 回美学会全国大会, 東京大学, 2009/10/10
- 吉田馨「女性映画の三隅研二——三隅研次監督作品『婦系図』を、マキノ正博作品、衣笠貞之助作品と比較して」映像学会第 35 回大会, 名古屋大学, 2009/5/31

吉田馨「溝口健二監督作品『浪華悲歌』からはじまったこと」第8回美のゆくえ研究会, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2009/8/9

(4)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士後期〕

中野逸雄(論文翻訳)ギュンター・ホーへ「意識しつつ、されど模倣せず——ブラウン製品は東ドイツデザインにいかなる影を投げかけたのか？」図録『純粋なる形象 ディーター・ラムズの時代 機能主義デザイン再考』サントリーミュージアム[天保山]発行, pp 753-775, 2008/11

水田百合子「いろんな「おかね」で世界がみえる——おかねを通したモノの存在——」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2008/8/5

水田百合子「「フランス語圏のマンガ——バンド・デシネの歴史と展開」展」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2009/3/24

吉田馨「Beauty うつくしいもの 伊那谷と歌舞伎 静かに」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/4/24

吉田馨「チャーリ・ウィルソンズ・ウォー 政治と恋愛 実話を基に」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/5/22

吉田馨「ザ・マジック・アワー 映画人への愛と尊敬込め」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/6/19

吉田馨「クライマーズ・ハイ 事故報道めぐるドラマ」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/7/17

吉田馨「ドラゴン・キングダム 2大スター夢の競演」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/8/14

吉田馨「闇の子供たち 幼児売買の衝撃と慈愛」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/9/11

吉田馨「次郎長三国志 自由奔放 新鮮なりメイク」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/10/9

吉田馨「人情斬文七元結 下町の人情 時代劇で描く」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/11/6

吉田馨「ハッピー・フライト 若手の奮闘テンポよく」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2008/12/4

吉田馨「ティンカー・ベル いまの自分 見直そう」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/1/8

吉田馨「感染列島 恐れ・無力感 映し出す」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/2/5

吉田馨「オーストラリア 名画の場面ちりばめて」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/3/5

吉田馨「絵画の冒険者・暁斎——近代へ架ける橋 浮世絵と狩野派収めた国際派」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 阪大美学研究室(303), 2008/5/27

吉田馨「映画舞台のある街 京都 吉田山界限」『京都新聞』2008/9/20

吉田馨「よみがえれ「キネマの町」 ゆかりの地 おすすめスポットは」『朝日新聞』日曜ナントカ学, 2008/11/2

吉田馨「白い着物『悪名市場』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年4月号, pp.10-13, 2008/4/1

吉田薫「小紋のお嬢さん『暖春』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年5月号, pp.10-13, 2008/5/1

吉田薫「扇あれこれ『瀧の白糸』『日本橋』『雪之丞変化』『源氏物語・浮舟』『忠臣蔵』『鬼平犯科帳』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年6月号, pp.10-13, 2008/6/1

吉田薫「男装の麗人『隠し砦の三悪人』『人肌孔雀』『おけさ唄えば』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年7月号, pp.10-13, 2008/7/1

吉田薫「夏をすずしく『なみだ川』『明治侠客伝・三代目襲名』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年8月号, pp.10-13, 2008/8/1

吉田薫「映画ならではの『瀧の白糸』『雨月物語』『一心太助・天下の一大事』『緋牡丹博徒・一宿一飯』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年9月号, pp.10-13, 2008/9/1

吉田薫「意外や意外『流れる』『黒い十人の女』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年10月号, pp.10-13, 2008/10/1

吉田薫「矢羽『婦系図』『おはなはん』『大奥@物語』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年11月号, pp.10-13, 2008/11/1

吉田薫「珊瑚『若き日の次郎長・東海の顔役』『次郎長三国志』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成20年12月号, pp.10-13, 2008/12/1

吉田薫「シネマ歌舞伎『野田版・研辰の討たれ』『人情斬文七元結』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成21年1月号, pp.10-13, 2009/1/1

吉田薫「仕立て直し『赤ひげ』『花園』妙心寺派宗務本所, 平成21年2月号, pp.10-13, 2009/2/1

- 吉田薫「振袖 『切れれ与三郎』『冷や飯とおさんとちゃん』『あ・うん』『細雪』『花園』 妙心寺派宗務本所, 平成 21 年 3 月号, pp.10-13, 2009/3/1
- 土田耕督「深奥的中国 少数民族の暮らしと工芸」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2008/6/10
- 土田耕督「新国誠一の《具体詩》 詩と美術のあいだに」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2008/2/19
- 天内大樹「主体と設計対象のゲシュタルト」『建築雑誌』(日本建築学会), No.1583, pp.44-45, 2008/12
- 天内大樹「「過剰」こそ感性を考えるキーワードだ」「再び政治の季節を迎えている建築がいま、面白い」『美術手帖』vol.61 No.917, pp.56-57; 90-91, 2009/1
- 福永礼恩「生誕 100 年記念 「『ブルーノ・ムナリー展 あの手この手』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2008/7/1
- 福永礼恩「広貞 中判に込められた世界」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2009/1/6
- 森本浩司「思い出の品にきっと会える 大阪歴史博物館 お菓子の博物館——初公開・山星屋コレクション——」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/3/3
- 櫻間裕子「兵庫県立美術館展覧会評、エドヴァルド・ムンク——装飾画家としての切り口」『大阪日日新聞』2008/4/1
- 櫻間裕子「京都芸術センター開催「dual points」展覧会評、現代テク駆使した映像と音響の表現」『大阪日日新聞』2008/10/7
- 櫻間裕子「パラメトリック・グラフィティ at なにわ橋駅——プラレールが生み出す 3D 空間」『大阪日日新聞』2009/2/24
- 松平嘉人「奈良県立御杖小学校」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2008/12/9
- 竹内有子「「芸術と福祉」部門開催 第四回デザインミュージアム・カフェ報告」『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究 研究報告書』日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業, p.32, 2009/3/27
- アンガス・ロッキヤー「風景に人々を住まわせる——15 世紀から 19 世紀における、ヨーロッパにおけるアジアのイメージ——」吉田憲司他編『アジアとヨーロッパの肖像』国立民族学博物館他, 2008/9/10
- 福元崇志「作家略歴・関連年表」『アル・ブリュット——パリ、abcd コレクションより——』滋賀県立近代美術館, 2008/10
- 福元崇志「「レフトオーバーズ/N.S.ハーシャ展」日印文化接触のしゃれた試み」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2008/11/18
- 福元崇志「「山本太郎展——ニッポン画物見遊山——」「洋魂和才」で笑い取る」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/6/16
- 土田耕督「深奥的中国 中国少数民族の暮らしと工芸」『大阪日日新聞』2008/6/10
- 土田耕督「新国誠一の《具体詩》 詩と美術のあいだに」『大阪日日新聞』2009/2/17
- 【2009 年度】**
- 〔博士前期〕
- 福永礼恩「開山無相大師 650 年遠諱記念 特別展覧会『妙心寺』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2009/5/5
- 福永礼恩「『白樺』誕生 100 年 白樺派の愛した美術」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2009/7/14
- 福永礼恩「(コラム記事)五感の総合芸術『和菓子』の美と伝承——虎屋文庫を訪ねて——」『美学研究』(大阪美学研究室), 第 7 号, 2009/8
- 福永礼恩「チュニジア世界遺産 古代カルタゴとローマ展——きらめく地中海文明の至宝——」『大阪日日新聞』2010/3/23
- 柑本敦至「枯山水式石組みの小宇宙、十禅律院 “洗心庭”」『大阪日日新聞』2009/8/4
- 〔博士後期〕
- 町田理樹「光と時」『詩人会議』3 月号(発行・詩人会議), 第 48 巻 3 号, pp.120-121, 2010/3/1
- 町田理樹「瞬間と永遠」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/4/21
- 町田理樹「理想の断片」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/5/19
- 町田理樹「日本的なものの痕跡」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/9/01
- 町田理樹「月花を愛でる」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/12/29
- 町田理樹「不在のサイン」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2010/3/30
- 土田耕督「自然のこえ命のかたち ——カナダ先住民の生み出す美——」『大阪日日新聞』2009/11/3
- 井上由里子「ベケット実験上演「なおのうごめき」器械からの「声」が生ともす」『大阪日日新聞』2009/6/23
- 井上由里子「チェーホフ戯曲を 2 劇団が同時上演 独特の風味添え現代の喜劇に」『大阪日日新聞』2010/2/16
- 町田理樹「瞬間と永遠 「インシデンタル・アフエアーズ」展」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/4/21

町田理樹「理想の断片 「ウィリアム・モリス」展」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/5/19

町田理樹「日本的なものの痕跡 「白髪一雄」展」『大阪日日新聞』ザ・プレス大阪, 2009/9/1

吉田薫「ワルキューレ」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/4/2

吉田薫「おっばいバレエ 甘ずっぱい青春映画」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/4/29

吉田薫「鈍獣 毒ある不気味な喜劇」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/6/3

吉田薫「剣岳 点の記 人も山も美しく荘厳」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/7/1

吉田薫「怪談 牡丹灯籠 2幕で描く人間の業」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/7/29

吉田薫「ナイト・ミュージアム 2 現代美術も動き回る」『信濃毎日新聞』シネマの味かた, 2009/9/2

水田百合子「映像制作集団スタジオ・アッズーロの歩み——テクノロジーとインタラクティブ・アート——」『美学研究』(大阪大学美学研究室), 第7号, pp.75-80, 2009/8/31

天内大樹「記録することの意味」『10+1 web site』<http://tenplusone.inax.co.jp/monthly/2009/07/2-amanai.php>, 2009/7

天内大樹「第4回大会報告・パネル1」表象文化論学会ニューズレター『REPRE』vol.09
<http://repre.org/repre/vol9/conference04/panel01.html>, 2009/10

ジョルダン・サンド・天内大樹訳「ちやぶ台論をひっくり返す」ジョルダン・サンド+佐藤守弘編『美術フォーラム 21』醍醐書房, vol.20, pp.47-50, 2009/11/27

天内大樹「ゼロ年代の都市・建築・言葉 アンケート」『10+1 web site』<http://tenplusone.inax.co.jp/monthly/2009/12/issue2.php>, 2009/12

松平嘉人「富本憲吉記念館」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2009/9/22

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計2名)

2009年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部: 1名 大学院: 3名 (計4名)

2009年度 学部: 2名 大学院: 3名 (計5名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

春木有亮 博士後期課程, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2008/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2008年度: 0名 2009年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008 年度 : 0 名 2009 年度 : 0 名

9. 刊行物

2008 年度 『美学研究』 6 号

2009 年度 『美学研究』 7 号

2008 年度 『文芸学研究』 12 号

2009 年度 『文芸学研究』 13 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際デザイン史フォーラム事務局	2008 年度～2009 年度
民族藝術学会事務局	2008 年度～2009 年度
待兼山芸術学会事務局	2008 年度～2009 年度
意匠学会事務局	2008 年度
文芸学研究会事務局	2008 年度～2009 年度
『文芸学研究』 第 12 号合評会	2008 年 7 月 26 日
第 35 回研究発表会	2008 年 7 月 26 日
『文芸学研究』 第 13 号合評会	2009 年 7 月 18 日
美学会	
西部会第 270 回研究発表会	2008 年 9 月 27 日
西部会第 275 回研究発表会	2009 年 9 月 26 日
第 19 回待兼山芸術学会	2009 年 3 月 14 日
第 20 回待兼山芸術学会	2010 年 3 月 27 日
ギリシア・ローマ神話学研究会事務局	2008 年度～2009 年度
第 2 回講演会	2009 年 3 月 21 日
第 3 回講演・研究会	2010 年 3 月 13 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

待兼山芸術学会誌『フィロカリア』第 26 号刊行	2009 年 3 月 13 日
待兼山芸術学会誌『フィロカリア』第 27 号刊行	2010 年 3 月 15 日

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 上倉 庸敬 教授

1949年、横浜市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程(美学美術史学専攻)単位修得退学。京都大学文学部助手、神戸学院女子短期大学専任講師、大阪樟蔭女子大学助教授、大阪大学助教授を経て、96年より教授。2007年、大阪大学より博士(文学)。専攻:美学/芸術学/映画学。

1-1. 論文

上倉庸敬 「輪廻と諦観——小津安二郎『麦秋』について——」『待兼山論叢 美学篇』43, pp. 1-24, 2009/12

1-2. 著書

上倉庸敬 『フランス美学 涙の谷を越えて』創文社, 260p., 2009/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 藤田 治彦 教授

1951年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士(大阪市立大学、1983年)。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科助教授などを経て、現職。専攻:美学/芸術学。

2-1. 論文

Fujita, Haruhiko, "Rediscovery of "Minka" in the Age of the People" Ding Shixue (編) *Journal of Xiangfan University*, (The Asian Society of Arts), Volume 31-No. 1, Xiangfan University, pp. 14-16, 2010/1

Fujita, Haruhiko, "Art, Craft, and Architecture for the People" Ruud van der Veen, Wim de Pauw, Kees Hammink (編) *International Conferences ART & WELFARE, Leiden*, (ICHACM + ICHSM), 8th ICHACM/5th ICHSM, ICHACM + ICHSM, pp. 15-23, 2009/3

Fujita, Haruhiko, "Yanagi Muneyoshi and Yamamoto Kanae: Their Arts and Identities" Fan Pan (編) *The Journal of Asian Arts & Aesthetics*, (The Asian Society of Arts), volume 2, The Asian Society of Arts, pp. 63-67, 2009/3

Fujita, Haruhiko, "Letters on Images: Concerning Japanese Art" Jale N. Erzen (編) *International Yearbook of Aesthetics*, (The International Association for Aesthetics), volume 12, The International Association for Aesthetics, pp. 68-90, 2008/6

2-2. 著書

藤田治彦 他(編)『芸術と福祉 アーティストとしての人間』大阪大学出版会, 293p. (「序」「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」「フランク・ロイド・ライトと機械時代のアートとクラフト」「タゴールの学園と芸術」「農民美術と民藝運動」 pp. 3-17 を執筆), 2009/6

藤田治彦 『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』東京美術, 80p. , 2009/1

藤田治彦他(編)『近代工芸運動とデザイン史 Modern Craft and Design Movements』思文閣出版, pp. 1-20, pp. 215-229, pp. 243-250, 2008/9

藤田治彦(監修)(序文)「アヴァンギャルドの誕生」『ダダ——前衛芸術の誕生』創元社, pp. 1-4, 2008/6

藤田治彦(監修)(序文)「近代絵画と現代美術」『マネ——近代絵画の誕生』創元社, pp. 1-4, 2008/5

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Fujita, Haruhiko, "Rediscovery of "Minka" in the Age of the People" The 6th Conference of the Asian Society of Arts, The Asian Society of Arts, Xiangfan University, 2009/10(*Journal of Xiangfan University*, pp. 14-16, 2010/1)

Fujita, Haruhiko, "Yanagi Muneyoshi and Yamamoto Kanae: Their Arts and Identities" The 5th Conference of the Asian Society of Arts, The Asian Society of Arts, Fo-Guang University, 2008/12(*The Journal of Asian Arts & Aesthetics*, Vol.2 pp. 63-67, 2009/6)

Fujita, Haruhiko, "Art, Craft, and Architecture for the People" The 8th Conference on the History of the Arts and Crafts Movement, ICHACM and ICHSM, Leidse Volkshuis, 2008/8(*International Conferences ART & WELFARE, Leiden*, pp. 15-23, 2009/5)

Fujita, Haruhiko, "Isho and Design: Concerning Shimazaki Toson and Taniguchi Yoshiro" Words for Design International Workshop, JSPS and SISJAC, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, 2008/7(*WORDS FOR DESIGN*, Volume 2, pp. 137-143, 2009/3)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/11

藤田治彦 意匠学会賞, 意匠学会, 2002/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007 年度～2009 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:藤田治彦

課題番号: 19320027

研究題目: 比較デザイン論研究——意匠・構想・設計・創造論の歴史的展望

研究経費: 2008 年度 直接経費 4,500,000 円 間接経費 1,350,000 円

2009 年度 直接経費 3,800,000 円 間接経費 1,140,000 円

研究の目的:

イタリア語の「disegno」、フランス語の「dessin」、英語の「design」、日本(中国)語の「意匠」など、世界の各文化圏で使われている、「構想」や「設計」や「創造」に関わる言葉を歴史的に比較研究することを通じて、人類による創造の過去・現在・未来についての知見を共有しあう。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2005 年度～2008 年度、受託研究、助成金獲得者:藤田治彦

助成金名: 人文・社会科学振興プロジェクト研究事業

研究題目: 芸術とコミュニケーションに関する実践的研究

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2008 年度 直接経費 6,520,000 円 間接経費 1,956,000 円

研究の目的:

芸術とコミュニケーションとの関係を、「芸術と福祉」、「環境と文学」、「コミュニティ・アート」、「アート・ワークショップ」という 4 つの観点から実践的に研究する。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

意匠学会・会長

2008 年 4 月～現在に至る

美学会・委員

2008 年 4 月～現在に至る

3. 内田 次信 教授

1952年生。京都大学大学院文学研究科西洋古典文学専攻博士課程修了。博士(文学)。2006年より現職。専攻:西洋古典文学／文芸学。

3-1. 論文

内田次信 「ディオーン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』」文芸学研究会『文芸学研究』(文芸学研究会), 14, pp. 1-56, 2010/3

内田次信 「トロイア攻略者オデュッセウスの慟哭と希望」京都大学西洋古典研究会『西洋古典論集』(京都大学西洋古典研究会), 22, pp. 38-124, 2010/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

内田次信(翻訳) 「アリストパネース『蛙』(ギリシア喜劇全集 3)」岩波書店, pp. 199-318, 2009/2

内田次信(翻訳) 「ピロストラトス『英雄が語るトロイア戦争』」平凡社, pp. 1-229, 2008/10

3-4. 口頭発表

内田次信 「ディオーン・クリュソストモス『トロイア陥落せず』」美学科西部会研究会, 美学会, 京都大学, 2009/7

内田次信 「古代のホメロス批評」伝統の崩壊と再創造, 国際高等研究所, 2008/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

4. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:現代フランス哲学／映像論。

4-1. 論文

三宅祥雄 「映画の視点とその変容(1)」『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 7, pp. 1-17, 2009/8

三宅祥雄他(共著) 「アート・メディアの多様体——講座新設の初年度によせて——」『待兼山論叢:文化動態論篇』(大阪大学文

学研究科), 42, pp. 1-19, 2008/12

三宅祥雄他(共著)「座談会:横断する文学としての文学環境論——その可能性をめぐって」『待兼山論叢:文化動態論篇』(大阪大学文学研究科), 42, pp. 71-115, 2008/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 加藤 浩 准教授

1960年生。大阪大学文学部美学科(美学・文芸学)卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程(芸術学)単位修得退学。文学修士。岡山大学文学部助手・講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:文芸学／神話論。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

加藤浩 (Julius Caesar Scaliger Poetics Libri Septem)「ユリウス・カエサル・スカリゲル『詩学七卷』第一卷第七章から第九章」『文芸学研究』13, 文芸学研究会, pp. 67-94, 2009/3

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 渡辺 浩司 助教

1962年生。1994年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。1994年より現職。博士(文学、大阪大学、1998年)。専攻:文芸学/西洋古典学。

6-1. 論文

渡辺浩司「制作学の原理——アリストテレスの『弁論術』と『詩学』より」渡辺浩司(編)『古代ローマにおける弁論術の形成と発展』(科学研究費補助金基盤研究(B) 研究報告書), pp. 7-26, 2010/3

渡辺浩司「プラトンとアリストテレスの音楽観」大森淳史他(編)『芸術はどこから来てどこへ行くのか』晃洋書房, pp. 302-318, 2009/5

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渡辺浩司他(共訳)『クインティリアヌス 弁論家の教育 2』京都大学学術出版会, pp. 1-366, 2009/2

6-4. 口頭発表

渡辺浩司「アリストテレスとホメロス問題」近代精神と古典解釈:伝統の崩壊と再創造, 国際高等研究所, 国際高等研究所, 2008/11

渡辺浩司「説得の論理 説得推論と感情効果——アリストテレス『詩学』と『弁論術』より」美学会西部会第 268 回研究発表会, 美学会, 京都大学, 2008/6(『美学』223, p. 175, 2008/12)

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2006年度~2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:渡辺浩司

課題番号: 18320032

研究題目: 古代ローマにおける弁論術の形成と展開

研究経費: 2008年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

2009年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

日本においてこれまで部分的ないし皮相的な仕方ではしか言及されることのなかった古典弁論術に関して、歴史的な側面と理論的な側面との両者から考察し、古典弁論術、とりわけ、古代ローマの弁論術の形成とその後の発展について一定の俯瞰的な展望を与えることを目的とする。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

美学会・幹事

2007年12月～現在に至る

民族芸術学会・委員

1994年4月～現在に至る

7. 春木 有亮 助教

1977年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了(文学博士)、2008年より現職。専攻:美学・芸術学。

7-1. 論文

春木有亮 「フランス美学の一つのはじまり——エチエンヌ・スーリオの「美学」の基礎づけ」奈良芸術短期大学『研究紀要』奈良芸術短期大学, pp. 52-67, 2009/10

Kitada-Haruki, Tomoaki, “De la pensée à l’art la raison esthétique chez Etienne Souriau” 『美学研究』6, 大阪大学美学研究室, pp. 29-40, 2008/4

7-2. 著書

春木有亮 『実在のノスタルジー——スーリオ美学の根本問題』行路社, 216p., 2010/3

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

なし

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-22 音楽学・演劇学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 3 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：市川 明、永田 靖、伊東 信宏

助教：山田 高誌

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
40	11	20	0	0	0	0	0	3

※うち留学生 2 名、社会人学生 6 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	13	6	4	3	0
'09	17	5	0	10	0
小計	30	11	4	13	0

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、年1回開催されている合宿でも、学位論文についての中間報告会を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から30年以上を経たが、開設以来、我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史学的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、文学部の各国語文学研究や国文学での歌舞伎や能研究とは一線を画し、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告2本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文2本以上を公表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、GCOEをはじめとするプロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレギウム・ムジクム」を年に数回開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や共催する映画祭関連講演会などを積極的に開催する。また音楽学・演劇学共同で、21世紀懐徳堂の企業連携のイベントに協力し、全学的な社会貢献にも参加している。また、各種学会には委員等として積極的に参加し、各種研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

講義・演習では、卒業論文、修士論文、博士論文に向けてそれぞれのテーマに応用可能な方法論や論理構成を意識した教育を行った。さらに個別の指導において、より具体的な問題設定、先行研究の検討、各種調査方法の検討などについて議論を行い、綿密な指導をおこなってきた。インターンシップも予定通り実施され、文学研究科刊行の報告書に寄稿した。

2. 研究

音楽学研究室では2008年度には招へい研究員による著書が、また2009年度に教員の著書が刊行され、いずれも著名な学術賞を受賞した。演劇学研究室では教員2名による著書が刊行され、学界で高く評価された。また教員4名は、いずれも科学研究費での助成研究を続けている。また院生は多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。また、音楽学研究室では2009年度の日本音楽学会全国大会が大阪大学を会場校として開催され、学会活動の拠点としての存在感を示したことも特筆される。演劇学研究室も、日本演劇学会の事務局を務めつつ、2011年国際演劇学会開催校となることが正式に決定し、国際的にも学会活動の拠点として存在感を示している。教員、招へい研究員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も毎年おこなっている。GCOEをはじめとする学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。さらに研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』も予定通り出版された。

3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿を定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生にも新聞への寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、日本音楽学会における支部長、本部監査、日本演劇学会における会長、理事、事務局長などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。「コレギウム・ムジクム」や21世紀懐徳堂の行事を含む各種レクチャ

ー・コンサートや大阪大学総合学術博物館企画展やヨーロッパ映画祭関連講演会などを学内外で企画立案運営し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

卒業論文、修士論文とも、高い水準のものが多かった。また博士論文については、課程博士、論文博士をあわせて特に多数の申請があり、特筆すべき成果を上げたといえる。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は、極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』『演劇学論叢』は、特に 2009 年度において、根岸教授退職記念、天野教授退職記念という意味もあり、修了生によるものも含めてとりわけ多くの論文を掲載することができた。

3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、財団委員としての専門知識の提供、学会全国大会の主催など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2008 年度～2009 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

(音楽学・演劇学)

年度	課程博士	論文博士	計
'08	3	0	3
'09	10	4	14
計	13	4	17

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

金銀周	『月刊音楽』(『월간음악』)に見る韓国の西洋音楽受容——1970年から1992年までの演奏会データを中心に」2008/9 主査：根岸一美 副査：天野文雄、伊東信宏
川端美都子	「舞台表演におけるガウチョの表象とアルゼンチン・アイデンティティーの変化と持続」 2009/3 主査：伊東信宏 副査：根岸一美、永田靖、岡田裕成
小石かつら	「メンデルスゾーンにおける演奏会用序曲の成立——《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》を中心に」2009/3 主査：根岸一美 副査：藤田治彦、伊東信宏
大岩みどり	「フレスコバルディの鍵盤トッカータ——作曲された即興演奏というパラドックス」2010/3 主査：根岸一美 副査：藤村昌昭、伊東信宏
山口篤子	「近代日本におけるアマチュア合唱——受容から運動へ」2010/3 主査：根岸一美 副査：天野文雄、伊東信宏

- 鄭守暎 「韓国における讚美歌の社会的位置づけについて」 2010/3
主査：根岸一美 副査：藤田治彦、伊東信宏
- 下出美智子 「知的障害のある青年たちの音楽行為——曲作り・歌作りの事例分析による」 2010/3
主査：根岸一美 副査：奥平俊六、伊東信宏
- 齋藤桂 「近代日本における新民謡の成立——音楽・誌・活動の在り方からの考察」 2010/3
主査：伊東信宏 副査：根岸一美、富山一郎
- 枕金雲 「南京における合唱音楽の発展」 2010/3
主査：根岸一美 副査：浅見洋二、伊東信宏
- 中村真 「レオシュ・ヤナーチェクのモラヴィア民謡研究における用語体系の成立と変容」 2010/3
主査：伊東信宏 副査：根岸一美、三谷研爾、内藤久子(鳥取大学)
- 多田英俊 「近代における人形浄瑠璃の表現に関する研究——作品論・上演史・奏演法の視点から——」
2010/3
主査：天野文雄 副査：永田靖、市川明
- ヒーブル・オンドレイ 「国際化する狂言——狂言台本翻訳の歴史をめぐって——」 2010/3
主査：天野文雄 副査：永田靖、市川明
- 正木喜勝 「村山知義研究——劇場の中の革命——」 2010/3
主査：永田靖 副査：天野文雄、市川明
- 【論文博士】
- 福田公子 「19世紀パリのサロン・コンサート(1815-1848)——音楽のある社交空間のエレガンス」
2009/4
主査：根岸一美 副査：上倉庸敬、和田章男、伊東信宏
- 中村順子 「ドビュッシーのメロディの世界」 2009/10
主査：根岸一美 副査：和田章男、伊東信宏
- 三原文 「日本人登場：西洋劇場で演じられた江戸の見世物 (Enter Japanese : A Night in Japan at the Opera House)」 2009/11
主査：天野文雄 副査：永田靖、市川明
- 伊東信宏 「バルトークによる民俗音楽調査・研究・編曲」 2010/3
主査：根岸一美 副査：永田靖、三谷研爾

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(3)	3(3)	4(4)	0(0)	1(0)	11(10)
'09	1(1)	1(1)	10(10)	0(0)	3(0)	15(12)
計	4(4)	4(4)	14(14)	0(0)	4(0)	26(22)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	2	9	5	0	1	17
'09	2	11	5	0	0	18
計	4	20	10	0	1	35

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

(音楽学)

〔博士後期〕

大岩みどり「フレスコバルディのトッカータの二重構造——序文「読者へ」の "avvertimento" をめぐって」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), vol.6 (2008/5), pp.27-46

重川真紀「シマノフスキの音楽における“オリент”——オペラ《ルッジェーロ王》作品 46 にみる東方的要素」『フィロカリア』(大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座), vol.26 (2009/3), pp.23-39

沈金雲「師範大学の合唱と指揮教育における師範性を強める方法について」中国江蘇省第二回大学生芸術展——芸術教育論文コンクール(募集対象：大学教師、研究機関研究員など)

山口篤子, 齋藤桂, 菌田郁「山田耕筰の歌曲制作における諸相——詩・邦楽・演奏」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), vol.6 (2008/5), pp.1-26

山口真季子「新聞記事「フランツ・シューベルトのピアノ・ソナタ」に見られるアルトゥール・シュナーベルのシューベルト解釈」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), 6 (2008/5), pp.47-65

(演劇学)

〔博士後期〕

多田英俊「引窓の光と陰——「引窓」解釈の歴史を読み解く」『待兼山論叢』(美学篇, 大阪大学文学会)vol.42 (2008/12), pp.29-51

多田英俊「三大狂言の序切跡——『義経千本桜』『堀川御所』を中心に——」『藝能史研究』(藝能史研究会), vol.184 (2009/1), pp.26-41

多田英俊「「引窓」の明暗を探る——鶴沢清六遺文庫「引窓」の節章解釈に至るまで——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), vol.10 (2009/3), pp.20-37

ヒープル・オンジェイ「国際化する狂言——狂言翻訳初期の英語狂言集を巡って——」『フィロカリア』(待兼山芸術学会), vol.26 (2009/3), 41-68

ヒープル・オンジェイ「国際化する狂言 II ——狂言翻訳中期、スラブ圏の言語への翻訳をめぐって——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室) vol.10 (2009/3), pp.62-88

須川渡「ローカリティを越える民話劇——劇団ぶどう座創設から『めくらぶんど』まで——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室) vol.10 (2009/3), pp.108-133

【2009年度】

(音楽学)

〔博士後期〕

家田恭“The Form at which a Composer Aimed —— Viktor Ullmann’s Song Cycle *Der Mensch und sein Tag*”, 大阪大学グローバル COE プログラム、コンフリクトの人文国際教育拠点/2007-2009 年度報告書(2010/3), pp.44-51

奥村京子「リゲティの《ナンセンス・マドリガルズ》におけるクラスター——〈第 3 番アルファベット〉に描かれた雲」『阪大音楽学報』 vol.8 (2010/3), pp.239-252

重川真紀「シマノフスキの作曲工房——オペラ《ルッジェーロ王》作品 46 をモデルに」『阪大音楽学報』 vol.8 (2010/3), pp.195-205

重川真紀「境界という理想郷——シマノフスキのオペラ《ルッジェーロ王》をめぐる論争を手がかりに」『交錯するアート・メディア』、大阪大学グローバル COE プログラム、コンフリクトの人文国際教育拠点／2007-2009 年度報告書 (2010/3), pp.36-43

齋藤桂「山内盛彬の琉球音楽研究と“偽史”」『阪大音楽学報』 vol.7 (2009/7), pp.35-48

齋藤桂「新民謡《須坂小唄》にみる中山晋平の作曲理念」『待兼山論叢』(大阪大学文学会) vol.43 (2009/12), pp.25-44

齋藤桂「新民謡創作の参考書と曖昧な“地方”——大関五郎『民謡辞典』を中心に」『阪大音楽学報』vol.8 (2010/3), pp.23-34

齋藤桂「他者の音楽と暴力——映画『アバター』と架空の民族「性について」大阪大学グローバル COE プログラム、コンフリクトの人文国際教育拠点／2007-2009 年度報告書 (2010/3), pp.128-135

山口篤子「明治・大正期の合唱受容——合唱観の変遷と活動の実際」『阪大音楽学報』 vol.7 (2009/7), pp.19-34

(演劇学)

[博士後期]

柘井智英「岡倉士朗のスタニスラフスキ・システム実践——舞台版『夕鶴』とオペラ『夕鶴』をめぐる」『近現代演劇研究』(近現代演劇研究会), vol.2 (2009/7), pp. 33-49

柘井智英「五〇年代新劇のスタニスラフスキ・システム実践——モスクワ芸術座来日公演『三人姉妹』の受容をめぐる——」『フィロカリア』(待兼山芸術学会), vol.27 (2010/3), pp.27-46

多田英俊「三大狂言「序切跡」の分析——構成と演出による——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), vol.11 (2010/3), pp.266-281

橋場夕佳「『福言巻』の目指したもの——修羅能のアイ語りをめぐって——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), vol.11 (2010/3), pp.106-120

ヒーブル・オンジェイ「最近の狂言翻訳および外国語による狂言上演——狂言の修行、紹介、実演、翻訳をめぐる——」『劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), vol.11 (2010/3), pp.344-368

神崎舞「ロベール・ルパージュ演出『アンデルセン・プロジェクト』——隠蔽された自己の表象——」『演劇学論叢』(大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室), vol.11 (2010/3), pp.420-438

(2)口頭発表

【2008 年度】

(音楽学)

[博士前期]

山本耕平「作品解釈の拡がりと深まり——N.グッドマンの芸術シンボル論における『多重で複雑な関与』を手掛かりにして——」日本音楽学会関西支部第 335 回例会, 京都市立芸術大学, 2008/6/21

[博士後期]

伊藤末花「Die junge Magd op.23 Nr.2 におけるヒンデミットのトラークル詩解釈について」第 135 回関西楽理研究会, 京都女子大学, 2008/6/28

川端美都子「ガウチョ音楽からみる、アルゼンチン国民アイデンティティーの変化と持続」大阪大学 GCOE 院生助成成果報告会, 大阪大学大学院文学研究科, 2008/6/7

川端美都子 KAWABATA Mitsuko “The Challenge of the Contemporary Argentine Malambista: Confronting Globalization and Tradition” College Music Society, Southern Chapter Meeting, Orlando, 2009/2/27

川端美都子 KAWABATA Mitsuko “Challenge of the Contemporary Argentine Malambista: Confronting Globalization and Tradition” The Society for Ethnomusicology the 53rd annual meeting, Wesleyan University, 2008/10/25.

齋藤桂「昭和初期の新民謡活動における地方の役割——岐阜県を例に」日本ヘルダー学会 2008 年度秋季研究発表会, 関西学院大学梅田サテライトキャンパス, 2008/11/2

下出美智子「知的障害者の音楽表現の根底にあるもの」日本教育方法学会, 愛知教育大学, 2008/10/12

山口真季子「ベルリンの新聞評から見るシュナーベルのシューベルト演奏」日本音楽学会第 59 回全国大会, 国立音楽大学, 2008/10/26

(演劇学)

〔博士前期〕

甘為治「観世十郎元雅の作風——《歌占》をめぐって」待兼山芸術学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2009/3/14

〔博士後期〕

上野暁子「近世初期におけるキリシタンの盲人音楽家」共同研究「胡弓の源流を探る」, 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター/京都府京都市, 2008/9/20

上野暁子「八橋検校の箏組歌〔八橋十三組〕について」東洋音楽学会全国大会, 武蔵野音楽大学/東京都練馬区, 2008/11/16

須川渡「劇団ぶどう座にみる地域演劇——一九五〇・六〇年代の活動を中心に」待兼山芸術学会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2008/4/12

永田靖、正木喜勝、須川渡、小林壮路「大阪大学演劇学研究室上演『シムシオンは今・・・』について」演劇教育ワークショップ「教育上演の課題と展望 Vol.2——台北、札幌、大阪」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト, 大阪大学/大阪府豊中市, 2009/1/31

多田英俊「三大狂言の序切跡——『義経千本桜』『堀川御所』を中心に」藝能史研究会例会, ハートピア京都/京都府京都市, 2008/5/9

多田英俊「『クドキ』における『つ』音——明治・大正期の義太夫節録音から——」東洋音楽学会西日本支部第 242 回定例研究会, 国立民族学博物館/大阪府吹田市, 2009/3/21

柘井智英「「演技＝行動」が示した戦後新劇俳優の諸問題」日本演劇学会全国大会, 日本橋学館大学/千葉県松戸市, 2008/6/21

【2009 年度】

(音楽学)

〔博士後期〕

大岩みどり「規範としての「演奏のスタイル」——フレスコバルディのトッカータにおけるパラドックス——」日本音楽学会第六十回全国大会, 大阪大学, 2009/10/25

奥村京子「G・リゲティの《ナンセンス・マドリガルズ》の成立・構造・特質」日本音楽学会関西支部第三四一回例会, 大阪音楽大学, 2009/6/27

奥村京子「G・リゲティの《時計と雲》——ミニマルとクラスターの混合」日本音楽学会第六十回全国大会, 大阪大学, 2009/10/24

小林ひかり Kobayashi Hikari, “The reception of Grieg’s music in Japan during the first half of the twentieth century.” International Edvard Grieg Conference Berlin 2009, Universität der Künste Berlin, 2009/5/15

小林ひかり「ハンカ・シェルデルプ・ペツォルトの演奏活動と日本におけるグリーグ受容」日本音楽学会中部支部第 97 回例会, 金城学院大学, 2009/12/19

齋藤桂「黎明期の新民謡——「俚謡」と「民謡」をめぐって」第 46 回藝能史研究会大会, 同志社女子大学今出川キャンパス, 2009/6/14

齋藤桂「昭和初期の岐阜県における新民謡——新民謡雑誌の活動を中心に」日本音楽学会第六十回全国大会, 大阪大学, 2009/10/24

重川真紀「シマノフスキのオペラ《ルッジェーロ王》における攻防——台本の成立史から見るアイデアの形成」日本音楽学会第六十回全国大会, 大阪大学, 2009/10/24

山口篤子「合唱競演会の功罪——近代日本の合唱受容における意義」日本音楽学会第六十回全国大会, 大阪大学, 2009/10/24

山口真季子「《三人娘の家 *Das Dreimäderlhaus*》(1916)におけるシューベルト・イメージ」日本音楽学会第六十回全国大会, 大阪大学, 2009/10/25

(演劇学)

[博士後期]

- 多田英俊「鴻池父子と義太夫節——大正期の娯楽から昭和期の芸術へ」日本演劇学会全国大会, 大阪市立大学, 2009/6/27
- 枘井智英「新劇における型——モスクワ芸術座『三人姉妹』の受容を通して」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2009/10/17
- 橋場夕佳「観世大夫元章の間狂言改革——『副言巻 第三』の場合——」東海能楽研究会, 米野コミュニティセンター, 2009/5/17
- 李星坤「メロドラマの政治学 ——三島由紀夫の初期作品の場合」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2010/1/23
- 須川渡「劇団ぶどう座と岩手県湯田町——『うたよみざる』を中心に——」日本演劇学会全国大会, 大阪市立大学, 2009/6/27
- 神崎舞「ロベール・ルパージュ演出『アンデルセン・プロジェクト』に見られる孤独の表象」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2009/10/17
- 上野暁子「検校、勾当、座頭、こきふ」における<こきふ>をめぐる ——天正狂言本を中心に—— 共同研究「胡弓の受容と現在」, 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター/京都府京都市, 2010/3/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

(音楽学)

[博士前期]

- 河合悠吾(寄稿)「神戸国際芸術祭 2008」プログラム掲載のエッセイ, 2008/7/15, 16, 19
- 田中慎一郎(翻訳)チュア・スーボン「福建劇——シンガポールにおける芸能の形式と発展」『阪大音楽学報』(大阪大学音楽学研究室), vol.6 (2008/5), pp.67-76

[博士後期]

- 伊藤未花(翻訳/字幕制作)NHKBS1「シェーンベルク『グレーの歌』」
- 伊藤未花(翻訳/字幕制作)NHKBS1「クラシックシアター——ヨハン・シュトラウス『ウィーンかたぎ』」
- 小林ひかり(寄稿)「グリーグとハンカ・シェルデルブ・ペツォルト」『ペツォルト研究』ペツォルト夫妻を記念する会, pp.57-58, 2008/10
- 小林ひかり(通訳)レクチャー・コンサート「ノルウェーの響き」におけるシンネーヴェ・サクラ・ヘッグムの講演「ノルウェー民謡」および「ノルウェーの風土について」旧竹林院および芙蓉園本館, 2008/10/27
- 小林ひかり(楽曲解説)「ヨハンセン陽子ピアノリサイタル《グリーグピアノ作品全曲演奏会 Vol.2》」白寿ホール, 2008/7/26
- 齋藤桂(楽曲解説)「アリオン・アフタヌーン・コンサート 2008 第 2 回 尾崎有飛ピアノ・リサイタル」紀尾井ホール, 2008/7/17
- 重川真紀(批評)「クリスティアン・ツィメルマン(ピアノ)、チョン・ミョンフン(指揮)、東京フィルハーモニー交響楽団、ルトスワフスキ/ピアノ協奏曲(2009年11月23日、サントリーホール)『音楽現代』第37巻第11号, p.149, 芸術現代社, 2009/1
- 下出美智子(寄稿)「関西美術探訪——市民100人ミュージカル『ロラ・マシン物語』」『大阪日々新聞』文化欄, 2008/6/24
- 下出美智子「ミュージカル『ロラ・マシン物語』」大阪・憲法ミュージカル2008実行委員会主催, クレオ大阪<昼・夜>4/26, サーティーホール 4/29, リビエールホール 5/3, 堺市民会館 5/11
- 山口篤子(翻訳)エクリプス・マスタークラス「弦と絃」におけるジュリオ・カスタンヨーリ《驚娘 ぼかし》《光の弦 波の絃》の楽曲解説, 大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホール, 2008/12/19
- 山口篤子(楽曲解説)「大阪ゲヴァントハウス合唱団——ハイドン オラトリオ《四季》」NHK 大阪ホール, 2008/7/4
- 山口篤子(演奏会評)「関西美術探訪 306——クラシックと一線画す古楽 アッコルドーネ『歌と魔法』～口承された古い歌の記憶」『大阪日々新聞』, 2008/6/17
- 山口篤子(楽曲解説)「池田室内合唱団第14回定期演奏会」(パレストリーナ《エレミアの哀歌》他)川西みつなかホール, 2008/4/6

山口真季子「小林仁とその友人たち——ピアノアンサンブルの楽しみ」長久手文化の家, 2008/11/29

(演劇学)

〔博士後期〕

須川渡「ピッコロ劇団『桜の園』——チェーホフを通過することの意味」『act』(国際演劇批評家協会日本センター関西支部)17号, pp.6-7, 2008/12

多田英俊「国立文楽劇場四月公演 久々からなじみまで、そろった四演目」『大阪日日新聞』「関西美術探訪——阪大美学研究室(301)」2008/5/13

【2009年度】

(音楽学)

〔博士後期〕

小林ひかり「比叡山に建つペツォルト夫妻の供養塔」『ペツォルト研究』第2号, ペツォルト夫妻を記念する会, 2010/5/31, pp.35-36.

重川真紀 連載「ショパンのポーランド」全六回(翻訳)『音楽現代』4月～9月号, 芸術現代社

(第一回「ワルシャワ：散歩道1」4月号, 第40巻, 第4号, 2-3, pp.71-72.)

(第二回「ワルシャワ：散歩道2」5月号, 第40巻, 第5号, 4, pp.112-113.)

(第三回「シャファルニャ」6月号, 第40巻, 第6号, 7, pp.96-97.)

(第四回「ドゥシュニキ・ズドゥルイ」7月号, 第40巻, 第7号, 7, pp.114-115.)

(第五回「アントニン」8月号, 第40巻, 第8号, 7, pp.100-101.)

(第六回「サンニキ・ソハチェフ」9月号, 第40巻, 第9号, 7, pp.112-113.)

重川真紀「マズルカ」『音楽現代』9月号「特集＝ショパンのピアノ音楽～全ジャンルの魅力と聴きどころ」7, 第40巻, 第9号, pp.66-67.

山口篤子 楽曲解説：池田室内合唱団第15回定期演奏会(川西みつなかホール, 2009/11/29)グレーロ：ミサ《愛する者よ、立ちて急げ》他

山口篤子 寄稿：「メロディーの宝宝箱」『めぐみ』(仏教婦人会総連盟事務局)第209号(2010年3月)。

山口篤子 寄稿：「仏教讃歌 CD『ののさまといっしょ』より」『保育資料』(浄土真宗本願寺派保育連盟)第621号(2009年11月), 第623号(2010年1月), 第625号(2010年3月)

(演劇学)

〔博士後期〕

李星坤「万歳一座がやかましく演じる——精華演劇祭 vol.13 参加作『S 高原から』」『大阪日日新聞』2009/9/28

須川渡「町の息遣いは可憐で絢爛——「長浜曳山祭り」子供歌舞伎——」『大阪日日新聞』2009/5/12

須川渡「路地からみる維新派の世界——大阪大学総合学術博物館第9回企画展「維新派という現象『ろじ式』——」『大阪日日新聞』2009/12/8

神崎舞「『Not About Nightingales——C 監房棟の男たち——』極限下の心理鋭く描く」『大阪日日新聞』2009/6/30

神崎舞「詩情あふれる世界への旅——日加共同制作『TRAIN』——」『act』19号, 2009/9/1

小林壮路「国立国際美術館の『東京ノート』」『大阪日日新聞』2009/11/17

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

沈金雲, 中国江蘇省第二回大学生芸術展——芸術教育論文コンクール, 一等賞(論文タイトル: 師範大学の合唱と指揮教育における師範性を強める方法について), 2008年度

沈金雲, 中国江蘇省第二回大学生芸術展——合唱コンクール, 南京師範大学音楽学院の合唱団を指導してプロ組の第一位を獲得, 2008年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)
2009年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部:0名 大学院:3名 (計3名)
2009年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)
なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名
2008年度:0名 2009年度:0名
<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名
2008年度:0名 2009年度:1名

9. 刊行物

2008年度 『阪大音楽学報』第6号 『演劇学論叢』第10号
2009年度 『阪大音楽学報』第7号、第8号 『演劇学論叢』第11号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本音楽学会関西支部事務局	2008年度・2009年度
民族芸術学会事務局	2008年度
日本演劇学会事務局	2008年度・2009年度
近現代演劇研究会事務局	2008年度・2009年度
近現代演劇研究会例会開催	2008年5月24日、7月26日、10月4日(講演) 2009年1月31日(特別例会) 2009年7月25日、10月17日、12月12日(特別講演) 2010年1月23日、3月21日(京都集会)
大阪ヨーロッパ映画祭講演会	2008年11月21日、2009年11月24日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム第8回「現代ギター作品へのス
ペイン音楽の影響」出演:ディアンジェロ・シシリア、麻里子・シシリア 2008年6月6日
パトリツィア・コパチンスカヤ ミニ・コンサート at 阪大 2008年11月30日
関口義人講演会「トルコのジプシー——その音楽と現在——」 2008年12月4日

イクリプス・マスタークラス「弦と絃」	2008年12月19日
音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム第9回「生きている幕末鼓笛隊 ——西洋音楽はどのように土着化したか」講師：奥中康人	2008年12月5日
アカデミック・キャバレーNo.1『シムチョンは今・・・』	2009年1月30日
テルミン・レクチャーコンサート「過去からきた未来の音」	2009年3月3日
国際シンポ「境界としてのロマ(ジプシー)とその音楽」	2009年3月26日
天野文雄教授最終講義「禅竹序説」	2010年3月4日

12. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位修得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

1-1. 論文

- 永田靖 「カッコウと原爆——アジアにおける内在するディアスポラ演劇」『演劇学論叢』11, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp. 282-299, 2010/3
- 永田靖 「オ・テソク、伝統、教室——2008年度大阪大学演劇学研究室研究上演について」藤田治彦(共著)『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究報告書』pp. 270-277, 2009/3
- 永田靖 「芸術の価値を決めるのは誰？」吉岡洋・岡田暁生(編)『文学・芸術は何のためにあるのか？』東信堂, pp. 161-169, 2009/3
- Nagata, Yasushi, “Puppeting a Joruri – is it really needed to be a theatre?”, *Theatre and Democracy*, Ravi Chaturvedi(ed.) Rawat Publications, pp. 185-197, 2008/5

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 永田靖 「ヴァムピーロフと一幕劇」『ホテル・タイガ』名取事務所, pp. 5-6, 2010/2
- 永田靖 「アルプーズフに始まる」『私のかわいそうなマラート』名取事務所, pp. 5-6, 2009/3

1-4. 口頭発表

- Nagata, Yasushi, “Some problems of inter Asian theatre research” International Asian Theatre Conference: Women in Asian Theatre & Inter-Asian Theatre, Asian Theatre Working Group, International Federation for Theatre Studies, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur, Malaysia, 2010/3
- 永田靖 「ロシア・アヴァンギャルド演劇の光芒——タリンの構成主義」ロシアの夢——ロシア・アヴァンギャルド展 1917-1937, 岡崎市美術博物館, 岡崎市美術博物館, 2010/2
- 永田靖 「維新派とその時代」維新派とその時代, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, 大阪大学総合学術博物館, 2009/11
- Nagata, Yasushi, “Training and Translation” Asian Theatre Working Group First Meeting, Asian Theatre Working Group FIRT/IFTR, University of Lisbon, 2009/7
- Nagata, Yasushi, “Adapting Asia-Ventures by Kaoru Morimoto” Annual Conference FIRT/IFTR, International Federation for Theatre Research, University of Lisbon, 2009/7
- 永田靖 「大阪大学演劇学研究室上演『シムチョンは今・・・』について」教育上演の課題と展望 Vol.2 ——台北、札幌、大阪, 近

現代演劇研究会, 大阪大学, 2009/1

永田靖 「『三人姉妹』の技法と世界」マスタークラス「チャーホフ」, 京都文化会館, 京都文化会館, 2008/8

Nagata, Yasushi, “Piling Asia on Asia – Theatrical Syncretism in Postwar Japanese Theatre” Annual Conference :Theatrical Asianesss(es) in Global Age, International Federation for Theatre Research, Chuan Gaung University, Seoul, 2008/7

永田靖 「ハリウッドとは何か——アクターズ・スタジオ「メソッド演技」とスタニスラフスキイ」群馬県立女子大学県民公開講座, 群馬県立女子大学, 群馬県立女子大学, 2008/6

永田靖 「メイエルホリドと絵画」日本演劇学会全国大会シンポジウム: 諸芸術から見た演技/演技から見た諸芸術, 日本演劇学会, 日本橋学館大学, 2008/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:永田靖

課題番号: 19520100

研究題目: ロシアにおける日本・朝鮮演劇の影響及び展開過程の研究

研究経費: 2008年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

ロシアのモダニズム演劇においてアジア演劇の影響が見られるが、とりわけ日本と朝鮮演劇の影響とその展開過程を研究して、モダニズム演劇に果たした日本と朝鮮演劇の意味を追求する。またソビエト時代におけるこれらアジアの演劇への姿勢を考察し、20世紀演劇史の空白を埋める。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

Asian Theatre Working Group ・Convener	2008年7月～現在に至る
International Federation for Theatre Research・Member of Exective Committee	2004年11月～現在に至る
日本演劇学会・理事・事務局長	2002年4月～現在に至る
日露演劇会議・理事	2002年3月～現在に至る
日本映像学会関西支部・幹事	2001年4月～現在に至る
日本演劇学会近現代演劇研究会・事務局	2000年12月～現在に至る

2. 市川明教授

1948年生。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。1976年、大阪外国語大学外国語学研究科修士課程ドイツ語学専攻修了。文学修士。近畿大学教養部助手、同講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より現職。専攻:ドイツ文学/ドイツ演劇。

2-1. 論文

市川明 「宝塚歌劇とカイザーの『二つのネクタイ』——堀正旗が残したもの」谷川道子、秋葉裕一(共著)『演劇インタラクティブ——

日本×ドイツ』早稲田大学出版部, pp. 146-178, 2010/3

市川明 「久保栄とドイツ演劇」『季論 21』7, 本の泉社, pp. 144-153, 2009/10

- 市川明 「移民＝異民の視線——『ケバブ』上演が見せたもの」『不定期船』4, pp. 92-99, 2009/8
- 市川明 「ブレヒトと彼の作曲家たち」市川 明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, pp. 10-25, 2009/6
- 市川明 「くあなたが指導しなければならぬ！」——ブレヒト/アイスラーの『母』市川 明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, pp. 55-97, 2009/6
- 市川明 「ブレヒト・ケラーの韓国公演——『ゴビ砂漠殺人事件』の舞台と音楽」市川 明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, pp. 196-212, 2009/6
- 市川明 「共振する言葉と音楽——音楽劇としてのブレヒト劇」市川 明(編)『ブレヒト テキストと音楽——上演台本集』ブレヒトと音楽-3, 花伝社, pp. 217-243, 2009/6
- 市川明 「Durs Grünbein の俳句」*Brunnen*, 455, 郁文堂, pp. 3-5, 2009/1
- 市川明 「『ヴォイツェク』を上演する」『待兼山論叢 文化動態論編』42, 大阪大学文学会, pp. 21-70, 2008/12
- 市川明 「ソフィアの夏」『季論 21』2, 本の泉社, pp. 170-175, 2008/10
- Ichikawa, Akira, ““Du musst die Führung übernehmen!”-*Die Mutter* von Brecht/Eisler” Ichikawa, Akira (編) *Musik und Bühne bei Bertolt Brecht*, Studienreihe der JGG-57, Japanische Gesellschaft für Germanistik Tokyo, pp. 22-46, 2008/10
- 市川明 「歌声よ、響け！——『第九』の平和思想」『季論 21』創刊号, 本の泉社, pp. 91-96, 2008/7
- 市川明 「シンガーソングライター、ブレヒト——若き詩人とサブカルチャー」市川明(編)『ブレヒト 詩とソング』ブレヒトと音楽-1, 花伝社, pp. 11-50, 2008/7
- 市川明 「『あとから生まれてくるものたちへ』——ブレヒトとハンス・アイスラー——」市川明(編)『ブレヒト 詩とソング』ブレヒトと音楽-1, 花伝社, pp. 97-133, 2008/7

2-2. 著書

- 市川明 (編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, 218p. (執筆: pp. 5-7, pp. 10-25, pp. 55-97, pp. 196-212, pp. 213-218), 2009/6
- 市川明(訳)『ブレヒト テキストと音楽——上演台本集』ブレヒトと音楽-3, 花伝社, 246p., 2009/6
- 市川明 (編)『ブレヒトにおける音楽と舞台』研究報告書 2, 科学研究費・基盤研究(B)[ブレヒトと音楽], 206p. (執筆: pp. 1-3, pp. 6-19, pp. 22-23, pp. 49-87, pp. 182-200, pp. 201-206), 2008/12
- Ichikawa, Akira (編), *Musik und Bühne bei Bertolt Brecht*, Studienreihe der JGG-57, Japanische Gesellschaft für Germanistik, 84p. (執筆: pp. 1-2, pp. 22-46), 2008/10
- 市川明 (編)『ブレヒト 詩とソング』花伝社, 190p. (執筆: pp. 5-7, pp. 11-50, pp. 97-133, pp. 177-182), 2008/7

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 市川明(書評)「小林標『ローマ喜劇——知られざる笑いの源泉』」『シアターアーツ』42, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 136-137, 2010/3
- 市川明(翻訳)「『ケバブ KEBAB』(ジャンニーナ・カルブナリウ作)」『季論 21』7, 本の泉社, pp. 209-239, 2010/1
- 市川明 「スヴェンボーへの旅」『世界文学会ニュース』98, 世界文学会, pp. 2-4, 2009/11
- Alena Eckelmann, Ichikawa, Akira, From East Berlin to the Far East, and vice versa. *Japantimes*. November 10, 2009
- 市川明(翻訳)「『ケバブ』(ジャンニーナ・カルブナリウ作)」『KEBAB』上演委員会, pp. 1-23, 2009/7
- 市川明(書評)「兵藤裕己『琵琶法師』」『シアターアーツ』40, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 110-111, 2009/6
- 市川明(書評)「『上方演劇大全』(大阪府立上方演芸資料館ワッハ上方編)」『シアターアーツ』39, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 140-141, 2009/6
- 市川明(劇評)「『おはようおかえり』——温かな言葉にこめられた平和への願い」『act』18, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 12-13, 2009/5
- 市川明 「私たちの国際交流」『Bulletin』58, 大阪大学文学研究科国際連携室, pp. 3-5, 2009/3
- 市川明 「ブレヒト・ケラーの韓国公演——『ゴビ砂漠殺人事件』上演が残したもの」『act』17, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 16-17, 2008/12

- 市川明(書評)「今橋映子『フォト・リテラシー』』『シアターアーツ』37, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 110-111, 2008/12
- 市川明「『実践芸術論』が目指すもの」「アート・メディアの多様体——講座新設の初年度によせて——」『待兼山論叢 文化動態論編』42, 大阪大学文学会, pp. 4-6, 2008/12
- 市川明(書評)「喜志哲雄『シェイクスピアのたくらみ』』『シアターアーツ』36, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 140-141, 2008/9
- 市川明(劇評)「肉(肉欲)と肉(食肉)との現代ドラマ——麟光群の『ローゼ・ベルント』』『act』16, 国際演劇評論家協会日本センター 関西支部, pp. 10-11, 2008/7
- 市川明(書評)「栗山民也『演出家の仕事』』『シアターアーツ』35, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 120-121, 2008/6

2-4. 口頭発表

- 市川明,坂口瑞穂,野崎美子,七字英輔(司会)「バルカン半島の同時代演劇——紛争地域から生まれた演劇——」 国際演劇協会, シアター・イワト, 2009/12
- 市川明「ジャンジャン☆オペラから 20 世紀三部作へ——維新派と 1920 年代のドイツ・アヴァンギャルド」ミュージアムレクチャー: 維新派という現象「ろじ式」, 大阪大学総合学術博物館, 2009/11
- 市川明, 渡辺学, 山本佳樹他「interactiv な学術交流を目指して」200 回記念シンポジウム:いま,ゲルマニスティクは何を発信するか, 阪神ドイツ文学会, 2009/7(『ドイツ文学論攷』51, pp. 149-151, 2009/12)
- 市川明, Volker Ludwig, 岩崎正裕他「グリプス劇場と青少年演劇」ベルリン 2 つの視線 国際演劇交流セミナー2009「ドイツ特集」シンポジウム:ドイツにおける青少年演劇, 日本演出者協会, 2009/7
- 市川明, Roland Koberg, Helene Waldmann 他「ベルリンの演劇」シンポジウム:ドイツの演劇, 日本演出者協会, ドイツ文化センター, 2008/11
- Ichikawa, Akira, “Vom *Taniko* zum *Jasager* – Brecht und No-Theater” Brecht-Symposium: Ästhetische Betrachtung von Brechts Bearbeitungen, Koreanische Brecht-Gesellschaft, 2008/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 市川明, 浅岡泰子, 宇佐美幸彦 マックス・ダウテンダイ賞, 東京ドイツ文化センター, 2003/3
- 市川明 ドイツ語学文学振興会奨励賞, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 1982/4

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005 年度～2008 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:市川明

課題番号: 17320049

研究題目: プレヒトと音楽——演劇学と音楽学の視点からの総合的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 704,000 円 間接経費 211,200 円 (2008 年度は繰越延長事業)

研究の目的:

文学・演劇研究者と音楽研究者のコラボレーションにより、プレヒトの詩、戯曲におけるテキストと音楽の関係・共生を探る。従来のドイツ文学・演劇研究でまったく研究されてこなかったプレヒトと音楽の関係に光を当て、プレヒトと彼のパートナーである作曲家との共同創作の実態を解明する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人日本学術振興会・科学研究費委員会・専門委員	2010 年 1 月～現在に至る
日本独文学会第 6 回学会賞、ドイツ語研究書・論文部門選考委員会委員長	2008 年 10 月～2009 年 6 月
AICT(国際演劇評論家協会)演劇評論賞・選考委員	2006 年 12 月～2009 年 7 月

日本演劇学会・理事	2006年4月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・機関誌『ひろの』編集委員	2006年4月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・評議員	2004年4月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター・演劇評論誌『シアターアーツ』編集委員	2004年4月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター関西支部・演劇評論誌『act』発行人	2004年4月～2009年5月
演劇創造集団プレヒト・ケラー・代表幹事	2001年12月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター・関西支部長	1996年4月～2009年5月
阪神ドイツ文学会・幹事	1994年4月～2008年4月

3. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科(音楽学)卒業。同大学院修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院(ハンガリー)客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授(後、准教授)、2010年4月より現職。専攻:音楽学。

3-1. 論文

- 伊東信宏 「バルトーク《44の二重奏曲》の成立:ドフラインとの書簡を中心に」『大阪大学大学院文学研究科紀要』50, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 69-89, 2010/3
- 伊東信宏 「バルトーク《44の二重奏曲》における民俗音楽素材の選択」『阪大音楽学報』8, 大阪大学文学部音楽学研究室, pp. 207-217, 2010/3
- Ito, Nobuhiro, “Bulgarian Zurna in traditional music and Pop-folk” Sam-Ang Sam, Yoshitaka Terada(共編) *International Symposium “Double-reed Instruments en Eurasia: History, Context, and Representation” Proceedings*, National Institutes for the Humanities Cooperative Research Project, pp. 29-37, 2010/3
- 伊東信宏 「ロマの楽師に成る:エネスクにおけるヴァイオリンを弾く身体」山田陽一(編)『音楽する身体』昭和堂, pp. 69-86, 2008/8
- Ito, Nobuhiro, “Az utolso hanyizo lancerszemek: Bartok, Negyvennegy duo, 8.sz - a “tot nota” eredeti nepzenei forrasa” *Parlando*, vol.50-6, pp. 7-10, 2008/6

3-2. 著書

- 伊東信宏 『中東欧音楽の回路:ロマ・クレズマー・20世紀の前衛』岩波書店, 217p., 2009/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 伊東信宏 「ベズイデンホウト」(朝日新聞文化欄, 平成22年2月26日夕刊)
- 伊東信宏 「コンチェルト・コペンハーゲン」(朝日新聞文化欄, 平成22年1月29日夕刊)
- 伊東信宏 「飯森範親+東京交響楽団「ブrouチェク氏の旅行」」(朝日新聞文化欄, 平成21年12月18日夕刊)
- 伊東信宏 「音楽の東と西」『阪大ニューズレター』No.46, pp.17, 2009/12
- 伊東信宏 「ミンコフスキ指揮ルーブル宮音楽隊」(朝日新聞文化欄, 平成21年11月13日夕刊)
- 伊東信宏 「言葉でつなぐ人」日本室内楽振興財団機関誌『奏』32, pp. 11-12, 2009/10
- 伊東信宏 「ギター・フェスタ2009」(朝日新聞文化欄, 平成21年8月14日夕刊)
- 伊東信宏 「村上春樹『1Q84』——物語の中の《シンフォニエッタ》」『音楽の友』平成21年8月号, pp.101
- 伊東信宏 「ビルバオ交響楽団」(朝日新聞文化欄, 平成21年7月17日夕刊)
- 伊東信宏 没後200年ハイドン特集「クラヴィーア・ソナタ」『レコード芸術』平成21年6月号, pp.72-74
- 伊東信宏 「バルトークの『基礎的実験期』」高橋悠治CD『バルトーク初期ピアノ作品集』解説, フォンテック, 2009/6
- 伊東信宏 「デヤン・ラツィック ピアノリサイタル」(朝日新聞文化欄, 平成21年5月29日夕刊)

- 伊東信宏 「キーシン ピアノリサイタル」(朝日新聞文化欄, 平成 21 年 4 月 17 日夕刊)
- 伊東信宏 「ブルガリア、リブノヴォ村の結婚式で」日本室内楽振興財団機関誌『奏』31, pp. 9-10, 2009/4
- 伊東信宏 「藝術とは癒しなのか？」吉岡洋、岡田暁生編『文学・芸術は何のためにあるのか？』東信堂, pp.71-80, 2009/3
- 伊東信宏 「コパチンスカヤとL氏:あるディレクタントの横顔」『紫明』第24号, pp.42-46,2009/3
- 伊東信宏 「プログラムノート」(ハイドン: 十字架上のキリストの最後の7つの言葉ほか解説、ジョス・ファン・インマゼール フォルテピ
アノリサイタル)トッパンホール, 2009/3
- 伊東信宏 「ル・グラン・マカーブル」(朝日新聞文化欄, 平成 21 年 2 月 20 日夕刊)
- 伊東信宏 「上岡敏之指揮 読売日本交響楽団」(朝日新聞文化欄, 平成 21 年 2 月 6 日夕刊)
- 伊東信宏 「北トピア国際音楽祭 ハイドン『騎士オランダ』」(朝日新聞文化欄, 平成 20 年 11 月 7 日夕刊)
- 伊東信宏 「心中の場とズルナ」『やそしま』第2号, pp.71-75, 2008/11
- 伊東信宏 「ルイスダダのショパン『マズルカ』」(朝日新聞文化欄, 平成 20 年 10 月 10 日夕刊)
- 伊東信宏 「ズルナと武満」日本室内楽振興財団機関誌『奏』30, pp. 15-16, 2008/10
- 伊東信宏 「エトベシュ指揮NHK交響楽団」(朝日新聞文化欄, 平成 20 年 9 月 26 日夕刊)
- 伊東信宏 「パリ国立オペラ『消えた男の日記』『青ひげ公の城』」(朝日新聞文化欄, 平成 20 年 8 月 1 日夕刊)
- 伊東信宏 「クレメンス・ハーゲン&シュテファン・ブラダー」(朝日新聞文化欄, 平成 20 年 5 月 13 日夕刊)
- 伊東信宏 「バトリシア・プティボン ソプラノリサイタル」(朝日新聞文化欄, 平成 20 年 4 月 11 日夕刊)
- 伊東信宏 「『もっと音楽を聴かせてください』」日本室内楽振興財団機関誌『奏』29, pp. 15-16, 2008/4

3-4. 口頭発表

- Ito, Nobuhiro, "Bulgarian Zurna in traditional music and in Pop-folk" International Symposium :Double-reed Instruments in Eurasia: History, Context and Representation, National Institute for the Humanities, Pannasastra University of Cambodia, 2009/12(*International Symposium 'Double-reed Instruments in Eurasia: History, Context and Representation' Proceedings*, pp. 29-37, 2010/3)
- 伊東信宏 「ハイドンのクラヴィーア・ソナタについて」演奏表現学会講演会, 昭和音楽大学, 2009/9
- 伊東信宏 「民俗文化のエコロジー:ルーマニア、ロマのプラス・バンド顛末」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト研究会:アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2009/7
- 伊東信宏 「バルトークの民俗音楽編曲:原曲特定、編曲過程、ストラヴィンスキーとの関係」国際日本文化研究センター共同研究会:民謡研究の新しい方向, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター, 2009/6(『シンポジウム「ユーラシアと日本」報告書』pp. 46-49, 2010/2)
- 伊東信宏 「ブルガリアの『チャルガ』=『ポップフォーク』におけるロマの位置」人間文化研究機構連携研究・平成 20 年度国際シンポジウム:パフォーマンスと文化, 人間文化研究機構, 国立歴史民俗博物館, 2009/3
- 吉成順, 輪島祐介, 伊東信宏他 「「世界音楽」再考」日本音楽学会第 59 回全国大会, 日本音楽学会, 国立音楽大学, 2008/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 伊東信宏 木村重信民族芸術学会賞, 民族芸術学会, 2010/5
- 伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2
- 伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12
- 伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11
- 伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

- 3-6-1. 2008 年度~2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:伊東信宏
課題番号: 20520121

研究題目: ジェルジ・リゲティ研究: 中東欧音楽史の視点から

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2009 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究課題は、20 世紀後半を代表する作曲家の一人、ジェルジ・リゲティ(1923-2006 年)について、その創作を彼の文化的背景である中東欧音楽の文脈のなかで明らかにしようとするものである。具体的には、A)幼少期から学生時代にかけてのリゲティの音楽的環境を明らかにし、そこでの民俗音楽の役割などを検討すること、B)第二次大戦後の「前衛音楽」のサークルにおけるリゲティの位置を、ブレーズやシュトックハウゼンを参照軸としながら明確にすること、C)リゲティ自身の「ヨーロッパ音楽」理解を彼の著作や音楽作品の分析によって明らかにすること、を目指す。そして、最終的にこれらを総合する論点として D)リゲティ唯一のオペラ《ル・グラン・マカーブル》を中心とする彼の諸作品を、中東欧音楽の視点から解釈することで、これまでとは次元の異なる作品理解を導く、というのが本課題の目的である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本音楽学会・関西支部長	2007 年 4 月～現在に至る
民族芸術学会・理事	2006 年 4 月～現在に至る
サントリー芸術財団・専門委員	2001 年 4 月～現在に至る
朝日新聞音楽懇話会・委員	2000 年 4 月～現在に至る

4. 山田 高誌 助教

1977 年、西宮市生まれ。修士(文学)。専門は、西洋音楽史、オペラ史。早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業(1999)。大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻(音楽学)博士前期課程修了(2002)、同大学院博士後期課程単位修得退学(2006)。2002 年度、花王芸術・科学財団より助成を受け、イタリア国立ナポリ音楽院附属図書館にて長期調査を行い、国立バリー音楽院・上級ディプロマ取得(記譜史、2004)。また国立バジリカータ大学大学院修士課程(古楽の実践と理論)に学ぶ。(独)日本学術振興会特別研究員 DC2(大阪大学)、SPD(東京芸術大学)、同会海外特別研究員(バリー音楽院附属音楽研究所“カーサ・ピッチンニ”)を経て、2010 年より現職。

4-1. 論文

Yamada, Takashi, “Giuseppe Giordani al Teatro del Fondo di Napoli nel 1781: I rapporti con l’impresario Aniello Riccardi”

Francesco Paolo Russo(編) *La figura e l’opera di Giuseppe Giordani (Napoli 1751- Fermo 1798)*, (Convegno Internazionale su Giuseppe Giordani), 2008, Conservatorio di musica di Fano “G.B. Pergolesi”, 印刷中

山田高誌 「18 世紀ナポリにおける諸劇場所属“コピスタ”の同定」(編)『阪大音楽学報』8, 大阪大学音楽学研究室, 2010/3

山田高誌 「史料が語るチマローザの生涯:《秘密の結婚》に至る不滅の栄光への道、そして翻弄された晩年」山田高誌(編)『チマローザの世界:《秘密の結婚》の成立と上演のコンテキスト、パリ、ウィーン、そしてナポリ』日本イタリア古楽協会, pp. 9-22, 2008/10

山田高誌 「《秘密の結婚》ナポリ初演版台本、楽譜史料」山田高誌(編)『チマローザの世界:《秘密の結婚》の成立と上演のコンテキスト、パリ、ウィーン、そしてナポリ』日本イタリア古楽協会, pp. 32-38, 2008/10

山田高誌 「1793 年のナポリ・フィオレンティーニ劇場:銀行史料より同定された、歌手、オーケストラ、そして観客」山田高誌(編)『チマローザの世界:《秘密の結婚》の成立と上演のコンテキスト、パリ、ウィーン、そしてナポリ』日本イタリア古楽協会, pp. 39-58, 2008/10

4-2. 著書

Yamada, Takashi 他(共編), *Domenico Cimarosa, 《Voce Coelis》*, CD, Bongiovanni (Bologna), pp. 7-27, 2009/4(筆者と Francesco Quattrocchi による楽譜校訂(共著)による世界復活演奏の録音 CD、および論文。演奏は Francesco Quattrocchi & Orchestra Sinfonica Abruzzese)

山田高誌他(編)『チマローザの世界:《秘密の結婚》の成立と上演のコンテクスト、パリ、ウィーン、そしてナポリ』日本イタリア古楽協会, pp. 1-22, pp. 32-58, 2008/10

Yamada, Takashi 他(共編), *Domenico Cimarosa, 《Atene edificata (S.Petersburg, 1788) & Coro dei guerrieri(S.Petersburg, 1791)》*, CD, Bongiovanni (Bologna), pp. 7-35, 2008/5(筆者と Francesco Quattrocchi による楽譜校訂(共著)による世界復活演奏の録音 CD、および論文。演奏は Francesco Quattrocchi & Alio Tempore Ensemble)

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

山田高誌「1799年のナポリ王国王政復古時における D.チマローザの“不運”:フリーメーソンとの関わりから」待兼山芸術学会年次大会, 待兼山芸術学会, 大阪大学, 2010/3

山田高誌「ヘンデルと同時代のイタリア人作曲家:ポルポラの《アグリッピーナ》を例に」日本イタリア古楽協会「ヘンデル・プロジェクト」:日本イタリア古楽協会「ヘンデル・プロジェクト」, 日本イタリア古楽協会, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2009/10(『日本イタリア古楽協会ニューズレター』)

山田高誌「1820年代のイタリア・オペラ:フェリーチェ・ロマーニの作品傾向より」日本音楽学会第60回全国大会:シンポジウム「メンデルスゾーン」, 日本音楽学会, 大阪大学, 2009/10

Yamada, Takashi, ““Misfortune” in the Ancient Regime for the very first “artist” in the time of Enlightenment, Domenico Cimarosa”The Academy of Europe / Academia Europaea, 21th Annual Convention:The risk of intellectual life: Sciences, Humanities and Society in the 18th-19th Century Naples, The Academy of Europe / Academia Europaea, 21th Annual Convention, University of Naples – Santissima Marcellino Church, 2009/9

山田高誌「オペラ観劇の「仕組み」:18世紀末から19世紀にかけてのナポリの諸劇場のチケット代金、および観客を例として」早稲田大学演劇博物館 GCOE「オペラ研究会」第81回定例研究会, 早稲田大学演劇博物館 GCOE「オペラ研究会」, 早稲田大学, 2009/4

Yamada, Takashi, “Una ricostruzione dei teatri di napoli; intorno ai compositori pugliesi del Settecento”La ricerca sui musicisti nati in Puglia(プリア州生まれの音楽家に関する研究), バリー市——Istituto di Bibliografia Musicale di Puglia(IBIMUS) 主催古楽祭“Musike”, イタリア国立バリー音楽院“N. Piccinni”附属音楽研究所 Conservatorio di musica di Bari, Centro Ricerche Casa Piccinni, 2008/11

Yamada, Takashi, “Il sistema produttivo del Real Teatro del Fondo”Drammaturgie buffe: Paisiello e le strategie del comico ブッフアのドラマトゥルジー:パイジエッロと喜劇の戦略, ターラント市パイジエッロ・フェスティバル, イタリア国立バリー大学文学部ターラント分校 Facolta delle Lettere dell’Universita di Bari (sede di Taranto) & Comune di Taranto ターラント市役所, 2008/11

Yamada, Takashi, “Giuseppe Giordani al Teatro del Fondo nel 1781: i rapporti con l’impresario Aniello Riccardi: 1781年、王立フオンド劇場におけるジュゼッペ・ジョルダノ:興行師アニエッロ・リッカルディとの関係”ジュゼッペ・ジョルダノに関する国際研究集会, イタリア国立ファーノ音楽院“G.B.Pergolesi”, イタリア国立ファーノ音楽院 Conservatorio di musica di Fano “G.B.Pergolesi”, 2008/10(*Giuseppe Giordani al Teatro del Fondo di Napoli nel 1781: i rapporti con l’impresario Aniello Riccardi, ’ in La figura e l’opera di Giuseppe Giordani (Napoli 1751 – Fermo 1798), FRANCESCO PAOLO RUSSO (ed), (Atti di convegno internazionale di studi, Conservatorio di musica di Fano 《G.B. Pergolesi》, 3-5 october 2008),*)

山田高誌「ナポリの《秘密の結婚》:初演楽譜と、その上演システム」日本音楽学会関東支部特別例会:シンポジウム「《秘密の結婚》の成立と伝播——ロンドン、パリ、ウィーン、そしてナポリ」, 日本音楽学会, 立教大学, 2008/10(『チマローザの世界:《秘密の結婚》の成立と上演のコンテクスト、パリ、ウィーン、そしてナポリ』pp. 1-60, 2008/10)

Yamada, Takashi, “A newly-discovered Neapolitan version of Il Matrimonio segreto (Napoli, 1793) at the Kunitachi Music College in Tokyo.”国際年次大会, 国際音楽図書資料情報協会 IAML, イタリア国立ナポリ音楽院 Conservatorio di musica di Napoli “S.Pietro a Majella”, 2008/7

山田高誌 「1770 年代以降にみられるナポリの喜劇オペラの“高まり”と、それを支えた人々：“興行師”ジェンナーロ・ブランキ(活動 1764-1784) と、“観客”ロチェッラ＝カラーファ大公妃リヴィア・ドーリア(1745-1779)のある関係を手がかりに」日本 18 世紀学会 全国大会:共通論題「18 世紀オペラへの学際的アプローチ」, 日本 18 世紀学会, 大分大学, 2008/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

Yamada, Takashi Premio OPERA IMAIE 2007(クラシック・現代音楽部門大賞), Istituto per la tutela dei diritti degli artisti interpreti esecutori (IMAIE) (イタリア表演芸術家著作権保護協会主催・第 2 回イタリア国内 CD/DVD コンテスト(2006/7 年度), 2007/9/23

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

Istituto Nazionale per lo Sviluppo Musicale nel Mezzogiorno (Roma)・共同研究員	2008 年 9 月～2010 年 3 月
Accademia Lirica Toscana “Domenico Cimarosa” (Toscana)・学術委員	2008 年 9 月～現在に至る
日本イタリア古楽協会・運営委員	2008 年 4 月～現在に至る

2-23 美術史学

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 4(うち兼任 1) 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：奥平 俊六、圀府寺 司、橋爪 節也(兼任)、藤岡 穰

准教授：岡田 裕成

助教：濱住 真有

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*								
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
35	12	10	0	0	0	6	3	0

※うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2008年度～2009年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
'08	8	8	4	1	3
'09	21	1	1	0	1
小計	29	9	5	1	4

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点を

ひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館でのインターンシップなどの積極的利用を促進する。

2. 研究

教員は、一人平均で年間 1 本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1 人平均で年間 1 本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、教育実践センターにおける教育に協力し、その結果、2009 年度 1 学期に教員の 1 人が共通教育賞を受賞した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。また、オプションとして日本画実習を行い、素材に直接触れ、自ら技法等を確認する機会を提供した。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促し、所期の目標を達成した。この間大学院生 3 名が大阪市立美術館でのインターンシップを修了した。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間 3 名がヨーロッパに留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、ニューヨーク市立大学から印象派・ポスト印象派研究を専門とするヨアキム・ピサロ教授を招き、国際的な水準の研究および講義に学生・院生たちが接する機会を設け、この他、原始美術(鳴門教育大学小川勝准教授)、中国版画史(上智大学小林宏光教授)、中国仏教美術史(早稲田大学肥田路美教授)の専門家をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

2. 研究

各教員とも、著書、論文、作品解説等を目標通り、あるいは目標以上に発表することができた。また、5 人の専任教員全員が科学研究費の助成を受け、当該の研究を推進した(1 人が基盤研究(A)、2 人が基盤研究(B)の研究代表者)。このほか、教員 1 人は人間科学研究科と合同で申請し、採択されたグローバル COE「コンフリクトの人文学」の事業推進担当者としての任務を果たし、別の教員 1 人は文部科学省特定領域研究の研究分担者として、関連の国際シンポジウムの開催事務局を担当した。また、2008 年度には韓国国立中央博物館の閔丙贊氏を学術振興会の外国人招へい研究者(長期)として招聘し、共同研究を推進した。なお、この間、美術史学会常任委員、民族芸術学会理事などの役職をつとめ、学会の運営にも協力した。

博士後期課程の学生は、論文等 19 件、口頭発表 13 件と、美術史学の専門分野の大学院として、他大学と比較してもめざましい研究成果を挙げる事ができた。

3. 社会連携

国、地方公共団体および私立の博物館、美術館の研究員、評議員などをつとめ、さらに地方史の編纂事業、文化財審議委員会などにも参画し、それぞれの事業に協力した。また、教員の1人が2008年にサン・パウロ大学で開かれた日系移民100周年記念シンポジウムの開催に協力した。

IV. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。教員の1人が2009年度に共通教育賞を受賞したことは活動の概要に記した通りであり、さらに2008年度には卒業生が楠本賞を受賞した。なお、学内からの大学院進学者が2008年度卒業生では1人と少なかったが、2009年度卒業生では5人を数え、こうした点でも、教育については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。とりわけ、教員1名、大学院生1名が2009年度美術史学会賞を受賞し、大学院生の1名が2009年度国華奨励賞を受賞するなど、論文等の数のみならず、その質においてもきわめて高い評価を博したことが特筆される。加えて、5人の専任教員全員が科学研究費の助成を受け、2名が学術振興会特別研究員に採用されるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。外国人研究者の招聘など、国際的な水準の研究環境を整えるという目標も達成できた。ただし、博士の学位取得者が1名のみであった点は、今後への反省点としたい。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
'08	1	0	1
'09	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

福島(城市)真理子 「室町水墨画と五山文学——十五世紀後半における周文派と禅林の詩画軸制作システム——」
2009/3
主査：藤岡穰 副査：橋爪節也、山本英男(京都国立博物館)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	3(3)	4(1)	0(0)	2(1)	7(0)	16(5)
'09	3(3)	1(0)	0(0)	1(1)	2(0)	7(4)
計	6(6)	5(1)	0(0)	3(2)	9(0)	23(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	1	5	4	0	1	11
'09	0	5	6	0	1	12
計	1	10	10	0	2	23

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

〔博士後期〕

青木智史・出川哲朗・長友恒人「黄冶唐三彩窯跡出土陶片の熱ルミネッセンス (TL) 年代測定」『奈良教育大学紀要 自然科学』57(2), pp85-91, 2008/10

金子岳史「「はね馬」と隨身」『美術史』165, pp.85-98, 2008/10

木下京子「池玉瀾の画業の一考察」慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編『人文科学』23, pp.205-242, 2008/5

郷司泰仁「朝鮮通信使随行画員——日本人との関わり」『アジア遊学 120 朝鮮王朝の絵画 東アジアの視点から』勉誠出版, 2009/3

城市(福島)真理子「雪舟と岳翁——『周文』の記憶」山口県立美術館/雪舟研究会編『天開圖畫』7(2008年度), pp.10-32, 2009/3

鈴木慈子「カミーユ・ピサロの晩年期」『フィロカリア』第26号, pp.85-113, 2009/3

鈴木雅子「来迎阿弥陀と滅罪についての一試論」『フィロカリア』26, pp.69-84, 2009/3

鈴木雅子「冥府からの死者——持幡童子の源流をめぐって——」『仏教美術における絵画と彫刻』(平成18-20年度科学研究費補助金基盤研究(C)18520086 研究成果報告書), pp.37-47, 2009/3

濱住真有「陶山雅文筆『松平直政公初陣之図』について」大石学編『高家前田家の総合的研究——近世官僚制とアーカイブズ——』東京堂出版, pp.257-276, 2008/12

古谷優子「資料紹介「岡田神社所蔵北野天神縁起絵巻」」『北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告 B 類歴史』6, 2009/3

古谷優子「福聚寺所蔵 達磨・韋駄天・華光菩薩画像について——范道生の絵画と彫刻——」『仏教美術における絵画と彫刻』(平成18-20年度科学研究費補助金基盤研究(C)18520086 研究成果報告書), pp.61-67, 2009/3

森實久美子「東アジアにおける説法印毘盧舎那如来をめぐって」『仏教美術における絵画と彫刻』(平成18-20年度科学研究費補助金基盤研究(C)18520086 研究成果報告書), pp.48-60, 2009/3

三田覚之「法隆寺献納宝物「刺繍残片」の基礎的考察」『仏教美術における絵画と彫刻』(平成18-20年度科学研究費補助

- 金基盤研究(C)18520086 研究成果報告書, pp.68-82, 2009/3
- 山口隆介「定慶様菩薩像の再検討」『仏教芸術』299, pp.89-111, 2008/7
- 山口隆介「大報恩寺六観音像に関する一考察——十一面観音像と聖観音像における模刻の問題を中心に——」『待兼山論叢〈美学篇〉』42, pp.53-72, 2008/12
- 山口隆介「鎌倉時代前期の十二神将造像と図像」『仏教美術における絵画と彫刻』(平成18・20年度科学研究費補助金基盤研究(C)18520086 研究成果報告書), pp.15-36, 2009/3
- 【2009年度】
- 〔博士後期〕
- 磯谷有亮「贖われた詩想——ギュスターヴ・モロー作《死せる豎琴》について——」『フィロカリア』第27号, pp.77-103, 2010/3
- 上原真依「カルロ・クリヴェッリ作《カステル・トロジーノ祭壇画》の再構成」『美術史』美術史学会, 第168号, pp.424-443, 2010/3
- 金子岳史「厩図屏風の情景——風俗表現を中心に——」『フィロカリア』第27号, pp.47-75, 2010/3
- 鈴木慈子「1958年の吉原治良 戦後日本美術におけるグローバリゼーション」『交錯するアート・メディア 大阪大学グローバルCOEプログラム コンフリクトの人文国際研究教育拠点2007-2009年度報告書』 pp.75-84, 2010/3
- 古谷優子「画師 高木豊水」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告 B類歴史』第7号, pp.94-72, 2010/3
- 森實久美子「華嚴海會諸聖衆曼荼羅についての一考察——圖様の源泉と思想背景を中心に」『國華』1362号, pp.3-19, 2009/4
- 森實久美子「高山寺における華嚴経絵画の制作について」『鹿島美術財団年報(26)(別冊)2008年度版』 pp.555-565, 2009/6

(2)口頭発表

- 【2008年度】
- 〔博士前期〕
- 磯谷有亮「一九三七年パリ万国博覧会の美術と政治——ジャック・リブシッツ作《ハゲワシを絞めつけるプロメテウス》を例として——」第18回待兼山藝術学会, 2008/4/12
- 〔博士後期〕
- 青木智史・長友恒人 ポスターセッション解説「TL法を用いた磁器の年代測定にみられる問題点の検討」日本文化財科学学会第25回大会, 鹿児島国際大学, 2008/6/14・15
- 赤木美智「黄檗画僧 河村若芝の研究——芦葉達磨図を中心に——」海域アジア史研究, 大阪大学, 2008/10/25
- 上原真依「カルロ・クリヴェッリとその工房作《カステル・トロジーノ祭壇画》再構成」美術史学会西支部例会, 大阪市立東洋陶磁美術館, 2008/11/15
- 郷司泰仁「天台大師靈応図に関する一試論——「天台大師観音迎接図」をめぐって——」歴史美術史懇話会, 大阪市立美術館, 2008/5/6
- 郷司泰仁「朝鮮通信使随行画員——日本人に与えたもの——」歴史美術史懇話会, 大阪市立美術館, 2008/12/13
- 古谷優子「京都・万寿寺所蔵涅槃変相図について」九州藝術学会, 九州産業大学, 2008/7/5
- 三田覚之「法隆寺献納宝物 金銅灌頂幡の機能と制作背景」待兼山芸術学会, 大阪大学, 2009/3/14
- 森實久美子「華嚴海會諸聖衆曼荼羅(京都・高山寺蔵)についての一試論」海域アジア史研究会, 大阪大学, 2008/10/25
- 森實久美子「『華嚴海會諸聖衆曼荼羅(京都・高山寺蔵)』高麗華嚴」韓国仏教美術史学会, 韓国・通度寺, 2008/11/4
- 萬屋健司 スライドトーク「ヴィルヘルム・ハンマースホイ——静かなる詩情」国立西洋美術館, 2008/11/7, 21
- 【2009年度】
- 〔博士前期〕
- 寺澤慎吾「『善光寺参詣曼荼羅』について——周辺景観の問題を中心に——」物語／絵画研究会, 千葉大学, 2009/12/5
- 〔博士後期〕
- 赤木美智「河村若芝と初期文人画家との関りについて——祇園南海と柳沢淇園を中心に——」美術史学会東支部例会, 東

京大学, 2010/3/27

上原真依「19世紀イタリアにおける美術品流通——カルロ・クリヴェッリ作品の事例から——」待兼山藝術学会, 大阪大学, 2010/3/27

郷司泰仁「朝鮮通信使に随行した画員にみる江戸時代の日韓交流」仙台市博物館・東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学術的創生——総括班共催公開ワークショップ「朝鮮文化と日本——数学・書籍・美術——一つの事例から」仙台市博物館, 2009/4/26

郷司泰仁「米国・ボストン美術館所蔵「北斗九曜降臨図」(2幅)に関する図像的考察」歴史美術史懇話会, 大阪市立美術館, 2009/9/26

郷司泰仁「延暦寺所蔵「仏頂金輪曼荼羅図」について」歴史美術史懇話会, 大阪市立美術館, 2010/1/10

郷司泰仁「延暦寺伝来の不動明王像をめぐって——絵画・工芸品を中心に——」朝日カルチャーセンター名古屋, 2010/3/6

田中竜也「塚ゆかりの日本画家について」近代大阪美術研究会, 堺市立文化館, 2010/3/21

古谷優子「小倉・福聚寺所蔵四聖像と什物簿について」中世美術研究会, 長崎歴史文化博物館, 2010/3/6

三田覚之「法隆寺献納宝物 金銅灌頂幡の造立典拠と制作背景」東方学会, 日本教育会館, 2009/5/15

三田覚之「法隆寺献納宝物 繡仏裂の分類と制作背景」古画研究会, 灘区民会館, 2009/10/25

三本周作「鎌倉時代前・中期慶派作例の金属製荘嚴具と饅仏師」美術史学会西支部例会, 福岡市美術館, 2010/1/23

(3)その他(書評・翻訳など)

【2008年度】

〔博士前期〕

磯谷有亮『Self and Other アジアとヨーロッパの肖像』展覧会図録翻訳, 国立国際美術館ほか, pp. 8-9, 47, 129, 2008/9

磯谷有亮訳 ロバート・ジェンセン「伝播の速度 キュビズム、ナショナリズム、トランスナショナリズム」『西洋美術研究』No.14, pp.82-105, 2008/9

池田絵美子『Self and Other アジアとヨーロッパの肖像』展覧会図録翻訳, 国立国際美術館ほか, pp. 213-217, 2008/9

〔博士後期〕

赤木美智『国宝三井寺展』展覧会図録作品解説, 大阪市立美術館, 図 215, 2008/4

河内優介『聖徳太子ゆかりの名宝』展覧会図録作品解説, 大阪市立美術館, 図 101, 102, 2008/4

鈴木慈子『Self and Other アジアとヨーロッパの肖像』展覧会図録翻訳, 国立国際美術館ほか, pp.30-35, 2008/9

鈴木慈子訳 ジェイニー・アンダーソン「国際美術史学会メルボルン大会報告 つながり合う世界の美術史: 相乗効果と新しい動向」『西洋美術研究』No.14, pp. 157-165, 2008/9

萬屋健司「ピーダ・イルステズ年譜」『ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情』展覧会図録, 国立西洋美術館, pp.184-185, 2008/9

萬屋健司「カール・ホルスーウ年譜」『ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情』展覧会図録, 国立西洋美術館, pp.186-187, 2008/9

萬屋健司『ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情』展覧会図録作品解説, 国立西洋美術館, pp. 45, 51, 56, 62, 70, 84, 92, 94, 96, 103, 116, 126, 131, 134, 136, 162, 164, 165, 171-173, 184-187, 2008/9

萬屋健司「孤高の画家、ハンマースホイの室内画」『住む。』泰文館, no. 27, pp. 90-93, 2008/9

萬屋健司訳 アネ＝ビアギデ・フォンスマーク「ヴィルヘルム・ハンマースホイ——デンマーク黄金期美術を超えて」『ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情』展覧会図録, 国立西洋美術館, pp. 25-31, 2008/9

【2009年度】

〔博士前期〕

金岡直子「贖われた詩想——ギュスターヴ・モロー作《死せる豎琴》について——」『フィロカリア』第27号, pp.77-103, 2010/3

〔博士後期〕

赤木美智『道教の美術』展覧会図録作品解説, 大阪市立美術館, 図 10, 181, 262, 269, 289, 292, 314, 358, 370, 2009/7

赤木美智『江戸園芸花尽し』展覧会図録作品解説, 太田記念美術館, pp.136-140, 2009/10
 赤木美智『江戸の彩り』展覧会図録作品解説, 太田記念美術館, 作品番号 105, 122-129, 2010/1
 濱住真有『大阪美術青年会九十周年記念 池大雅・与謝蕪村名品撰』展覧会図録作品解説, 大阪美術倶楽部・大阪美術青年会, 図 1-18, 2009/6
 古谷優子『ひろば北九州』所蔵品シリーズ「歴史」ゾーン(101)「高島北海の花弁図」(財)北九州市芸術文化振興財団, pp.38, 2009/8
 古谷優子『ひろば北九州』写真グラフ「安川家伝来の品々」(財)北九州市芸術文化振興財団, pp.27-30, 2010/2
 古谷優子『ひろば北九州』所蔵品シリーズ「歴史」ゾーン(108)「木下藤吉郎柴田勝家の足を揉む図」(財)北九州市芸術文化振興財団, pp.38, 2010/3
 古谷優子 西日本新聞北九州版連載「画師 高木豊水」 2010/3/13, 20, 27 ※(全4回)4/3号まで
 森實久美子『おん祭と春日信仰の美術』展覧会図録作品解, pp.46, 52, 53, 54, 奈良国立博物館, 2009/12
 山口隆介『週間朝日百科 国宝の美 28号 快慶と定慶』作品解説, 朝日新聞出版, pp24-27, 32-34, 2010/2
 山口隆介『大本山光明寺と浄土教美術』特別展図録作品解説, 鎌倉国宝館, pp16-40, 106-112, 2009/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

三田覚之 第7回『美術史』論文賞 美術史学会 2008年度
 森實久美子 國華奨励賞 國華社・朝日新聞社 2009年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2008年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)
 2009年度 PD: 1名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2008年度 学部: 1名 大学院: 5名 (計6名)
 2009年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(2008年度～2009年度の大学院在籍者・特別研究学生・研究生で、大学・短大・高専の常勤職員として就職した者について)

青木智史 博士後期課程 奈良教育大学 助教 2009/4
 赤木美智 博士後期課程 太田記念美術館 学芸員 2009/4
 石沢 俊 博士前期課程 神戸市教育委員会(神戸市立博物館) 学芸員 2009/4
 福島(城市)真理子 博士後期課程 野村美術館 学芸員 2009/9
 萬屋健司 博士後期課程 山口県立美術館 学芸員 2009/10
 濱住真有 博士後期課程 大阪大学大学院文学研究科 助教 2010/4
 森實久美子 博士後期課程 九州国立博物館 研究員 2010/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2008年度～2009年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5名
 2008年度: 3名 2009年度: 2名
 <内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 2名 アーティスト 2名 中・高等学校の教員 1名
 その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2008 年度 : 2 名 2009 年度 : 0 名

9. 刊行物

2008 年度 『フィロカリア』第 26 号

2009 年度 『フィロカリア』第 27 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

講演会 ジョアキム・ピサロ氏招聘	2008 年 8 月
美術史学会西支部例会 担当委員 岡田裕成	2008 年 11 月
講演会 河村英和氏招聘	2009 年 1 月
美術史学会西支部例会 担当委員 橋爪節也	2009 年 3 月
美術史学会西支部例会 担当委員 罔府寺司	2009 年 7 月
国際学術シンポジウム 舍利と羅漢——聖地寧波をめぐる美術——事務局	2009 年 8 月
美術史学会西支部例会 担当委員 橋爪節也	2009 年 11 月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学文学部(美術史)卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。文学修士。國華社研究員、大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て現職。京都国立博物館客員研究員、大和文華館評議員など。専攻:日本美術史／中近世絵画史。

1-1. 論文

奥平俊六「自閉症の人はなぜ電車が好きなのか——絵画作品をてがかりに——」藤田治彦『芸術と福祉——アーティストとしての人間——』大阪大学出版会, pp. 263-286, 2009/6

奥平俊六「コミュニティ・アート美術部門の活動——アウトサイダー・アートをめぐって——」藤田治彦『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究』(日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト), pp. 292-299, 2009/3

1-2. 著書

奥平俊六, 関口敦仁(監修)『デジタル浴中浴外図 島根県美本』淡交社, pp. 23-45, 2009/11

奥平俊六, 成澤勝嗣, 日高薫他(監修)『すぐわかる人物・ことば別 桃山時代の美術』東京美術, pp. 1-144, 2009/7

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六(書評)「大石学編『高家前田家の総合的研究——近世官僚制とアーカイブズ——』」『紫明』25, 紫明の会, 2009/9

奥平俊六(講座紹介)「懷徳堂ゆかりの絵画」『記念会だより』82, 懷徳堂記念会, 2009/3

奥平俊六(書評)「日高薫『異国の表象——近世輸出漆器の想像力』」『紫明』24, 紫明の会, 2009/3

奥平俊六(展覧会評)「狂斎のいた近代」『京都国立博物館たより』160, 京都国立博物館, 2008/10

奥平俊六(書評)「辻惟雄『岩佐又兵衛——浮世絵をつくった男の謎』」小山泰三『紫明』23, 紫明の会, p. 88, 2008/9

1-4. 口頭発表

奥平俊六 「若沖の絵と家業」茨木市史特別講演会, 茨木市, 2009/11

奥平俊六 「描かれた芸能——室町から江戸初期の能舞台を中心に——」国立能楽堂展記念講演, 島根県立石見美術館, 2008/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

奥平俊六, 國華賞(第2回), 國華社・朝日新聞社, 1990/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006年度～2009年度、基盤研究(B) 一般、代表者:奥平俊六

課題番号: 18320031

研究題目: 近世風俗画の絵画史料論的研究

研究経費: 2008年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2009年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 750,000円

研究の目的:

賀茂競馬図、祇園祭礼図、四条河原遊楽図など近世初期風俗画を中心に、近世風俗画に描かれたモチーフの細部の画像を収集し、その絵画史料論的な使い方について具体的に研究する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

(社福)素王会アトリエインカープ・評議員	2006年5月～現在に至る
(財)大和文華館・評議員	2005年4月～現在に至る
丹波市文化財保護審議会・委員	2005年4月～現在に至る
神戸市博物館・協議会委員	2003年4月～現在に至る
山口県立美術館・収集審査委員	1998年4月～現在に至る

2. 園府寺司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻: 西洋美術史

2-1. 論文

園府寺司 「美術の動態地理学あるいはジオヒストリーに向けて」園府寺司、木俣元一(共編)『西洋美術研究』14, 三元社, pp. 8-11, 2008/9

園府寺司 「〈芸術、国家、世界〉AICA 国際会議(ポーランド 1960年)におけるモダンアートの国際性に関する〈議論〉」園府寺司、木俣元一(共編)『西洋美術研究』14, 三元社, pp. 121-137, 2008/9

2-2. 著書

園府寺司 『ファン・ゴッホ 自然と宗教の闘争』小学館, 351p., 2009/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Kodera, Tsukasa, “The Jewish Immigrants to the Far East and their Effects on the Japanese Arts; an Ukrainian conductor Emmanuel Metter” The fifteenth World Congress of Jewish Studies: Session: Jewish Art and the Holocaust, The World Union of Jewish Studies, Hebrew University of Jerusalem, 2009/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

Tsukasa Kodera Praemium Erasmianum (エラスムス研究賞), エラスムス財団(オランダ), 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 圀府寺司

課題番号: 17320030

研究題目: モダニズムと中東欧の近代芸術に関する国際・学際共同研究

研究経費: 2008年度 直接経費 3,000,000円 間接経費 900,000円

研究の目的:

従来、研究の乏しかった中東欧の近現代芸術について、中東欧諸国ならびに北米などの研究者と密接な国際共同研究を行い、この地域の芸術ならびにこの地域出身の芸術家、芸術関係者の役割を明確にする。

2-6-2. 2009年度～2013年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 圀府寺司

課題番号: 21320029

研究題目: イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究

研究経費: 2009年度 直接経費 3,000,000円 間接経費 900,000円

研究の目的:

中東欧のイディッシュ語文化圏の芸術活動ならびにボグロムによってアメリカに逃れたイディッシュ語文化圏の人々の活動を研究する

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員および国際事業委員会書面審査員	2009年8月～現在に至る
美術史学会・常任委員	2008年5月～2010年5月
日本学術会議・連携会員	2008年4月～現在に至る
国際美術史学会(CIHA)・国内委員	2007年4月～現在に至る
民族芸術学会・理事	1997年4月～現在に至る

3. 橋爪 節也 教授

1958年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。専攻: 日本美術史/近世近代絵画史。

3-1. 論文

橋爪節也 「佐伯祐三の帰国時代——《下落合風景》《滞船》シリーズの連作と意義——」新宿歴史博物館(編)『特別展「佐伯祐三展」図録』新宿歴史博物館, pp. 4-8, 2010/3

- 橋爪節也「都市の“記憶”の幻影——街に漂う“工芸”的なもののイメージ」『美術フォーラム 21』19(特集「工芸史研究の現在」), 醍醐書房, pp. 126-130, 2009/5
- 橋爪節也「『浪華郷友録』の聞人と大坂の文人画家の問題——木村兼葎堂を中心として——」中谷伸生『東アジアの文人世界と野呂介石』(関西大学出版会), 関西大学出版会, pp. 13-20, 2009/3
- 橋爪節也「大阪画壇研究補遺——「北野恒富展」をめぐる」『待兼山論叢 美学篇』42, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-28, 2008/12
- 橋爪節也「描かれた堂島——画家は都市になにを読みとるか——」『大阪の歴史』(大阪市史編纂所), 71, 大阪市史編纂所, pp. 3-22, 2008/8
- 橋爪節也「『浪花情緒』のモダニズム——紋切り型の大坂論を越えて——」『美術フォーラム 21』(醍醐書房), 17(特集「大阪画壇は蘇るか」), 醍醐書房, 2008/5

3-2. 著書

- 橋爪節也, 船越英明, 廣川和花他(共編著)『映画「大大阪観光」の世界——昭和 12 年のモダン都市——』大阪大学出版会, 94p., 2009/5
- 橋爪節也, 熊田司, 菅谷富夫(編)『没後 80 年記念 佐伯祐三展——パリで夭逝した天才画家の道——』産経新聞大阪本社, 240p., 2008/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 橋爪節也(記事のなかでコメント)「壁画どこへ行く 高度成長期の最先端「西長堀アパート」」『産経新聞夕刊』2010/3
- 橋爪節也(特集 森村泰昌 鎮魂という批評芸術)「“モダニストM”とモダン都市 大阪と森村泰昌／森村泰昌の大阪」『ユリイカ』青土社, pp. 197-212, 2010/3
- 橋本健治, 橋寺知子, 橋爪節也他「報告 シンポジウム 大阪の近代建築・戦後建築の魅力をさぐる」大阪歴史博物館『大阪歴史博物館 研究紀要』8, 大阪歴史博物館, pp. 105-125, 2010/3
- 橋爪節也「道楽こうじて展覧会を成す——大阪資料の収集と展覧会」『大正イマジユリイ』(大正イマジユリイ学会), 5(特集「イマジユリイ」道楽——収集・交換・生産をめぐる——), 大正イマジユリイ学会, pp. 19-25, 2010/3
- 橋爪節也「展覧会解説 昭和十二年のモダン都市——観光映画「大大阪観光」の世界——」『大正イマジユリイ』(大正イマジユリイ学会), 5, 大正イマジユリイ学会, pp. 106-109, 2010/3
- 橋爪節也(記事のなかでコメント)「松本創「ナカノシママニア 中之島が戦艦となって出撃する小説があった」」『月刊島民』19, 2010/2
- 橋爪節也「『勇しき構成美』——小出楯重の随筆は本当に理解されて読まれているのか——」『視覚の現場』4, 醍醐書房, pp. 28-30, 2010/2
- 橋爪節也「食満南北を思う その二 南北とその絵画」『やそしま』3, 財団法人 上方文化芸能協会, pp. 54-67, 2010/2
- 橋爪節也(平松邦夫大阪市長との対談)「羽ばたく大阪づくり——誇れるまちを市民とともに」『建築通信新聞』2010/1
- 橋爪節也「石橋心齋橋 101 年・巻頭言」『新菜箸本撰』7(石橋心齋橋 101 年号), p. 1, 2010/1
- 橋爪節也「イメージとしての“大大阪”——モダン都市はいかに語られようとしたか——」『適塾』42, pp. 14-24, 適塾記念会, 2009/12
- 橋爪節也「本の都であった心齋橋を検証する——「新菜箸本撰」——」『彷彿月刊』(特集「ミニコミの設計図」), 2009/12
- 橋爪節也「中尾堅一郎さん逝去で気づいたこと——現代につづく大阪人の精神——」『木村兼葎堂顕彰会会報』木村兼葎堂顕彰会, 2009/11
- 橋爪節也「『水都大阪 2009』の開催期間、私はどこに位置したか」『視覚の現場』3, 醍醐書房, pp. 39-41, 2009/11
- 橋爪節也「浪花八百八橋 下大和橋——道頓堀川 あふれる色気」『産経新聞夕刊』産経新聞社, 2009/11
- 橋爪節也「映画「大大阪観光」再考——モダン都市はいかに撮影されたか——」『大阪春秋』136(特集「観光都市おおさか」), 新風書房, pp. 56-61, 2009/10
- 橋爪節也「浪花八百八橋 藤中橋——篤志家のロマン 自分の名で架橋」『産経新聞夕刊』2009/10

- 橋爪節也「浪花八百八橋 上之橋——小京都のおもむきの風景」『産経新聞夕刊』産経新聞社, 2009/9
- 橋爪節也(巻頭言)「大阪の“知”と“感性”の源流——木村兼葭堂のこと——」『記念会だより』84, 懐徳堂記念会, 2009/9
- 橋爪節也(インタビュー記事)「大大阪パワー研究」、週間まちぶら第200回特別編・道頓堀『朝日新聞』2009/9
- 橋爪節也(インタビュー記事)「70年前の大阪観光 もう一度映画に」『読売新聞夕刊』2009/9
- 橋爪節也「幻影の“大大阪”再見——映画「大大阪観光」の展覧会を開催して——」『上方芸能』173(特集「関西の新舞踊——なぜ広がるのか」), 上方芸能, 2009/9
- 橋爪節也「佐伯祐三はここにいる——没後80年、現代の新しい佐伯祐三像を求めて——」『BM美術の杜』通巻20号記念特別合併号, 美術の杜出版, pp. 6-25, 2009/8
- 橋爪節也「大阪検定公式テキスト『大阪の教科書』に執筆した気分——「大阪画壇」復活の背景にあったもの——」『視覚の現場』2, 醍醐書房, pp. 10-11, 2009/8
- 橋爪節也「複数」熊田司・伊藤純(編)『森琴石と歩く大阪』東方出版, 2009/7
- 橋爪節也「“水都の美”の発見者、織田一磨——石版画集《大阪風景》より——」『大阪春秋』135(特集「水の都おおさかⅡ」), 新風社, pp. 81-83, 2009/7
- 橋爪節也「浪花八百八橋 瓦屋橋——上方芝居の古蹟 風情跡形もなく」『産経新聞夕刊』産経新聞社, 2009/7
- 橋爪節也「佐伯祐三展解説」『新潟日報』新潟日報, 2009/6
- 橋爪節也「なぜ、大阪市立近代美術館は建たないか——20年間も「まあだだよ」では、内田百閒じゃあるまいし——」『視覚の現場』創刊号, 醍醐書房, pp. 6-7, 2009/5
- 橋爪節也「浪花八百八橋 新橋——おもちゃが伝える“大大阪”」『産経新聞夕刊』産経新聞社, 2009/5
- 橋爪節也「美術 大阪画壇とその潮流 曰く撰派——大阪画壇を知っていますか」橋爪節也監修・創元社編集部編『大阪の教科書——大阪検定公式テキスト——』創元社, pp. 208-213, 2009/4
- 橋爪節也「浪花八百八橋 西国橋——“大大阪”自慢の美観地区」『産経新聞夕刊』産経新聞社, 2009/4
- 橋爪節也「浪花八百八橋 46 秋月橋 “大大阪”の迎賓館 短い生涯」『産経新聞夕刊』2009/3
- 橋爪節也(インタビュー記事 聞き手 安藤寿和子)「まほろばのひかり「柳里恭——士大夫であろうとした男」」『知的旅情報誌「ひととき」』株式会社ウエッジ, pp. 65-69, 2009/3
- 橋爪節也「シンポジウム 大阪を中心とした郷土建築座談会」『共同研究成果報告書3』大阪歴史博物館, pp. 3-20, 2009/3
- 橋爪節也「浪花八百八橋 42 高津原橋 よみがえる映画館の記憶」『産経新聞夕刊』2009/2
- 橋爪節也(産経新聞(インタビュー取材・丸橋茂幸記者))「こんにちは研究室大阪大学 奥深い浪花文化伝える知のハンター」『産経新聞』2009/2
- 肥田皓三, 橋爪節也, 古川武志「対談島之内今昔 変貌著しいまちの記憶を語り継ぐ」『大阪春秋』133(特集「心齋橋・島之内」), 新風書房, pp. 14-19, 2009/1
- 橋爪節也(インタビュー取材・岩崎充宏)「北野恒富の足跡を訪ねて」『山陽新聞』2009/1
- 橋爪節也「碁盤目になった“迷宮”——新しい「島之内」イメージを求めて——」『大阪春秋』133(特集「心齋橋・島之内」), 新風書房, pp. 78-79, 2009/1
- 橋爪節也「星も光ぬ ☆ E lucevan le Stelle——プラネタリウム・エイジ なつかしの電気科学館」『大阪市立電気科学館 70年記念誌『日本の科学館は大阪から』』財団法人大阪科学振興協会, pp. 23-33, 2008/12
- 橋爪節也「大阪古書文化 目録が導く濃密な世界」『産経新聞文化欄』2008/12
- 橋爪節也「浪花八百八橋 38 信濃橋 名画の雪のメインストリート」『産経新聞夕刊』2008/12
- 橋爪節也「大坂幕末の書画会——再び狂詩集『浪華酔吟』より」『新菜箸本撰』6, pp. 20-23, 2008/12
- 橋爪節也「食満南北を思う その一 道頓堀の句碑のこと」『やそしま』2, 財団法人 上方文化芸能協会, pp. 25-33, 2008/11
- 橋爪節也「浪花八百八橋 34 道頓堀橋 響き渡る地下鉄工事の槌音」『産経新聞夕刊』2008/11
- 橋爪節也「浪花八百八橋 29 肥後橋 佐伯が見た大阪の“巴里”」『産経新聞夕刊』2008/10
- 橋爪節也(付録解説)「“De Stadt OSACCO”——《大坂図》(モンタヌス日誌)より」『大阪春秋』132(特集「水の都おおさか」), 新風書房, pp. 82-85, 2008/10
- 橋爪節也「浪花八百八橋 26 難波土橋 落語の舞台 鋼橋でも土橋」『産経新聞夕刊』2008/9

- 橋爪節也 「浪花八百八橋 22 幽霊橋 出た 難波の裏にヒュードロロ」『産経新聞夕刊』2008/8
- 橋爪節也 「浪花八百八橋 18 十三大橋 日本家屋 連想させるアーチ」『産経新聞夕刊』2008/7
- 橋爪節也 「『戎橋筋案内』を行く」『大阪春秋』131(特集ミナミ), 新風書房, pp. 56-66, 2008/7
- 田野登, 橋爪節也, 船越幹央他(座談会) 「『大阪名物くだおれ』閉店緊急企画「道頓堀と立体看板 失われ行く昭和 30 年代の光景」」『大阪春秋』131(特集ミナミ), 新風書房, pp. 76-81, 2008/7
- 橋爪節也 「コンテナくんの夢 谷川夏樹論」『谷川夏樹作品集『TRANSPORT』』2008/6
- 橋爪節也 「阪大博物館へいらっしや〜い」『朝日 21 関西スクエア』朝日新聞社, 2008/5
- 橋爪節也 「浪花八百八橋 14 端建蔵橋 近代都市美、昭和初期に活写」『産経新聞夕刊』2008/5
- 橋爪節也(教育テレビテキスト) 「日本初! 博物館を作った大坂商人・なにわの知の巨人 木村兼葭堂」『知るを楽しむ歴史に好奇心 日本コレクション奇譚』4-5, NHK 出版, pp. 131-152, 2008/4
- 橋爪節也 「浪花八百八橋 10 戎橋 銘板に古き川柳散りばめて」『産経新聞夕刊』2008/4

3-4. 口頭発表

- 橋爪節也, 北村昭齋, 鷺田清一 「スペシャル対談」第 10 回企画展「スペシャル対談」北村昭齋(人間国宝・重要無形文化財保持者) 鷺田清一(大阪大学総長), 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2010/2
- 橋爪節也 「謎解き! 浮世絵『浪花百景』を見よ」ナカノシマ大学, 大阪大学中之島センター・佐治敬三メモリアルホール, 2010/2
- 橋爪節也 (パネリスト) 第 2 回大阪大学 21 世紀懐徳堂シンポジウム「“大阪弁” で語り合う “かんきょう” ! ?」大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター・佐治敬三メモリアル, 2010/1
- 橋爪節也 「繚乱・商都の色彩——北野恒富、島成園、小出楯重など、近代大阪の画家とその作品——」立命館京都文化講座『大阪・京の色彩』, 立命館大学、共催 大阪大学 21 世紀懐徳堂・立命館大学文学部・立命館大阪オフィス, 立命館大阪オフィス, 2009/12
- 橋爪節也 「高津ルネッサンス・高津宮と文楽——木谷蓬吟と千種——」高津まちづくり推進協議会, 高津宮, 2009/12
- 橋爪節也 「三都多彩、東京・京都・大阪の美人画に見る個性——北野恒富、島成園はじめ大阪画壇を中心とした立場から——」2009 年度美術館講座「違いのわかる人になる」, 姫路市立美術館, 姫路市立美術館, 2009/11
- 橋爪節也 「江戸時代の大坂画壇と野呂介石」野呂介石展記念講演会, 和歌山県立博物館, 和歌山県立博物館, 2009/11
- 橋爪節也 「なにわ知の巨人木村兼葭堂——博物学から文人画まで——」第 21 回京阪・文化フォーラム「学問都市・なにわ」, 京阪電気鉄道株式会社 大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター・佐治敬三メモリアルホール, 2009/11
- 橋爪節也 「絵を読む——船場・中之島界限を描いた画家と作品——」第 17 回 道修町文化講演会, 道修町資料保存会, 2009/11
- 橋爪節也 「木村兼葭堂の画事について」木村兼葭堂顕彰会, 木村兼葭堂顕彰会, 南御堂会館, 2009/11
- 橋爪節也 「サイエンスカフェ「10 年後の『大阪』」」サイエンスカフェ「10 年後の『大阪』」Scientthrough 協力 大阪大学附属図書館 理工学図書館 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター, 大阪大学附属図書館 理工学図書館, 2009/10
- 橋爪節也 「水都の文化力ってなに?」水都大阪 2009 記念シンポジウム「遊びをせんとや生まれけむ——水都大阪の再生」大阪大学、水都大阪 2009 実行委員会, リーガロイヤルホテル, 2009/9
- 橋爪節也 「モダン大阪見どころ案内——私が見た「大大阪観光」——」水都大阪 2009 協賛プラネタリウム・スペシャルナイト「大大阪から、宇宙への旅」, 大阪市立科学館, 大阪市立科学館, 2009/9
- 橋爪節也 (パネリスト) 「池田遊子生誕 100 年記念展シンポジウム」枚方市文化国際財団, 2009/7
- 橋爪節也 「天神祭を描いた絵いろいろ」天神祭を描いた絵いろいろ, 大阪大学中之島講座, 大阪大学中之島センター・佐治敬三メモリアルホール, 2009/7
- 橋爪節也 (パネリスト) 第 51 回 意匠学会大会 創立 50 周年記念シンポジウム「都市とデザイン——国際性と地域性——」意匠学会, 大阪大学, 2009/7
- 橋爪節也 「佐伯祐三とその芸術」没後 80 年記念「佐伯祐三展——パリで夭逝した天才画家の道——」開催記念, 新潟県立万代島美術館, 新潟県立万代島美術館, 2009/7
- 橋爪節也 「上方落語の背景——大坂のおもしろグラフィック——」公開授業「大阪落語への招待」(桂春之輔担当)のゲストスピー

- カー, 大阪市立大学, 2009/6
- 橋爪節也 (パネリスト)シンポジウム「昭和 12 年のモダン都市へ——都市大阪の虚像と実像——」大阪歴史博物館・大阪大学総合学術博物館, 2009/6
- 橋爪節也 「《大大阪観光》の映像を読む——メディアが作る“大大阪”イメージ」第 14 回ミュージアム・レクチャー, 大阪大学総合学術博物館、大阪歴史博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2009/6
- 橋爪節也 「“大大阪”時代のモダン都市を絵画・映像に読む」社団法人日本建築協会, 2009/6
- 橋爪節也 (企画担当・司会)美術史学会美術館博物館委員会東西合同シンポジウム「ミュージアムをどう評価するのか」美術史学会, 東京都美術館, 2009/5
- 橋爪節也 「近代美術館のコレクション——市民 20 年の夢、準備室かく蒐集せり」大阪市立近代美術館建設準備室「近代日本の美意識——人物と風景を描く——」展関連イベント, 大阪市立近代美術館建設準備室, 大阪市立総合生涯学習センター, 2009/5
- 橋爪節也, 奥野卓司, 白幡洋三郎他(収録場所・適塾)「江戸、そこにある未来 特別編」BS-TBS(テレビ), 2009/5
- 橋爪節也 「都市と美術——モダン都市を大阪の画家たちはどのように描いたか——」北海道芸術学会, 北海道芸術学会, 北海道大学大学院文学研究科, 2009/4
- 橋爪節也 「美術館と大阪／中之島と美術館——失われた“美術都市・大阪”の時代——」美術館と大阪／中之島と美術館——失われた“美術都市・大阪”の時代——, 中之島まちみらい協議会, 大阪大学中之島センター・佐治敬三メモリアルホール, 2009/4
- 橋爪節也 「佐伯祐三とその芸術」没後 80 年記念「佐伯祐三展——パリで夭逝した天才画家の道——」開催記念, 北海道立近代美術館, 北海道立近代美術館, 2009/4
- 橋爪節也 「大正中後期の大阪画壇変革における北野恒富と島成園の動向——《淀君》《伽羅の薫》の周辺と白耀社展の問題——」待兼山芸術学会, 大阪大学, 2009/3
- 橋爪節也 (パネリスト)「大阪の近代建築・戦後建築の魅力をさぐる」シンポジウム, 大阪歴史博物館, 2009/3
- 橋爪節也 (パネリスト)「『イマジユリ』道楽——収集・交換・生産をめぐって」シンポジウム, 大正イマジユリ学会全国大会, 天津市歴史博物館, 2009/3
- 橋爪節也 「アートをさらにアートらしく——こうして作られる美術展覧会——」サイエンスカフェ, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2009/2
- 中谷伸生, 橋爪節也, 明尾圭造「大坂画壇展望」芦屋市立美術博物館日本美術史セミナー:近世大坂画壇 文人の愉しみ, 芦屋市立美術博物館, 芦屋市立美術博物館, 2009/1
- 橋爪節也 「「新日曜美術館 佐伯祐三 捨て身の美しさ」(コメント)」新日曜美術館 佐伯祐三 捨て身の美しさ(コメント), NHK 教育テレビ, 2008/12
- 橋爪節也 「絵画が語るモダン大阪～20 世紀の都市(まち)の輝き～」大阪府立文化情報センター20 世紀・大阪の風景・美術・文化」展関連企画, 大阪府立文化情報センター, 大阪府立文化情報センター さいかくホール, 2008/12
- 橋爪節也 「イメージとしての”大大阪”——モダン都市はいかに語られようとしたか——」適塾記念講演会, 大阪大学中之島センター, 2008/11
- 橋爪節也 「〈我が町周防町〉再発見」ヨーロッパ村周防町通り商店会, 後援大阪市, 長崎堂ホール, 2008/11
- 橋爪節也 「没後 80 年記念佐伯祐三展記念講演会「佐伯祐三とその芸術」」高松市美術館, 高松市美術館, 2008/10
- 橋爪節也 「地域協働学習プログラム・阿倍野区歴史講座「阿倍野区に住んだ近代の画家たち」」阿倍野市民学習センター, 阿倍野市民学習センター, 2008/10『阿倍野区歴史講座～あべのをはじめとした大阪の歴史を飾った人物史～』2009/3)
- 橋爪節也他 (パネリスト)「未来に引き継がれる“まち”の記憶」第 1 回大阪大学 21 世紀懐徳堂シンポジウム:未来に引き継がれる“まち”の記憶, 大阪市中央公会堂, 2008/9
- 橋爪節也 「なにわを歩く『平成浪花百景』」なにわを歩く『平成浪花百景』 ベイ・コミュニケーションケーブルテレビ, 2008/9
- 橋爪節也 「没後 80 年記念佐伯祐三展記念講演会「佐伯祐三とその芸術」」大阪市立美術館, 大阪市立美術館, 2008/9
- 橋爪節也 「『大大阪』時代の文化芸術と現代 ～美術を中心として～」第 40 回大阪大学中之島講座, 大阪大学中之島センター, 2008/8

橋爪節也 「文人＝聞人～木村兼葎堂とその周辺」芦屋市立美術博物館日本美術史セミナー「近世大坂画壇 文人の愉しみ」, 2008/8

橋爪節也 「地域の公立博物館・美術館と大学博物館——元公立美術館学芸員から見て——」全国大学博物館等協議会・博物科学会 記念講演, 全国大学博物館等協議会・博第3回博物科学会, 大阪大学, 2008/6『全国大学博物館等協議会・博第3回博物科学会要旨集』

橋爪節也 「日本コレクション奇譚・なにわの知の巨人木村兼葎堂」NHK教育テレビ「知るを楽しむ歴史に好奇心」, 2008/5
村越英明, 橋爪節也, 中谷伸生他 「近世大坂画壇を大いに語ろう 座談会」芦屋市立美術博物館日本美術史セミナー「近世大坂画壇 文人の愉しみ」:近世大坂画壇を大いに語ろう 座談会, 芦屋市立美術博物館, 芦屋市立美術博物館, 2008/4

橋爪節也 「大阪今昔 歴史のささやき 大阪再発見のつどい」:大阪今昔 歴史のささやき 大阪再発見のつどい, 上方落語協会、産経新聞社, 天満天神繁昌亭, 2008/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

橋爪節也 平成21年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2010/2

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

京都工芸繊維大学美術工芸資料館・京都工芸繊維大学美術工芸資料館 近代デザイン関連資料評価委員

2010年1月～2010年1月

堺市美術作品等資料評価委員会・堺市美術作品等資料評価委員

2009年12月～2009年12月

筑波大学・プレ戦略イニシアティブ学外評価委員

2009年10月～2010年3月

美術史学会・常任委員

2008年5月～現在に至る

美術史学会・美術館博物館委員

2008年5月～現在に至る

4. 藤岡 穰 教授

1962年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪府立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009年4月より現職。専攻:東洋美術史。

4-1. 論文

藤岡穰 「聖徳太子像の成立——四天王寺聖霊院を基点とする太子像の史的 understanding のために——」『文学』11-6, 岩波書店, pp. 157-169, 2010/1

藤岡穰 「中国南朝造像に関する覚書——善光寺本尊像の源流を求めて——」『仏教芸術』307, 毎日新聞社, pp. 13-34, 2009/11

藤岡穰 「木造菩薩立像」『國華』1368, 國華社, pp. 20-26, 2009/10

藤岡穰 「仏師のダイナミズム——密教図像から彫像へ——」藤岡穰, 鈴木雅子(共編)『仏教美術における絵画と彫刻(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)』大阪大学, pp. 1-14, 2009/3

藤岡穰 「鎌倉彫刻における宋代美術の受容」文化交流研究部門調整班(研究代表者:井手誠之輔)(共著)『寧波の美術と海域交流(文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」報告書)』九州大学, pp. 61-81, 2009/3

藤岡穰 「斉周・隋の仏教美術におけるソグド美術の受容に関する覚書(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書)」木下亘(共著)『三次元計測技術を用いた新羅王陵石像彫刻の総合的比較研究』奈良県立橿原考古学研究所, pp. 232-244, 2009/3

藤岡穰 「興福寺の復興造像と縁起(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書)」近本謙介(共著)『寺社勸進・修造をめぐる唱導文芸に関する文献学的研究——九条家と慶政の動向を中心に——』筑波大学, 2009/3

藤岡穰 「仏像の受容と変容——インドから中国、東南アジアへ——」秋田茂, 桃木至朗(共著)『歴史学のフロンティア 地域から問い直す国民国家史観』大阪大学出版会, pp. 213-238, 2008/10

4-2. 著書

藤岡穰, 奥健夫, 山口隆介(監修)『快慶と定慶』週刊朝日百科 国宝の美-28, 朝日新聞出版, pp. 10-13, pp. 20-23, pp. 28-29, p. 36, 2010/2

藤岡穰, 秋田茂他(共著)『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観——』阪大リーブル-8, 大阪大学出版会, 2008/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

藤岡穰, 谷口耕生, 井手誠之輔他 「呉越～北宋の羅漢彫刻について」国際学術シンポジウム: 舍利と羅漢——聖地寧波をめぐる美術——, 平成17年度～平成21年度文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生——」奈良国立博物館, 2009/8

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 国華賞, 国華社, 1990/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号: 18520086

研究題目: 仏教美術における絵画と彫刻

研究経費: 2008年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

従来の日本美術史研究においては、絵画や彫刻、工芸諸分野といった分野別の研究が中心であった。実技教育、保存修復、博物館等における収蔵・保管、文化財行政など、様々な要因がそこには考えられるが、しかし本来、美術はジャンルを超えて受容されてきたはずである。そうした認識のもと、本研究は特に平安～鎌倉の仏教美術に焦点をあて、絵画と彫刻の相関性を明らかにし、メディアを超えた新たな仏教美術史を構築することを目的としている。

4-6-2. 2009年度～2012年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号: 21242003

研究題目: 科学的調査に基づく半跏思惟像の日韓共同研究

研究経費: 2009年度 直接経費 7,300,000円 間接経費 2,190,000円

研究の目的:

半跏思惟像は日韓両国において6～8世紀を中心に独尊像として制作された。本研究はそうした半跏思惟像に関する日韓共同研究である。独尊の半跏思惟像は日韓両国に多く所在するが、その源流として中国の作例も知られる。本研究では半跏思惟像の諸作例および関連作品について、立体画像による形態比較、さらに金銅仏の場合にはX線透視撮影、蛍光X線による成分分析と

いった科学的調査を行い、それに基づいて各作例の制作地や制作年代を比定することを目指している。かつ、そうした基礎的研究の成果を踏まえて、東アジアの海域交流という視点から、半跏思惟像の伝播と信仰的背景についても考察を及ぼす。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

美術史学会・常任委員

2005年7月～2008年6月

5. 岡田 裕成 准教授

1963年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部助教授などを経て現職。専攻：西洋美術史。

5-1. 論文

岡田裕成「新大陸植民地における美術の移植——ヌエバ・エスパーニャ 16世紀布教区修道院の壁画装飾をめぐって——」『西洋美術研究』(三元社), 14, pp. 54-81, 2008/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

岡田裕成「スペイン美術の黄金時代:ブラド美術館とトレド所在の作品を中心に」神戸女学院大学めぐみ会アートセミナー, 神戸女学院大学めぐみ会, 2009/11

Okada, Hiroshige, “Mesa II. Religião, Cultura e Migração (コメント)” *Migrações e Identidades: Conflitos e Novos Horizontes*, Universidade de São Paulo, Brasil, 2008/8

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号: 20520084

研究題目: 植民地中南米における「間文化的アイデンティティ」の美術

研究経費: 2008年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

スペイン統治下の中南米植民地において、被支配民(先住民)エリート層の間に、「間文化的アイデンティティ」とでもいうべきものが形成され、それが、外来支配文化への従属を強いられた植民地の美術のありようを大きく方向づけたことを、おもに、征服後間もない16世紀メキシコのミッション(伝道区)の、聖堂装飾美術の事例に基づいて明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

美術史学会・委員

2008年6月～2009年5月

民族藝術学会・理事

2006年4月～現在に至る

6. 濱住 真有 助教

1974年生。実践女子大学文学部(国文学)卒、同大学院文学研究科美術史学専攻修士課程修了。修士(文学)。実践女子大学文学部美学美術史学科・博物館学課程助手、同大学非常勤講師、大月市立大月短期大学非常勤講師を経て、大阪大学大学院文学研究科文化表現論博士後期課程入学、中途退学して現職。専攻：日本美術史／近世絵画史。

6-1. 論文

濱住真有「前田家蔵 陶山雅文筆『松平直政公初陣之図』について」大石学(編)『高家前田家の総合的研究——近世官僚制とアーカイブズ——』(東京堂出版), pp. 257-276, 2008/12

6-2. 著書

濱住真有, 安永拓世(共著)『大阪美術青年会九十周年記念展「池大雅・与謝蕪村名品撰」図録』大阪美術倶楽部・大阪美術青年会, pp. 88-91(池大雅作品解説 18点), 2009/6

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

濱住真有 美術史学会 第3回『美術史』論文賞, 美術史学会, 2005/5

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

6-7-1. 2009年度、研究助成、助成金獲得者：濱住真有

助成金名：メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成

研究題目：江戸時代文人画における室町水墨画の位置——池大雅筆「柳下童子図屏風」を中心に——

助成団体名：メトロポリタン東洋美術研究センター

助成金額：2009年度 直接経費 500,000円

研究の目的：

本研究は、池大雅筆「柳下童子図屏風」に注目して、その図像分析、作品解釈を行なうことで、江戸時代文人画における室町水墨画の位置、受容の実態を明らかにしようとするものである。

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-24 共生文明論

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 3 准教授 3 講師 0 助教 0

教授：小林 茂、武田佐知子、江川 温

准教授：堤 一昭、井本 恭子、伊川 健二

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
13	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 2 名

3. 修了生(2008年度～2009年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
'08	—
'09	1
小計	1

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「共生文明論講義」「歴史的地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、歴史学研究各分野の最新状況を知る「歴史学のフロンティア」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

2. 研究

教員全員により各年度合計4本の単著論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による国内・国際研究集会の開催に協力することを目標とした。

3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての「大阪大学歴史教育研究会」月例研究会の開催に協力し、さらに教員の一部が放送大学に出講することによって、研究成果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008年度～2009年度)

1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、特に歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が全員参加する模擬授業をおこない、成果を報告書としてまとめることで、プレゼンテーションや編集の能力育成をはかることができた。また通常の授業とは別個に修士論文作成への中間報告の場を設けて、指導・助言体制を強化した。

2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、各年度とも論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかの助成研究が複数行われた。2008年度に科学研究費・基盤研究(B)「最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発」の成果報告書に、修士課程の大学院生の模擬授業報告3本を載せることができたことは本コースの趣旨にもかかない、特筆すべきことがらといえる。2009年度の報告書は経費の関係で刊行は翌年度に持ち越されたが、そこにも所属大学院生の報告1本が掲載される。

教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による国内・国際研究集会の開催に協力するという目標については、単独また複数の科研チームとの共催で海外からの研究者との研究集会(アジア世界史学会(AAWH)など)また海外での研究集会(タイで開催された大阪大学フォーラム2009)などにおいて開催協力や発表をおこない、研究活動の国際化を図るとともに、国内集会(大阪大学歴史教育研究会月例会など)も頻繁に開催した。

3. 社会連携

本コースの教員2名が放送大学に出講した。また本コースの教員1名が世話役の一人として「大阪大学歴史教育研究会」月例研究会開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008年度～2009年度)

1. 教育

修士論文提出による修了者は1名であったが、これは長期履修制度を利用する学生、社会人学生を在籍学生に含むことなどが背景にある。提出された論文は水準を満たすものであった。修了大学院生以外の学生も、授業以外にも、研究会での模擬授業および報告書作成などをも通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考えているが、修士論文作成および進路についての指導・助言体制を入学時から強化すべきとも考えている。

2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0)	3(0)
'09	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	1(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	4(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	0	7	0	0	7
'09	1	0	1	0	0	2
計	1	0	8	0	0	9

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2008年度】

小川公子、工藤駿、橋村淳一、矢景裕子「大航海時代について」『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発 成果報告書シリーズ 1』(平成 20-22 年度科学研究費補助金・基盤研究(B)・課題番号 20320094、研究代表者堤一昭)模擬授業報告(1)、pp.1-21.

南理恵、小林和夫、阪本陽子、柳沢菜々「ロシア前史」『同上』模擬授業報告(2)、pp.23-40.

印牧定彦、奥村茂輝、中村翼、武韻恩、宮川耕平「海域アジアにおける日本人」『同上』模擬授業報告(3)、pp.41-57.

【2009年度】

武韻恩「服飾からみる女性像の変遷 ——明・清・民国初期——」国際シンポジウム 2010 報告・論文集「着衣する身体と異性装——日・タイの比較」pp.14-19; pp.20-25.

(2)口頭発表

【2008年度】

印牧定彦「報告とコメント「古代ギリシア・ローマ史」『世界史をどう教えるか』(神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編、山川出版社、2008年) 京都高等学校社会科研究会・世界史読書会、2008年5月31日(土)、同志社大学今出川キャンパス.

印牧定彦「本当は教えたくない東南アジア史」東南アジア学会第79回研究大会、パネル3「東南アジア地域研究と高大連携——高校で東南アジアはどのように教えられているか(1)」、報告1(世界史)2008年6月8日、大阪大学大学院人

間科学研究科.

小川公子、工藤駿、橋村淳一、矢景裕子「大航海時代について」大阪大学歴史教育研究会 第27回例会、2008年10月18日、大阪大学文学研究科.

南理恵、小林和夫、阪本陽子、柳沢菜々「ロシア前史」大阪大学歴史教育研究会 第28回例会、2008年11月15日、大阪大学文学研究科.

印牧定彦、奥村茂輝、中村翼、武韻恩、宮川耕平「海域アジアにおける日本人」大阪大学歴史教育研究会第27回例会、2008年12月20日、大阪大学文学研究科.

矢景裕子「報告とコメント：杉原薫「近代世界システムと人間の移動」『岩波講座世界歴史19』移動と移民——地域を結ぶダイナミズム』(岩波書店、1999年)、3-61頁、大阪大学歴史教育研究会「グローバル・ヒストリーと世界システム」第17回読書会、2009年3月14日、大阪大学文学研究科.

印牧定彦「報告とコメント：「20世紀の歴史(前半)」『世界史をどう教えるか』(神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編、山川出版社、2008年)」京都高等学校社会科研究会・世界史読書会、2009年3月28日(土)、同志社大学今出川キャンパス.

【2009年度】

大井喜代、金澤雄太、猪原達生、茶田希恵「ローマ帝国の東方貿易」大阪大学歴史教育研究会 第38回例会、2009年12月19日、大阪大学文学研究科.

武韻恩「服飾からみる女性像の変遷——明・清・民国初期——」国際シンポジウム「着衣する身体と異性装——日・タイの比較」2010年1月8日、タイ国チュラーロンコーン大学文学部

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2008年度 大学院：0名 (計0名)

2009年度 大学院：1名 (計1名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2008年度～2009年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2008年度：0名 2009年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008年度：0名 2009年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 小林 茂 教授

1948年生。京都大学文学研究科博士課程1974年中退。博士(文学)(京都大学)。東京都立大学助手、九州大学講師・助教授・教授、大阪大学文学部教授を経て1999年現職。2003年より放送大学客員教授をつとめている。2004年、人文地理学会賞、2010年、日本国際地図学会特別賞(ただし受賞団体の代表として)、日本地理学会賞(優秀賞)を受賞。専攻:文化地理学/文化生態学。

1-1. 論文

- 小林茂, 渡辺理絵, 山近久美子(共著)「1880年代の日本人将校による朝鮮半島の地図作製——アメリカ議会図書館所蔵図の検討——」『地図』(日本国際地図学会), 47-4, pp. 1-16, 2009/12
- 南榮佑, 渡辺理絵, 山近久美子, 李虎相, 小林茂(共著)「朝鮮末における日本参謀本部の将校の韓半島の偵察と地図製作」『大韓地理学会誌』(大韓地理学会), 49-6, pp. 761-778, 2009/12(韓文)
- 小林茂, 宗建郎(共著)「環境史からみた日本の森林——森林言説を検証する——」池谷和信(編)『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か——』岩波書店, pp. 154-173, 2009/10
- 小林茂「近代日本の地図作製とアジア太平洋地域」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 2-26, 2009/2
- 小林茂, 渡辺理絵, 鳴海邦匡(共著)「アジア太平洋地域における旧日本軍および関係機関の空中写真による地図作製」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 228-245, 2009/2
- 小林茂, 渡辺理絵(共著)「近代東アジアの土地調査事業と地図作製——地籍図作製と地形図作製の統合を中心に——」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 246-255, 2009/2
- 宮澤仁, 村山良之, 小林茂(共著)「外邦図デジタルアーカイブの公開に関する課題」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, pp. 436-444, 2009/2
- 小林茂, 岡田郷子(共著)「十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄」『待兼山論叢 日本学篇』(大阪大学文学会), 42, pp. 1-26, 2008/12
- 宮澤仁, 照内弘通, 山本健太, 関根良平, 小林茂, 村山良之(共著)「外邦図デジタルアーカイブの構築と公開・運用上の諸問題」『地図』(日本国際地図学会), 46-3, pp. 1-12, 2008/11
- 小林茂, 鳴海邦匡(共著)「総合地理研究会と皇戦会——柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割」の批判的検討——」『歴史地理学』(歴史地理学会), 50-4, pp. 30-47, 2008/9
- Kobayashi, Shigeru, “Race and malaria in the geographies and ethnographies of the Himalayas: A new perspective from recent epidemiological studies” *International Journal of South Asian Studies*, (Japanese Association for South Asian Studies), 1, Manohar, pp. 135-159, 2008/9

1-2. 著書

- 小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ——』大阪大学出版会, 512p., 2009/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 小林茂, 長谷川敏文, 波江彰彦(共著)(資料の目録と解説)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(下)」『外邦図研究ニューズレター』7, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 53-61, 2010/3
- 小林茂「はしがき」海野一隆『地図文化史上の広輿図』財団法人東洋文庫, pp. 1-2, 2010/3
- 小林茂「『外邦測量沿革史 草稿』解説」『外邦測量沿革史 草稿』解説・総目次』不二出版, pp. 3-27, 2009/3
- 小林茂, 金美英, 波江彰彦, 鳴海邦匡(共編)(資料の目録と解説)「高木菊三郎旧蔵の外邦図関係資料目録(上)」『外邦図研究ニューズレター』6, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, pp. 63-73, 2009/3
- 小林茂(コメント)「地図のデジタルアーカイブ構築と地図史・地図作製史研究——廖法銘氏の発表によせて——」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』4, 大阪大学文学研究科片山研究室, pp. 111-115, 2009/3

- 小林茂(コラム欄)「乍浦鎮(二万五千分一空中写真測量上海近傍南部二十七号、部分)」「アメリカ議会図書館の地理・地図部の書庫」「漢口附近揚子江氾濫区域要図」小林茂(編)『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会, p. 1, p. 31, p. 445, 2009/2
- 小林茂「日本の旧植民地における土地調査事業と地図作製②」『第39回三菱財団事業報告書(平成20年度)』財団法人三菱財団, pp. 372-373, 2009
- 小林茂(辞典項目)「麻」「粟」「稻」「猪垣」「猪」「ウム」「季節認識」「サーターヤー」「サトウキビ」「製糖」「ターウム」「天然痘」「仲松弥秀」「原山勝負」「フィラリア」「風土病」「麦」渡邊欣雄・岡野宜勝・佐藤壮弘・塩月亮子・宮下克也『沖縄民俗辞典』吉川弘文館, p. 4, p. 16, pp. 28-29, p. 30, p. 31, pp. 67-68, pp. 163-164, pp. 220-221, pp. 226-227, p. 287, p. 314, pp. 352-353, p. 374, pp. 429-430, p. 446, pp. 449-450, pp. 502-503, 2008/7

1-4. 口頭発表

- 山近久美子, 渡辺理絵, 小林茂他「中国大陸における初期外邦図の作製——1880年代の日本軍将校による手書き原図の調査分析から——」2010年日本地理学会春季学術大会, 日本地理学会, 法政大学, 2010/3(『日本地理学会発表要旨集』77, p. 215, 2010/3)
- 小林茂, 山本健太「アジア太平洋地域の環境資料としての外邦図——外邦図デジタルアーカイブの構築とその利用——」情報資源共有化研究会: 地図情報共有化のために, 地域研究コンソーシアム・地域情報学研究会, 京都大学稲森記念館, 2009/11
- 小林茂「秘蔵されてきた軍用地図の再生をめざして——外邦図研究の現場から——」公開講座フェスタ2009, 阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット, 大阪府新別館北館、さいかくホール, 2009/11
- 小林茂「近世東アジアの疾病空間——天然痘・麻疹の流行をめぐる中心と周辺——」2009年史学研究会大会公開講演, 史学研究会, 京都大学文学部新館, 2009/11(『史林』93-1, pp. 233-235, 2010/1)
- Kobayashi, Shigeru, Watanabe, R., Narumi, K., “Japanese colonial cartography in Taiwan, Korea and Kwantung Province” 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto University, 2009/8 (*14th International Conference of Historical Geographers, Abstracts*, p. 53, 2009/8)
- Yamachika, K., Watanabe, R., Kobayashi, Shigeru, “The route maps of the Korean Peninsula drawn by Japanese Army officers during the 1880s” 14th International Conference of Historical Geographers, Kyoto University, 2009/8 (*14th International Conference of Historical Geographers, Abstracts*, p. 114, 2009/8)
- 小林茂, 山本健太「外邦図研究と外邦図デジタルアーカイブの構築」第1回人間文化研究情報資源研究会: 諸機関・諸プロジェクトにおける研究資源情報化と相互連携の可能性, 大学共同利用機関法人、人間文化研究機構、研究資源共有化事業委員会, 国文学研究資料館, 2009/5(『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集1』pp. 79-90, 2010/3)
- 小林茂, 山近久美子, 渡辺理絵「初期外邦図の作製過程と特色」2008年大会, 人文地理学会, 筑波大学, 2008/11(『2008年人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 42-43, 2008/11)
- 小林茂「外邦図の集成と多面的活用——アジア太平洋地域の地理情報の応用をめざして——」平成20年度定期大会シンポジウム, 日本国際地図学会, 国土地理院, 2008/8(『平成20年度定期大会発表論文・資料集』pp. 8-9, 2008/8)
- 鳴海邦匡, 岡本有希子, 長澤良太, 小林茂「グーグルアースと外邦図」平成20年度定期大会シンポジウム, 日本国際地図学会, 国土地理院, 2008/8(『平成20年度定期大会発表論文・資料集』pp. 22-23, 2008/8)
- 鳴海邦匡, 大澤研一, 小林茂「近世大阪の武士と絵図——「城下町大坂」展の経験を通じて——」第50回大会, 歴史地理学会, 宮城大学大和キャンパス, 2008/5(『歴史地理学』50-4, pp. 75-76, 2008/9)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 小林茂 日本地理学会賞(優秀賞), 日本地理学会, 2010/3
- 小林茂 (授賞団体[外邦図研究グループ]の代表として) 日本国際地図学会特別賞, 日本国際地図学会, 2010/2
- 小林茂 第4回人文地理学会賞, 人文地理学会, 2004/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(A) 一般、代表者:小林茂

課題番号: 19200059

研究題目: アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成

研究経費: 2008年度 直接経費 8,100,000円 間接経費 2,430,000円

2009年度 直接経費 8,100,000円 間接経費 2,430,000円

研究の目的:

経済発展にともなう環境変化の激しいアジア太平洋地域の環境変化を長期的にモニターするために、旧日本軍ならびに植民地政府が作製・撮影した地図、空中写真、さらにそれらによる気象観測資料を集成することを目的とする。これらの資料は、第2次世界大戦終結時に焼却されたものが少なくないが、なお内外の諸機関に利用の便のないまま、凍結状態で保管されているのがみられる。これらを発掘し、目録を作成して利用を促進する。

1-6-2. 2008年度、研究成果公開促進費、代表者:小林茂

課題番号: 205084

研究題目: 近代日本の地図作製とアジア太平洋地域——「外邦図」へのアプローチ——

研究経費: 2008年度 直接経費 1,900,000円 間接経費 0円

研究の目的:

外邦図は1945年8月まで日本がアジア太平洋地域で作製した地図で、内外の大学や図書館が保存している。帝国としての近代日本が形成されていく過程のなかで、対外交渉や戦争、植民地統治のために不可欠な道具として作製されたこれらの地図は、歴史資料として独自の価値をもっている。申請者らは、こうした外邦図について、科学研究費などによりその目録を編集発行するとともに、外邦図の所在、構成、作製過程、第二次世界大戦終結前後の経過などについて研究をおこなってきた。本書はそうした成果を集成し、到達点を示そうとするものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2005年度～2009年度、研究助成、助成金獲得者:小林茂

助成金名: 社会教育機関等への助成

研究題目: 外邦図の研究

助成団体名: 財団法人国土地理協会

助成金額: 2008年度 直接経費 2,000,000円

2009年度 直接経費 2,000,000円

研究の目的:

旧日本軍および植民地政府がアジア太平洋地域で作製した地図を「外邦図」と呼んでいる。日本国内の各機関に保管されている外邦図の目録を作成するとともに、その作製過程にアプローチし、歴史研究や環境変化の研究に利用できるようにすることを目的とする。本研究助成は2005年度から継続しているもので、助成期間は5年間。

1-7-2. 2008年度、受託研究、助成金獲得者:小林茂

助成金名: 日本学術振興会学術システム研究センター実施委託研究

研究題目: 人文地理学分野に関する学術動向の調査研究

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2008年度 直接経費 2,500,000円

研究の目的:

前年度までは、人文地理学分野と深い関係にある環境史分野を中心に学術動向を検討したが、本年度は人文地理学分野を中心に学術動向をモニターする。人文地理学分野では、近年地理情報システム(GIS)の導入がトピックになっており、研究レベルから教育レベルに焦点が移りつつある。またGISは他の人文社会科学や自然科学にも利用がひろがっており、これにも関心をひろ

げたい。以上にくわえて、海外の動向を敏感に意識して展開している社会地理学、新文化地理学にも配慮するとともに、大学院生や若手研究者の研究環境も視野に入れたい。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・評議員	2008年11月～現在に至る
財団法人 地図情報センター・評議員	2008年6月～現在に至る
歴史地理学会・評議員	2008年5月～現在に至る
日本学術振興会、学術システム研究センター・専門研究員	2006年4月～2009年3月
福岡市史考古専門部会・専門委員	2006年1月～現在に至る
柳川市史・専門研究員	2005年5月～現在に至る
人文地理学会・協議員	2004年11月～2008年10月
史学研究会・評議員	2004年10月～現在に至る
日本地理学会・代議員	2004年4月～現在に至る
日本国際地図学会・評議員	2003年2月～現在に至る

2. 武田 佐知子 教授

1948年東京生。早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科日本史学専攻修士課程修了、東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了。文学博士(東京都立大学、1985)。大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞思想歴史部門(1985)、濱田青陵賞(1995)、紫綬褒章(2003)。専攻:日本古代史・服装史。

2-1. 論文

武田佐知子「前書き」武田佐知子(編)『着衣する身体／身体と衣服をめぐる表象のジェンダー・ポリティックス』(科学研究費補助金報告書基盤研究(A)東京分科会報告書), 科学研究費補助金報告書基盤研究(A)東京分科会報告書, pp. 1-2, 2010/3

武田佐知子「前近代日本における貴族の衣服形態と、愛のかたちの相関について——源氏物語を素材として」武田佐知子, 三橋順子, 平松秀樹(共編著)『着衣する身体と異性装／日・タイの比較』(国際シンポジウム 2010 報告・論文集 科学研究費補助金報告書基盤研究(A)), 科学研究費補助金報告書基盤研究(A), pp. 1-8, 2010/3

武田佐知子「民族衣装——そのうつろうもの「着衣する身体」の政治学——肌に触れる知の発見」によせて」武田佐知子, 宮原暁, 石高真吾他(共編著)『着衣する身体』(科学研究費補助金報告書基盤研究(A)), 科学研究費補助金報告書基盤研究(A), pp. 1-4, 2009/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

武田佐知子, 菅谷文則, 千田稔他「卑弥呼はどこに? 邪馬台国と纏向遺跡」シンポジウム「卑弥呼はどこに? 邪馬台国と纏向遺跡」, 朝日新聞社, エル・シアター, 2010/3

武田佐知子, 三橋順子, 平松秀樹他「前近代日本における貴族の衣服形態と、愛のかたちの相関について——源氏物語を素材として——」国際シンポジウム「着衣する身体と異性装／日・タイの比較」, 科学研究費補助金基盤研究(A), チュラーロンコーン大学文学部, 2010/1(『着衣する身体と異性装／日・タイの比較』pp. 1-8, 2010/3)

武田佐知子, 橋本輝彦「邪馬台国の色彩——卑弥呼は何を着ていたのか」歴史文化講演会, 桜井宇陀広域連合, 2009/12

武田佐知子, 菅谷文則, 神崎宣武他「都への道と衣服」関西講演会「歴史街道」: 歴史街道 奈良三都物語——飛鳥京・藤原京・平城京——, 歴史街道推進協議会, 2009/11

武田佐知子「Shaping Attrie, Shaping Love in the Era of Genjimonogatari(the Tale of Genji)「源氏物語の時代に見る衣服のかたち・愛のかたち」」大阪大学フォーラム, マレーシア クアラルンプール大学, 2009/11

武田佐知子, 上田正昭, 千田稔他「聖徳太子像」斑鳩文化協議会創立 15 周年記念シンポジウム: 聖徳太子に、なぜ、魅かれるのか!, 斑鳩文化協議会, 2009/10

武田佐知子「花をまとう、花を贈る」園芸大学・花と緑の学び舎平成 21 年度講義, 社団法人フラワーソサイエティ園芸大学, 2009/10

武田佐知子「聖徳太子と法隆寺」斑鳩の里大学 21: 聖徳太子の文化と法隆寺, (財)斑鳩町文化振興財団, 2009/10

武田佐知子, 宮原暁, 石高真吾他「民族衣装——そのうつろいもの「着衣する身体」の政治学——肌に触れる知の発見」「着衣する身体と女性の周縁化」シンポジウム: 着衣する身体と政治学／周縁化される『伝統』の共鳴, 科学研究費補助金基盤研究(A), 2009/2『着衣する身体と政治学』pp. 1-4, 2009/3)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2006 年度～2009 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 武田佐知子

課題番号: 18201051

研究題目: 着衣する身体と女性の周縁化

研究経費: 2008 年度 直接経費 15,300,000 円 間接経費 4,590,000 円

2009 年度 直接経費 4,100,000 円 間接経費 1,230,000 円

研究の目的:

着衣という共通の素材を通して、特定の社会におけるジェンダーのあり方を研究し、さらに、地域間の比較を行うことによって、最終的に、グローバルな視点から、世界における女性の周縁化を理解しようとするものである。本研究課題では、個人、ローカル、ネイション、リージョナル、グローバルなアイデンティティの重層性の中で立ち現れている着衣という現象を、二つの研究段階において、それぞれ別の視点から研究することを構想している。一つは、個別地域におけるローカルな視点からの着衣の研究であり、もう一つは、共通の枠組みに基づいたグローバルな視点からの研究である。以上のような研究動向を踏まえた上で、さらに、着衣とジェンダーの関係を世界の多様性の中で理解し、再びグローバルな枠組みの中で総合する形で、従来の研究を発展させようとするものとして位置づけることができる。そこでとられる複数の研究者による共同調査・研究というスタイルは、川田順三が提起した「文化の三角測量」という方法を継承するものとも言え、この点でも、文化研究における学術的な発展性を持っていると考える。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 江川 温教授

1950年生。京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)中退。文学修士(京都大学、1977年)。大阪大学助手、同講師、同助教授を経て1996年、教授。2004年4月より2009年9月まで放送大学客員教授。2008年4月より2010年3月まで文学研究科長。専攻: 西欧中世史。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

江川温『フランス封建社会と神の平和運動』科学研究費補助金研究成果報告書, 53p., 2010/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:江川温

課題番号: 19520628

研究題目: フランス封建社会と神の平和運動

研究経費: 2008年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2009年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

フランス 11, 12 世紀における神の平和・休戦の運動の起源と各地方における展開を分析することを通じて、この時期のフランスにおける公的秩序観念の展開を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏歴史学会・副会長	2008年4月～現在に至る
史学会・評議員	2005年4月～現在に至る
日本西洋史学会・代表	2004年4月～現在に至る
史学研究会・評議員	2004年4月～現在に至る

4. 堤一昭 准教授

1960年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻: 東洋史学。

4-1. 論文

堤一昭「中国の自画像と日本の中国像——歴史の変遷の画期を求めて——」『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』No.2009-8, 大阪大学中国文化フォーラム, pp. 1-13, 2009/12

堤一昭「中国の自画像と日本の中国像:歴史の変遷の画期を求めて」田中仁・宮原暁『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環

境 第三回国際シンポジウム論文集』(現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第三回国際シンポジウム), 大阪大学中国文化フォーラム・大阪大学グローバルコラボレーションセンター, pp. 31-39, 2009/8

堤一昭 「「中国」統治における国家の正統性と言語——蒙元時代の言語・文化政策研究の現状から——」『「第二屆現代中国社会変動与東亜新格局」国際学術討論会会議手冊&論文集』(「第二屆現代中国社会変動与東亜新格局」国際学術討論会), 東華大学歴史系・大阪大学中国文化論壇・南開大学歴史学院, pp. 203-212, 2008/8

4-2. 著書

秋田茂, 桃木至朗, 堤一昭他(共著)『歴史学のフロンティア——地域から問い直す国民国家史観——』大阪大学出版会, pp. 35-58, 2008/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

堤一昭 「石濱文庫の拓本コレクション——漢学から東洋学へ」石濱文庫記念講演会: 大阪大学附属図書館, 大阪大学外国学図書館, 2009/11(『大阪大学附属図書館報』vol.43 no.3, pp.1-2「懷徳堂文庫に続く大阪の東洋学コレクション——石濱文庫の再調査にむけて——」2010/3)

堤一昭 「中国的自我観与日本の中国観: 追尋歴史変遷中的転折期」第三屆現代中国社会変動与東亜新格局国際学術討論会: 現代中国社会変動与東亜新格局, 大阪大学中国文化フォーラム・南開大学歴史学院・東華大学歴史学系, JICA 大阪, 2009/8(『現代「中国」の社会変容と東アジアの新環境 第三回国際シンポジウム論文集』p. 31, 2008/8)

堤一昭 「「中国」統治中的国家正統性と言語: 従対蒙元時代の語言文化政策的研究現状谈起」「第二屆現代中国社会変動与東亜新格局」国際学術討論会: 現代中国社会変動与東亜新格局, 東華大学歴史系・大阪大学中国文化論壇・南開大学歴史学院, 東華大学歴史系, 2008/8(『「第二屆現代中国社会変動与東亜新格局」国際学術討論会会議手冊&論文集』pp. 54-57, 2008/8)

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2008年度～2010年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 堤一昭

課題番号: 20320094

研究題目: 最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発

研究経費: 2008年度 直接経費 4,200,000円 間接経費 1,260,000円

2009年度 直接経費 3,700,000円 間接経費 1,110,000円

研究の目的:

最新の研究成果を高校・大学(教養教育)における歴史教育に反映させるために、適切な内容の選定、解説法の検討などをおこない、教材・教授資料を作成することを目的とする。高校世界史・日本史 B のわくぐみを前提とし、可能な限り全世界の古代から現代までの歴史を視野に入れ検討する。また、日本史と世界史の統合的理解を目指す。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・理事・編集委員

2008年5月～現在に至る

5. 井本 恭子 准教授

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学、1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパⅢ講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:人類学。

5-1. 論文

井本恭子 「「地続き」の思考の痕跡——普通の人びとの日常的な「もののやりかた」——」『待兼山論叢 文化動態論篇』43, pp. 1-22, 2009/12

井本恭子 「「同時代世界」の覗き窓」武田佐知子, 宮原曉(編)『着衣する身体の政治学 周縁化される『伝統』の共鳴』(科学研究費補助金報告書基盤研究(A)), pp. 51-55, 2009/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

井本恭子 「サルデーニャの田園の教会と「境界性」について」研究教育フォーラム, 大阪大学大学院文学研究科, 2008/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

イタリア学会・評議員	2007年10月～現在に至る
地中海学会・事務局員	2005年4月～現在に至る

6. 伊川 健二 准教授

1974年東京生。2003年～06年日本学術振興会特別研究員(PD)、2008年～09年東京大学日本史学研究室研究員等を経て、2009年8月より現職。博士(文学)(2006年、東京大学)。日本歴史学会賞(2001年)。専攻:日本中世対外関係史。

6-1. 論文

伊川健二 「鉄砲伝来の史料と論点(下)」『銃砲史研究』(日本銃砲史学会), 362, pp. 11-33, 2009/3

伊川健二 「鉄砲伝来の史料と論点(上)」『銃砲史研究』(日本銃砲史学会), 361, pp. 29-55, 2008/11

伊川健二 「小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世の対外交流』」『日本歴史』(日本歴史学会), 720, pp. 116-119, 2008/5

6-2. 著書

伊川健二(共著), *The East Asian Mediterranean: Maritime Crossroads of Culture, Commerce and Human Migration*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 273-287, 2008/12

伊川健二(共著), *Alessandro Valignano S.I., uomo del Rinascimento, ponte tra Oriente e Occidente*, Roma: Institutum Historicum Societatis Iesu, pp. 185-201, 2008/7

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊川健二 『ウルバーノ・モンテ年代記』にみる天正遣欧使節と織豊期の日本(二・完) 『東京大学日本史学研究室紀要』14, 東京大学日本史学研究室, pp. 37-65, 2010/3

伊川健二 『ウルバーノ・モンテ年代記』にみる天正遣欧使節と織豊期の日本(一) 『東京大学日本史学研究室紀要』13, 東京大学日本史学研究室, pp. 1-21, 2009/3

6-4. 口頭発表

伊川健二 「鉄砲伝来が歴史学の一論点を形成する事情ならびに私見について」大阪歴史学会中世史部会例会, 大阪歴史学会, 城北市民学習センター, 2010/1

伊川健二 「スペイン、メキシコ、フィリピン間の当初の関係に関する研究の現状について」御宿 友好 400 年, スペイン大使館、フィリピン大使館、メキシコ大使館, セルバンテス文化センター、メキシコ大使館, 2009/9

伊川健二 「世界史から考えるキリシタンの世紀」長崎県リレー講演会 西海カンファレンス: 世界史から考えるキリシタンの世紀, 長崎県西海市、西海市教育委員会, 西海市西海総合福祉センター, 2008/11

伊川健二 「鉄砲伝来の史料と論点」日本銃砲史学会例会, 日本銃砲史学会, 早稲田大学, 2008/8

伊川健二 「書評『歴史のなかの移動とネットワーク』」メトロポリタン史学会書評会, メトロポリタン史学会, 首都大学東京, 2008/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊川健二 日本歴史学会賞, 日本歴史学会, 2001/7

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-25 アート・メディア論

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：市川 明、永田 靖、圀府寺 司

准教授：三宅 祥雄

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
19	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2008年度～2009年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
'08	—
'09	3
小計	3

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を開始する。もとより短期間で大きな成果を得ることは難しいと考

えられるので、萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また背後から支えることで、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また、学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、阪大総合学術博物館などにおける展覧会企画など、「書物」、「実践」ともに研究はますます順調に遂行されている。

3. 社会連携

維新派の上演ならびに講演、美術館における講演、展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

上記 1-4 の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室の HP、ブログの作成なども自発的に行うなど、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといっている。

2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。

3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといっている。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
'09	0(0)	1(0)	0(0)	1(1)	0(0)	2(1)
計	0(0)	1(0)	0(0)	1(1)	0(0)	2(1)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	0	0	0	0	0
'09	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2009年度】

徳原真穂「ストロブ・ユイレの映画『セザンヌ』」『待兼山論叢 文化動態論篇』43, 大阪大学文学会, pp. 25-47, 2009/12
川西遥「“チーム・モリムラ”制作ドキュメント」『美術手帖』2010年3月号(「特集 森村泰昌 ～ 20世紀へのセルフポートレート」), pp. 39-43, 2010/2

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2008年度 大学院：0名 (計0名)

2009年度 大学院：0名 (計0名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2008年度～2009年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、

アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2008 年度：0 名 2009 年度：1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 1 名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2008 年度：0 名 2009 年度：0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 市川 明 教授

1948年生。大阪外国語大学外国語学部ドイツ語学科卒業。1976年、大阪外国語大学外国語学研究科修士課程ドイツ語学専攻修了。文学修士。近畿大学教養部助手、同講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より現職。専攻:ドイツ文学/ドイツ演劇。

1-1. 論文

市川明 「宝塚歌劇とカイザーの『二つのネクタイ』——堀正旗が残したもの」谷川道子、秋葉裕一(共著)『演劇インタラクティブ——

日本×ドイツ』早稲田大学出版部, pp. 146-178, 2010/3

市川明 「久保栄とドイツ演劇」『季論 21』7, 本の泉社, pp. 144-153, 2009/10

市川明 「移民=異民の視線——『ケバブ』上演が見せたもの」『不定期船』4, pp. 92-99, 2009/8

市川明 「ブレヒトと彼の作曲家たち」市川 明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, pp. 10-25, 2009/6

市川明 「くあなたが指導しなければならぬ!」——ブレヒト/アイスラーの『母』市川 明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, pp. 55-97, 2009/6

市川明 「ブレヒト・ケラーの韓国公演——『ゴビ砂漠殺人事件』の舞台と音楽」市川 明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, pp. 196-212, 2009/6

市川明 「共振する言葉と音楽——音楽劇としてのブレヒト劇」市川 明(編)『ブレヒト テキストと音楽——上演台本集』ブレヒトと音楽-3, 花伝社, pp. 217-243, 2009/6

市川明 「Durs Grünbein の俳句」*Brunnen*, 455, 郁文堂, pp. 3-5, 2009/1

市川明 「『ヴォイツェク』を上演する」『待兼山論叢 文化動態論編』42, 大阪大学文学会, pp. 21-70, 2008/12

市川明 「ソフィアの夏」『季論 21』2, 本の泉社, pp. 170-175, 2008/10

Ichikawa, Akira, “Du musst die Führung übernehmen!”—*Die Mutter* von Brecht/Eisler” Ichikawa, Akira (編) *Musik und Bühne bei Bertolt Brecht*, Studienreihe der JGG-57, Japanische Gesellschaft für Germanistik Tokyo, pp. 22-46, 2008/10

市川明 「歌声よ、響け! ——『第九』の平和思想」『季論 21』創刊号, 本の泉社, pp. 91-96, 2008/7

市川明 「シンガーソングライター、ブレヒト——若き詩人とサブカルチャー」市川明(編)『ブレヒト 詩とソング』ブレヒトと音楽-1, 花伝社, pp. 11-50, 2008/7

市川明 「『あとから生まれてくるものたちへ』——ブレヒトとハンス・アイスラー——」市川明(編)『ブレヒト 詩とソング』ブレヒトと音楽-1, 花伝社, pp. 97-133, 2008/7

1-2. 著書

- 市川明(編)『ブレヒト 音楽と舞台』ブレヒトと音楽-2, 花伝社, 218p. (執筆: pp. 5-7, pp. 10-25, pp. 55-97, pp. 196-212, pp. 213-218), 2009/6
- 市川明(訳)『ブレヒト テキストと音楽——上演台本集』ブレヒトと音楽-3, 花伝社, 246p., 2009/6
- 市川明(編)『ブレヒトにおける音楽と舞台』研究報告書 2, 科学研究費・基盤研究(B)[ブレヒトと音楽], 206p. (執筆: pp. 1-3, pp. 6-19, pp. 22-23, pp. 49-87, pp. 182-200, pp. 201-206), 2008/12
- Ichikawa, Akira (編), *Musik und Bühne bei Bertolt Brecht*, Studienreihe der JGG-57, Japanische Gesellschaft für Germanistik, 84p. (執筆: pp. 1-2, pp. 22-46), 2008/10
- 市川明(編)『ブレヒト 詩とソング』花伝社, 190p. (執筆: pp. 5-7, pp. 11-50, pp. 97-133, pp. 177-182), 2008/7

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 市川明(書評)「小林標『ローマ喜劇——知られざる笑いの源泉』」『シアターアーツ』42, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 136-137, 2010/3
- 市川明(翻訳)『ケバブ KEBAB』(ジャーニーナ・カルブナリウ作)『季論 21』7, 本の泉社, pp. 209-239, 2010/1
- 市川明「スヴェンボーへの旅」『世界文学会ニュース』98, 世界文学会, pp. 2-4, 2009/11
- Alena Eckelmann, Ichikawa, Akira, From East Berlin to the Far East, and vice versa. Japantimes. November 10, 2009
- 市川明(翻訳)『ケバブ』(ジャーニーナ・カルブナリウ作)『KEBAB』上演委員会, pp. 1-23, 2009/7
- 市川明(書評)「兵藤裕己『琵琶法師』」『シアターアーツ』40, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 110-111, 2009/6
- 市川明(書評)『上方演劇大全』(大阪府立上方演芸資料館ワッハ上方編)『シアターアーツ』39, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 140-141, 2009/6
- 市川明(劇評)『おはようおかえり』——温かな言葉にこめられた平和への願い『act』18, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 12-13, 2009/5
- 市川明「私たちの国際交流」『Bulletin』58, 大阪大学文学研究科国際連携室, pp. 3-5, 2009/3
- 市川明「ブレヒト・ケラーの韓国公演——『ゴビ砂漠殺人事件』上演が残したもの」『act』17, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 16-17, 2008/12
- 市川明(書評)「今橋映子『フォト・リテラシー』」『シアターアーツ』37, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 110-111, 2008/12
- 市川明「『実践芸術論』が目指すもの」「アート・メディアの多様体——講座新設の初年度によせて——」『待兼山論叢 文化動態論編』42, 大阪大学文学会, pp. 4-6, 2008/12
- 市川明(書評)「喜志哲雄『シェイクスピアのたくらみ』」『シアターアーツ』36, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 140-141, 2008/9
- 市川明(劇評)「肉(肉欲)と肉(食肉)との現代ドラマ——燐光群の『ローゼ・バルント』」『act』16, 国際演劇評論家協会日本センター関西支部, pp. 10-11, 2008/7
- 市川明(書評)「栗山民也『演出家の仕事』」『シアターアーツ』35, 国際演劇評論家協会日本センター, pp. 120-121, 2008/6

1-4. 口頭発表

- 市川明,坂口瑞穂,野崎美子,七字英輔(司会)「バルカン半島の同時代演劇——紛争地域から生まれた演劇——」国際演劇協会, シアター・イワト, 2009/12
- 市川明「チェンチェン☆オペラから 20 世紀三部作へ——維新派と 1920 年代のドイツ・アヴァンギャルド」ミュージアムレクチャー: 維新派という現象「ろじ式」, 大阪大学総合学術博物館, 2009/11
- 市川明, 渡辺学, 山本佳樹他「interactiv な学術交流を目指して」200 回記念シンポジウム: いま, ゲルマニスティクは何を発信するか, 阪神ドイツ文学会, 2009/7(『ドイツ文学論叢』51, pp. 149-151, 2009/12)
- 市川明, Volker Ludwig, 岩崎正裕他「グリプス劇場と青少年演劇」ベルリン 2つの視線 国際演劇交流セミナー2009「ドイツ特集」シンポジウム: ドイツにおける青少年演劇, 日本演出者協会, 2009/7
- 市川明, Roland Koberg, Helene Waldmann 他「ベルリンの演劇」シンポジウム: ドイツの演劇, 日本演出者協会, ドイツ文化センタ

一, 2008/11

Ichikawa, Akira, “Vom *Taniko* zum *Jasager* – Brecht und No-Theater” Brecht-Symposium: Ästhetische Betrachtung von Brechts Bearbeitungen, Koreanische Brecht-Gesellschaft, 2008/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市川明, 浅岡泰子, 宇佐美幸彦 マックス・ダウテンダイ賞, 東京ドイツ文化センター, 2003/3

市川明 ドイツ語学文学振興会奨励賞, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 1982/4

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:市川明

課題番号: 17320049

研究題目: プレヒトと音楽——演劇学と音楽学の視点からの総合的研究

研究経費: 2008年度 直接経費 704,000円 間接経費 211,200円 (2008年度は繰越延長事業)

研究の目的:

文学・演劇研究者と音楽研究者のコラボレーションにより、プレヒトの詩、戯曲におけるテキストと音楽の関係・共生を探る。従来のドイツ文学・演劇研究でまったく研究されてこなかったプレヒトと音楽の関係に光を当て、プレヒトと彼のパートナーである作曲家との共同創作の実態を解明する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人日本学術振興会・科学研究費委員会・専門委員	2010年1月～現在に至る
日本独文学会第6回学会賞、ドイツ語研究書・論文部門選考委員会委員長	2008年10月～2009年6月
AICT(国際演劇評論家協会)演劇評論賞・選考委員	2006年12月～2009年7月
日本演劇学会・理事	2006年4月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・機関誌『ひろの』編集委員	2006年4月～現在に至る
ドイツ語学文学振興会・評議員	2004年4月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター・演劇評論誌『シアターアーツ』編集委員	2004年4月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター関西支部・演劇評論誌『act』発行人	2004年4月～2009年5月
演劇創造集団プレヒト・ケラー・代表幹事	2001年12月～現在に至る
国際演劇評論家協会日本センター・関西支部長	1996年4月～2009年5月
阪神ドイツ文学会・幹事	1994年4月～2008年4月

2. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位修得退学。文学修士。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻:演劇学。

2-1. 論文

永田靖 「カッコウと原爆——アジアにおける内在するディアスポラ演劇」『演劇学論叢』11, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp. 282-299, 2010/3

永田靖 「オ・テソク、伝統、教室——2008年度大阪大学演劇学研究室研究上演について」藤田治彦(共著)『芸術とコミュニケーション』

ョンに関する実践的研究報告書』pp. 270-277, 2009/3

永田靖 「芸術の価値を決めるのは誰？」吉岡洋・岡田暁生(編)『文学・芸術は何のためにあるのか？』東信堂, pp. 161-169, 2009/3

Nagata, Yasushi, “Puppeting a Joruri – is it really needed to be a theatre?”, *Theatre and Democracy*, Ravi Chaturvedi(ed.) Rawat Publications, pp. 185-197, 2008/5

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「ヴァムピーロフと一幕劇」『ホテル・タイガ』名取事務所, pp. 5-6, 2010/2

永田靖 「アルプーゾフに始まる」『私のかわいそうなマラート』名取事務所, pp. 5-6, 2009/3

2-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Some problems of inter Asian theatre research” International Asian Theatre Conference: Women in Asian Theatre & Inter-Asian Theatre, Asian Theatre Working Group, International Federation for Theatre Studies, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kuala Lumpur, Malaysia, 2010/3

永田靖 「ロシア・アヴァンギャルド演劇の光芒——タリンの構成主義」ロシアの夢——ロシア・アヴァンギャルド展 1917-1937, 岡崎市美術館, 岡崎市美術館, 2010/2

永田靖 「維新派とその時代」維新派とその時代, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, 大阪大学総合学術博物館, 2009/11

Nagata, Yasushi, “Training and Translation” Asian Theatre Working Group First Meeting, Asian Theatre Working Group FIRT/IFTR, University of Lisbon, 2009/7

Nagata, Yasushi, “Adapting Asia—Ventures by Kaoru Morimoto” Annual Conference FIRT/IFTR, International Federation for Theatre Research, University of Lisbon, 2009/7

永田靖 「大阪大学演劇学研究室上演『シムチョンは今・』について」教育上演の課題と展望 Vol.2 ——台北、札幌、大阪, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2009/1

永田靖 「『三人姉妹』の技法と世界」マスタークラス「チャーホフ」, 京都文化会館, 京都文化会館, 2008/8

Nagata, Yasushi, “Piling Asia on Asia – Theatrical Syncretism in Postwar Japanese Theatre” Annual Conference : Theatrical Asianess(es) in Global Age, International Federation for Theatre Research, Chuan Gaung University, Seoul, 2008/7

永田靖 「ハリウッドとは何か——アクターズ・スタジオ「メソッド演技」とスタニスラフスキイ」群馬県立女子大学県民公開講座, 群馬県立女子大学, 群馬県立女子大学, 2008/6

永田靖 「メイエルホロドと絵画」日本演劇学会全国大会シンポジウム: 諸芸術から見た演技／演技から見た諸芸術, 日本演劇学会, 日本橋学館大学, 2008/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 永田靖

課題番号: 19520100

研究題目: ロシアにおける日本・朝鮮演劇の影響及び展開過程の研究

研究経費: 2008年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

2009年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

ロシアのモダニズム演劇においてアジア演劇の影響が見られるが、とりわけ日本と朝鮮演劇の影響とその展開過程を研究して、モダニズム演劇に果たした日本と朝鮮演劇の意味を追求する。またソビエト時代におけるこれらアジアの演劇への姿勢を考察し、20世紀演劇史の空白を埋める。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

Asian Theatre Working Group ・convener	2008年7月～現在に至る
International Federation for Theatre Research・Member of Exective Committee	2004年11月～現在に至る
日本演劇学会・理事・事務局長	2002年4月～現在に至る
日露演劇会議・理事	2002年3月～現在に至る
日本映像学会関西支部・幹事	2001年4月～現在に至る
日本演劇学会近現代演劇研究会・事務局	2000年12月～現在に至る

3. 園府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻:西洋美術史

3-1. 論文

園府寺司 「美術の動態地理学あるいはジオヒストリーに向けて」園府寺司、木俣元一(共編)『西洋美術研究』14, 三元社, pp. 8-11, 2008/9

園府寺司 「〈芸術、国家、世界〉AICA 国際会議(ポーランド 1960年)におけるモダンアートの国際性に関する〈議論〉」園府寺司、木俣元一(共編)『西洋美術研究』14, 三元社, pp. 121-137, 2008/9

3-2. 著書

園府寺司 『ファン・ゴッホ 自然と宗教の闘争』小学館, 351p., 2009/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Kodera, Tsukasa, "The Jewish Immigrants to the Far East and their Effects on the Japanese Arts; an Ukrainian conductor Emmanuel Metter" The fifteenth World Congress of Jewish Studies :Session: Jewish Art and the Holocaust, The World Union of Jewish Studies, Hebrew University of Jerusalem, 2009/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

園府寺司 大阪大学共通教育賞(2009年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

Kodera, Tsukasa Praemium Erasmianum (エラスムス研究賞), エラスムス財団(オランダ), 1989/2

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2005年度～2008年度、基盤研究(B) 一般、代表者:園府寺司

課題番号: 17320030

研究題目: モダニズムと中東欧の近代芸術に関する国際・学際共同研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 3,000,000 円 間接経費 900,000 円

研究の目的:

従来、研究の乏しかった中東欧の近現代芸術について、中東欧諸国ならびに北米などの研究者と密接な国際共同研究を行い、この地域の芸術ならびにこの地域出身の芸術家、芸術関係者の役割を明確にする。

3-6-2. 2009 年度～2013 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 園府寺司

課題番号: 21320029

研究題目: イディッシュ語文化圏における芸術活動の研究

研究経費: 2009 年度 直接経費 3,000,000 円 間接経費 900,000 円

研究の目的:

中東欧のイディッシュ語文化圏の芸術活動ならびにボグロムによってアメリカに逃れたイディッシュ語文化圏の人々の活動を研究する

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員および国際事業委員会書面審査員	2009 年 8 月～現在に至る
美術史学会・常任委員	2008 年 5 月～2010 年 5 月
日本学術会議・連携会員	2008 年 4 月～現在に至る
国際美術史学会(CIHA)・国内委員	2007 年 4 月～現在に至る
民族芸術学会・理事	1997 年 4 月～現在に至る

4. 三宅 祥雄 准教授

1951年生。岡山大学法文学部哲学科哲学哲学史専攻卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学、1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻: 現代フランス哲学／映像論。

4-1. 論文

三宅祥雄「映画の視点とその変容(1)」『美学研究』(大阪大学大学院文学研究科美学研究室), 7, pp. 1-17, 2009/8

三宅祥雄他(共著)「アート・メディアの多様体——講座新設の初年度によせて——」『待兼山論叢: 文化動態論篇』(大阪大学文学研究科), 42, pp. 1-19, 2008/12

三宅祥雄他(共著)「座談会: 横断する文学としての文学環境論——その可能性をめぐって」『待兼山論叢: 文化動態論篇』(大阪大学文学研究科), 42, pp. 71-115, 2008/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-26 文学環境論

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次、和田 章男、平田 由美

准教授：石割 隆喜

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
8	0	0	0	0	1

※うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2008年度～2009年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
'08	—
'09	2
小計	2

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界(環境)との関わりを多次的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。1つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研

究の 1 方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題にしっかりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。具体的には、翻訳家としての活動や出版社への就職等の実現を想定し、そのために、翻訳の実務に携わっている専門家との交流をはかることや出版についての知識を高めることを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

ほぼ当初の計画通りの成果があがっている。日本語文献と英語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることによりかなりの進歩が見られた。修士論文の作成についても、コースの教員全員が参加する発表会を通して、院生の研究課題について真摯な討論を行ない、充実した指導と助言ができた。

2. 研究

当該年度中の教員の著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼり、注目すべき活動が見られた。教員は、各種の研究発表大会への参加、海外出張による国際的学术交流への関与等に積極的に取り組んだ。院生は、2009 年度に 2 人の修了生を出すことができた。研究室の設備・備品についても、着実に改善されてきており、研究環境も整ってきている。

3. 社会連携

集中講義の講師に翻訳家を招き、翻訳ワークショップを開き、学生を翻訳作業の現場に参加させることによって、翻訳力の増進に大きな成果をあげることができた。また、いくつかの授業で出版や文学の書誌についての問題を扱った。さらに、修士論文の 1 つが翻訳に基づくものであり、その論文作成を通して、学生と教員が翻訳について理解を深め、翻訳力の増進に成果をあげることができた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、2009 年度に初めて提出された 2 本の修士論文は、いずれも充実した個性的な研究であり、高い評価が得られた。また、修了生以外の院生たちに関しても、読解力・理解力・分析力などが着実に向上し、個々の研究テーマについての考究も進んできている。そのような状況であるので、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員の作成論文や学会参加の成果は十分に上がっており、大学院生にも論文等の成果があり、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
'09	0(0)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)
計	0(0)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	0	0	0	0	0
'09	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2009年度】

高屋大拙「ボーカロイドを取り巻く環境」(『待兼山論叢』『文化動態論篇』第43号)

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2008年度 大学院：0名 (計0名)

2009年度 大学院：0名 (計0名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2008年度～2009年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2008年度：0名　2009年度：1名

<内訳>　技術職　0名　ジャーナリスト　0名　アーティスト　0名　中・高等学校の教員　1名
その他　0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計　0名

2008年度：0名　2009年度：0名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究。

1-1. 論文

清水康次 「「ころ」における「不可思議な私」——くいちがう〈心〉と〈私〉——」京都光華女子大学日本語日本文学会『光華日本文学』17, 京都光華女子大学日本語日本文学会, pp. 17-46, 2009/10

清水康次 「谷崎潤一郎における自己解放の過程」京都光華女子大学大学院文学研究科(編)『京都光華女子大学大学院文学研究科 共同研究・研究報告書』京都光華女子大学日本語日本文学科, pp. 9-58, 2009/3

清水康次, 高森松子(共編著) 「[参考資料]志賀直哉・谷崎潤一郎・吉井勇「鼎談 京の春を語る」」京都光華女子大学大学院文学研究科(編)『京都光華女子大学文学研究科 共同研究・研究報告書』京都光華女子大学日本語日本文学科, pp. 100-135, 2009/3

清水康次, 齊藤美紗, 武田美穂(共著) 「日新電機「石村亭」(旧「後の潺湲亭」)訪問記」京都光華女子大学文学研究科(編)『京都光華女子大学文学研究科 共同研究・研究報告書』京都光華女子大学日本語日本文学科, pp. 136-151, 2009/3

清水康次 「昭和前期の文学界における〈通俗性〉の問題——「宝塚文芸図書館」から見た〈読者〉——」京都光華女子大学紀要編集委員会『京都光華女子大学研究紀要』46, 京都光華女子大学, pp. 1-38, 2008/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 和田 章男 教授

1954年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士(文学)。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993年大阪大学文学部助教授、1999年文学研究科助教授、2004年より現職。専攻:フランス文学。

2-1. 論文

和田章男 「ジャン・ジオノと環境文学——『世界の歌』を中心に——」『芸術とコミュニケーションに関する実践的研究』(人文・社会科学振興プロジェクト研究事業), 日本学術振興会, pp. 82-87, 2009/3

2-2. 著書

Wada, Akio, *Index général des Cahiers de brouillon de Marcel Proust*, 大阪大学文学研究科, 134p., 2009/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男 「バルザック、フローベール——作品の生成と解釈の問題(書評)」『Cahier』(日本フランス語フランス文学会), 3, pp. 17-19, 2009/3

2-4. 口頭発表

和田章男 「プルースト草稿帳の作家たち——統計的分析の試み」関西プルースト研究会, 京都大学, 2009/12

和田章男 「エラスムス・ムンドゥスに見る知の拠点形成と国際交流」ITP コロキウム:アジアプログラムの意義と方法をめぐって, 神戸大学人文学研究科, 2009/7(『東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム』pp. 60-63, 2010/1)

Wada, Akio, “L’apparition des noms réels dans les Cahiers de Proust” プルースト国際シンポジウム:Proust en son temps : Contextes culturels d’une genèse romanesque, 東京日仏会館, 2009/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2006年度～2008年度、基盤研究(C) 一般、代表者:和田章男

課題番号: 18520202

研究題目: プルースト草稿資料における固有名の調査および索引作成

研究経費: 2008年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

大阪大学文学研究科がマイクロフィルムの形で所蔵しているプルースト草稿資料のうち、75冊の草稿帳(カイエ)に現れるすべての固有名詞(人名、地名、作品名)を調査し、総合索引を作成することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ブルースト研究会・世話人	2006年4月～現在に至る
関西ブルースト研究会・世話人	2005年9月～現在に至る

3. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学、2002)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より現職。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究。

3-1. 論文

Hirata, Yumi, “여성의 改鑄——근대 일본의 ‘女伝’이라는 언설”『大東文化研究』(成均館大学東アジア学術院), 65, 成均館大学東アジア学術院, pp. 111-150, 2009/3

3-2. 著書

Hirata, Yumi, *여성 표현의 일본 근대사: 여류 작가의 탄생 전야*, Somyong Publishing, 280p., 2008/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

玉井暲, 米井力也, 平田由美 他「横断する文学としての文学環境論」『待兼山論叢』42, pp. 72-115, 2008/12

平田由美 「移動、女性、かたり」『ジェンダーのグローバリゼーション分析(平成16年度～19年度科学研究費補助金研究成果報告書)』pp. 12-40, 2008/5

3-4. 口頭発表

平田由美 「「引揚げ」物語をめぐるジェンダーと言語」国際シンポジウム:越境と言語, 韓国東国大学校日本研究所, 2010/1

平田由美 「グローバリゼーション研究としての人文学: 19世紀北東アジアにおけるジェンダー言説の移動」講演会:社会科学と人文学の対話, 中国社会科学院日本研究所, 2009/11

Hirata, Yumi, “Repatriation / Repatriarchalization: Literary discourse in postwar Japan”, International Convention of Asian Scholars: Think Asia!, 2009/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号: 19520154

研究題目: 近代日本における「移動文学」のジェンダー分析

研究経費: 2008年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2009年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

20世紀の日本文学を「移動の文学」という視点から再考することを目的に、記号や消費行動など現代社会の表層的な事象の底流にある、個別的でありながら普遍的な営みとしての人の「移動」と、国境や言語を越える行為から生み出される「文学」の可能性をグローバルな文脈において探究する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・大学教育推進事業委員会大学部会専門委員

2009年5月～2009年12月

同上

2008年6月～2008年12月

4. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、同講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より現職。専攻:アメリカ文学。

4-1. 論文

石割隆喜「ポスト・ノヴェルと「人間」——ピンチョンの諸問題」玉井暉教授退職記念論文集刊行会(編)『英米文学の可能性——玉井暉教授退職記念論文集』pp. 759-770, 2010/3

石割隆喜「シュールリアリスティックな資本主義——Gravity's Rainbow、あるいは Pynchon の「ポスト・ノヴェル」」『英文学研究』(日本英文学会), 85, pp. 89-102, 2008/11

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会・会計幹事

2006年4月～2009年3月

2-27 言語生態論

I. 現在の組織

1. 教員(2010年4月現在)

教授 5 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：大庭 幸男、加藤 正治、田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己

2. 在学生(2010年4月現在)

2010年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	大学院 研究生
3	0	0	0	0	0

※うち留学生 0 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2008年度～2009年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
'08	—
'09	5
小計	5

II. 掲げた目標(2008年度～2009年度)

1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、5名の教員が個々に担当する講義および演習等をとおして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらずに独自に研究課題を設定して、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

3. 社会連携

研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学のそれぞれ講義と演習、ならびに吉田和彦教授(京都大学)が担当した言語学講義を選択・履修し、各自の研究のための基礎を養った。

2. 研究

院生は各自の関心に従い、日本語のヲ格の用法、ゲルマン語における完了形の発達、若者語の実態、移住による言語変容、コミュニケーションブレイクダウン、マンガに見られる日英語の擬音語、高齢者の外来語理解と、さまざまな課題を独自に設定して研究を進めた。その中には既存の枠組みに収まらないものもかなりの数含まれる。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

3. 社会連携

2009 年度の修了者のうち 1 名は社会人であった。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2008 年度～2009 年度)

1. 教育

学生は各自の関心に従い、5 名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、5 名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、成功の度合いは様々だが、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

2009 年度の修了者 5 名のうち、社会人 1 名を含む 2 名が博士後期課程に進学し、1 名が海外における日本語教育に携わるようになった。よって研究者養成とともに、社会人を高度専門職業人として養成し、教育・研究の成果を社会に還元するという目標は一定程度達成されたと考える。

V. 基本情報(2008年度～2009年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
'08	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
'09	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
'08	0	1	0	0	0	1
'09	0	0	0	0	0	0
計	0	1	0	0	0	1

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

【2008年度】

中原京子「相互行為の参与者間の communication breakdown —— そのメカニズムについての考察 ——」(社会言語科学会第23回大会、2009年3月28日(土)、於東京外国語大学)

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2008年度 大学院：0名 (計0名)

2009年度 大学院：0名 (計0名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2008年度～2009年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5 名

2008 年度：一名 2009 年度：5 名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 5名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2008 年度：2 名 2009 年度：0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

日本英語学会の開催 (2009 年 11 月 14 日～15 日)

大阪言語研究会の開催(2008 年 5 月 17 日、9 月 20 日、12 月 27 日、2009 年 9 月 19 日、12 月 19 日)

7. 教員の研究活動(2008 年度～2009 年度の過去 2 年間)

1. 大庭 幸男 教授

1949年生。九州大学大学院文学研究科修士課程(英語学専攻)修了。文学博士(大阪大学、1997年)。山口大学助手、同講師、大阪大学言語文化学部講師、同助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授を経て、1999年4月より現職。専攻:英語学。

1-1. 論文

大庭幸男 「結果構文の動詞と結果述語の意味特性について」『玉井暲教授退職記念論文集』英宝社, pp. 127-138, 2010/3

1-2. 著書

Oba, Yukio, Okada, Sadayuki(共編著), *Osaka University Papers of English Linguistics*, Vol.14, 150p., 2010/3

大庭幸男 『多重 WH 疑問文の意味と構造について』(平成 21 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書, 大阪大学大学院文学研究科), 35p., 2010/3

Oba, Yukio, Okada, Sadayuki(共編著), *Osaka University Papers of English Linguistics*, Vol.13, 147p., 2009/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

大庭幸男 大阪大学共通教育賞(2006 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2006/11

大庭幸男 市河賞, 語学教育研究所, 1997/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2006 年度～2008 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男

課題番号: 18530381

研究題目: インターネットを利用した英語の結果構文についての意味統語論的研究

研究経費: 2008 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

英語の結果構文については、これまでさまざまな理論的な枠組みで研究されてきた。しかし、そこで議論されている例を見てみると、ごく少数のタイプの動詞や結果述語の例に限られており、結果構文の全体像が把握しにくい。そこで、本研究では、実際の言語使用状況をインターネットによって調査し、次の2点を明らかにすることを目的とする。

(1)結果構文に生起する動詞の種類と意味的特徴を明らかにする。

(2)結果構文に生起する動詞と結果句の選択制限を明らかにする。

特に、他動詞と同様に非対格動詞と非能格動詞の結果構文の使用状況についてはこれまであまり研究されていないので、具体的にどのような動詞が結果構文に用いられているかを実際の言語使用データにあたって調査を行う。

1-6-2. 2009年度～2011年度、基盤研究(C) 一般、代表者:大庭幸男

課題番号: 21520507

研究題目: 言語の多様性に対する普遍文法理論の妥当性の検証

研究経費: 2009年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究の目的は次の通りである。

(1)普遍文法の「原理とパラメターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」などの理論を正確に理解・把握した上で、これらの理論がどのような概念的な問題点を有しているかについて検討する。

(2)「純粹のWH疑問文」について、言語の多様性に関わる言語事実を通言語的に調査し、類型化を行う。具体的には、「純粹のWH疑問文」の類型化において、WH句の移動が存在するかしらないか、複数のWH句が移動できるかできないか、文末の疑問終助詞が存在するかしらないか、などについて言語タイプごとに調査・整理する。

(3)WH疑問文に関連する構文、例えば、「問い返しの疑問文」や「多重WH疑問文」に関して、さまざまな言語を調査・研究し、類型化を行う。具体的には、WH句の移動が随意的になる英語タイプの言語、WH句が移動しない日本語タイプの言語、WH句が義務的に移動するスラブ語タイプの言語、その他の構文をとる中国語タイプの言語に類型化し、その特性を明らかにする。

(4)最後に、普遍文法の「原理とパラメターのアプローチ」と「ミニマリスト・プログラム」がこれらの通言語的多様性をどのように、そして、どの程度まで説明するかを検討して、その問題点を提示する。その後、先行研究で提案された理論や分析が普遍文法理論に如何に組み込まれるかについて考察し、より妥当性の高い理論の構築を試みる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学英文学会・会長	2009年11月～現在に至る
日本英文学会 関西支部・編集委員会委員	2009年4月～現在に至る
日本英語学会・広報委員会委員長	2009年4月～現在に至る
日本英文学会・理事	2008年6月～2009年3月
関西言語学会・大会実行委員・運営委員	2008年4月～現在に至る
日本英文学会・監事	2007年4月～2008年6月
財団法人 語学教育研究所・「市河賞」審査員	2007年4月～現在に至る
日本英語学会・理事	2005年12月～2009年11月
日本英語学会・評議員	2004年4月～現在に至る

2 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979年)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:英語学。

2-1. 論文

加藤正治 「『欽定訳聖書』にみられる動詞第二位現象について」『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学文学会), 43, pp. 69-90, 2009/12

加藤正治 「場所句倒置に関する短評」『英米研究』(大阪大学 英米学会), 33, pp. 1-10, 2009/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・評議員

2006年4月～現在に至る

3. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 言語学・日本語学。

3-1. 論文

田野村忠温 「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」『人工知能学会誌』24-5, 人工知能学会, pp. 647-655, 2009/9

田野村忠温 「サ変動詞の活用のゆれについて・続——大規模な電子資料の利用による分析の精密化——」『日本語科学』25, 国立国語研究所, pp. 91-103, 2009/4

田野村忠温 「日本語研究の観点からのサーチエンジンの評価・続——検索ヒット件数の時間変動のその後と Web 文書量の推計の修正——」『計量国語学』26-8, 計量国語学会, pp. 290-294, 2009/3

田野村忠温 「文法の中核と周辺——コーパスが観察可能にする文法的一面——」田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦(共著)『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅲ』, 特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, pp. 154-165, 2009/3

田野村忠温 「「代わり」の分析試論——巨大な Web コーパスに基づく考察——」田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦(共著)『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅲ』, 特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班, pp.

137-153, 2009/3

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出——分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作——」『阪大日本語研究』21, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座, pp. 21-41, 2009/2

田野村忠温 「コーパスと文法研究」『国文学 解釈と鑑賞』74-1, 至文堂, pp. 79-87, 2009/1

田野村忠温 「大規模な電子資料に見る現代日本語の動態」『待兼山論叢』42(文化動態論篇), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 55-76, 2008/12

田野村忠温 「複合辞の本性について——その構成と単位性——」児玉一宏・小山哲春(共編)『言葉と認知のメカニズム 山梨正明教授還暦記念論文集』, ひつじ書房, pp. 489-497, 2008/9

田野村忠温 「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価——Yahoo!と Google の比較を中心に——」『計量国語学』26-5, 計量国語学会, pp. 147-157, 2008/6

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

田野村忠温 「日本語コーパスとコロケーション——辞書記述への応用の可能性——」北京日本学研究中心講演会, 北京日本学研究中心(中国・北京市), 2010/3

田野村忠温 「コーパスを用いた異表記使い分け実態の分析の可能性」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2010/2

田野村忠温 「コロケーションから見た複合辞——用法上の傾向を手がかりとした類義的慣用句型の分析——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語教育班拡大班会議(複合辞研究会), 筑波大学, 2010/2

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報の抽出・続——辞書記述への応用の可能性を前提とした考察——」国立国語研究所共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」研究発表会, 国立国語研究所, 2010/2

田野村忠温 「用言と助動詞類の共起の偏り——日本語の colligation の分析の試み——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2009/11

田野村忠温 「コロケーションの複合的性格——‘circumcollocate’の概念と実例——」特定領域研究「日本語コーパス」辞書編集班拡大班会議, ホテルスワ(つくば市), 2009/11

Tanomura, Tadaharu, “A corpus-based analysis of some time-related aspects of contemporary Japanese,” *CLAVIER 09*, University of Modena and Reggio Emilia (Modena, Italy), 2009/11

田野村忠温 「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」2009年阪大日本語学同窓会総会・阪大日本語学研究会, 大阪大学, 2009/9

Tanomura, Tadaharu “Retrieving collocational information from Japanese corpora: An attempt towards the creation of a dictionary of collocations,” *QUALICO 2009*, International Quantitative Linguistics Association, Graz University (Graz, Austria), 2009/9

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 21 年度研究進捗状況報告: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 21 年度全体会議, 国立国語研究所, 2009/9

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出・続——‘circumcollocate’の概念と実例——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2009/8

田野村忠温 「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」東京外国語大学グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」講演会, 東京外国語大学, 2009/8

田野村忠温 「電子資料と日本語研究——昨今の動向と事例研究——」京都大学言語学懇話会第 80 回例会, 京大会館, 2009/7

田野村忠温 「中国語コーパスからのコロケーション情報抽出の試み——日中同形表現および中国語類義表現の意味・用法の比

較対照——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2009/5

田野村忠温 「コーパスと日本語研究——最近(過去 3 年)の動向——」日本学総合講座, 北京日本学研究中心(中国・北京市), 2009/4

田野村忠温 「文法の中核と周辺——コーパスが観察可能にする文法的一面——」特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度公開ワークショップ, 東京工業大学, 2009/3

田野村忠温 「「代わり(に)」小考」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2009/3

田野村忠温 「「代わり(に)」再考」特定領域研究「日本語コーパス」日本語教育班拡大班会議(複合辞研究会), 筑波大学, 2009/2

田野村忠温 「文法規則と表現慣習」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2008/12

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出の試み」特定領域研究「日本語コーパス」辞書編集班拡大班会議, ホテルスワ(つくば市), 2008/11

田野村忠温, 服部匡, 杉本武, 石井正彦 「平成 20 年度研究進捗状況報告: 日本語学班」特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度全体会議, 奈良県新公会堂, 2008/9

田野村忠温 「コーパスからのコロケーション情報抽出の試みなど」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 大阪大学, 2008/8

田野村忠温 「大規模コーパスの区分対照用法の可能性・続——句型使い分けの通時変化と語彙との関わり——」特定領域研究「日本語コーパス」日本語学班研究会, 国立情報学研究所, 2008/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2006 年度～2010 年度、特定領域研究、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費: 2008 年度 直接経費 9,200,000 円 間接経費 0 円

2009 年度 直接経費 7,100,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、今後の日本語研究にとって不可欠の存在となることが確実なコーパス(電子媒体の言語資料)について、具体的な事例研究を通してその利用の価値を明らかにし、従来の日本語研究を精密化するとともに日本語の新しい研究領域・手法を開発することを主たる目的とする。

また、コーパスを用いた日本語研究の啓蒙・普及を図ること、および、本特定領域研究において計画され、将来日本語研究の標準的資料として広範に利用されるはずの大規模な日本語書き言葉コーパスの構築の進行に伴い、それを日本語研究に適用し、その過程で得られた知見をコーパスの構築にフィードバックすることをも目的とする。

3-6-2. 2007 年度～2010 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 19520342

研究題目: 大規模な電子資料の利用による日本語文法の未開拓の基礎的諸問題の原理・実証的考察

研究経費: 2008 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2009 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究は、日本語の大規模な電子資料(コーパス)を用いて日本語文法の未開拓の基礎的な諸問題を考察することにより、①電子資料に基づく日本語研究の基盤の形成と発展に寄与するとともに、②電子資料利用の目的である日本語研究そのものに対して実質的な貢献をもたらすことを目的とする。

①については、研究代表者のこの分野における過去 10 年余りの経験を踏まえ、それを継続・発展させる形で、電子資料の特性

を生かした日本語研究の可能性を具体的な事例研究を通じて追求し、電子資料利用の価値と方法を明らかにする。

②については、日本語研究の隆盛とそこでの特定のテーマへの研究の集中のかげで、日本語にとって非常に基礎的でありながら表面的な言語事実の観察さえ手付かずの状態にとどまっている文法の問題について、抜本的な再考と電子資料に基づく精密な分析・記述を行う。また、大規模な電子資料の利用によって初めて可能になる文法研究の新領域の開拓を目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

文部科学省・科学技術・学術審議会専門委員

2008年12月～2010年1月

日本言語学会・評議員および常任委員

2008年4月～現在に至る

4. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:印欧諸語の歴史と印欧語比較言語学、音声学。

4-1. 論文

神山孝夫 「Laryngales et schwa indogermanicum」大阪大学文学会(編)『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学文学会), 43, pp. 91-125, 2009/12

4-2. 著書

神山孝夫 『脱・日本語なまり:英語(+α)実践音声学』大阪大学出版会, 221p., 2008/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

神山孝夫 「ラリンガルと印欧語のシュワー」The 18th Indo-European Colloquium of Japan, 大阪言語研究会, 大阪大学, 2009/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪言語研究会・世話人

2008年1月～現在に至る

5. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学外国語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻：日本語学、言語計画論。

5-1. 論文

渋谷勝己「日本語のバリエーション」『日本語学』28-15, 明治書院, pp. 50-58, 2009/12

Shibuya, Katsumi, “Aspect of Style-shifting in Japanese.” M. Minegishi, Y. Kawaguchi and J. Durant(共編) *Studies in Linguistics Vol. 1. Corpus Analysis and Variation in Linguistics.*, John Benjamins, pp. 339-360, 2009/4

5-2. 著書

金水敏, 乾善彦, 渋谷勝己 (共著)『シリーズ日本語学 4 日本語史のインタフェース』岩波書店, pp. 101-203, 2008/7

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2007年度～2009年度、基盤研究(C) 一般、代表者：渋谷勝己

課題番号：19520395

研究題目：山形市方言における動詞述語文の記述的研究

研究経費：2008年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2009年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的：

山形市方言の動詞述語文のもつ文法カテゴリーのなかから、とくにモダリティを取り上げて、詳細かつ網羅的な記述を試みる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・連携会員	2008年10月～現在に至る
日本方言研究会・世話人	2008年4月～現在に至る
第二言語習得研究会・事務局	2008年1月～2009年12月
社会言語科学会・理事	2006年8月～現在に至る
日本語文法学会・評議員	2006年7月～現在に至る

2-28 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2008年度～2009年度の過去2年間)

1. 鄭聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化学研究科博士後期課程修了(1999年)。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職。専攻:言語学, 韓国語学, 日本語学。

1-1. 論文

鄭聖汝 「韓国語における他動性:プロトタイプ理論から見たカテゴリーの内部構造と非規範的構文」『大阪大学大学院文学研究科 紀要』50, 大阪大学, pp. 91-152, 2010/3

吉成祐子・パルデシ, プラシヤント・鄭聖汝(共著) 「非意図的な出来事における他動詞使用と「責任」意識:日・韓・マラーティー語の対照を通じて」岸本秀樹(編)『ことばの対照』, くろしお出版, pp. 175-189, 2010/2

鄭聖汝 「非意図的事象と他動詞構文——「所有」か「責任」か、それとも?——」『日本語文法』9-2, くろしお出版, pp. 53-69, 2009/9

Padeshi Prashant, Peter E. Hook, Chung Sung-Yeo, “The influence of genre on the occurrence of the compound verb: A case study of Hindi, Marathi, Japanese and Korean” *KLS 29: Proceedings of the thirty-third annual meeting*, (Kansai Linguistic Society), pp. 56-66, 2009/7

鄭聖汝 「비의도적 사태의 타동사구문에 대하여——한국어와 일본어의 관점에서——」(非意図的事態の他動詞構文について:韓国語と日本語の観点から)『財団法人韓国言語学会 2008年冬季学術大会資料集』(財団法人韓国言語学会), pp. 129-141, 2008/12

金善美・田窪行則・鄭聖汝・千田俊太郎(共著) 「“ul kes”이 나타내는 추측의 성질에 대하여——의문문 제약의 관점에서——」(“ul kes”が表す推測の性質について:疑問文制約の観点から)『財団法人韓国言語学会 2008年冬季学術大会資料集』(財団法人韓国言語学会), pp. 91-101, 2008/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Padeshi Prashant, Peter E. Hook, Chung Sung-Yeo, “The compound verb in the constitutions of India, Japan and Korea” Workshop: Compound verbs Indo-Turanian linguistic area, Kobe University & RCLT of La Trobe University, RCLT (Research centre for Linguistic Typology), La Trobe University, 2008/12

鄭聖汝 「비의도적 사태의 타동사구문에 대하여——한국어와 일본어의 관점에서——」(非意図的事態の他動詞構文について:韓国語と日本語の観点から), 財団法人韓国言語学会 2008 年冬季学術大会, 財団法人韓国言語学会, ソウル大学, 2008/12

金善美・田窪行則・鄭聖汝・千田俊太郎(共著) 「“ul kes”이 나타내는 추측의 성질에 대하여——의문문 제약의 관점에서——」(“ul kes”が表す推測の性質について:疑問文制約の観点から), 財団法人韓国言語学会 2008 年冬季学術大会, ソウル大学, 2008/12

Yoshinari Yuko, Pardeshi Prashant, Chung Sung-Yeo, “On the correlation between the perception of “responsibility” and the use of transitive verbs in the encoding of non-intentional events in Japanese and Korean: A socio-psychological study” Conference: *Language, Culture and Mind III*, University of Southern Denmark, 2008/7

Padeshri Prashant, Peter E. Hook, Chung Sung-Yeo, “The influence of genre on the occurrence of the compound verb: A case study of Hindi, Marathi Japanese and Korean”, 関西言語学会第 33 回大会, 大阪樟蔭女子大学, 2008/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2009 年度～2011 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鄭聖汝

課題番号: 21520400

研究題目: アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究

研究経費: 2009 年度 直接経費 1,700,000 円 間接経費 510,000 円

研究の目的:

他動性の分野において、これまであまり包括的・統一的に研究されてこなかった他動性と非規範的構文の關係に焦点をあて、日本語・韓国語・マラーティー語の対照を通して、以下のことを目標とする。(1)他動性のプロトタイプから逸脱した非典型的な出来事の表現化において、言語間に見られる類似性・個別性の詳細を記述する。(2)非典型的な出来事の言語表現化の背後にあるとされる認知的メカニズムの心理的な実在性を実験的な手法によって実証する。(3)他動性と言語構造の対応關係を統一的に記述できる枠組みの開発および理論構築を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

編集後記

『年報 2010』は、文学研究科および文学部の 2008 年度および 2009 年度の 2 年間の教育・研究活動の記録である。

本年は外部評価の実施年ではなかったために、比較的余裕を持って編集することができた。しかしながら、その背景にあったのは、文学研究科所属教職員の理解と協力である。

第 1 部に収録した、研究科のさまざまな活動に関する報告記事は、関係する教員や各事務局に個別に依頼して収集した。基本的な編集方針と形式は、前刊『年報 2008』を参考にし、それを踏襲した。ただし、エラスムス・ムンドゥスや OVC などの新制度への参画もあり、盛りだくさんの内容となった部分もある。

第 2 部の各専門分野のデータの収集に際しては、コースオーガナイザーの教員や助教のみなさんの協力が大きな助けとなった。年報のページのかなりの部分を占める教員個人のデータに関しては、3 年前から導入・活用されている、入力用のエクセルシートが大いに役立った。しかしながら、入力の現実になると若干の形式統一の齟齬もあり、結果的には点検・修正作業を加えることとなった。

以上の記事やデータは、おおむね 10 月中に収集を完了することが出来た。夏休みから秋学期開始早々の多忙を極める中で快くご協力頂いた関係の皆さまにお礼申し上げたい。

また、いつもながら評価・広報室の永島とも子さんには特別の謝意を表さなければならない。全体の設計からはじまり、刊行スケジュールの管理や教職員への諸連絡、データの収集・編集・校正・印刷・刊行までの膨大な作業と、その間の評価・広報室へのフィードバックならびに印刷業者との連絡をして頂いた。紙面をお借りして厚く御礼申し上げる。

最後に、前回の年報『年報 2008』の編集担当者のお一人でいらした藤村昌昭先生は、薬石の甲斐なく 2010 年 3 月 7 日に逝去された。藤村先生の御冥福をお祈りするとともに、先生が関わられた『年報 2008』が今回の編集に活かされたことを誠に有り難く思い、ここに記して謝意としたい。

2011 年 1 月

入江幸男、荒川正晴、湯浅邦弘、堤研二

大阪大学大学院文学研究科
年報 2010
教育・研究(2008-2009年度)
2011年1月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
TEL:FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
印刷 (株)ケーエスアイ

卷之六 一 丁卯年 踏川
之 考 考

淡々為各用也

一 務之 行 用 之 事 以 日 業 之 内 有 事

心 之 席 切 破 之 事

一 人 之 切 破 之 事 多 之 後 杯 破 之 傍 人

之 事 之 後 之 事

之

安永七年 戌六月